昭和五年五月十八日印刷納本
昭和五年六月一日發行（毎月一回一日發行）

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

6-1930

六月號

第四十五年 第六號 第五百九十號

新刊

高橋亀吉著

中央公論に續載されて讀者の熱讀歡迎を受けてゐた『資本王國の財産調べ』が愈々完結して一巻の書物に纏められた。

日本財閥の解剖

巨億の富を擁して資本主義の牙城に割據する各事業王國の解剖圖。俎上に上るもの三井、三菱、住友、安田、大倉、古河、淺野、川崎、大川。

菊判四百頁
極上製函入
定價二圓五十錢
送料内地十八錢

・好・評・七・版・

中央公論社發行
振替東京三四番

婦人

（新連載小説）ミスター・ニッポン……群司次郎正　挿畫　村山知義

Mr. Nippon——明るい外交家で進歩的な自由主義者、そして遊びに一生を任かした浮名殿様・池田子爵。その愛孃逸子。そこに展開されたブルジョアジイの生活。哀れ！滅びゆくものは皆美し！近來の快篇である。

長篇小説

産泊の夜……正木不如丘
同志愛……貴司山治
極光……里見弴
遍路行……下村千秋
江戸巷塵譜……林不忘

岩ノ坂殺人部落（帝都の一隅に巣喰ふ奇怪な部落の眞相を白日に曝す）……冬木禮之助

獨身者の家庭訪問
◇高畠華宵氏・永遠の女性の前に
◇村松正俊氏・鏡の前に坐る……記者

內外時評
▽鐘紡の沒落
▽軍縮の正體
△ストライキと市民
△勞働問題と性別撤廢
山川菊榮

◆不遇の雪洲……北川壽雄
◆ファンの手紙……人見絹枝
◆別れた五人の女……松波治郎
◆動く京阪新風景……渡邊均
◆ロンドン會議の解說……永井萬助

夏のハウスドレス……杉野・岩崎・鹽澤・千野・菅谷・小幡各先生

手藝のページ……淺岡・岩崎・鈴木・富田・梶谷・中間各先生

懺悔舞臺

不緣になる……村瀨幸子
迷つたお夏……水谷八重子
破れた誓ひ……久松喜世子
まだらな手……森律子

公論

◆日用品の鑑別法……前田繁一

◆新らしい造眉手術……内田博士

◆夏の小兒傳染病……中澤博士

◆初夏の川魚料理……小林完

◆ホタルと蜉蝣……横山桐郎

○闘茶のはなし……山形駒太郎

○漫畫・友愛結婚……堤寒三

○私の顏……平林たい　藤原義江

愛妻の死に直面して（曾て本誌に發表された「女給を妻として」の愛妻の死！）……岡田三郎

婚期を逸した女の手記（所謂オールドミスの堪へがたき苦悶の深刻なる告白）……吉岡英子

惱める若き人妻に答ふ（一口に男性の横暴とはいふがさて惱める妻は如何にするか）……市川源三

子に詫びる

すべては弱き心から……原阿佐緒

老ひすぎた父……近松秋江

旅先きの彼に……吉井德子

男を嗤ふ（男を嗤ふ！私はその笑を手巾のやうに朗らかに振らう！）……林芙美子

宵の公園（夏の夜の蒼白い瓦斯燈の下に展開された素晴しい風景）……岩瀨東一郎

工場街の戀愛……北陽子

父戀ふ流轉……大村靜

晩婚の醫學……佐久間博士

妻の悔恨……實話三篇

運命に彷徨ふ女……小西久遠

さよなら夢二……岩本幸惠子

曾て華やかなりし挿繪畫家として、その抒情的な筆觸で幾多の女性を魅了した竹久夢二の何人目かの妻として彼女は如何なる運命を負はされたか？前妻の遺兒と同年の彼女は如何なる地位に立つたか？

俄然、物議を捲き起した
問題の書物

リンゼイ判事著
原田實譯

友愛結婚

第八拾五版

全國書店にあり、品切の時は本社へ

四六判五六〇頁
定價一圓八十錢送料内地十二錢

東京驛前丸ビル五階　**中央公論社**　振替口座東京三四番



雨中旅人　　森田恒友筆

階級戰線五十年の鬪爭生活を通じて把握した嚙んでふくめるやうな社會批評。

貧富戰と男女戰

堺利彦著

第三十版出來

此書の主眼とするところは、現時の社會組織の缺陷と生活不安の原因を摑み出して親切にこれが禍根を糺明し批判したところにある。ともすれば硬くなな理論鬪爭に終始しようとする社會問題も、此の人の卓拔な識見と老練な筆致によつて痒いところに手の屆く名醫の診斷書となつた。誰が讀んでもよくわかり、誰が讀んでもなるほどと肯づかしめられる。

四六判並製
三百二十頁
定價一圓二十錢
送料内地十二錢

昭和文壇の革命兒が初めて世に問ふ戰鬪的文藝批評！疾風木の葉を捲く如き賣行

文學的戰術論

大宅壯一著

第廿五版出來

彼はゴルフ・パンツを穿いた蜂須賀小六である。彼の槍先は朝に一城を抜き夕に一壘を屠つて、今日の文藝批評壇に大宅壯一の旗がなびいてゐないところはないではないか。——尾崎士郎——

大宅壯一氏は一昨年、突如として出現して、昨年一年で文壇を席捲してしまつた批評家である。私は氏の功績は、日本の評論の領域に、もつとも徹底した現實主義を確立した點にあると思ふ。それは創作の領域において菊池寛氏がなしとげたものと全く好く似てゐる。しかも菊池氏が明快な短篇小説や鋭い戯曲でそれをなし遂げたやうに、氏もまた明快な短い評論でそれを成し遂げた。——勝本清一郎——

四六判上製
總布裝函入
四百八十頁
定價一圓五十錢
送料内地十二錢

東京驛前丸ビル五階 **中央公論社發行** 振替口座東京三四番

新刊

僕の旅

チャアリイ・チャップリン著　高瀬毅訳

『チャアリイよ、消えてなくなれ！』旅に出る時の彼の至願がこれだつた。彼は閑寂を欲した、静穏に憧がれた、休息を求めた、たゞひたすらに逃避したかつたのだ。……然し、そのすべては容れられなかつた。此處に憂鬱な喜劇役者、人生受難者としての可哀想な彼の姿を見る。人間チャアリイ、淋しい詩人チャップリンを見てやつて貰ひたい――

四六並製フランス綴　珍奇寫眞數葉入　定價八十錢　送料内地六錢

近刊

娼妓自廢九百八十七人

沖野岩三郎著

奴隷解放の聖戰を職とし、無理と非道と暴力と誘惑の中に身をさらして戰ひつゞけた彼の名は餘りに小さく、その命は餘りに短かゝつた。が『自廢九百八十七人』の記録は燦として歴史に殘る。彼女達はどうして救はれたか。涙と憤激なしには到底讀み得ない。

東京驛前丸ビル五階　**中央公論社**　振替口座東京三四番

統帥權問題を中心として

——(卷頭言)——

倫敦條約の締結に關して所謂統帥權干犯の問題を發生して居る際、陸軍大臣が議會の質問に對へて文官事務管掌反對の聲明を出せるは、政治上極めて重大の意義を有する出來事である。而して天下の輿論を代表すと觀るべき諸新聞の論調が一齊に力を極めて軍閥の政界進出を排擊せるに方り、濱口内閣が、多年軍閥と鬪ひ來りし榮譽ある傳統を弊履の如くかなぐり棄てて、つゝましやかに陸軍側の聲明を裏書し因て以て軍閥制抑の國民的希望に當分實現の機會なからしめたのは、亦今期臨時議會に於ける最も不祥なる出來事であつた。民政黨の絕對多數がたゞ下院に於ける反對黨に對してのみ優勝を誇るに止まるのは、吾人を失望せしむること實に夥しい。

帷幄上奏に由る統帥權運用の實狀が往々國權發動の根源を複雜ならしめ所謂二重政府の非難を内外に招ぎしの憂弊は旣に久しく吾人の經驗せし所である。國權が唯一の根據に動き國務の執行の常に統一あらざるべからざるは云ふまでもない。單にこの意味に於てするも統帥權運用の在來の慣行には許すべからざるものがあつたのだ。而して之を整理改革すべき方策は理論上一にして足らぬも、實際政略の見地より其の最も有效なるものを探れば軍部大臣文官任用制の確立より急なるはない。然るに今宇垣陸相の聲明に依りて大臣故障中の文官事務管掌をすら認め難いと云ふ。軍部大臣文官任用制の容れられざるべきは當然だ。況んや首相の裏書きさへあるに於てをや。

所謂統帥權は憲法の明文に其根據を有する特殊の大權である。それの輔弼に文官の參與を許さずとすれば、單にそれ丈けの理由を以てしても、そが所謂國務と相涉るものたる可からざるは勿論である、何となれば一切の國務は漏れなく内閣の管掌に屬すべきであるから。斯れまた統帥權の範圍を定むる根本の原則である。統帥權の範圍を勝手に定めて强て之を内閣管掌の外に置かんとするは冠履顚倒である。

不幸にして從來の慣行は統帥權の範圍を不當に廣く解して居る。而して明治四十年軍令第一號の發布以來、右の不當なる解釋は制度的に固定さるゝこととなつた。之を既定の事實として忍從すべくんば、倫敦條約の統帥權干犯も軍部大臣文官事務管掌反對も或は致方がないとせねばなるまい。

併し乍ら吾人の最も恐るゝ所は、軍閥の過度なる政治的進出である、國政に對する軍部通有の偏執なるイデオロギーの橫行である。之が爲に過去に於て吾人は幾度も堪へ難き苦盃を甞めさせられたのであつた。之等の歷史の忘れ難きものあればこそ、諸新聞も調子を揃へて軍閥の跋扈を攻擊して熄まないのではないか。斯かる輿論の一致せる後援あるに拘らず、濱口内閣の遂に軍閥を抑へ得ざりしは吾人の怪訝に堪へざる所である。誰やらの口吻に倣ふのではないが、之に付けても、吾人は深く何が彼等をさうさせたかを考へて見るの必要があらう。



勞働者から見た產業合理化

河上　肇

國民福利の增進とか國家產業の振興とか云ふやうな中性的な××をかぶつた資本主義的合理化は、勞働者の××をより强力に行ふことをその眼目とするものなのだ。

第一節

無產黨が產業合理化に反對するとは理由が分からぬ、といふやうなことが、つい近頃の或る新聞紙に載つてゐた。なるほど、合理化といふ名稱だけを見ると、それは一國の產業を道理に合ふやうに建て直ほすといふ意味にしか取れないから、

それに反對すると云ふのは、無茶を云つてゐることのやうに見える。だが、今時世間に傳へられてゐる産業合理化は、資本家の立場から見ての合理化すなはち資本家的(資本主義的)合理化なのだ。ところで勞働者は、資本家とは全く利害を異する別の階級に屬してゐる。資本家階級は搾取する階級であり、勞働者階級は搾取される階級であるから、双方の利害は互に對立してをり、一方のために利益になることは當然、他方のためには不利益になつてゐる。だから資本家の立場から見て産業を合理化する(道理に合ふやうに建て直ほす)といふことは、勞働者の立場から見れば、産業を不合理化するといふことにならざるをえないのだ。社會が利害の相對立する階級に割れてゐる以上、何でも彼でも、階級的立場を異にするに從つて、さう云ふやうに、物の見方が變はつて來るのだし、變はつて來なければならない。

それで、産業合理化についても、資本主義的な(または資本家本位の)産業合理化と社會主義的な(または勞働者本位の)産業合理化との對立があるわけだ。前者は資本家の利益を出來るだけ多くしようと云ふ立場から行はれる資本家本位の合理化で、後者は勞働者の利益を出來るだけ多くしようと云ふ立場から行はれる勞働者本位の合理化だ。前者は勞働者の立場から見れば不合理化になる、その代り後者はまた、資本家の立場から見るとやはり不合理化になる。これはたゞ理屈の上からばかり云ふのではない。今日の世界には、事實において、二樣の合理化が行はれつゝあるのだ。世界の面積の六分の一を占めてゐるソウエート聯邦では、社會主義的な産業合理化が行はれ、從つて賃銀の增額、勞働時間の急速なる短縮、等々が行はれてをり、世界の面積のうち殘りの六分の五を占めてゐる資本家國では、——なかんづく米國、ドイツ、英國、等々の帝國主義國では、——資本主義的な合理化が行はれてをり、また益々行はれようとしてゐるのだ。そして日本もまた、これから計畫的統一的に之を實行しようとしてゐるところだ。

吾々勞働者が反對してゐるのは、——また反對しなければならぬのは、——資本主義的合理化に對してなのだ。しかし資本家ならびに資本家の政府が斯樣な合理化を行はふとする場合に、あからさまにそれが資本家の利益のためにする合理

化だと云ふことを看板にしては、勞働者階級の反抗を招くに決まつてゐるから、彼等はそんな馬鹿な眞似はしない。彼等のやらうとしてゐる合理化を實現せねば、國がつぶれてしまひ、皆が立ち行かぬやうになる、と宣傳する。事實において彼等は、自分たちと國家とを同一視して考へてゐるから、自分たちが潰れたら同時に社會全體が潰れるやうに考へ込んでもゐるだらう。それで『國難來る』といふやうなスローガンを掲げて、この國難を打解するためには、國民一致の努力を必要とする、と云ふやうに宣傳するのだ。

そこで例へば、ドイツの國立經濟化管理局では、『財貨の低廉化、増加、改良によつて、國民の福利を高める』のが、合理化の目的であると定義してゐる。經濟學博士太田正孝氏の『資本主義の修正』といふ本(先進社發行、定價一圓二十錢)には、これを裏書して、次のやうに説明してある。「産業合理化とは何ぞやと云ふことになりますれば、「品物を安く造つて、安く賣ることが出來るやうに、産業の組織を改善することである」と云ふのが、一番解り易い説明かと思ひます。」(前掲書、二一頁。)品物を安く造つて、安く賣るやうにする。たゞこれだけのことなら、誰だつて反對するはずはない。だが、吾々勞働者にとつて決定的な問題は、資本家が品物を安く造つて安く賣るためには、吾々勞働者に向つてどんな負擔を掛けるか、といふ點にあるのだ。その點は後で悉しく説明するが、要するに、その手段の中で最も主なるものはといへば、吾々勞働者をウンと××すると云ふより外にないのだ。さういふことが資本家的な産業合理化の奥底に隱されてゐるのだ。だからこそ吾々は――資本主義世界の賃銀鐵鎖にしばられてゐる吾々勞働者は、――力のあらん限り斯かる産業合理化に對して鬪はねばならぬのだ。

去る三月一日には、臨時産業審議會の特別委員會が首相官邸で開かれた。新聞紙の報導するところによれば、當日、俵副會長から産業合理化に關する實行機關設置の問題につき詳細なる説明があつたと云ふことだが、その説明によれば、商工

省の外局として臨時産業合理局といふものを設け、商務大臣がその長官になり、「民間の學識經驗あるもの」の中から顧問や委員を選んで「實行上の調査諮問に應ぜしめ」つゝ、資本主義的産業合理化を促進して、「産業の隆盛」を圖らうと云ふのだ。資本主義社會の下では、すべての産業が資本家によつて握られてゐるから、「産業の隆盛」といへば、それは取りも直さず資本家的産業の隆盛のことであり、決してそれ以外のものを意味しえないのだ。ところで資本家の手に握られてゐる産業を隆盛ならしめようと思へば、資本家の儲けを多くせねばならず、しかも資本家の儲けを多くするためには何よりも先づ、資本家が勞働者から成るべく多くの剩餘勞働を××しうるやうに工夫せねばならぬのだ。だから、今、民政黨の内閣のもとで、産業合理化に關する特別の實行機關が設けられると云ふことは、つまり勞働者農民大衆から×り取られた血税の一部を割いて、これらの大衆をより多く×り取るための官設機關が設けられると云ふことなのだ。だがそんなことを誰も口に出して言ふものはない。俵商相の説明するところによると、合理局の所管事項は次の如く定められるとのことだ。

一、企業の合同聯合　二、中小企業の統制
三、事業經營の改善　四、製品の規格統一および單純化
五、試驗・研究機關の整備、聯絡　六、産業金融の改善
七、國産品使用ならびに奬勵に關する事項

かう列擧されたところを見ると、そこには何も耳新らしい事はなく、從つて今更「産業合理化」などいふ新らしい言葉を用ひる必要がどこにあるかと疑はれるが、實は第三項の「事業經營の改善」といふのが眼目なのだ。事業經營の改善といへば甚だ漠然としてゐるが、實は勞働能率の增進を圖り勞働の強度化を高め、それによつて一定の時間内により多くの分量の勞働を××り取る工夫を講じること、それが茲にいふ「事業經營の改善」なのだ。そしてそのためには、後で委しく

說明するやうに、結局フォード主義を採用する外はないのだが、それを實行するためには、大資本の必要から『企業の合同聯合』が要求されたり、また技術上の必要から『製品の規格統一および單純化』が要求されることになる。産業合理化といふ新たなスローガンの下に計畫されようとしてゐる事柄が、もし實際何等か新たなる要素を含んでゐるとするならばそれは以上の點に横たはるの外ない。だが、もちろん其處には、あからさまに勞働の強度化の增進といふ本質的な事柄は擧げられてゐない上に、産業金融の改善だの、國産品の使用だのいふやうな、本來の産業合理化には直接の關係ない事項までが列擧されてゐるので、事の眞相は益々分からなくなつてゐる。ところで、右の如き商相の說明に對して各委員からは質問ならびに意見の陳述があり、そして希望としては、『顧問の人選については、産業合理化の基本精神たる勞資協調の點から見て、勞務者側よりも選ぶこと』と云ふやうな意見が持ち出されたとのことだが、これなどは甚だ興味あることだ。資本家ならびにその代理人たちは、謂はゆる産業合理化が誰の利害のために誰を犠牲として遂行されるものだかを、最初から本能的に承知してゐる。それで顧問の中へは、勞資協調主義の・すなはち改良主義の・も一度言ひ換へれば資本主義擁護派の・『勞働者代表』を入れておかうと云ふのだ。合理化の眞相が知れ渡るにつれて、勞働者がこれに××し出すことは、今日から分かつてゐる。だから彼等の眼から見れば、勞資協調は『産業合理化の基本精神』なのだ。彼等の謂はゆる産業合理化の本質がどこにあるかは、少くとも本能的に最初から彼等の承知してゐるところだ。

資本家たちは勞資協調をもつて『産業合理化の基本精神』としてゐる。それはまことに彼等の言ふ通りだといふことは協調主義の勞働官僚がその組合をひきゐて資本家に對し如何なる條約を結んでゐるかを見れば、すぐに分かる。私は『産業合理化と勞働階級』(勞働者文庫第一册、定價十錢、希望閣刊行)から次ぎの一節を引用しておかう。

『社民黨下の各組合や日本大衆黨下の各組合等は、口では合理化に反對するらしく言ふてをり、それに反對するらしい文書は發表

してゐるけれども、實際においては、彼等は資本家に迎合し、これが遂行に協力して、資本家を援けてゐるのだ。……日本大衆黨や社會民衆黨下の組合は、昨今しきりに團體交渉を資本家と結んでゐるが、その團體交渉の一條件として、組合は會社の能率増進に協力することを、會社に約束してゐる。次ぎの例はそれだ。

第五條　會社ハ出來ルカギリ従業員ヲ優遇シ、組合ハ作業ノ能率ノ増進ニ努力スルコト。(總同盟關東同盟會と東京製鋼株式會社との團體交渉覺書よりの抜萃)

第四條　組合ハ勞働能率オヨビ嚴正ナル秩序維持ニ努ムベキモノトス。(勞働組合總聯合關西聯合會と山村製壜所との間に交はしたる團體交渉覺書よりの抜萃)

最初のは、こゝにも掲げた通り總同盟關東聯合會が、會長松岡駒吉の名をもつて、東京製鋼株式會社專務取締役赤松範一との間に、取りかはした團體交渉の覺書の中の第五條であり、第二番目のは、勞働組合總聯合關西聯合が、會長阪本孝三郎の名をもつて取りかはした團體交渉覺書の中の一ケ條である。これを見ると、總同盟も總聯合も、勞働者のよりよき搾取を目的とする能率増進を承認し、これに協力してゐるのだ。』

こゝにいふ勞働能力の増進(勞働の强度を高め、一定の時間内にしぼり出される勞働の分量を多くすること)が、如何に現代の資本家的産業合理化の中心目標であるかは、以下吾々が詳細に見んとするところである。(因みにいふ、こゝに引用した東京製鋼株式會社と勞働總同盟との間に取りかはされた覺書の全文は、時事新報社編『日本産業の合理化』の中に收められてゐる『産業合理化と勞働組合と題する論文――それは松岡駒吉氏の署名を有するもの――の中にも引用されてゐる。すなはちそれは氏自身が既に世間に向つて吹聽されてゐるところだから、私はこれを引用するにあたつて何等の躊躇を感じないで濟んだのだ。)

第二節

マルクス主義經濟學の基礎理論の一應の説明。資本家の利潤は勞働者から搾取する剩餘勞働のかたまりに過ぎない。かくて勞働時間の延長と賃銀の値下とは從來資本の攻勢の主なる目標となつてゐた。

資本家地主階級が懐にするところの不勞所得（勞働しないで得てゐる莫大な收入）――すなはち種々の形における利潤、利子、地代、等々――には、本來どこから生まれるかと云へば、それは盡く生産過程における勞働者の剩餘勞働から生まれるのだ。これはマルクス主義經濟學の基礎理論だ。今日行はれつゝある資本主義的合理化の本質を理解するためには、吾々は先づこの基礎理論をはつきり心得てゐねばならぬ。産業合理化の問題を考へるにつけても、今更のやうに驚かれるのは、マルクスの理論の××に正しきことだ。吾々はその助けなくして現代の諸現象を理解することは出來ぬ。そこで極く簡單にでも、前に掲げたマルクス主義經濟學の基礎理論を、一應こゝで説明しておかねばならぬ。

生産過程とは、商品が生産される經路のことだ。それは工場の内で行はれる。そして工場内で生産された商品は、色々な筋道を通つて、最後に消費者の手に屆く。商品が工場を離れてから、その消費者の手に屆くまでの經路は、生産過程に對して流通過程と名づけられる。

今、資本家地主階級が懐にするところの一切の不勞所得は、本來どこから生まれるかと云へば、先きに言つた通り、それは盡く生産過程における勞働者の剩餘勞働から生まれるのだ。

吾々は先づその生産過程を見よう。そこでは多勢の勞働者が資本家に雇はれて働いてゐる。物を生産するためには、先づ生産手段として原料だの機械だのが必要とされるが、（例へば紡績絲を生産するためには、棉花や紡績機械がぜひ必要だが）、勞働者はこれらの生産手段を所有してゐないから、自分たちが獨立して生産業を營むわけに行かない。今日の如き資本主義の社會では、生産業を營むこと――すなはち産業の經營――は、資本家がこれを獨占してゐるのだ。資本家は資本をもつてゐる。それは最初貨幣の形で存在してゐるが、資本家は之をもつて、一方では、生産に必要な種々の生産手

段、すなはち原料や機械やを買ひ入れ、他方では、勞働者から勞働力を買ひ入れる。（勞働力とは勞働する力のことだ。勞働者は自分が獨立して商品を造り、その商品を賣つて貨幣を手に入れることが出來ないから、自分のからだに含まれてゐる勞働力を商品として資本家に賣るのだ。その勞働力といふ商品の代理が賃銀であり、そして勞働者は此の如く賃銀として得た貨幣をもつて、その生活や必要品を買ふのだ。）

そこで、最初資本家の手に貨幣の形で存在してゐた資本は、前に述べたやうな取引を行つた後は、その姿が變はつてしまつて、一定の商品を生産するに必要な生産手段と勞働力とから成り立つことになる。（勞働力といふ商品は、勞働者のからだの内に含まれてゐるのだから、一定の時間にわたつて勞働力を買つた勞働者は、その時間だけ之が買手たる資本家に對して雇傭關係に立つ。そのために、例へば紡績會社に一定の期間勞働力を賣る約束をした女工は、自分のからだをその會社の寄宿舍に入れることになる。）

さて資本家は、一定の商品を生産するに必要な生産手段と勞働力とを、すでにその手許に備へたのだから、これから先きは、その目的とする商品の生産に邁進することになる。

一定の商品の生産に着手してから愈々その商品が出來上がるまでの經路が、謂はゆる生産過程だ。この過程する間、資本はそこに固定される。

商品が出來上がつたならば、資本家はそれを他人に賣る。そこで彼れの資本は再び貨幣の形で回收されることになるがしかし事業が失敗に終らぬ限り、彼れの資本が回收される場合には、その金額が元とは大きくなつてゐるのだ。例へば十萬圓投じたものが十五萬圓になつて歸つて來るのだ。そこで差引き五萬圓といふものが、元本に超過する價値——すなはちマルクスのいふ剩餘價値——であり、それが資本家地主階級の一切の不勞所得の泉源となるのだ。

右の如き剩餘價値は、必ずしもその全部が、最初これを獲得した資本家の手に殘るとは限らない。もしその資本家が他

の資本家から資本を借りてをれば、その貸主に對して、利子として、前記の剩餘價値の一部を割かねばならず、他から土地を借りてをればその地主に對し、地代として、やはり前記の剩餘價値の他の一部を支拂はねばならず、またその製品の販賣を他の資本家に委託すれば、その資本家に對し、商業利潤に相當するものを分配せねばならず、かくして殘りの部分が、はじめて彼自身の利潤になるわけだ。だが、そんなことは、どちらにしても、問題の本質に變りはない。たゞ資本家地主階級の一切の不勞所得の泉源は、資本によつて經營されてゐる商品の生產過程における產物たる剩餘價値だ、といふことを、心得てゐればよい。（その剩餘價値を、資本家地主階級が彼等の仲間でどんな風に分け取りしようと、それは勞働者階級には差しあたり關係のないことだ。）

種々の形態で（あるひは產業利潤、あるひは商業利潤、あるひは利子、あるひは地代、等々の形で）資本家地主階級の所得に歸する剩餘價値は、もと〳〵資本による商品の生產過程で造り出されたものだ。それなら、それはどうして、そこで造り出されるのか？

すべて商品の價値（値打）はその商品を生產するために必要とされる勞働の分量によつて決まるものだ。これはマルクスが『資本論の冒頭で委しく說明してゐるところで、その大體は拙著『經濟學大綱』や『第二貧乏物語』や『資本論入門』やで紹介しておいた。今それに立ち入ると、大分の頁を費さねばならず、當面の問題から懸け離れることになるから、こゝではその詳細の說明を略し、たゞ以上のことを前提として話を進める。

吾々は先きに、資本家が一定の商品例へば紡績絲を生產するために、先づその商品の生產に必要な生產手段例へば棉花紡績機械、等々と勞働力とを商品として買ひ入れることを見たが、これらの生產手段や勞働力は、絲を生產するため缺くてはならぬものなのだから、つまりこれらの生產手段や勞働力を生產するために必要とされた一定分量の勞働は、そのま

ま絲の生產のために必要とされる勞働として計上されるわけだ。ところで前に述べたやうに、絲の價値はその生產のために必要とされる勞働の分量によつて決まるのだから、以上のことは、取りも直さず、棉花、紡績機械、等々の生產手段の價値と勞働力の價値とは、そのまゝ生產品たる絲の價値を構成するに至るべきことを意味する。ところで、もしさうだとするならば、そしてたゞそれだけのことだとするならば、資本家は生產手段や勞働力のために例へば十萬圓を投じて、わざ〳〵生產事業を經營しながら、生產過程の最後においては、丁度右の十萬圓と同じ價値しか有たぬ紡績絲を生產したに過ぎぬことになる。それでは最初十萬圓を投じて最後に及び十萬圓を回收するのだから、前後を通じてそこには何等の剩餘價値も生產されず、資本家は何等の儲けをもなし得ないことになる。しかしそれでは話が合はぬ。資本家は決して絲を造ることを本來の目的としてゐるのではない、たゞ金儲けするための手段としてゐるのだ。だから實際には、生產手段や勞働力のため最初に十萬圓を投じたとすれば、最後には十五萬圓の絲を入手してゐるのだ。それなら差引き五萬圓の超過價値はどうして生まれるのか？

それは勞働者を搾取することによつてだ。そしてその勞働者の搾取は次ぎのやうにして行はれるのだ。

すでに述べたやうに、勞働者はその勞働力を商品として資本家に賣るのだが、この場合、商品としての勞働力の價値はどうして決まるかと云へば、それは一般商品の價値と同じやうに、その生產のため必要とされる勞働の分量によつて決まるのだ。

それなら、一日分の勞働力を生產するために必要とされる勞働の分量はどうして決まるかといへば、それは勞働者およびその家族の生活のため必要とされる生活資料（米、味噌、醬油、薪炭、等々）を生產するため必要とされる勞働の分量によつて決まる。何故といふに、一定の勞働力が引續き提供されてゆくためには、勞働者自身が生きて行かねばならず、

また彼れが老衰した後はその後繼者がなければならぬが、そのためには、勞働者自身および彼れの家族の生活を維持するための生活資料が、ぜひ必要とされる譯なのだから。

勞働力の價値（商品としての値打）は、さういふやうにして決まる。假にその一日分の價値を四時間分の勞働に相當するとしよう。

日本では純金二分のことを貨幣名では（貨幣としての名稱の上では）一圓と名づけてる。だから假に純金二分を堀り出すために二時間分の勞働が必要とされるなら、四時間分の勞働は二圓を代表することになる。かくて一日分の勞働力の價値が四時間分の勞働に相當するといふことは、言ひ換へると、金二圓に値すると云ふことになるのだ。

金二圓、これが一日分の勞働の値打だ。そこでもし資本家が勞働者からその勞働力をその値打通りに買ひ取るならば、勞働力の價格（すなはち値段）は價値（値打）と一致することになる。

いづれ後になつて猶ほ悉しく述べるつもりだが、商品の價格は必ずしもその價値と一致するものではない。一定の商品が實際に賣買される値段は、値打以上のこともあれば、値打以下のこともある。殊に勞働力といふ商品は、他の商品と違つて、需要供給の調節が勝手に出來るものではないのだから、――殊に現在ではいつもその供給が需要に超過してるから、――勞働者はいつも價格でその勞働力を賣ることを餘儀なくされてるのだ。

だが、こゝではしばらく、勞働力と商品はその價値通りに賣買されるものと假定しておく。さすれば、勞働者がその一日分の勞働力を資本家に賣つてるところの代價――すなはち賃銀または勞貨――は、金二圓だ。そしてこの二圓といふのは、前に言つた通り、六時間分の勞働を代表するのだ。

そこでもし勞働者が資本家のために一日四時間分の勞働しか提供しなければ、資本家が勞働者に向つて支拂ふものと、勞働者から受取るものと、どちらも四時間分の勞働になり、資本家からいへば差引き何の利益もないことになる。そこで

問題は再び行き詰まる。資本家のための剩餘價値は果して何處から出てくるのだらう？

この問題は、實際には、次ぎのやうに解決されてゐるのだ。

資本家は勞働者から一日分の勞働力を買取るために、四時間分の勞働に相當するところの金二圓を賃銀として支拂つた。そこで勞働者の一日分の勞働力は資本家のものとなつた。今の世の中では誰でもが自分の買取つたものを自分の思ひ通りに使用する權利をもつてゐる。勞働力を買取つた資本家も同じことだ。彼れはたとひ四時間分の勞働に相當する價値しか支拂つてゐないにしても、勞働に向つて六時間分以上の勞働に從事することを要求しうる權利をもつてゐる。そこで彼れが例へば八時間分の勞働を要求したとする。さうすると彼れは、勞働力の代價（賃銀）としては四時間分の勞働に相當する價値を支出したに過ぎざるに係らず、勞働者をして、彼れの所有物たる勞働對象（例へば原料としての棉花）の上へ、八時間分の勞働を加へしめることになる。そしてこれらの勞働は、生產物たる絲の上に對象化することにより、價値を形成する。

かくて、彼れの支出するものは四であり、彼れの獲得するものは八である。そしてこの八から四を引いて殘るところの四が、取りも直さず彼れの獲得するところの剩餘價値である。

そこで例へば十萬圓の資本のうち、七萬圓を生產手段（原料、機械、等々）の購入に充て、殘りの三萬圓を勞働力の購入のため賃銀の支拂に充てたとするならば、これらのものを生產的に使用することによつて得られる生產物（絲）の價値は、十三萬圓となる。何故なれば、生產手段の價値七萬圓は、別にその大きさを變化することなく、そのまゝ生產物の上に移轉されるが、勞働力に放下された部分の資本はその價値を倍加して、三萬圓から六萬圓になるからだ。

三萬圓が六萬圓になると云ふ點から云へば、十割の增加だ。しかし全體から云へば、十萬圓のうち七萬圓は變化しない

のだから、結局十萬圓が十三萬圓になるのであり、それは三割の增加に過ぎない。マルクスは、全體の資本のうち、勞働力の購入（賃銀の支拂）に充てられた部分を、可變資本部分といひ、生產手段の購入に充てられた部分を、不變資本部分と名づけた。資本家は彼れの資本の全部を可變資本としたいであらうが、勞働は物に對象化されなければ價値とならぬのだから、彼れは一方において勞働力を買入れると同時に、他方においてはその勞働力に組み合はすべき一定量の生產手段を買入れることを、餘儀なくされてゐるのだ。

吾々は本節の冒頭で次ぎの如く述べた。『資本家地主階級が懷にするところの不勞所得（勞働しないで得てゐる莫大な收入）――すなはち種々の形における利潤、利子、地代、等々――は、本來どこから生れたかと云へば、それは盡く生產過程における勞働者の剩餘勞働から生まれるのだ。』

このことが今大體理解されたわけだ。前に揭げた例でいへば、勞働者は一日八時間の勞働に從事してゐるが、そのうち四時間分は彼れの生活を維持するために必要とされる勞働時間だ。もちろん今日の資本主義社會は、社會的分業の基礎の上に極度の發展を遂げた商品生產の社會だから、勞働者は彼れの生活を維持するために必要な生活資料を、彼れ自身が直接に生產してゐるのではない。例へば紡績工は每日絲ばかり造つてゐるけれども、彼れの生活のためには、米、味噌、醬油、薪炭、等々、樣々の物が必要とされる。だから彼れは、紡績工場で絲の生產に從事してゐるにしても、資本家からその絲を賃銀として貰ふのではなく、賃銀は貨幣の形で受取るのだ。それが假に二圓であり、そして二圓といふ貨幣は四時間分の勞働を表示してゐるものだとするならば、彼れがその貨幣をもつて買ひ求めて來るところの生活必要品も、（もし價値通りに賣買されるものと假定すれば、）やはり四時間分の勞働によつて造り出された物なのだ。だから前にいふ通り勞働者は一日八時間の勞働に從事してゐるが、そのうち四時間は彼れの生活を維持するために必要とされる勞働時間だ。

だから吾々は之を必要勞働時間と名づける。それは資本家の立場から云へば、彼れが賃銀として支拂つた價値を回收するために必要とされる勞働時間でもあるのだ。

この必要勞働時間を超越する部分が、剩餘勞働時間だ。この時間内における勞働者は、勞働者の立場から云へば、彼れの生活を維持するために必要な勞働以上の餘分のものであり、資本家の立場から云へば、彼れが對價なしに只取りするところの勞働である。吾々は、勞働者が負擔することを強制されてゐるところの・斯樣な餘分の勞働を名づけて、剩餘勞働といふのであり、そして斯かる剩餘勞働こそが、資本家地主階級の懷にする一切の不勞所得の源泉だ、と云ふのである。

* * *

およそ社會問題は、先づ個々の資本家の立場からでなく、全資本家階級の立場から・從つてまた全資本家階級と全勞働者階級との階級關係の立場から・觀察さるべきである。そして斯かる立場に立つて觀察するかぎり、資本家階級にとつての・從つてまた資本主義の發達にとつての・最も根本的な問題は、既に述べたところによつて明かなる如く、資本がその生產過程において搾取しうる剩餘勞働量の總額の增大である。資本主義の發展にとつての決定的な問題は、これら剩餘勞働の總額があれやこれやの資本家地主に如何なる割合で分配されるかにあるのではなく、これら剩餘勞働の總額そのものの增大が一定の速度において可能であるか否かに存する。以下吾々が謂はゆる產業合理化の中心目標を探求せんとするにあたり、專ら吾々の考察を、生產過程において實現されるところの・勞働能率（勞働の强度）の增進に集中せんとするゆゑんは、右の理由に基づく。一見すれば、吾々の態度は問題を單なる技術の方面に局限するかに見えるであらう。だが、一切の剩餘價値の泉源は、從つてまた資本主義の發展にとつての根本的な生命の動因は、結局のところ、それ以外のところに橫たはつてゐるのではない。

第三節

勞働時間の延長と賃銀の値下げとが勞働者の抵抗に出會つたために、剰餘勞働をより巧妙に××する方法として意識的に企てられた勞働の強度化の促進、これが產業合理化の本質なのだ。

勞働者から搾取する剰餘勞働、要するにこれが、資本家階級の一切の儲けの根源だ。だから資本家は、自分たちの儲け高をなるべく多くするために、出來るだけ多くの剰餘勞働を勞働者から搾り取らうとする。

出來るだけ多くの剰餘勞働を勞働者から搾り取るために、資本家が意識的に努力する第一の事柄は、勞働時間の延長だ。必要勞働時間とは何を意味するかと云ふことは、すでに説明したところだが、今この必要勞働時間の長さが一定してゐるものとすれば、（他の事情にして變化なきかぎり）、剰餘勞働の分量は、一日の勞働時間が長くなればなるほど、大きくなる。資本家が先づ第一に、出來るだけ勞働時間を延長しようと努力するのは、これがためだ。

出來るだけ多くの剰餘勞働を勞働者から搾り取るために個々の資本家が意識的に努力する第二の事柄は、賃銀の値下げだ。もし一日の勞働時間の長さが一定してゐるならば、（他の事情にして變化なきかぎり）、剰餘勞働の分量は、必要勞働時間が短くなればなるほど、大きくなる。ところで資本家の立場から見ての必要勞働時間の長さ、言ひ換へれば、彼れが賃銀として支拂つた價値を回收するために必要とされる勞働時間の長さは、彼れの支拂ふ賃銀が少くなればなるほど、少くて濟むことになる。資本家が出來るだけ賃銀を値下げしようとするのは、そのためだ。（賃銀が勞働力の賃銀以下に押し下げられる場合には、勞働者の生活程度は從前よりも低下する。かゝる場合における剰餘勞働時間の延長は、勞働者の從前の生活程度を標準としての必要勞働時間を蠶食することによつてのみ、可能とされるのだ。）

資本家が絶えず勞働時間の延長と賃銀の値下げを計畫するのは、以上の理由からだ。ところで、これを勞働者の立場か

ら見れば、勞働時間の延長にしても、賃銀の値下げにしても、共にその不利益であることは勿論だ。すなはち此の點だけから見ても、資本家と勞働者との利益が全く相對立してゐるものだと云ふことは甚だ明瞭だ。資本家から云へば、勞働時間は出來るだけ延長し、賃銀は出來るだけ低くするのが利益だが、丁度それと正反對に、勞働者から云へば、勞働時間は出來るだけ短くし、賃銀は出來るだけ高くするのが利益だ。資本家と勞働者との利害は、さういふやうに正面衝突をしてゐるのだから、これら二つの階級の利益が調和するものの如くに說敎する勞資協調論なるものは、全くのゴマカシなのだ。勞資協調主義だの溫情主義だの云ふものが、結局のところ勞働者を眠り込ませるための××に過ぎないものだと云ふことは、誰が何と言はうとも、事實において、吾々勞働者が自分自身の經驗を通じて次第に自覺するに至るところだ。勞働者は資本家の爲すがまゝ言ふがまゝ身を任せてゐては駄目だ、資本家の飽くなき攻勢に對し自分自身を防衛するためには勞働者同志が一致團結して資本家に當らねばならぬ、さういふやうに勞働者自身が段々に考へて來る。そして勞働組合といふやうな組織が、どこの國でも自然發生的に出來上がつて來るのだ。

さうなつて來ると、勞働時間の延長や賃銀の値下げは、段々資本家の思ひ通りにならなくなる。むしろこれら二つの項目は、資本家と勞働者との間における攻爭の中心題目となり、事態は力と力との關係によつて決定されるやうになる。そこで資本家は、これらの方法以外に、勞働者から剩餘勞働をより十分に搾取する方法を、勞働者の反抗力の強くない方面に求める必要に迫られる。勞働の强度を高めるのがすなはちそれだ。そしてそれこそが今日行はれてゐる資本の合理化の主要眼目なのだ。產業の合理化といふやうな新らしい言葉が用ひられてゐるのは、何かそこに新らしい事柄が起つてゐる證據だ。今その新らしい事柄の本質を把握することが、吾々にとつて最も肝要な問題である。吾々はそれを勞働の强度化の促進のうちに發見しようとするのだ。

勞働の强度化の促進とは何のことか？　それは勞働の能率の增進のことだ。

勞働能率の增進の本質はどこに横たはるか？　それは勞働者をして一定の時間内により多くの分量の勞働を支出せしめることに存する。マルクスの言葉によれば「同一の時間内における勞働支出の增大」、「勞働力の緊張を高めること」、「勞働時間の間隙をより濃密に充塞すること」、「勞働の密度化」が、すなはちそれだ。（『資本論』第一卷、第十三章三のC參照。）

このことは、資本家による勞働者からの剩餘勞働の搾取の上に、どういふ關係をもつか？　それは實質からいふと、恰も勞働時間の延長と同じ結果になるのだ。

元來資本家にとつて肝要なことは、勞働者から成るべく多くの剩餘勞働を搾取することなのだ。それでもし一定の時間内に支出される勞働の分量が一定してゐるとすれば、より多くの勞働をしぼり取るためには勞働時間を延長するより外に方法はないが、しかしもしも一定の時間内に支出される勞働の分量を增加せしめる方法が發見されるなら、たとひ勞働時間は元のまゝでも、勞働者からより多くの勞働を絞り取ることが可能になる。

このことを説明するために利用されうる最近の實例が、前掲の『產業合理化と勞働階級』の中に紹介されてゐる。私はそれを茲に引用しよう。

「紡績聯合會では、昨年の七月一日限り深夜業が廢止されるので、その準備のために深夜業が廢止された後でも、在來と同様のあるひは在來よりもより以上の製產高をあげるには、どのやうな合理化の方法をとればよいかを研究した。この研究のための期間として、紡績聯合會は大正十五年から昭和三年四月末までの三年間をこれに充てた。この三年間に聯合會が合理化の方法として採つたものは、左の方法であつた。

一、撚付錘數の增加、工場の新設、設備の資本的改善。

二、廻轉數の增加、優秀機械の据付。

三、能率增進、すなはち勞働の强化による勞働者の搾取强化。（河上いふ、こゝには三の事項が列擧してあるが、前の二つは結局最後の一つを主たる目標にするものである。）

以上である。

然らば紡績聯合會は、この方法を採用してどのやうな結果をあげたか？ それは次に述べる通りである。

紡績聯合會所屬の會社の錘數は此の試驗期間に左の如く增加した。

大正十五年末（試驗期前）	四、九三一 千本
昭和三年末（試驗期後）	五、五三八

すなはち試驗期の末には、試驗期前と比較すると、五七四千本錘だけ增加してゐる。錘數は以上の通り殖えたが、勞働者數は殖えたかどうかと言ふに、大正十五年末に十八萬三千餘就業してをつた職工は、昭和三年四月末には十五萬九千二百餘人に減つてゐるところが不思議なことには、それだけの職工が減つたにも拘らず、それらの會社の製產高は、反對に月に六十餘萬貫も試驗期前よりも澤山出來るやうになり、女工一人の生產高は、大正十五年末には月七十八貫であつたものが、昭和三年四月には九十四貫となつて、女工一人が月に十六貫も製品を餘計に作るやうになつてゐる。それなら月に十六貫も餘計に品物を作るやうになつた女工の賃銀は上がつたかと云ふと、十五年一月に平均一圓二十錢三厘であつたものが、昭和三年三月までは一圓二十三錢四厘で、僅かに一厘しか上がつてゐないのだ。（河上いふ、それどころではない。鐘紡は三四割の賃銀値下げを斷行しようとして、今問題を起してゐる最中なのだ。）

これが紡績聯合會が發表した、彼等の言ふところの產業合理化の「成績」である。この「成績」を十分に研究すると、產業合理化が實際勞働者に不利益きはまるものだと云ふことを、はつきりと知ることが出來る。以下それを簡單に述べてみよう。

紡績聯合會の發表で見ると、前にも述べた通り、昭和三年四月末には、大正十五年四月末より二萬三千七百餘人の勞働者が減つてゐるに拘らず、錘數は五十七萬餘も增へてゐるので、在來三十本の錘數を受持つてをつた女工は、昭和三年四月末には三十四本强

すなはち一割强餘計の錘數を新たに持たされたことになる。受持ちの錘數が多くなることは、在來よりもより多くの仕事をされることを意味する、これだけ錘數が殖えたのと、新機械で在來よりもより以上の勞働力(勞働といふべきだ――河上附記)を出さゝれるのとで、其の結果はテキメンに生産額の增加となつて、勞働者は減つたに拘らす、月に六十餘萬貫の增産となり、在來女工一人の製産額が月に七十八貫であつたのが、月に十六貫、すなはち二割もよけい生産することになつたのである。これはとりも直さす女工一人が在來よりも二割だけより多く仕事をさゝれることを意味してゐる。それなら、女工はその生産高に應じて二割も賃銀が增加したかと言ふと、前にも述べた通り、大正十五年四月末と、昭和三年四月末には、只僅かに一厘の相違で、賃銀は何等上がつてはゐない。二割も仕事を多くして、それがために肉體をメチャ〱にこわすに拘らす、賃銀が同一であるのは、實際においては賃銀がそれだけ安くなつたことになるのだ。合理化で勞働者は損こそすれ利益はない。』

私は――紡績工場における技術の實際に不案内であるのみならず、前記の說明だけでは如何なる技術上の變化が起つたのであるかが具體的に分からないので、――右に述べられてゐるやうな變化が、果して勞働能率の增進のために生じたのであるか、それとも主として勞働の生産力の增加のために生じたのであるかを、確めることが出來ず、(勞働能率の增進と勞働の生産力の增加との區別は、後に詳しく說明する)、從つて右の事實が日本における産業合理化の一例とさるべきものであるか否かについても、充分の保證をなし兼ねるが、次ぎに掲げるドイツの一例に至つては、『技術上の改革は少しも實行されない』にも拘らず、生産額の增大を來たしてゐるので、勞働能率の增進がそこでは純粹な形で現はれてをり、從つて吾々は安んじて之を産業合理化の一適例となすことが出來る。

『産業合理化の諸問題』(不破倫三氏譯、定價五十錢、叢文閣刊行)の第二章の二『勞働の强度化』と題するところには、「ドイツ共産黨が合理化の實行されつゝある各種工場の勞働者に發した質問に對する報告を骨子として纏められた論文」の一部分が拔萃してあるが、そこには例へば次ぎのやうな事實が紹介されてゐる。

『技術の改革による勞働の强度化については、どの工場からも一向報告されてゐないが、單に勞働者の力の緊張度を增加させること

によつて行はれる勞働の强度化に關しては、殆どすべての報告の中で問題にされてゐる。非常に多數の例の中から若干を示すことにする。

鐵索製造工場のNでは、ある部分においては、勞働の强度は二倍に增加した。特に針金の製造および鐵索の製造を行ふ仕事場においては、實に三倍に增加した。

亞鉛工場の鎔解作業場では、技術上の改革は少しも實行されなかつたのであるが、四人の代りに三人の勞働者を働かせて、しかも四十パーセントほど生產額を增大させることが可能になつてゐる。その方法はかうである、——今までよりも多量の亞鉛を爐に積み込み、それによつて鎔鑛工の手に合はぬほど勞働時間を充實させ、八時間でそれだけの仕事を終へさせることが、考へ出された。勞働者は朝の三時から順番にひつきりなしに働いてゐる。彼等は八時間內には少くとも自分の仕事を終へるやうに、あらゆる方面から督勵されてゐる。彼等は朝食をとる暇もなく、ペコ〳〵の腹を抱へて、有害ガスの中で十二時または一時まで、せつせと働く三十歲の人々、否もつと若い人々が、はや鉛毒に冒され、死の候補者であり、廢疾者であると云ふところから、絕えず解雇の脅威を受けてゐることは、毫も怪むに足らぬことである。何故なれば、資本家は役に立たなくなつた厄介者を追ひ拂はうと望んでゐるのだから。』

資本家たちの謂はゆる產業合理化の本質は、上記の場合には特に明瞭に現はれてゐる。何故なれば、そこには何等技術上の改革が伴ふことなしに、たゞ勞働の强度化のみが純粹に行はれてゐるのだから。

勞働の强度化の增進によつて剩餘勞働の搾取量を增大しようとする資本家の努力は、必ずしも今に始まつたことではない。そのことは、先きに指摘した『資本論』第一卷第十三章三のCを披いて見ても、分かることだ。たゞ問題は、このことが今や產業合理化といふ國際的スローガンのもとに、あらゆる帝國主義國における資本家ならびに資本家政府の意識的な努力の中心題目となつた點に橫たはる。

第四節

勞働の生產力の增加と勞働能率の增進との區別。產業合理化の中心的裝置としてのコンヴエヤー・システムによる勞働の壓搾。

前に述べた勞働の强度化（勞働能率の增進）は、勞働の生產力の增加と全く別物である。吾々は進んでその點を明かにするであらう。何故なれば、この兩者をはつきり區別することによつて、勞働の强度化の意義が一層明瞭にされるから。

勞働の生產力の增加とは、一定分量の勞働が物を造り出す力の增加のことだ。それは一定分量の勞働により造り出されるところの、（もし勞働の强度または能率が一定してゐるなら、これを言ひ換へて、『一定の勞働時間内に造り出されるところの』と言つてもよい）、生產物の分量の增加となつて現はれる。

勞働者が一定の時間内に生產する生產物の分量は、單に勞働の生產力が增加した場合にも、また單に勞働の强度が高められたに止まる場合にも、同じやうに增加する。けれども前の場合には、勞働そのものの生產力が增加したのだから、生產物は增加しても、勞働者の負擔は增加しない。勞働者は以前と同じ分量の勞働を負擔してゐるのであり、たゞその勞働の一單位の生產力が增したために、（それは後に說明するやうに、機械の改良等々のために起るのだが、）生產物の分量が增加するのである。ところが後の場合には勞働者が一定の時間内に支出する勞働の分量に變化が起るのだ。全體の勞働時間は前と同じでも、その同じ時間内に以前よりもより多くの勞働が支出されることによつて、より多くの生產物を生產されるのだ。從つて、勞働時間は以前と同じでも、勞働者の負擔する勞働の分量は殖え、彼れの生命の消耗される度合が增す。

勞働の生產力が增加する場合と、勞働の强度が高められる場合とは、以上の如くその事情を異にしてゐる。このことは更に次ぎのやうな結果を伴ふ。すなはち、生產物は何れの場合にも增加するに拘らず、前の場合には生產物の一單位の價

値が減少するけれども、後の場合には此の如き變化が起らない。けだし勞働の生產力が增加した場合には、同じ分量の勞働でより多くの分量の生產物が生產されるのだから、これを一單位の生產物について云へば、それはより僅かな分量の勞働で生產され、從つてそれにはより僅かな分量の勞働が含まれるに止まる。しかるに總て商品としての生產物の價値は、それに含まれてゐる勞働の分量によつて決まるのだから、以上のことは當然に生產物の價値の下落を意味する。これと異なり、單に勞働能率が增加されたに止まる場合は、一定の時間內に支出される勞働の分量こそ增加すれ、一單位の生產物に對象化される勞働の分量には變化が起らないのだから、從つて生產物の價値の上には何等の變化も起らない。

以上述べたやうに、勞働の生產力の增加は、一定の生產物をより僅かな分量の勞働で生產することを可能ならしめる。このことは、これを個々の資本家の立場から云へば、彼れの生產する商品の生產費を減少することであり、そしてまたそのことは、彼れが競爭場裡において勝を制するための必須の條件だ。そのことをマルクスは嘗て次ぎの如く述べた。

『一個の資本家が他の資本家を戰場より驅逐し、そのものの資本を征服し得るのは、たゞ物を安く賣ることによつてである。ところが自ら破產することなくして安く賣りうるがためには、彼れは安く生產しなければならぬ。すなはち勞働の生產力を出來うるかぎり高めなければならぬ。しかるに勞働の生產力は、主として、分業の進步により、また各方面における機械の普及ならびに不斷の改善によつて行はれる。』(『賃勞働と資本』)

以上の如き技術上の改良が一部の資本家の獨占に止まつてゐる間は、當該資本家がエキストラの（普通一般の資本家が得てゐる平均利潤以上の）利潤を得るに止まるが、しかし如何なる技術上の改良でも或る資本家が長く獨占するわけに行かず、それは間もなく一般に行き渡つてしまふ。さうすると、問題となつてゐる商品を生產するための社會的に（平均的に）必要とされる勞働の分量が減少するのだから、その商品の市場價値が下落する。從つて或る特定の資本家のみが得てゐた

エキストラの利潤もなくなる。そこでまた改めて技術上の改良が行はれる。率先して之を實行したものが暫くはまたエキストラの利潤を得る。だが再び商品の市場價値の下落を齎らすことによつて、やがてまたそのエキストラの利潤が消える。『かくて分業および機械の應用は、更に甚しく大なる規模において、重ねてまた新たに起る。』

資本主義のもとでは、以上述べたやうなことが、ずつと引き續いて起つてゐたのだ。かくて『分業の進步』ならびに『各方面における機械の普及ならびに不斷の改善』といふことが絕えず行はれ、これによつて勞働の生產力は著しく增加せられた。これは資本主義が文明に貢獻した方面の一つだ。(勞働の生產力の增加は生產物の價値の減少を齎らすがゆゑに、そのことが勞働者用の生活資料の生產に關して行はれる限り、それはまた勞働力の價値の減少を惹き起す。從つて、──賃銀は勞働力の價値通りに支拂はれてゐるとしても、──全體の勞働時間に變化なきかぎり、勞働力の價値の再生產のために必要とされる必要勞働時間が減少するにつれて、剩餘勞働時間は益々長くなり、結局、勞働者が資本家階級のため負擔する剩餘勞働の分量が增加することになる。だが、これらの問題に言及してゐると話が複雜になるから、玆では略しておく。)

資本主義のもとで長い間行はれて來た技術上の改良──勞働過程の變革──は、以上述べたやうに、專ら勞働の生產力を高めることを目標にして行はれて來たのだ。もちろんそれには、多くの場合に勞働能率の增進といふことが隨伴して生じたけれども、それはむしろ第二次的なものであつたのだ。ところが、資本主義の爛熟期に相當する現在の段階において產業合理化の名の下に行はれてゐるところの、勞働過程の變革は、勞働の強度化──勞働能率の增進──を主たる目標としてゐるのだ。たとひそれに關聯して勞働の生產力の增進が實現されるにしても、それは全く附隨的の現象で、本質的な事柄ではないのだ。

謂はゆる產業合理化のために行はれる勞働の强度化（勞働能率を高めること、すなはち一定の時間內に搾り取る勞働の分量を增加すること）は、System des Fliessbandes（流れ帶のシステム）または conveyor system（コンヴェヤーシステム）乃至はこれと同じ精神に基づく仕掛けを、勞働過程の特徵的裝置とする。コンヴェヤーまたはフリースバンドといふのは、勞働者が加工すべき對象物を勞働者のところへ絕間なく運んで來る帶——それは絕間なく自働的に動いてゐる——のことでこれを不休傳送帶と譯してゐる人もある。この不休傳道帶が用ひられる場合には、勞働過程は數多くの作業に分割され、勞働者は斯く分割されたる作業の一小部分のみを終日繰り返し擔當する。これらの勞働者は一定の個所に立つてゐて、そこを動かさない。その代りに勞働者の傍を不休傳道帶が材料を載せて水の流れるやうに流れてゐるのだ。それが勞働者の加工すべき材料を一人の勞働者の前へ運んで來て、加工が終はると直ぐにそれを次ぎの勞働者の所へ運んでゆく。この傳道帶は機械的の正確さをもつて、一定の速度で流れてゐるのだから、勞働者は眼の前に來た材料に對し、與へられてゐる時間內に受持つてゐるだけの仕事を終へねばならぬ。斯樣にして勞働者は、機械的裝置の中へ卷き込まれて生身のまゝ機械の一部分になり、全體の機械的裝置の壓力をもつてその勞働をしぼられるのだ。

コンヴェヤーを徹底的に利用することにより初めて大成功を收めたのは、米國の自働車王フォードだ。それゆゑコンヴェヤーを中心とする勞働過程の組織化のことを、今日ではフォード主義とも云つてゐる。私は「フォードかマルクスか」（松山比才氏譯、定價九十錢、上野書店刊行）から、それに關する記事の一部を茲に引用しておかう。

『フォードは、科學的方法によつて、……人間勞働力の搾取を……世界の他の如何なる工場にもまだ見たこともない高い程度にまで押進せした。このことはたゞ次ぎの事實を示しただけで明瞭になるだらう。すでに一九二〇年において、八時間勞働で九人一日の勞働力が、平均一臺の自働車を完成しえた。五千以上の部分から成立つてゐる此の複雜な機械が、九人の勞働者の一日分勞働で

すなはち延時間七十二時間の勞働で、作り上げられた。これこそ、微細な點に至るまで頭をなやまして作られた生産過程の結果であり、そこでは勞働力の消費が秒をもつて、その價値は千分の何錢をもつて、計算されてゐる。フォード自ら言つてゐる、「吾々の比較計算は一錢の千分の一まで割り出される」と。それに從つて仕事の規準が——それを守ることは嚴格なる法則だ——個々の勞働者あるひは全一組に對して確定される。「勞働者には、何秒必要かがハッキリ分かつてゐて、それ以上はたゞの一秒でも浪費できない。」

フォードは彼の著書に一聯の例をあげて、彼れの生産方法の美はしき反面を非常に興味深く述べてゐる。そのうちコンヴエヤーの採用とその成績とを拔き出してみよう。こゝにおいてもまた他のフォードの仕事におけると同じ原則があてはめられた。——すなはち『勞働者には、もしも可能であるならば、一歩以上の步行をさせてはならない、また作業中横に身體を曲げたり、前に曲んだりさせてはならない。』最初のうちには、一定の場所で自動車の組立が行はれ、必要な部分品はそこへ運ばれたのだ。ところが一九一三年に初めてコンヴエヤーの試みが行はれてから、今度は部分品を附け加へてゆくべき骨組の方がコンヴエヤーに乘つて動いて來ることになつた。一方、組立職工の方は、いつも同じ場所にゐて、對象物〔勞働對象〕が彼れの前を正確に計算された速度で通つてゆく間に、これに對して一定の操作をやつてのけるのだ。この方法によつて、車臺(シャフシー)の組立が最も好成績を得た。停止的な車臺組立の時代には、一臺の最高能率が十二時八分であつた。直立さる作業姿勢や、仕事臺の高さを腕の高さに揭げることとの採用と共に、コンヴエヤーを應用し、更に仕事を分割して個々の勞働者は益々少ない勞働作業〔簡單な勞働作業の意味〕をするやうにした結果、今や一臺の組立に要する時間は、從來の十二時間八分の代りに、僅かに一時間三十三分を要するのみとなつた。

フォードは言つてゐる、「車臺(シャフシー)組立の驚くべき成績を見て私は全生產裝置を組織變へし全組立部に機械原動力のコンヴエヤーを採用する氣になつた後、私は個々の組立作業の適當なる作業速度を發見した。車臺組立のコンヴエヤーは、一分間に一・八メートル動く。……車臺組立には四十五種の異なつた作業がなされるので、それに適應しただけのステーションが設けられる。第一の作業群は車臺坐に四枚の護鈑を打ちつけ、第十のステーションでモーターが現はれる。若干の勞働者は一二四の僅かな手の所作をするだけであり、或ひはもつと多く手を働かせるものもある。……モクネヂをねぢ込む男は、同時に雌螺旋をはめ込みはしないし、

蝶螺旋の孔をあける者は、これを締め付けはしない。第三十四番目の作業では、既に前に油を塗られた處女モーターに揮發油を注ぎ込む。第四十四の作業では、冷却機に水が入れられ、第四十五の作業で、完全な自動車がジョン・R街へ走り出る。」斯様にして勞働者の勞働を一秒たりとも無駄にしない仕組が出來上がつてゐるのである。』

重複の嫌があるけれども、私は更に前に引用した『產業合理化の諸問題』から、同じ事柄に關する記事を、今少し引用してみよう。

『勞働の壓搾および強度化は、謂はゆる不休傳送帶の方法、もつと正確にいへば、「ベルト・コムヴェヤー」による勞働、乃至ドイツで用ひられてゐる別の言葉で現はせば、ベルト勞働、鎖による勞働、等々の方法において、その最高頂に達する。

この方法は、多くの場合(吾々が後に述べるやうに、必ずしも無條件にといふわけではないが)事實上、自ら運轉する一つの鎖あるひは一つのベルトの使用と結びついてゐる。これらの鎖またはベルトは、加工せらるべき對象物を絶え間なく勞働者のところへ運んでくる。

……ベルト・コンヴェヤーによる勞働は、言はゞ合理化の最も典型的な・最も明瞭な・そして最も完全な・現象形態である。……

工場内部の運搬に不休傳送帶の方法が徹底的に用ひられてゐる點と「不休勞働」が徹底的に應用されてゐる點とは、フォード主義なる名稱を與へられ且つフォードの場合におけるその最初の成功によつて全世界の問題となつたところの・かの勞働および生產の組織形態の最も重要なる一構成分である。……

生產における不休傳送帶の最初の重要なる意義は、工場内部の運搬を機械化することと、生產過程における此の重要な部分から人間の勞働を殆んど完全に驅逐し去ることとであつた。……しかし生產における不休傳送帶の重要なるゆゑんは、それが一個の機械的運搬手段たる役割を演ずるといふ點に限られてゐるのではなくて、遙にそれを凌駕してゐる。このことはそれが極めて重要な次ぎの如き特質を有するがために起る。──その特質といふのは、材料を絶間なく運搬して來て加工されつゝある生產物を絶え間なく運び去るといふ點、それが一つの連續不休の性質を有するといふ點である。……

不休傳送帶は、一個の單純な運搬用のカラクリから變じて、全生產過程の一個の機械的な・自働的な・調整器となり組織者となる。

不休傳送帶は、否應なしに生産過程の速度を決定し、生産の各段階の順序を決定し、勞働者の仕事の速度と規律とを決定する……』

以上述べたやうなのが謂はゆるコンヴェヤー・システムなるものだ。そして今日行はれつゝある産業合理化とは、要するに此の如きコンヴェヤー・システムによつて、あるひは根本的には之と同じやうに勞働の强度を機械的自働的に調節し促進する方法によつて、勞働過程を再組織し、一定の時間内に個々の勞働者から出來うるかぎり多くの分量の勞働をしぼり出さうとするものなのだ。だからそれは、勞働の生産力を高めるために行はれる勞働過程の改良とは、全くその本質を異にするのだ。

もちろん、前に引用しておいたフォード會社の例にもある通り、コンヴェヤー・システムを應用するためには、新らしい機械が用ひられ、分業もずつと進んでくるのだから、そこには多少とも勞働の生産力の增加が行はれるに相違ない。だが、一臺の自働車を組み立てるために要した勞働時間が、これまでは十二時間八分であつたのに、コンヴェヤー・システムのおかげで、それが僅かに一時間三十三分になつたと云ふことをもつて、全部勞働の生産力の增加だと考へたなら、それは大變な間違だ。もしそれが全部勞働の生産力の增加の結果であるならば、これまで十二時間八分だけの勞働量を要したものが一時間三十三分の勞働量しか要しなかつたのだから、一臺の自働車のなかに含まれてゐる組立勞働の分量は、前に比べて殆んど八分の一に減少したことになるのだが、以上の如き結果を生じるのは、實際は主として勞働能率の增進（勞働の强度化、一定の時間内により多くの勞働を壓搾して押し込むこと）に原因するのだから、一臺の自働車の組立のために勞働者の支出する勞働の分量そのものは、外見ほどに減少してゐるのではない。同じ時間内に以前とはとても比較にならぬほど多くの分量の勞働がしぼり出されると云ふこと、これが事態の本質なのだ。そしてこのことのために、資本家の儲けは急速に殖え、それと同時に、勞働者の生命は急速にすり減らされる。

勞働者から搾取する勞働の分量を出來るだけ多くするために資本家が意識的に企てる方法としては、勞働能率の增進を

問題外におくかぎり、賃銀の値下げと勞働時間の延長と此の二つの道しかないと云ふことは、吾々が既に理解してゐるところだが、實際においても、今日まで資本家は、出來うる限りにおいての賃銀の値下げと勞働時間の延長とを、彼等の利潤を維持するための缺くべからざる武器と考へ、自ら進んでこれらの問題につき讓歩するが如きことは、夢にも考へてゐなかつた。だから『一九一四年、フォードが八時間勞働制の採用と同時に、全從業員に對して最低賃銀を一日五ドルと定め、後これを六ドルに改めた時には、全社會に一大衝動をまき起した。それのみかフォード會社の破産を豫見した人々さへあつた。何故なれば、勞働時間を短縮すると同時に、賃銀の絕對的値上げをなすことは、企業の成り立ちと一致できるものでないと思はれたから。』だが、善良なる世人の豫想とは正反對に、フォード會社は、それ以後莫大な利潤をせしめてゐる。しかし吾々は既に、謂はゆるフォード主義による勞働能率の增進が如何なるものであるかを、承知してゐるのだから、この當然の結果に驚きはしない。たとひ勞働時間は何程か短縮され、賃銀はまた增額されたとしても、一定の時間內にしぼり出される勞働の分量がウンと增加するかぎり、勞働者が賃銀として貰つたものに相當するだけの價値は、僅かな時間のうちに再生産され、かくて一勞働者が自ら創造した價値の中から賃銀と云ふ形態で受取る部分と、資本家のポケットの中へ入るその殘りの部分との間の開きは、何處へ行つて見てもフォードの所のやうに大きくはない』といふ結果が生まれうるのだ。

それと同時に、勞働者は比較的に短い勞働時間と比較的に高い賃銀とで他よりも優遇されてゐるやうに見えても、實際はかゝる誘惑のもとにその生命をすり減らされてゐるのだ。既に述べたやうに、勞働の生産力が增加した場合でも、勞働の强度化（能率）が高められた場合でも、一定の時間內に生産される生産物の分量が增加するものといふこと、言ひ換へれば、一定の生産物を生産するために費される勞働時間の長さが短縮するといふことには、外見上何の疑ひもない。それのみならず、多くの場合にはこれら二つの事柄が同時に實現されるのだから、勞働の生産力の增加と勞働の强度化の增進とを事實上はつきりと區別することは困難だが、しかし勞働者の立場からすれば、この二つの事柄の相違は、はつきりと

身にこたへる。何故かといへば、勞働者が一定の時間内に生産する生産物の分量が增加するといふ點だけは、勞働の生産力が增加した場合も、勞働の强度化が增進した場合も、全く同じことだとしても、勞働者の支出する勞働の分量は前の場合には變化なく、後の場合にはそれがウンと殖えるために、勞働者の生命がすり減らされることは、前の場合と後の場合とでは、とても比較にならぬからだ。

私はその一例として『產業合理化の諸問題』の中から、次ぎの一節だけを引用しておかう。

『デュッセルドルフの工業監督官の一九二四年および一九二六年に關する報告によると、調査の行はれた四つのトーマス燃發製粉工場において、疾病日數は、勞働者百人當り、次ぎの數に上ぼつてゐる。

年度	疾病日數
一九二〇	一、四九〇
一九二一	一、三六一
一九二二	一、六八〇
一九二四	二、五七〇
一九二五	一、七四四
一九二六	一、七八一

一九二四年には病氣日數が著しい增加を示してゐる。だが一九二五年にはこの數字は減少を示し、翌一九二六年には再び增加に向つてゐる。』

これは何故かといへば、工場疾病共濟會の理事者たちが、こう病氣が殖えるのは共濟會顧問醫が勞働者に對して親切すぎるためだとの理由で、十二人の醫師を懲戒處分に附したからだ。そこで醫師は、自分の身には代へられぬから、重い病人でなければ罹病者としての診斷を下さぬことにした。それで一九二五年には、疾病の數が表面上急に減少したのだ。しかしそう嚴重にしても、翌年は依然として增加の傾向を示してゐるのだ。前記の著書には更に次ぎのやうに書いてある。

『呼吸器病の方も著しい增加を示してゐる。一九一三年には、この病氣の治療に要する病休日數は、勞働者百人につき三百六十八日であつたが、一九二四年には千八十五日、一九二五年には七百四十三日、一九二六年には六百四十九日——すなはち一九一三年の二倍——となつた。この場合、一九二四年から一九二六年のあひだに數字の減少を示してゐるのは、疾病件數が故意に抑制されたからである。報告の中にはこの點について、疾病件數は減少させることが出來たが、その代りに病氣は遙に重く遙に頑强執拗なものとなつた、と述べられてゐる。』

私はたゞ一例を示したに止まる。だが、この一例によつて見ても、謂ゆる產業合理化なるものが——その本質を形成する勞働の强度化の激增が——如何に勞働者の生命を削り取ることによつて行はれるものであるかの一班を推察することが出來よう。勞働の强度化が增したならば、それにつれて勞働時間を短縮せねば、勞働者の健康が保てない。だが、そんなことは、もちろん資本家たちの心配する問題ではないのだ。

勞働の生產力の增加と、勞働の强度化の增進とは、理論上はつきりと之を區別せねばならぬといふことは、以上述べたところで理解されたことと思ふ。それを明白に區別しなければ、現在行はれつゝある資本家的產業合理化の本質がつかめず、またそれが如何に勞働者を犧牲として强行されるものなるか、はつきりと摑めないのだ。しかるに、この問題について書かれてゐる多くの書物には、大概、以上の二つが、用語においても、また概念においても、屢々混同されてゐる。だから私は特にこの二つの區別をしつこく强調しておくのだ。

產業合理化に基づく勞働能率の異常なる增進は、それが勞働時間の思ひ切つた短縮を伴はないかぎり、從業中の勞働者の健康に對する恐るべき侵害と、失業軍の急速なる增大とを齎らさずにはおかない。私は更に進んで產業合理化と失業問題との關係を論じて見たい衝動に驅られてゐるが、私の論文はすでに與へられた頁數を甚しく超過してゐるので、この種の問題はこれを他日に譲るの外ない。

スポーツの階級性

林　要

一

スポーツとは何か？

廣い意味では、それは、一般に野外で行はれる娯樂的な運動を總稱し、したがつて、わが國で普通に子供らの間に行はれる『木登り』、『鬼ごつこ』、『かけくら』のごとき遊戯を始めとして、『卷狩り』、『犬追物』、『流鏑馬』、『競馬』、『相撲』、『蹴鞠』なども凡て是れに含まれるであらう。

しかし、今日われ〳〵が普通にスポーツといふときには、いはゆる『運動競技』または單に『競技』として、一定のルールに從ひ、戸外で何らかの肉體的技能を競ふものを指稱するのであつて、單なる遊戯は含まれない。たとへば、ゴルフ、テニス、ベース・ボール、ラグビー、ボート・レース、スキー、スケート、その他あらゆる『陸上競技』と呼ばれるもの、競泳、乘馬、等々は、その主なるものである。

けれども、以上のやうに技術的な定義を與へ、または種別を羅列することによつては、決してスポーツの社會的意味を明かにすることはできない。それは、着物を寒暑をしのぐものだと定義しても、これによつては着物における流行や嗜好などに反映された社會の姿を示しえないのと同樣である。だから、技術的にスポーツの種類や範圍などを規定して簡單な定義を與へるといふことは、しばらく是れを措いて、私は論を進めやう。

二

およそ何物でも、理由なくして存在するものではないが、しかし、その當初の存在理由は、それの演ずべき役割が果される

とともに終る。にもかゝはらず、一つたん存在するに至つたものは、その役割の終つたのちも未練なく自ら舞臺を去るものではない。それは何らかの扮裝のもとに自己を保存し主張しやうとする。かくて、本來の存在理由からは全く逸脫して、それ自體としての自己發展、存在それ自身のための存在ともいふべき現象が起つてくる。しかし、かゝる存在のための存在も、全く何らの役割を演ずることなくしては存在しうるものでないから、それはやがて當初それを生成せしめた理由とは全くちがつた新たなる理由をもつて存在しはじめる。そして、この新たな役割の方向・形態・意味は、以前とは異なる新たな諸條件との交渉によつて決定される。この新たな諸條件のもとにおいて一定の役割をもつかぎり、それは自己の存在を持續しうるものであるが、しかし、この役割は、必らずしも常に、最初の役割を必要ならしめた事物の發展過程を一層促進する形において發見されるものではなく、むしろ反對に、全體の發展過程にとつては阻止的な要素として或る特定な反動的任務のもとに存續を許されるといふ場合も決して尠くはない。

かやうな事實は、人類社會のごとく、利害の全く相反する階級的構成のもとに進展しつゝあるところでは、ことに顯著に現はれる。そして、人間の社會においては、その進展が、他の自然的過程におけるよりも、はるかにヨリ急テンポに行はれるから、或る事象に課せられた役割の推移變遷もまた急激ならざるをえない。

三

右のことは、スポーツの發生ならびに發展の過程についても言へる。

そもそもスポーツの起源は何であるか？ といふ問ひにたいしては、單に是れを遊戲本能ないし闘爭本能の現はれと見たり、または自己の力を認識せしめて功名心を滿足するにあると見たりする見解が一般に行はれてゐるが、それは單に個人心理的な說明たるに止まり、決して社會的性質を理解せしめるに足る說明方法ではない。本能や功名心それ自體が、各個人の社會生活によつて制約され、社會の發展にとつて必然的な役割を演ずるかぎりにおいて、それに應じた一定の具體的形態を許容されてゐるのである。だから、スポーツの起源もまた、個人的にではなく社會的に觀察されねばならぬ。それは、個人心理の立場からではなくて社會生產の視角から見通されねばならぬ。といふのは、およそ社會の存續、その新陳代謝は、この社會生產に條件づけられたものであつて、あらゆる文化は、この社會生產の

土壌の上に咲く花であり、そして各個人の生活は、この社會それ自身の新陳代謝に有效に參與するかぎりにおいてのみ、社會的に保證されるからである。

さて、人類が、かやうな社會生産をなすにあたつて、その基本條件たるものは勞働であるが、その原始生活にあつては、他種族の征服(戰爭)なり、他動物の捕獲(狩獵や漁撈)なりのごときファイティングな諸活動は、果實の採取とゝもに、最も重要な生産行爲の一であり、これによつて得られた捕虜や動物は貴重なる食物を提供したのである。この食料としての捕虜が次第に奴隷、農奴、賃勞働者に發展し、漁撈や狩獵が農業や工業に進化しても、この原始的な闘爭的活動のもつ社會的必要性と機能とは決して失はれず、封建時代をへて今日のブルジョア社會に移つても、それは制度化されつゝ依然として重要な役割を演じてゐる。たゞ、それは、原始生活における場合のごとく直接的な生産行爲ではなくて、間接的な補助的な生産行爲となつてゐるだけの相違にすぎない。

かやうに社會生産にとつて重要であつた闘爭活動が、やがて社會の全員によつて行はれる常住の事柄ではなくて社會の特定の一部分によつて擔當される時折の事實となるに至つて、それは次第に職業化され制度化された。かくて、一旦緩急の場合を慮つて日頃から職業的に訓練しておくために、武藝なるもの、必要が起つたのである。競馬、相撲、流鏑馬、犬追物などにしても、もと〳〵斯かる意味をもつて生れたものにほかならない。それは、要するに、かつては直接に社會生産に干與してゐた一機能が、武藝として特殊化されることによつて、直接的な生産勞働からは一歩退却したのである。

これは、やがて、ファイティング・スピリットそれ自體の自己完成としてのスポーツ趣味を生み出す第一歩でなければならぬ。

四

かやうに一生産行爲が特殊化して武藝となり、やがて當初の存在理由からは全く離れて遊戯や競技として今日のスポーツの形態をとるに至つた充分な意味を理解するためには、吾々はかやうな發展の基礎條件たる社會關係、わけても階級關係に一瞥を與へねばならぬ。

原始共産制時代をのぞき、人類の歴史がつねに階級闘爭の繪卷物の展開であつたことは、人の知るとほりである。狩獵や戰爭は、社會外のものに對する一時的な暴力的關係であるが、階級闘爭は、一の社會内部での階級分裂による永久的な對立抗爭の關係である。

階級社會は、いふまでもなく、生産力のヨリ一層の發展により人類の全員が必らずしも直接に物的生産勞働に從事する必要のなくなつたことを條件とし、大體、次の二つのいづれかの過程をへて發生する。すなはち、一は、社會內において漸次發展した生産の管理者または指導者の地位が次第に世襲化して支配的身分が固定する場合であり、他は、たとへば剽悍なる狩獵民族が平和なる農耕民族を襲つて彼らを奴隷とするがごとき征服關係にもとづく場合である。が、いづれにしても、この優越者階級は、その發展せる形においては、つねに生産手段の獨占者であり、政治上の支配者であり、したがつてまた、單に外敵に對するためのみでなく、對內的意味においても、多數の奴隷、農奴、または賃勞働者を強制的搾取關係の枠內に緊縛しておくために、つねに武備を必要とせざるをえない。かくて、原始社會においては外敵にたいして必要であつた暴力關係は、階級社會においては、國內にも移入され法律關係に變裝されて現はれることゝなつた。

だから、今日までの社會において、武藝は、この支配の一要件であつて、封建社會においては、武士でなければ人でなく、今日のブルジョア社會においても將校團は專ら支配者階級によつて構成される。いづれの國でも、貴族の子弟が職業を選ぶ必要あるときには、大抵軍人となるのも、かゝる傳統の結果にほかならぬ。

かやうな構成を有する社會の文化が、一樣に階級色に染められてゐることは、いふまでもない。

およそ經濟上ならびに政治上の支配者は、同時に文化の支配者でもあり制作者でもある。これ、彼らは、その時代々々において凡そ文化的と呼ばれる一切のものを哺育し享樂しうるところの閑暇（ひま）と餘財とを獨占するからである。たとへば、ギリシャの燦然たる文化は、奴隷勞働の顧慮なき搾取を踏臺とするところの遊惰な奴隷主の手によつて育てられたのであるが、かやうに文化が生産過程に背を向けて生活する閑居階級によつて育てられ指導されたといふ事實は、一方においては、生産勞働そのものを蔑視し、他方においては、生産勞働から離れて浪費的享樂に沒頭しうるといふことをもつて階級的優越のシンボルたらしめるといふ特徴を文化に賦與することゝなつたのである。

いふところの「高尚」、「上品」、「優雅」の奧にはつねに「卑しむべき生産勞働に煩はされることなく生活しうる」といふ階級的誇示の意味が社會的には隱されてゐる。ほそい指は、土臭い野良仕事を思ひ出させないところに、階級的意味をもち、フロックコートは、勞働に不便で浪費的なるのゆゑに、優越者階級

の儀禮的服裝たりうる。

スポーツもまた、一の文化現象として、右のごとき階級的制約から免がれることはできない。スポーツの源が直接的な生產行爲が武藝となつたことに出發することは、前述のとほりである。そして、武力はつねに支配階級にとつて必要な權力手段であつたから、武藝もまた、かゝる優越者のシンボルとして庶民階級の近づくを許されないところであつた。とはいへ、武藝は尙ほ、一定の實用的目的から離れてはゐなかつた。しかるに、社會の生產力の進展とゝもに、ヨリ精銳なる新武器がます／＼生產され、その結果、肉體的技能に專ら依存する從來の武術の意義は大いに失はれることゝなつた。かくて、武藝は全くその本來の意義から離れて、非實用的な單なる趣味としてのスポーツとなつて、そのファイティングな形骸のみを保存し、全く新たな社會的內容を盛られることゝなつたのである。

五

スポーツは、しかし、いかに新たなる內容を盛られたとはいへ、本來それが肉體的技能を競ふことを基礎とする點には變りがないから、他の骨董や庭園や茶の湯などの趣味と異なつて、何らか生產的な、少なくとも實用的な遺臭を存してゐることは爭はれない。だから、武藝のごときも、最上流階級たる大宮人によつては決して行はれなかつたのである。したがつて、武藝がスポーツに發展して一切の實用性が剝奪されたにしても、なほ、それは、あくまで何らかの實踐的な活動を要素とするがため、競技者みづからが、それによつて自己の社會的優越性を表示しうるためには、その競技自體が甚だしく浪費的であるか古典的でなければならない。たとへば、ゴルフやフォックス・ハンティング、または蹴鞠のごとき場合が、それである。前二者が如何に浪費的なるかは、いふを俟たぬ。蹴鞠が上流階級の娛樂となつたのは、その起原など全く見失はれた形において先進文化國たる支那から渡來した古典的遊戲だつたからにほかならない。

要するに、スポーツは、いかに變容された形態においても、つねに生產勞働の實踐的態度と何らかの內面的關聯を有するから、スポーツそのものが必らずしもスポーツ・マン自身の階級的優越を表示しない場合が生じうる。たとへば、わが國技における力士のやうに、スポーツ・マン自身は全く職業的勞働者として社會的にも低い地位を與へられてゐる。この場合、競技そのものを趣味として享樂するものは、有閑階級人たる觀客のみであつて、スポーツ・マン自身ではない。スポーツによつて表現される階級誇示的意味の重點は、この際、明かに働くものから見

るものへ』移動してゐるのである。

それは、あたかも今日の藝者みづからは哀れなる勞働者として最劣等の社會的地位を占めながら、彼女を弄ぶ遊蕩階級にとつては、洗煉された浪費的遊興それ自身が一つの階級誇示的な儀禮でさへもあるのと同じである。この場合、藝者の華美な浪費生活が決して彼女みづからの階級的地位の優越を示すものでなくて、彼女の飼主たる旦那の社會的地位のシンボルにすぎないことは明かであるが、これは、彼女が旦那の代理消費者にすぎないからである。かやうな事實は、普通の家庭にも常にあることで、セメテ若い妻君なり娘なりだけにでも世間並の服裝をさせておくといふことによつて、自己みづからの僅かな社會的誇りを維持しやうとする沒落期のプチ・ブルも決して少なくはない。

かやうにして、スポーツ・マンとスポーツ・ファンとの分化もまた生じ、その結果、やがて、スポーツを享樂するに必らずしもスポーツ・マンは必要でないといふことになる。競馬は、かゝる進化途上の一段階を示すものであるが、鬪牛、鬪犬、鬪鷄などにおいては、すでにスポーツ・マンはスポーツ・アニマルに代へられてゐる。

六

しかるに、かゝる傾向とは反對に、今日の多くのモダン・スポーツにおいて競技者自身がます〳〵重要性をおび、競技者の地位もまた甚だ高く評價されつゝあるのは何故か？

それは、要するに、モダン・スポーツが殆んど例外なく學生層の餘技として行はれるからであり、したがつて、スポーツ・マンの社會的地位は、彼が競技者であるといふことよりも、むしろ支配階級の一環としての學生であるといふことに由來する。この點において、近來かまびすしい問題となれるモダン・スポーツは古いスポーツと本質的に區別されるのであつて、たとひスポーツそのもの、技術的内容は同一であつても、社會的には全く異なる性格を荷つてゐる。すなはち、文化的イデオロギーの最も選ばれたるチャンピオンとしての學生たる身分が、スポーツ・マンたる彼の社會的地位を、力士や鬪犬のそれとは全く異なるものたらしめるのである。

スポーツ・マンのよき苗床が學生層であるやうに、スポーツ・ファンもまた學生層、または、インテリゲンチアに全部の基礎をおく。

かくて、今日のモダン・スポーツを社會的に理解するにあた

つては、これはスポーツ・マンの方から見ても、またスポーツ・ファンの方から見ても、それが明かにインテリゲンチアを主人公として仕組まれてゐることを見逃がすことはできない。

しかし、インテリゲンチアを主人公とすることは、ひとりスポーツに限られたことではない。およそ今日「モダニズム的」と呼ばれるもの、尖端生活者は、すべて彼らを中心要素とするものである。

しからば、何がインテリゲンチアをして、さうさせたか？

七

こゝで一應モダニズムについて考へて見る必要がある。

何がモダニズムであるか、といふ詮議だては止めやう。今日モダンとかシークとか形容詞のつく一切のものを綜括してみれば、そこに現代人の一つの生活態度、生活様式を容易に捉へうるであらう。

モダニズムが決して生産圏から生れたものでないことは明かである。それは紡績女工から生れたものでもなければ、旋盤工から生れたものでもない。それは、要するに、デパートとカフエーと而してアスファルトの舗道から生れたところの、街頭消費生活者群の生活態度であり、しかも、その群れの根幹をなすものは、インテレクチュアルな新プチ・ブル階層たるサラリー・マンや、ジャーナリストや、その他の文筆勞働者にほかならぬ。

試みに、ギンザへ、新京極へ、そして道頓堀へ行け！　ラウドスピーカーとジャズバンドとの、始めも終りもない旋廻的な急テンポの喧騒裡に、旅煙草を横ざまに啣へたセイラー・パンツや、目の縁を眞紅に塗つたおカッパが、酒――ピストル――映畫――リーグ戰――軍縮――君戀し――檢擧――不景氣――實動――強盗――など、連絡のない斷片語をしやべり散らしてゐるのを見るであらう。彼らはアテもなく、はしやぎ、唄つて飲んでゾメく。

スピードと、エロティシズムと、ナンセンスと、そして饒舌と喧騒と哄笑。――

モダニズムは、たしかに一面、ギリシャ主義の回復であり肉の解還である。が、しかし、靈肉の調和された統一の姿が、今日のモダニズムの姿では決してない。それは調和の諧音であるよりは、反對に、解放された一切のもの、遂に安住の地を見出しえざるデスペレートな喧囂である。

八

かやうなモダニズムは如何にして醸し出されたか？

私は、こゝで資本主義の分析を試みる餘裕はない。けれども、今日、世界の資本主義が前古未曾有の諸矛盾に悩みつゝあることは明かである。ロシアは世界の巨大な部分を資本主義圏から取りのけた。資本主義圏内においては、常設の國際聯盟や臨時の軍縮會議によつては彌縫されうべくもないほど國際政局の矛盾が激化されてゐる。また各列強の資本主義的膨脹の條件たる植民地は殆んど無くなり、かへつて矛を侵略國に向けて蹶起せんとしてゐる。各國内にあつては、それ〲プロレタリアートが異常な興奮を示してゐる。かやうな政治的窮境に立つ「資本」は、さらに其唯一の榮養素たる利潤の實現不能に逢着しつつある。これらの諸矛盾の間にあつて、「資本」が自己を保存せんとする決死的本能は、産業合理化となつて現はれた。

この合理化の鐵鞭を加へられて無數の失業者を都鄙に放ちつつある「金融資本」は、他方においてはまた、同時に、資本家そのものをも大部分不用ならしめたのである。資本家は、いまや、工場や商店の事務室から妾宅に退いて利札を切ることのみを唯一の職能とすることになつた。この職能は、社會そのものゝ再生産過程にとつては、人體における盲腸と同じく有つて益なき無用の長物である。

かやうに安逸を惠まれた彼の社會的地位も、しかし、決して安定せるものではない。昨日までは百萬長者として疾驅した大株主も、一朝財界の動亂なり職工のストライキなりに遭へば、たちまちにして其の生活の基礎たる財産が何分の一かに縮小されたことを發見しなければならぬ。彼は、日々、その日の相場表によつて自分の生活元本を計算しなほさねばならぬやうな不安な基礎の上に生活してゐるのである。――巨大資本家にして既に然り。カルテルに呑まれつゝある弱小資本家の生活の如何に不安なるかは、今更いふまでもないであらう。

かゝる不安のうちにある彼らの生活は、勢ひ熱病的な症狀を呈する。今日は豪壯な別莊に骨董品を集め、明日は庫を開いて賣立に出すといふあわたゞしさが、彼らの全生活を特長づけてゐる。

かやうな社會生活の不安と焦燥は、最も敏感にプチブル・インテリゲンチアの生活に反映する。

今日、インテリゲンチア層の數は非常な勢をもつて増加しつつある。かつては中小資本家の子弟として、その生活を保證せられてゐたものも、今やサラリーマンの列に急速に墜落して來る。かつては結婚取引によつて容易に生活しえた女性も、今や職業婦人として街頭を濶歩しなければならぬ。

しかし、斷末魔の金融資本が、ひとりインテリゲンチアにの

み親切であるにすぎない。今までブルジョア的な傳統とブルジョア的なイデオロギーとに甘やかされて來た若き彼らは、その華やかな過去のゆゑに驕慢であり、その若さのゆゑに敏感であり、その急速な沒落のゆゑに悲慘である。

九

かやうな若きインテリゲンチアは、今日の學問によつて慰められることはできない。

學問自體が今日、甚だしく不用化されつゝあるのだ。新たなる發見發明のパテントは、大資本の手に握りつぶされて暗から暗へ葬られ、現存する技術の修得も、その適用さるべき機會を生産制限によつて永久に封じられてゐる。

社會諸科學においては、學問は狹隘な學者ギルドの趣味として育てられ、學者は日夜營々として、そも〳〵幾匹の駱駝が針の孔を通過しうるや、神樣にお臍ありや否や、を瞑想し探求する。これによつて學者ギルドの獨占的地位が保證されると同時に、兼て學問の for its own sake の發展が完成されるのである。

かやうな for its own sake のラビリンスの頂點に登りつめた聖なる學問にたいして、他方には、下界のどよめきに殘酷な批判のメスを擬する新興科學が擡頭しつゝある。しかし、若きインテリゲンチアが其の不安と焦燥とを訴へやうとするとき、聖なる學問への通路はギルドマンにのみ開かれ、批判への道には常に荊棘が積まれてゐる。かつての青雲の志は、いまや底知れぬ不安と眩暈とに化し、靜かに前途を想望するには、あまりにも自分の置かれた地位が不安であり混沌である。

こゝにおいて、大多數の學徒は、この焦燥から逃れんがために、ひたすらにスポーツへ、カフェーへ、映畫へ、そしてジャズへ、レヴューへと、狩り立てられるやうにセンジュアルな、エロティックなナンセンスの盛り場へ泳ぎ出る。それは、およそ學問からも實社會からも最も懸け離れた世界である。この狂熱世界こそは、追はれたインテリゲンチアの逃避すべき最後の約束の地でなければならぬ。そして、このカナンの地において、彼らは、その鬱積された内心の不安と焦燥とを空中に放電する。その青白いスパークの、爆發的な、灼熱的な、そして無方向で偏情的な閃光こそ、まさにモダニズムの姿なのである。

一〇

かやうなモダニズムの一表現形態として、スポーツのもつ社會的意味もまた、おのづから決定されてゐる。

スポーツは、それが今日のモダニズムの洗禮を受けるまでは、賭博や淫樂に飽滿せる浪費生活者の快よいリフレッシュメントにすぎなかつた。イギリスの貴族が、お茶代りにゴルフを弄び、オックスフォードやケンブリッヂの大學生が、浪費的な『ノーブル・カルチュア』の一つとしてラグビーやボートの競技に熱中するとき、そこには悠揚迫らざる餘裕があつた。

しかし、かゝる眞に餘技的なスポーツは、いまやモダニズムの洗禮を受けることによつて全く生活體系とは切斷された其れ自身の論理を完成するに至つた。學問が餘技となり、餘技が本業となつた。そして、スポーツは轉形期の全社會不安を總身に荷ひ、これを分秒のレコード爭ひのうちに發散させるといふ重大な社會的任務を引受けることゝなつたのである。

これは、要するに、このスポーツの溫床がインテリゲンチア階層であり、そして、この階層は、その置かれた地位と教養とのゆゑに、文化の最も效果的な保持者にして傳播者であるからにほかならぬ。いまや、學徒の使命は、スポーツ化せる科學から、科學化せるスポーツへと移行した。科學が、それ自體の存在理由を失つてギルド的特權者の玩弄物となつたとき、過去の文化の尖端に行き悩んだ若き學徒の自ら作り出した科學がスポーツである。が、しかし、この科學は、社會的不安の自嘲的爆發にすぎないから、いふまでもなく、新興文化への線上を走るものではありえない。それは、漂然とセイラーパンツを穿いてスタンドに立ち、翌朝のスポーツ・ニュースを拾ひ讀みして夕方カフェーで放送することをもつて終る。が、それは不安を哄笑に變歷したといふ點において、われ／＼を明かにする。

二

かやうな今日のモダン・スポーツの姿は、かの十九世紀末のデカダンスが内へ内へと内攻して遂にそこにインディヴィデュアリズムの壞たれたる像を見出し、憑かれたものゝごとくバーからバーへと『人生』を捜し求めて歩いたあの悲慘な表情に比して、何といふ明かさであらう！　この明かさのうちにこそ、今日の轉形期的社會相は深刻に彫り込まれてゐる。

あのデカダンスも今日のファンの現象も、その基調は同じ世紀末的な不安と焦燥とでありながら、前者にあつては陰鬱なニヒリズムとなり、後者にあつては快活なモダニズムとなつたのは、明かに、その母胎たる社會的諸事情の推移を物語るものでなければならぬ。

インディヴィデュアリズムとリベラリズムとのイデオロギーを醞釀した資本主義前期のレッセー・フェールと自由競爭の制度は、十九世紀末葉にいたり其の内部的矛盾のため大なる破綻に直面

した。いかに此の破綻を彌縫すべき乎が、『産業資本』の最大の惱みであつた。この惱みがインテリゲンチアのイデオロギーに反映したものが、かのニヒリスティックなデカダンスにほかならなかつた。それは、いはゞ産業資本の白鳥の歌であつたが、しかし、この白鳥は不死鳥でゝもあるかのやうに、再び『金融資本』として猛然と立ち上つた。――虛無的なセンチメンタリズムから蟬脫し朗かな大膽さをもつて肉を歌つたホイットマンの詩のごときは、まさに此の金融資本の曙の讃歌でなければならなかつた。

しかし、この雄々しくも歌つた金融資本がカルテル＝トラストの世界的バンドによつて演奏する帝國主義の行進曲は、多くの雜音から成り立つてゐた。そして、この行進曲は、つひに今日のごとく縱に橫に對立抗爭の亂調子となつた。戰爭の危機、失業の洪水、世界的恐慌、等々は、瀕死の資本――資本の最後の形態たる金融資本――の苦悶の象徵でなければならぬ。

資本はもはや資本としては決して再び扮裝を新たにして生れ出ることはできない。こゝに、デカダンス時代に數倍する深刻な惱みがあると同時に、更にまた新たなるものが生れ出るといふ强い確信が歷史の進路を照らしつゝある。この死にゆく資本と生れ來る未知の世界との間に行き惑ふインテリゲンチアが、その身に迫る不安と焦燥とを、あてどのない旋廻運動において放任しつゝあるモダニズムは、いはゞ金融資本の送葬の行列であるが、それは右のごとき光輝ある歷史的展望のゆゑに、かつての産業資本の輓歌たるデカダンスとは、甚だしく其の外貌を異にし、あたかも斷崖上に嬉戲する幼兒の無邪氣さのごとき朗かさをもつのである。

この朗かさは、しかし、噴火山上に舞踏するものゝ朗かさである。

それは今日の異常なる轉形期の社會を押し進めつゝある手を緩めしめることによつて、むしろ社會進化の車輪を逆轉せしめんとしつゝあるものゝ力强い防衞者として作用する。『フェア・プレー』や『スポーツマンシップ』は、この作用を圓滑に行はしめるための儀禮である。『思想善導』に熱心なる愛國の士が、オリンピックや神宮競技に費用を惜しまない理由を理解すべき鍵もまた、こゝにある。

スポーツは、要するに、ブルジョア文化の崩壞期に際し、グラウンドの一角に『無批判現地保護』の堡壘を構へ、そしてエロティシズム、ナンセンス等々の速射砲を亂射しつゝ、モダニズムのスモーク・カーテンの陰に隱れて瀕死の『資本』の狂亂を援護するといふ點に、その社會的意味をもつてゐるのである。

地方新聞論

簗田欽次郎

一　地方新聞は何處へ行く?

「地方新聞は何處へ行く?」これは相當古くから叫んだ人もあつたが、深刻なる不景氣な世相に際し、殊にこの叫びが強く、それが著しく悲調を帶びて來た如くに傳へる者がある。果してその通りか?

現今の社會は新聞文化の社會といつてい丶程に、新聞との關係が深くなつて來た。自分が新聞人なるが故に、特に[illegible]又特にさう強調するのではない。實際において、新聞なくして文化なく、生活なきまでに新聞も發達し、社會人も新聞を理解し、これに關心をもつに至つてゐる。しかし、或る特殊な何等かの關係を有するもの以外の一般人は、新聞に關する問題がどうあらうと、たいして氣にも留めない。況んや自身が住んでゐるない土地の新聞については、それが何處へ行かうと、恐らく風馬牛であるのが常であらう。しかも現今の一般社會はまだ地方新聞に對して殊に興味を感ずるまでに新聞眼が發達して居らぬ。從つて一般社會人の地方新聞觀は極めて漠然たるものである、だが、漠然ながら今日の地方新聞が、中央大都市の大新聞に對抗して血みどろの競爭を續けて居るといふことだけは大體に於て了取して[illegible]考へられる。從つて「地方新聞は何處へ[illegible]容易にこれを了解し、又多少の興味をこれに繋いでゐると考へらる。これが一歩新聞人若くは直接地方新聞に何等かの關係を有するもの丶間に進むとそれは興味以上の問題であり地方新聞に取つては痛切なる生存上の大問題でありこれがわが全社會の機構上に至大の關係を持つに至るかも知れぬのである。然らばこの問題が如何やうに叫

ばれつゝあるか、その代表的なもの二三を選拔して見ると、

「朝に一驛、夕に一城を拔くと云つたやうな資本主義新聞の息をもつかぬ地方への猛襲と進出とは地方新聞に取つて一大脅威であるばかりでなく時々刻々其死活を制せられつゝある。陰慘極まるこの受難苦に血みどろの姿となつて惡戰苦鬪するの有樣は寧ろ壯烈と評するよりも悲痛の文字を以つて彩るに十分なりと稱すべきである。その凄き侵略の形相は地方新聞をして絶えず破裂せしむる程度に其心臟を鼓動せしめて居る。資本主義新聞の脚下に蹂躙され征服されて朝に夕に亡び行く地方新聞の受難苦生活苦なるものは眞に血と苦しみの奮鬪的肉彈史と謂はねばならぬ。かくして地方新聞の行方は果して何となるであらうか。この問題の解決こそ現在の社會に於て解し難き最も大きな謎ではあるまいか。」

これは地方新聞の編輯局長によつて文字で表現された叫びの第一聲である。

「長く地方新聞に從事して居る者の眼から見ますと將來中央の大新聞と地方新聞との競爭は餘程注目を要する大問題にならうと思はれます（中略）豐富なる資本と大規模の經營法を以て堂々と地方を征服すべく劃策する上に交通運輸機關の普及發達によつて地方新聞よりも寧ろ早く配達し得る土地も少くないことゝなりました、猶之に加ふるに中央大新聞は地方の要所々々に支局を設け地方版を作つて戰ひますので傷に受くる地方新聞の影響は容易ならぬものであります。」

これは地方新聞の主筆によつて放たれた告白である。

「澎湃たる資本の惡魔がのしかゝつてくる以上之に對し如何なる對應策があるか、同じ新聞でも大新聞と中小新聞との爭鬪の形式が變ると共に中央の諸新聞と地方新聞との競爭も之に準じて行はれる。まだ地方金融地方財政が封建時代のそれのやうに地方權力を中心として支配されてをるが、今後はさうは行かなくなる。地方金融が中央金融の支配を受くるやうになれば地方新聞に革命的分散が行はれるやうになるのである。さうした狀勢は農村の疲弊と共に躍進的に招來されるのであるが、地方新聞經營者はこの大つなみに對し今より深甚の考慮を廻らすにあらざれば取返しのつかぬことゝなるであらう。かうしたことは三年五年以內に直に到來するとは思はぬが、地方經濟に恐慌時代の到來し飛行機運搬、交通網の完成と共に封建思想は著しくその跡を絶つから案外早く飛火するかも知れない。東京、大阪の近接地に地方新聞の存立難を見つゝある現狀が有力に證明してをるではないか。」

これは第三者の立場にある人が地方新聞へ呼びかける警鐘の

一節である。

「經營上から觀じ來る時は必ずしも樂觀を許さぬ事情の極めて深刻に伏在することを否定し能はぬを遺憾とする。それは大都會の有力な新聞の對地方的經營が日に月に大を加へ行くことである。東京なり大阪なりの有力紙が今やその所在の都市内に於てその戸數と比例して濃密に――或は充溢ともいふべきまでに讀者を把握し得たことは何人も認むるであらう如く、この上急速の擴充は先づ以て困難と見ることが大體に於て至當であらうかに思はれる。こゝに於てその發展力は何うしても地方に向けられねばならぬ。都會有力紙は地方紙との販路の競爭を出來得べきだけ避くることが聰明なる遣方であることを知つてゐる。地方紙を壓迫せんとするにあらずして寧ろ並行せんことを希望してゐる。地方人に對して都會紙と地方紙との並讀を要求せんとしてゐる。けれども近來の打續く經濟界の不振は概して地方の富を疲弊せしめつゝある等の事情から過去の好況時代に比し勢ひ並讀率の減退を免れぬ。それには地方人の知識慾が兎に角都會紙の購讀に傾き易い事情もあり旁ゝもつて地方紙の晏然たるを許さぬことゝなるのである――尚且交通機關――都會紙の輸送機關が進展すればするほど地方紙の安定率は脅されねばならぬ。しかのみならず、地方紙には今一つ大きな暗面が横はつてゐる。それは財界不況に處する廣告主の廣告料整理問題である。都會紙中影響を蒙るものも少くなかつたが、取分け地方紙の廣告減收は可なり手いたきものであるやうに聞く。勿論卓越せる地方紙に於てはさまでないとするもまた全く風馬牛相關せずとはなし得ぬであらう。」

これは都會中央紙の幹部によつて書かれたものゝ一部である。斷つて置くが、これ等の代表的の感想は皆地方新聞の將來に處する對策を講究せんが爲めの前提であつて、必ずしもその所見の如くに悉くがなつてしまうと云つたのではない。が、これによつて地方新聞に對する議論、見方の内にどんなものがあるかは略ゝ推察し得べしと考ふ。こゝにまた異つた見方をしてゐる者がある。

「資本主義的に發達した大新聞と云ふものは商業主義であるが故に、機械主義である。機械主義であるから人間的であり得ないと云ふことになる。すべてのものが機械の一部分である。新聞記者は社會事情を知る補聽器であり、そのニュースを各會社に放射するまでの活字や輪轉機と同一の役割をなすものにすぎないことになつてゐて、即ち個人の力と云ふものが認められてをらない。大新聞社に於ける新聞記者の仕事はま

すく事務的となり機械的となつて來るために溌剌たる個人の力の現はれがなくなり、何れも同じやうな新聞となり獨自の特色といふものを失ふに至る。大新聞の指導的立場の沒落と共に、此處に地方新聞として進むべき一つの途がある——大新聞は地方版なるものを出して居るが地方版は決して地方新聞に對抗し得るものでなく、また地方主腦者は半交際官としての人間であつて記者として地方新聞の上をゆくと云ふ人物は稀である。大衆は遠隔の事件よりも近距離の事件に對して最も興味を持つ。ロンドン會議よりも隣の犬が子を生んだことに對してより以上の興味を感ずる。——地方新聞として力強い條件は地方人は都會人のやうに神經過敏でなく、センセーショナリズムに容易に動かされることのないと云ふことである。すべてが地味である。地味と云ふことは質的によいものを求めると云ふことである。自分の町の村の出來事を探す、地方新聞としてこゝをわらう。」

これは地方新聞の青年記者が書いた彼の意氣抱負である。

「所謂新聞の經營難とはその當事者の常套語であつて、成功者の爲めには自ら誇りとするの言葉であつた。新聞經營は必ずしも失敗すると限つたわけでなく營業として相當の收利を見られぬことはない。——何れの國の新聞でも地方分權主義に支配せられぬものはない。大都會に發行する一流の新聞たりとも全國を統一するの權威はなく、地方に侵入して地方新聞の繩張を蠶食するのは所謂大新聞の方針らしいと思はるれど、地方の讀者は地方の出來事を知りたがる事情もあり、且、通信機關の進歩したる今日では内外何れのニュースでも中央地方相通じて其翌日の新聞に掲載せられ、都會の一流紙で候だと地方新聞を壓倒する譯にはゆかぬ。都會紙に對立して地方紙も油斷なく向上を遂げつゝあるは否定し得られぬものがある。新聞事業に於て中央集權制の無制限に實現し得られぬことは著明の事實となつてゐる。殊に廣告依賴者として地方新聞の無視されないのは其歴々たる證據と見るを妨げまい」

之は地方新聞經營者が將に實行しつゝある自己の所信を表白したものゝ一節である。

「大阪新聞は黑點をもつ太陽であつて、名古屋以西の新聞界を日照りにしたり、不作にしたりする——けれども地方新聞がこの太陽熱のために自ら成長させられることあるは否定出來ない——刺戟を敏感に受け容れ鋭い意識が強烈に動き紙面を改善して對抗することゝなる。今日地方新聞として有力視

せられてゐる社は、新聞營業化に早く目覺めたために地理的、政黨的その他の條件は寧ろ第二義的である。」

これは地方新聞の經營者が不撓不屈、大馬力をかけて奮鬪しつつ高調したる、彼の行進曲である。

(二) 地方新聞の現勢

地方新聞、又は地方紙、この言葉は嚴格にいへば意味をなさぬ。地方紙に對する中央紙と稱するものも、嚴重にいへば地方紙である。東京にあるものは東京地方紙であり、大阪にあるものは大阪地方紙である。裁判所も東京地方裁判所、大阪地方裁判所、福島地方裁判所、熊本地方裁判所と云ふではないか。假りに東京を中央政府の所在地として、この地で發行するものを中央紙といふならば、大阪で發行するものは中央紙の部類には入らぬわけである。しかし今はこれを論ずるが目的でないからこゝでは東京の新聞と大阪の二紙を除いた其他のものを地方新聞と稱する現時の通念に從つて置く。

この中央紙と地方紙との發達、變遷、消長の跡竝びにその現勢について調べて見るに、國運の發展、文化の向上と新聞の發達とが必ず相伴ひ並行して進むところに多大の興味を感ぜざるを得ぬ。歐洲大戰後の新聞の發展は殊に著しきものがあるが、單にこれを數の上から見ても、最近十年間即ち大正七年から昭和四年までの間に、全國に於て約七千を增加してゐる（これは新聞紙法の支配を受けて居るもの丶數）。かくの如き急激の增加率は我國のいまだ經驗せざるところである、さかのぼつてその前の十年間、即ち明治四十年—大正七年間の增加は約千であり、更に前にさか上つて明治三十年—四十年間の增加は約千五百である。即ち

明治二十年末	現在數	四七一
同　三十年末	同	七四五
同　四十年末	同	二、二九三
大正七年末	同	三、一二四
昭和四年末	同	九、一九一

で、今や九千百九十一に達してゐる。來年は恐らく一萬と云ふ數になるだらう。こゝにちよつと斷つて置きたいのは、右は月刊、旬刊、日刊その他新聞紙法により發行するもの丶全部を包含するので、約九千二百といふ驚くべき數も、單に新聞紙法の支配を受けてゐるといふに過ぎない。こゝに新聞紙について論ずる以上、右のうち幾何の新聞紙が論題となるのであるかそれを定め置く必要がある。常識的な考へ方によれば、新聞紙とは時事即ちニュースを掲載することを大要件とする、從つてこれは日刊に限らるゝものとすべきであらう。僅かな例外は認めら

れるであらうが、我等が常に一口に新聞紙といふは即ちこの時事を掲載する日刊新聞の謂ひである。この日刊新聞が最近十年間における逐年増加の跡を見ると、

大正七年末　現在數	四九三
八年末　同	五九二
九年末　同	六二三
十年末　同	六五二
十一年末同	六九〇
十二年末同	七六二
十三年末同	七九三
十四年末同	八二六
昭和元年末　同	八六一
二年末　同	九一六
三年末　同	九六六
四年末　同	一、〇二〇

即ち約五百の増加を示して居り、昭和四年末の總數九千百九十一に對し、日刊新聞は約一割の一千二十となつて居る。この日刊新聞紙一千二十がどんなに各地方に分布されて居るか、その狀態を示せば左の通りである。

東　京　府	百七十
大　阪　府	六十九
關東—六縣	六十九
東北—八縣	百三十七
東海—五縣	百四十一
北陸—三縣	三十五
關西—一府四縣	百十
四國—四縣	三十
中國—五縣	六十
九州—八縣	百三十六
北　海　道	六十四

しかるに、日刊新聞の悉くが必ずしも一般に知られ一般に讀まれてゐるのではない、例へば右表に示す如く、東京府下に百七十の日刊新聞があるも、日常多くの人の目に觸れてゐるものは其内の十數紙に過ぎない。故に全國一千二十の日刊新聞の内から比較的多數の讀者を有するものを撰拔して見ねばならぬ。日本に於ては各新聞の讀者數を知ることは殆ど不可能であるから、大體の目安をその社の設備に置く外はない。印刷機械たる輪轉機の設備を有せざる新聞紙は、こゝに研究の對象とする譯にゆかぬ、故に輪轉機一臺以上を有するものを右の一千二十社から抽出するのが先づ妥當であると考へる。而してかくして得たる數が二百三十二社である、之を一覽表として左に掲出する。之によつて現下我國新聞紙の狀勢がほゞ俯瞰出來るのである。

全國日刊新聞社一覽表
輪轉機一臺以上を有する

		社數	組織	政黨關係	資本金	輪轉機數
	東京府	一九	株式一〇、合資一、合名一、匿名一、個人五、其他一、	中立一六、政友一、不明二、	三一、四七五、〇〇〇円（不明五社）	一一二（内高速度四五）
	大阪府	二三（内一社八設備共用）	株式七、合資三、合名一、匿名二、個人一〇、其他一、	中立一六、政友一、不明六、	二一、一六〇、〇〇〇（不明八社）	九二（内高速度四一）
關東	神奈川縣	四	株式一、匿名一、個人二、	中立二、不明二、	四五〇、〇〇〇（不明一社）	七
	埼玉縣	一（設備共用）	個人一、	中立一、	…	〇
	千葉縣	一	株式一、	中立一、	五〇、〇〇〇	一
	茨城縣	二	株式一、個人一、	中立一、不明一	七〇〇、〇〇〇（不明一社）	四
	群馬縣	四	個人四、	中立一、不明三	六〇〇、〇〇〇（不明一社）	五
	栃木縣	二	株式一、個人一、	中立一、不明一	三〇〇、〇〇〇（不明一社）	三
東北	福島縣	四	株式一、個人二、其他一、	中立三、不明一	二〇五、〇〇〇（不明一社）	六
	宮城縣	三	個人三、	中立一、不明二	三、〇〇〇（不明二社）	一〇
	岩手縣	二	株式一、合資一、	中立二、	二〇〇、〇〇〇（不明一社）	三
	青森縣	二	株式一、個人一、	中立一、不明一	一〇〇、〇〇〇（不明一社）	三
	山形縣	三	株式三、	中立二、民政一	二〇一、七〇〇	五
	秋田縣	三	株式二、個人一、	中立二、政友一	五二〇、〇〇〇	四
	新潟縣	九	株式四、合資一、匿名一、個人三、	中立四、政友三、民政二、	九一〇、〇〇〇（不明三社）	五
	長野縣	八	株式七、個人一、	中立五、民政二、政友一、	六七〇、〇〇〇（不明一社）	一二
東	愛知縣	五	株式一、株式合資一、合資一、個人三、	中立四、民政一	二、七二〇、〇〇〇（不明一社）	三〇（内高速度）
	山梨縣	五	株式二、個人三、	中立五、	二五〇、〇〇〇（不明二社）	八（内高速度六）
	靜岡縣	三	株式二、株式合資一、	中立二、政友一	四五〇、〇〇〇	五

	岐阜縣	二	個人二、	中立二、	二五、〇〇〇(不明一社)	三
	三重縣	一	株式一、	中立一、	三〇、〇〇〇	三
北陸	石川縣	四	株式一、個人三、	中立四、	五五、〇〇〇	六
北陸	福井縣	一	株式一、	中立一、	四〇、〇〇〇	一
北陸	富山縣	六	株式三、組合一、個人二、	中立三、民政一、不明二	五八五、〇〇〇(不明二社)	一〇
關西	滋賀縣	一	個人一、	中立一、	一五〇、〇〇〇	一
關西	京都府	五	株式三、匿名一、個人一、	中立四、不明一、	九七〇、〇〇〇(不明一社)	一二(内高速度三)
關西	兵庫縣	七	株式七、	中立三、不明四、	一、一三〇、〇〇〇(不明一社)	一八(内高速度四)
關西	和歌山縣	四	株式一、合資一、個人二、	中立二、不明二、	二〇六、〇〇〇(不明一社)	四
四國	徳島縣	二	株式二、	中立二、	三七〇、〇〇〇	二
四國	香川縣	二	株式一、個人一、	中立二、	八〇、〇〇〇(不明一社)	三
四國	愛媛縣	五	株式四、個人一、	中立二、不明三	五一〇、〇〇〇	九
四國	高知縣	二	株式二、	中立一、不明一、	二五〇、〇〇〇	五(内高速度一)
中國	鳥取縣	三	株式三、	中立一、民政一、政友一、	四五〇、〇〇〇	三
中國	島根縣	二	株式一、個人一、	中立二、	四五〇、〇〇〇	四
中國	岡山縣	三	株式二、個人一、	中立三、	一、一〇〇、〇〇〇	九
中國	廣島縣	一〇(内二社設備共用)	株式二、合名二、個人六、	中立四、政友二、不明四、	八四〇、〇〇〇(不明四社)	一四(内高速度一)
中國	山口縣	四	合資一、個人三、	中立四、	一三〇、〇〇〇(不明二社)	六
	福岡縣	四(内一社設備共用)	株式一、合資一、個人一、其他一、	政友二、民政一、中立一、	一、三〇〇、〇〇〇(不明二社)	一四(内高速度四)
	佐賀縣	二	株式一、其他一、	政友一、不明一、	一五〇、〇〇〇(不明一社)	三

九州 長崎縣	五	株式二、合資一、個人二、	中立四、民政一、	一三〇、〇〇〇（不明二社）	七
九州 熊本縣	四	株式二、個人二、	民政一、政友一、中立二、	三二〇、〇〇〇（不明一社）	一〇
九州 宮崎縣	五（内三社設備共用）	組合一、個人四、	中立五、	（不明五社）	二
九州 鹿兒島縣	四	株式一、組合一、個人一、其他一、	政友一、不明三、	五五〇、〇〇〇（不明二社）	七
九州 大分縣	三	個人三、	中立一、民政一、政友一、	（不明三社）	六
九州 沖繩縣	一	個人一、	不明一、	三〇、〇〇〇	一
北海道	一〇	株式三、合資一、匿名一、個人五	中立一〇	一、九六〇、〇〇〇（不明一社）	二五（内高速度四）
樺太	三	個人三、	中立二、不明一、	八八、〇〇〇（不明一社）	
臺灣	三	株式三、	中立三、	一、一二〇、〇〇〇	七
朝鮮	一五	株式四、合資三、合名一、個人五、組合二	中立九、不明六、	三、六八〇、〇〇〇（不明一社）	二八
滿洲	六	株式三、個人二、其他一、	不明六	一、五四〇、〇〇〇（不明一社）	一一
内地計	二〇五（内八社八設備共用）	株式八九、株式合資二、合資一一、合名四、匿名七、個人八三、組合三、其他六	中立一三三、政友一七、民政一二、不明四三	七二、三七〇、七〇〇（不明六二社）	五一一（内高速度一〇九）
樺太臺灣朝鮮滿洲合計	二七	株式一〇、合資三、合名一、個人一〇、組合二、其他一、	中立一四、不明一三、	六、四二八、〇〇〇（不明三社）	五〇
總計	二三二（内八社八設備共用）	株式九九、株式合資二、合資一四、合名五、匿名七、個人九三、組合五、其他七	中立一四七、政友一七、民政一二、不明五六、	七八、七九八、七〇〇（不明六五社）	五六一（内高速度一〇九）

（備考）本表は「新聞總覽昭和五年版」に掲載された數により調製したるもので組織は株式會社、合資會社の如き區別を示したるもの、政黨關係は中立と稱する中にも純中立とそうでないのがあるようだが、今は輕く原本の儘によつて置く。

この一覽表が物語る最も注目すべき點は、地方新聞の數は中央紙（東京大阪）のそれよりも多いが、設備に於て輪轉機數——即ち新聞紙製作能力は地方新聞の方が少ないことと、東京、大阪を中心とする近縣に於ては新聞紙が殆どないか、又は極めて少數になつて居る事實である。なほこれと對照せしむべく、二十年前の明治四十三年のそれを掲げて、此の間にどんなに變遷

をなしたかを示さん。

明治四十三年に於ける輪轉機を有する日刊新聞社一覽表

		社數	組織	輪轉機數
	東京府	一七	合資六、合名二、匿名二、個人七	四五
	大阪府	四	合資三、合名一	九
關東	神奈川縣	二	匿名一、個人一	(不明二社)二
	茨城縣	一	合資一	一
	栃木縣	一	株式一	一
東北	宮城縣	一	個人一	二
	長野縣	一	株式一	一
東海	山梨縣	一	株式一	一
	愛知縣	四	株式一、合資一、匿名一、個人一	五
	三重縣	二	個人二	二
關西	京都府	一	合資一	二
	兵庫縣	二	個人二	二
四國	高知縣	一	組合一	一
中國	岡山縣	二	匿名一、個人一	二
	廣島縣	二	個人二	三
	山口縣	一	個人一	一
九州	福岡縣	二	合資一、匿名一	五
	熊本縣	二	個人二	三
	北海道	二	合資一、不明一	(不明二社)
	內地合計	四九	株式四、合資一四、合名三、匿名六、個人二〇、組合一、不明一	(不明四社)八八

(備考)　本表は「新聞總覽」明治四十三年版に掲載された數により調製したるものである。

即ち二十年前は輪轉機械を有する內地日刊新聞は、僅に四十九、それが今は二百五社になつて居る、而して地方紙が此間に於て如何なる地位を有し、又如何なる變遷をなしたかは前二表によつてこれを窺ふことが出來よう。

三、地方新聞の經營難

地方新聞の經營難と、一と口に云ふものがあるが、それは十把一束の雜駁な見方である。地方新聞は前表にある如く現在百八十四社と見て、其中には良いものもあれば、良くないのもある。人の顏の異つて居る如くに異つて居る。人に貧富の別ある如くに違つて居る。それ故、自然に階級が出來て居る。少くとも甲、乙、丙、丁位の四階級には分けられる。甲級に屬する地方新聞は東京に於ける或る新聞よりも總てに於て優つて居る。乙級に屬する地方紙も概して東京の或る新聞よりも優つて居る。名古屋、仙臺、北海道、九州、信州、北越、中國等には、こうした有力なる地方新聞が立派な新聞を作り相當な經營をな

し相當な成績を擧げその基礎も堅實なものが少くないのである。丙級丁級に屬するものと雖も必ずしも其經營が悉く惡いと云ふのではない。たゞその中に隨分ひどい經營難に陷つて居るのがあると云ふのである。經營の大困難に陷つて居るのは前掲百八十四社以外卽ち輪轉機を有しない新聞中に多くあると見てよからう。しかも經營難と云へば東京大阪にもそうした惱みに苦んで居る新聞はいくらもある。何も地方新聞ばかりが經營難だとは云へない。殊に我國今日の世相は深刻なる不景氣に見舞はれ、どんな事業でも商賣でも極めて稀有の例外的なものを除く外は、皆が經營難に苦んで居るのである。今日の財界不況に直面して何ものがその影響を受けないでゐられよう。會社たると個人たるとに論なく、各事業は殆ど悉くが行詰つてゐると云つてよい。一般購買力の減少――消費の節約――收入の減少――利益の減少――こうした順序を踏みつゝあるのが今日事業界の姿である。新聞事業はご多分に洩れてゐると云ひたいが、新聞のみが獨り不景氣に對して鈍感なるわけには行かない。他の事業界に例外ある如く、新聞界にも例外があつて、どこを風が吹くかといふ顏でゐる新聞もないではない。しかしそれとて全然不景氣に無影響と云ふことは出來ない。要するに營業不振、經營困難といふことは今や殆ど一般的である。新聞界のみのことでもなく、又、新聞界に於ても、獨り地方新聞のみのことでもない。

たゞ比較的といふ言葉を用ふるならば、地方新聞が比較的多く經營難の立場に置かれて居るといひ得るのである。もとよりそれは新聞により異つて居つて、甲級には比較的少ないことは無論である。我國では明治の初め封建制度を廢して、中央集權制度を樹立しようとしたが、最初は豫期の如くに行はれず、封建の因襲が相當長く續いた、この間に於て地方新聞が各地に發刊され、政論機關の急先鋒として地方有力者の支援によつて發達を見た。勿論この間經營上云ふに云はれぬ苦戰惡鬪を續け、漸く酬ひられた新聞も少くない。然るに中央集權制度が年の經過と共に進んで、普及されて來てからは、政治的にも經濟的にも、地方は惠まれるところ比較的薄く、やゝともすれば中央に吸引さるゝ傾向が多くなつた。それ故、中央の經濟力と地方の經濟力とを比較すれば、其發展率に於て勢ひ相異を生ぜざるを得ない。地方でも所謂六大都市に屬する大都市や、之に類する都市は違うが、大體に於て地方は中央に於けるが如き經濟力の大發展を見ない。これが地方紙の經營に於て、中央紙に及ばざる一の根本的原因であると考へる。中央地方に於ける經濟力發展率の相異は、もとより自然の環境に原由するところ多いので

あるが、しかも又國家の政策が何でもかでも中央集權的にやらうとした、爲政者特に官僚政治家が權勢を振つた當時に於ける政策や施設の餘弊から由來して居ることが少くないのである。

根本的にかゝる不利な條件の下に置かれて居るところへ、更に逐年加はり來つた中央大新聞の地方侵入の影響が重なり來つて、こゝに兩難を有することになつた。而して此二大原因は、ずつと以前より存して居たのであるが、それが餘り多くの影響を現はさなかつたのは、歐洲大戰に伴ふ我國の好景氣が長く續いて居たからで、云はゞこの好景氣の蔭にかくされて居たのである。しかもこの好景氣は從來あつた好景氣と違つて、全く空前の熱狂的好景氣が長く續いたのである。我國は明治十九年二十年に貨幣制度確立、財政整理完成によりて好景氣を出した、次で同二十八年―二十九年にかけ日清戰爭の大勝による好景氣を出した、又同三十八年―九年に日露戰爭の大勝による好景氣を出した、が、それらの好景氣は期間に於て短く、漸く一年たらずであつたが、大正五年より出始めた歐洲大戰による好景氣は五年より同九年まで續き、九年にはその反動期に這入つたけれども、尙好況の餘勢が續いて居て昨年まで何だ、かだと云つても、歐洲戰爭の利得がいろ〳〵に形を變へて殘つて居て、眞のどん底的不況にはならなかつた。こうした比較的暖い日が長く續いて來たので、之が恰も我國の常態であるように多くの國民に思はれて居た。然るにこの溫室的好景氣は遂に金解禁によりて、その正體を暴露された。今や我國は眞に不景氣の試練時代に入つて來た。こゝに於てあらゆる事業界に於て體驗されつゝある受難苦が、新聞界にも來襲し、地方新聞は特に前記の二大原因が、遠慮なくその頭上に襲ひ來つたのである。

財界不況の影響は、地方紙も中央紙も同樣に受難する、この兩者に區別はない、たゞ中央有力紙は自分のこの受難を輕くし、若くは進んで此受難期にも尙發行部數を增加せんとし、中央の地元に於て積極的進出を試みると同時に地方へも更に一大進出を試みる。所謂大資本主義の新聞の地方紙壓迫と云ふのはこの事を云ふのであるが、地方紙に取つてはこれが最も重大なる問題であつて、「地方新聞は何處へ行く？」の聲は主としてこの問題から發せられるものといふも過言ではあるまい。これを中央紙側に云はせば、その地方進出は、その目的が決して地方新聞壓迫とか驅逐とかにあるのではない。不景氣の影響は中央大新聞と雖もこれを免れることは出來ない、その對難局策の一として地方進出の力を一層强く用ゐるのである。これは壓力が抵抗力の薄弱な方面へ向ふ物理的自然の數であつて、中央紙としては餘儀なき次第だと云ふ。それ故地方紙中の抵抗力の弱いもの

は勢ひ大之に壓迫せられる。茲に於て地方紙は抵抗力をますく強くし、この壓力に堪ゆべく改善も加へ、施設も更に擴充せねばならぬ。

地方新聞は、不景氣から來る影響を受ける上に更にこの中央紙の侵略を受け、正に二重の受難となり、しかも地元における常時不斷の競爭紙があつて、戰ふべき相手は多數である。その多難は蓋し察するに餘りありと云ふべきである。

地方新聞中前掲甲級に屬する地方紙中には、實に多年に渉つて中央紙の或ものには劣らない發展を遂げ、基礎堅實であり、その抵抗力は牢として拔くべからざるものがある。これらは今日中央紙の壓力をさほど受けては居らぬ。一方にこれら地方有力紙は恰も中央紙が地方紙に向ふが如くに、地方の中小紙と戰ひ縣内は勿論、その近縣へ着々と發展して居るの事實は、新聞界の一偉觀と云ふべきである。こゝに於て地方の中小新聞にあつては、中央大新聞の壓迫の外この地方大新聞の壓迫をも受けねばならぬ。又地方には無數の小新聞がある。地方中新聞はこれらのために常に自個の地盤を荒されつゝある。卽ち上下から板挾みになるのがこの中新聞であると考へる。而してその存在を危くするのが、この地方中新聞ではあるまいか。今より二十年前三十年前の地方有力紙が概して今日の有力紙として殘つてゐる事實に想到し、競爭場裡から姿を沒する新聞は、概してこうした中新聞の中に多くあることが想像せられる。

現代新聞の經營上最も重要な財源は廣告掲載料であつて、その增減は新聞社の財政の順逆を見る一つの目安である。こゝにその正確なものを掲げたいが、我國には據るべき計數がないので、假りに廣告行數統計を掲げて大勢を窺ふことゝする。左に擧ぐるは大正十三年より昭和四年に至る六ヶ年間(所謂震災後)の計數で、これは廣告の上から見た最近の一般新聞界の趨勢であると共に、中央大新聞と地方新聞との經營が互に如何に進みつゝあるか、地方新聞が中央の新聞に比して、財界不況の影響を受くることがどんな風になつて居るかを見る一資料にはならう。(廣告行數を以て廣告收入と卽斷してはならぬ、廣告行數が殖へても其一行當り單價が下れば、却て金額は減つて居る場合もあるからである)

震災後六ヶ年間における廣告行數の增減　(單位千行△印減)

	東京 十四社	大阪 三社	地方 九十八社
大正十三年	三二、四八七	一一、三八三	一五八、五〇六
十四年	三五、九七四	一一、五二〇	一六三、〇五八
昭和元年	△三五、〇二二	△一一、二九二	△一六一、五八三
二年	三五、二八〇	一一、八六三	△一五六、八四[illegible]

三年	三六、八七五	一二、九三六	一七一、〇七二
四年	三七、九四三	一三、四二六	△一七〇、六五五

（備考）「新聞總覽」に掲載されて居る計數表に據る（以下同じ）

これによつて昭和四年を大正十三年に比較すると、東京十四社は五百四十五萬七千行を增し、大阪三社は二百四萬四千行を增し、地方九十八社は千二百十五萬行を增し、その割合を示せば、東京一割六分強、大阪一割七分強增に對し、地方は七分強增に過ぎない、卽ち地方は增加率が少ない、しかも年によつては減少して居ることさへある。

しかしながら、地方紙が中央紙に比し、廣告行數增加に於て劣つて居る右の事實を捕へて、直に地方紙全體がそれの如くに劣つて居ると斷ずるは早計であり誤謬である。前に示した甲級に屬する有力地方紙だけに就て見ると、左の如き事實を示して居る。

地方有力紙九社の廣告掲載行數比較表

大正十三年	二千百二十一萬八千行
昭和四年	二千四百二十六萬行
增加行數	三百六萬行
增加率	一割四分

これを見れば地方紙中の有力紙は、東京、大阪の有力紙に比し、よほど近い增加を示して居る。たゞ中央紙の各社別に比べると、例へば東京の某社五割六分增し、同某社三割九分增に比べると、增加率の差がなほあることを、こゝに附記して置く。甲級に屬する地方有力紙の掲載廣告がかくの如くに增加して居ることより推定し、地方の中新聞の中には丙丁の如き其廣告の却て減じて居るものゝあるを知らねばならぬ。それ等の地方新聞は經營の中々に困難なるを想見せざるを得ない。

四、地方紙は衰微すべきか

地方紙は考へようによつては、前途大に樂觀を許さぬ感を免れないかも知れぬ。人によつては地方新聞の經營が次第に困難となり、幾年かの後には地方紙の多くは衰滅するの外はないと思ふ者があるかも知れぬ、少くとも其勢力の失墜を豫期するものがあるかも知れぬ。現に地方新聞紙に從事する人々の中にもそうした感を持つ人がある。前に掲げた新聞人の所見にも相當これがあつた。これも悉くを否定するわけにはいかぬ、しかしながら地方紙の將來は單に現況のみを見て悲觀するは早計と云はねばならぬ。

資本力の大なる中央紙が地方に侵入するの結果、地方紙が壓迫さるゝは事實である、しかしそれには自ら限度がある。又中央紙と地方紙とが竝用せらるゝことも豫期せらる。故に地方紙

は先づ地理的に其所在地の如何と、運搬及通信の機關がどう發達し、之によつて地方紙に如何なる便利を與へるか、中央紙に如何なる便利を與へるかを見定めねばならぬ。又今日の地方紙中、地方紙として十分存在し成長するの素質を有するや否やを見定めねばならぬ。東京、大阪の有力新聞はまだ〳〵地方に進出するだらう、しかし所謂地方版なるものが本紙に掲載さるゝと、別に附錄となるとに拘らず、近縣に適したものであれば、之が其地方に進出し、發展し近縣の地方紙は爲めに一大脅威を受けるであらう、故に近縣地方紙は餘程の特色を發揮し、其經營の恒永的存續の計を爲さざる限り、其存在はかなり危機に瀕するものがあらう。而してこの危機は中央地域を離れゝば離れるほど緩和さるゝは自然の道理である。

　自分は地方紙は地理的に其ところを得、人の上に於て有爲の人物が經營すれば立派に地方紙として存立し、大都會紙の大新聞として發展して行ける可能性あるを信ずるものである。この點は疑ひない、唯殘るのは中央紙の有力紙と此の地方大都會紙との板挾みとなる中新聞は、前述の如き危險が存する。これらは今にして何かの新らしき生存策を講ずる要があるのではないか。しかし、これら中新聞も地理的關係によつて又異る利害が生ずる、地方の大都會紙の近くにあるものは存立上危險率が頗る高い。その距離が遠くなればなるほど危險少きことは前の地方有力紙と中央紙との關係と大體同一であらう。

　我國政の大局よりして、中央集權制度が、根本から大變革を見ることはなからう、しかし政治的にも經濟的にも地方經濟の根底を強くするは今日最も必要なことである。これは地租委讓とか、地方事業の振興とかを猥りに云ふのではない。寧ろ今日の幾つかの都市が、其地方に大都會として建設され、之が中心となり、地方產業の合理化でも行ふ段取りになるべきだと考へる、とにかく今日の儘に任せて置けば地方は衰弱するにきまつて居る。

　之を地方新聞に見るに、自分は地方新聞の存立の意義とその價値とは、主としてその地方々々の利益を代表し、地方文化の指導者たり地方產業の開拓者支持者たり、舊き歷史を有する鄕土色の保護者たり、鄕土隣人の親しき相談相手たるところに存すると思ふ。これは、その地方の地元新聞の最も大なる强味である。

　しかもこの見地より地方新聞の存立の意義と價値を認むるとはいふものゝ、おのづから、そこには數の制限がないわけには行かぬ。いかに貴い物でも過剩はその貴さを減ずる。いかによき新聞でも一地方に必要以上に多數存在することは經濟の原則か

これを許さぬ。

いま全國新聞の現在數を前掲の一覽表によつて内地二百〇五社とし、これから東京大阪の二十一社を差引いたものを地方新聞數とすれば、百八十四社となる。これを一道三府四十三縣に割當てると、一縣平均四社に當る。大府縣あり小縣あり、縣下都市の多少、人口の多寡、富の程度その他の差等があつて、一概に均分を以て論ずることは出來ないが、一縣四社は必ずしも過剩ではなからう。我が國の將來を達觀すれば存立の餘地があると考へらるゝが、たゞ今日の狀勢では何等かの進展策を講ずることが必要で、若し進展策を立てねば存立の危險に出遇うかも知れぬ。しかもこれらの新聞以外に、輪轉機を有せざる新聞が多く存する我國の現狀にては、何とか共に生きられる途を講ぜねばなるまい。或は我國の新聞はその數多きに過ぎる、之をもつと減らすことが必要だと云ふ者がある、之れも尤な話しであるが、しかし新聞紙と云ふ機關はそう少くするわけにはいかぬ、少な過ぎるのは却て國民の利益でない場合がある。唯其時に即して新聞社が經濟的に成立ち得るようでなければならぬ。その度を越して多數存するは國民の害である。

米國の新聞學者フランク・セーヤー氏の新聞經營論中にかような一節がある。

「もしこゝに人口十二萬の都市があり、こゝに二つの新聞が共に繁榮してゐる場合、第三の競爭新聞を起すのは決して賢明な策ではない。又こゝに人口五萬の都市があり、他の競爭紙を合併し、その地域を一紙で獨占してゐる場合、第二の新聞を起せば必ず成功する。」

と、經營方面からの觀察として自分は至言であると思つてゐる。要するに自分は我國の地方紙は、このまゝでは中々困難なものが殖へる傾きありと考へる、今にして對策を立つことを賢明なりと信ずる。

五、地方紙經營の合理化

地方新聞には存立の意義あり、價値ありとはいふものゝ、今日のまゝでは「何處へ行くか」の行詰りを一層叫ばるゝであらう、何としても行詰り打開策を樹てねばなるまい。

行詰り打開策として地方紙は如何やうにすべきか。これに明答を與ふるは至難である。地方新聞個々の傳統があり個性がある。一律に論ずるわけには行かぬ。若し凡てに當てはまる論策といふならば、今日の流行語ではあるが、產業合理化の精神を取入れるのがよからう。

合理化運動の本家たる米國では早くから新聞にこれを行つて

ゐる。またこれが歐洲諸國にも取入れられてゐる。その合理化經營の一形式は、同一資本系統の下における協同經營である。この傾向は外國で、だん／＼著しいものがあり、しかもこれが成功しつゝある。米國のスクリップス、ハワード、ハーストなどはいはずもがな、英國のローザメーヤ、ビーヴァブルーク、カドベリー等、或は併合の形式、或は連鎖組織、組合組織の形式、或は持株會社の組織等、一資本の下に多數の新聞を包含し、生産費の低下や、無益な競爭の浪費を省くことなどを實行して居る。

日本でも規模は、さまで大きくはないが、既に似たようなものが出來つゝある。姉妹紙として近縣新聞の併合を行つたもの、匿名の一資本家が數社に對して出資しその實權を握つてゐるものもある。或は今後かゝる傾向が著しくならぬとはいへぬ。只合同合併があつちにもこつちにも易す／＼と實現するは中々の困難事である。日本人の特性たる自負心や何かで往々利害の打算を超越して、これを妨げることをも考慮に入れて置かねばならぬし、新聞事業は他の製造會社とは違うから、尚困難がある。しかし萬難を排して實行した社々は益するに違ひない。

合理化の外に地方新聞として大に考ふべきは、地方新聞の組織經營の根本を何處に置くかの問題である。新聞事業が社會的に其使命を果し、能く繁榮して行くには、その個性的、傳統的のところに最も重點を置くことが必要である。こゝに云ふ個性的とか傳統的とかは主觀的や保守的なことを意味するのではない。獨逸の新聞には一つの特色があつて、これが特に地方紙として尊重すべきものと考へる。獨逸の新聞には家族經營の古い傳統を有するものが多い。獨逸新聞の發祥地たるフランクフルト、キヨルン、ハンブルグ、ベルリン等の古い都市には父子相傳の大新聞があつて、歷史的に讀者の尊敬と信用を受けてゐる。獨逸新聞の數約三千の中、この家族所有のもの約二千六百、即ち約八割を占めてゐる。この新聞は凡てその地方と最も親愛なる關係を持ち、讀者の信頼があると共に發行者また責任觀念が強い。

これは眞似をして一朝一夕に出來るものではない。又これには弱點もあるが、その長所を取つた新聞が日本の地方にも幾つもあつてよい。日本にもそうしたのが現にあらはれつゝある。これらは是非發達させたい、地方の有力者は郷土の共有新聞としてこれに愛着を持ち、之を監督し且つ支持する責務があると思ふ。(了)

値切り倒された婦人公民權

山川菊榮

『時運の趨勢に鑑み、地方政治の實績に徴し女子に公民權を賦與するため、市制町村制、北海道會法中改正を要するものあり……』といふ理由で、政友會所屬議員全部を贊成者とした婦人公民權に關する提案が、四月二十三日、特別議會に提出された。同日、民政黨代議士三十四名により、贊成者百五十名の名を連ねた、全然同一議案が提出された。是等の提案によれば、市制、町村制、北海道會法等の改正によつて、其等の自治體における婦人の選被兩權を認めることになつてゐる。

既に第五十六議會にこれと同樣の法律案が提出され、贊成者は議員總數の過半數を占め、衆議院の通過はもはや規定の事實として認められるまでになつた時、政友會最高幹部の反對により、同黨代議士の態度豹變によつて暗から暗へと葬られてしまつた。野黨になつた政友會は、軍閥や資本家の御機嫌をそこねない範圍で何なり目新しげな客引政策をと考へた擧句、「一番安上りでパッとする引札のつもりで、去年自黨内閣の下に自から叩き潰した法案を、今年は特別議會の劈頭に持ち出して見た。同じ心理で先陣爭ひをしてゐる朝野二大反動政黨は、丁度新しく引越して來たお得意を手に入れようと、申譯ほどの手傳ひをしては臺所に通帳を投げ込んでゆく酒屋の御用聞きそのまゝの役割を演じてゐる。

動機はともあれ、ともかくも婦人公民權が、議會の絶對多數の支持を得ることは結構なことに違ひない。たゞ問題は、會期が短くて緊急を要する重要問題が山積して居る矢先、特に貴族院の峠を無事には越されまいと見られるこの法案を大騒ぎして擔ぎ出したブルジョア政黨員の腹の底にある。彼等の大多數は、婦人公民權に對して理解も誠意もなく、たゞ流行問題だから不和雷同してゐるにすぎず、既に先進諸國で實驗ずみの、現行秩序にとつて何らの危險もない制度だといふので毛嫌ひの度を薄め、よつて贊成者に名前を連ねてゐるといふ程度の、消極的な支持者にすぎないので、この問題を挿んで貴族院と一戰を試みるほどの勇氣も熱情も期待することはできない。恐らく貴族院で審議未了に終ることを内心期待してゐる者もあるであらうし、この巨大多數はその運命に無關心であるに違ひない。彼等は表面この案を支持して内實これを弄んでゐるものにすぎない。だから問題は、引つゞき將來まで持越されるものとして、婦人運動者の側の一層熱心な運動を必要とする。

ブルジョア政黨の代議士諸君が、それほど熱心な婦人公民權の支持者であるとすれば、府縣會から婦人を除外するといふのも妙な遣處である。參政權もまだ早い、結社權もまだ早い、公民權も府縣會は早すぎるといふので、婦人運動者の主張は、緣日の植木のやうに値切り倒し、踏み倒されたもので、お情けづらに市町村の公民權だけを、それも貴族院

の反對を見越して、提案されたのでは、實のところ、今回の兩黨一致の提案は、進步の假面を被つた反動政策であり、婦人の政治的進出を助成するよりも、むしろ阻止する效果を伴ふものだと見られる。

三年前、最初の普選議會當時、婦人參政權を論ずるブルジョア政治家の多くは、男子と異なり年齡の制限——例へば三十歲以上——を設けてこれを認めやうといふのであつた。婦人團體の中には、さうした差別的條件に屈服する氣勢を示したものもあつた。無產婦人團體は斷乎として平等の條件による徹底普選を要求した。その後英國の平等參政權實施の例によつて刺戟されもしたであらうが、一般に徹底普選の聲が高まるにつれて、差別的條件などは省みられなくなつた。しかし何としても男性の特權的地位に對する諦らめられぬ未練が、公民權を不具化してまでも『高級且つ複雜』を名として、府縣會を女性の侵入から喰止めやうとする努力となつて現はれた。

ブルジョアジーの利害から見て、婦人參政權及び公民權に反對すべき何らの現實的、理論的根據も見出されぬ今日、多くの反對論は專ら觀念的又は感情的な理由にのみよつてゐる。それで彼等は原則的な立場から反對する代りに、いろ／＼な口實を設けて一日延ばしに延ばすことにせめてもの慰めを見出してゐる。府縣會參政權を剝奪しつゝ、婦人公民權の名を僭する今度の提案とても、婦人の要求を一錢でも廉く値切り倒さう、徹底普選の實現を一日でも長引かしめようとする反動的な意圖の現はれにすぎない。婦人はこの種の、中味のからつぽな附け屆けに滿足せず、どこまでも徹底普選の要求のために戰ふべきであり、中途で武器を捨てゝ、敵の投げ與へたしやぶりからしの骨にかぢりつくやうな淺ましい意地きたなさを見せてはならない。

×

ブルジョア婦選論者の多くは、婦選が家庭を破壞するといふ反對論者の恐怖を散するために『否それは杞憂である、政治に直接參與するのは少數の選ばれた婦人だけで、婦人一般は四年に一回投票權を行使する義務を負ふにすぎないのであるから』と答へてゐる。

無產者の立場から見て危險なのは、『四年に一回投票權を行使する義務を負ふ』ことに、婦人參政權の全意義を認めるこの種の態度である。かういふ態度のために、婦人參政權は、婦人有權者を、平素においては、全然組織のない、中心のない勢力として、從つてブルジョアジーの漠然たる影響力の下に放置しておくことに滿足し、其時凡ての感情や卑近な目前の利害に吊られる許りで、一貫した政治的意見に基づく鞏固な組織に編制されることを妨害する結果となる。

婦人をして、四年に一回選擧權を行使することだけに滿足するやうな消極的な有權者たるに留めず、進んで活潑に日常闘爭に參加させるやうな意氣と條件とを作るのが、無產階級から見た婦人參政權の目的である。教育、衞生、住宅等、住民の日常生活に直接關係のある具體的な當面の問題を扱ふ地方行政機關への參與は、婦人を公共事務に習熟させ、その政治意識を發達させた上に極めて適當な機會を提供する。しかし個々の婦人の才能と活動とが、一定の目的の下によく組織し、統制せられ、一貫した體系をなしてこそ、始めて全能率が發揮され得るので、四年に一回、少數の有能な婦人が議席をかち得ても、その間に何ら

の組織も統制もなく、更に他の婦人一般は、投票の義務が濟すと同時に、家庭の殼の中に閉ぢこもつたきり出て來ないのでは婦選の效果は失はれてしまふ。そこで婦人の日常鬪爭を組織指導し、政治を『少數有能者』たる專門家の手に委ねて官僚主義の發展を促す代りに、常に溌溂として生動する大衆の意思を如實に代表させる爲には、結社權が絕對に必要である。結社權に伴はれぬ參政權は武器の携帶は許されて、協同動作を許されぬ兵士の樣なもので、その戰鬪力を無に歸せしめる手形に外ならない。特別議會に對して神官僧侶の結社權容認を目的とする、治安警察法の改正が提案されて居りながら、婦人の結社權が問題にされないのも、不自然である。四年に一回、個々の婦人が參政權を行使するのは形式だけの問題で、實際に男女の地位や家庭生活に影響する所が少い。然し日常鬪爭への積極的參加と、大衆的な組織的活動とを發達させるが故に、支配階級の立場からはより多く危險だといふ點で忌避されるならば、その理由は當つてゐる。從つて無產階級の婦人としては、一層强くそれを求める理由があるのである。

アメリカ帝國主義と賠償問題

石濱知行

(一) 世界大戰とヴェルサイユ條約

千九百十四年から十八年までの四年間に戰はれた世界大戰は、ドイツ帝國主義と聯合諸國帝國主義との世界制覇の爭であつた。農奴制度、ユンケルトウーム、その他多くの封建的諸關係の殘滯の存在、諸支分國の分立、各支分國間の相互的關聯とドイツ國家としての政治的、財政的統一とを障碍したる關稅壁の確立等は、ドイツの資本主義的發達のテンポを遲延せしめたるにもかゝわらず、前世紀の末葉に於ける關稅同盟の成立、普佛戰爭の勝利等による國民主義の發生の結果、統一體としてのドイツ帝國の經濟機構は漸次膨脹し、生產力、生產組織は急激に發達し、殊に二十世紀に入つてよりの資本主義は、企業の獨占、金融資本の發達のために、すでに帝國主義的段階にまで成熟し、世界大戰前に至つては、先進資本主義國家たるフランス、イギリス兩國をさへ凌駕せんとするに至つた。このドイツ資本主義の帝國主義的發展は、つひに、ドイツチエ・バンクの金融資本に操縱されて、バグダード鐵道案となり、エヂプト、ペルシヤ、インドに於けるイギリス帝國主義、ギリシヤ、地中海地方に於けるフランスの帝國主義、ペルシヤ、コーカサス及び近東に於けるロシア帝政時代の帝國主義等の錯綜せる地方に割込んで、それらの地方の利權を中心として、ヨーロッパ先進諸資本主義諸國の帝國主義を打破して『ドイッチユランド・ユヴアー・アレス』の夢を實現せんとした。ヨーロッパ大戰は、かゝるヨーロッパ帝國主義諸國と新興ドイツ帝國との世界制覇の暴力的發現である。『ドイツは神のほか懼るるものなし』と豪語したカイゼルの十字軍的征戰の背後には、ドイッチエ・バンク、トレ

デネル・バンク、ディスコント・ゲゼルシャフト、ダルムシエテツテル・ウント・ナチオナールバンクの所謂『デー・バンケン』の金融資本があり、それはユーゴー・スティンネス、ヴァルテル・ラテナウ、フォン・ジーメンス等の小數金融寡頭の手に握られてゐる。『世界の野蠻人ゲルマーネン、自由と平等と平和とを攪亂する、北方の毛人の狂亂から世界を助へ』といふ聖語をスローガンとした聯合諸國家の『正義の戰』の背後には、ロンバート・ストリートの『ビッグ・ファイヴ』があり、クレディ・リオネー、ソシエテ・ジエネラール、ディスコント・バンクがあり、モルガン、ロックフエラーに操つられるモルガン商會、クーン・ロエブ商會、ナショナル・シティ・バンク等その他のウォール街金融財閥があつた。世界大戰は神の命によつて行はれたのでもなければ、正義と平和の女神の御告によつて行はれたのではない。各帝國主義國家内の小數寡頭財閥が世界の利益を獨占せんとした豺狼の爭に神、平和、正義のレッテルを貼布したものであつた。ドイツ財閥にとつてはイギリス、フランスの財閥をたゝきつぶすことが神の命であり、イギリス、フランスにとつてはドイツの新興財閥をうちのめすことが正義であつたのだ。神、正義は一般大衆のものではなくして、帝國主義國家小數の財閥寡頭のものであつたのだ。

大戰の結果、ドイツの神の世界君臨は無限の彼方に押しやられ、イギリス、フランス、アメリカその他聯合諸國家の正義の女神がこの世を照覽し始めたのである。イギリス、フランス、アメリカの財閥が頭を擡げかけたドイツ財閥をたゝきつぶしたのだ。

ドイツは粉碎された。二百萬人の若者は戰死し、四百萬人の青年は負傷してベルリン街頭に食を乞はねばならなくなつた。戰爭による經濟的窮貧はさらに死亡數を四百萬だけたかめ、出生數を三百萬人だけ減少せしめた。これらの人間の損失は、それだけの勞働力をドイツ生産分野からうばつたものだ。戰時負債は千三百億ゴルドマークに達した。直接戰爭そのものによつても多くの生産手段が破壞せられ、工業中心地が荒廢させられた。

更にドイツにとつて致命的なものは、大戰の結末を清算したヴエルサイユ會議に採用されたヴエルサイユ條約そのものであつた。聯合諸國は、ドイツが再びかゝる不遜を再びせざらんがために、從來戰勝國が戰敗國に科した刑のうちで最も苛酷と思惟される條件をドイツに附した。ケーンズは、ドイツに對する條件として、ドイツの海外貿易、鐵・石炭等の開發、ドイツ國内交通機關の完備等の諸政策を可能ならしむることを全然封鎖す

るために、船舶、石炭、鐵、鐵道の大部分をドイツから奪ふことを提唱した。この提唱は、大部分ヴエルサイユ條約のなかにくみ入れられた。ヴエルサイユ條約は大略次のごとき條件を規定した。先づドイツ工業の重要なる中心地をドイツから奪つた。アルサス・ローレヌ、ザール河谷、上部シユレジエン、ルクセンブルグ地方、ポーゼンがすなはちそれである。植民地ならびに外國に於けるドイツの特殊利權を沒收した。國内の爭亂を防禦するより以上の陸軍、海軍、空軍等の武裝を禁止した。戰爭中の損害の補償、賠償金の支拂を强制した。千九百二十五年一月一日までドイツが自らでなす貿易政策の嚴禁、財政上・軍事上の聯合國による統制、ライン左岸の占有等がさらにそれに附加せられた。

かくして、ドイツ工業の中心地のほとんどすべては聯合國によつて掠奪または管理せられ、植民地の全部、その上ならびにその他外國の上に有するドイツ諸銀行・諸會社の特殊權利がもぎとられ、軍艦・商船の大部分が聯合國に提供せられた。ドイツは石炭鑛山の十九パーセント、褐炭鑛山の十六パーセント、亞鉛生産の六十八パーセント、熔鑛爐の二十七パーセント、輪轉機の十六パーセント、亞鉛鑄造所の六十パーセント、農業耕作地の十四・三パーセントを失つたのである。

かくのごとき苛酷なる條件をドイツに科することは、ドイツの政治的・經濟的の獨立性を脅かすに等しいのである。果して聯合諸國家は、かゝる條件をドイツに向つて徹底的に强行し得たか。今日までの歴史は然らざることを我々に告げてゐる。ヴエルサイユ條約に次ぐその後の聯合國のドイツに對する態度は、ドイツ懲罰の徹底的强行でなくして、ヴエルサイユ條約に内示されてゐる諸條件の妥協的寛恕である。その最初の現れは、すなはちドーズ・プランである。

(二)　ドーズ・プランとアメリカの登場

ヴエルサイユ條約は何故强行されなかつたか。斧を持つて立ち上り一度はドイツの頭腦を割り、更に劍を擬してドイツの咽喉を扼せんとしたイギリス、フランスその他の聯合諸帝國主義諸國は、いざ咽喉に最後のとどめをささむとせしときに、何故に、その手をゆるめねばならなかつたか。我々は、そこに、資本主義經濟組織なるもののすこぶる微妙にしてしかも多くの矛盾を包藏せる機微をうかがうことを得るのである。

(イ)　聯合諸國は、戰爭直後は、にくむべきドイツに對する忿恨に燃えた。イギリスは老大國を侮蔑せむとする新米ドイツをして再び立ち上らせざらしむるがために、フランスは、先には

工業の中心地アルサス・ローレヌ、ルクゼンブルグを奪ひ今なほ虎視眈々としてパリをうかがへるドイツを陸つゞきに隣邦として有する火を抱いて眠るがごとき不安一掃せむがために、勢に乘じてドイツの獨立的存在性をもおびやかさむとした。しかし、今日のヨーロッパは精巧なる權衡を保てる一つの大機構を形成してゐる。ドイツの政治的覆滅はヨーロッパ政治機構の重要なる一環の脫落であつてそれは從來の政治史のしめすがごとく全ヨーロッパ政治機構を混亂の坩堝に投ずることである。かゝることはドイツに對する怨恨が骨髓に徹せる聯合諸國といへども決して欲するところではなく、むしろ、極力防止せんとするところである。いはんや聯合諸國家はたとへ大戰に勝利を得たとはいへそれはたゞ形式的で實質的にはそれによつてまつたく經濟的にも軍事的にも疲弊し切つてゐるのであるから。また、經濟的ドイツの死滅も、政治的ドイツの覆滅よりもより以上の混亂と疲弊とを他のヨーロッパ諸國に運命づけることも必然である。ヨーロッパ全體としての經濟機構においてドイツは二十世紀に入つて以來殊に重要なる一役目を擔任し、生産・消費の關係を通じ、流通・信用の關聯において、他のヨーロッパ諸國はドイツとの間に相互關係を結び、その紐帶によつてヨーロッパ經濟機構が現在まで活動してゐるのである。そしてヨーロッパ經濟機構はさらに全世界の世界經濟的機構の重要なる一部分を形成してゐるのである。かゝる微妙なる權衡關係にある經濟機構內部に於いて、重要なる役を演じかつ演ずべき未來を多分に有する資本主義國ドイツを死滅させることは、それこそヨーロッパのみならず全世界を收拾すべからざる紛亂のうちに陷し入らしむるものであつて、聯合諸國の斷然欲せざるところである。

かゝるヂレンマに陷つた聯合國は、ここに於いて、ドイツに對する苛酷なる條件の徹底的遂行について若干の考慮をなさざるを得ざらしめた。その結果がすなはち、ヴエルサイユ條約の妥協的寬恕である。ドイツは苦しめねばならぬ。しかし殺してはならぬ。帝國主義國としてのドイツの觸角は斷じて延ぶるを許さぬ。しかし、資本主義國としてのドイツは存在を許しておかねばならぬ。そこに妥協が生ずる。

(ロ) 第二に、ドイツを敵とした聯合國家內部に多くの帝國主義的對立があつたことである。獨占の國際的發展に伴つてウルトラ・インピリアリズムが發生するとするカール・カウツキーの理論は、事實によつて全く覆へされた。ドイツを戰爭に於いて倒すために聯合諸國家が一致したについても、各國間のドイツ打倒の目的はそれぞれ異つた意味を有つてゐた。いま戰爭が終結して、獲物を前に置いて聯合諸國家は、再び露骨なる國家的個

人主義を發揮しはじめた。そのうちで最も對立關係の甚しかつたのはイギリス・フランスの對立である。英佛の對立はナポレオン戰爭の昔から續いて今日に至つてゐる。フランスは日頃の勁敵ドイツを打敗つて、餘威を驅つてさらに、海峽のかなたの老大國に迫り、昔時の『世界の工場』の實を今や失ひつつあるイギリスを抑へて、ヨーロッパの盟主たらんと機會を窺窬しつつある。イギリスはそれを察知してフランス抑へざるべからずとしてドイツを味方に入れてフランスに對抗せんとしてゐる。この方策は最近のヘーグ會議に於ける勞働黨內閣大藏大臣フイリップ・スノーデンの態度に於いても明瞭に觀取し得られる。ドイツも亦たとへ戰敗れたりとはいへフランスに對する復讐の念やみがたきものがある。イギリスの後援のもとに、フランスの貪慾なる野心を制肘することが必要である。ここに於いて、ドイツを中心として英佛、ならびにそれを取り卷く衛星的群小國家間に、帝國主義的對立の尖銳化を來した。かゝる情勢は、ドイツに對して致死的なヴエルサイユ條約を强行するについて、多くの難局を胎ませる。ここに於いて、妥協が行はれ、ヴエルサイユ條約の寬恕が問題となり來つたのである。

(ハ) 第三に、アメリカ合衆國のヨーロッパ舞臺への登場がある。アメリカは千八百六十年度に於ける南北戰爭以後商工業の發展めざましく、八十年度に入るとともに工業は農業に代つて立國の基礎となり、二十世紀に至つて從來世界の最高の工業國イギリスを凌駕して斷然世界資本主義のトップを切つた。それとともにアメリカ資本主義は帝國主義的段階に入つた。中米・南米をアメリカ金融資本網によつて捉へ、フイリッピン、ハワイを併合し、キユーバ、ハイチを勢力圈內に置き、メキシコに侵入して金融資本によつて大統領を操縱し、さらに東洋支那に向つて資本の魔手を延した。イギリス領カナダも經濟上は全くアメリカに隷屬してゐる。千九百十四年世界大戰が勃發するや、ヨーロッパの工業的、農業的生產、交易は全く杜塞したので、ヨーロッパ諸國は經濟的にアメリカの生產、貿易に依存せざるを得なくなつた。千九百十七年アメリカが參戰するやアメリカの工業の發展さらにいちじるしく從つて貿易も激增した。例へば千九百十四年大戰勃發當時は輸出は二十三億六千萬ダラー、輸入は約十九億ダラーで、輸出超過額は四億七千萬ダラーにすぎなかつたのが、大戰終了直後の千九百十九年には輸出八十億ダラー、輸入四十億ダラーで輸出超過額は四十億二千萬ダラーの巨額に達し、まさに十倍の增加を示してゐる。商船も千九百年の登錄總噸數は七十八萬噸であつたのが、千九百二十年には千萬噸に達し、アメリカ船によつて行はれる貿易は八・七パー

セントから四〇・三パーセントに增加した。もつてアメリカの工業・貿易がヨーロッパ大戰によつて如何に莫大な利潤をヨーロッパからさらつて行つたかが推察される。その結果、アメリカへは巨額の金が流れこんだ。千九百二十四年八月アメリカの造幣局長の公表するところによれば、當時アメリカは四十六億ダラーの金貨を所有し、世界の鑄造貨幣の半數以上がアメリカ金融家の手中に握られるに至つてゐる。加ふるに、ヨーロッパ諸國は戰時國債及び戰後の復興のためにアメリカより多大の債務を背負つてゐる。千九百二十二年の『スタティスティカル・アブストラクト』によれば、イギリスの四十二億ダラー、フランスの約三十億を最高として、ベルギー、チエッコ・スロヴアキア、ギリシヤ、イタリー、ルーマニア、ロシア、セルビア等の各國を併せて約九十六億ダラーの債務がアメリカに對してなされてゐる。千九百二十三年に發行されたフイスクの著書『聯合諸國の負債』にはアメリカの海外投資を七十六億五千萬ダラーと算定してゐるが、これにはヨーロッパ各國政府のアメリカ政府よりの借款が包含されてゐないから、それらを加へるときにはおそらく百億ダラーを超えるだらうと言はれてゐる。元來アメリカはヨーロッパ大戰前までは、資本輸入國であつた。千九百十四年にアメリカの資本輸入額は五十億ダラーで、資本輸出額は二十六億ダラーであつたから、差引二十四億ダラーの債務國であつたのだ。ところが、ヨーロッパ大戰を期として俄然一躍莫大な債權國となつたのである。かくして、アメリカは、平和締結後、その帝國主義的方向を漸次ヨーロッパに向けはじめたのである。戰爭による生產製造、生產規模の擴大、剩餘資本の存在は、生產品の販賣口をどこかに向けねばならなかつた。又剩餘資本の投下所もいづれにか發見しなければならなかつた。それは、今日ヨーロッパを措いて他には存在しない。アメリカはここに於いて、金融資本の力に推されて、ヨーロッパのアレーナに登場しはじめたのである。アメリカがヨーロッパ諸國に關係乃至干涉しはじめたについては、更に他に重大なる原因がある。ヨーロッパ大戰は、アメリカを帝國主義國の最尖端に立たしめたと同時に、それとまさに對蹠的地位に立つ社會主義聯邦サヴエート共和國を成立せしめた。サヴエート聯邦は成立以來幾多の難關を經驗しつつもそれを勇敢に突破して、多くのデマゴギーと中傷とにもかゝわらず、今日に至るまですでに十年の健實なる步みを續けてゐる。資本主義の打破をさけぶサヴエート聯邦の存在およびそれの健實なる發展は、資本主義諸國にとつて、一つの恐怖すべき現象である。ここに資本主義諸國の對サヴエートの共同戰線の必要が生ずる。資本主義の尖端

に立つアメリカはサヴエートに對する恐怖のあまり、ヨーロッパ諸國を共同戰線上に立たしめる必要がある。これアメリカがヨーロッパに大戰後口を出す一つの原因である。アメリカは以上のべた三個の主なる目的、乃ち生產品販賣區域および剩餘資本投下地の獲得、サヴエート聯邦に對する資本主義諸國の共同戰線の必要から、ヨーロッパに干涉しはじめたのであるが、それらの目的を達成するがためには、先づ生產品を購買し、資本を輸入するほどヨーロッパの經濟を安定せしむることが先決條件として必要である。また、サヴエート聯邦に對する共同戰線にしろ、ヨーロッパ諸國が何より先に經濟的にも政治的・財政的にも安定することが絕對に必要である。そのためには、ヴエルサイユ條約をそのまゝ強行してドイツを經濟的苦境に陷れ、ひいて全ヨーロッパの經濟機構を紛亂せしめることは決して策の當を得たるものではない。そこには、ヴエルサイユ條約の實施に當つての妥協的寬恕がおのづから必要である。

――以上略述したやうに、ドイツを政治的にも經濟的にも死滅させてはならないこと、聯合資本主義諸國內部に於ける尖銳なる對立、アメリカ合衆國のヨーロッパ・アレーナへの登場の三つの事情は、ドイツを政治的・經濟的に死滅させないで存在せしむること、帝國主義國家としての存在は拒否しても資本主義國家としてのドイツの存在を許容することを必要とする。そのためには、ヴエルサイユ條約を若干妥協的に寬裕にしなければならぬ。アメリカのタクトのもとにドーズ・プランが採用されるに至つたのはかゝる事情による。

アメリカは、前にのべた樣な必要に迫られて、大戰後耽々としてヨーロッパの情勢をうかがひつつ、時機到來せば一肌ぬがんと機會を俟ちつつあつた。ドーズ案を最初にサジエストしたのはウオール街の金融資本家の利益を代表する新聞であつたと言はれる。ヴエルサイユ會議以後アメリカは度々の賠償會議に非公式に銀行家、財界の代表者を出席せしめた。かくて聯合諸國家の依賴によつて、非公式に出席したアメリカの代表者ドウズ(モルガンの傀儡)、ヤング等によつてドウズ報告書なるものが作製され、それに基いてドウズ案なるものが出來上つた。ドウズ案は、(一)四億の資本を有する新發券銀行の創設によつてドイツの通貨を安定せしむること。(二)年々の賠償額は第一年目は二億五千萬ダラーそれより漸次增して第五年目には六億二千五百萬ダラー、それ以後はドイツの繁榮指數(Index of German Prosperity)によつて變ること。(三)二十七億五千萬ダラーに對してドイツの鐵道を抵當とすること。(四)十二億五千萬ダラーに對して一定の工業會社を抵當とすること。(五)ドイツ

の課税は聯合諸國の課税のレベルにまで高めること。（六）すべての賠償金を新銀行に支拂ひ、それを賠償委員會が管理すること、等を規定した。而して、ドイツの年々支拂ふべき額を定めて、聯合各國が勝手に賠償額を貪ることを禁じ、ドイツの手による獨自の貿易を千九百二十五年以後自由に行ひ得べきこととして、戰後混亂したドイツの經濟を再び立て直すべき基礎を作つた。また、ドイツの資本主義の再起のためにドーズ借款をおこした。アメリカは對獨貸付の最初の三億ドルのうち一億一千萬ダラーを引うけ、大統領クーリッヂはアメリカ全土に向つてドウズ債券を買ふべきことを慫慂した。ドウズ借款の保證人にはアメリカが成つた。そして、ドーズ案執行のための賠償委員會ではアメリカの銀行家は重要なる地位を占めた。例へばドイツの鐵道、工業を管理し、ドイツの豫算を監督し、ドイツ銀行の發券、準備金の保有を指揮し、關税、租税收入等を監督する賠償支拂總務委員にはモルガン財閥の傀儡パーカー・ギルバートが就任し、ニュー・ヨークのメカニックス、エンド・メタール銀行の總裁マックーガーはドイツ發券銀行の委員となり、アメリカ・ラヂエーターの社長は賠償支拂引渡委員會の委員となつたごときその一例である。ドーズ案の金融は主としてアメリカのモルガン財閥が行つたのである。かくして、アメリカは、ドーズ案を期として公然としてヨーロッパの舞臺に現はれ、ドイツのみならず、オーストリア、ハンガリー等にも金融を行つて、金融資本の魔手を延したのである。アメリカは從來、帝國主義を行ふに當つて常に平和の假面を被るをつねとする。中米・南米を勢力圏に入れるときは、モンロー主義を標榜し、支那に對しては門戸開放を標語とし、最近イギリス植民地蠶食には海洋の自由を主張してゐる。ヨーロッパに帝國主義の手を延したときには、先づ正義の名によつて大戰に參加し、續いてヨーロッパ救濟、經濟復興の名によつてダラーを使入せしめてゐるのである。しかし、ドーズ案によつて、ドイツは戰後の經濟的混亂より救はれて、再起の希望があたへられ、ドイツ帝國主義は再び勃興の機運に際會した。それとともに、ヨーロッパ帝國主義國家内の對立はますます尖銳となつた。

（三）ドーズ案よりヤング案へ

ドーズ案は、先づドイツに經濟的安定の基礎を與へ、サヴエート化せんとした革命的動亂からドイツを救つた。ドイツ資本主義の安定はすなはちアメリカのドイツ投資の安全化である。アメリカ資本のドイツへの使入である。またドーズ案の結果は、外國資本の流入によつて、聯合國に對する賠償の支拂を幾分か

なさしめた。ドーズ案は、ドイツの通貨を安定せしめ、インフレーションから解放して、ドイツの經濟的・政治的死滅を救濟して、ヨーロッパ、從つてまた全世界の經濟・政治機構を攪亂からまぬがれさせることが出來た。ドーズ案の目的としたところは、大體豫定どほり遂行せられた。

ドイズ案より五年目、すなはち昨年に至つて、賠償問題を完全に、そして終局的に決定するために、イギリス、アメリカ、フランス、イタリー、ベルギー、ドイツおよび日本の委員よりなる專門家會議がパリーに開催せられた。イギリスよりはスタンプおよびベーリング銀行のレーヴェルストーク、アメリカからはモルガンの代理人にしてインタナショナル・ジェネラル・エレクトリック・カンパニーの社長ヤングおよびモルガン、フランスからはモローおよびパルマンティエ、イタリーからはピレリおよびシューヴイシユ、ベルギーからはフランキおよびグット、ドイツからはシヤハトおよびフェーグレルが出席し、ヤングが議長となつて會議をすゝめた。その結果所謂ヤング案なるものが成立した。ここに出席した所謂專門家達がみな各國の金融資本閥を代表せるところより見てヤング案なるものが如何なる性質を有するものであるかが容易に推測し得らるるであらう。そしてヤングが議長をつとめ、その傍にモルガンの居ることはヤング案の背後にいかなる力が動きつつこれを操縱してゐたかが明瞭であらう。而して會議の進行中に、ドイツが自己の提案によつて會議が決裂せんとするやシヤハト代表は急遽ベルリンに歸り、決裂はやがてアメリカがドイツに對して金融封鎖を行ふであらうといふドイツ・ブルジョアジーの危惧を聽いて再び急遽パリに歸つて妥協を行つたごときも、アメリカ金融資本がこの會議をつよく背後から容束しつつあるとを語るものである。

賠償問題について直接この會議で決定したヤング案の主たる內容は、次のごとくである。(一)ドイツよりの賠償年次金を二つに分つて一は本來の賠償受領國のうけとる三十七ケ年間にわたる年次金で、他はアメリカの受取るべき二十二ケ年間にわたる年次金で各年次金は二十億五千萬マルクである。アメリカ受取りの年次金は、三十七年次金につついて支拂はるるものとする。アメリカがもし聯合國の債務を減じたときにはそれの三分の二がドイツに歸屬する。(二)繁榮指數の撤廢。(三)最初の十年間には、百八十六億マークだけ支拂へばよい。(四)ドイツの經濟上の監督は從來賠償委員會總務委員の手にあつたが國際支拂銀行(Bank für den internationalen Zahlungsausgleich)或は賠償銀行の手にうつる。(五)九月一日以後の占領費はドイツの支拂年次金より排除されること。(これはルール地方の撤兵を意

味する）（六）賠償銀行の設立。等々。

右のごとき主たる内容を有するヤング案は、千九百二十九年の八月六日に會合せられたハーグ會議に於いて、僅小な變更ありたるだけで參加諸國によつて公然と承認せられた。この會議にはイギリスよりスノーデン、ヘンダースンが出席し、フランスよりはブリアンが代表し、ドイツよりはストレーゼマン、シヤハト、ヒルフアーデイングが出席した。

次に、ヤング案およびヘーグの會議の論爭において、直接アメリカ帝國主義と關係ある若干の點について記述しよう。

（一）賠償銀行。賠償銀行案は、ヤング案の中樞をなすもので、この銀行設立の背後にはモルガンを中心とするアメリカの金融資本が策動してゐる。この銀行は、一方では直接賠償問題に關係する機能を有するとともに、他方國際的の資本關係、金融關係に一定の中心と統制とを與へんとする機能を有してゐる。アメリカ帝國主義にとつて重要なのはむしろ後者である。第一にこの案はモルガン財閥より出でたる案であり、アメリカ金融資本のヨーロツパ侵出、世界制覇の案である。國際的の中心銀行が設立せられて、それによつて各國家間の資本の融通を統制するとすれば國內に過剩なる資本を有するアメリカが最も大なる利益を得るであらう。而して、この銀行の國際的活動が大なれば大なるほど、その構成の規模が大なれば大なるほどこの銀行を通じてアメリカの資本に依存する必要はますます大となるであらう。そして、この銀行はやがてロンバート・ストリートに代つて國際金融の中心となるであらう。そのことは同時に、世界の金融の全中心がアメリカに全く移り行くことを意味するであらう。モルガンの策動はかくしてすこぶる深刻であり、惡辣である。從つて、ハーグ會議に於いては、議論の中心となり、資本金は三億ダラーより一億ダラーとなり、活動範圍も出來るだけ小範圍にとどめんとする運動が主としてイギリスによつて成された。ヘーグ會議では、銀行組織委員會の成立を見るに至らなかつた。しかし、ヤング案の中心的問題としてこれを表面に持ち出したのはアメリカ金融資本主義の一つの成功であらう。

（二）ヨーロツパ合衆國案。フランスの代表ブリアンは、ジュネーヴの會議でヨーロツパ合衆國案なるものを提唱した。ブリアンはアメリカに遠慮しながら、『ヨーロツパ合衆國は決してアメリカを敵とするものではない』と言つてゐるが、そのヨーロツパ合衆國が、アメリカに對するヨーロツパ債務國家の對抗であることは明瞭である。フランス・ブルジヨアジーの機關紙『エール・ヌーヴエル』は、その論說において、ラインランドより撤

兵して、ドイツとともにヨーロッパ・ブロックを作り、フランスが盟主となつてアメリカの横暴なる資本に對抗せよと言つてゐる(ブラウダ所載、イム・プレ・コールによる)。そして、フランスはアメリカの資本の御蔭を最も多く蒙つてゐるドイツをアメリカの桎梏から解放して、ヨーロッパ合衆國内にひき入れやうとしてゐる。イギリスも亦單獨ラインランド撤兵の好餌をもつてドイツをイギリスより離隔せむとしてゐる。ヤング案は聯合國のアメリカ國債問題と賠償問題とを連結せしめて、ドイツの利益とアメリカの利益を對立せしめてゐる。ヘーグ會議の第一日に、ドイツ代表ストレーゼマンは、ヨーロッパ合衆國論には賛成であるが、フランスが盟主となることは御免蒙ると言つてゐる。このヨーロッパ合衆國論は、一方アメリカに對抗するものであるとともに、他方また、サヴエート聯邦建設以後十年、ゴスプラン統制のもとに孜々として社會主義的合理化運動を行つて健實なる發展をなし資本主義國を威嚇しつつあるサヴエート聯邦共和國に對する敵對ブロックでもある。ドウ・ヴリーは言ふ。『ヨーロッパ合衆國! それはすなはち、ドイツをふくむ大陸資本主義諸國のフランス資本主義を盟主とする聯盟で、サヴエート・ユニオンおよびアメリカ合衆國のすぐれたる經濟的・政治的・軍事的競爭に對抗するものである』と。もつて、ヤング案なるものが、如何に中間的・妥協的な性質を有するものなりやが明瞭となるであらう。

(四)ヨーロッパに於けるアメリカ帝國主義の將來

アメリカは、單に資本貸付によつてヨーロッパを桎梏するのみならず、國際的獨占組織を通じて、ヨーロッパ生産を支配してゐる。一例を擧げれば、アメリカのインタナショナル・ジエネラル・イレクトリック・カンパニーは、ドイツの有名なるアー・エー・ゲーの親株三千萬株を買收して、アー・エー・ゲーと協定を行ひ、社長ヤング(ヤング案の考案者)は近くアー・エー・ゲーの監査役となつて、アー・エー・ゲーを支配せんとしつつありと言はれてゐる。

アメリカの社會主義者ローヴストン、ペパー等は、アメリカ繁榮の永久性を信じ、アメリカのヨーロッパ征服がやがて事實とならんことを指摘してゐる。トロツキーのごときもアメリカの力を過大に信じてゐる。

だが、アメリカのヨーロッパ征服は果して可能であらうか。

(一)アメリカ自國の資本主義内にすでに多くの矛盾が發生してゐる。株式恐慌を先驅とする經濟恐慌、生産の制限、五百萬

をこゆる固定的失業の恒常的存在。

(二)ドイツは最早有力なる帝國主義として再起し、イギリス、フランスまた戰後の疲勞より起き上りつゝある。從來のごとくアメリカの資本がヨーロッパに於いて無人の境を行くがごとき活動をなす範圍は漸次せばまりつゝある。

(三)ヨーロッパにはすでに反アメリカの運動がしきりにおこりつゝある。ヨーロッパ合衆國論、賠償銀行に對する反對、等々。

これらの事情はすべて、アメリカのヨーロッパ征服をさまたぐる要素である。そこに、イギリスあるひはフランス帝國主義とアメリカ帝國主義との正面衝突である×××××がかすんで見える。そして、資本主義は、自己の胎内に包藏せる運命にひきづられて、やがては再び暴力的な發現形式を採らねばならなくなるであらう。賠償問題およびそれと竝んで今日しきりに行はれてゐる軍縮問題は、かゝる過程進行途中の妥協的パウゼである。妥協につゝまれた帝國主義諸國の尖鋭なる對立の實相を見よ。

勞働組合運動の戰術的轉換

加藤勘十

一

我が勞働組合運動は矜るべき一箇の傳統をもつてゐる。それは戰闘的傳統である。露西亞××に刺戟され、米騷動に激發されてスタートを切つた勞働組合運動は、素朴的ではあつたが著しく闘爭的であつた。而して、闘爭意識の生成過程において、未だ充分なる生育を見ないうちに、戰後の反動期に當面して、現實闘爭の過程に苦難の試錬を經ざるを得ない立場に立たせられたことは、彌が上に、闘爭を鍛冶されたのである。

今日、意識的に反動化の傾向さへもつ右翼指導者の影響下にある組織大衆と雖も、闘爭の傳統を矜持してゐる。勞働總同盟——右翼團體の王座に位する總同盟——が、今日依然として、勞働大衆の一部に魅力を有する所以のものは、過去の輝ける闘爭の歷史の餘勢である。更に、現下の帝國主義ブルジョアジーの決死的狂暴なる××酷使は、組織未組織を問はず全勞働大衆に對して闘爭の拍車を加へてゐる。吾々は現實闘爭の過程を通じ、戰闘的傳統の矜持を負ふ全勞働大衆に對し、明確なるプロレタリア意識の把握の上に立たしめねばならぬ。

我が勞働組合が勞働者の組織率において、全勞働者數四百八十三萬一千八百十五人に對し、僅かに三十二萬一千百二十五人（六分六厘強）（昭和四年六月現在）しか獲得してゐないにも拘らず、其の闘爭が常に資本家階級を戰慄せしめつゝある所以は、其の質的充實、從つて、其の行動の未組織勞働大衆に與へる影響力の偉大さに歸せざるを得ない。然しながら、勞働組合の使命職分の立場からすれば、單なる影響力の擴大化に滿足すべきでなくして、未組織大衆の組織化と、組織と闘爭を通じての意識

の高揚と、プロレタリアの闘爭の最高形態への媒介とに、全力が注がれねばならぬ。我が勞働組合は現實當面の經濟主義的闘爭の緊激の故に、この點に對する努力の缺除されたることを自認し反省されねばならぬ。

現に組織大衆の闘爭慾求の熾烈化にも拘らず、ブルジョアジーの決死的狂暴――ブルジョアジーの明確なる階級意識の把握に立つ意識的階級的從つて當然に政治的攻勢――に直面して、多くの場合に守勢を餘儀なくされ、經濟主義的闘爭の限界に其の闘爭が限局されてゐる事實は、一つは組織大衆の闘爭的であることが、それと理論的な一致をもつ階級意識の把握が隨伴するのでなくして、意識の把握は數歩の後にあつて、潜在的な階級的感情が闘爭に驅り立ててゐることゝ、數量的に微力であると云ふことが、闘爭體に與へる心理的影響等と相俟つて、守勢を餘儀なくされ、闘爭を限局されざるを得ないのではないかと思はれる。

既に資本家階級が明確なる階級意識に基いて、階級的、政治的攻勢の戰術を取つて迫つてくるに對し、勞働階級が闘爭形態の一表現としての勞働組合運動を、依然として素朴なる興奮的闘爭慾求のみをもつて主力とし、經濟主義的闘爭に限局せしめるならば、勞働階級は恐らくは資本家階級の永遠の隷屬物として、困苦と窮乏に呻吟せざるを得ないであらう。此處にこそ、勞働組合運動の戰術的轉換が試みられねばならぬのである。

試みに、昭和四年度の闘爭が如何に展開されたかを支配階級の聲に聽いて見る。

『我國產業界の萎微沈退は例年に比し更に一段の深刻を加へ、各企業相踵いで事業經營の困憊を來たし、勞働者の解雇、勞働條件の低下、勞働賃銀の不拂等の問題を隨所に發生せしめ、殊に產業合理化の聲は經濟難に處する唯一の手段なるが如く觀察されて、さなきだに企業の合同整理、機械利用による勞働者の解雇、生產費低下の爲の勞働賃銀値下等の問題を發生せしめたばかりでなく、金解禁準備としての公私經濟の緊縮の提唱實行と、一面、解禁後の影響を警戒して事業主が自ら整理縮少を斷行した事等によつて、直接間接に勞働者の生活を愈々脅威し、勞働者が其の利益擁護のためにする防禦的抗爭を激發せしめ夥くべき爭議の增加を示した。

是等爭議の質的方面を見ると、最近の勞働爭議が概ね不可避的なものに限局された結果として、勞働者の要求事項の如きも切實眞劍なものが多く、從つて爭議の深刻化を示すものが相當數に上り、爭議に伴ふ犯罪の如きも往年に比して增加した樣であるが、一面、我國の左翼勞働組合運動が沈退し、反面に於て、主要勞働組合――國際勞働會議の代表顧問を利權とする(筆者)――が、大體右傾化の傾向にあると同時に、一般勞働者が漸次勝敗を無視した闘爭萬能のスローガンを信じなくなり、加之

不況時に於ける爭議が多く裏切者の續出を見て、勞働者の慘敗により一旦爭議の犧牲者となりたる場合の悲慘事を顧慮する結果、爭議に對して臆病になつた事等の關係から、漸次爭議に對する態度が打算的になり、穩健化した樣に思はれる。以上の事實から見ると、我國現在の勞働爭議は勞働者側の態度が比較的消極的であつたにも拘らず、產業界の深刻なる不振が爭議を深刻化せしめたと云ふことが出來る』

以上は、黃表紙――社會局發行の勞働時報――の昭和四年度に於ける勞働爭議概況報告の一齣である。

吾々は右の記述を要約して次の三つの事實と、二つの正反對の矛盾した暗示を摑むことが出來る。

一、產業界の不況と相俟つて、不況切拔けの方策としての產業合理化が、勞働者の生活を脅威し窮乏化せしめる。從つて、勞働者の生活防衞手段としての爭議を激發增大せしめた。

二、勞働者の眞實なる指導力である左翼勞働組合の勢力が退潮し、資本家階級との協調に甘味を貪らんとする右翼指導者の影響下にある組合が穩健化し、臆病化し、只管に哀訴歎願的態度を取れるにも拘らず、爭議は不可避的に發生し、爭議に伴ふ犯罪が增大した。

三、勞働者の態度は消極的であつたが、產業界の不振はいや應なしに勞働者を深刻なる爭議に驅り立てた。

また、二つの矛盾した暗示とは、ブルジョア進步主義者の立場からする現段階の正直なる見通し、從つて、歷史的必然としての階級對立の激化が、歷史の必然に反抗して、自己の支配者的優越を保持せんとするブルジョアジーの責任であることの告白と、支配階級の支配的機構の一翼としての社會局の立場からする勞働階級を反動化、萎縮化へ誘導せんとする努力とである。

吾々は右の事實から當然に次の結論を見出す。

卽ち、沒落の斷末に喘ぐ帝國主義ブルジョアジーは、明確なる階級意識の把握の上に立つて、あらゆる勢力を動員し、自己の矛盾勢力であり同時に自己の利潤を生む母體である勞働者階級を完全に克服して、永久の隷屬物たらしめんために、決死的狂暴に猛り立つてゐること、從つて、如何に勞働者が自己保存のために彼等に哀願すると雖も、彼等から與へられるものは、假釋なき彈壓と虐使の笞のみである。

『願ふものは與へられず×ふもののみ與へらる』然らば、吾々は如何にして彼等の狂暴極る攻勢と××すべきであるか。問題は此處にある。更に具體的には、帝國主義ブルジョアジーの專制的支配下に、勞働組合運動が如何なる戰術基準――行動綱領――と戰術形態を選ぶべきかにある。

吾々は此處で、勞働組合運動について、レーニンが公式的に

規定した言葉、「勞働組合は階級的結合の××として、資本主義發達の初期における勞働者階級の巨大なる進歩であつて、プロレタリアの階級的結合の最高形態、卽ちプロレタリアの××的××——指導者と階級と大衆とが不可分の全一體として結ばれない限りは、その名稱にあたひしないであらう——が成長し始めた時には、勞働組合は不可避的に、いくらかの反動的特性を、いくらかの職業組合的偏狭性を、いくらかの非政治主義への傾向を、いくらかの化石性、等々をおび初めた。然しながら、勞働組合を通ずることなくして、それと勞働階級政黨との××××を通ずることなくして、プロレタリアートの發達は斷じて實現しないし、また實現され得ないであらう」を、前記の「勞働時報」の報告と併記して見る場合に、つきせぬ興趣を覺ゆる。と同時に勞働組合の形態が刻明に浮び出て來る。卽ち勞働組合は、プロレタリアの階級的結成の端緒的××であり、最高形態への媒介體であり、同時に當面の鬪爭體でもある。從つて、勞働組合運動は階級鬪爭の戰略、戰術と緊密不可分の關連をもつてゐる。が、問題は現下の我が國の情勢において、勞働運動が如何なる戰術と鬪爭形態を選ぶべきかにあるをもつて、問題をこの點に集中して述べたいと思ふ。

二

上述の抽象論の具體的代表的表現として、今回の市電爭議を觀る。元來、爭議の批判は容易の業ではない。殊に私のごときストライキ・マンとして大小幾多の爭議に參加し、現に勞働組合關係の立場にあるものは、爭議當事者として人知れない苦心を拂つた爭議に對し、批判者が第三者的無責任において、外面的事實だけを素材として批判することに尠なからざる異議を有するものであるが故に、今、立場を代へて市電爭議を批判するにしても、單なる批判者としての立場からではなく、自己の議論の考證として引用するものであること、從つて若し事實を間違つて記述せる場合は、喜んで訂正するであらうことを斷つておきたい。

市電爭議は、電氣局當事者が地方自治體の理事者として、公共事業を管理する立場を忘れ、純然たる資本家的——無理もない、今日の所謂公益事業と稱する、國家若くば地方自治體で經營されてゐる諸多の事業は、資本主義的營利採算の下に經營されつゝあるが故に、其の當事者が不知不識の間に、資本家的根性に墮し、自らの立場を忘れてしまう——立場に立つて、勞働者の既得權である勞働條件の劣惡化を圖らんとする逆攻勢をとつ

たことに端を發してゐる。即ち市電當事者の態度は、ブルジョアジーのプロレタリアートに對する階級的政治的鬪爭の展開である。

從つて、このブルジョア的攻擊に對立して自己の既得權を防衞せんとする交通勞働組合の指導者諸者は、當然に其の鬪爭を政治鬪爭の戰野に發展せしめねばならなかつた。

然るに交通勞働組合指導部の取つた戰術――尠くとも外部に現はれたもの――は、純然たる經濟主義的のものであつて、何等の發展性をもたざるものであつた。市電當局が階級的立場に立つて、當面の經濟的損失を度外して、充分なる手配殊にスキャップを迎へる遺漏なき準備を完了して攻勢を取つてゐるときに、組合の指導部は、爭議を同一產業全體に發展せしめやうとしなかつたのみならず、同じ市關係の市從業員組合、市電協同會等とさへ連絡に缺くる處がある有樣で、況んや他の勞働組合に對する連絡の如き思ひもよらざる狀態で、僅かに特殊な關係を部分的に持ち得た人々のみが、爭議團と個々に接觸したに過ぎないのである。

例へば、市電當局が、爭議發生前から、吏員を總動員し、裏切者募集のビラを手廻しよく印刷せしめてこれを公示し、青年團を階級鬪爭の渦中に引き込む等、果敢な階級的飛躍を見せつゝあるに對し、組合指導部は、自ら組合本部を放棄――勞働組合の今日の社會的存在は、法律的に認められてゐるのではなく全組織勞働者の撓まざる鬪爭が、遂に實力的に獲得したものであつて、實に鬪爭の結晶體である。故に組合本部を放棄したことは、とりも直さず、勞働階級の鬪爭の實力的獲得物を放棄したことを意味する――して移動本部の形態をとつた。移動本部制の可否は暫くおき、組合本部を放棄した點は、何んと云つても一つの失敗であつたと云はざるを得ない。爭議團の統制は其の出發において見事なる緊張を見せ、祕かに勝利の豫想をさへ感ぜしめたのであるが、第一に所謂四元老――元老など云ふ名稱からして怪しからん――の公然の裏切が行はれて折角の統制も見苦しきものとなつて了つた。四人の裏切行爲固より惡むべきであるが、組合指導部の爭議指導についても尠なからざる不滿を感へざるを得ない。

市電爭議は當然に政治鬪爭へ發展せしむべきであり、また、斯くするにあらざれば決して勝利を結果することは出來なかつたのである。されば、他の組合は勿論、各無產黨も共同鬪爭委員會を組織して、手ぐすね引いて、鬪爭の擴大化と深化とに努めんと待ち構へてゐたが、肝心の指導部と充分な連絡が取れないために、あたら勝利をロストして了つた。

また、現段階において、經濟主義的限界に限定された爭議が、如何に慘めな結果を招來したであらうか。實に市電爭議は好箇の見本である。吾々は市電爭議の生々しき經驗と教訓を、吾々の將來の鬪爭の上に活かして用ゐねばならぬ。

更にこの機會に一言すべきは、青年團の裏切行爲である。裏切行爲は、如何なる辯明が用ゐられやうとも、背信的行爲である。勞資の階級對立は、資本主義必然の所産であつて、決して勞働者が無理に煽動したから對立を激成し得るものではない。對立が激化するがためには、それを可能ならしめる內部的原因が存在せねばならぬ。資本主義が內包せる矛盾が極度に成長すれば、或は資本主義それ自身の存立を實質的に脅かす要素たり得るのである。爭議は其の途中においての矛盾の顯現である。資本家階級が、自己の組織內に內在せる矛盾を成長せしめざらんがために、あらゆる勢力を動員して、これを防止せんと努めることは彼等に取つて一應の理窟であらう。だが、青年團は如何なる存在であらう？　青年團が如何に官僚組織であり、如何に專制的統制下におかれたるものであるにしろ、青年團それ自身が、資本主義の機構の一翼ではない筈である。中間社會群が嚴密なる意味で、階級對立の外に超然たり得ないのは當然であつて、何れか一方の階級勢力に吸集せらるべき性質のものではあるが、青年團構成の內容から云ふならば、當然にプロレタリアートの階級勢力に融合溶解せられなければならぬものである。吾々は少くとも、青年團の官僚的組織に反抗し、自主的青年團に改組せしむべき、方策を決せねばならぬ。

三

市電爭議の教訓にも明かなる如く、最早、吾々は勞働組合運動の戰術の基準——行動綱領——を決定するに當つて、單なる經濟主義的限界に立つてはならぬ。一つの小さな爭議を扱ふにも、若し經濟主義的鬪爭の限界に固定するならば、勝利は到底吾々に惠まれないであらう。

然らば吾々は如何なる基準——行動綱領——によるべきであらうか。今年のメー・デーに全勞働大衆によつて決定され、鬪爭を宣誓されたる決議こそは、勞働組合運動當面の鬪爭目標であらねばならぬ。

一、資本家的産業合理化絕對反對
一、資本家政府全額負擔の失業保險法卽時制定
一、失業反對運動を全國的に捲き起せ
一、團結權、罷業權を確保せる自主的勞働組合法の制定
一、馘首、賃銀値下絕對反對

一、指導者の固定化との鬪爭
一、言論、集會、結社、出版の自由獲得
一、治安維持法竝に暴壓諸法令即時撤廢
一、帝國主義戰爭反對

吾々は常に勞働組合の歷史的過程に於ける使命と職分と、鬪爭目標とを明示して、未組織大衆に呼びかけ、これを組織化することに絕へざる努力を拂はねばならぬ。また、勞働者の職場に於けるどんな小さな不平でもこれを逃がすことなく取り上げて、鬪爭へ發展せしめねばならぬ。而して、爭議が展開されたる場合は、當面直接の要求である經濟的目標と、政治的鬪爭への發展の過程との關連を充分に解說して、大衆の理解と信頼をもつてする活潑なる行動を誘發せなければならぬ。

市電爭議の敎訓によれば、指導部は所謂左翼的要素によつて構成されてゐたのであるから、當然に政治的鬪爭へ發展せしめるべく目標が爭議團大衆に指示されねばならなかつたのであるが、このことなくして終つたのは、所謂左翼的幹部の諸君が、資本家側の逆宣傳に追ひまくられて、其の方の防衛のために時間と精力を奪はれて、肝心の爭議の發展性について考慮される餘裕がなかつたのかも知れないが、それは指導者諸君の大きな手落ちである。とは云へ、資本家階級の分割支配のために勞働者側を混亂せしめんとする意識的な逆宣傳に對する方策は當然に考慮されねばならぬ。

單に資本家階級の常用手段としての逆宣傳の流布ばかりではなく、對立勞働組合からのそれをも考慮されねばならぬ。レーニンの曰つてゐるやうに『プロレタリアートの前衛黨が成長し始めると、勞働組合は不可避的に幾分かの反動性、固定化を現はしてくる……』のであつて、これは勞働組合が階級的に端緖的結成である關係から來るのではあらうが、我が國の如く出發の頭初から鬪爭的に訓練された勞働大衆は、少しく意識の高揚化のために拍車が加へられるならば、恐らくはそのことをなくしてすむのでないかと思はれる。

吾々が最も恐れ且つ警戒せなければならないことは、大衆の端緖的素朴さから來る反動特殊性の顯現に對してでなく、指導者の指導的優越的慾求の表現としての意識的なる右翼化、反動化である。彼等は勞働大衆が直接の慾求である經濟主義的要求に對して痛切なる執着をもつことを、多年の經驗によつてよく承知してゐるが故に、大衆のさうした執着を巧みに利用して、鬪爭を其の限界に留めしめ勞働大衆をして、鬪爭の無力に對して失望を感ぜしめるが如きことなしとせないのである。故に組合運動の鬪爭の基準の一つとして、組合指導者の固定化に對す

る闘爭が規定されなければならぬ。

更に注意されねばならぬことは、爭議の進展過程に於ける教育的効果である。闘爭の實踐を通じての教育効果は、單なる印刷物を通じての効果より遙かに著大なるものあること勿論である。故に、この過程に於ては、前掲の行動綱領のどの一つを論ずる場合にも、資本主義機構の曝露を主として教育的効果を上げしめねばならぬ。

四

已に勞働組合運動の行動基準が狭隘なる經濟主義的限界から、階級的政治的闘爭への發展を不可避的條件とする以上、果して、現在のあるが儘の勞働組合の組織形態が、闘爭主體として缺くる處なき組織形態であるや否やの吟味を試みねばならぬ。

我國の勞働組合は餘りにも小組合の分立が烈し過ぎる。總勞働者數の僅かに六分六厘の組織率しかもたない勞働組合は驚くべし五百四十二の組合に分立してゐる。從つて、一組合平均僅かに五百九十二人の組織率である。一組合僅かに五百九十二人位では、假りに如何に優秀なる前衛分子ばかりの結合であつても、大した働きはなし得ない。況んや、素朴な端緒的結成であるに至つては、甚だ心細い次第である。

更に之れを業態別に見るならば(昭和四年六月現在)

種別	組合數	組合員數
機械器具	六四	一〇四、六三七人
化學	六一	一二、六五五
染織	二一	二一、〇六四
飲食物	一七	五、九一六
雜工業	九四	一五、七七三
鑛業	一五	六、二二〇
瓦斯電氣	一二	一〇、二六四
運輸交通	六七	一二九、〇〇八
通信	一	一、九五〇
土木建築	二〇	二、二七五
其他	一七〇	二四、六六七

右表に明かなる如く實に貧弱極る組織内容であると云はなければならぬ。

吾々はこの數字に基いて、闘爭力の集中强化のために如何なる努力を拂ふべきかを決定されるであらう。云ふまでもなく、組合の整理合同による戰線の單純化、而して其の當然の發展として産業別整理へ歸着せしめねばならぬ。勞働組合の組織形態については、誰でもが、『階級的組織としては産業別組合、闘爭的組織としては地域的組合』であると直ぐに答へる。私は、階級的組織としての産業別組織と闘爭的組織としての地域的組織

とが、互ひに經となり緯となつて一體に組織されたときに、勞働組合としての理想的な組織形態を見ることが出來ると遙か以前から、その組織の完成に憧憬れてゐるのであるが、容易に完成されさうにもないのを遺憾とする。

さりながら、理想的組織形態が組織されないとしても、鬪爭は寸刻も停止することなく展開される。勞働者階級が戰鬪主體の完成を爲し得ないうちに、資本家階級は、ぐん〴〵と企業の集中統制を行つて、獨占形態へ發展しつゝある。組織の分散的なると、統一的なるとは、鬪爭の相手方へ與へる迫力の點において、雲泥の相違があるであらう。資本家階級が統一組織の上に立ち、勞働者階級が分散組織の上に立つ。正に主客顚倒の觀がある。吾々は組織問題についてモット眞劍に考へねばならぬ。

而して、問題は現在の小組合に分立せる形態の下に於ての鬪爭をどうするかにある。現在の小組合分散の狀態では、忌憚なく云へば、鬪爭能力をもたない否鬪爭能力をもち得ないと云はざるを得ぬ。近時の資本攻勢に追出された爭議――純然たる經濟主義的鬪爭――に對してすら、充分なる戰ひを展開し得ないで多くの爭議が慘敗に終る所以は、資本の攻勢が意識的であり執拗であるに對し、勞働組合の鬪爭力が角力にならない微弱なる點に歸する。

吾々は鬪爭基準――行動綱領――を決定して政治的鬪爭への進出を規定し、過去の狹隘なる經濟主義的鬪爭の殼を打ち破つて、戰術的轉換を圖り得たとしても、鬪爭主體としての組織問題を如何にするか。問題は何時までも殘される。それではいけない。

吾々は一つの勞働爭議を扱つてこれを政治的鬪爭に發展せしめやうとするならば、勢ひ自己の固有の組合的戰術から一步進出しなければならぬ。其の一步進出したときの形態が如何なる形態であるかを考ふることによつて、組織問題に具體的の一步を進め得るのではないかと思ふ。卽ち、一步前進した場合の形態は組合の延長であつて實は組合ではない。これこそ實に組合を基準とした、地域的に制約されるか、產業的に制約されるか姑くおいて、工場代表者の結集であらねばならぬ。この工場代表者の結集體をもつて、外部鬪爭の基準たらしめよ。勞働組合は其の生成過程の素朴性を鍛冶することによつて、洗錬されたる組織體となし得る。卽ち職場に組織的な牢固たる根を張り（職場委員）これを組合組織の單位とし、而して政治鬪爭の主體たり得る工場代表者協議會を構成せよ。恐らくは、勞働組合運動の上に、一大飛躍を見ることが出來るであらう。

五

之を要するに、勞働組合は勞働者の階級的端緒的組織體として、常に必ず他の如何なる組織體にも優して未組織勞働大衆と接觸する。勞働組合の組織が擴大することは明かにそれだけ階級的勢力の増大を意味する。合理的大衆政黨も未組織大衆との接觸面をもつとはもつであらうが、大衆政黨のもつ未組織大衆との接觸面は主として、プロレタリア以前の小市民層若くは小農民層である。小市民層、小農民層は素よりこれを無產階級の陣營に獲得せなければならない要素ではあるが、階級對立についての主勢力とはなり得ない分子である。これが主勢力たるものは、プロレタリアートである。勞働組合は未組織プロレタリアを獲得する第一線の機關である。無產政黨に關心をもつほどの人々は、より以上の關心を勞働組合運動に繋がれねばならぬ。（五・四）

市電ストライキの靜觀

市電ストライキ始末記

堺利彦

一　序

明治四十五年一月一日、東京市の電車に初めて大ストライキが起つた。新聞の投書家が面白い狂句を吐いた。「車掌曰く、ハイ止まりまアす三個月。」その時、片山潜君が煽動か何かの罪で六個月の禁錮に處せられた事を思ひだす。

次に大正五年四月三日、二度目の電車ストライキがあつた。その日は櫻の花に雪といふ珍らしい光景であつた。所が、櫻の花に雪と云へば、私のいつでも直ぐに思ひだす、一つの漢詩がある。落花紛々雪紛々、雪を踏み花を蹴つて伏兵起り、白晝斬取る大臣の首、落花紛々雪紛々。これは今から七十年の昔、井伊大老が櫻田門で殺された時、私の郷里の詩人村上佛山の作つた詩で、頗る善く人口に膾炙されている。從つてこれらの連想が、私をして電車ストライキに對し、いつも何か特別の感慨を起させるのであつた。

殊に又、去年のストライキと、今度のそれとは、自分が多少とも直接の關係を持つ地位にあつただけ、それだけ又殊に深い感慨を起させられた。私はこゝに今度のそれの始末記を作つて見る。

二　ストライキとその要求

昭和五年四月十二日午後二時半、東京交通勞働組合の實行委員十五名は東京市電氣局に出頭して、賞與一割減反對等七個條の要求（後に記す通り）を提出した。

この日、電氣局では六大都市電氣局長會議の爲、寬局長も山下理事も不在であつたので、勞働課長が應接したが、『會見僅かに三分、兩者とも全く口をつぐんで一言も吐かず』『回答を五日以內と約束し』『相當險惡な空氣を思はせ』た。

組合側ではこれより先、三日に常任執行委員會、十日に中央執行委員會を開いて右の要求を決議し、猶同日、本郷佛教會館に演説會を開いて氣勢を揚げたのであつた。筆者もこの演説會に出席したが、組合員達の演説は(女車掌をも交へて)實に熱烈痛快を極めたものであつた。

之に對し電氣局側では『全部はねつける意向で態度極めて强硬』であり、『斷然たる處置に出る』とさへ威嚇して居たが、十四日に至り全部大體拒絶の回答(後に記す通り)をした。

そこで組合側では止むを得ず、首腦部(山下卯三郎、赤城壽仙、篠田八十八、熊本利男の四氏)は直ちに行方を暗まし、移動會議を開きつゝ種々の戰備を整へた。そして十五日午後二時、『回答不承認』の旨の電話を電氣局にかけ、同時に再要求書を提出した。電氣局は之を『單なる引延しと見て』直ちに拒絶した。そして吏員の『非常招集』と『半數交行』を行ひ、『死物狂ひの運動を續け』た。十五日夜は『薄氣味惡い靜けさ』を以て明けた。

こゝで組合側の要求條項を考へて見る。

一、賞與一割減絶對反對
二、震災特別給與金卽時支給せられたし
三、雇員並に臨時技工の解雇絶對反對
四、少年車掌の停年解雇反對
五、退職一時金および退職年金の撰擇を自由にせられたし
六、職制改革に依る收入低下させぬ樣されたし
七、不當處罰絶對反對
八、少年車掌出入庫手當支給　（追加）

三　要求と回答の意義

右の第一は、去年當局が突然二割減を提案して、それが爲め忽ち罷業を見るに至り、警視總監が大あわてゝ仲裁に入つて、ヤットの事で一個年限り一割減といふ事に落付いた問題である。それを當局が平然として、今回又持出したのだから容易でない。組合は之を以て『我等の生活をおびやかすのみならず、既得權を侵害するもの』と爲し、『卽時撤回』を要求したのである。元來、市電従業員の賞與は一般俸給者の賞與と違ひ、嚴密なる規定と約束とに從ひ、勤務の數量に依つて一々算出されるものであるから、決して定額の俸給外に於ける恩惠的給與でなく、むしろ不定額なる實質的時間給の一部と解すべきものである。組合がそれの減額を『既得權の侵害』と目する所以は卽ちそこにある。彼等は幾回かの罷業その他の犧牲に依つて、初めてそれを勝ち得て居るのである。それを濫りに取上げられて堪るものでないのである。

第二、第三、第四(及び第八)は大して重要な問題となつて居ないが、第五は甚だ重要である。この退職一時金と年金との選擇は、『本規定制定の際、『明かに其の自由を認められたるに、たま〱當局者より其の『自由ならざるが如き言を聞くは』不都合であつて、これ又『既得權の侵害なり』と云ふのである。當局は之に對し、『篤と考究すべし』と答へて居るが、斯樣な答へ方が實際上、拒絶に過ぎない事は、從業員達が幾度も經驗して居る所である。從業員としては、多くの場合、一時金を利益と

するのに、當局は自己の便宜の爲、成るべくそれを年金にしようとするのだから、從業員がそれに信頼せず、滿足しないのは當然である。

第六に對する回答『事情に依り決定すべし』も亦同様で、當局に信頼を持ち得ない從業員としては、當局が事情を如何に見て、如何に決定するか、大なる不安を感ずるのが當然である。

第七は、『不當處罰』などいふものは今日まで一つもやつて居ない、今後もやらない、當局のやつた處罰は皆當然だと云ふので、如何にも痛快な論理的回答と聞える。それだけ冷酷な、傲慢な、そして得意滿面な、喧嘩腰の回答である。即ち當局は、もはや大量馘首を大びらにやり得ない事になつたので、その代り實際上、最も巧妙にそれを成し遂げる爲、從來、單なる過失として默認され、或は輕微の過失として始末書提出くらいで濟まされて居るものを、近來は急に嚴酷な態度を以て見つけ次第ビシ／＼と處罰する事になつて來たのである。一例を擧ぐれば、市祭の切符賣場檢査の時、僅か六十二錢の現金過剩があつた爲、直ちにそれを盜みとして處罰した事がある。又それが爲、特等級の故參從業員が轉職處分に附せられ、忽ち雜役夫に落された事がある。斯様にして、從業員に盜名を附したり、或はその年功加俸を剝奪したりする爲、當局は常に監察係と稱する密偵制度を設け、惡辣陰險なる『刑事巡査の古手』を使用して巧妙に所期の實効を奏して居るのだと云はれて居る。從つて當局が當然の處罰と稱する事實に對し、從業員が『不當處罰』として『絕對反對』の聲を擧げるのも、亦實に當然だと云はねばならぬ。殊に從業員が之を防止する爲、『取調べに從業員代表を參加せしめること』『密行制度を廢止すること』『處罰に對し從業員代表の陪席制度を設置せられたし』と要求するのは、誠に正々堂々たる態度である。

四　無産黨二派の態度

十四日午後、東京無産黨は書記長黑田壽男等に堀切市長を訪問せしめ左の決議を提出せしめた。作者は同黨所屬の市會議員であるので、黑田氏等と同行した。

『市電當局は前年爭議の際における約束を無視し、市電從業員に對して收入減少、大量馘首を以て臨むことは、社會不安を更に增大せしめんとするものである。今回の勞働者攻擊を以て財政立直しに基くものと主張してゐるが、然らば何故に當局は、市に不當に高價なる電力を賣付けてゐる鬼怒電その他に對し電力料値下げを迫らないのか、我等は當局が直ちに、從業員に對する收入減、馘首、並びにその背後に隱されたる交通勞働組合破壞の計畫を撤回し、電力料値下げを迫らんことを要求す』

この決議は、當局の財政立直し策の不徹底であり、ゴマカシである事を指摘した點と、眞の財政立直し策が電力値下にある事を指示した點と當局の眞意が組合破壞にある事を暴露した點とに於いて、極めて痛切である。

又十八日午前、社會民衆黨の市會議員たる嶋中雄三、和田操氏外四名は、市長を訪問して左の決議を手交した。

『市電當局者が從業員に對して挑戰的態度をとり、彼等の感情を激化

せしむるの嫌ひありしことは事實である、昨年末に於ける爭議然り、今回またその過ちを繰返さんとしつゝあるは甚だ遺憾に堪へぬ、我等は市當局がこの際、禍を未然に防ぐべく十分なる考慮をもつて善處せん事を警告する』

この決議も亦、當局の挑戰的態度を指摘したる點に於いて、極めて適切であり、有效である。

實際我々としては、當局(殊に寛局長)が兼てから組合ブッつぶし策を抱いて居る事を見て、禍根のそこにある事を信じ且つ恐れてゐるのであつた。寛君は曩に鐵道從業員組合をブッつぶした事を以て勇名を馳せて居る人物である。それが今、その年來の得意の筆法を以て東京市電に臨んで居る。口實は如何樣にも作りあげられる。只その挑戰的態度がある以上、從業員はイヤオウなく、それと應戰させられる事になる。去年のストライキが即ちその第一の現はれであり、今度の騷ぎが又それの蒸し返しであること、云ふまでもない。

十八日午後、東京市會無產議員團(社民黨嶋中外四名、東京無產黨堺一名)は電氣局に山下理事等と會見し、右と同樣の趣旨を以て、繰返し當局の挑戰的態度を批難し、種々の警告を發した。

五 總罷業遂に決行

斯くて十六日から十九日まで、双方にらみ合ひの形で、戰備はその間に着々と整へられ、當局は只だ『斷然處分』の威嚇を以て、開戰の口實を作るに汲々として居た。

二十日早朝、一萬一千五百人の總罷業が遂に決行された。一絲亂れざる組合の統制は實に驚くべきものであつた。市從業員組合(土木局、保健局の從業員の團體)の約五千人、市電協同會(電燈電力兩課の從業員の團體)の八百餘名も亦之に參加した。交通勞働組合の聲明書の大要、左の如し。

『當局は我等に對し斷然解雇をもつて威嚇し、理事者の失態を我々に轉嫁し來つた、我々はこれ以上隱忍するに忍びず、我等の生活擁護の立場から憤然起たざるを得ない。親愛なる全市民諸君、我等の苦衷を諒とせられよ』

當局は之に對し、職員や前從業員を動員し、更に青年團や在鄉軍人を利用し、高級を以て臨時運轉手、臨時車掌を募集し、辛うじて少數の電車自動車を運轉させたが、故障と負傷の事實は續々として出現した。

同時に當局は又、第一次首切りとして罷業者の首脳廿六名の解雇を發表し、更に『不良從業員の幹部』として第二次カク首百廿六名を發表した。そして猶ほ第三次、第四次のカク首をも敢てするといふ威嚇を發した。そして又多くの新聞紙が暗にその提灯持をして、罷業者を敵視するかの態度を示した。

六 無產議員團の反抗

廿一日午後、東京市會全員協議會が開かれた。無產黨議員團の代表堺利彦は論じて云つた。

『今回の爭議は主として電氣局長の從業員に對する挑戰的態度の結果

である。市長は勞働者の首を切る事をやめて、先づ電局長の首を切るべきである。市長は溫厚の君子として知られて居るが、その腹底には却つて氷の樣な、鐵の樣な、僞善の冷酷さが潛んで居ないとは限らない。そうした謗を免かれたいなら、市長は直ちに電局長の首を切つて、早くこの爭議を解決すべきである。』

堺が斯く『絶叫するや、議場騷然として、馬鹿野郞等、等、蜂の巢をつついたやうな有樣となつたので』『無產市議團六名は遂に憤慨して席を蹴つて退場した』。そのあとで『市會の各派は一致して』『從業員の要求を容るゝこと能はざる』旨を決議した。

同日正午、市電爭議無產黨共同鬪爭委員會の代表は衆議院の無產議員團を訪問し、內務大臣と警視總監とに對する抗議を依賴した。午後、無產議員團では片山、松谷、淺原の三代議士が內相と總監に面會して抗議を提出した。

七

廿二日午後、從業員有志の代表と稱する伊藤誠、馬場五四三、宮井昌吉、濱田藤次郎の四氏(謂ゆる組合四元老、或は右翼派舊幹部)が當局を訪問して『爭議解決案を提出』した。これが謂ゆる『組合右翼派の就業聲明』で、『整然たる總罷業もこゝに崩壞の一角を見せるに至つた』と云はれている。

この四氏は先きに組合から除名されて居る人々で、今斯樣な態度を取るべき地位に在る者ではないのである。そこで無產黨共同鬪爭委員會は之を『裏切り的行爲』『非階級的行爲』として『斷然排斥すべし』と決議し、その旨を四氏に警告した。又四氏の中、伊藤、濱田の二氏は大衆黨に屬して居るので、同黨の常任執行委員會はこの『一派の行動』に對し、『爭議團內部の事情如何に係はらず、階級的立場より吾等の斷じて容認し能はざる所なり』と聲明した。

然し四氏の裏切りは矢張り相當に切りくづしの效果を示すべき形勢に見えた。そこで爭議團首腦部は止むなく、左の解決條件を發表した。

(一)賞與一割減は本年限りとする事、(二)解雇者の全部的復職、(三)退職年金並びに一時金の自由選擇、(四)職制改革による收入減反對、(五)今後の解雇者を出さゞる事、(六)電局長の責任を問ふ。

八　無條件罷業打切り

廿三日深夜、姿を消して居た爭議團の幹部(熊本、篠田の二氏)は突然丸山警視總監を訪問して、爭議解決につき罷業團の面目の立つ樣な考へを求めた。總監は稍や心を動かしたといふ觀察もあるが、結局要領を得なかつた。

廿四日午後、爭議團の首腦部たる篠田、熊本、小野正造(市從組合)、荒木一(協同會)の四氏は市役所に出頭し、無產市議團立會の上、市長と白上助役とに面會した。爭議團側では、既にあれほど讓歩した解決案を發表したのだが、それに對する理事者の本當の氣持を聞きたい、ツマリ誠意を見せて貰ひたいと云ふのであつた。所が理事者側では、徒にかくも

づ就業してから、そのあとで協議すべきではないかと云ふのであつた。要するに『双方互に誠意を求めて』何等の『展開を見ない』のであつた。

その日、爭議團の首腦は堺宅に會合し、馬島市議はその使者として更に白上助役と會見したが、遂に何等得る所がなくて終つた。新聞紙は號外を出して罷業解決を報じたりしたが、同夜零時二十分、左の聲明書が發表され、爭議は更に繼續される事になつた。

『我々は爭議の解決につき全市民の利便のため殆んど降伏的條件をもつて當局に再度交涉し爭議解決に對する誠意を求めたるも、未だ市當局が十分なる誠意を有するや否やに確信を得るに至らざれば、爭議團としては遺憾ながらこのまゝ對峙し、一刻も速かなる當局の誠意の披瀝を待つの外なし』

然しそれも一夜の事に過ぎなかつた。廿五日午後一時過、罷業團代表は無產市議立會の上、更に市長助役と會見し、いよ／＼罷業無條件打切りの聲明をした。これで六日に亘つた大ストライキが曲りなりに片づいたわけである。

九　殘る復職問題

そこで只だ殘る所は、理事者が罷業團から信頼された所の誠意を如何に實現するかである。そしてそれの具體的の現はれは、カク首者の中どれだけが復職を見るかである。

その後、組合の幹部に頻りに復職の『所願』をなして居るが、市長は、それは局長の權限內の事だからと云つて局長に塗りつけ、局長は市會が復職に反對して居るからと云つて、自分の責任を逃れようとした。

市會では市民會、更新會などの最保守派の首領達が、復職反對の決議をさせようとして居たが、無產議員團以外、さすがにそんな決議までするには及ばないといふ二三派があつて、とう／＼それだけは出來なかつた。

それで結局、筧局長は自己の責任を以て復職拒絕を行つた。そして自分も辭職した。彼は百五十二人の首を切つて、その一つをも繫ぎとめない事を頑張り通して、そこに滿足を感じて辭職したのだらう。然し別の見方からすれば、彼も矢張り刑罰を受けたのである。人を斬る者は斬られる。私は先に彼の首の斬らるべき事を主張したが、彼は今、人から首を切られる代りに、自ら首を刎ねたのである。或はソウせざるを得ざるハメに立至つたのである。

所で復職問題はまだ續いてゐる。一方に筧君の首が切られた後、若し一方に首のつながる人達が出來るとするなら、それは大ぶん面白い現象である。

筧君の辭職が堀切君の辭職と關連して居るか否かは、私の知る所でない。然し堀切君がこの復職問題を放擲したまゝ辭職するのは、ずいぶん無責任だと思ふ。堀切君と白上君とは、暗に相當範圍の復職を約束して居る。少なくとも我々は左樣に感じさせられて居る。暗にした事を踏みにじるのは容易であらうが、それで心が濟むかどうか。

尾崎行雄、田川大吉郞、清瀨一郞の三代議士が、この問題について堀切市長に勸告を試みた時、三氏は矢張り私と同じく、暗にソウした感じ

を與へられたものと信ずべき理由がある。然らば堀切君は三氏に對して相當の責任があり、三氏は又社會に對して何程かの責任があつたわけである。復職問題はまだ今後本當に解決せらるべき問題である。

寛局長が第三次の首切りをやりかけた時、白上助役なり堀切市長なりの骨折でそれが食ひ止められたといふのは、多分事實であらう。それならば、それだけは確かに二君の手柄である。我々はそれに對して明白に感謝する。然しそれだけの骨折をした人達が、ナゼ今一歩の骨折をして呉れないのか。そこが謂ゆる『誠意』の現はれると現はれないとの境目ではないだらうか。

× ×

モウ許された紙數を超過した。あとは大急ぎで三四の論點を略記する。

一、一體今度のストライキは、理事者に丸く收める積りさへあれば必ず收められた點である。最初、從業員から要求が出た時、重要な諸點に對して充分親切な回答をしたなら、決裂には至らなかつたものと思ふ。即ち第二項以下に對して明白に讓るべきを讓り、そして第一項だけに對し飽くまで誠意を以て討究を費したなら、決してこんな事にはならなかつただらう。現に從業員達は程なく自ら第一項を放棄したではないか。

× ×

次に彼等が最も重要なる第一項を放棄した時、ナゼ理事者はそれを機會として解決の道に上らなかつたか。この機會をすら捕へない以上、理事者が組合ブッつぶし策の挑戰的態度だと認められるのに、辯解の仕樣はない筈である。

× ×

一、又理事者は財政の爲に賞與一割減をやるのだと云ふが、その一割減は總額にして廿五萬圓だといふ。然るに理事者が爭議鎭壓の爲に費した金は恐らく其の數倍に登つて居るだらう。そんな算盤の合はない財政策があるものではない。只、組合ブッつぶしの大政策の爲としてのみ、こんな無計算が理解されるではないか。

× ×

一、去年のストライキの時、市會議員の中には、勞働者を敵視する赤裸々の態度を示し、奴等がストライキをやるなら、我々は自らハンドルを握つて街頭に立つと豪語した連中が少なくなかつた。今年若しその連中が本當にハンドルを握つて、衝突や顚覆や死傷を續出させたら、その時にこそ、彼等が初めて本當に自己の非を悟つたであらうに、惜しい事をしたと思ふ。

× ×

一、又去年、寛局長は、奴等に罷業權があるなら我々にはカク首權があると放言した。この一語だけは、彼が辭職した後にも、決して忘れて

はならない。この惡言は必ず將來彼の後繼たる電氣局長の上に報いられるであらう。

×　　×

一、猶一つ、今度のストライキ中、新聞紙が無意識の場合もあるだらうが、ずいぶんひどく、罷業者の爲に不利を計つた。理事者側の威嚇の提灯を持つたり、裏切りの尻押しをしたり、今日中には三千人たしかに就業するなどと甚だしく誇張的な豫言を發したり、罷業者の『好戰的態度』などと、丸で反對な惡名を着せたり、その外まだ幾らでもある。ブルジョア大新聞社の根本方針としては仕方のない事だと我々もアキラメルが、平記者組の忠勤振かと思へば、つくぐ情なくなる。

×　　×

一、最後に猶一つ、『右翼幹部四元老』の除名斷行がまだ充分ハッキリと報道されて居ない。何といふナサケない見苦しい事だ。

市電大罷業實戰記

篠田八十八

一

我國の勞働運動史上に劃期的歴史的意義を印した今回の市電爭議は何故起らねばならなかつたか。そのためには我々は昨年來に於ける市電爭議に溯らなければならない。昨年十二月二日、電氣局の市電從業員に對する賞與二割減、昇給無期停止の暴擧に抗して、市電從業員一萬五千人は一齊に蹶起して全線に亙る交通機關のゼネ・ストを決行し、その結果、丸山警視總監の調停によつて賞與一割減、昇給一期間の停止で漸く解決を見た。しかも、この解決條件にも顧らず、本年度の東京市豫算は是等の條件を完全に無視して編成され、賞與一割減、昇給無期停止が漸次恒久性を帶びるに至つた。更らに之に關聯して所謂産業合理化による解雇、賃銀値下、歩合の低下、職制改革による從業員の大量馘首、苛酷なる不當處罰等は頻々として實行され、從業員の生活は窮乏のどん底に陷し入れられるに至つた。この電氣局の暴戾に對し、我が東京交通勞働組合は代表をあげて當局に再三再四、詰問抗議戰を展開したのであるが、何等當局からは誠意ある回答を得るに至らなかつた。しかも、本年度東京市豫算を審議すべき市會は去る三月三十一日開催され、市從業員に對する一層の搾取と隷從を強要する豫算を遂に鵜呑みにした。かくして當局

の我々從業員に對する挑戰的態度は加速度に進行して來た。この當局の暴擧に對する組合の對策を決定すべく四月一日執行委員會は開催され、滿場一致左の要求書を提出することに決定した。

一、賞與一割減絕對反對
二、震災手當の即時支給
三、臨時工五十名の馘首取消並に解雇手當の增額
四、恩給一時金の選擇の自由

この要求に對し、當局は四月六日、不當にも全部拒絕した。これに對して四月十日開かれた中央委員會は、從業員の生活の安定と當局の組合破壞の陰謀をブチ破るために、以上四項目の外更に左の三項目を追加して正式に四月十二日要求書として提出するに至つた。

一、少年車掌の停年制適用反對
一、職制改革に伴ふ賃銀値下反對
一、不當處罰反對

かくて、この要求書に對する回答は十四日示されたが殆んど一蹴のかたちであつたので、組合側は愈よ決戰の腑を堅め、直ちに戰時編成にとりかかつた。即ち各支部の責任者を以て爭議實行委員會を編成し、尙、連絡員、首腦部をあげ、命令一下直ちに戰時行動に移るための組織は作られた。尙これより先、電氣局はストライキに備へるために、在鄕軍人、青年團、職員、電機學校生徒等を動員して何時爭議が勃發しても、これに對抗出來るやうな周到なる準備をなしつゝあつたことは云ふまでもない。この意味に於て今回の爭議は一面に於て電氣局側の從業員に對する徹頭徹尾挑戰的態度によつて釀されたものである、と充分に言ひ得るのである。

かくして爭議團首腦部よりの戰鬪準備の指令が發せられると共に、四十八の職場に於ては連日連夜職場大會、從業員大會が開催され、市電當局の挑戰に抗して徹底的に鬪爭すべきであることが强調され、各支部の戰時編成は着々準備された。かくして電氣局並に從業員は各々戰備を固める一方、頑强に對峙し、形勢は正に嵐の前の如き不氣味さを漂はせてゐた。ついで十八日、寛電氣局長は爭議團に對し、「十四日の回答を承認してくれ」と會見を申込んだが、實行委員會では市側に何等誠意なきものと認めて即時拒絕した。更らに又當局は「今一應再考してくれ」と要求したが爭議團では兎も角、十九日午後九時までに回答をなすことにして會見を打切つた。かくして兩者の對峙は益々尖銳化し、抗爭は最後のドタン場に達したのである。

二

果然、回答に先だち、十九日午後四時爭議團首腦部より右の如き總罷業に對する指令は發せられ、茲に未曾有の市電大爭議のトップは切られたのである。

指令第四號

△總ての條件は全部完全に全備した（略）
◎二十日始車より一齊に總罷業を斷行せよ！
イ、十九日中に始車の組を全部引上場所等に引上させよ。

先頭出勤の喰止めを完全に行ふ事に全力をあげよ。

ロ、午後出勤者は全部引上場所に集めろ。

ハ、引上げた者の免許證は全部責任者がまとめて持て。

△車庫、軌道、工場、電力は各自計畫通りの方法に出でよ、斷。

△大阪、神戸、名古屋、横濱の派遣員も各自同一行動をとる可く全部の準備は既になつた。

△ブル新聞、逆宣傳を信ずるな、指令を最後まで嚴守せよ。

この指令と共に、各支部は直ちに續々引上場所に引上げ、大罷業の幕は完全に切つて落された。又組合では總罷業の指令を發すると共に市民に對する聲明書を午後九時半發表して市民の支持を要求した。

陰忍自重最早忍びず

我々は先に市電當局の收入低下に關する暴擧に對し一萬三千從業員の生活擁護の立場から幾度か理事者に嘆願再考を促したるも一顧だもせず一蹴し殊に我々從業員に對し、挑戰的行動を以て臨み眞正面から我等の生活を粉塵せんと無謀にも斷然として我々の切實なる要求をはねつけたのである。しかしながら我等はかゝる當局の暴擧に對しての市民諸君の不安を憂ひ交通事業の重要なるを知り、最も愼重に自重し來つたのである。然るに當局は昨十九日我等に對し高壓的態度をもつて斷然解雇を以て威嚇し、當局理事者の失態を我々に轉嫁し來つたのである。最早我々はこれ以上隱忍自重するに忍びず我等の生活擁護の立場から憤然起たざるを得ないのである。親愛なる全市民諸君、我等の苦衷を諒とせられ寸時も早く解決のため御聲援あらんことを乞ふ。

二十日早朝より市内の交通機關は一齊に停止された。各支部は何れも引上場所に引上げ本部の指令通り一意團員の結束と團結に全力を集中した。この日ストライキに參加せる者は從業員總數一萬二千七百五十人のうち一萬二百人の多數に上り、僅かに一、二の車庫が指令の徹底しなかつたため運轉に從事するに過ぎなかつた。又スカップとして青年團、在郷軍人等が積極的に參加し、運轉に從事したが、仕事に不慣れなため交通事故は續出し、市民は悩々として電車、自動車を利用する者が甚だ稀であつた。翌二十一日には未參加の支部も完全にストライキに參加し、爭議團員も一萬二千五百人を算するに至り、文字通りのゼネラル・ストライキに入つた。警視廳、電氣局もこの爭議團の有利なる形勢に一驚を喫せざるを得なかつた。市電大罷業と交通事故續出による市民の交通不安は極度に達し、市民の怨嗟の聲は澎々として市當局、並に警視廳に放たれた。かかる大激動の中に、爭議團首腦部は巧みに官犬の追及の網の目を逃がれて時々刻々の狀勢に應じて指令を發し、爭議團の結束と士氣の鼓舞に全力を集注した。

指令第九號

一、益々俺達の力は擴大して行きつゝある。各支部爭議團員の勇敢なる行動は運輸の大塚、神明町支部の兄弟をかり立てて今朝完全にストップした。これで運輸部全十三支部は全く引上げてしまつたのだ。

二、局長の奴面食つて各從業員の自宅へ速達を出して出勤命令に從はぬと馘首するとオドかしてゐる。此際アンナ奴の命令なんか一人も聞く者が居るものか、嗤つてやれ。

三、爭議を統一的にやるに局長の命令を聞いて出來るか。主腦部が健在でゐる以上斷じて彼等の畜オドシの空鐵砲では俺達の團結はクヅレないぞ。一人だつて犬死させない。死ぬ時は一緒だぞ。

四、新聞の記事はウソとホントが五分々々だ。鵜呑みにすると爭議團の中から崩れるぞ。正しい報告は首腦部の指令以外にないのだ。

五、理窟や批判は爭議がすんでからやれ。

六、七(略)

更らに又廿一日には市電の電燈電力從業員を以て組織する市電協同會も罷業を宣言し、道路清掃從業員を以て組織する東京市從業員組合も斷然ストライキに入り、今や各産業別線に沿ふて市電爭議應援のためのゼネストの氣運は全都下に充ち滿ちた。尙東京地方に於ては爭議應援のため關東勞働組合會議、無産黨共同鬪爭委員會が組織され、全都下の各經濟團體並に無産政黨は勢力的に之が應援支持を決議し市電爭議應援のために全産業線に沿ふゼネストの計畫を立てた。又交通總聯盟の各組合は積極的に之を支持應援したばかりでなく全國的總罷業の擧に出づるべく、神戸市電從業員組合は執行委員長の馘首問題を捉へて二十三日要求書を提出、拒絕されるや翌二十四日より總罷業に入つた。横濱市電共和會、大阪市電自助會も亦共同戰線を張つて各々要求書を作製して鬪爭の火蓋を切つた。斯して市電一萬五千從業員の蹶起は全國的に勞働者の蹶起を促し、形勢は益々有利に展開しつゝあつた。

この爭議團の一絲亂れざる結束と、全國的ゼネストへの方向を見てとつた市當局並に警視廳は周章狼狽して專ら爭議團の彈壓、懷柔に狂奔するに至つた。卽ち警視廳某幹部は二十一日夜某料亭に於て常習的爭議ブローカー伊藤、宮井、濱田、馬場等を招致して何事か劃策した。支配階級の手先として常に市電爭議を賣つた彼等は、一も二もなく警視廳幹部の進言を入れ、爭議團の分裂を計つた。而してこの策動は二十二日より公然と開始されたが多年の戰鬪的訓練を經た爭議團大衆は彼等の爭議打切りの提言に對して「裏切り者」の惡罵を浴せて彼等の奸言に弄されるものは極めて少數であつた。更に我々の奇怪とする所は最初爭議勃發に際して「經濟鬪爭である限り斷じて彈壓しない」と聲明した警視廳がこの札附ダラ幹達の分裂策動と前後して爭議團の解散命令を下したことである。爭議團の解散命令――この前代未聞の大彈壓を敢行しながら尙「彈壓は決してしない」と激語する官犬の惡辣極まる爭議取締に如何に爭議團大衆は激昂したことか。

かくて、警視廳の大彈壓と札附きダラ幹達の策動にも關らず、翌る二十三日裏切り者はブル新聞の誇大な宣傳に反して、僅かに六百名を算するに過ぎなかつた。而して首腦部は團員の結束と、有利なる解決點を見出さんため左の如き聲明書を發表すると共に強硬なる交涉戰に入ることとなつた。

聲明書

全市民諸君

(前略)交通機關の重要性を知る我等をして事玆に至らしめたる(ストライキのこと)は單に當局理事者の言明するが如き賞與問題のみを以て起りしものでは斷じてなく、當局理事者の意圖が我等の唯一の賴みとする勞働組合の破壞を目論み、我等をして遂に興奮せしめた結果に外ならぬものであります。かゝる頑迷なる當局理事者の反省を求め、又一つには我等の組合を守る爲に二十日以來總罷業を敢行したのであります。然も我等は市民の迷惑を思ひ短時日を以て當局理事者に反省を求めると同時に市民諸君に對し出來得る限り不安と損害を少くせん事を充分考慮し、特に日曜日を選んで罷業を宣言したこともかゝる我等の苦衷なる意圖であつた。其後三日間に渉る總罷業の續行に伴ふ當局理事者の應急策としての臨時車掌運轉手に依る交通機關の維持を見るに日々人命を奪ふが如き大事故續出し市民諸君の不安は層一層增しつゝある狀勢であります。之を見るに我々は是以上罷業の續行は決して市民諸君に對して忠實なる所以でなきことを確信し、我々はその解決を早からしめる爲に玆に我等の態度を聲明し公平なる市民諸君の批判の下に解決を望む次第であります。

一、賞與一割減は今期限りとして承認する

二、震災手當に關してさきに市長が言明せるを信じ將來の誠意を待つ

三、退職金の選擇の自由は保證すること

四、職制改革による賃銀低下をせざること

五、今爭議に於ける馘首者は卽時取消し、今後此問題に關して馘首せざること

六、爭議中は出勤の取扱とすること

七、局長は責任を市民の前にすること

八、其他の條項に對しては態度を一時保留する

右條項承認の上は卽時就業することを聲明す

東京交通勞働組合爭議團總本部

かくて首腦部は、これ等の八項目に對する當局の意志が那邊にあるかを探るため、二十三日深夜丸山警視總監を訪問したが何等要領を得なかつたので、ついで二十四、五日の兩日にあたり市長に交涉したが、市長は「爭議を打切れば誠意を以て解決せん」と言明したので、二十五日早朝執行委員會を開催し、種々討論の結果、一先づ爭議を打切り、要求項目については市長の誠意を信賴して白紙で一任するといふことに決定した。市當局と相對峙すること六日間、凡ゆる彈壓、逆宣傳、裏切りにヒルムことなく最後まで勇敢に戰つて來た爭議團も客觀的狀勢の變化には合流するより外に道はなかつた。かくて首腦部では左の指令を發して二十六日早朝より就業するに決した。

指令第十六號

一、去る二十日以來、今日迄六日間同志諸君の總罷業の決死的鬪爭は

凡ゆる暴壓を粉碎し、最後の勝利へ向つて首腦部の指令通り戰ひを進め文字通り惡戰苦鬪の中に終始した。

一、凡ゆるデマと彈壓と懷柔と裏切りの中にあつて最後まで堅く同盟して勇敢なる鬪爭をせられた同志諸君、我々の整然たる總罷業と其の彈壓に抗して尙結束の强固なるには支配階級をして慄然たらしめ、又輝ける我が東京交通勞働組合の名を歴史の上に更に劃然と記錄し日本の無産階級解放運動の前進に對し二大拍車をかけたるものである。

一、しかも一方我が東京交通勞働組合の荷負ふ勇敢なる多くの鬪士諸君を彼等のために犠牲たらしめんとしてゐる。我々はこの何物にも換へ難い鬪士諸君の馘首に對しては更に徹底的な鬪爭を開始しなければならぬ。又裏切者の巨頭に對しては無産階級運動を防衛し市電一萬三千全從業員の福利のためにも今後彼等に對する苛責なき凡ゆる鬪爭をしなければならない。

一、總罷業の決行に對しては我等は完全なる勝利を得た。だが解決に當つて我々は慘敗の聲明を涙を呑んでせざる止むなき情勢に至つた。今日主腦部及本部員は全責任を以て白紙のまゝ解決を市長に一任することとなつた。今日までの決死的英雄的行動に對しては餘りにも其の結果の敗慘さに同志諸君は一層の憤起と更に憤激に堪へないであらう。

一、だが我々の鬪爭はこれのみによつて終るものではない。我々は今此の世界の勞働者の血を沸した大罷業の結末に際し命の續く限り、此の骨髓に徹した恨みを晴らしむべく鬪爭しなければならぬ。

一、同志諸君！ 鉾は收められた、だが我々の生命のある間、勞働者の解放されざる間、我々の鬪爭は繼續される。直ちに再起の鬪爭に移らなければならない。

一、しかして此處に涙を呑んで總罷業を打切るに當り左の如く指令する。

(1) 明二十六日始車より一齊出勤し就業すること

(2) 全支部に於ては直ちに爭議團員を一ケ所に集め解團式を擧行し堂々職場に入場し「東京交通勞働組合爭議團萬歳」を唱和し激勵解散すること

(3) 更に今後に對しては逐次指令するに付何處までも一致の行動によつて猛進すること

附記

市電爭議は二十六日一應打切つたものの、其後依然として睨合ひの狀勢にある。市當局が復職問題その他で讓歩せざる限り、事態は益々紛糾錯綜するであらう。而して又一萬の從業員は何時でも再起するだけの訓練と覺悟を十二分に持つてゐることを附け加へて置く。尙、筆者は純粹な勞働者で文をよくしないし、且つ又爭議の根本的解決を告げてゐない現在で非常に忙しいため、行文の上に於て不備な點がたくさんあると思ふ。同志諸君の寬恕を乞ふ次第である。

一九三〇、五、五

ストライキを顧みて

筧正太郎

今回の爭議に於て直接の原因となつた從業員の要求は七項目であるが、その主たるものは賞與一割減の問題である。この問題は既に昨年末に端を發して居り、本市に於て賞與二割減と決定して、本局も亦之に倣はねばならぬことゝなつた。自分は從業員の意向を聽く必要を認め、十二月二日、從業員全部を集めて話をしその意向を確めようとした。自分としては賞與二割減を強ひて行ふことは考物と思ひ、從業員自身の反對も亦充分豫期されたのであるが、豫期の如く反對の意向が強く、從業員は當局の回答以前早くも罷業を開始した。しかし幸ひにして即日丸山警視總監の調停によつて、賞與一割減と云ふことで解決する事が出來た。

さて今回の事件であるが、本市、本局の現在の經濟狀態に於ては、一割減は自分としては止むを得ないことと思ふ。即ち本局の總資本金二億千三百餘萬圓の內、約四分の一は震災の復興費とか區劃整理に伴ふ費用とか云ふ全く利益を生まないもので、從つて昭和元年來、年々收支相償はず、昨年度の如き三百餘萬圓の缺損を出し、由つて各傭員以上は二割乃至一割五分の賞與減を定めて居る。傭人級賞與一割減は市會の豫算を通過してゐたのである。元來一般運轉手車掌の年收は平均千三百圓位であり、之に對する賞與の一割とは約二十圓である。當局は此際の成行上當然從業員一般の承認を得るものと思ひ、また事實大勢はこれを止むを得ないものと認めて居るやうに看取されたが、一部の所謂幹部、主腦部なるものが、大多數の意見を顧みず、反對の氣勢を煽つて罷業を釀さうとしたものゝ如くである。

我々の側では、昨年も當方からの回答以前に罷業を始めたのであるから、今回も亦、昨年と同じ幹部によつて指導されてゐる從業員が、何時罷業に入るか豫測を許さないので、早くから萬一の場合市民に迷惑をかけぬやう準備をして置いた。それが爲め、先方に最後の回答前に罷業されたにも拘らず、自動車は平常の四割增、電車は平常の三分の二を運轉することが出來、市民にかける迷惑の程度を減ずることが出來たのは、當局の欣びとする處である。のみならず市民諸君が、よく双方の立場を理解し、正確な判斷を加へ、我々に同情されたことに對しては滿腔の謝意を表さゞるを得ない。而して從業員側に於ても、我々への鬪爭の謂れなきを覺へて、中途罷業をやめた人々もあり、その他の人々も、我々の誠意に信賴して無條件で就業してくれた。

罷業は二十日に始まつて二十五日まで、六日間で終りを告げた。我々としては充分に市民の意向を察し、誠意を披瀝し得たつもりである。

市會の方面では今回の爭議による解傭者百五十二人に對し、之を復職せしむべからず、又罷業中の給料は之を支拂ふべからず、と云ふ意味を參考として送付されたのであるが、當局はこれ等を充分に考慮した結果從業員に對して、五月二日、次の掲示をした。即ち、

一、今回の解傭者の復職は之を認容し得ざるも、將來適當と認むるに至りたる者あるときは、再び採用することあるべし。

二、罷業中の缺勤は普通缺勤の取扱をなし、給料を支給せざるも、傭人一般に對し、この際家族慰問として、金一封を贈與すべし。

三、今期花期手當は四月一日より十九日まで皆勤したる者に對しても之を支給すべし。

四、今回の爭議に關し、今日までの所爲に對しては、今後解傭者を出さゞるべし。

右の四ケ條の中で第二の罷業中の缺勤を無屆缺勤と認めず、普通缺勤の取扱をしたのは、當局が今回の爭議を合理的なりと認め、無斷のものと雖も之を屆出缺勤と同樣に取扱ふのを適當と考へた爲である。從つてこの間に關しての賞與も無斷缺勤に比し倍額を支給されること、なる。金一封と云ふのは、今回の罷業で罷業者各自は自ら責任を負ふべきであるが、その家族は全然關り知らぬことであり、それに經濟的困難と種々の精神的苦痛とを與へたことは、當局にとつては不本意なことであるから慰問の意を表すること、した。次に第三の花期手當とは花見季節、即ち四月一日から四月二十日まで、皆勤者に對し、この間の混雜に對する慰勞の意味で支給するものであるが、罷業が二十日に始まつたので僅か一日のことで失ふのは氣の毒なので十九日までの皆勤者に支給すること、したのである。

爭議解決後の狀勢を見るに、從業員もすでに我々の意のある所を知つて、從前通り勤務してゐるやうであるし、解傭された者のうちには煽動してゐる者もあるやうであるが、これらは、もはや局外者であるから、我々の意に介すべきことではない。日ならずしてそれも止むことであらう。

闘ひの跡を顧みて
大衆の審判を待つ
――ひとつの議會報告演説――

大山郁夫

一

去る二月の總選擧に於て私は、勞働者諸君・農民諸君・無産市民諸君の階級的支持によつて、ブルジョア議會内に送り込まれることになりました。議會といふ處が如何なる空氣に支配されてゐる處であるかは、今更ら改めて言ふまでもありません。殊に最近かの鐵道疑獄といひ、勲章疑獄といひ、一聯の醜事實が議會を一個の温床として雨後の筍のやうに簇生し出してからといふものは、大衆は段々と當面のブルジョア議會に對して心の底から愛想をつかすやうになつて來てゐるのであります。從つて、今日では、個人的動機から議會に入りたいなど、考へるやうな人は、少くとも進んだ大衆の間には一人も見當らないと言へませう。私自身もそれには全然同感であります。

だが議會は、それにも拘らず、現在階級闘爭の行はれてゐる最も重要な地點であり、そして今日の狀勢の下に於ては、無産階級の立場から見ても利用價値の非常に多い一の場面であるといふことには、毛頭疑ひがないのであります。それで私は、私が愈々當選したことが明かになりましたときには、「行かう！」と心のうちで叫びました。私は、「私が大衆に送られて行く先きが、よし泥沼であらうが、地獄であらうが、私は一路直ちにそこへ猛進して、大衆から私に課せられた任務をそこでも全力的に遂行しなければならない」と、かう決心したのであります。

さう考へると私は、急に私の心身が異常に緊張して來るのを覺えました。忘れもせぬ一昨年の暮れ、かの我々の立場からは

永久に記念されるべき勞働者農民黨の結黨大會に於て、私は私の開會の辭のうちに開辭一番、『我等の行く處は戰場であり墓場である』と叫びました。その氣持は、その時以來ずッと私を固く摑まへて決して離したことはありません。しかも今や、わが勞農黨の旗の下に展開される大衆鬪爭の一尖端として愈ょブルジョア議會内に進出しようとするに際して、私は今更らのやうに、言はゞ單身敵陣に乘り込まうとする戰士の如く、一種別樣の鬪志に燃え立つてゐる自分自身を見出さないではゐられなかつたのであります。

二

『大衆鬪爭の一尖端として。』——去る四月二十七日、私が初めて第五十八議會の演壇に立つて議場を睨め廻はした瞬間ほど、この言葉がヒシ〳〵と私に迫つて來たことは曾てありません。私はわが黨が、——そしてわが黨を通じて大衆が、——私に課した任務を、極めて明瞭に私の意識に上ぼすことが出來ました。しかも私は、私の微力に比して、私が帶びしめられた任務の餘りにも過大なのに、多少たぢろがざるを得なかつたのであります。だがその時私は、ふと亡き同志山本宣治の歴史的な言葉を思ひ出しました。それは彼れが暗殺された日の前日に、大阪で持たれた全國農民組合の第二回大會に於て述べた祝辭の中に見出される、彼れ自身の議會に於ける地位に關聯して發せられた一句なのであります。私は既にそれを私の言論文章の中に幾度となく引用して來ましたが、こゝでも今一度それを繰り返すことを許されたい。それは、かういふのであります。——

『山本宣治たゞ一人孤壘を守る。だが私は一人でも淋しくない。背後には大衆が支持してゐるから。』

さうだ！ 背後には大衆が支持してゐるから、だ。少くとも我々が過去何年間に、或ひは日常鬪爭を通じて、或ひは選擧鬪爭を通じて、絶えず手を握り交はして來た幾千幾萬とも數へ切れない大衆——そして常に我々に熱烈なる共鳴を送つて來た大衆——それらの大衆は、今こそ私をして彼等に代つて彼等の痛烈なる叫びを議會の演壇に爆發せしめようと、手ぐすね引いて熱心に待ち構へて呉れてゐるであらう。それらの大衆こそは、今私が持つ最も信頼すべき味方である。私は力の限りに、それらの大衆の期待を裏切ることのないやうに努めなければならない。私は何よりも殊に、それらの大衆の——工場に於て傭主と鬪つてゐる勞働者の、農村に於て地主と鬪つてゐる農民の、街頭に於て重税・惡税・高い家賃・高いガス・電燈料に對して鬪つてゐる無産市民の——痛切なる辭を叫びを、その鬱勃たる不平・

不滿・要求を思ふ存分支配階級にたゝきつけねばならぬ。そして私が幾分なりともそれに成功すれば、それらの大衆はそれを自分たちの事として喜んで吳れるであらう。更らにそれが幾分なりとも大衆闘爭の今後の進展のための一の契機として役立つやうな結果にならうものならば、物の數にも足らぬ私の努力も、その本質以上の意義を得來たるであらう。もとより、かうしたことは、議會に於ける私の入門的一課程にすぎないものであるが、それにしても私は、渾身の力を以てそれに當らなければならない。

私がコップの水に咽喉を濕ほして口を開くまで、ほんの一分ばかりの間でありましたが、かうした考へのすべてが走馬燈のやうに次々と私の腦裡を掠めて通つたことは事實であります。議場を塡めつくしてゐる四百六十いくつの頭顱の大部分は、抑へきれぬ敵意を含んだ眼ざしを私の一擧一動の上に集中してゐるやうに見えましたが、そのために私は却て勇氣百倍するのを感じました。更らに私の發言中は、淺原代議士外一二名が時々拍手と激勵の言葉を送つた以外には、私の言論に對する聲援は絕對にありませんでしたが、それは却て私の心を議會外の無數の大衆に結びつけました。全議場に絕えず沸きかへる漫罵、嘲笑、怒號、叫喚、等々の妨害行爲に對してさへ、私は嵐に抗して進んでゐるやうな、一種の痛快味を充分に感ずることが出來ました。私は刻一刻、私自身の言葉の下から、同志山宣が曾て私に「治安維持法改惡案上程の日には咽喉を締められても叫びます」と言つたことを回想して、彼れのその覺悟を私自身の覺悟としつゝ、約一時間半に亙る私の演說を終へたのであります。

三

その日の私の質問演說は、いはゆる演說技巧の上からいへば私のものとしても決して『いゝ出來榮え』のものではありませんでした。さうした方面の效果は、斷じて私が狙つたものではないのです。私はたゞ場面の『氣流』の動きに應じて絕えず或る種の注意を拂つた以外には、特に技巧上の工夫などは一切凝らさなかつたのです。從つて私は、その點に關する如何なる批評にも甘んじて服するものであります。たゞ私は何よりも殊に、最も眞率な態度と言葉を以て、意識の尖銳化した勞働者・農民・無產市民・植民地民衆・その他一切の被壓迫大衆の聲を叫ぶことに全力を傾倒しました。更らにそれに附け加へて私は、金融資本家の主導下にある資本家・地主の利益の番人となり了つて一切の政治的創造力を喪失し切つて土偶の如き硬化した存在を續けてゐるにすぎないブルジョア議會に向つて、新興勢力たるプ

ロレタリアートの建設的意志に充たされたる闘爭的氣魄を投げつけようと試みたのであります。

かゝる私の意圖が些かたりとも實現されたか否かに就いては、私は全然それを大衆の審判に待つより外はないが、とにかくさうした立場から私は、ブルジョア政治の――特に當面濱口内閣によつて進められつゝある資本家的産業合理化政策およびそれに結びつけられてゐる所謂『失業救濟策』の――欺瞞性を痛撃して、それにわが勞農黨の立案に係る『失業者生活保證法案』を鋭く對立せしめました。更らに私は、濱口内閣の所謂『農村問題の解決』に關する既往の聲明が盡く掛け聲だけに終つてゐる事實を暴露して、『土地を農民へ!』のスローガンの下に土地に對する農民の熱烈なる欲求を强調し、そして農民の生活を中心として建てられたわが勞農黨の『借金(月收百五十圓以下の債務者の)支拂猶豫法案』の説明を議場にたゝきつけました。尚ほ最後に私は、勞働者・農民・無産市民・植民地民衆・等々の政治的自由に關して、それら一切の被壓迫大衆の間に熱火の如くに渦を卷いてゐる痛烈なる要求を、聲の限りに叫び續けました。

私は私の演説の内容を、茲でこれ以上詳細に報告する時間を持ちません。その方は、四月二十八日附の官報號外に出てゐるその速記を見ていたゞきたいのです。そして、その内容によつて毫も假借する所なき峻嚴なる批判を與へて下さるやう、切に諸君にお願ひしたいのであります。

四

自分がして來たことを自分の口で語るのは、いさゝか照れ臭い感じのするものです。とにかく、それは何う見ても決して愉快な仕事ではありません。だが困つたことには、議會内に於ける勞農黨選出の議員は、たゞ私一人だけなのです。で結局、私の議會内の態度・行動の報告は、私自身でするより外に、絶對に途がないのです。

それに私は、私の議會内に於ける一言一行とても、決して私といふ一個人のものではなく、それは前にも示唆した通りに、わが黨が――およびわが黨を支持する大衆がわが黨を通じて――私の肩上に課した一の任務の遂行にすぎないものだと考へてゐるのであります。そして各重要瞬間に於てその任務が多少とも滿足に遂行されたか否かは、無論私自身が決定すべきことではなくて、黨および大衆が嚴正に批判すべきことでありますが、しかし私はさうした批判のために、基礎的材料を提供しなければならない義務を感ずるのであります。それで私は、議會に於

ける私の最初の質問演説に關しては、その內容の點を速記錄の方に讓つて、主としてその演説に際しての私の態度、乃至心構へと言つたやうなものを、ほんの概略でありますが、以上の通り報告に及んだものであります。

尙ほまた私は、私の演説に對する議場の反響、およびそれに對する私の應酬について、二三の實例を擧げて、何等かの參考に供したいと思ひます。

私は開口一番、『全國の勞働者・農民・無產市民・その他一切の被壓迫民衆の立場から濱口首相の施政方針演説に對して質問戰を展開しようとするものである』ことを叫んだ瞬間から、既に早くも全議場から猛烈に起り來る罵聲の雨を浴びました。私はそこで、議會に於ける私の地位がはつきりと決定づけられたことを痛感しました。

次いで私は、私の濱口內閣に對する糺彈が一切の資本家・地主およびその政府・政黨に對する攻擊を意味するものであることを述べて、特に政友會からの些かなりともの聲援を率直に拒絕しました。それは、よし民政黨內閣への糺彈の故にもせよ、政友會からの拍手を受けて快とするやうなことがあつては、何よりも殊に、かつて田中反動內閣の大彈壓の下に血みどろの鬪爭をして來た戰鬪的勞働者農民大衆を裏切るものだと考へたからであります。全議場は無論、一としきりの嘲笑を以て私に酬ひました。私は隙かさず言葉を次いで、『諸君は今こそさうした嘲笑を放つてゐるが、やがてそれを悔ゆる日が來るであらう』と絕叫しました。

かういふ調子で、私の演説は緩急常ならぬ脈を打つて進行しました。そのうち私は、わが勞農黨案の『失業者生活保證法案』を持ち出し、今日の失業問題を應急的にでも解決するためには、少くとも失業者の基本數を百萬人と見て、一人當り日給一圓五十錢を支給する用意を持たねばならぬことを述べると、一議席から『なまけ者製造だ』と叫んだものがありました。今日の資本家的產業合理化運動が如何に失業者群を大量生產しつゝあるかを棚にあげておいて、しかも私がそれに對する國家および資本家の當然の義務を强調するのを聞くと、忽ちさうした彌次を飛ばすものが出て來るなど、全くさもしい資本家根性丸出しの情景が、そこにまざ〳〵と展開されました。更らに他の一議席から、『百萬人あつたら百五十萬圓ではないか？』と言つたやうな、意地ぎたないことを言ふものもありました。私は直ぐそれを捉へて、『いや、百五十萬圓ではない、一年に五億圓の金が要るのだ。五億圓といへば、諸君には非常に大金に見えようが、無產階級の眼には、ほんの僅かなものとしか映じないのだ。少く

とも、政府が資本家・地主のために費してゐる各種の補償金に比較すると、九牛の一毛にもすぎないものだ」と遣り返しました。

更らに私が、農民——年々激化する立入禁止・立毛差押・土地返還の下に悪戦苦闘して、しかも今日では約六十億圓の借金を背負はされてゐる農民——の現下の窮乏について語り、そしてそれに關聯して、『月收百五十圓以下の者にして現に債務を有するものは、その債務の支拂を昭和十年五月一日まで延期することを得。またその延期中の利息は請求することを得ず』といふことを規定してゐるわが勞農黨の『借金支拂猶豫法案』に言及した後、『今農民は借金に首が廻はらなくなつてゐるのだ』と言ひました。するとブルジョア議員たちは、一齊にドッと哄笑しました。彼等は多分彼等自身の選擧費用が今だに借金になつて殘つてゐることを想ひ出したのでせうが、さうした他愛もないことは、私が述べてゐたことには縁もゆかりもないことであります。とにかく私は『笑ふにも事にこそよれ』と考へたので、憤然として直ぐそれを引き取つて、『諸君は笑を以てこの話を迎へてゐるが、農民は涙を以てそれを聽くのだ』と喝破しました。實際、『涙ぐましいことを言へば笑ひ、可笑しいことを言へば怒る——それがブルジョア議會の姿だ！』と、私は泌々と感じない譯には行かなかつたのであります。

次いで私は、全被壓迫民衆の政治的自由獲得の問題を論じましたが、最後に勞働者農民の結社の自由に及び、共産黨運動の現況に觸れ、治安維持法に絶對反對の大衆の叫びを叫びました。その時に、全議場が如何に喧々囂々たる怒號で沸きかへつたかは、諸君の想像に任かせたいと思ふのであります。

五

私の演説に對する濱口首相の短き答辯は、おそらく民政黨の絶對多數を恃んで『鎧袖一觸』の意氣込みを以て述べられたものでありませうが、笑止千萬にも、それはたゞ、金融資本家の頤使のまゝに動く濱口民政黨内閣の本質を暴露したものにすぎなかつたのであります。濱口首相は丁寧にも、彼れ(首相)の立場が私(大山)のそれと違ふ點を明確に述べましたが、無論私はそれに毛頭異存のある譯はありません。濱口首相はまた、私(大山)が議會の慣例に通じないから、失業問題に關する彼れ(首相)の施政方針演説を物足りなく(私がその内容の貧弱さを指摘したことに關聯して言はれたものであらう。——大山)感じたのであらうが、特別議會には特別議會に關係のあることだけを言ふのであつて、委しいことは通常議會に言ふ、との趣旨を述べました。だが、失業問題こそは、この特別議會の中心問題そ

のものであつて、しかもその本質の緊急性は、來る十二月に召集されるべき普通議會までを緩々と待つてゐることを許すやうな種類のものではないのであります。かうした底の見え透いた詭辯を吐いて得々としてゐる首相の政治的見識こそは、實に現代稀に見る不可思議千萬なものだと言はねばなりません。

また、濱口首相は、産業が振興すれば失業問題が自ら解決できる(!)といふやうなことを、實に輕々と述べましたが、しかし資本家的産業合理化を基調とする政府の産業振興策が、失業者群の大量生産に歸着するものでなくて、失業問題の根本的解決を將來するものだ、など、シラを切るやうなことは、百パーセント金融資本家の代辯者としての彼れに於てこそ初めて出來る藝當だと、私は斷言します。

更らに濱口首相は、『政府は數億圓を支出して失業者手當制度を確立する意思はないか？』との私の質問に對して、『ありませぬ、斷じてない』と傲然と言ひ放ちました。それに對するわが國の勞働者の答へは、『よし！　解つた！　政府にその意志がなくとも、俺達の力で戰ひ取つて見せる！』といふのでなければならないと思ふのであります。

最後に農民を中心とする『借金支拂猶豫法案』に對して濱口首相は、『それはその法案が日程に上ぼつた場合に政府の考へを述べませう、豫じめ述べることは致しませぬ』と明言しました。首相は、この法案が、その提出のために必要な所定の――二十人の――贊成者を得ることが出來ないであらうことを見越して、かゝる狡猾な答へをしたのでありませう。農民はこの點で農民と共通利害關係を持つ勞働者および無産市民と緊密に協力して、政府の意志に抗してそれの獲得のために果敢なる大衆運動を捲き起さなければならないことを、私は確信するのであります。

繰返していふ、私は私の戰績の批判を、一切わが黨およびわが黨を支持する大衆に任かせる、と。たゞ、私はこれだけのことを一言しても差支へないのではないかと思ひます。卽ち、私がわが黨およびわが黨を支持する大衆から私に課せられた議會内に於ける一任務の遂行の手始めとして展開したあの質問戰が、萬が一にも多少の程度に於て暴露的效果を擧げ、且つ大衆鬪爭の今後の進展のために一の契機として用ひ得べきものを些かなりとも提供したといへるならば、私の心は底知れぬ感謝に充たされるであらう、と。とにかく、今私は、私の小さき仕事の入門的一課程を終へたばかりのところで、私自身を黨と大衆との審判廷に置いて、心しづかにその判決の下されるのを待つてゐるものであります。

陸海軍巨頭論

馬場恒吾

倫敦で調印された海軍々縮協定が政治問題化された。之を政治問題化した人々の目標は樞密院をして此條約に御批准反對を奏請せしめる事である。若し此條約が御批准を得ない事になると、濱口内閣が潰れ、新たな内閣が出來、日本の國際關係も變調になる。

議會に於ける軍縮に關する討論は、協定の内容が日本の爲めに利益であるか、否かと云ふ事よりは、寧ろ此協定を結んだ手續が正しかつたか否かと云ふ方に重心を置いて居る。卽ち政府は海軍々令部の意見を無視したではないか。それは統帥權干犯ではないかと。これは内容の議論ではなくして、形式の議論である。だから、只常識で生きる一般人には甚だ興味の起らぬ議論である。併し樞密院を動かす事を目標にするならば、かうした形式論が持つて來いの題目である。樞密院は憲法の番人を自から任じ、憲法を正當に解釋することを專賣にしてゐる。昭和二年四月には、樞密院は憲法の解釋を楯に取つて若槻内閣を潰し、金融大恐慌を起した。其時も内容よりは形式に重きを置いた。今日でも、樞密院が軍縮の内容よりも形式に重きを置けば、以て内閣を潰し得る。そしてさうした方向に動かんとする樞密顧問もある。

形式論から云へば六ケ敷なるが、軍縮協定其物に對しては、一般世人は出來過ぎるほど出來たと思つて居る。素人がさう思ふのみならず、軍人でもさう思つてゐるものもある。例へば朝鮮總督である齋藤海軍大將の如きは、之を大成功だと云ふ。齋藤は昭和二年ゼネーヴに開かれた日英米三國の海軍々縮會議に日本を代表した。其會議は英米の衝突で決裂に終つたのであるが、齋藤は日本を出發する時に、日本の補助艦總噸數は英米の

六割五分を要求せよと云ふ訓令を受けた。彼れは腹では六割二分ならば、折り合ふ積りであつたと云ふ。今でも、六割二分あれば戰爭して見せると豪語してゐる。だから、今度の軍縮會議で、日本が六割九分七厘五毛と云ふ所の殆んど七割に近き比率を得た事を見て、大成功だと云ふのは無理もない。海軍の若手は、老人が餘計な事を云ふと云つて憤慨してゐる。

併し軍縮協定の效果は海軍の比率の點からのみ見るべきではない。今度の倫敦會議に期待の掛けられた重心は、それが世界の平和に如何なる貢獻をなし得るかと云ふ點にあつた。今迄世界平和の理想を述べるものは限りなく存在した。だがそれは學者の空想か外交上の辭令に過ぎなかつた。國際聯盟ですら、其活動の範圍が重に言論文章に限られてゐるが故に、牙のない存在として見られた。列國は口に世界平和を唱へて、實際には弱肉强食主義を行ふ。それでは理性を誇る人類に餘りに智惠がなさ過ぎる。玆に世界を指導する立場にある列國は、何か考へなければならぬ時期に達したのであつた。

不戰條約が其考へであつた。倫敦軍縮會議が其實行に入る第一步である。此會議で、日英米三國が軍縮協定を結んだ事は、三國相互間の問題はこれで一段落を付けて、今後は三國が手を握つて、他の列國に對すると云ふ形を作つたのである。軍縮協定が三國同盟でない事は勿論である。だけれども、此協定が成立したと云ふ事實より出發して、今後の世界の海軍力は三國協定の規準を規準として制限せられる。三國は範を世界に垂れると云ふ立場に立つ。だから、三國が世界に對して立つと云つても敢て誇張の言でない。恰も日本の明治維新に於て、薩長土肥が連合したる武力を以て、他の諸藩を引摺つて郡縣制度迄行かしめた如く、日英米の三國の成力を以て、他の諸國に、亂暴な海軍擴張をなさしめないやうにする。これが世界平和へ行く實行手段である。尤も獨逸皇帝が夢みた如く、獨逸が世界を征服して一國となす。それも亦世界平和を齎らす一方法であるかもしれぬ。併しそんな夢は實現困難だとすれば、世界の指導的立場にある日英米三國が協力して、世界平和を實現すると云ふのが、今日の人智が考へ得る最も可能な方法である。

倫敦協定の成立に與つて尤も有力な貢獻をしたのは、日本に於ては病中の元老西園寺公であつた。政府が日英米妥協案を大體に於て承諾すると云ふ回訓案を發したのが四月一日であつた。此妥協案に對する請訓が來たのが三月十四日であつた。其間二週間以上も費やした。それがもどかしかつた。西園寺は政府は何故早く承諾の旨を回答しないのか。此の協定を拒否しては世界に於ける日本の立場が非常に惡くなる。内閣の一つや二

つ其爲めに潰れても關はない。濱口は早く決心すべきだと云つた。四月一日は彼れの病氣は危篤だと云はれた日である。其際でも彼れは軍縮協定が破棄せられはせぬかと云ふ事を心配してゐた。此西園寺の意向がさうである事が、宮中の重臣、海軍の巨頭の間の空氣を作つた。彼等は西園寺から直接何んとも云はれたのではないが、西園寺の意見がさうである事を知つて、協定成立の爲めに働いた。例へば政友會内閣の海相岡田啓介大將が屢〻出動した。世間では彼れが協定破壞の爲めに動いたかの如く誤解してゐるが、彼れは海軍部内の空氣を緩和する事に有力な働きをした。彼れは軍事參議官である。彼れに向つて、彼れが活動して軍事參議官會議をして協定に反對せしめよと薦めた者に答へて、

『世間は大體此協定に滿足してゐるのではないか、それを吾々が打ち碎はすと云ふのはどうか』

と甚だ煮へ切らない。それは煮へ切れない方が當り前である。

東郷元帥は初めは軍縮協定に不滿であると傳へられた。だが近頃になつては非常に諒解されたと云ふ。

海軍も元老株の山本權兵衞伯は協定に贊成である。だが彼れは自分獨りで贊成してゐるのみで、進んで海軍の空氣をそれに纏める事に盡力されない。山本伯が一臂の力を添へるならば、海軍部内は直ちに鶴の一聲で靜まるのだがと、宮中重臣の間では山本の不精を遺憾としてゐる。

山本は何んと云つても日本の海軍の建設者である。日清戰爭の時の五萬噸を日露戰爭の時の二十五萬噸にしたのは彼れである。明治三十一年から八ヶ年も海軍大臣をしてゐて、日本の海軍を組織立てた。日露戰爭の當時、彼れは海軍大臣であつたが、戰爭の一般方略に關しても彼れの頭が斷然として海軍を支配してゐた。彼れの後に海軍大臣となつた齋藤實は彼れの女房役に過ぎなかつた。從つて海軍に於ける彼れの地位は陸軍に於ける故山縣公のそれと同じ程度の大御所であつた。只彼れの頭は山縣ほど頑固でない。彼れが總理大臣になつたとき、彼れは陸海軍大臣が現役の將官でなければならぬと云ふ規定を改正して、豫後備でも關はぬ事にした。此改正をするとき、山縣の意を受けて、三浦觀樹將軍が抗議を申込んだ。山本は三浦に對して、

『君なんかの容喙すべき事でない』

と一喝したと云つて居る。其時の山本内閣は實質に於て政友會内閣であつた。山本は陸海軍大臣を文官にすると云ふ政友會の主張に從つて、かうした改正を行つたのであらうが、それに

しても、彼れの頭がさほど頑固でなかつた證據になる。

海軍々令部長を參謀總長格に引上げたのも山本である。明治政府の初めに於ては日本は陸軍全盛で、海軍は勢力がなかつた。大本營條例で規定される所に依つても、軍令部長は參謀總長よりはずつと格が下つてゐた。山本はそれを遺憾とした。日本は海國であるが故に、海軍を主としなければならぬ。然るに帷幕の重臣と云ふのが、參謀總長、陸海軍大臣と云ふ三角形になつてゐた。山本は伊藤博文に說いて、帷幕の重臣に軍令部長を加へて、三角形を四角形にしたと云ふのである。其軍令部長が今は統帥權問題の渦卷きの中心になつてゐる。

山本は大正二年と十二年とに二度も總理大臣になつた。初めの時はシーメンス事件で潰れ、二度目は虎の門事件で潰れた。其海軍に於ける功績赫々たるに對して、政治家としての彼れの成績は甚だ振はない。死んだ後藤新平伯は口の悪い男であるが故に、其云ふことは割引きなしには受取れぬが、彼が云ふには山本伯は威風堂々だ、音吐朗々だ。だが山本は一生懸命にこの外觀の威嚴を損じまいとするから、結果は何にも出來なくなつてゐるのだと云つた。何にでも手を出す後藤からはさう見へたかもしれぬ。

兎も角も彼れは海軍の大御所である。彼れが動けば海軍は軍縮協定に反對しなかつたであらう。彼れとしては、其女婿である財部海相が調印した所の軍縮協定を擁護するのは、何だか身内を庇ふやうに見へる。だから遠慮すべきだと考へたかもしれぬ。併しそれこそ不必要な遠慮である。

軍令部長加藤寛治大將は政府が回訓案を發送した後に新聞記者に聲明した。其中に

「今度の回訓に對しては海軍は決して輕擧することなく事態の推移に對應し善處する事を確信する。但し國防用兵の責任を有する軍令部の所信として米國案を骨子とする兵力量には同意出來ないことは毫も變化はない。これ今日まで軍令部の採つた態度で御承知の通りであるが故に、今日の場合および今後の推移に對しては軍令部は其職責と以上の所信を以つて國防を危地に導かざるやう全幅の努力を拂ふ覺悟である」

と云つて居る。軍令部としては政府の回訓案に同意出來ぬとハツキリ云つて居る。これが政府が統帥權干犯をしたと云ふ議論の基礎をなしてゐる。同時に此聲明書には海軍は輕擧せずに善處すると云ふ。其所に軍令部長は必ずしも進退を決するのでなく、最善の努力をすると云ふユトリが見へる。加藤大將がどう云ふ人であるか、私は親しく知つてゐない。人の云ふ所を聞くと、善良にして剛骨なる人だと云ふ。樞府會議の時に彼れは

加藤友三郎全權の隨員として米國に行つた。そして最後迄主力艦七割說を固持して動かず、加藤全權を少なからず手古摺らした。加藤全權が六割の比率で承諾したとき、加藤寬治は齒がみをして憤慨した。其時加藤全權は心配して、一日に二度も三度もこつそり加藤寬治の部屋をのぞきに行つた。それは加藤寬治自身が感謝しつゝ、語つてゐる。彼れが一本槍に海軍を強くせんと思つてゐる心持ちは同情出來る。

　加藤友三郎は後に總理大臣になつても立派な政治家であつた。だから、海軍大臣としても只海軍丈けの事を考へる人ではなかつた。日本の外交と財政とを考覈して、そして國防を裁量する風であつた。華府會議の前年(大正九年)に海軍は八八艦隊を建造する計畫を立て、議會の協贊を得た。其建造費と他の既定計畫の製艦費を合せて、海軍は總額十七億五千萬圓餘の軍艦建造費を八年間に支出する計算になつてゐた。所ろで加藤は日本の財界は其頃が絕頂で、以後は行詰りになると見た。加ふるに物價が騰貴してゐる爲めに、軍艦建造費が豫算通りに濟む事は期待出來ない。だから、豫算の上で八八艦隊建造の計畫は出來てゐても、國の財政が逼迫して、支拂ふべき金がないときは、八八艦隊は只紙の上の計畫たるに過ぎなくなる。其紙の上の計畫を目標として、米國に實際の軍艦を作られては、日本は堪らない。日本は作れもしない尨大な計畫を振廻はすよりは、寧ろ國民が負擔し得られる丈けの計畫を立てる。日本許りでなく、米國にも之に應じて海軍を縮少せしめる。それが彼れが華府會議に臨む時の腹であつた。だから、彼れの六割承諾は問題の政治的解決であつた。

　彼れは大正十二年總理大臣在職中に病死したが、海軍々人として眞實に惜まれる人であつた。見た所は小柄な痩せた貧弱な人であつた。口を利く時も靜かに物軟らかに云ふ。けれども言ふことはハッキリして、頭の鋭さが誰れにも判つた。

　今の軍令部に恐ろしく頭の良い人がある。次長の末次信正中將が其人である。彼れも亦痩せた物靜かな人である。だが云ふことが事理明白で、聞き手を納得せしめる。私は今度の軍縮會議の前と後に二度彼れの說明を聞いたが、其事理明白な說明に驚いて目を見張つた程である。そして軍人らしく大言壯語するのでなく、靜かに、物軟かに說明して行く、而かも其中に鐵の如く堅き意志を有つてゐる。物腰が加藤友三郎に似てゐる。彼れも政治家になり得る。軍令部が政治的にかう重要になつたのは彼れあるが爲めではないかと感じた。

統帥權問題の中心は憲法十一條の「天皇は陸海軍を統帥す」と

云ふ條項と、第十二條の『天皇は陸海軍の編制及常備兵額を定む』と云ふ條項との關係如何にある。第十一條は帷幄の臣、即ち參謀總長と軍令部長の責任、第十二條は內閣の責任と云ふ事に一般世人は解釋してゐる。さうすると、內閣が軍人の意見を無視して軍縮協定を取極めても問題はない。所ろで軍人は此二ヶ條は相關聯して第十二條をも帷幄の臣に謀らねばならぬと云ふ。此處に問題が起る。憲法第十一條の方を憲法義解で伊藤博文が說明して、神武天皇以來、兵馬の權は朝廷にある。その權が武門に歸すると政綱が衰へると云つて居る。又明治廿四年に軍部大臣を文官制にする可否を伊藤は上奏してかう云つて居る。

『立憲君主體の主義を保持し、苟も大權を下移せしめざらんと欲せば、國家の公力たる兵權をして、議會又は政黨の玩弄する所に委せざるにあるべし。兵權をして下移せしめざらんと欲せば、之を皇室即ち君主躬親ら直轄せざるべからず、君主之を直轄せんと欲せば、其軍政を管理する大臣たるもの、政黨又は政熱に搖撼せられ易き、普通の政治家と稱するものを以て之に任ずるよりは、其軍事上に練磨して軍制軍律及軍人の情狀に熟達せる、素養ある將軍を以て之に任じ、容易に其軍制の組織を變易せしめざるの勝れるに如かず』

鎌倉時代から江戸時代迄、兵權武門に移つて朝廷の威力が衰へた。伊藤が兵權の下移を恐れるのは封建時代の事を考へるからである。維新後になつても、西鄕、前原、降つては自由黨壯士などの內亂などが伊藤の頭には新たな記憶として殘つて居た。だから、議會若しくは政治家が兵事に容喙する事を極端に警戒して、兵事は軍人に限るやうな制度を始めたのである。然るに今は時代が變つた。國內で兵馬を整へて、封建諸侯の眞似をしやうと企てる者があらうとは豫想出來ない。戰爭と云へば外國との戰爭以外に存在しない。そして戰爭になれば國民皆兵主義が實行される。伊藤の軍事は軍人に限ると云ふ思想は改訂を必要とする。併しそれは將來の事として、現在の制度の下に於ても、軍の統帥には參謀總長、軍令部長のみが參畫するとしても、兵力を決定する事は費用を伴ふ問題であるが故に、事實に於て議會の協贊を經なければならぬ。軍人自身で兵隊の數、若しくは軍艦の數を決定しても、それを作るべき金が出なければ、畢竟するに、紙の上の兵隊若しくは軍艦に過ぎないからである。だからさうした事は內閣の責任に委かすのが當然であると云はなければならぬ。

所ろで、軍事は軍人の獨斷專行に委かすと云ふ思想を極端に迄押し進めて、內閣を潰した例がある。それは二ヶ師團増設を主

張して第二次西園寺內閣を潰した時の陸軍大臣上原勇作であつた。彼れは後に參謀総長になり今は元帥子爵になつてゐる。個人としては好々爺らしい。非常に勉强家で外國の書物を耽讀する。二個師團增設問題の時は、彼れの下に田中義一が軍務局長として、二人が表面に立つ役者であつたが、其下に智囊として凡べての活動方針を示したものに、今の陸軍大臣、其時の軍事課長宇垣一成が居つた。後に清浦內閣が出來るとき、上原は福田雅太郎を陸相にせんと企て、田中は其裏をかいて宇垣を陸相の椅子に据へた。それ以來、上原と田中の仲が悪るくなつた。友人の河合操、大庭二郎などが仲裁を試みたが效がなかつた。彼等は田中にすゝめて上原の處へ詫に行かしめた事がある。所ろで田中は歸つて來て

『上原は己れに軍職を辭して來い。さうしたら仲直りをしてやると云つた。そんな馬鹿な事が出來るか』

と云ふ始末であつた。

海軍軍令部が軍縮協定に不平を有つて、內閣を水雷に懸けるとしたら、それは上原が二ヶ師團增設の主張が容れられない事に憤慨して、西園寺內閣を潰した事に似る。日本の陸軍は此の事件があつて以來、所謂軍閥横暴と云ふ形容詞を付けられた。陸軍のする事と云へば、世間が直ちに何か其所に軍閥横暴の形跡はないかと疑ふやうになつた。陸軍は上原の二ヶ師團問題で、計り知られぬ程の損害を受けた。軍令部が活躍して、其轍を踏むのは賢明な策とは云はれない。

尤も二ヶ師團增設と、今度の海軍保有量とは問題の實質が異つてゐる。二ヶ師團增設は日露戰爭後に決定した國防大計畫の一部であつた。日露戰爭の後に陸海軍の巨頭が集つて、陸軍は二十五師團、海軍は五十萬噸を作ると云ふ目標を定めて、明治天皇の御裁可を得た。そしてそれは財政の許るす範圍で實現する事になつてゐた。然るに今度の軍縮會議に提出された七割說なるものはさうした形式を踏んだものではない。軍縮會議に臨む對案として軍令部が評定して決めたものである。だから其輕重に差のある事は否定出來ない。

上原が陸軍大臣であつた時の西園寺內閣は戰後の財政難に直面して行政整理を行はんとした。首相は各省に命じて一割乃至一割五分の經費節減を行はしめた。其間に立つて、陸軍は八千萬圓の經費の中から、僅かに二百萬圓を節減する。而かも此二百萬圓は國庫に返へすのでなくして、それを以て二個師團增設の費用に當てんとする。初めの一二年は二百萬圓で足りても、後は陸軍の經費增額になる。すべて內閣の方針に逆行する行動であつた。

上原の背後には山縣が居つて、二ヶ師團の増設を強行せんとしてゐる。若し内閣が陸軍大臣を更迭して、増師を否決せんとするならば、陸軍大臣の後任には誰れも出ない。陸軍の大御所である山縣の意向がさうであるが故に、陸軍が内閣に對するストライキの結束は容易に出來上つたのである。當時は軍部大臣は現役の將官に限られてゐた。だからストライキ破りを求める範圍が狹かつたのである。

西園寺は經費節減と師團增設は別個の問題として提出され度いと上原に要求した。上原は此二つは不可分だと云つて聞かない。大正元年十一月三十日の閣議は増師案付きの陸軍整理案を議題として、増師案を否決した。上原は翌日山縣と相談し、翌々日に參内して辭表を捧呈した。内閣大臣としての辭表は總理大臣を通して捧呈すべきものたるに關らず、彼れはそれを直接に朝廷に差出した。辭表を帷幄上奏として取扱つた所に、統帥權の範圍を成るべく擴張せんとする傾向が見へる。一方西園寺としては、陸軍大臣の後任が得られない事が明白であつたが故に、上原の後を逐つて間もなく總辭職を決行した。上原の辭表は捧呈の手續が違つてゐたが、それは後から出た閣員全部の辭表と一緒に捧呈された形式になつたのである。

此の政變の後に當時侍從長内大臣であつた桂太郎公が出て第三次桂内閣を組織した。當時の世論はそれ故に桂が内閣倒潰の陰謀に加擔してゐた如く考へたが、事實は必ずしもさうでもなかつたやうである。桂は歐洲へ旅行中、明治天皇崩御の報に接し、旅行を中止して歸朝したのである。すると彼れは山縣に強ひられて、内大臣兼侍從長になつた。山縣はかうして桂の政治的活動を封ずる積りであつた。桂はそれに對して不平ならざるを得なかつた。加ふるに、桂は宮中に入つた後に、常侍輔弼の任に當る事は、彼れに取つては負ひ切れない重任である事を悟つた。只の政治家として政界に活動してゐる時の自由な行動は、宮中の重臣としての彼れには許るされなかつた。桂には矢張野人の性質があつた。宮中生活の謹嚴さは彼れの柄になかつた。それ故に機會があらば宮中から飛び出さんと思つた事は事實である。

西園寺が辭表捧呈の後、桂は侍從長として西園寺を訪ねた。西園寺に向つて、御諚に依つて辭職の理由を聞きに來たと云ふ事である。西園寺は辭職の理由を述べた。其話しが濟むと、桂は云つた。

「侍從長としてはそれ丈けの話しを承はればよい。これからは友人としての話しだが、君に今辭職されては後任に困るではないか」

『少つとも困る事はない。立派な後任があるのだから』

『それは誰れだ』

『誰れでもない、君自身が引受ければよい』

桂は顔を赧くした。西園寺は其一瞬間に、これは桂に其意志があると見て取つた。西園寺はそれを閣僚の林董に話し、林はそれを或新聞記者に話した。だから、西園寺辭職の翌日の新聞に、其記者は『後任は桂公ならん』と大々的に書いた。桂は又それを氣にして、此記事は途方もない間違いだと打ち消すのであつた。だが、内閣を諸方に持廻つた後、結局桂が大命を拜するに至つた。其内閣は憲政擁護運動の爲めに五十日の後に潰れた。其時桂が捧呈した辭表の中に、二ヶ師團增設問題の時の事情を述べて

『當時臣内府にありて、固より事情に通ぜず。ひそかに之を憂とせり』

と云つて居る。桂内閣の書記官長であつた江木翼の實話として

『是は陛下に奉られた所の書であるが故に、素より嘘詐りが云ひ得る譯のものではないのである。公の心事は此簡單なる語句の間に明になつてゐるのであるから、當時の世間の猜疑と云ふものは此一句を讀めば釋然として解ける譯のものであらうと思ふ』

と云ふのが殘つてゐる。桂が宮中から出度がつたのは事實であらうが、彼れが積極的に西園寺内閣を倒潰せしめる陰謀に加擔したと云ふ風評を打消してゐるのである。現に增師問題が八ヶ間敷くならない時に、西園寺が桂に向つて意見を聞き合した時には、桂は今更增師問題でもあるまいと云つた。後に山縣が非常に熱心であるを見て取つて、桂も態度を曖昧にした迄である。彼れを内閣倒潰の陰謀の張本人と見るのは當らない。

だから增師問題で西園寺内閣を潰したのは上原にあらず、桂にあらず、矢張陸軍の大御所山縣であつた。彼れは大正十一年二月一日八十五歲で死んだ。それ迄は日本の陸軍は山縣の統制の下にあつた。桂、寺内、田中、其他が陸軍大臣となつてゐても、彼等は山縣の鼻息を伺つて進退するに過ぎなかつた。上原は薩摩出身であるが、これも陸軍に入つては長州の山縣系惑星の一人であつた。山縣の死後は陸軍は一時田中時代となり、田中が政友會總裁となると共に、宇垣時代となつた。上原は元帥であるけれども、現在の陸軍に於ては寧ろ只長老として尊敬さるゝのみであつて、實權は宇垣が握つて居る。

宇垣は岡山縣出身であるが、田中に推薦されて清浦内閣の陸軍大臣となり、それから加藤高明内閣、若槻禮次郎内閣の陸相

であつた。田中が政友會總裁になつたとき、彼れは田中に忠告して、

「政黨に身を投ずるのを敢て悪るいとは云はないが、陸軍出身の名聲を傷けぬ爲めに進退は正々堂々とやるがよい」

と云つた。田中は例の調子で

「ウン、おらア、正々堂々とやる」

と云つて胸を叩いて見せた。然るに、三派聯立内閣をこわす爲めに、田中が政友會出身大臣をして、加藤首相と抱合心中を企てしめた所は、必ずしも正々堂々たる態度ではなかつた。

田中は最後迄宇垣を信頼してゐて、田中内閣成立の時などは、夜の三時に宇垣を陸相官邸に訪問して留任するやうに頼んだ。宇垣は民政黨内閣の閣員であつたものが、政友會内閣の閣員として殘るのは今の時代に安當にあらずとして、それを拒絶した。田中内閣の末期に於て、田中は内閣の基礎を堅くする爲めに、屢々宇垣の智惠を借らんとした、併し宇垣は田中が徒に爲すなきを見放してゐるやうであつた。

其内に田中内閣潰れて、民政黨内閣が出來る時、彼れは再び陸相の地位に就いた。そして世間は彼れに陸軍縮少を期待した。

然るに彼れは容易に軍縮をやると云はぬ。軍制改革はやるけれども、それは軍縮ではないと云つて居る。陸軍大臣事務管理の問題でも、彼れは陸軍の傳統を守つて中々頑強である。海軍と陸軍とは違うから、海軍大臣事務管理が文官大臣に出來ても陸軍は武官でなければならぬと答へた。彼れは陸軍部内の頑固な空氣に支配されてゐるか、或は彼れ自身が頑固であるかと云ふ疑問を惹起してゐる。

實際の事情はかうであらう。今の陸軍は、宇垣時代になつてゐる。だから彼れが軍縮を行はんとすればそれは實行し得られる。且つ彼れは時代の推移に敏感であるが故に、相當世人の期待に適ふやうな處置を採るであらう。只彼れには軍人らしき闘爭心がある。此陸軍を政黨人の蹂躙する所に委かしてたまるものかと云ふ敵愾心がある。それ故に、彼れの自發的計畫に委かして置く方が、陸軍々縮を實現せしめる最良の方法と云ふ事になる。

陸軍の宇垣に比較すべき中心人物が海軍には存在しない。山本は長老たるのみ、齋藤は朝鮮に居る。財部海相が還つて、敢然として彼れが調印した軍縮協定を守り、そして海軍部内の反對を鎭めるならば、彼れは今後の海軍を率ゆる中心人物になるであらう。そして其戰を闘ふ事が同時に國の利益になるとして世人は彼れの歸るのを待つてゐる。(五、五、八)

五十八議會戰線雜景

淺原健三

二度目の特別議會だ。これでブル議會の二年生になつたつもりだが、よれ〳〵の外套に鳥打帽子姿のあまり人相のよくない男を巡査は正門で呼びとめて、「徽章を拜見します」とぬかす。

巡査が新米なのか、此方が新米議員なのか、ともかく手數がかゝる。

× ×

我々の巢、第一控室に入る。國同、革新、無産、無所屬の御歷々のお揃ひだが、頗る影が薄い。二年前の特別議會では、政民の開きが少なかつたおかげで、三十人の第一控室が幅を利かせ、實同、明政、無産、それ〳〵にキヤスチング・ヴオートを奪ひ合つたりして、衆議院の中心此所に在りの觀を呈したが、今度は政民の開きが餘りに大きいので、相手にされない。

此の影の薄い第一控室で、一番威張つてゐるのが國民同志會だ。前期の三人が今度は倍數になり、革新俱樂部の倍で、無産黨議員團よりも斷然一人だけ多數だから威勢がよい。五人の家の子郎黨を引き具した武藤御大、第一控室を鐘紡の重役室と間違へたり、代議士會を重役會議と取り違へたりして、他の議員から憤られたり、抗議を喰つたりするほどであつて、此の寄合世帶中での花形だ。

だが、此の雄將の眉間には一沫の寂しい影が漂つてゐる。彼が日本の産業資本の代表者として自由主義の旗を高く揭げ、實業同志會を創立した時、彼は前途に兒々たる光明を望んでゐた。相當の私財を投げ出す覺悟で居れば、代議士の五六十人はすぐにも獲得できる。天下の産業資本家は翕然として彼の傘下に聚る。政界の一方に自由主義の堅城を築くに數年を要しないと自信してゐた。彼は日本のロイド・ジョージを以て自認した。

だが現實は彼の期待に反逆した。第一回の選擧では三十人を目指して九人しか得られなかつた。第二回目は三人、第三回目の今度は六人。それ以上に伸び上る可能性は國同に約束せられてゐない。彼の金科玉條たる自由主義が繁榮する素地は既に失ひ盡されてゐる。過去十年の苦しい經驗は、彼の脚地が沙土であることを彼に敎へた、自由主義の繁榮に關する彼の希望は消えかゝつた。自由主義者武藤山治は絕望的な苦悶の中に居る。所詮は、彼も亦金融ブルジョアジーの渦の中に捲

き込まれるべき運命を持つ。

他の一群、革新倶樂部も亦取り殘された自由主義者の一掃である。大竹、清瀨、田川の三人、金融ブルの前に膝を屈した老犬養に反抗して自由主義の孤壘を守つては來たが、革命的勞働者農民と反動ブルジョアジー——の中間に挾まれて次第に無力化してゆくプチ・ブル層が彼等の脚地であるかぎり、彼等個人の將來は如何にもあれ、革新倶樂部——自由主義政團としては、最早、全くその存在の脚地を失ひ、存續の意識を失つて仕舞つた。

いま一人の自由主義者——立憲主義者、曾て憲政の神であつた尾崎行雄老も亦時勢に置き去られてしまつた存在の一つだ。誰にも相手にされず、誰とも親身に語り得ず、彼は孤影悄然と第一控室の一隅に老軀を休ませてゐる。老政治家の末路は寂しい。

若干の鵺的中立議員の他に、五人の無産黨議員が此室の同居人だ。八人が七人に減り、今は僅かに五人。これが日本に於ける三つの無産政黨から選ばれた議員の全部なのだ。衆議院議員全數の二十三分の一に該當する第一控室所住議員數の四分の一。これが果して日本の無産階級の正當な代表數だらうか。議員の一隅、第一控室、その一隅に額を聚めて無産黨議員團の鬪爭方針を協議してゐる、五人の議員の寂然たる姿を眺めた時、日本のプロレタリアートは果して暗然たらざるを得ないだらうか。

議院外に、鞏固に、大衆的組織を持ち、それが有力に鬪爭してゐるならば、院内の無力敢て意とするに足らない。だが、議院外も亦同然ではないか。然も、此の五人が院外の分裂狀態を反映した、議會對策共同委員會の下に立つ無産黨議員團として形式的に、事務上では一體を形成してゐるが、充分の人的融合がない。

これでいゝのか。

議員たる我々が合同を力說すれば、「議員病患者共が……」と罵倒する。各黨の指導部は頑强に合同運動を抑制するかの如き態度を持續してゐる。誰が眞の議會主義者か、議員病患者か、今は論議しない。私は全國の同志に向つて、第一控室の一隅に示現せられた日本無産階級の慘めな影像を凝視せんことを願ふ。

同志よ！　これでいゝのか。

諸君は果して第一控室に敗慘の骸を留めてゐる、自由主義者を嘲笑し得るか。

全無産階級は「人數が少いなんて泣言を云ふな。たゞ勇敢に鬪爭せよ」と云ふだらう。さうだ。我々の任務は渾身の鬪爭だ。

だが、議院は黨や組合の大會と違ふ。議事の順序發言の順位、すべて各派交涉會で定められる。二十五人以上の團體でなければ交涉會に參加させない。その慣例を破らうと、我々は努力したが、それを民政黨が頑强に拒絕した。第一控室は恩惠的に常任委員や特別委員を割當てられ發言は民政黨の順番を讓つて貰ひ、或は政友會に代つて貰つて機會を得てゐる態タラクだ。鬪爭も暴露もあつたものでない。

×　　×

控室から議場へ、議場から控室へ、控室から面會所へ、面會所から食堂へ歩き廻つてゐる内に日が暮れる。

今度の議會は一向に面白くない。

何故面白くないのか。

議場は與黨反對黨の攻守戰場だ。此の戰野に於ける戰鬪の激化は、攻擊軍の鬪爭力に正比例する。

政友會の五十八議會に於ける攻擊力は極めて薄弱である。四月二十四日、總括的質問戰の火蓋の切られた日、政友會の攻擊力弱しと見てとつた政府も與黨も安堵の胸を撫で下した。

政友會の攻擊力は何故弱いのか。

政友會の攻擊力には中心がない。燃燒がない。第一政友會には人的中心勢力が確立してゐない。心棒たるべき犬養總裁は一時の借物だ。總裁犬養は婿養子だ。腰が据つてゐない。黑光のする大黑柱でなくてほんの假柱だ。口では我黨總裁と呼んでも、心の中では誰も總裁とは思つてゐない。皆が總裁の存在すら忘れ勝ちだ。

久原、望月、三土等々の大臣級の人物も中樞勢力を成してゐない。中橋、山本(條)は病み、山本(悌)は落選し其影を沒し、床次は出戻りの甚六だ。秦、秋田、鳩山、島田、森、前田等の中幹部どころにも、全政友會を支配して統率運轉してゆくほどの勢力がない。

中心勢力確立せず、燃燒なく、從つて攻擊に迫力がない。

× ×

全軍に中心勢力なく、志氣大に振はずの政友軍の陣形を一瞥してみる。

帷幕に謀將あり、壇上に鬪士あり、一々首實驗も出來ないが、目ぼしいところを摘み上げてみる。

議院に於ける功防戰の中心人物は幹事長だ。民政の富田に對立する政友の森恪は鬪志滿々、精悍無比の定評がある。犬養總裁と相似たるものがあり、此將の下此卒ありの感が深い。横田千之助の第一次幹事長時代を想起させる。だが、民政黨と九十餘名の開きがあつては森も奇手を施す間隙があるまい。これこそ幹事長の腕の冴えだと思はせるものを未だ見ない。最後の結びをどうつけるか。見物だが、今のところ流石はと横手を叩く斷面も披けぬだらう。

森は並製ではない。破格品だ。だが、未成品だ。ぐつと伸びて政友會の大立物となるか、躓いて壞れるか。何とはなしに鍛はれた鋼地でなく、鑄物らしい脆さを感じる。

前幹事長、今の院內總務島田俊雄は理論もなく、洞察力もない、其日稼しの夕々の政治屋だ。局部的の駈引や喧嘩術は心得てゐるかもしれぬが、人間的な強さも、太さもない。

秦豐助は豐助でなくて呆助だなどと云ふとアル中らしい赭顏を眞赤にして怒るほどの神經はあるに相違ないが、いくら憤つてもボンクラに相違はない。秋田淸は怪物だ。無氣味で、凄味を持つた怪物だが、何時になつても大將にはなれぬ、謀將格の一人だ。今度の議會では冴えを見せぬ。

鳩山は政友會中の珠に相違ない。大臣候補。大臣らしい大臣ができ上るだらう。上品で、暢々してゐて悄氣がない。軍縮問題での濱口との取組は本格の角力であつた。筋金入りの向鉢卷、襷十字にアヤ取り、大業物を中段に構へた姿勢は天晴れの武者振りだ。そして確かに敵を

切り得る大刀筋だ。だが、彼は止めを刺さぬ。刺し得ぬ。穩和な彼は敵のノド笛に止めを刺すまで踏みこんで行かない。性格に勁烈さが缺けてゐる。それが彼の長所でもあらうが、下手をすると床次の二の舞をやらかすかも知れない短所でもある。

鳩山の御上品さに較べて內田信也は頗る下司張つてゐる。彼は敵のノド笛ばかり狙つて飛びつく。先づ敵を仆して置いて止めを刺すのでなくて、いきなりノドを狙ふ。曲者には相違ないが將器ではない。

張出格の床次竹次郎。何の光彩も放たず、何の重みもつけぬ。しなびたウドだ。久原房之助亦然り、將來の政友會總裁としての試驗期にある人とは見えぬ。

×　　×

序に民政黨席を眺める。

大幹部、中幹部の殆んど全部を政務官席や議長席にとられてゐるので、留守軍の陣容は貧弱を極めてゐる。

留守軍の筆頭謀將たる賴母木桂吉は確かに知恵者だ。各派交渉會での手捌なんか鮮かなものだ。だが彼は冷い。利己主義者らしい印象を受ける。民政黨內で勢力を擴げ得ぬ所以だらう。

山道襄一は政務次官の椅子を院內總務に乘り替へただけあつて、政黨人としての將來を持つ。中野正剛と好一對の才器、次期の民政黨の中心は彼等だ。だが彼は動物的な力が足りない。中野は獸類だが、彼は鳥類だ。中野ほどの迫力がない。野性味がない。

森田茂は濱口・富田の一對に對照して片岡・森田の一對を爲す土佐人だ。人間に面白味がなく、一種のイヤ味さへある。たゞその體に照應する圖太さが取柄だ。豫算委員長振は腰が据つてゐた。

元田議長藤澤幾之輔は天成的な議長タイプだと云ひ得なくもない。元田の如く神經質でなく、川原の如く惡氣がない。奧繁程の押はないが、腰が浮いてゐない。議場が混亂して來ても、ゲラゲラ笑ひながら、氣永に和ぎるのを待つてゐる。瞳、顔、言葉、ユーモラスに出來上つてゐるのが得になつて、名議長ではなくても、大臣よりは適役だ。副議長の小山松壽は堅くなつてゐる。闘士小山は亦名議長たるの力量を有つことを證明したい氣で一杯だ。仕事がしてみたい。議長の格付をしたいと一生懸命力味返つてゐる。藤澤と較べて成心がある。自然堅くならざるを得ない。白髮は生えても未だ客氣滿々だ。

×　　×

政友會には人的中心がない。などと云つてる內に、政民兩陣の謀將一瞥と云ふことになつたが、いゝ加減に切り上げる。

啻に人的中心がないばかりではない。政友會は濱口內閣を攻擊する主題を持たない。彼等の言葉で云へば、大義名分がない。入り替り立ち代り、奇聲、蠻聲をはり上げて吐鳴り散らしてはゐるものゝ、音ばかりで、意味がない。論爭の主題に燃燒がない。否、政友會は論爭の主題を持たない●

×　　×

本會議豫算總會を通じて取扱はれた、ロンドン條約、それから派生し

た統帥權問題、不景氣問題、失業問題等々は立派な主題ではないか、彼等は此の主題の下に華々しく論爭したではないか、と諸君は思ふだらう。然り、彼等は主題を掲げた。絶叫した。吐鳴つた。だが、それは音聲だけで、論爭の型だけだ。あれが眞の論爭ならば、犬の吠合も論爭であり、ライオンの咆吼も演說だといふことになる。

政友會の諸君は不景氣招來の責任を政府に押しつけて糾問するが、彼等は此の不景氣の原因を如何に見、その對策をどうしろといふのか。不景氣の原因は、不適當な時期に於ける準備不充分對策不完全な金解禁だと云ふが、彼等の適當な時期とは一體何時か、充分な準備とは何か、對策は何だつたのか、一向にハッキリしない。金解禁に反對か贊成かすら曖昧だ。不景氣の對策を講ぜよ、と具體案を提出するでもない。緊縮政策はいけないと云ふが、募債政策をとれとも云はぬ。政府の不景氣挽回對策としての產業合理化に關しても、充分できてゐないとケチをつけたが、贊成なのか、反對なのか、一向に定見を述べない。

軍縮問題で犬養が火蓋をきつた。濱口が矢面に立つた。兩雄對峙して龍虎相搏つと新聞記者諸君が書きたいところだが、一向に油が乘らない。鳩山、內田、植原、山崎等々の鬪士が同一主題で詰め寄つたが論爭にならぬ。

何故か。政友會は一體ロンドン條約に反對なのか、贊成なのか、意見を明かにしない。これから派生した統帥權の問題でも、濱口を問ひ詰めて政府對軍部の關係を惡化させやうとはするが、彼等自身で、どんな憲法上の解釋をとり、何を主張してゐるのか、全然明瞭でない。意見は對立してゐない。如何に論爭の形だけ作つてみても、肝腎の內容には對立がない。政友會は反對黨の看板の手前、何か云はないと義理が立たぬ、仕方なく立ち上つて音を發してゐるだけだ。迫力が生れて來る道理がない。

× ×

その音だけの論爭振りを瞥見する。

濱口首相に立向ふた面々は、犬養を筆頭に三土、大口、內田、山崎、鳩山、前田の政友會議員に尾崎行雄、大山郁夫の人々。

犬養は、國防、軍縮條剩金の處分、失業等に口火をつけたが、お務めに一席辯じたまでのこと。太刀先に力がない。犬養に比して氣力だけは旺盛な濱口は四つに組まうと身構へたが、カケ聲ばかりで組みつかない。すぐ水が入つて引別けだ。

三土、大口は井上と相棒組。鳩山は上品に、山崎は不穩に、內田は執拗に立合つたが、何れも大角力にならぬ。小股すくひの名手山崎は小手先を使ひ過ぎてウルサイ。前田は平凡。

尾崎は政友會に對する場合よりも幾分太刀先に力がこもつてゐる。小橋前文相問題だ。民政黨への敵愾心とその存在を新聞紙上に廣告するための必要から此問題を擔げて起つたが、後援續かず、風雲は起らない。決議案は第三四流の陣笠のオモチャにされた。

大山は憤慨を叩きつけた。政友會が內容的に對立しないのに反して、大山はプロレタリアートをブルジョアジーに對立させた。治安維持法を呪ひ、共產黨の存在を主張して濱口に喰ひついた。同志山宣に對す

る迫害を語る時、彼の眼に淚があつた。だが、濱口には勞働者農民の要求を中心に大山と論爭する準備も誠意も持たぬ。彼は土俵にさへ登らなかつた。

寄手に對戰した濱口は過去の定評の企てを裏切つた。彼は正直で素朴で純良な人間として受取られてゐた。民政黨は如何にもあれ、濱口だけは誠實重厚な政治家だと國民に好感を持たれてゐた。だが、五十八議會を通じて示現せられた彼の本性は、官僚的な、僞善的な、不誠意極る人間に過ぎなかつた。二百七十餘名の絕對多數に氣をよくした彼は滑稽なほど思ひあがつてゐた。敵を弱しと見れば挑戰的に出る。ウソを平氣で云ふ。困ればサッサと逃げる。誠意なんて藥にしたくもない。風貌で飾つてゐるほど中味は重剛でない。

鳩山、內田、山崎等の統帥權問題の詰問には卑怯にも逃げの一點張だ。田中義一でもあれば苦もなく抑へつけられるところだが、田中よりも頭がいゝだけに逃げのびた。だが醜態だつた。何の失態があるわけではない。政友會が他人の褌で角力をとらうとする出足を蹴飛ばせばいゝのだ。然るに彼は逃げる。卑怯だ。尾崎に對する答辯振は苦しかつた。弱味があるからだ。

×　×

井上は三土、大口、砂田、堀切等々と對戰した。三土との論爭は財政家の論爭でなくて、財務技師の論爭に過ぎなかつた。三土は政友會に人無きが故に大臣格を示した。大口は器局に於て井上と好一對。奇聲を振り上げて襲擊是れ力めた。預金部資金の惡用、特融、不景氣、農入見積等々で開口を張つたが、惡口雜言が過ぎ、井上の個人的私語を素破抜いて得意になるあたり、少々大人氣ない。砂田は預金部資金惡用で井上を背任呼はりし、選擧干渉で安達に喰ひ下つたが、型が小さい。一警部を免官にする程度の選擧干渉暴露は三百式だ。堀切にはグッと迫る力がない。下らぬ駄ジャレを飛ばして得意になつてゐた。

應戰した井上は政治家の名を諳すには餘りにお粗末だ。殊に多辯だ。だが、金融資本家の代表としては差當り其右に出る者はない。彼は一生懸命に其使命のために努力した。金融資本の獨占下に於ける政治經濟の本質を未だ充分に飲みこんでゐない、衆議院のブルジョア傭兵に對して、彼は金融資本の本質、要求を理解させるために全精力をあげてゐた。彼は衆議院に派遣せられた金融資本論の講師である。多辯も其のためとすれば恕すべきだ。

×　×

現內閣の中心は井上藏相である。濱口が首相であり、井上は婿養子であるから、濱口が中心であるべき筈であるが、此の內閣の中心は井上である。

と云ふのは、何も井上が偉いといふのではない。

元來濱口內閣は金融資本の制覇を確立するために生れた內閣だ。金融內閣には金融大臣が要る。若槻、片岡、町田等々の民政黨の財政通は金融資本の傭兵たる資格を持つてはゐるが、傭兵ではダメだ。使用人、番頭ではダメだ。過去の殘滓を尻にくつつけてゐる、官僚的財政家や政黨的財政家では端的に金融資本を體現し得ない。傭兵でなくて金融資本家自身でなければならぬ。井上は生えぬきの金融資本家だ。

ブルジョア型の財政家でなくて、ブルジョアジーそのものだ。代理人でなくて本人だ。井上は金融内閣の主人公として主座に就いた。

濱口内閣では藏相の井上が主人で、首相の濱口以下は其下に立つ傭兵だ。使用人だ。井上の協役だ。擴聲器だ。形の上でどうあらうとも人物の上でどうあらうとも、井上は此の内閣の主人公だ。五十八議會は金融資本家の議會で、だから井上の議會だ。

井上と武藤山治の論爭は本議會中での一番眞劍な肉迫戰であつた。二人とも顏を眞赤にして吐鳴り合つた。井上が壇上のコップを叩き倒したことからみても、如何に彼が昂奮してゐたかゞ判る。

何故に彼等はそれ程眞劍だつたか、何故そんなに昂奮したか。

武藤は今の日本での比較的純粋な産業資本家だ。一人一役をモットーとして三十年鐘紡に立籠つてゐた彼は産業資本家の典型的なものだ。井上は銀行資本家の典型だ。産業資本と銀行資本とが融合して金融資本となり、それが覇權を確立してゐる時代に、二つの代表者が吐鳴り合ふのは理屈に合はないと思ふのは間違だ。獨占は競爭を廢絶しない。獨占資本の下に競爭が熄まないところに資本主義經濟の特徴がある。競爭の生む矛盾を克服すべく發生した獨占でも、矛盾を克服し盡し得ないところに、資本主義の惱みがある。獨占によつて矛盾は一層深刻化し、高度化する。

井上と武藤の論爭は獨占制霸の爭鬪の一情景であつた。それは金融資本家代表としての井上を最も端的に表現したものであつた。

×　×

幣原は民政黨總裁に擬せられたが、たゞの才子、外交事務官だ。相手になつた内田、植原は彼にさへ相手不足であつた。

安達は生粋の黨人だ。江木の凋落に引替へて、彼は民政黨の中樞に定住した。今度の總選擧は彼を將來の民政黨總裁に据えるためのものであつた。

答辯振は見事に落第。三十年此方黨務のみ執つて政務を知らぬ安達には演說は苦手だ。句調からがドロ臭い。此點で前内相の望月氏と好一對だ。望月が口がきけないので人情と誠意とで粉飾に力めたやうに、彼も亦柄になく誠意の押賣をする。誠意を口にして重厚の紳士を装ひ機略の人を匿さうとするが、ものにならぬ。彼の押賣する誠意は越中富山の藥賣の誠意以上には買へない。餘り押賣されると吹き出したくなる代物だ。

だが、彼にも棄て難い一面がある。國民同志會に向つて金融候補と口をすべらして詰問せられると、アッサリ取消したところなど、人間のアクが抜けてゐる。

江木は大臣席で居眠ばかりしてゐる。渡邊はほんとうの伴食大臣だ。貴族院一方の闘將だと承るが、衆議院に來ては駈出の陣笠だ。恐ろしく緊りのない腰つきだ。六尺のユルフンならばまだ我慢もするが、彼の腰には越中フンドシが帆をかけてゐるに相違ない。あれでは司法官に押の利かぬのも無理でない。俵といふ商工大臣は、これでも大臣だぞと、事務官に教わつた産業合理化を云々するが、斷然低腦だ。田中文相は老朽事務官、町田農相も確かに老碌してゐる。愛嬌ものゝ松田拓相、人氣者の小泉遞相は、やはり野に置け蓮華草だ。鈴木書記官長

は野黨の闘志として發揮したほどの冴えを見せぬ。 論長席に据つた姿は鳩山前論長よりも確かに一枚だけ格が落ちる。

政務次官席に闘志滿々の中野正剛がゐる。 途中で間違さへなければ近く民政黨の中堅となる。(?)殊に政治が益々反動的になるにつれて、反動ブルジョアジーは、闘爭力の強い政治家を需める。 所謂人格者は反動時代には用がない。 彼は政治の反動化に伴ふて其の本質を發揮する。 無産階級との、對立闘爭の先鋒に立つ役割を振當てられてゐる男の一人だ。

政友會の森と對立する民政の幹事長富田幸次郎は、濱口と一對の土佐人。 濱口を眞似るほどの小器ではないが、 容貌、 體格、 演說口調等、二人には共通のものが多い。 彼には大民政黨の大幹事長の風格が備つて來た。 小泉又次郎の幹事長時代よりも幅がある。 彼は實際政治家だ。安達以後の民政黨の中心たる未來を想見される。

× ×

月並な人物評に暇どつた。 筆を返す。

政友會には人的中心がない。 民政黨と對立する主題を持たない。 主題を持たないといふことは、 今の政黨が金融ブルの出店に過ぎなくなつたことに原因する。 二大政黨が同一主人の出店になつて仕舞つては、 對立は形ばかりで、 内容ではない。 從つて衆議院が金融資本家の登記役場に過ぎないことになる。

金融資本家は其意のまゝに政治の内容を定める。 だが、 日本には憲法がある。 法律が生きてゐる。 まだ法治國家だ。 政治の中味は議會といふ機關によつて形式づけられねばならぬ。 衆議院は政友と民政とが論爭し合つて政治の方向を定め、 政治の主義を規定する場所ではない。 中味の出來上つてゐるものを、單に形式づけるための登記役場に過ぎない。 だから、 政民の論爭は形式の末に走る。 國民生活と眞の關係を持たぬ形式論が賑ふ。 論點は枝葉末節の技術論に過ぎない。

諸君は五十六議會で例の「人民の名に於て」が中心論題かの觀を呈したことを記憶して居られる。 五十八議會は統帥權問題で睨み合つて居ることを知られる。 何れも、 形式論だ。 條約の手續上の問題だ。 彼等は何故に條約の内容に就いて爭はないで、 形式論に力瘤を入れるのか。

内容に關して爭點はない。

不戰條約、 ロンドン條約、 何れも帝國主義ブルジョアジーの要請に基づくものだ。 政民何れもブルジョア政黨である。 彼等は共に双手を擧げて、國家の名に於てブルジョアジーのために此の條約を祝福してゐる。 民政黨は、 不戰條約の内容に不滿があつたのではない。 政友會は、ロンドン協約に反對なのではない。 だから内容に關しての論爭は起らない。

ところが、 此の二つの條約は形式論上の問題を提供してくれた。 主義の爭ひで政權の歸屬を決定することの出來なくなつた彼等は、 日本のブルジョアジーによつて刈り殘されてゐる封建遺制を利用して、政權の爭奪をやるほかに途がない。

田中は樞密院を利用して若槻から政權を奪取した。 濱口は樞密院と貴族院とを利用して田中から内閣を捥ぎ取つた。 今政友會は統帥權問題で民政黨と軍閥を噛み合はせ、 樞密院を利用して濱口から政權を奪

取しやうとしてゐる。

× ×

政友民政が政治の中味で同一脚地に立てば、爭は技術上のことか、政權爭奪の賭引かに過ぎない。

財政經濟問題の論爭が結局音ばかりであつたこと。殊に政友會が從來の豫算返上否認を肯定に豹變して反對黨の體面を繕つたこと、「人民の名」や統帥權問題が彼等の政權爭奪の道具になること、等々は議會が無用化して來たことを語つてゐる。

誰が議會を無用化したか。金融資本家である。今、金融資本の制霸が議會を無用化した。

× ×

政黨が異れる階級、又は社會層の上に基礎を持たない場合には眞實の政治上の對立はない。主義の爭はない。豫算案も法案も彼等の爭點とはならない。

爭點がないからと云つて默つてゐては形式上の對立さへなくなる。それでは政黨の存在理由がなくなる。形の上の對立が解消する。それでは困る。我黨意識が消えては政治屋の飯の喰ひはぐれだ。論爭が出來ないなら、仕方がないから腕力で爭ふ。それで我黨意識を旺盛にし對立の形容を整へる。近年腕力沙汰の頻出する所以だ。議會の本質が解消しつゝあるのだ。

野黨の暴力團はチヤンスを狙つてゐる。先鋒が議長席に驅けつける。揉んでゐる內に後陣が繰り出す。人數相當揃つて混亂狀態に展開し得るとなると、擲る、蹴る、押しとばす、咽喉を締めつける。亂闘、騷擾、休憩といふ段取になる。

從來雜景は本會議で委員會の亂闘騷ぎは稀であつたが、今度は委員會に移動した。

第五十五議會で亂闘の度が過ぎたので、五十六議會から檢事の眼が傍聽席で光り出した。猛者連も是れには少々參つた。手を擧げて叩いたり、突き飛ばしたりすれば、二階の傍聽席に居る檢事に見つかつてお灸を据えられる惧がある。わからぬやうに混亂中足先で蹴合つたり肩や肱で押合つたりしてゐるが、そんなことでは腹の蟲が承知しない。それに本會議場には傍聽人がゐる。公衆環視の下では氣が咎める。斯くて猛者連は戰場を豫算委員室に移した。此所は議場のやうに階段もなくて平地だ。委員長席や大臣席も直ぐだ。反對黨議員は議場のやうに席場まで出て行かないでも、直ぐ隣に居る。狹い所に大勢押し込んでゐるので、亂闘には好都合だ。檢事も傍聽人(一般公衆)もゐない。思ふ存分擲り合へるといふものだ。

だが、此處も暴力御免といふわけには行かない。刑事問題も惹起すれば、懲罰事犯にもなる。刑事被告人にはなりたくない。懲罰もいやだ。そこで考案したのが責任轉嫁だ。豫め院外團の猛者か何かを傍聽席に入れて置く。擲り合ひ始めると、其奴が飛びこんで來て暴れ出す。「暴漢だ！」「醉漢だ！」とド鳴る。騷動の發端も、激化も、皆な此

の暴漢や醉漢に責があるといふことにして仕舞ふ。

新戰術だ。戰場の亂鬪と相俟つて、此の戰術は當分議會を賑はすであらう。

× ×

議席から演壇や議長席に向つて放つ寸鐵殺人式の彌次も、此頃の議場では影を潜めて來た。彌次と言へば、「馬鹿！」「默れ！」「引込め！」位のもので、相手方への討論としての發言ではなくなつた。

彌次は一種の討論として價値を持つ。簡單なる駁論として有力な武器だ。討論としての彌次を僕は肯定する。彌次を非紳士的だと云ふ人道主義的紳士は下劣だと排斥する。無産黨議員中にも斯種の論者が居る。安部さんの如き其の先達であつた。

だが、暴露と鬪爭を任務とする無産黨議員にとつては彌次も亦一つの武器だ。本格の討論は封じられ、票決では負けにきまつてゐる。殘された武器は彌次が一つだ。ブル議員に對する反駁のためにも、政民の衝突を助勢するためにも、彌次は利用せらるべきだ。暴露のために、鬪爭のために。

追加豫算に對する政友會の代表討論者として演壇に立つた東郷實は農村政策から海外發展策に及び、「隣りに物資の豐富で、未開發で、然も自力で開發のできぬ國がある。國土狹少、物資窮乏、人口過剩の日本は大に之れを利用すべきだ。利用するには積極外交が必要だ。現内閣の對支外交は退嬰だ。」と盛んに帝國主義的侵略外交を力説してゐる。此の傍若無人の侵略主義に對して、日本の無産黨は默つてゐていゝだらうか。發言を拒まれてゐる際、彌次で帝國主義ブルジョアジーを暴露すべきではないか。

砂田重政の選擧干涉呼ばりに對して安達が反駁を加へてゆく。「我々は言論の自由を尊重した。其證據には演說の中止が極めて少い」、田中内閣の際には民政黨の演說會幾萬に對して幾千の中止があつたが、今度の總選擧では、政友會の演說會幾萬回中幾十度しか中止がなかつたと紙片の數字を讀みあげて、得意になる。だが彼は無産黨を云はぬ。無産黨の言論中止の度數を對照しない。彼は意識的だ。「無産黨の中止は問題にならぬ。中止するのが當然だから‥‥」と云はぬばかりの顏つきだ。彼の言論自由の假面を引剝ぐための彌次が、我々の議席から飛んで惡いだらうか。

濱口は白々しいウソを平氣で云ふやうになつた。議會解散前、總選擧の際の約束を反古にして勞働組合法、小作法案を提出しないことを大山が難詰すると、ブルジョア利益擁護の各種法案は出してゐながら、「短期の議會だから‥‥」と逃げる官僚肌のズウ〳〵しさが癪に觸る。此の時、彼の假面を剝ぐために、「えゝ、この本當らしいウソ吐き雄幸」と吐鳴りつけて、彼を暴露し、民政黨を激怒させることが惡いといふならば、我々が議席にゐる甲斐がないではないか。

等々。機會は無數である。

× ×

五月五日、山王臺の猛者(?)が集つて普選法公布五週年記念會をやつた。

日本のブルジョアジーが民主々義革命を遂行する場合、民衆は彼等

の道具であつた。日比谷公園や山王臺や上野に民衆は彼等の必要に應じて招集せられた。普選運動以後、彼等はもう民衆を利用する必要がなくなつた。彼等によつて民主々義を約束せられた民衆は名ばかりの普選法は與へられたが、政治は金融資本家の手に掴まれて仕舞つた。

五月一日、一萬五千人のメー・デーのデモを六千の警官が警戒した。東京市電のストライキは警視總監の劍先で突き壞された。

今、ブルジョアジーにとつて、民衆は利用せらるべきものでさへなくて、彈壓の對象でしか有り得ない。

街頭に於ける民衆だけではない。

議院内でも民衆は無視せられてゐる。全ての議案は民衆生活の向上のためのものでなくて、ブルジョアジーの獨占利潤の確保のためのものである。

民衆は議院から隔離せられた。

議院を民衆の手に奪還することが、我々に與へられた最高の任務である。だが、それは憲政濟美のためではない。ブルジョア民主々義革命の完成のためではない。民衆が議院――ブルジョアジーにとつて利用價値を失つたと同時に、議院は民衆にとつて利用せらるべきものではなくなつた。

たゞ院外に於て尖鋭に對立しつゝある無産階級とブルジョアジーとの決死的闘爭の公然の舞臺であればよい。それ以上の利用價値はない。

世界の經濟的危機は世界資本主義の一環たる日本の經濟的、社會的危機を増大しつゝある。二つの階級の決死的爭闘の時は迫りつゝある。

これを議院内に反映し、此所を公然の階級闘爭の舞臺とすることが、今我々に可能な仕事の一つである。

× ×

社會主義か、資本主義か。

議院は此の論爭の舞臺にならねばならぬ。それは現下の客觀狀勢の必至の、當然の發展である。これこそ、今の衆議院が持つべき、只一の、正しい論爭の主題でなければならぬ。

私は其の機會と相手とを狙つた。同じ控室にゐるために、武藤山治とは話す機會が多い。彼は一個の資本家に相違ないが、人間が生眞面目で、勉强家だ。私は彼なら眞面目になつて論爭の相手になると思つて、彼を相手に選んだ。彼も快諾した。

機會は？　國民同志會提出の、失業救濟に關する決議案が上程せらるゝ時。

失業は資本主義高度化の指標だ。

「失業」こそは社會主義か資本主義かの最好適の主題だ。失業原因の究明によつて資本主義は暴露される。失業防止の方策を持たないところに資本主義の根本的缺陷がある。

資本主義の暴露は社會主義の建設である。議院に於ける此の論爭は院外の事象を反映すると同時に、院外の階級對立に對して反射する。

私の微力、何程の討論が出來るかな危惧しないでもない。然し私に課せられた任務だ。

此の論爭の準備中の小閑を偸んで此の議院雜景を書いた。推敲の餘暇がない。亂雜な走書である。

一九三〇、五、八日

東京市青年團の解剖

大宅壯一

一

四月號の本誌に掲載した拙稿「打倒官製青年團」は、匆々の間に成つた極めて杜撰なものではあつたが、全く思ひがけない反響を生んで、或は、本誌編輯部を通じて、さまざまな質問や、賛成意見や、反駁文に接した。その中には内務省檢閲課の叱正も含まれてゐるが、それも重要なる反響の一つとして特筆すべきであらう。

青年團、青年訓練所、在郷軍人會等は、日本におけるファシズムの貯水池として何人も認むるところであるが、それらに對する左翼的な立場からの具體的な調査や、解剖や、批判は、これまでほとんど行はれてゐない。たゞわづかに、産業勞働調査所から出る年鑑や時報の類で取扱はれてゐるたばかりである。それらは意識水準の高い勞働者農民の間に入り得ても、それらによつて啓蒙されうるところの未組織大衆、殊に批判の對象となつてゐるこれらの反動的諸團體の組織内へは容易に入り得ないものである。

だが、階級對立が今日の如く尖鋭化して來た時代にあつては、階級的な立場からなされる一切の批判は、更に具體的であり、實踐的であらねばならない。前記の諸團體を一括して簡單に反動のレッテルを貼つて斥けるばかりでなく、それらの組織や、構成要素や、指導力等々を檢討し、分析し、解剖することによつてそれらの正體を暴露し、一般世人の注意を喚起すると共に、構成要素の階級的自覺（何となればそのほとんどすべてはプロレタリアであるからだ）を××しなければならない。

一般世人竝に左翼的立場に立つ人々には、前記諸團體の指導

くあるべし!!!



イヒトワンゲル

ディッケンズ、今人でフォイヒトワンゲルださうである。勞働者旅行協會で年四回發行される旅行案内の昨夏號には『ジユウ・ジュスの故郷』と題してその地理的說明と史實の討究を、小說の描寫と比較した詩味橫溢の記事が出てゐたし、私が英國を去つた後の事だがロンドンのデューク・オブ・ヨーク座でマッシンランゲの率ゆる一座の演じたこの劇は、秋のだし物中の呼び物となつてゐた。（改造五月號）

ラファエル・サバチニ曰く　一つの尨大なるカンヴスの上に、著者は十八世紀のウュルテンベルヒの宮廷生活を赤裸々に描き出し、これを生理學的に、社會學的に、心理學的に、解剖し暴露し、他にその比を見出し難い偉大なる歴史小說を完成した。

ベアトリチエ・ハラデン曰く　本書が各國の知識層を震駭させたのも不思議ではない。

デーリー・ヘラルド紙曰く　本書が傳へる美と恐怖の感覺、鮮明な色調、悲劇的なアイロニーは、著者を現文壇の最前線に立たせるものだ。

ニユウ・ステーツマン誌曰く　本書はどんなに褒めても褒めすぎにはならない。それは傑作であるばかりでなく、全然新しい種類の傑作だ。

サンデー・エキスプレス紙曰く　この作品が全世界に凱歌を奏したのは、猶太魂の深刻なる描寫に存する。これは猶太人の叙事詩だ。こんなに情熱的な、空想力の豐富な、幻想の生々しい作品を未だ曾つて讀んだことがない。

部は、凡てが同質的に、反動思想の單一色をもつて染めなされてゐるかの如く考へられてゐるが、事實は部分的にではあるが、既にそれらの内部において或る程度まで分解作用が行はれつゝあるのである。地方的には、今回の東京市電爭議の際における東京市聯合青年團の罷業破りに、長野縣聯合青年團が抗議文を突きつけた如きはその一例である。又その他の地方においても、思想的異質分子は、長野縣ほどには結成されてゐないけれど、平團員はもちろんのこと、幹事級の間にも、消極的動搖や積極的進出の形態をとつて動きはじめてゐることは、現在私の手許に集つてゐる部分的データをもつてしても、推定することが決して不可能ではないと考へられる。

わけても、今回の市電罷業に目覺ましき活躍振りを見せた東京市聯合青年團は、全日本青年團の指導的地位に立つものであり、その影響力は壓倒的であつて、全國の中樞をなしてゐるものであるから、この際その組織や諸分派を檢討することは、プロレタリアの陣營にとつて必要であるのみならず、一般的にも相當興味のあることだと思ふ。

これまで主として文藝的分野で働いてゐて、かうした實際的方面のことについてはほとんど無知であつた私が、今また進んでこの小稿を草するに到つた動機は、前記の拙論が機緣となつて、一部の團員諸君から種々の具體的材料を供給せられ、その人たちの熱烈な激勵に接したからに外ならないのである。從つて以下記述するところは、大體において、直接團員諸君から與へられた材料を基礎とし、それに幾分私自身の調査と批判とを加へて成つたものであることを豫め斷つておきたい。私はたゞ青年大衆の、殊にその自覺層の忠實なる代辯者にすぎない。そして出來れば今後も、かうした動機と目的とをもつて、與へられた材料に基づいて筆を執りたいと思つてゐる。

二

大正十三年十月に結成された大日本聯合青年團は、昭和二年末において團體數一六、五〇八、團員數二、七四〇、五〇〇に達し、最近の概算では、團體一萬八千餘、團員數は三百萬を突破したといはれてゐる。それらは日本青年館を中心とし、單に形式的にすぎない全國的連絡並に空虛なる意志交換に基づいて、表面的には自治的な組織形態をとつてゐるが、實際的にそれらを支配してゐるものは東京市聯合青年團である。指導精神はもちろん、事業や仕事に到るまで、東京市青年團の直接間接の教示によることが多く、東京市青年團の動向はそのまゝ全國青年團の根底的動向である。從つて東京市聯合青年團本部の企劃は、全

國のそれを指導してゐるものと見做すことが出來る。全國一萬八千の青年團と三百萬の團員は、大部分單純なる國家至上主義的イデオロギーによつて組織せられ、多年徹底した中央集權的施設によつて訓練された首都に對する盲目的追從觀念を巧みに利用することによつて、東京市青年團は、長野縣の一部を除いたほとんど全日本の青年團を完全に操つてゐるのである。殊に東京市は、現在資本家地主の政府の膝下であるが故に、この反動思想の貯水池が、支配階級ともつとも直接緊密に結びついて、その要求を百パーセントに果しつゝあることはいふまでもない。

又帝國在鄕軍人會が、多年軍閥の巨頭であつた故田中義一を總裁に戴いてゐた關係上、主として政友會系に傾いてゐるのに反し、全日本聯合青年團は大體において民政黨系と見做すことが出來る。民政黨内閣になつてから青年團の活動が著しく社會の表面に現れて來たかの如き印象を與へてゐるのも、滿更故なきに非ずである。だが、いづれにしても、この對立する二大政黨が、多少色彩を異にしても、等しく資本家地主の傀儡であると同樣に、今や、在鄕軍人會も青年團も、支配階級の意識的指導の下に、反動×××としての役割を果しつゝある點に變りがない。

さて問題の東京市聯合青年團の首腦部を見るに、最近市長を呈出した東京市長堀切善次郎を團長に、東京市助役白上佑吉を副團長に、東京市社會教育課長池園哲太郎を常務理事に、金須千萬彥を主事に据ゑ、その外水田秀次郎以下十五名の顧問、主として區長市會議員小學校長、町內有力者等より成り分團長を兼ねてゐる理事二十九名、評議員百七十六名をおいてゐる。これによつて見ても、その指導部は全然「青年」から獨立したものであることがわかる。

このことは各分團の構成分子を檢討すれば一層明らかである。「青年團」といふから、大部分「青年」から成つてゐると考へたら大きな誤りである。昭和四年七月現在の東京市聯合青年團一覽表を見るに、團員を三種に分類して、次のやうな數字を示してゐる。

正團員	四二、七四六
特別團員	八、九三二
贊助團員	三六、〇七五
計	八七、七五三

右の中、義務教育修了（即ち十二歲）より二十五歲までの青年は、「正團員」だけであつて、その他の「特別團員」及び「贊助團員」は決して「青年」ではないのである。しかも青年團の事業の選擇及び遂行に關する決議權のほとんどすべては、これら青年

ならざる青年團員の手に委ねられてゐる。その比率を示せば次の如くである。

正團員	四九％
特別團員	一〇％
贊助團員	四一％

名は「青年團」といつても、實は青年は半數にも滿たないのである。これによつて見ても、今日の官製青年團は、青年の完全なる自治的組織でないばかりか、むしろ逆に、青年の青年らしい一切の欲求を出來るだけ抑壓して、その若々しい活動力の大部分を支配階級への奉仕へ向けるための機關であることは一目瞭然である。

又東京市聯合青年團は、全市十五區の區青年團に分たれ、主として區長を團長とし、更に各區青年團は、小學校長を團長とする學校分團と、町內の有力者を團長とする町內分團とによつて構成されてゐる。學校分團と町內分團とは、大部分地域的に重複し、併存することはほとんど意義を成さない。殊に學校分團は、實際的にはほとんど有名無實で、何等積極的活動力をもたず、中にはほとんど一名の團員も存在しないやうなものもあるのである。たゞ、官僚の完全なる奴隷にすぎないところの小學××の分團長としての代表權を通じて、本部の支配權を擴大強化するために存在してゐるにすぎない。

最近財政窮乏を傳へられ、今や破産に瀕してゐるとさへいはれてゐる東京市の金庫からは、この聯合青年團へ年々五萬圓の補助金が支出され、その大部分は、人件費、教育費、事業費に充てられてゐる。

教育といつても、「東京の青年」と題する十六頁の機關誌を發行して反動思想を鼓吹し、時々形式的な講演會を開いて、官僚や御用學者の馬鹿々々しい訓話を半強制的に聽かせてゐるばかりで、青年の本質的成長を阻止し、一切の社會的事象に對する正當なる認識力と判斷力とを失はしめるために役立つてゐるにすぎない。

事業としては、夜警、交通整理、消防夫援助等、自治體への奉仕の名の下に、補助警官的な役割を演じさせられてゐるが、その奉仕は、××それ自體の場合と同樣に、事實支配階級へのそれであることはいふまでもない。殊に最近の組織的な罷業破りが、その反動性を完全に暴露してゐる。彼等はあらゆる讒罵の雨を浴びて、うま〳〵と支配階級の吹く笛に踊りながら、彼等自身の階級に向つて弓を引かせられたのである。

三

次に、現在東京市聯合青年團を動かしてゐる勢力は、大體次の三つに分けることが出來る。

A、常務理事池園哲太郎を中心とする本部派。

B、「日本魂」の主盟である後藤武夫の下に結成されてゐる反動派。

C、貴院族議員伯爵有馬頼寧を擁いでゐる急進派。

今この三派が鼎立し、それ〴〵の政治的經濟的野心に引きずられて、絶えず鎬を削つて爭つてゐるのである。

本部派は、池園常務の完全なる獨裁である。東京市會や市當局を背景にして、一切の實權を掌握してゐるからもつとも有力である。區長を通じて各區青年團を統制し、小學校長を通じて各學校分團を支配し、決議に際しては常に絶對多數を制してゐる。機關誌を編輯發行し、正團員懇親會や講演會などを時々開いたり、ファシズム鼓吹の活動寫眞を見せて廻つたりしてゐる。

反動派は、表面は本部派と握手しつゝ、近き將來において本部の實權を握ることを夢みてゐる。この派は帝國興信所長後藤武夫の個人的な野心を中心に動いてゐるやうである。彼は雜誌「日本魂」により、至誠教と稱する一種の宗教染みた反動思想を武器とし、東京市の反動諸團體を後援にして、さま〴〵な逆宣傳によつて有馬派の排撃につとめてゐる。だが、今のところはまだ京橋區を中心とする極めて僅かな團體の間に勢力を下してゐるにすぎない。

有馬派を急進派と呼ぶのは、決して左翼的な意味ではなくてたゞ他の二派に比して幾分自由主義的傾向を示してゐる、といふよりはむしろ、自由主義的假面を冠つてゐるからに外ならない。かつてはもつとも「平民的」な殿様の一人に數へられ、水平社や左翼無産團體などを經濟的に相當援助したこともある元の政友會代議士、今の貴族院議員を中心とする政治ブローカーの集團であるが、その反官僚的な擬態が、或る程度の人氣を集めてゐる。彼の私有財産の一つで年々賽錢の形で數萬の利潤をあげてゐるかの水天宮の所在地深川區を初め、日本橋、赤坂、小石川等、區青年團長に區長を戴いてゐない諸團體を支配し、一般町内分團の間にかなりな支持を得てゐる。民間派、即ち區長以外の理事の集團である東青會を通じて大いに策動し、將來東京市聯合青年團の半永久的な團長を夢みてゐる。といふのは、團長には代々の市長を戴くことになつてゐるのであるが、それでは甚だ安定性を缺くから、團長の地位をばさうした政治的情勢に動かされない半永久的なものにせよといふのが、この派の重要な主張なのである。

この派の事業としては、帝京共同基金會といふものを全市的

に組織し、毎月震災記念日を期して全市から數萬の寄附金を集めてゐる。先月伊豆の伊東が頻々として地震に襲はれた時、令村博士などを連れて行つて講演會を開き、非常な歡迎を受けて、そのお禮に東京で溫泉の宣傳をしたといふので、一部の非難を招いたが、人氣取りの方法としては、或る程度まで成功してゐるやうだ。そのほか、本部派の「東京の青年」に對抗して、「皇國青年團報」を出したり、「東京青年團雄辯聯盟」といつたやうなものをつくつたりして、一種の私立本部を形成し、[redacted]本部に或る程度の脅威を與へる域に達してゐる。

ところで、この「平民的」な殿樣の最大の希望は、第二の後藤新平になることらしい。彼の取りまき連も、それを好餌として彼をおだてゝゐるやうだ。殿樣の常として彼も絶えず周圍の人物に操られてゐる。以前柴尾與一郎が參謀であつた時は、同愛會の如き融和團體をつくつたり、後には完全に無產階級を賣つた日本農民黨の平野力三あたりに金を出したりしたこともあるが現在彼を取りまいてゐる連中は、赤坂の區會議長を買收して市ケ谷に收監された小石川區會議員星野某にしても、赤坂區會議員橋本某にしても、市青年團理事西村某にしても、ほとんどすべて政友會の院外團であり、政治ブローカーである。

從つて本部派並に反動派の排撃を受けてゐる「急進派」による市青年團の「民衆化」乃至「自治化」の主張も、正しい意味での、即ちプロレタリア的な、民衆化若くは自治化ではなく、青年市民を欺瞞するための別な手段にすぎない。比較的自由主義的な假面を冠つてゐて、その階級的本質をより深く隠蔽してゐるだけ、より憎むべき存在である。

四

これを要するに、現在東京市聯合青年團は、以上のべたやうな組織の下に、以上のべたやうな諸勢力に動かされてゐるのである。そしてそれらは、或は官僚的な、或は封建的な、或はブルジョア的な色彩を示し、或は政友會に傾き、或は民政黨に傾いてはゐるが、その本質は等しく、すでに××の段階に入りつつある資本主義の自己防衛のためのバリケードの一つにすぎないことは、過般の市電罷業に際しては、これらの相爭ふ諸勢力が完全に一致して罷業團を慘敗に導いたことが、明らかにこれを立證してゐる。

又これは單に東京市の青年團についてのみいひうることではない。全國三百萬の青年團の主要部分を形成してゐる無產××よ、諸君はこの事實を何と見るか！

ブルジョア・アヂ・プロの狂嵐を衝く

山田清三郎

一

ブルジョア・アヂテーション・プロパガンダの運動、卽ち、アンチ・マルキシズムに立脚するところの資本家的な煽動、宣傳の運動は、今や全國的な嵐となつて、勞働者、農民、兵士、學生その他一般大衆の上を强襲してゐる。ブルジョア・アヂテーション・プロパガンダとは何であるか、そしてこれは、果していかなる根據と、いかなる意義をもつものであるか、これに對する勞働者、農民側からの鬪爭は如何。これらの問題について、ここに語り得るかぎりの言葉をかりて論破し、究明しようとするのが本文起草の目的である。

一體、ブルジョア・アヂ・プロの運動とは具體的にはいかなる事實を意味してゐるか、私は先づその主なる實例について、便宜上これを、その『目的』別的乃至は『機能』別的に、分類しつゝ數へて見よう。

(A)　一般的な教化運動

イ、教化總動員とその年中行事化
ロ、建國祭の年次的示威運動
ハ、反マルクス主義的文獻の蒐集及びその刊行
ニ、映畫その他による諸種の社會教育の普及促進
ホ、その他あらゆる生活改善、思想善導を目的とする常時的及び臨時的催し

(B)　對青年の組織及び訓練

イ、大日本聯合青年團の擴大强化策
ロ、同女子青年團の擴大强化策
ハ、青年訓練所の强化及び半强制的な入所の獎勵勸誘
ニ、各種實業補習學校の増設及び產業組合學校の新設

(C)　對學生の組織及訓練

イ、軍事教練の常時的强行及びスポーツ熱の獎勵鼓吹

ロ、各大學における航空班の設立獎勵

ハ、各學校における教師、教授の徹底的な反動化及び奴隷化の强行

ニ、學內反動團體の直接、間接の擁護及びその利用

（D）　對少年の組織及び訓練

イ、小學校における兒童の所謂非常時訓練の日常的實施

ロ、少年團の組織及びその擴大强化策

ハ、少年刑務所の教化的利用

（E）　對勞働者教化政策

イ、勞働貴族（ダラ幹）及び御用學者、官公吏等を中心とする勞働者教育協議會の開催及びその活動

ロ、六大都市その他大工業地帶における勞働講座の開設

ハ、自由勞働者に對する情操教育の實施

（F）　一般的な軍事思想の鼓吹及び軍事的訓練

イ、在鄕軍人の組織の强化

ロ、國家總動員の演習とその年中行事化

ハ、陸軍及び海軍記念日の示威的催し

ニ、軍縮會議に關する宣傳と、それに結びついて國防觀念の鼓吹及び養成

ホ、一大軍人會館の設立計畫

ヘ、擬兵及び兵役義務の待遇改善の計畫及びその宣傳

以上は主として、最近約一年の間に、『政府』または『國家』の名において、及びその他の官、公團體乃至はそれに準ずるものによつて、次々と展開され、また展開されようとしつゝあるところの、そのなかんづく注目すべき事實について、これを拾ひ上げたまでであつて、この外たとへば、『進軍』『撃滅』等々の軍事映畫を始め、民間を動員しての等、等、等のアヂ・プロに至つては、これを數ふるにいとまはないのである。

二

最近における、かうした資本家的なアヂ・プロ運動の狂氣的なたかまり、その社會的な根據は何か、これを一言にしていふなら、それは今や最後のドタン場へと追ひ詰められつゝある日本資本主義の矛盾の激化以外の何ものでもないのである。

事實、最近一二年來の日本資本主義の運動は、世界資本主義がひとしくさうであるが如く、所謂『第三期』（戰後資本主義）の日に增す危機の增大深化によつて特色づけられてゐるのである。このことは、たとへば、政府自らが發表し、そしてブルジョア新聞が傳へるところの報導のうちにも、『皮肉』にもその尻尾をのぞかせてゐるのである。

レコードを破つた昨年の爭議數

『昭和四年度中におけるわが國の勞働爭議に關して內務省社會局

で調査したところによると爭議の件數五百七十六件……參加人員七萬七千四百四十四人で前年に比して百七十九件、人員三萬千百九十一人を激增し……これはわが國產業界の萎微沈衰が例年に比し一層深刻化し……解雇勞働條件の低下勞働賃銀の不拂等が各地に起り產業合理化の結果は企業の合同、整理・生產費低下のための賃銀値下の斷行となりあまつさへ金解禁の準備として公私經濟の緊縮は勞働者の生活上に異常の脅威を與へ勞働者が雇傭條件の維持改善のために防禦的抗爭をなしたことが爭議增加の因をなしてゐるといはれてゐる。』(『東京日日』昭和五年四月十四日)

一九二九年において、『レコードを破つた勞働爭議』、それは『わが國產業界の萎微沈衰』が『例年に比して一層深刻化』したことゝ、『金解禁の準備として公私經濟の緊縮』が『勞働者の生活上に異常の脅威を與へた』結果であると、ブルジョア新聞は報じてゐる。我々はこのブル新聞の報導から、彼等の蔽ひかくすことのできない次の事實を見るのである。

それは何か、日本資本主義の必死的な『再建』の運動であり、それに伴ふ不可避的な階級鬪爭の尖銳化であり、そしてすべてが、資本主義の危機の決定的な瞬間へと急ぎつゝあるテンポがそれだ。

『緊縮』『金解禁』『產業の合理化』!この最近における支配階級政府の一聯の旗印は一體何を語つてゐるか、それは獨占的大資本の發展による生產能力と市場の吸收能力との開きの擴大が、生產力の發展の阻止を導き、その不可避的な利潤の減少は、國內政策としては益々獨占の過程を促進すると共に、勞働の搾取を一層强化するより外に行くべき道のないことを證明するものである。最近における勞働爭議の激增は、かうした資本の必死的な攻勢に對する、勞働者階級の逆襲を如實に示す以外の何ものでもないのだ。

而して、かくの如きは勿論、日本資本主義のみの特殊的な現象では決してない。それはいふまでもなく世界資本主義が、共にひとしくするところの共通的な現象であり、そしてまたこの獨占期資本主義の矛盾の激化は、國際的には、列强が相互に、商品及び資本の輸出、原料の獲得等々な妨害し合ふことによつて、植民地勢力範圍の白熱的な爭奪戰を展開せしめ、このことはまた必然的に、資本主義列强をして、××によるその最後的解決の道へと驅り立てないではゐないのである。

國內政策の强行に對する勞働者、農民の蹶起抗爭、底知れぬ失業群の增大、國際的には刻々に激化し行く植民地の爭奪戰!　かくて資本主義『第三期』の矛盾と尖銳化は、資本主義列强をして、たゞひたすらに避けがたい帝國主義××の距離の接近を促進せしめつゝあるのである。

狂氣的にたかまり行く嵐の如き、ブルジョア・アヂテーション・プロパガンダの祕密、それはたゞこのことのうちにこそ、その全き姿を見極めることができるのだ。

三

『溫情主義』の魔榮に欺かれてゐた全鐘紡幾萬の勞働者も起ち上つた。横濱ドック、東洋モス、富島紡福山工場、東京電燈、池上電鐵、東京市從、大阪市電及び市營バス、東京交通勞働等を始め、本年に入つて勞働爭

議は少しの減少の傾向もなく、多々益々増大の勢を示してゐる『レコードを破つた爭議數』は、決して一九二九年だけの專賣特許ではないのだ。

更に、農村、漁村における爭議の激增にも驚くべきものがある。小作爭議は、『昭和三年には一千二百件』であつたものが『同四年には一千五百一件』(『東京日日』)の數字を示してゐる。而して最近におけるそれらの特徴は、もはや從來のブルジョア的な『法廷戰』から離れて、決定的な要素をもつた鬪爭にまで發展しつ丶あることを物語つてゐる。(全國農民組合第三回大會における各地の報告は、このことを如實に傳へてゐる。)新潟縣王番田における決死的な爭議の如き、その極めて最近における一つの實例に過ぎないのである。

かうした勞働者、農民の必死的な逆襲抗爭、これをいかにして喰ひとむべきか、資本の『再建』の運動を、いかにより欺瞞的に押し進めて行くべきか、而して同時に、迫り行く帝國主義××の危機に對して、いかに用意し準備すべきか? 彼等は一方により直接的な××の武器をもつてゐる。三・一五、四・一六事件等は卽ちその集中的な表現である。だが彼等は決してそれだけでは安心することができない。そこで一方には劍を一方には甘い言葉とあらゆる手練手管を。かくてあらゆる反動的なアヂ・プロがより組織的、より計畫的、そしてより大なる規模をもつて次々に取り上げられて行く。

ここで我々は、この文章の始めに項目別に數へて置いたそれらの運動が現實的には、いかなる意圖と目的を以てなされてゐるかについて見るべき順序をもたう。私は、それらの一々について觸れて行くといふよりも、重複と煩雜さをはぶくために、先づこれを、次の如き個條書によつて現はして置きたい。

(1)勞働者、農民及び一般大衆の階級意識の痲痺或は去勢化、それに資本家階級に對する徹底的な奴隷化

(2)勞働者、農民の國際的結合に對する妨害(インターナショナルの精神の去勢或は痲痺)

(3)勞働者、農民の鬪爭(あらゆる)に對する常時的スキヤツプの養成及び訓練

(4)帝國主義××に對する精神的及び行動的準備

これらは勿論、それぞれ個々バラバラに切り離されてゐるのではなくそれは相互に、基本的な一本の線によつて貫かれてゐることはいふまでもないが、これを要するに、前述の如き煽動、宣傳の運動を通じて、支配階級の目ざすところのものは、大體左の如くに分つことができると思ふ。次に我々は、若干の具體的な實例をかりて、これをたしかめて置かねばならぬ。

『一般的な敎化運動』(A)についていへば、その殆んどすべてが、右のうちの(1)(2)及び(4)の主として精神的準備に該當してゐることを見出すに、何らの困難を要しないであらう。特に敎化總動員に例をとつて見るなら、文部省の揭ぐるところのその根本趣旨なるものが、このことを端的に物語つてゐると思ふ。曰く『一、國體觀念を明徵にし、國民精神を剛健ならしむること』『一、公私經濟生活の更新を圖り、國本の

培養に努むること』『露骨に階級意識を捨てよ、戰爭に××せよといはないところに支配階級の魔術がかくされてゐるのであつた。

次に『對青年の組織及び訓練』(B)と、『對學生の組織及び訓練』(C)のうちから二三の例を求めよう。この中で青年訓練所及び軍事教練なるものが、直接的には前記の(3)即ち、勞働者、農民の闘爭に對する常時的スキャップの養成及び訓練にあることは、たとへば、今回の市電の爭議を始め、その他全國の交通、運輸勞働等のストライキの勃發に際して、忽ちその馬脚を現はすことによつて明かである。そしてこのことはまた同時に、(4)に於ける主として行動的な準備を意味するものであることは附け加へるまでもないことであらう。

(B)の中の大日本聯合青年團、同女子青年團の擴大强化が、主として(1)及び(2)にあてはまるものであり、(C)の項の各學校の敎師、敎授の徹底的な奴隷化、及び、學生反動團體の直接、間接の保護及び利用が、一般學生の反動化と、勞働者運動に對する學生の參加、協力を妨ぐるものであり、而してこのことは(A)におけるマルクス主義文獻の蒐集及び刊行と相俟つて、直接間接(1)の目的のために學生を動員せんとするものであることはいふまでもない。

(E)の『對少年の組織及び訓練』が、(B)及び(C)のそれに準ずるものであることは説明するまでもないと思ふ。ところで、ここで一言、特にさしはさんで置きたいのは、少年と階級闘爭に關する問題についてゞある。世の所謂教育者及び學者たちは、『せめて純白な少年だけは階級闘爭の外にそつとして置きたい』といふやうな意味のことをいつてゐるのを、屢々我々は耳にする。

しかし乍ら事實はどうか、支配階級はかくして常に、『純白』な、そして『勞働者、農民』の少年を、彼等の利益のために闘爭の場面に動員しようとし、また動員しつゝあるのである。世の所謂敎育者たちの願ふところは、少年を階級闘爭の『外』にそつとして置きたいのではなくして『せめて』少年だけは、階級闘爭において、資本家・地主に反抗させたくないといふこの上もなく蟲のいゝ希望にほかならないのである。

次に『對勞働者敎化政策』である。これは一見して明かであるやうに、主として(1)及び(2)のために企てられてゐるものである。このことはたとへば勞働者敎育協議會なるものが、文部省の音頭取のもとに、總同盟の札付ダラ幹松岡、末弘、春山兩帝大××教授、矢吹前東京市社會局長、協調會の惣田等によつて持たれ、そしてその目的なるものが、『勞働者の人格涵養(!)』『資本家、勞働者の何れにも偏せぬ(!)敎育』を施すにあるといふ一事について見ても、推してその他を知ることができるであらう。

もしそれ、最後の『一般的な軍事思想の鼓吹及び軍事的な訓練』に至つては、もはや説明を加ふべき餘地なきを思はしめる。たゞ一言こゝに一大軍人會館の設立計畫及び、徴兵及び兵役義務の待遇改善の計畫について觸れて置くなら、前者は、莫大な巨費を投じて今秋十月に着手し、鐵筋コンクリート五階の大建築で、そこには『軍神』を祀る神殿、紀念堂、貴賓室、大演武場、千五百名を收容し得る宿泊室、大浴室等を設備し、上京の在××人、及び青年訓練所員、生徒等を收容するものであり、後者

は、審議會を開いて、目下その具體案の研究中に屬してゐるのである。

これらは一見して、まさしく軍人に對する一大優遇であることを思はしめる。そしてそれはなるほど、それにちがいはないであらう。その裏に記されてある支配階級の本心は、××の優遇そのものにあるのではなくして、『いざ鎌倉』のための『手なづけ』であり、而して、この(下)におけるすべての條項が、一として、(4)の目的から出發してゐないものはないといふことは、勿論、ことはるまでもなく明かである。

四

たかまり行く資本家的な煽動、宣傳の嵐、それがいかなるものであり、いかなる根據から起つて居り、それはいかなる意義をもつものであるかは既に見て來た。それではこれに對する、勞働者、農民の側からの抗爭は如何？　それは次の如き事實となつて現はれてゐる。

(1)　教化總動員の末路

その鳴物入りの宣傳にも拘らず、捲き起る疑獄事件の眞只中で、それ自身の矛盾と欺瞞の正體を曝露しつゝ、コソ〳〵と姿をかくしてしまつた。全國的な反對運動、××にあまりにも多き兵士の落伍、一般國民の氣乘り薄、そして最後に、その總指揮官小橋一太自ら『縛』を垂れての收賄事件。しかしこの失敗にこりず支配階級は今後更に、『國民訓練週間』等の名において、年二回位實施しようと計畫してゐる。

(2)　青年訓練所の不振

當局の必死的な努力も、徐々萎凋化のどん底に突き落され、資本主義の恩典に何ら浴するところのない、無産青年を充分動員することができず、その成績は極めて不良である。全國の青年訓練所一千五百、生徒約一百萬といふも、この數字そのものについて見てもその不成績は蔽ふことはできないのに、中には補助金目當に幽靈人員を報告するものも少くないとのことである。こゝにおいて、青訓改善(?)問題が、今や日程に上されやうとしてゐる。

(3)學生の驚くべき左傾化

それはブルジョア新聞等によつて、常に『深憂』されつゝあるところであるが、學生に對するあらゆる反動政策にも拘らず、反對に學生の左傾化は益々增大するばかりで、澎湃たる全國の學生事件の波のたかまりがこのことを物語つてゐる。法政大學の盟休、早大の騷動、高知、浦和岡山、廣島各高校のストライキ、姫路、水戶の高校、朝鮮の學生騷動等はその顯著な實例である。

(4)　官製(市町村)青年團の動搖及び急進的自立化

このことは特に農村においても著しい現象である。生活條件の極度の惡化、小作爭議の激發等は農村青年の意識を呼び醒まし、官製青年團を、彼等自らの青年に假還するものが、長野、新潟、山梨、岡山を始め全國各地に續出しつゝある。

(5)勞農少年團(ピオニール)の增加

階級鬪爭の激化は、少年をもまた必然的にその渦中に捲きこまないでは置かない。欺瞞的なブルジョア敎育、ブルジョア敎化が勞農少年たちの生活をいさゝかでもよくするものでなく　その反對であることを今や

少年たちは身を以て經驗してゐる。あらゆるブルジョア的な敎育、敎化の押賣りにも拘らず、これらの少年たちにとつて勞農少年團、勞農少年學校は次から次へと結成されて行く。東京府下、南葛、南埼玉、宮城縣豐里村、千葉縣土睦村、新潟縣木崎村、山梨縣落合村等の勞農少年團については既に、戰旗等が紹介してゐるところである。

（6）マルクス主義及びプロレタリア文化の急激なる普及化

御用學者のあらゆる知嚢も、マルクス主義の普及化を喰ひとめることができない。それはマルクス主義のみが、資本主義を克服し、被搾取階級を解放に導く××の眞理だからである。プロレタリア文化の普及は、階級的なプロレタリア出版（書籍、雜誌、パンフレット、新聞等々）及び同じく文學、演劇、美術等に對する大衆的な支持のたかまりとなつて現はれてゐる。

（7）軍事思想に對する一般的な不感症及び著しき冷却

だがこのことについては、讀者諸君の賢察に任すことにした方がよいらしい。ブルジョア・アヂテーション・プロパガンダの運動、それはその死物狂ひの彼等の努力にも拘らず、資本の最後的な攻勢に對する、眞に英雄的なる勞働者、農民の基本的な鬪爭を中心として、かくの如くに次々とたたきのめされ畫餠に歸せしめられつゝある。勞働者、農民の力の增大は、今後益々このことを激しくして行くであらう。

ブルジョア・アヂ・プロの嵐よ吹かば吹け、彼等の强襲が、更にそのはげしさを加ふれば加ふるほど、我々もまたそれに對して、あくまで抗爭することを止めないであらう。

最後の勝利の道は、プロレタリアートの××××開かれてゐる。

——一九三〇、五、二——

プロレタリア文學大衆化の問題

藝術大衆化の問題

藏原惟人

一、

最近ブルジョア・ジャーナリズムの領域に於いて、所謂藝術大衆化の問題について「ナップ分裂の兆候」「藏原派と貴司派の對立」等々が傳へられた。しかし事實は全然これと相違して「藏原派」も「貴司派」もなければ、ナップ分裂の兆候なども尚更あり得やう筈はないのである。成程藝術大衆化の問題について、わがプロレタリヤ作家同盟の基本的方針に對して同盟員の一部から疑問が提出され、そしてそれが大會の前後を通じて大衆的討論に附せられたことは事實である。しかし我々の内部に論爭が起ると云ふことは、やがて我々の運動が進展してゐる證據であつて、それが直ちに分裂に進展すると考へたり、それを特定の個人の名と結びつけたりするのは、我々の運動そのものを理解してゐないからである。

しかも藝術大衆化の問題は討論の結果我々の内部に於いて既に解決され、「戰旗」の六月號にはその決定的なテーゼが發表される運びになつてゐて、我々は既に論爭の段階を通り過ぎてゐるのである。で此處では唯、求めらるゝまゝに、それが解決された觀點から、何か問題であつたかと云ふことを見てゆきたいと思ふ。

わがナップとそれに所屬するプロレタリヤ作家同盟とは、その出發の當初から「藝術の大衆化」と云ふことをその運動の中心的任務の一つとして掲げて來た。これはその實質に於いて小ブルジョア的インテリゲンチヤの運動に過ぎなかつたわが國の藝術運動を本當にプロレタリヤ的な大衆的な基礎の上に建て直す爲に、非常な重要な意義をもつてゐる正しい提案であつた。そしてそれは問題の提出そのものが正しかつたばかりでなく、その解決に於いても、個々の場合には多少の誤謬を冒しながら、全體としては正しい方向に進んでゐたと云ふことが出來る。このことについては現在に於けるプロレタリヤ藝術の勞働者農民に對する益々增大してゆく影響がこれを物語つてゐる。

我々の藝術の大衆化は、當然、二つの線に添ふて行はれた。

第一は、大衆の生活を描くことによつて。實際それまでの我々の藝術にどれだけ本當の大衆の姿が描かれてゐたであらうか？ 我々の藝術の主人公はそれまで小ブルジョアか浮浪人か、せいぜい頭の中で拵へ上げ

たごまかしの「プロレタリヤ」かに過ぎなかつた。そこには現實に闘爭する生きた勞働者農民は描かれてゐなかつた。しかし大衆はごまかしでは駄目である。彼等は彼等自身の眞實な姿が藝術の中に表現されることを要求する。

此處に於いて「大衆に近づけ！」と云ふスローガンが我々によつて掲げられ、中野、鹿地及び私の諸論文によつて具體的に取上げられた。私はそれを「生きた大衆を描け」と云ふ言葉で表はし、中野はそれを「大衆の生活を上皮とあま皮とを剝き出した露はな姿において描け」と云ひ、鹿地は端的に「大衆の中へ行け」と叫んだ。そしてこの呼びかけは直ちにわが藝術家達によつて取上げられ、その後の約一ケ年半の間にわがナップの藝術家達は、少くともそのよりよき部分において、題材的に一つの大きな飛躍を成し遂げた。これが藝術大衆化の重要な基礎を爲すものであることは云ふまでもない。

しかし大衆化の問題は唯單に題材のみの問題ではない。それはまた形式の問題でもある。如何に題材が、プロレタリヤ的であり、大衆的であつても、それを表現する形式そのものが、難澁な、インテリゲンチヤ的なものであつたならば、藝術の大衆化は實現されない。ルナチヤールスキイも亦「隔離され切離されたあらゆる形式、專門家的耽美家の狹い範圍を當にしたあらゆる形式、あらゆる藝術的條件性及び洗練性等は、マルクス主義者によつて批判されなければならない」と云つてゐる。

かくて、「大衆に理解され、愛され、大衆の感情と思想と意志とを結合し高める」（レーニン）やうな藝術的形式を作り出すことが、藝術大衆化の重要な問題となり、この線に添ふてまた、正しくもわがナップの殆んどすべての理論家と藝術家との努力が進められたのである。今こゝにその到達點だけを問題にすれば、演劇における左翼劇場の「全線」「太陽のない街」、文學に於ける藤森、中野、橋本、片岡、立野等の作品殊に德永の「太陽のない街」、小林の「工場細胞」（この作品は內容的に一つの重要な缺陷をもつてゐるが今此處では問題にしない）、繪畫における幾らかの作品等に我々はその大きい努力の跡を見ることが出來る。

二、

所が最近に到つて藝術大衆化の問題が再び日程に上つた。その直接の動機となつたものは作家同盟中央委員會の方針に對する同盟員貴司の反對意見である。そして特に注意を要するのは、この反對意見が、中央委員會によつて決定された「文藝運動のボリシエヴイキー化」「共產主義的文學への進展」の方針の提案と時を同じうしてなされたと云ふことである。

貴司は藝術大衆化の問題は既に一昨年（一九二八年）度に於いて解決されてゐて、殘されてゐるのは唯實踐的問題だけであると力說した。これに對して我々は藝術運動の新しい段階――その共產主義的藝術への進展の段階から貴司の提案を審議することを必要とした。つまり我々にとつては大衆化の問題は、一九二八年に解決されたのとは異つた斷面に於いて、それよりもより高度の發展に於いて問題となつたのである。

しかし、我々はそれと同時に一九二八年以後に行はれた論爭をもう一

度振り返つて見る必要を認める。と云ふのは貴司と中央委員との間に起つた論爭は、藝術運動の新しい段階と關聯してゐると共に、それはまた一九二八年以後に於ける大衆化論そのものゝ不正確、不徹底な解決にも原因してゐるのだから。

中野重治は一昨年六月の「戰旗」に「いはゆる藝術の大衆化論の誤りについて」を發表し、そこで彼は、藝術の大衆化を望むものが、過去及び現在の色々の藝術からその「面白さ」をかき集めて來ようとしてゐるのを非難して「藝術に取つての面白さは藝術的價値そのものゝ中にある。」と云つた。此處で彼の云ふ「藝術的價値」とは「對象をその客觀性において捕へる」力を云つてゐると解するならば、この主張は現在の大衆化論に現はれた偏向を早くも豫見したものとして重要である。

しかし所謂大衆化論の危險を指摘して置きながら、彼は當時尚インテリゲンチヤ的傾向を多分に殘してゐたプロレタリヤ藝術そのものが、眞實に大衆化されなければならないといふことを強調することを忘れ、その具體的な方向を指示しなかつた爲に、結局誤つた大衆化を實踐において克服し得なかつた。

これに對して私と林房雄とが、勞働者農民の遲れた層に受入れらるべき藝術の必要を主張したのは、まだ極めて非大衆的であつた當時のプロレタリヤ藝術と遲れた大衆との間のギヤップを埋め合はせようとする意圖の下になされたのであつた。しかしそれは同時に藝術運動の一般的方向とは獨立に、それと質的に異つた所謂「大衆藝術」なるものが存在すると云ふ幻想を抱かせる危險をもつてゐた。そしてこの主張はプロレタリヤ藝術そのものが眞實に大衆化されて來た。その後の發展において有害なものとなつて來た。この二つの相違は質的なものではなくて量的なものであると云ふことが理論的にははつきりとして來たのである。

かうして藝術の大衆化論は一應終結したやうに見えた。そして實際多くの論者達はその筆をおさめてしまつた。しかしそれは唯紙面の上でゞあつて、實際に於いては問題は少しも片づいてゐなかつた。依然として一部の作家達は、わが藝術運動の一般的方向――プロレタリヤ・レアリズムの方向とは獨立して、その仕事を進めてゐた。それに對して私は論爭を續けたが、然しそれも單なる「藝術性の觀點」から、「宣傳性は藝術性と並行する」と云ふ一般的命題から出發して我々の要求する藝術性そのものを具體的に分析しなかつた爲に、問題は一向に進展されなかつた。

そしてこの間隙から、再び貴司等によつて「大衆藝術」の主張が復活し、そしてそれがプロレタリヤ藝術のすべてゞあつて、他の形式は恐くインテリゲンチヤ的なものであると主張されるに到つたのである。

三、

だが貴司の「大衆藝術」とは何であるか？　貴司の意見は我々との論爭に於いて次第に變つて來た。

その初め彼は彼の主張する「大衆藝術」なるものがプロレタリヤ藝術のすべてゞあると云つてゐたが、四月六日の大會に提出された提案ではルナチヤールスキイの言葉を引用して、「複雜な、高い社會的内容」をもつた作品と並んで、廣汎な大衆を目安とした「比較的單純な、比較的初

的な內容をもつて作品」が制作されることの必要であると云ふことが正當してゐる。これはそれだけでは全く正しい。

所が彼はこの「比較的單純な、比較的初歩的な內容」をもつた作品を「マルクス主義的イデオロギーの割合にゆるやかな初歩的な程度におりこまれた」作品と解釋することによつて、非常な誤りを冒してゐる。彼は「イデオロギーの強化と云ふことは、質的に考へられると共に量的にも觀察されなければならないと思ふ」と云ひ、プロレタリヤ・イデオロギーに水を割つて薄めることを檢閲制度の現存をもつて合理化することによつて、全く社會民主主義的な大衆化論に到達してゐる。

このことは特に現在、左翼社會民主主義との闘爭が共產主義運動の中心的題目の一つとなり、我々の藝術そのものが共產主義藝術への飛躍を遂げなければならない時に於いては、全く反動的意義をもつてゐる。

このことはまた我々の藝術活動の規準を「もつともおくれた層」に置くことにも現はれてゐる。貴司は「もつともおくれた層」に對する文學活動を大衆化の「尖端的問題」であるとしてゐるが、「もつともおくれた層」とは何を云ふのであるか？　彼は「未組織大衆」と「文化的に後れた層」と「政治的に積極性のない層」との概念を全く混同して「もつともおくれた層」を作り、そしてその上にその大衆化論を立てた爲に、これ等の層の夫々の否定的要素が、悉く、彼の意見によれば、我々の藝術に反映しなければならないのである。即ち彼等は文化的に後れた層であるが故に、高い複雜な內容は受入れられない、また政治的に積極性のない層であるが故にイデオロギーを薄めてやらなければならない。だがそれにしても彼はこの彼の頭の中に存在する「もつともおくれた層」に「ゆるやかにされたプロレタリヤ・イデオロギーを注入」することによつて何を爲し得ると思つたのであらう？

反對に、我々は我々の藝術活動の規準を常にプロレタリアートの基礎的部分に置き、我々が政治的に遲れた部分を對象とする時にすら、我々は我々の共產主義的立場から一歩も退くべきでないのである。ルナチヤルスキイが「比較的單純な、比較的初歩的な內容」云々と云つたのは決してそのイデオロギーの質について云つたのではなくて、作品の題材等について云つたのである。

成程政治的に遲れた大衆、殊に小ブルジョア的影響からぬけきらない大衆は、藝術から娛樂以上のものを要求しないかも知れない。最近イギリスで共產黨の日刊機關紙「デイリー・ウオーカース」が出初めて讀者から色々の感想や希望を集めて、それに載せたが、その中の大部分が、「もつと政治や宣傳に關する記事を少くして、面白い記事を載せて呉れ」と云ふのであつた。これに對してロシヤ共產黨の機關紙である「プラウダ」は「これはイギリスの大衆が政治的に如何に遲れてゐるかと云ふことを示すもので、そのことは考慮に入れなければならないが、決してその要求に追隨してはいけない。」と書いた。

これと同じことが我々の大衆化の場合についても云ひ得る。我々が大衆化を論ずる時、我々の第一の問題は何を大衆化するかと云ふことでなければならない。で若しもその作品が何等階級的な、共產主義的な內容を持つてゐないか、或はそれが他の混物によつて薄められてゐるとした

ならば、それが何萬の讀者や觀客を有してゐようとも、それは決して我々の見地から見て成功したものだとは云ひ得ない。それは骨拔きにされた大衆化、××黨自身の大衆化が問題になつてゐる時に、それとは別に新勞農黨を作らうとするやうな大衆化であるからである。

これは階級的見地に立つてゐるものにとつては自明なことでなければならない。しかもこの自明なことが「大衆化」の名の下に肯定されて、現在のプロレタリヤ藝術に影響して來たのである。しかし我々は今やそれを問題にしなければならない。我々は如何に大衆化されてゐるか、と云ふことを問題とする前に何が大衆化されつゝあるか、と云ふことをもう一度振り返つて檢討し、我々の藝術を眞に××主義的な内容の上に築いてゆくやうに仕向けなければならない。

四、

貴司の第二の主張は「形式」に關したものであつた。

彼はかう主張した、——我々は我々の藝術を作り出すのに現在わが國の勞働者農民の文化的水準から出發しなければならない、云ひ換へれば我々は煩鎖なレアリズムの手法を棄てゝ、講談社的な大衆文學、通俗小説の形式から出發しなければならない、何故と云ふに大衆はそれ以上のものを理解しないし、我々はこの形式の中に立派にプロレタリア的内容を盛ることが出來るから、と。

しかしこの主張は間違つてゐる。第一に、現代の大衆が講談社的な作品以上のものを理解しないと云ふのは、勞働者農民の文化的水準と云ふものをブルジョア的に、固定したものとして考へてゐるからである。第二に、かう云ふ物の云ひ方をするならば、同樣に我々は「煩鎖な」マルクス主義、唯物辯證法の認識方法を棄てゝ、「大衆的な」形式論理的な物の見方に歸らなければならない。第三に、講談社的大衆文學、通俗小説の形式とは何であるか？

それは封建的町人とブルジョア的小市民との藝術形式——若しもそれを藝術と名づけることが出來るならば——である。しかもそれは單なる切り離された形式ではない。それはこれ等の階級の世界觀と密接に結びつけられた形式である。所謂大衆文學、通俗小説の形式と、封建的町人及びブルジョア的小市民の世界觀、或ひは世界觀であるところの英雄崇拜・安價なるヒロイズム、義理人情、傳奇的趣味、物事に對する非現實的な非論理的な態度、等と切り離して考へることは出來ない。

近代的ブルジョアジーはこの荒唐無稽な世界觀を粉碎してそれを近代的唯物論の上に建て直した。近代的ブルジョアジーの藝術態度である自然主義は、この大衆文學、通俗小説等の形式を破壞して、ブルジョア・レアリズムを打建てた。此處に藝術史上における自然主義の重要な意義がある。で若しも現在においてこの大衆小説、通俗小説が復活しつゝあるとするならば、それは現在の小市民層の中に、ブルジョア自由主義以前に返らうとする反動的イデオロギーが起りつゝあることを證明する以外の何物でもない。そして、小市民層の間におけるこの反動的イデオロギーこそは、現在のフアッシズムの觀念的支柱を爲しつゝあるものである。

だから若しもこれ等の以上に掲げた傾向を現在いわが國の勞働者の一部が持つてゐたとしても、我々は決してそれを助長するやうな藝術形式を無原則に利用してはならないのである。成程、大衆文學、通俗文學の純外面的な形式は、來るべきプロレタリヤ藝術にとつて全然何の役にも立たないと云ふことは云ひ得ないであらう。しかし凡そ我々の側からのすべての利用は唯眞實にプロレタリア的な方向が確定してゐる場合にのみ初めて問題となり得る。自分自身の原則的方法のない所に何の利用もあり得ない。實際これまで現實に對する眞にマルクス主義的な見方を把握しないで他の異質的な形式を利用しようとした結果、その形式と結びつけられた世界觀に無意識的に引づられて行つた例が決して少くないのである。このことはブルジョア的自然主義的形式の場合についても云ひ得るが、それ以上に小市民的通俗小說形式についても云はなければならない。何となればそれは近代ブルジョア以前の、それによつてすら打破られた世界觀と結びついてゐるから。

その最もよい例が貴司の「忍術武勇傳」、「敵の娘」、「ゴー・ストップ」等である。そこでは例へば、××黨の指導者が忍術を使つたり、板間稼ぎをしたりする封建的英雄となつたり、その傳奇的形式を滿足させる爲にブルジョアの娘やブルジョアの踊子が常に××主義的闘爭に積極的參加をしたり、闘士がダンスホールで踊子から金をもらつてそれを分け取つたりしてゐる。かうなつて來るとそれは既に「形式」の問題ではなくて「內容」の問題であり、それは現實の困難な闘爭に從事してゐる闘士達の生活を歪曲して傳へることによつて、支配階級の逆宣傳に合流するものである。

五、

もつとも若しもプロレタリヤ藝術の任務が、出來上つた個々の社會主義的命題を大衆の間に傳播することにのみ限定されてゐるとするならば、我々はどんな形式を用ひても差支へないかも知れない。例へば都々逸や安來節やの形式でゞもあれやこれやの社會主義的思想は傳達し得る。だがプロレタリヤ藝術の任務はそれよりも遙かに廣汎且つ重要である。それは現實に對する階級的な物の見方、感じ方の方向に大衆を教育する任務をもつてゐる。そしてそれが爲には作品そのものが現實に對するマルクス主義的な、唯物辯證法的な見方――客觀的な、正確な、從つて革命的な物の見方によつて一貫されてゐなければならない。現代のプロレタリヤ作家・藝術家から要求されてゐるのは實にこれである。そしてこの目的をもつてプロレタリヤ・レアリズムが主張されたのである。

だから我々にとつて現在必要なのはこのプロレタリヤ・レアリズムを徹底させることである。認識の方法としての唯物辯證法、藝術の方法としてのプロレタリヤ・レアリズム――これは決して「煩瑣なインテリゲンチヤ的な方法」ではない。それは成程理論としては六ケ敷いかも知れない。しかし現實的な物の見方としての唯物辯證法は、それが唯一の階級的な認識方法であると云ふ理由によつて、最も勞働者的な、大衆的なものである。だから我々はこれから一歩も退却する必要はなく、唯それがそれに相應した表現形式を得ればよいのである。

しかも實際これ等の新しい大衆的な表現形式はナップの中堅的な作家・藝術家——我々がこの論文の初めに擧げたやうな人々——によつて着々と獲得されつゝある。そしてそれは更に大衆的に捲き起された通信文學の形式によつて一層豐富にされるであらうし、また過去の藝術(その中にはブルジョア大衆藝術をも含めて)からも我々の藝術の爲にその形式が批判的に攝取されてゆくであらう。しかし忘れてならないことはあらゆる攝取、あらゆる利用は、唯我々自身の原則的方向をはつきりと掴んでのみ初めて問題となり得ると云ふことである。

プロレタリア文學の陣營から

貴司山治

東京日日の誤報について

四月十九日の東京日日新聞に報道された「ナップ系作家に分裂の兆」云々の記事は大きな誤報で、記事の半分以上は捏造といつていい。同二十日の同紙上更に「兩派の言ひ分」と題して長々と記述されたその内容も亦殆んど間違つてゐる。

今、プロレタリア文學運動の中心地は「ナップ」にある。このことは例へば「文藝戰線」などのどのやうな抗議にも關係なく、ブルジョア・ヂャーナリズムの間においてさへも既に認識されてしまつたやうだ。そのために、ブルジョア・ヂャーナリズムが「ナップ」の動きを注目してゐることは大いによろしい。

だが、東日の如く大きな誤報を犯すに至つては、その報道はどこへも何の利益をももたらさないのである。二日に亙る同紙の記事は藏原惟人君の名とともに、私の名前が引き合ひに出されてゐる以上、私だけの名においてでも、あの記事の全部を取消していゝ資格があらうと思ふ。即ちこゝに、十分に「取消」を斷つておく次第である。

「ナップ」の中の「作家同盟」

「ナップ」とは、「日本無産者藝術團體協議會」の略稱で、この協議會は、日本プロレタリア作家同盟を始め、劇場同盟、美術家同盟、映畫同盟、音樂家同盟、の五團體の、プロレタリア藝術運動をおしすゝめて行く上の協議機關である。

それを世間ではナップといへばとかく作家同盟のことのやうに思ひがちのやうである。五團體の內、力の關係でナップの中心のやうになつてゐるのが作家同盟であることは從來の事實である。しかしこれはもし將來、劇場同盟などが、今の左翼劇場の經營以外、更に大きな、一階段上つた仕事でなければならぬ移動劇場などの仕事に手をつけ、演劇を以て直ちに戰へる勞働大衆の日常生活の中へ參加して行つたやうな場合には或は劇場同盟の活動がナップの中心となるかもしれない。その他、

盟の場合においても亦然り。

ナップの組織は全藝術活動のマルクス主義運動への參加——いひかへれば唯一の眞理への參加である。

そして、こゝでは個人主義的な生活ができるだけ抑止されなければならないのである。作家同盟では、その作品行動、文學理論の究明建設等のすべての仕事が、多數の共同の意識をなひまぜて——文學の仕事が個人によつてなされる場合の凡ての缺陷が除去されるように、集團的に、より批判的に、大衆的基礎の上に、行はれるようになつて來てゐる。

これはナップの組織が當然に持つところの本質的發展の結果である。

作家同盟は既にこうしたナップの組織の中で、かような意識と方法の許に一九三〇年度の仕事に出發した。即ち今年の大會で決定された創作の數多くの主題を、委員會で選んだ各作家に一篇づゝ課題して書かせる仕事などがその一である。一つづゝの主題を受け持つた作家達はそれのマルクス主義的把握、藝術化——を研究會を設けて交換的に、討論的に、豫め批判研究し、十分に目鼻をつけた上、創作にとりかゝる。このことは何れ「戰旗」に發表され、一般同盟員、讀者大衆の中からも作品を募集するやうになる筈だときいてゐる。

さうして決定された作品は我々の唯一の階級的出版所たる戰旗社から一擧に刊行されて勞農大衆の中へ持ち込まれるように圖られる筈である。かゝる仕事はだれにもわかるやうに全體としてもはや個人の仕事ではない。文學が個人の仕事として生産される狀態に、マルクス主義的目的と方法の許には急速に揚棄されたければならないのである。

同様に、プロレタリア文學運動の理論的開拓も、個人の意見から[illegible]して正しく成就されるべきでないとの見地から、一昨年來プロレタリア文學運動の中心的問題として持ち越されて來た文學大衆化の問題も、作家同盟では大衆的討論研究會を開き、こゝでは活潑に討論されることによつて、今年度に入り、急速に成長發展して來て、全作家の作品行動の上に重要な働きかけをしはじめた。

この討論研究會には勿論藏原も私もその一員として動員された。一人のみならず各自の意見はそこでは盛んに對立し、齟齬し、一致した。こうして、それでこそ全體として、より正しい高い階段にまで問題を成長させることができたのである。

雜多な外側者の個人的意見

プロレタリア文學運動は、從來のいかなる文學上のイズムの運動とも違ひ、正しくはそれは單なる文學上の思想上のイズムの運動ではなく——科學上の正しさに根ざす强固な世界觀に因出して全人類的な未曾有の文化變革に參與する地球的運動の一部として現象されてゐるものである。

隨つて、プロレタリア文學運動はこの科學的な、必然的な文化運動の環を外れては、ありえない。あればそれはニセ物である。我々が「文藝戰線」の運動を排斥するのは、それの立場が、世界的な歷史的運動の一部として、國際的に、又隨つて日本的に、中心づけられてゐる我國のプロレタリア運動の當爲に對して批判的立場に立つたとゝいつてゐる限り。

それは、その言明自體が國際的な歴史的なプロレタリアアートの運動の主體と離れており、それ以外の何等かの別の、又は普通のものであることを證してゐるからである。

　この別物のゴミは文學運動の領域においてもまだいろ／＼ある。平林初之輔氏のプロレタリア文學に對する最近の深切（！）なる數々の提言（一々例をあげる迄もないその全部の）や、中村武羅夫氏の一二年來くり返されてゐる盲打ち的マルクス主義文學否定論、（新潮五月號に又それが演ぜられてゐる）その外之れに類する外側者の、思ひ思ひのめい／＼の意見――正直にいふとそれ等は今日に於てはもはや六日のあやめである。外側者の個人的意見はプロレタリア文學の中心的分野を擔當してゐる作家同盟の今日の仕事には九十九％まで役に立たない。これは我々作家同盟所屬者の思ひ上りや傲慢ではない。外側者の意見は、最も尖銳化した高い段階にまで發達してゐるやうにみえる平林氏の意見の内容でも、又最も平凡なごく普通の文壇的意見を代表してゐる中村氏の所論の内容でも、我々の生活とは大きな方向と距離の差があるのである。その方向と距離の差は、年々歳々に大きくなつて行くやうに見受ける。

　外側者の意見は結局次第に、我々の生活にふれてこなくなる。これは當然のことで、發芽の幼稚な時代にはそういふ所からも養分を取り入れたであらうが、日本のプロレタリア文學は既にそのやうな幼稚な時代から成長してしまつた。

　そして新潮合評會など、いふ呑氣なところで「文壇の大家」たちが「潜行運動の秘密」を敵にまで教えるやうな小説を書いてコンミニュストとしては問題だ」などといふ珍しい心配をしてゐる間に、日本のプロレタリア文學は科學的な正しさの唯一の世界觀に鍛へられて獨自の成長を遂げるであらう。

二つの重要な問題

　けれども、外側的批判家（？）たちが好んで指摘してゐるやうな缺點が、我々の作品になかつたであらうかといへば決してそうではない。

　我々の作品の根本的な缺陷は今、我々の陣營内においても嚴重な問題となつて批判されてゐる。けれどもそれは、外側的な文壇マルクス主義批評家の批評や、文壇藝術家の批難に敎えられてゞはない。

　直接の原因は、我々の文學の内容が、××的段階に達しつゝある我國勞農大衆の鬪爭的意識に立ちおくれ、その形式がかゝる大衆の間に十分に迎え入れられなかつたといふ現實から來てゐる。

　そこからプロレタリア文學の大衆化が叫ばれ出した。勞農大衆に迎え入れられない文學、又それの階級鬪爭の一歩前進に役立たない文學はプロレタリア文學として許容さるべきではないとの苛辣なる反省から「大衆化」の命題の中にプロレタリア文學の建設の根本問題が見出さなければならなかつたのである。

　そして我々の從來の作品には二つの重要な缺陷が未だ容易に揚棄されずにあつたことが指摘されなければならなかつた。一つは、イデオロギイの無強化といふことである。一九二八年以來の日本のプロレタリアートの政治的躍進は恐るべき一つのエポックメーキングなる、なし、

げてゐる。我々の生活が、プロレタリアートのかゝる畫期的飛躍に大體においてふりおとされがちに過ぎてきてゐることがその原因として認められなければならなかつた。

で、作家は我々の面前にある日本プロレタリアートの歴史的闘爭の各モーメントに十分の關心を持ち、そのレポートをよみ、たえず之れに近接しなければならない。その他可能なる凡ての方法によつて、現實的にマルクス主義的イデオロギイの亢揚强化につとめなければならない。——凡そ、そうしたことが實踐の問題として我々の間に論議され決定された。

又、プロレタリア文學の形式の問題に關しては、「最も大衆的な形式の創造」といふことが必然に我々の思料に上つたことは勿論である。

しかし、從來の作品行動の上では、我々はその點に十分に成功したものとはいへなかつた。

從來のプロレタリア文學には、自然主義文藝の形式の踏襲がありすぎた。「舊き技巧のあらゆる技術的到達を利用しつゝ幾百萬の人々に理解されるやうに相應せる形式を創り出さなければならない」といふ言葉の意味が、日本のプロレタリア文學では未だよく實踐的に咀嚼されるに至らなかつた。「形式はその內容に最大限度に適應して、それに最大の表現力を與へ、そしてその作品が目當にしてゐる所の讀者の範圍に最も强い影響を與へる可能性を保證しなければならない。」

我々は今や急速に「大衆の形式」を作りあてなければならなくなつたのである。そのために、我々はこれからの我々の作品において、「複雜な高い綜合的內容（又はイデオロギー的內容）を幾百萬の人々をすら感動せしめるやうな力强い藝術的單純さで表現しなければならない」といふことを實踐的に規定してかゝつた。

「力强い藝術的單純さ」の形式——これが明確に「舊き技巧のあらゆる技術的到達を利用」するところの聰明さの許に十二分に探りあてられなければならない。

そのために我々は「報告文學」とも名づけらるべき工場農村から送られる、勞働者自身の書いた勞働通信に對する研究や、ブルジョア大衆文學の持つ形式に對する研究や、又更に進んで一つの作品をある一定の勞働者農民に讀ましめその直接の批評をきいてそれを一定の方法で整理し研究するやうな仕事をまで開始して、眞に大衆性のある形式を育て上げなければならない。

之等を一と口にいへばプロレタリア文學は徹頭徹尾、直接的にその一切なプロレタリア階級の中へ持ちこんでしまはなければならないのである。いひかへればプロレタリアートの中に終始し、プロレタリアートの××的躍進に效果あり意義ある何等かの影響をより廣汎に傳播する藝術的形式こそ眞のプロレタリア文學の形式であるといふことができる——問題はこのやうに看られ、このやうに實踐されて來ようとしてゐる。これが、一九三〇年のプロレタリア文學の中心的勢力の推進路である。

結　語

以上は作家同盟の委員會を中心とする大衆的討論が見出してきたところの團體的意見であつて、私の個人的意見ではない。否、私の個人的意見も十分にこの中にふくまれてくるのである。

プロレタリア文學の運動は一つの世界觀に基づく多數の、共同の仕事である。特にそれの理論的開拓は集團の、共同の研究を可能ならしめてゐる。殊にこの場合、文學運動は、單に「文學運動」として切り離しては何の意味もないものである限り、集團的、社會的基礎を失つては滑稽だけのものとなる。

その意味からいつて、作家同盟に屬するマルクス主義批評家が彼れ自身でブルジョア新聞雜誌の上で、プロレタリア文學の理論的建設のための討論をやつたり、論陣を張るのは少々恰好の惡いものであつたことが、我々の間に悟られて來てゐる。

そのマルクス主義批評家が團體を所有し、團體に屬する限り、理論的建設は第一に、その團體内に於てなされるのが順序である筈だつた。そうしてそこで決定された原則や主張をすべての機會を通じて外部に發表し、かつそれを眞つ向に、外部の雜多な異論の克服に向ふべきである。

このことが作家同盟では速急に行はれるだらうと思ふ。今や日本プロレタリア作家同盟では、文學的活動の足並が揃つた。我々は我々の獨自の仕事を強力におしすゝめることによつて、ブルジョア・ヂャーナリズムの域内におけるあらゆる一切のデマゴギイズムに答えるであらう。

(歴史的な一九三〇年のメーデーの翌日)

全産業線に跳躍する スキャップ團

鈴木茂三郎

一

一九二一年四月一五日は、英國の三角同盟の崩解したブラックフライデー所謂「闇の金曜日」として、英國の勞働運動史に憤恨と汚辱を書き殘した日である。一九三〇年の四月二二日は日本の東京交通、東京市從業員、市電協同會の三角同盟による一大爭議を敗北に導いたブラックチユースデー所謂「闇の火曜日」として日本勞働運動史を泥足で踏みつけた憤恨の日である。

「闇の金曜日」の魔王としては、鐵道勞働者組合のジエー・エッチ・トーマスが裏切り者として乘り出してきたのであつたが、「闇の火曜日」は、四元老と新聞紙から尊稱される濱田、伊藤、宮井、馬場が、その夜、市長室に現れたのである。

ジエー・エッチ・トーマスとわが四元老を同列にならべて論ずるは、もとより甚しく不當であつて、英國と日本の勞働運動の歴史と規模に於て大きな相異があるやうに、人物の歴史と規模に於ても親分と子分のその又、子分くらひの相違がある。

私は四元老とは若干の面識がある上に、かつて日本大衆黨の常任委員で選擧部長であつた當時、濱田、伊藤を市會議員候補者として市民大衆の面前に推薦したことさへある。恰度日本××黨が舊勞農黨を通じて「アキレ松五郎」と言はれる秋和松五郎を東京第五區から衆議院議員候補に推薦したと相似たやうな過失をさへおかした關係にあるが、罷業破りとして此の四元老ほど、大膽に鮮やかに大衆の面前に階級的な恥知らずをはつきりと演じた例はまつたく尠ない。その點では、親分の又親分のトーマスの裏切りと比肩さる可き價値がある。

四元老が罷業破りを演ずる前後、資本家の代表者なる市當局

と警視總監と密接な連絡を執つてゐたことは、もはや一點の疑ひないところで、四元老は廿二日鞠躬如として市長室に公然と姿を現はしたとき、新聞記者諸君の面前で市當局と會見することとなつた爲めに、恥知らずの四元老も、内交渉に基く無條件就業を申出で損ねて、條件らしいものを提示して筧局長から一蹴された。それと聞くや、警視總監は、いかに語つたか？

「何んだ、前夜(？)俺れが四時間も話してやつたのに」

此の警視總監談は、報知新聞に掲載されたところ、警視總監から「話したことは事實だが、あゝいふことを警視總監として話したことは不注意だつたから取消して呉れ」と注文が出て報知新聞はあつさりと記事を取消した。

しかし、事實をまで取消すことはいかんとも出來なかつたのである。新聞社の内幕を素破抜くところの「新聞内報」によると、彼等の裏切りを逸早くも報導した東京××、××の記事擔當者は前夜、芝浦の某所に筧局長派から御馳走を食はされ、また、四元老の裏切りを聞かされたと素破抜いてゐるのである。私は御馳走を喰つたか、喰はされたかを知らぬ。たゞ同紙の黄色新聞的なニウスの裏に、唯事でない何物かを含んでゐたことだけは看取されたのである。

かくて市當局と警視總監との通謀の下に、四元老は其の率ひる勞働者を如何にして裏切らしめたかと言へば、伊藤某は本所の爭議團をあつめて、そのなかに子分五名の「櫻」も潜入させ、演壇のまはりを私服刑事に護らせ、爭議團の解散を提議したのである。すると「櫻」は賛成々々と、手を叩く、すると又、「彼は滿場一致と認め、爭議團を解散します」と宣告するや、爭議團の憤激を怖れて、彼は私服刑事によつて垣根をつくられた通路を横つ飛びに馳け出して姿をくらましたのである。濱田はまた芝浦工場で「あそこも、ここも、爭議團は崩れて解散した」と、嘘の報告をして就業を迫つたが、從業員は容易に肯じなかつたので彼は「市當局は、どしどし馘切るさうだ、此の上、諸君が馘首されても私は責任を負はない」と、脅やかして、つひに就業のトツプを切らせたのである。

二

罷業破りはスキヤツプ、鼠、黒い足、等さまざまな綽名を以つて呼ばれてゐるが、スパイすると同じ程度に於ける階級戰線の憎む可き罪惡である。

歴史が若く、爭議規模の小さい日本の戰線には、濱田、伊藤、宮井、馬場の輩によつて演ぜられた罷業破りほど、鮮やかで、華やかで、大衆的なスキヤツプは無い。

しかし「若い運動史」をひもどくと、集團的なスキヤツプによつて、歷史の所々を汚辱されてゐることは事實である。「謎の爭議」といふ著書さへ出版されてゐる芝浦製作所の爭議などはその汚辱された衣魚の一とつだが、爭議のおこつたのは大正九年三月十四日の事で、爭議をおこしたのは芝浦製作所の勞働者二千餘名のうちの千餘名を組合員とする技友會、スキヤツプとして戰線を崩したのは六百名を組合員とする總同盟の前身なる友愛會であつた。

技友會は要求書を叩きつけて立つや、芝浦の埋立地に大天幕を張つて氣勢をあげ、友愛會側は二日間の同情罷業の後、會社側の單獨交涉に應じて就業し、技友會側は十日間頑張つて、勝利の解決を告げて終つたのである。

荒畑勝三氏は日本勞働新聞第四號（大正九年四月一日）に於て、「謎の爭議」を銳く批判されてゐる。

「尤も一致行動を妨げた責任の大部分が、寧ろ技友會に在ることは爭へない。けれ共、一致行動に破れたからと云つて、二日間の同情罷工を以て義理が足りたと思つたら、之れは友愛會の穿き違へである。技友會の勞働紛議は他人事ではない。その成功は直ちに友愛會の利益であり、その失敗は直ちに友愛會の損害である。然らば友愛會員としては飽まで技友會員と行動を共にする事が、勞働階級の道德であり、義務であつて同情罷工と云ふが如きは、既に[illegible]で問題にならない、況んや、共同の利害の爲に戰ひつゝある者を見捨て、罷工々場に就職するが如きは、その結果に於て罷工破りである」（「芝浦製作所の勞働紛議」のうちより）

これと瓜二たつの事件として大正十二年五月廿八日、東京瓦車會社におこつたストライキも謎の爭議としてスキヤツプの歷史的汚點を印してゐる。

ストライキと言ふべきか事件と言ふ可きか、ともかく謎を殘した汽車會社の問題は、勞働組合の組織方針に對する本質的な對立を背景として本所の勞働街に展開された問題であつて、自由聯合派の機械勞働組合聯合は汽車會社の車輛工組合を、中央集權派の南葛勞働會は汽車會社の誠睦會を支持して、ストライキに這入る前から、二つの汽車會社內の組合合同について、毆り合ひ、睨み合ひを演出してゐたのである。

震災の當時、「白色テラー」の手に刺殺された南葛勞働會の川合義虎君は、雜誌「階級戰」（赤旗改題號大正一二年七月）に次ぎのやうに書いてゐる。

「一方自由聯合組織の弱點に附け込んで會社は彼等の要求を拒絕してあべこべに車輛工組合の幹部十七名を馘首した。誠睦會は若し車輛工組合が安藤、向井二君の馘首問題を撤回するならば同一利害の上

に立つ勞働者として十七名の復職のみならば共に運動することを聲明した。然るに車輛工組合幹部は會員を全く煽動して或は強制して十七名の復職と安藤向井の馘首を會社に嘆願して即時拒絕され、正午頃一人々々門證を貰つて會社を出、ストライキに移つたのである。そこで誠睦會は斷然彼等と袂を分ち、彼等に反對を宣明するに至つたのである。我々は同志の馘首を目的とするストライキに同ずることは出來ないのみならず勞働階級の信義の上から、かくの如き無法なる行動には極力反對の態度をとつて下らないものである」（「組合對組合爭鬪事件の眞相」より）

そこで戰線同盟の猛者が、南葛勞働會に毆り込みを掛けて、日本刀を古疊に突き刺して謝り證文を書かせたなどといふ活劇もおこなはれ、まつたく謎の怪異なストライキだつたが、爭議直後、第一次の共產黨事件で收監された南葛の渡邊政之輔と、赤化防止團襲擊事件で飛沫を浴びた戰線同盟の一猛者、栗林四郎の兩君が市ケ谷刑務所で落ち合つての話によると、渡邊君は罷業破りの事實を承認したと、栗林君は保證してゐるのである。

斯く、二つの謎の爭議に於ける罷業破りに於て見たやうに組合と組合の對立からかもされた大衆的スキャップが多い。勞働組合の分裂、對立の激化せる近年のストライキには、鬪爭目標を見失つたところの、かくの如く結果に於てスキャップに陷りたる事實が決して少くはないのである。

無產政黨に於ても、同一の合法政黨の合同方針に於てさへ「彼等（註、他の無產政黨）と決死的鬪爭をなす覺悟を持ちつゞける限り、合同しても斷じて敗けない見透しが持てたから、そこで合同する」といふ見解さへ、拍手を以つて可決されたほど對立意識が強烈である。かうしたことなども、合同によつて、左翼勢力を增大すると共に、大衆的鬪爭力の強化、擴大によつて、ブルジョアジーとの決死的鬪爭に總動員せんとする鬪爭から逃避する政治的スキャップだとも斷じ得ないことはないのである。

組合と組合の分裂、對立から起る斯るスキャップのうちには會社側から乘ぜられた場合が多いやうだが、殊に會社側には、スキャップ豫備軍として御用組合を造らせてゐるものがある。

此の御用組合は、協調主義に基く溫情で勞働者を縛りつけて勞働者の階級意識を眠り込ませ、かくすることによつて會社側の一朝有事に際してスキャップの役割を果たさせるにある。

昭和三年、東京金鋼會社に勃發した東京鐵工組合のストライキには、古參職工から成る御用組合をして、暴力をふるはせて爭議團を襲はせたのである。東京の青バスにも組合同盟に對抗させて、スキャップ豫備軍としての中正會があるが、東京市電の今回のセネ・ストにあたつて中正會系の新宿線が同情罷工の名目で嘆願書を提出してゐる。まことに怪異に見えるが、これは會社內の重役間の暗鬪に利用されてゐる、いはゞ、スキャップ

備軍たることにかはりは無い。

三

然し乍ら本質的なスキャップ豫備軍としては第一には産業豫備軍たる失業者の大群があり、第二には青年團（又學生、ボーイ・スカウト）、在××人會があり、第三には反動團體がある。

失業者の大群がスキャップ豫備軍として、いかに重要性を持つかは、東京市電のゼネ・ストによつて、現實的に立證されたやうに自動車運轉手の罷業破りが募集されると、失業者群は資本家の陣營に殺到したのである。失業者群の數量が大きくあればあるほど、スキャップ豫備軍としての役割は效果的である。スキャップの困難だとされる機械工業の熟練勞働者にしても失業者の大群のなかからは容易に罷業破りをさがし出すことが出來る。新聞編輯部の熟練記者は、經濟部の相場記者とされてゐたものだが、今日、失業記者群のなかには優秀な相場記者が右往左往してゐる狀態で、報知新聞に於ける最近のストライキに見ても、たつた一日で記者ストライカーは兜を脫がされたのである。殊に爭議團大衆に對する失業者群の與へる精神的脅威は、決定的な重要さをさへ持つ場合が多いのである。

次ぎに青年團、在××人會が、スキャップの大衆的豫備軍たることは「罷業の渦中に參加するのではなく、市民の交通をどうやらするとの怪文書とも言ふ可き宣言を發して大衆的スキャップとして罷業の對立物の陣營に參加したる東京市電のゼネ・ストの生々しき事實が我々にはつきりと示したのである。無産政黨の共同鬪爭委員會から、街路に撒布したアジ・ビラには「資本家の犬は犬殺しの手へ！」と書かれてあつたが、ブルジョアジーは、善良にして訓練された犬たらしめるために、東京市に於ては青年團に青山教習所で電車運轉の訓練をさへ與へてゐたほどで、今回のゼネ・ストに參加した一千五百名のうち二百名は、斯く訓練された青年スキャップ團だつたのである。

然し乍ら青年團の內部から、スキャップに對する痛烈な批判が爲されたことは皮肉だつた。

「東京市聯合青年團員四千名が飽迄も修養團體たるの立場を忘れて實際運動として罷業の渦中に投じて電車を動かし自動車を運轉するなどは青年團として甚だ遺憾である。

殊に現在は資本家と勞働者が對立してゐる折柄青年團は勞働團體をも認めなければならぬ。よつて東京市青年團今回の行動に對し本縣聯合青年團は猛省を促す可きである（長野縣聯合青年團代表代議員會決議）」

在鄕軍人團は本部の最近の調査によると、分會の數は全國に一萬四千二百七〇分會、會員二百七十萬人（外に特別會員三千名）東京だけに卅萬人の動員力を有する容易に××し得るスキ

ヤップ團である。

それは本質的なスキャップ團ではないが、ストライキに關する限りに於ては、ストライキが暴動化の傾向を執る場合に、軍隊の出動に先立つて、武力的スキャップとして資本家側の陣營に立ち現れるものである。

そして武力的スキャップ團の小規模なものとしての暴力的スキャップ團として、多くのストライキ戰線に出動し來たるものに、第三のスキャップ豫備軍としての反動團體がある。

反動團體としては東京に本部を置くものでさへ七〇團體からあるが、大日本國粹會總本部（關西派）を最大なものとして大日本國粹會關東本部、大日本正義團のほか、國本社、黑龍會、建國會、大和民勞會、大同聯盟、明德會、大正赤心團、帝大七生會、早大潮の會等、その他、石板だけのものは最も多い。だがスキャップ團として暴力をストライキ戰線に振ふものは、主として石板黨である。私はかつて濱松の樂器爭議と東京朝日の配達從業員のゼネ・ストに於て、或る反動團體とのすさまじかりし對戰に接したことがあるが、彼等のスキャップとしての戰術は爭議を惡化させて爭議團に對する警察の彈壓を誘導する、しかも爭議の解決を永引かせるにあることを學び得たのである。

配達夫のゼネ・ストには、彼等は一時、五百名に及ぶ暴力を全市に配布したもので、三、四臺のトラックに暴力の集團を滿載して、時折爭議團の本部や支部を襲はせて、爭議團をして暴力による防戰を餘儀なきに到らしめ、さうすることによつて官憲の干渉と彈壓をおびき出すことに奏效したのであつたが、爭議團側が戰費に影響されて暫らく進出しないでゐると、彼等の一味のうちのちは、「吸血鬼青月を葬れ」といふビラをつくつてまき歩るき、「そらッ爭議團が進出した」と、トラックを走らせて騷いだものである。

ともかく暴力團がスキャップとして參加したストライキは、惡化し永引く場合が多い。之れは反動團體の本質から生ずる必然の結果である。

四

わがブルジョアジーの陣營にはアメリカに於けるピンカトン會社のやうなスキャブを專業とする營利會社を持たない。ピンカトン會社は組織化されたスキャップ團で電車の乘務員の取扱ふ乘客賃銀の秘密監視のやうなスパイ營業まで請負つてゐる。

日本の現在は、ピンカトン會社を要しないほど、スキャップ網が組織化されてゐる上に、スキャップを容易ならしめるあらゆる條件がそなはり過ぎてゐるやうである。スキャップ豫備軍の第一線に立つ失業者群をスキャップに組織するにしても、部

市と縣市、都市と農村との地域、交通が甚だ便利に出來てゐて、印刷ストライキなどは大阪に勃發したとすれば、すぐと東京から印刷スキャップ團が集團的に押し出してくるのである。工場勞働者の組織率が低い上に、一方にはスキャップの極めて困難とされる重要關鍵工場には殆んど組織の手が延びてゐず、他方には低い組織率の勞働組合は、同一産業又は同一工場内に於てさへ分裂、對立してゐるのである。そして、商品市場の狹隘化する半恐慌的症狀を經過しつゝある資本主義經濟の現段階にあつては、特殊的産業を除く限りに於ては、スキャップは少くとも小規模の成功によつて目的を達し得るのである。鐘紡資本團の強みも、一面さうしたところにもある譯で、操短による封緘がはりに休業することも出來るし、また鐘紡製品の市場滯貨を一掃することにもなるのである。

從つてわが産業の全線は、スキャップの跳躍舞臺として露出されてゐると、言つても差支ないほど、戰線は防備薄であつて、殊に會社側の個人的な切り崩し戰術は頗る妙を得たもので、馘首してストライキになりさうな氣配を見て取ると、會社側は買收、呼び寄せ、警官の干涉等あらゆる練磨された戰術によつて馘首者をスキャップさせるのである。

最近、福岡の西部鑛山勞働組合から一と組の夫婦をオルガナイザーとして炭坑地へおくり込んだところ、**會社側は此の憎む**可き夫婦を山からおろすために、[illegible]なくオルガナイザーの家庭の醜[illegible]掲げ、つひに男を買收することに成功するに到つたが、妻君は頑として陥落しなかつたので、男は妻と家をすてゝスキャップした。これは所謂スキャップとは言へないにしても、妻君はひどく恥じて組合本部で炊事を手傳つてゐるとの悲壯な事實もあるやうに、會社側のかうしたスキャップ政策は水も漏らさぬほどの巧妙さを以て行はれつゝある。

そして、我々が、無産大衆に向つてたゝきつけたいほどの憤りと悲しみを爆發させられるのは市電ゼネ・ストに於て裏切り者なる勞働者と罷業破りたる青年團に示した無産市民の態度、氣持の上にも表現されたやうに、裏切り者に對する「階級的正義」が大衆のなかに成熟してゐないことである。

私がニウヨークにゐた頃、カリフォルニアにターラック事件と言つて村境から日本人をトラックに積み込んで放逐したために、日本の輿論を捲きおこしたことがあつたが、これなどもスキャップ團として日本人の集團が罷業のターラックへ乗り込んだからこそおこつた事件であつて、日本人の罷業破りは國際的に知られてさへゐる。かゝる行爲をこそ我々は「國辱」と呼ぶであらう。

統帥權問題の正體

吉野作造

問題の分拆

所謂統帥權問題なる名のもとに今度の臨時議會で論議された事項に二つある。一は編制大權の輔弼に關する軍部參與の意義如何で、二は陸軍大臣の職務に關し文官事務管掌の能否如何である。

第一　編制大權に對する軍部參與の問題

軍事に關する大權の規定は憲法第十一・十二條にある。第十一條に規定せるを統帥大權と云ひ第十二條に規定せるを編制大權と云ふのが憲法學者間の通說である。而して憲法第五十五條には「國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其ノ責ニ任ス」とあつて大權の種類に依て異同あるを認めざるが如きも、歴史上また實際の慣行上統帥大權は一般の國務と殊別して之を國務大臣輔弼の外に置き所謂帷幄の大權に屬するものとせられて居る。此事も現行國法の解釋として諸學者の間に異論のない所である。

但し何が統帥權かの限界の問題に關しては議論自から一定せぬ。之を學理上から決めることは左まで困難でないが、實際の慣行に於て軍部が之を不當に廣く解せんとするので問題はやかましくなる。後にも說くが如く、軍部の人達の間には帷幄上奏に由る他の輔弼事項たる編制大權に關するものをも統帥權の範圍に屬せしめて居る。從て統帥權の意義を不當に廣く解して平然たるは固より怪むに足らぬのであらう。玆處ではあまり理論の問題に觸れるを避けたいから詳しくは述べぬが、國家の行動は嚴に統一なかるべからずとする近代憲政の根本義に照しても、その例外を爲すべき政府以外の帷幄事項は本來出來るだけ狹く解さるべく

のなることを一言しておく。

編制大權が内閣の輔弼事項に屬するは今日の憲法學者間に異論のない所である。然るに最近の論爭に於て全然之を否認するが如き説の現れたのは時節柄大に私の耳目を聳動した。五月初めの東京朝日新聞に依れば、陸海軍の首腦部はより〳〵會合して所謂統帥權の共同擁護を策し、凡そ國防の事は陸海兩軍共同の專屬的責任に屬し寸毫も行政部の容喙を許すべきでないとの決心をかためたとやら。是れ固より責任ある人達の正式の聲明ではないけれども、之に依て私共は軍部首腦者の間には編制大權をも政府輔弼を排斥する意味に於て軍部の專管事項なり、とする信念の相當に强いことを見せ付けられるのである。ついでに云ふが、茲に謂ふ所の統帥權とは帷幄上奏に由る軍部の輔弼事項全部を意味することは申すまでもない。

猶ほ注意すべきは、軍部從來の慣行に於ては久しい間編制大權をも軍部專屬の管掌事務とし政府を排して獨擅專行した事實があることである。我國の議會で帷幄上奏の事が公然と批難されたのは大正十一年が始めだと思ふ。同年二月七日の衆議院本會議に於ける大岡育造氏の演説がそれであるが、之がやがて貴族院でも問題になり、三月十二日の同院豫算總會に於ては時の法制局長官馬場鍈一氏は江木翼氏の質問に答へて次の如き答辯をなして居る。「憲法ノ解釋トシテハ軍ノ編成及ビ常備兵額ヲ定ムルニ就テハ大臣ノ輔弼ヲ必要ト認メテ居ル。然ルニ實際ハ内閣ハ之ニ與カッテ居ラヌ。自分ナドハ憲法義解ノ解釋ヲ可ト思ッテ居ルガ、將來之ヲ如何ニスルカト云ノコトハ重大ナル問題ト思フ。」馬場法學博士の所謂憲法義解ノ解釋とは、統帥權だけを帷幄の大令に屬せしめ編制權は政府の輔弼を要すとする見解たるは勿論である。この時の質問者たる江木翼氏もその頃本誌に寄せたる論文中に於て、「……行政各部ノ官制ナルモノハ政府ニ於テ審議シテ而シテ官制ヲ以テ公布セラル、ニ拘ラズ、陸海軍ノ編成ニ至テハ政府ニ於テハ全然與リ知ラナイノデアル。秘密ニスル必要アルト云フ事ト政府ガ其議ヲ決スル事トハ全然別問題デアル。政府ガ決定シテ若シ秘密ニスル必要ガアレバ公布シナイマデノ事デアル。陸海軍ノ編成ハ公布セヌ主義ヲ取リ、其ノ内容ニ至テハ政府ハ全ク決定權ヲ有ッテ居ナイ。一方豫算ハ政府ガ之ヲ決定スル然ルニ一方編成ニ至テハ政府ノ容喙ヲ許サヌト云フノデ見テモ、政務ガ恰カモ半身不隨デアル事ガ分カル」と述べて居られる。

實際の慣行を云へば當時國防及び用兵のことは全然參謀本

部と海軍軍令部との專決に屬し陸海軍大臣は一々其成を仰ぐに止まつたのだと聞いて居る。山縣公など云ふ軍界の巨頭の存命中は軍部の首腦は自ら集りて略ぼ統一ある一團を爲し其邊での決定が自然參謀本部又は海軍軍令部を通じて軍部大臣を動かしたのであらう。山縣公亡き後は中心點の崩れると共に首腦者間の分派對立が著しくなり、之に乘じて軍部大臣が漸次その地位に當然附着してあるべき筈の勢力を回復したとやら、斯くして昨今は兩軍部大臣はつねに必ずしも參謀本部や海軍軍令部の制御を仰がぬやうになつたとの事である。海陸兩軍部に於て時々各々非公式の巨頭會議を開いて一種の示威運動を試みることあるが如きも、そは軍部大臣を牽制すると云ふよりは寧ろ外部の壓迫に對する軍部大臣の立場を支持するに利用さるる方が多いやうである。何れにしても軍部內に於ける大臣の立場の近年の昂揚は一寸注目すべき現象である。之が編制權に對する軍部の權限に如何の關係ありやは輕々に斷じ得ないが、大臣が專ら參謀本部や海軍軍令部の命を奉ぜし時代に比し、彼等が閣僚の一人として內閣のうちに活き軍務の裁決に就ても全然その影響の外に立ち難きに至るべきは期して待つべきであらう。それかあらぬか編制大權に對する軍部管掌の範圍は昨今漸次減縮されて來た、少くとも常に減縮されんとするの脅威にさらされて居ることは疑ない。是れ今日の機會に於て軍部の人達が斯の頽勢を一擧に阻止せんと猛然として起つた所以であらう。

編制大權が內閣の輔弼事項に屬すとの學界の通說は實際の取扱に於ても從來其儘認められて居たかどうか。私の聞く所に依れば、そは概して認められて居なかつた樣である。即ち前記馬場江木兩博士の述べられてある樣な事がだらだらと今日まで行はれて居るものらしく思はれる。尤も編制大權が內閣の輔弼事項に屬せずとの理論が正面から主張され又信奉せられて居ると云ふのではない。理論の歸着は何處に在るか分らないとして、唯事實上內閣側の消極的隨從の態度の結果自然軍部の專決に委ねられて來たと云ふのであらう。故に軍部の專決に委ね難いと云ふ特別の事情が起れば、之は新に政界の實際問題とならざるを得ないものである。而して我國に於て始めて之が問題に上つたのは、華府會議に於ける軍縮協議の際であらう。あの時は軍令部長の同意不同意などの問題はなかつたけれども、軍備の伸縮を政府が取賄つたのが越權ではないかと云ふ議論があつた。併し結局に於て斯の如きは一個偏僻の妄論として顧みられなかつたから、所謂兵力量の決定には政府も亦其責任に於て與り得

るとの憲法上の原則は此時に於て既に事實上承認せられたものと謂ふべきである。華府會議の軍縮協定は主として海軍に關するものであるが、海軍に關して樹てられた原則が其儘陸軍にも通用すべきものなることは當然明白の事理として世上之を怪むものがなかつたことも注意すべき現象である。

所が之れが今度の議會に於て政府當局者から公然否認せられるのだから事が大變面倒になつた。否認と謂て語弊ありと云ふなら曖昧に附せられたと謂てもいゝ。分り易く個條書きにすると斯うなる。

(一)軍令部長の同意せざる協定に基きロンドン條約に調印しても政府の責任に缺くる所がないかとの質問に對し、濱口首相は國防に付ては政府に於て全責任を負ふ旨を力說し、實際上國防に不安なきを說くと共に形式上政府の執れる手續に不備の點なきを述べ以て兵力量の決定は政府の權能に在る主義を明にした。

(二)海軍の兵力(質問者の言葉に從へば『ロンドン條約上の兵力』)の決定は政府に在りとの總理大臣の答辯に關し其所見を叩かれたる陸相は、陸軍大臣として之に異議なき旨を答へたが、然らば陸軍の兵力量の決定も亦同じく政府の權限に屬すと觀ていゝかとの再質問に對しては、實際問題に逢着しないからと云ふ理由にもならぬ理由の下にその答辯を拒んだ。

(三)右の陸軍大臣の答辯は固より閣僚の同意を得たものであるから之を政府當局の公式の辯明と觀て差支ない。言葉の形から云へば曖昧にお茶を濁したものに外ならぬも、前後の事情に照し、斯の曖昧な言葉の中に陸軍兵力量の決定を確然政府の權限に置かざらんとする軍部の腹裡は極めて明白であらう。

右の如き政府當局の立場は今日學界の通說と根本的に相容れるぬものなるは明白である。從てまた輿論の強く排斥する所たるとも昨今諸新聞の論調を見るまでもなく極めて明白だ。而して政府當局は斯の如き立場を何と辯解するつもりであらうか。政府と云つても主たる責任者は軍部就中陸軍首腦部である。民政黨が多年帷幄上奏排擊の選手たりし歷史から觀て、濱口內閣の今次の措置は餘りにも見苦しく、それだけ軍部の壓迫の意外に強盛なるを思はせられるが、何れにしても民政黨側には政府今次の變な立場を支持すべき意見の持合せのあらう筈なく、軍部から餘程巧妙な辯解でも出て來ない限り、他の閣僚も遂にはこの上軍部の提灯を持ち切れなくなるだらう。

然らば軍部の人達は今日之に關し如何なる理論を提唱して居

るか。責任ある當局は前記の如く一切口を緘して語らないが、何處からともなく新聞を通じて巧みに放送さるる諸說の中に、私共は容易に軍部の意見と思はるるものを看取することが出來る。彼等は各種法令の條文を引用して陸海軍大臣及び參謀總長海軍軍令部長の帷幄上奏に由る輔弼事項は軍機軍令並びに國防用兵の全般に亘るとする、軍機軍令と用兵とは統帥大權の作用に屬し國防の事はまた疑もなく編制大權の範圍だとする、だから編制大權といへども內閣の專決を許さないのだと主張する。

一部の人の間には、軍の編制は當然に統帥權の一作用だと說くものがある。軍の統帥は編制の事にまで立入らねば完うされぬと云ふのである。之も軍部の一首腦者の意見として新聞に現れたのだが、昨今貴族院に於て憲法第十一條と第十二條と相互に作用をするなどとて第五十議會に於ける時の法制局長官塚本靖治氏の說明を引用せるなども、また同じ系統の思想から出たものであらう。互に作用するのだから編制事項でも統帥權の規定に依ることあるべしと云はさうとするのだらうが、塚本氏の說明を能く味讀して見ると豈圖らんや、統帥事項でも國務に亘ることがあらう、國務に亘る限り之は同じく政府の責任に屬する、編制事項にして統帥權に關はるものはないと云ふ趣旨を極めて婉曲に述べたものである。老猾はある、理窟はない。之を今日塚本氏の意圖したと反對の方向に役立たせんとするのは可笑しい。

內閣の專決を許さないと云ふは必ずしも內閣の權限を排すると云ふ意味ではない。陸軍大臣は只今のところ言明を避けて居るけれども、事實に於ては內閣の權限を不本意ながら承認して居ると觀てよからう。正面から之に逆行するが如きは最早當今の時勢が許さない。是に於て問題となるのは所謂國防に關する政府の輔弼と軍部の輔弼との關係如何である。

之に對して軍部の人達の輿論は結局共同輔弼說に歸着するものらしい。政府にも輔弼の責任はあるのだらう、俺の方にもそれはある、向ふで讓ればよし、俺の方では絕對に讓れぬとすれば、共同輔弼說の結果、政府と軍部との關係は丁度政府と樞密院の如きものとならざるを得ない。美濃部博士は最近東京朝日新聞に寄せた論文に於て、帷幄の大權は大元帥陛下の大權であつて國の元首としての天皇の大權ではない、從て統帥權の作用に由る一切の決定は軍の內部の意思決定にとゞまり國家の意思が之に由て決定せられたのではないと斷じ、所謂軍部輔弼の效力を政府の輔弼と同列に置くの謬りを痛論されて居るが、政府干與の外に立つべき統帥權は本來如何にあるべきかの理論的攻明と

しては大に傾聴すべき卓見と思ふけれども、軍務施行の今日の實際に即して考ふるときは、統帥權の作用を以て全く國家意思の決定に關係なしと斷ずるは早過ぎるやうである。私の立論の基礎はつねに政治の實際に即して漸次的改革を策する態度にあることを序に此際一言しておく。

今のところ軍部側からいろ〳〵の意見が出て居るが、若しこの問題が議會閉會後にも引續きまじめに論議されて行くなら、漸次洗練された結果軍部の立場は結局右の共同輔弼説に落ち着くであらう。而して之に對する政府側の立場は如何なるべきかと云ふに、今の處は政局の波瀾を避けんとてか極度の隱忍を以て軍部に引摺られて居るやうだけれども、何時までも斯くあるべきに非ず、歸する所は最終の決定權を政府に留保しつゝ軍部の意思は必ず尊重參酌すると云ふ原則を固執することにならう。前の共同輔弼説による政府對軍部の關係を內閣對樞密院に比すべくんば、この説に依る兩者の關係は政府對議院になぞらへることも出來よう。議院の決定を多くの場合政府に於て之を拒否せざるを例とするも形式上之を容るると否とは政府の隨意となつて居る。之と同樣の主義をとれば、軍部をしてまた樞密院の如く政府に對する獨立不羈の牽制機關たらしむるの弊を免るることが出來る。

斯くして我々は近き將來に於て編制大權の輔弼に關し軍部と政府とを代表する右の二つの説が實際施政の上に爭はるる日あることを期待し得る。この爭に於て軍部に取ての重大な弱點は、陸軍と海軍に於て在來の慣行を異にするの事實である。元來憲法に於ても又其附屬法令に於ても陸軍と海軍とを殊別するの文句はない、參謀本部條例も海軍軍令部條例も其の規定の文字は略ぼ同じである。我々の常識から云つても海軍に許さるることの陸軍に許されぬ理窟が分らない。陸軍側は頻りに海軍と異る特徴を云々して必ずしも兩者を同一に取扱ひ難きを辨ずるも、それを眞面目に聞いて居ると、我々は寧ろ海軍の方にこそ多分に獨裁專決の必要があるのではないかと疑ふやうになる。海軍に於ける在來の慣行をも併せて否認し去らざる限り、陸軍が既得の地歩を無理に維持せんとして試みる其の苦しい辯明は、到底論理の一貫を保ち得ぬものであらう。

第二　陸軍大臣文官事務管掌問題

宇垣陸相は永い間病氣で引籠つて居る、日常の事務を見るには差支ないらしいが、少くとも議會開會中之れでは國務大臣としての職務を十分に完うすることは出來ない。この點に關し貴族院に於ける花井卓藏氏の質問に答へたる濱口首相の説明に依れば、國務大臣としての陸相に對する質問には首相自ら代つて

答へる。行政長官としての陸相に對するものは政府委員をして答へしめ、特に陸軍大臣自身の答辯を欲するなら書面を以て答へしめようとあるから、病氣で引籠つてゐても一向差支ないやうなものの、花井氏の云ふが如く議員には必ずしも書面を以て質問するの義務はなく、寧ろ大臣の出席を要求するの權利があるのだから、或る大臣の長期に亙る出席不能の場合には、政府に於て速に之に代る者を設くるの必要があらう。現に軍縮會議の委員の一人として倫敦に派遣せられたる財部海相の地位は濱口首相が兼攝して居る。宇垣陸相の場合に於ても此例を襲ふことは出來まいかと云ふので、衆議院が問題を起したのである。

海軍大臣の地位を文官の兼攝に委するの先例は、華府會議の全權使臣として海外に派遣されたる加藤(友三郎)海軍大臣の地位を時の總理大臣原敬が兼攝したのに始まる。財部海相の地位を濱口首相が兼攝したのも全く此先例を踏襲したものである。先例があり且つ事情が全く同一なので今度は別に面倒な問題も起らなかつた樣だが、加藤海軍大臣の場合は始めての事と云ひ相當に波瀾曲折があつた。軍部の人達は兼攝は已むを得ないが文官の兼攝だけは何とかして阻止しようと、可なり猛しく暗中の運動を試みたと聞く。原敬の威力と加藤友三郎の達識とが無かつたらどうなつたか分らない。この二人の協力で辛つと文官兼攝の端が開けたのだが、それでも之には二つの條件が附いて居た。(一)は兼攝海相たるを得るは總理大臣に限ると云ふのである。内閣官制第二條に「總理大臣ハ各大臣ノ首班トシテ機務ヲ奏宣シ云々」とあるを援引し、首相以外に軍部大臣の事務を見るの法律的資格を具ふるものはないと云ふのである。(二)は文官たる兼攝海相は海軍大臣の職務中專ら軍政に關するもののみを掌り、軍令に關するものは軍令部長に托することと云ふのである。總理大臣といへども軍令に付いては全然容喙の權がないと云ふのである。さて斯う云ふやかましい條件を附しての文官兼攝であれば軍部に於てもさして不滿もあるまいと思はれるのに事實は仲々然うではなかつた。兎に角軍務の領域に一歩でも文官に踏み入られたと云ふが堪へ難い事に思はれたと見へ、反對不滿の聲が意外に強く、せめて陸軍だけは儼に文官の侵入を排して軍部の絕對的獨立を保持しようと云ふので、遂に陸軍部をして堂々と陸軍には如何なる場合にも文官兼攝を認めぬ旨を聲明せしめたのであつた。今度の文官事務管掌問題を考ふるに方りても先づ以上の沿革を念頭に入れておく事が必要であらう。

今度の問題は内閣官制第二條による文官兼攝は陸軍大臣の場合にも適用ありと考へていゝかとの質問に端を發する。質問者が之を政府に問はず特に病床にある陸相の書面答辯を要求した

點に、實際的用意の周到なるを見るべきである。之に對して陸相は陸軍大臣の場合といへども一般原則の例外をなすものに非る旨を答へたので、世人は軍部の態度の一變せるを喜び大に宇垣陸相の明斷を讚へたのであつた。所が第二段の質問即ち陸相はこの際臨時兼攝を置くに意なきかと云ふに對し、『武官ニ非ザル他ノ國務大臣ヲ以テ陸軍大臣ノ臨時攝任又ハ臨時事務管理タラシムルコトハ、陸軍大臣處理事項ノ特性及ビ範圍ニ考ヘ、現在ニ於テ適當トセザル意見ナリ』と答へたので、世人は二度びつくりした。軍部の態度の進歩を喜んだのも束の間、之では元の杢阿彌で、原敬時代以來何等の變化も見ぬわけである。諸新聞が囂々として軍部の頑迷と時代錯誤とを攻擊するも無理はない。

之に關連して我々は次の諸點に注意して置きたい。

(一)内閣官制第二條は、文官たると武官たるとを問はず總理大臣をして軍部大臣の職務を兼攝せしむる根據を爲すものだとは、少くとも海軍側の承認する所である。

(二)陸軍側は右の解釋を承認しない。宇垣陸相の最初の答辯書は原則的に之を承認せるものであつたが、第二の答辯書では武官に非る限り總理大臣と雖も陸軍大臣の兼攝を適當とせすと云ふのだから、假令これに『現在ニ於テハ』との條件を附するとも、前言を翻へし改めて前記解釋の承認を拒むものたるは明白である。

(三)陸軍部の右の聲明に對し濱口首相は議會に於て明白に之を裏書きした。『陸軍大臣處理事項ノ特性及ビ範圍ニ考ヘ』武官に非る他の國務大臣を以て陸相の職務を臨時兼攝せしむべからずとの立場を執る以上、軍部大臣の武官專任を解かんとする夫の文官任用論の如きを猶更ら容れざるべきは當然である。民政黨の絕對多數に擁立さるる濱口内閣が、この點に於て、全然陸軍多年の宿望に一と堪りもなく屈服したのは悲しむべき近來の奇觀である。

(四)文官兼攝を排するの理由として陸軍側は『大臣處理事項ノ特性及ビ範圍』を擧げて居る。而して海軍に在て可能なことが陸軍に在て不能だと云ふ。陸軍大臣の處理事項のうち海軍大臣のそれと其の特性及び範圍を同うするものに就て不能を說く可からざるは言ふを待たない。陸軍大臣の處理事項中より海軍大臣のそれと特性範圍を同うするものを除いたら一體あとに何が殘るか。陸軍部の人が新聞を通じて我々に示せる說明に曰く『……海軍大臣ハ多クノ場合自ラ上奏セズ軍令部長ガ上奏シ親裁ヲ經タルモノヲ海軍大臣ニ移シテ其儘施行スルガ、陸軍デハ參謀總長ガ制定上奏

ヲナシ御裁可ヲ經タル後陸軍大臣ガ更ニ施行上奏ヲナシテ發令スル慣例ニナッテ居ル……」と。理由が單に之れ丈けなら、眞に大山鳴動鼠一匹の感に堪へないが、豈敢さうでもあるまいから、議論の發展に連れて小理窟が漸次小出しに並べられるのかも知れない。それは其の都度謹んで傾聽するとして、先づ前記の說明に對して第一に起る疑問は海軍に在て必要とせられざる所謂施行上奏が、何故に陸軍に在て一指も觸れしめずとする程に大事なのかと云ふ事である。よし夫れに相當の理由ありとしても加藤海相の地位を原首相が兼攝した場合の如く軍令に關するものは參謀總長に托するとでもしたら一向支障を見ぬ道理ではないか。

(五)斯く考へて見ると、陸軍側の言ひ分には理窟がないと云ふことになる、從て現在の立場を固執するに付ても自信があるまいと推察される。それでも周圍の物議を屁とも思はず飽くまで從來の地歩をひた押しに押さんとするのは、一に軍部全般にみなぎる鎖國的感情の威迫あるが爲に外ならぬのであらう。聰明なる宇垣陸相に時勢の見へぬ筈がない。にも拘らず、あゝした態度に出でねばならぬところに、我我は今更ながら軍閥の威力を感ぜざるを得ない。

問題の本體

以上說く所に依て、軍務に關して起つた今次の問題を統帥權の文字に一括するは理論上正しくないことが分らう。文官事務管掌を排斥する根據は陸軍大臣の有する統帥大權輔弼の職責にある。兵力量の決定に關する事項は、編制大權も亦統帥作用の中に包含さるとの說は姑く措くとして、嚴格にいへば統帥權の問題ではない。而もロンドン條約の調印を以て統帥權の干犯なりとする俗見の橫行するは、軍部の立場を擁護するに急なるものが侵攻防禦の楯として統帥大權の美名をかりたるものに外ならない。要するに根本の問題は軍部が現に占據する地歩の合理性如何にかゝる。之を徹底的に解決せでは所謂憲政途上の癌としての軍閥問題は永久に片付かない。

今度の問題に關し直截簡明に理論上の歸趨を示されたものに美濃部達吉博士の論文がある。今のところ學者の說明として發表されたものでは唯一のものである。美濃部博士は(一)ロンドン條約は軍の編制に關するものであり軍の編制は內閣のみの輔弼すべき事項だから有效完全に成立し毫も手續に缺くる所なきを明にし、(二)軍令部は制度上國防に參劃するの職權を有するも元來帷幄の一機關に過ぎず性質上國家意思の決定に參加するを得べきに非るを力說して居る。博士の論文は帷幄と國家との關係を說くこと頗る詳密にして我々を啓發する事多大なるものあるが、一度思ひを轉じて斯の理論を如何にして實際施政の上に活

かしむべきやに想倒すると、前途茫洋として爲すべき術を知らぬのである。(一)帷幄の機關が國家の意思決定に參加すべからずとせば、從來の如く之等の機關をして國家事務に干與せしめてはならぬ、(二)若し之等の機關の當然の職務として爲す所が國家事務たる内容を有するものなるときは、政府はその同一の事項につき獨自の見に立ち全然別個の措置を執ても構はないわけだ。然るに從來の慣例は如何。白紙の上に新に物を創作するのならまだ仕事は樂だ、軍部の機關は妙な歷史的關係に依り不當に其の權限を擴張して居るのである。之を奪ひ回して政府と軍部との關係を正常の規道にもどさんとは、更に色々の理由が加はつて、一層困難となつて居る。であるから、この問題を政治的に解決すると云ふとは要するに死力を盡して軍閥と闘ふことを意味する。政權に戀々たる濱口内閣が多年の宿論を一擲してこの際軍部との衝突を避けたのも、意氣地がないと云へば意氣地がないが、一面に於ては意外の措置ではないとも云へるのである。

さていよ／＼軍部と闘ふとなれば、有效に彼等を反省せしむる爲に如何なる題目を擇ぶべきかを考へねばならぬ。私の平素考へて居ることを次に簡單に示しておく。

(一)現在の制度を其儘として置けば、せめて編制權に關する政府の完全なる參與を軍部をして承認せしむべきである。輿論の後援に依り之を解決するは左して困難であるまいと考へる。

(二)軍機軍令の名に於て發令せらるゝものにつき一々精査を遂げ、實質上統帥權の作用に非ざるものを發見せば之に付て適當な措置を講じ、更に將來に向つて同一の過誤を再びせざる用意を確立することを必要とする。この點に關し法制局の審査を免れ樞密院の討議を避くる夫の「軍令」の如きは最も愼重に吟味さるべきものであらう。

(三)併し根本の禍因は軍部と政府と相對立する勢力たる事實に在る。この關係をやぶり國務の圓滿なる統一を圖るには、軍部大臣文官任用制を採用するに限る。軍部大臣を文官にするか武官にするかは理論上輕微の問題のやうで、實際の影響は極めて大きい。軍閥の不當なる跋扈を制する鍵は之を措いて外にない。それだけ又軍部の人達はこゝを最後の牙城として飽くまで之を死守するに努むるであらう。

筆者曰く、以上の諸點につきては大に論ずべき點あり且大に論ずる積りであつたが、執筆を引受けてから締切まで十分の日數なく其上病後の事とて思ふ存分筆を運ばすことも出來なかつたので、不本意ながら粗略極まる儘で稿を終ることにした。龍頭蛇尾の譏は甘受する所である。尤もこの問題が議會閉會後にも引續き論議せられる樣であつたら、重ねてまた續論を草して大方の教を乞ふかも知れない。

ネオ・アラビアン・ナイト

人前で公然と接吻をした話

岡田三郎

Sと云ふ奴は、僕の少年時代からの親友ではあるけれども、しよつちゆうエロチックなものばかり書いてるんで、時々發賣禁止の災難にあつたり、注意をくらつたり、とにかく警視廳檢閲課のブラック・リストに載つてるほどのやくざな男なんで、近頃ではあまりつきあはないことにしてゐる。ところが、よく銀座あたりででつくはすんで、閉口だ。

彼はもと、「黒猫」へよくかよつてゐたもんだが、近來は「春」へ河岸をかへたと云ふ。それには無論理由がある。「黒猫」の或女が、「春」へかはつたのだ。

さて、その女と云ふのが、とても話上手の女で、Sが行くたんび、たとへば「熊の毛皮の話」だとか、或は「故郷に錦を飾る話」だとか、さう云つた類のものを、一夜一話の約束でしてきかすんださうだ。

いかにエロチストのSとは雖も、まだまだ千夜一夜をその女のところへかよつてはゐないらしい。が、時々、僕は仕方なしに、――まつたくいやいやながら――その女がSに話してきかしたと云ふ話を又聞きさせられる不運に遭遇する。

今思ひだして見るのに、「黒猫」または「春」で、一夜一話とつみかさねていつた數々の物語こそ「ネオ・アラビアン・ナイト」に最もふさはしいものと考へるんだが、今度は僕の方で、有難くもないSのお株を奪つて發禁の災厄にあはないとも限らないから、それは當分見合すことにする。第一、僕なんかの柄ではなささうだ。

そこで、ここには、Sの體驗談として僕に最近語つてくれたところの、比較的すつきりとした、罪のない、然し考へやうによつては若干罪のなくもない物語を紹介して、ひきさがらうと思ふ。

次の話のなかで、「僕」と云つてゐるのは、勿論Sのことである。

或日のことだ。僕はとても憂鬱な氣分で銀座を歩いてゐた。なぜ憂鬱な氣分かと云ふのに、オリンピックかアスターあたりで、晩餐を一緒にとらうと折角さそひに、彼女のところへ行つたのに、彼女は朝から外出してゐないんだ。然も、いつもなら、さう云ふ場合きつと書置があるのに、その日に限つて何もな

いんだ。これで憂鬱にならぬ奴は、馬鹿だ。

仕方がないから、いつもその時刻に大概きまつて寄ることになつてゐるコロンバンで、カフエ・ノアールでもすすりながら、これからの方向を考へようと、決心してはひるには、はひつて見たものの、どうも一人と云ふ奴はどこへ行つてもはじまらないもので、カフエを半分喫むか喫まずに、またすぐ表へ出てしまつた。

ざつと、五六間も行つたかしら、向ふからにこ〳〵して、可愛らしい顔の青年が来るではないか。きりたての、スマートな背廣だ。小柄な、二十歳くらゐの。

が、僕には誰だか思ひだせないんだ。眼をぱちぱちさせてると、かの青年は委細構はず、帽子の鍔前をぐつと掴むなり、うしろの方へ脱いで、ぴよこんとお辞儀をするのだ。

やつと僕は思ひだせた。彼の洋服姿を見るのは、はじめてだつたのだ。それが誰だか解つたとなると、有頂天になつて、僕は彼の手を握つた。今度は一遍に、最前の憂鬱氣分なんかふつとんでしまつた。

高層建築の上を蔽ふ都會の空は、だん〳〵夕暮の蒼さを深めて行く時刻だ。僕達は愉快な晩餐をオリンピックでとると、ふたたび表通りを少しばかりぶらついて、それから定跡どほりに銀座裏へと曲つた。

行きつけの或るバアだ。が、青年ははじめてだと云ふ。

ボックスの横手に植木鉢があつたり、照明も間接で、一體に暗い、やはらかい、雰囲氣だ。僕は連れの青年を先にかけさせて、その隣に並んだ。女給達は寄つて來た。

酔ふべく絶好のコンデイションだ。彼はアルコール分を少しもとらずに、オレンヂエードか何か飲んでゐる。僕はかまはずに、カクテルのグラスを並べて行く。

僕は一人の女給の手をとつて、ひきよせた。女給は僕の膝に腰をかけた。

「どう？僕とキッスしない？」

「え、するわ。」

「ぢや、しよう。」

「ここで？」

「勿論。」

「いやよ、みんなの前でなんか！」

女給はわざとらしい矯聲で頓狂に叫ぶと、僕の膝から逃げて行つた。

「話せねえ女だな。ぢや仕方がない、男同士でしようか。ねえ、君！」

僕は隣の青年の肩に腕をまはした。ひかれるままに、彼は朗かな笑顔を、僕の方へ寄せて來た。

「まあ、嫌な人達ねえ！とても眞劍ぢやなくつて！」

女給の言葉なんか、僕は耳にもいれなかつた。

が、次の叫び聲で僕は眼をひらいた。

「あら、指環！」

青年はすばやく、僕の肩にかけた左の手をひつこめた。

「まづかつた？指環を見せて。」

表へ出ると、かう云つて彼女は左の手を出した。蛇の指環が中指に光つてゐた。

「あの時まで、誰にも指環は見せないやうにしてゐたのよ。」

「最後に、わざと出して見せたんだね？」

「さう。」

「惡い奴。」

りふー」
彼女はいたづらっ子らしく肩をすくめた。

迷走エロチシズム

乾信四郎

皮張りのスモウキング・チエアが思ふ存分勝手な所に、勝手な方向を向いて、その各々から紫煙が立上つてゐる。倶樂部の一室である。ウヰスキー・グラスが小卓の上に御氣嫌を伺つて待つてゐる。

漫然たること夫自身が此倶樂部の目的だから、集る人間も漫然なら話す事も漫然。

「どうもこの酒と云ふやつも、やり過ぎると餘り面白くないですな、」とグラスを嘗め乍ら赤ら顔の半禿頭紳士商業(ゴールド)氏が今更のやうに云ひ出す。又初まつたぞとばかり誰も何とも應じない。

「まあ此處だから話しますがね…その…先日少し呑みすぎまして、家へ歸つたのが夜中過ぎでした。朦朧としてベッドに潛りこんだのです。得てヤカマしい女房が不思議にその夜はおとなしい。で、足の方を探つてみると…おや〳〵どうも大變です。私の足を入れて足が六本あるぢやありませんか！ 醉つてはゐても、私はムカ〳〵ッとなりましてね――この賣女奴が！と女房を叩き起して詰問してやりました。すると、女房曰く、「マア醉つて、あなは數の勘定も出來ないのね。起きてよく調べて御覽なさいよ。あなたの足と私の足とチャンと四本きりない筈ですわ、と斯うです。で、私はベッドから飛び下りて、再度足のある邊を探つてみると成程四本きりない。ウンさうか、とそれで安心したとばかりその夜は事もなく、醉つた勢でグウ〳〵眠つちまひました。さて明くる朝、醉がさめてからよく〳〵考へてみると…」

「アハヽいやもう判つた判つた」と誰やらが云ふ。

「だから酒は餘りやらん方がいゝですよ」と商業(ゴールド)氏は話を詰ぶ。自分がベッドから下りてゐる事を醉つた加減で忘れてゐたものらしい。「いやどうも酒のおかげで飛んだ失敗を演じたもんですな、」と葉卷をポカリと輪に吹いたのは經國氏だ。

「それに就いて何かひとつ…」と醫師氏が促す。

「どうも今考へると惜しい事をしたと思ふんですが…」と經國氏にも何か失敗談があるらしい。「私は商賣柄先日地方へ一寸、旅行に出ましたが、その時のことです。どうもこれがひどく山の中の淋しい所でしてね。無論、自動車もなし、馬車もないと云ふ至つて邊鄙な所でした。仕方なく歩いて行くうちに、日が暮れる、腹は減る、すつかりくたびれて漸く小さな村に着きました。泊らうにも斯う云ふ所ですからホテルなぞのある譯もなし、仕方なく或る農家に一夜の宿を借りたのです。何分、腹ぺこなのに、そこの主人が又馬鹿にけちんぼうで自分達だけ何やら旨さうに食つてるくせに、私には腹の足しにもならぬチーズをたつた一片あてがつたきりで、何にも呉れない。所がそこの娘君が、これを氣の毒が

つたらしい。隙を見て、後でたんとお食べなさいと目で知らせてゐる樣子です。で、まあ寢る事になりましたが、貧しい家の事だから家中にベッドが只の一つきりないんです。仕方なく私は夫婦のベットに一緒に寢る事になりました。それにしても、腹がぺこぺこに減つてゐて、とても眠る所の騷ぎぢやないんです。何とかして隙を伺つてベッドから拔け出し、臺所へ行つて腹拵へをしてやらうと思つてゐると、階下の厩の邊で盛んにゴトンゴトンと妙な音がするのです。うるさく音が續きます。主人は馬盜棒とでも思つたのでせう、寢間着の儘出て行きました。と、妻君の方が、それを見濟まして――早く早く！あなた何をしてらつしやるの？早く××いよ、今ですよ――と急き立てるのです。占めたこの隙だとばかり早速私は臺所へ驅け込んで、たらふく御馳走をつめこんだものです。……」と經國氏は息をつく。

「フーム！」とみなが息をつく。

「……いやどうも、その時は腹が減つてゐて前後の見分けがつかなかつたやうなもの〻、後で考へてみると、どうも何だか私はその時國語の意味を曲解してゐたやうですな……」

わはッはッは！と笑ひが爆發する。ウヰスキーグラスが電燈の光線を斜に切つて光る。

煙草の煙、煙、煙。哄笑の波。

「酒で失敗する者あり、しかして又空腹の失敗ありですか…アハヽヽ」とまだ笑つてるのは醫師氏だ。「いやどうも隅にも何處にもおけませんな。」

「隅におけんと云へばどうも近頃の娘ッ子は全く隅におけませんぜ」と檢事氏が話を引取る。

「さては、お孃さんに手をやきましたな？」と冷かす聲。

「……全くです。……どうも近來うちの娘の樣子が怪しいと思つてますと……」

「樣子の怪しいのは夫子自身でせう！」と痛い所を刺した者がある。見れば教師氏だ。

「いや、話の腰を折つちやいけませんよ。……で、その…内々娘の擧動を偵察してますと果して愈々怪しい。或晩の事、私は遂に娘の怪しい所以を摑んだのです。默つてゐては餘計いけないと思つたので、私は早速娘を呼びつけて叱りつけてやりました――一體、あれは誰だ？ さつきお前が露臺の隅でキスをしてた男は？私はちやんと見て知つてるぞ！――とね。所が、娘の奴、洒蛙々々として答へて曰くです――だつて判る筈ないわ。あすこは眞暗だつたんですもの、妾だつて、あの男が誰やらハッキリ見えなかつた位ですもの――いや、何ともはや、吾子とは云ひ乍ら嘆かはしく思ひましたよ……」

「あはは、この親にして此の子ありですか…」で、わあああッとばかりに一同ざわめく。

倶樂部の夜は更けるのを知らない。

何處の國の何と云ふ倶樂部だらう？

家では權利を主張する妻君が毛絲を編みあぐんでゐる頃だ。

扉

池谷信三郎

四方は眼を瞠すと、どうも樣子が少し變であつた。――

醉つてゐたので、ぐつすりと熟睡したのであらう、まだ夜が明けかかつたばかりであつた。ほのかな青い光が、カーテンの隙間から洩れてゐた。そして驚いた事には、その薄れ陽の中に婦人の顔が、白く浮んでゐた。

これは、いよいよ部屋を間違えたのに違ひない。どうも家具の配置の工合が、……それに何よりも、よく考へて見たら、彼は獨身者であつた。

彼は急に心配になり出した。

今にもその脇に寢てゐる婦人が眼を覺し、大きな聲で救ひでも求めたら、どうしやう。まさか部屋を間違えましたでは、通るまい。

四方はひやつとした。

そをつと身體を起すと、そのまま、蒲團をめくり、足の方からこつそりと寢臺を下りた。拔足をして、戸口に行き、廊下に出た。

やれやれ、アパートの部屋の戸は、どうしてかう個性がないのであらうか。昨日はあんまり醉ひ過ぎたので、いつもより戸の數が澤山に見えたのであらう。俺が惡いのではない。天若し酒を愛せざれば、酒星天に在らず、だから仕方がない。

四方はやつと自分の部屋に入つた。

あれは、楠見さんの部屋だ。して見ると、自分の隣りで、ぐつすりと、何も知らずに寢こんでゐた婦人は、あの麻雀の好きな細君に違ひない。

さう云へば、四方は、醉ひの爲めにぼうつと霞んだ記憶の底に、夜中あの婦人が何か寢言を云つたやうな氣がした『碰!』と云つたやうであつた。四方はシャンパンでも開けたのかと思つたが、今考へて見れば、どうも、麻雀の寢言であるらしい。寢呆けられて、鼻なんかを自摸られないで仕合せであつた。鼻位ならまだいいが、……いや、かう云ふ想像はどうも品があるとは云へない。

四方は又うとうとと居睡りを初めて了つた

×　×　×

廊下の端に楠見が現れた。

廊下はまだ薄暗かつた。

彼は靴を脱いで、それを手に持つと、こつそりと拔き足で歩き出した。三つ目の扉の前で立止つた。ちよつと耳を傾けて、中の樣子をうかがつた。

輕い、可愛らしい齒ぎしりの音がした。

『吃!』と云ふ聲が聞えた。――そこで楠見は安心して、扉に手を掛けた。妻が、安らかに、麻雀の夢を見て居る事が解つたからである。

彼は部屋に入つた。

部屋の中はひつそりとしてゐた。

片隅の寢臺の上に、妻がすやすやと眠つてゐた。壁寄りの寢臺の端の方に、小さく身體を丸めて、詩の原稿のやうに、寢臺の白いシーツの上には大きな餘白があつた。

楠見は、その餘白に納らうとして、ふと、どうも樣子が少し可笑しい事に氣がついた。

彼は靴を兩手にぶら下げたまま、しばらくぽかんとして立つてゐた。

この貝のやうに清らかな妻の寢顏に對しても、そんな想像を廻らす事は、すまないやうな氣がするのだつたが、どうも、少し不審な點が寢臺の餘白の上に感じられるのであつた。

すると、不意に、妻がぐるりと寢返りを打つた。カーテンの隙間からさし込んで來る光線が、その薄紅色の眼瞼の上に當つた。妻はぱつちりと眼を開けた。それから、さも眩し

さうに、ぱちぱちと瞬きをして、夫の方を見上げた。

『あら！　もうお目覺め？』

お目覺めだ？と危く彼は訊き返す所であつた。

『こんなに早く、どこへお出かけになるの？　そんな、洋服なんか着込んで？』

『うゝ。ちよつと。』

愼兒はとうとう、お出かけにならなければならぬ破目に氣が着いた。ここで事を明らかにして、自分自身の慘めな姿を暴露するよりは、このまま、曖昧にぼんやりと外へ出て行つて了つた方がいいやうな氣持がした。

彼は手に持つた靴を穿いて、今度は勢ひよく、きゆつきゆつと音を立て乍ら、廊下を歩いて行つた。

アパートの前の坂を下り乍ら、こんな早い夜明けに、まだ人も起き出さない街を歩いて行く自分の姿を想像して、彼は獨り言のやうに呟いた。

『全く、意味ないね。』

變化する女

武田麟太郎

そいつと俺とは同い歳だ。七つ八つの時からの知り合ひだ。――

そいつは太つちよの母親につれられて、長屋のハジに住んでゐる爺さんの所へやつて來た。爺さんは製材所につとめてゐたが、まだ後妻がほしかつたのだ。連れ子があつたつて餘り飯も食ふめいし、それにちよつと使へば子供だつて役に立つし、便利なものだ。困つたことには女の子だから着物もいるだらう。だが、そいつはお母アの方で何とか都合すればよい、俺の方から出すのはマツピラだ。そんな金があれや、のんで了ふ――爺さんの腹はさうだつたにちがひない。

俺は子供だつたが、近所のお神さんが、カツ子を（その娘ツ子のことさ）不ビンがつてお母アもあまりデレデレしすぎらア、ちつとは自分の子なら可愛がつてやりやいゝに、と水道端でしやべつてたのをおぼえてゐる。

事實、カツ子は可哀さうにしよつちゆうこきつかはれ、ロクな着物もきせて貰へなんだ。そのくせ親爺は年甲斐もなく、金さへあれば仕事の方は休んで、後妻であるカツ子の母にうたなんぞうたはせ、眼を細くして、酒ばかりのんでやがつた。カツ子は子供同志のつきあひにも困るほど、一錢二錢の小遣ひ錢も持たせては貰へなかつた。だから、俺は俺の親爺てえのが安バクチ打ちで、しよつちゆう出歩いて夜なんぞ、ロクスツポ歸つて來なかつたから、カツ子をいつも家へつれこんで遊んでやつた。子供でも夫婦と云ふものはあるものだ。俺たちは夫婦だつたのだ。

それが小學校へ行くやうになつてから、サスガ、學校友だちの手前もあつて、公然カツ子を可愛がつてやることもできなかつた。だが一つの思ひ出がある。十位の時だつたが、夏休みだ。月は青くて、長屋の中までもサシこんで來やがつた。俺はれいによつてカツ子

を家へつれて來て、戸棚ん中に親父が好きで作つた梅酒があつたのを、カッ子にのませてやつた。カッ子はすつかり醉拂つてさ、子供のくせに何とかかんとか、クダを卷き、ブンブン蚊がよつて來るので、破れうちわでバタバタ云はせながら、踊りはじめた。俺はおかしくなつて、それでも、いつもションボリ、何を云つても返事一つ滿足にできない内氣なカッフペがヤケに陽氣になつたもんだから、へんに悲しくなつて抱いてやつた。汗が冷くなつてゐる小さい裸かな身體をよ。――あん時ほど、女の子をいぢらしく思つたのは、あとにもさきにもない。

　カッ子はそれからずつと、家ではいぢめられ、いぢけさせられた子供だつた。小學校を卒業すると、俺は工場の見習にはいつたが、カッ子はどつか遠くへ、(どこへだのか知らなかつた)奉公にやられるので、俺たち子供の夫婦は別れなければならなかつた。形見をくれたよ。二すばかり髮を切つて、そいつを白い半紙に包み、鉛筆でカタミと書いてくれた。すぐどつかへやつちやつたけれど。

　それから二十の今日まで、俺は色んな女と關はりあつた。と云つても、主に商賣女だが。

　長屋のはじにゐたカッ子の義理の父親は、酒をのみすぎたんだらう、ポッキリくたばり太つちよのお母アは黒川と云ふ何をしてるのだか知らないが、オールバックにしたヘナチヨコ野郎と駈落して了ひやがつた。あんな母親たら、あるものぢやねえ。おかげで俺はカッ子のことなんか、ちよつとも思ひ出さずに長い間やつて來た。

　ところが、最近、原庭の停留場附近で、突然出逢つた。夕方だつたが、俺は見かけたあまッ子だと思つたら、そいつがカッ子なんだ。昔の通り小がらで、鼻の横に大きなほくろのあるカッ子さ。六七年逢はなかつたわけだが、俺の方から。おめえ、山中カッちやねえか、と云つたら、びつくらしやがつて、えつ、と云つたが、こつちの風采を見て少しは安心した樣子で、どなたでしたかしら、と丁寧に云ひやがつた。俺ア淺井さ、ほら、おめえが、子供時代にゐた××長屋で一しよに遊んでた淺井だと云ふと、カッ子は、ああ、と云つて暫く俺の顏をぢいつと見てやがつた。だから、俺もぢいつと見てやつた。すつかりヤツレやがつて―苦勞したにちがひない。どこにゐるんだ、てえと、それが今月、實は人をたづねてこゝへ來たのだけれど、その人の住所が分らないので、千葉の方へ歸らうかと思つてる、と云つた。へえ、あつちにゐたのかと思つて、さうか、そいつは困つた、よけれや、俺のうちへ來たつていゝよ、昔なじみだし、俺も今はまるきり獨り身だし、誰にも遠慮することアねえから、と云つてやつたら、ほんのちよつと考へて、ええ、そいぢや、他にアテもなし、トテも疲れてますから、御厄介になります、とキッパリ出やがつた。

　とにかく、俺も昔の――まア子供ながら初戀の女と云ふわけだ、それと一しよに歸るのだから、ソワ〱してうれしかつた。このへんが、あの長屋のあつたあたりさ、と今はトテツもなく廣くなつて圓タクが埃をあげてゐる大通りをさして敎へてやると、さう、すつかり變りましたね。變つたとも、震災でつぶれて、ほんのこないだまではバラックの小屋がつまつてたが、帝都復興と云ふわけで、大いそぎで、そこに住んでゐる奴を追拂つて道

路にして了つたわけさ。――で、俺んちと云つて、實は御承知のやうに、二階借りだが、そこへつれて來て、その晩は寢た。ほんとに疲れてゐると見えて、床へはいるとすぐに寢つき、しきりと寢言を云つたり齒ぎりしりをやつてゐたが、それをきいてゐる俺の方もすぐ眠つて了つた。

それから、ずつとカッ子は俺のところへ逗留することになつた。夏場だから蒲團の心配なしでやつて行けたのさ。ことわつて置くが今度は少しも關係はなかつた。實はかうだ。五日たち、十日たつた。カッ子はれいによつて無口で何一つしやべらねえ。ま、それでもいいや、俺が工場へ行つた後にはちよつと、俺の身の廻りものを整理したりして、どつかへ出かけて行くらしかつた。それから、又日數がたつた。だん〳〵、ま、それでもいいやと云つた氣持で俺はすまされなくなつて來た。俺も男だからな。それに男つてやつは、どうも。

ある日、俺はたうとう切り出した。俺と夫婦になれ、と云つたのだ。だが、俺も早まつたことを云つたものだ。夫婦つてやつは、談判してはじまるものぢやねえ、なつて了つてから、まア、こいつが世間で云ふ夫婦つてものかな、てな工合になるんだらう、と思ふが、どうだ。それに、カッ子は獨りのやうだが、それも獨りだかどうだか、わかりやしないし。とにかく俺が早まつて、そ切り出すと、カッ子は、ダメだと云ふのだ。やつぱり、亭主があつたのだ。おかしいぢやねえか、亭主がありや、そいつんところへ歸へちまつたらいいだらう、俺んとこにどうしてグヅ〳〵してゐるんだと云ふと、封緘ハガキを取り出して見せてくれた。裏には所番地が紫の判で押してある。千葉なんだ。開くと、愚で元氣でゐることや、苦勞をかけたが、これ位の苦勞にはヘコタレルな、子供はよろしく頼む、と云つても俺が出るまでに誰かと一しよになつてもやむを得ないものと考へてゐる、と書いてあつた。これはときくと、夫は監獄にゐるのです。三年は歸つて來られません、と答へた。ふうん、と俺は溜息した。こいつはきつと、カッ子があれやこれやの苦勞のあとで、頼みとする男が監獄に行くやうな仕儀になつた、そんな暗い今までのくらしが腹ん中で可哀さうに思へたのが、ふうんと溜息になつて出たのだらう。さうか、そいつは何でひつかゝつたのだ。まさか窃盗ぢやあるめえ、バクチか、過失かつてきくと、みんなちがふ、××黨の仕事を手傳つたからと云ふ。へえ、そんな惡い野郎とおめえ一しよになつてたのか、そんな奴とはよしたらいいぜ、と云つてやつた。すると、あなたも勞働者なら、そんなこと云ふんぢやない、酒ばかりのんでないで、少しはお互ひに勞働者のくらしがどうかなるやうに考へねばならないぢやないのと、ムツカシク來やがつた。俺ア酒をのまねばちつとも世の中が面白くねえんだ。さうでせう、酒をのまないとやりきれないのでしよ、そいぢや、つまんないぢやないの。酒をのまなくつてもさ、面白いやうにする工夫を考へなくては、と云つた。俺はまだそんなことを考へたことがないんだ。とにかく、おめえと夫婦になれないにしても、乗りかゝつた船だし、少しは親身になつてやらう、子供は如何したつてきくと、そいつはあの人がはいるとすぐ死んだ、まだ知らせてないんだ、とのことだつた。

それから、カツ子はメリヤス工場にはいれ

た。俺とはずつと同なじ部屋で寢起きしてゐる。俺にはあいつがへんにえらくなつたやうに思へてしかたがないのだ。それはムヅカシイことを云ふからぢやねえ、と云つてまた、やることがそこいらのあまッ子とかけちがつてるわけぢやねえ、亭主がどつかにゐるからつてわけでもさらさらない。あいつのからだのどつかにへんなものがかくれてやがる。いつも俺はなアにああ云つても女だ、俺が惚れてるんだから、そのやうになつて了へばなれるんだ、と力づくでも！と歸る時には決心して來るんだが、さて家であいつと向ひあふと手も足も出ないんだ。毎日くりかへしてゐる。こいつは不思議だ。

　へんな關係でもう二ケ月も一しよにくらしてるわけなんだ。俺アもうこつちが負けたと思つてゐる。あいつと對等にならなきや、いつまでかうしてゐても夫婦になることなんかねえだらう。だが、あいつと對等になるやうにやどうしたらいいんだか、まだはつきりのみこめん。まづ、酒をやめるか。——

　とにかく、あいつとはちつちやい時からの知り合だ。そして男と女だ。おまけに勞働者同志だ。だのに、今までの勞働者のあまッ子とは少しかはつてやがる。このわけをはつきり分るやうに、誰か敎へてくれ。

五月五日、朝。

月夜から墜ッこちる

龍膽寺　雄

　さんざん僕といたづら遊びに疲れて——奈々子はもう睡くなつちやつて、ひとつ羽根枕のはしに顏をそむけて、ブングリと小さなあくびと一緒に、毛布の下で冷いやりした×の體を子供の樣にちゞこめるんですけれど、僕はかたかたの耳の中が痒いばかりか、むせうにまだ彼女にお喋りがしたくつて——もつれたおかッぱの中から彼女の耳を抓み出して、それを僕の口元へ引ッ張り寄せるんです。

　話がどこかへ逃げちまひさうでしたから。

『で、ね。』

　と、僕はもう一方の指を痒い自分の耳へ突ッ込んだまゝ續けるんです。

『その楕圓形の硝子の球をね、壞れない樣にそッと絨氈の關の豹の毛皮の上へ置いてね、蓋を開けて、その中へ×の君を寢かすのさ。風呂からあがりたてで、からだぢうがまだ桃色をしてるとこを、タウエルに包んで抱いて來てね。なアに、厭やがつたら無理矢理に×××を嗅がせちやふさ。僕の書齋にはちやんと×××××××・××××の用意がしてあるからね。そして、硝子球の中へ君を寢かしたら、ちやんと蓋をして、それから、枕元ンとこの孔からうんとこさと中へ莨の煙を吹込むのさ。段々と硝子の中が曇つて、君の裸が見えるか見えないかぐらゐになると、そろそろと硝子球は輕くなつて、絨氈の上へ浮かんで、やがてフワフワと部屋の中を漾ひはじめるよ。……君は寢てるから識らないけど、君は横に寢てやうと俯伏に寢てやうと、×の×だつて何だつてちやんと覗けちやふからね：：で、充分に輕くなつたとこで、僕は窓を開

けて、外へそれを放してやるのさ。外は滿月だぜ。お月さまが金色の大きな暈をきて、卵の殼みたいな夜の雲が、空のところどころにちッと明るく浮いて居る。硝子の球は靜かな夜の空へ地息と一緒に昇騰して、まるい影法師を地べたへ映すね。銀紙細工の樣な星が二つ三つ空のはしの方に靜かに貼りついて居る。でも、星なんざどうでもいゝさ。……滿月の光が硝子球の中へ薔薇色にさして、煙の中に寢てる君の裸をすッかり明るく照らしちやふよ。いくら恥づかしがつたつて駄目さ。君は×だし、硝子は透き徹つてるからね。僕も隅まで中を覗いちやはう。……』

『たッて、』

と、まだ睡つて居なかつたらしい彼女は、でももう一度小さなあくびをして、クルリとこつちへ寢返つて、——鼻の頭を枕の上で僕とすれすれにして云ふんです。

『そんな高いとこへあたし昇つちやつて、どうしてあんた硝子の中を覗くの?』

『そ、そりア、……』

と、僕はちよいと慌てて、

『君のあとをすぐに僕も追ッかけて、滿月の暈の中へ昇つて行くよ。』

『どうして昇つて來るの?』

『どうしてだッて、……』

と、僕は益々ドキマギして、

『そりア、い、いくらだつて、方法はあるさ。例へば、……さう、かうやつたつていゝだらう? 僕この毛布をかゝへてさ、あそこの火葬場の煉瓦の煙突へ登つて行くのさ。そして、ポウッとあそこから夜空へあがつてる煙の上へ、フタリとこいつをかぶせて、一杯にこの毛布を膨らがしちまや、雑作もなくフタフタと昇天をはじめるさ。そいつへブラさがつて行きアいゝぢやないか!』

『厭やだわ、火葬場の煙なんて。……』

彼女はおかッぱの中で眉を顰めるんです。

『厭ヤッたつて、……昇天する魂が澤山這入つてる筈だから、却つてお互ひに都合がいいよ。』

『あたし、でも逃げちやふからいゝわ。』

『逃げるッて、どこへ?』

『岬の方へよ。』

『幾らでも追ッかけて行くよ、どこへだつても……岬の方だと燈臺も光つてるし、海も滿月の夜には明るいし、……沖を通る汽船が汽笛を鳴らしてくれるから、ちつとも淋しくなんぞないや。』

『だッて、毛布なんぞぢきに中の煙が漏れちやふわよ。そしたらあんた海へ墜ッこちちやふわ。』

『墜ッこちない前に、君の硝子球へ捉まつちまふからいゝよ。』

『だつて、滑つて捉まんないわよ硝子球ちや。……』

『大丈夫!すぐに蓋を開けて、君のからだへ捉まッちやふから。……』

『あたし捉まらないわ。』

『捉まらないたッて、捉まへちやふから。かうやつて、……』

『苦しい!……痛いわよこの手。』

『痛くたつて駄目だ。離さない。……』

『厭やよ、離してよこゝ。……』

『離すもンか!』

『あ、苦しい。……だッて、硝子球の蓋を開けたら、中の煙出ちやふぢやないの?……そしたら、……』

『煙なんぞ出ちやつたつて、君を捉まへちま

やいゝ。』

『そんなに押して來ちや墜ッこつちやふわよ。』

『墜ッこつたつて、たかゞ下は月夜の海だ。ひとりでに浮いちまはア。』

『駄目よあんた！毛布どこへやつたの？……あら、下へ落つこつちやつてるぢやないの。』

『毛布なんぞいりアしないよ、もう。……』

『こんな隅ッこへ×して來て、あたし墜ッこつちやふわよ。』

『そしたら僕も一緒に墜ッこちるよ。』

『駄目よ。この手離してよ。ほんとに墜ッこちちやふわよ。』

『誰が離すもンか！』

『い、痛い。……』

　僕の手の中で彼女はからだを反らしてもがきながら、やがて、グイと亂暴に寢返りをすると、そのはづみに、あッ！　敷布のはしをつかんだまゝ、彼女は寢臺から絨氈の上へドサリ！

　やれやれ。××××をかたかたの脚の先へからめて、これはまた不作法な×！

『痛いわ。厭やなひと。……』

『や、や。』

　僕はわれに返つて、びッくりして寢臺の上から彼女の方へ兩手を差しのべながら、でもテレ隱しに云ふんでした。

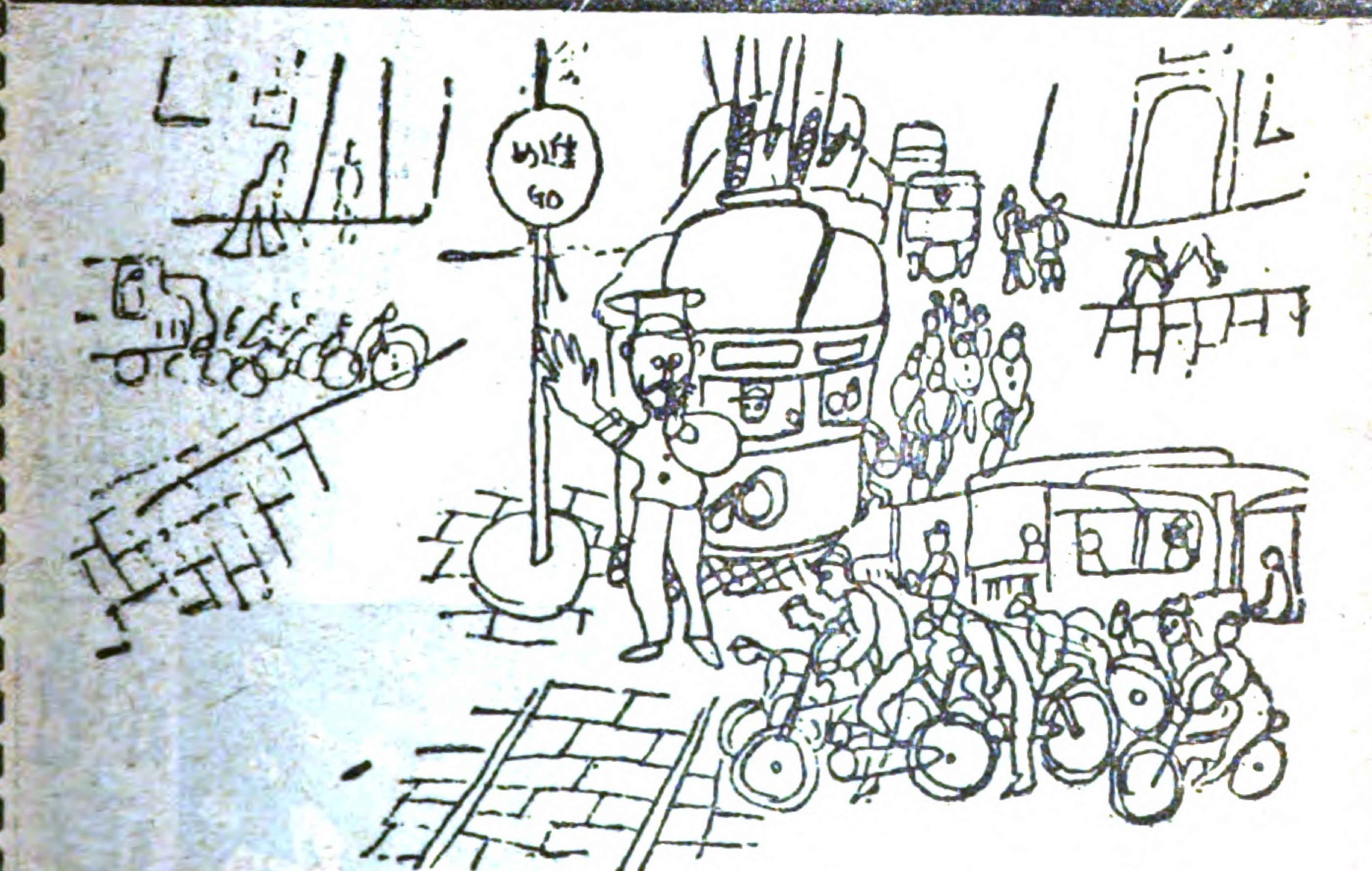
『なアに、墜ッこつたつてたかゞ寢臺からぢやないか。……ぢきにまたあがれるよ。』



勞働大衆版

ゴー・ストップ

改訂版出來



現代のストライキといふものが、どういふ意識のもとに計畫されるか、どういふ理論によつて指導されるか、如何なる戰術をもつて鬪はれるか。さては又、世人の記憶新たな某々事件の場合の如く、見えざる糸を傳つて秘密の指令を頻發してゐた魔の正體は何物か。およそ、勞働爭議に絡まる事情の裏の裏までを殘る隈なく暴露したのがこの小説である。

銀座尾張町の交叉點に立つて、夜な夜な夕刊を賣るめくらの少女があつた。——物語は此處から始まる。しかも、この哀れな不具者の、ひたむきに純眞な戀情よりも、ブルジョアの玩弄物として黃金の上に亂舞する嬌艶妖美なモダンガールの階級意識への眼覺めの方が此の物語りでは主要な役割を占めてゐるのである。

寄る邊なき街の孤兒が、やがては勇敢な鬪士となつて成長して行く過程。粗末なユニホームに身を包む市電の女車掌。彼女の身内に燃え旺る悲壯な同志愛、彈壓と追捕の網の目を潛りながら相擁して交す慌たゞしいキスの音。むせるやうなエロチシズムと息づまるやうな××××との交錯するところ、全篇惻々切々として異常の興奮に導く迫眞力を持つてゐる。

四六並製箱入
四百二十頁
定價一圓二十錢
送料内地十二錢

東京驛前、丸ビル五階

中央公論社

振替口座東京三四番

堀切市長辭職の眞相

黑河　惣

一

堀切東京市長も遂に辭表を提出した。五月二日午後三時であつた。在職僅かに一ケ年と七日、あれだけ輿論の支持を受け、一般からも評判のよかつた堀切市長を、任期の四分の一にして投げ出さしめたものは何か。その責任は堀切市長自身で背負はなければならない部内の不統一に原因してゐる。

卽ち堀切市長が就任に際して最も信頼して復興局から拔いて來た第二助役田中廣太郎氏は悉く市長の施政に對して反對的態度をとり此の調子では到底圓滿に市政を運用して行く事は困難であるといふ自覺が、堀切市長の頭に深く刻まれるに至つた結果、辭表は提出されたものである。勿論單に之だけにとどまらないで、種々の事情が相重なつて市長の辭職を餘儀なくせしめたのであるが、田中助役の態度がその主因たる事は爭はれない。

堀切市長は就任の當初に於て先づ「明るい市政」を行ひたいと宣言した。之は堀切氏の就任に最も期待された所でもあつた。誠にそれまでの東京市といふものはまるで百鬼夜行の有樣で、その結果が一昨年八月のあの大疑獄事件ともなつて現はれた程である。

堀切氏はだから就任すると共にズバリとそれを言つてのけて「明るい市政」をモットーとしたのである。だから堀切氏は就任してもそれまでの市長の樣に、市政の背後を橫行する「東京市の大御所」と通稱される所の三木武吉、中島守利の門を潜らなかつたばかりでなく、新市長就任後の慣例となつてゐる市會議員の自宅への挨拶廻りも斷乎として爲なかつた。「明るい政治」のそれは第一步だつたのである。そして堀切氏は遂に最後まで三木中島を無視すると共に、從來どの市長もが行つた如き市會の背景――卽ちいざといふ場合には極力自分を擁護する所の市會の背景を作らうとせず、その公政なる「市政」への理想は一步も曲げられなかつたのであつた。所が堀切氏がその主義を忠實に奉じてゐる間に自分の部下には、早くも「市會の背景」を作つてゐた一人があつたのである。之れが田中助役であつた。田中助役の此の市會への降伏もその當初に於ては決して自己の立場を守る爲めの仕事でもなかつたらしい。堀切氏があゝいふ眞面目一方の人であるから、あれでは圓滿な市政の運用は出來ない。一つ自分がよき女房役となつて、市會に堀切派を作つておかうといふやうな眞底を割れば、堀切氏を思ふ情から市會の一部市民會(民政系)の有力者大神田軍治氏と手を握ると共に一方更新會(政友系)の木田義成氏とも手を握つたのである。之は取りも直さず三木中島への降伏でもあつた。

卽ち市民會大神田一派は三木直流であり、更新會は中島の手のまゝに踊る一派に過ぎなかつたからである。

堀切氏の耳は田中助役の策動が傳はつたのは可なり後の事であつた。堀切氏は手を額はして憤慨したさうである。それも自分が一番信賴してゐた田中助役によつてそれがなされたと聞いた時、堀切氏は直ちに市長室に田中助役を呼んで

「對外的な事は以來一切白上君（高級助役白上佑吉氏）に任じますから、貴方はやらないやうにして下さい」

とあの冷靜な人に似合はない强い言葉で言つた。田中助役にして見れば、ヘヘアあの事か、とすぐに判りはしたもの丶少々意外である。自分は何も自分の利益の爲めに市會の一部と通じたのではない。堀切內閣を强固にする爲めに行つた一政策に過ぎぬではないか。

だから之を聞いた時田中助役は顏色を變へて「さう致します」ときつぱり答へはしたもの丶鬱憤は容易に去らない。そこで會ふ人毎に「自分は今まで人間的な情によつて生きて來た男だ。情を解しない市長とは少々肌合が違ふのだ」と啖呵まじりで語つた。それが堀切市長就任後漸く三ヶ月たつかたゝない昨年の七月頃であつた。

堀切市長としては以來田中助役に多少の警戒を加へるより外なくなつた。といふのはその頃市の首腦部會議の結果が一々市會に洩れて仕舞ふ。何事か行はんとすると早速市會議員――それも前述した市民會か更新會の連中がやつて來て

「こんな事が傳つてゐるが、それはおやめになつた方がいゝでせう」といふ工合に。

堀切市長は初め田中助役よりも實は高級助役白上佑吉氏を警戒してゐたのだ。あの男は島根縣知事時代にはポンと辭表を叩きつけて知事を去つて時の政府の度膽をぬくやうな事をつけつけと言つたばかりか、文部省の普通學務局長時代にも內務省と一喧嘩したまるで爆彈のやうな男だ、と思つてゐたらしい。所がその白上氏は市長の方針にすべて贊同してその方針通り仕事を進めて行くばかりでなく何事も市長に相談してから行ふといふ工合なのに、肝腎の――堀切氏にとつては――田中助役は一々自分を裏切つてゐる、それ以來といふもの、田中助役にはなるべく物事を相談しない樣になつた。

かうして堀切市長と田中助役との間に掘られた溝は益々深くなつて行つた。所が今度は田中助役と白上助役との間も事毎に圓滿を缺くに至つた。

卽ち此の二人の間のうまく合つて行けさうにない事は、堀切氏が就任して間もなく氣づいた事だつた。田中助役にして見れば、最初堀切氏（當時復興局長官）から自分に助役の話のあつた時には、話ぶりから行くと自分が高級助役に推されるものと信じてゐた。

所が横合から突然白上佑吉なる人物――官界で爆彈のやうに思はれてゐる男が飛び込んで來て自分の上に座つたのだから、田中助役としては少々面白くない。堀切氏ははつきりと自分を高級助役にするとは言はなかつたが話工合ではまるで高級助役にするやうな口よりであつた。それは信義を裏切るものであるといふので、此の鬱憤は相當强かつた。

堀切市長もそれを知らぬではなかつた。堀切氏自身としても初めの考では田中氏を高級助役にする考へであつた。所が時の警保局長橫山助成氏から、是非白上氏をといふ話があり、それに田中氏の高級助役では少々心細さを感じてゐたのであつた。然し田中氏の心

に藏された不滿を推知した堀切氏は、從來の慣例となつてゐる時務局、電氣局の所管を高級助役に持つて行かないで、特に田中第二助役の所管とし、白上助役には

「君には對外的な事を引受けて貰はねばならぬから」と言つて慰めた。そんな事の外に性格的にも二人は一致する肌合ではなかつた。そこへ持つて來て市會議員の中にも白上派と田中派とがいつの間にか出來上つた。白上派は市民會の反三木派の一部と、民政クラブ（堀切市長擁護派）とがつき、田中助役には前記の三木中島の直流が之を支持した。田中派は同時に反堀切派でもあつた。

二

此の二助役の反目は日に日に熾烈となり、昨年の九月頃はその絶頂であつた。田中助役の如き

「白上君の行く席には私は行かない」

といつて宴會なども同席する事をさけた。然し此の二人を列べて見ると、そこは矢張り白上氏の方が人物が少し大きい。そこで白上助役は之が引いて堀切内閣のひびとなる事を恐れて、或日田中助役の部屋に出掛けて行つて、圓滿にやらうぢやないかと提議した。田中助役は表面極めて穩かに之を迎へ二人は一旦手を握つたのであつた。

東京市役所に三十年も勤めた見山收入役が辭職した後任を誰にするか、といふ會議が昨年十月の市長室で開かれた時、所管助役の田中氏は立所に「主計課長の大里常弘を推して貰ひたい」と申出た。白上助役はその時

「大里君は市に在職年限が餘り長くない樣だが市會の方は大丈夫か」

といふと田中助役は

「それは私が引受けて大丈夫だ」と答へた。

所が昨年九月十七日の市會に提案した結果は大里氏は市會から一蹴されて仕舞つた。之は大里氏個人に對する反對——たとへば在職年限が短かいとか、人物が練れてゐないとか——も力強かつたが、一つは市會書記長石橋政治氏が收入役たらんとして市長の推薦を受ける事が出來ぬ腹癒せの策動も與つて力があつたらしい。

市會は多數を以つて市長の提案たる大里案を葬つたが、その時の田中助役の捨て科白が又新たなる敵を作るに至つた。田中助役は大里氏の收入役が市會で一蹴された日、新聞記者團に向つて

「ナーニかすり傷くらゐなもので、之だけで辭職する程の問題でもないさ」と言放つたものである。之に憤慨したのは第三助役廣瀨久忠氏であつた。廣瀨氏は官公吏界に珍しい生一本なそれで相當にしつかりした頭腦の持主で堀切市長は誰よりも此の廣瀨氏を信頼し、廣瀨氏も又づけづけと市長に苦言を呈するといふ風で俗に言ふ竹を割つたやうな人物である。だから田中助役が市會の一部と策謀してゐるといふ事に誰よりも憤慨したのは此の廣瀨助役であつた。そのムシヤクシヤしてゐる所へ、田中助役が、かすり傷位だといふ放言を聞いてカンカンに怒つて仕舞つた。

「かすり傷とは何だ。堀切さんがあんなに心配してゐるのにそれも考へず呆れた放言だ」

と卓をたゝいて憤慨した。

收入役問題は堀切内閣に相當に祟つてやつと今年の三月三十一日の市會で、市長の推薦した小木千丈氏に落ついたのであるが、小木氏（當時副收入役）の推薦にも田中助役は反對

で、初めて之が提案された昨年十二月二十七日の市會當日、いよいよ小木氏收入役推薦の件が市會に上程されると田中助役はわざわざ理事者席を蹴つて議場を去つて仕舞つた。

昨年の十一月堀切市長は區長課長の人事異動整理を行ふべく、首腦部會議を開いた事があつた。堀切案によると相當廣範圍の異動であつたが、その中に田中助役の腹心である大里主計課長土生經理課長の區長案が含まれてゐた。之にも田中助役は猛烈に反對し、「もし實行なさるなら私は辭職する。第一財政計畫の新增税案がまだ市會を通過してゐない今日此の二人を持つて行かれては、財政計畫の上に非常に支障を來す、然し財政計畫が市會に承認された後であれば何事も言はない」と述べた。此の反對理由には、相當の根據があつたので白上助役も田中助役の主張に贊成した。依て此の人事異動は遂に當分延期といふ事になつて仕舞つた。そしてやつと去る四月堀切市長の斷行を期してゐた人事異動は行はれた。此時も堀切市長が日本クラブで先づ白上助役を呼んで自分の案を見せると、白上氏は「我々がいろいろの注文を出し市長がそれを一々聞いてゐたのでは人事異動などといふ事は出來るものではない。だから私は默つて市長案に贊成します」と言つたが、更に田中助役を呼んで此の案を示すと、田中助役は「之はまるで反對黨の人事異動と認めます」と一言言つてさつさと日本クラブを去つて仕舞つた。堀切市長は翌日之を發表する積りでゐた所憤慨して市役所に引上げた田中助役の口から直ちに外部に洩れ、猛然として區長留任運動が起つた。此の區民の留任運動には堀切市長も可なり悩まされ、中には「市長を即時やめろ」と怒號する者まであつたが、忍耐強い市長はじつと之を堪へはしたものゝ、心中甚だ穩かでなかつた。

三

昨年十二月の市電爭議の際も實は堀切内閣は今にも投出されやうとしたのであつた。即ちその解決の爲め調停に入つた丸山總監の解決案なるものは市側にとつて可なり屈辱的なものであつた。之は當時の狀勢が極めて險惡であり、組合側の結束が非常に強かつたので、丸山總監としてはこれ位の解決條件でなければ到底收拾する事が出來ないといふ見込みだつたのである。即ち年の暮れではあり、交通激甚を極めてゐる最中であるのと東京交通勞働組合の團結力は相當に強かつたのである。そこで罷業中の日給は支拂ひ、馘首者は復職さすといふ組合側にとつては極めて有利な解決條件だつたのである。

之で爭議は一應收まりはしたものゝ收まらないのは覓電氣局長である。自分のやつた馘首者を復職させられ、その上爭議中の日給を支拂はされては電氣局の顔は丸つぶれではないか。丸山も案外馬鹿な解決をやると言ふので即日辭表を堀切市長の手許に提出した。

所が無條件に丸山總監に一任した責任者は堀切市長である。(もつとも首腦部會議の席上には覓電氣局長も同席して一任する事に異存はなかつたのであるが)もし覓局長がやめるのであれば當然堀切市長も辭表を提出しなければならない。やめる事に未練はないがまだ財政計畫は市會の承認を經てゐない。そこで極力覓局長の留任を勸告した。市會からも留任勸告委員が擧げられるし、覓局長に對する留任勸告は各方面から起つた。覓局長も「之

が市長に累を及ぼすやうでは自分の本意でないから」といふので、やつとその辭表を撤囘した。

かういふ風に田中助役と堀切市長、田中助役と白上廣瀨兩助役との間が全く疎隔しては圓滿に市政の運用は出來ない。現に去る四月下旬の市電罷業に當つても、市長は毎日之が對策を協議したが、田中助役には一つも相談しなかつたと言はれてゐる。それに田中助役の態度もよくなかつた。寬電氣局長以下全電氣局員が四月十四日以來電氣局に泊り込んで罷業に備へてゐるので、堀切市長はもとより白上廣瀨兩助役も度々電氣局に行つて種々の協議をしたが田中助役は一度しか顏を出さなかつた。現に五月二日、罷業中首腦部として働いた篠田八十八、山下卯三郎君等二十餘名が市役所に來て市長に會見を求めた時、市長は日本クラブにあつて總辭職の相談中の爲めに田中助役が代つて會見したが、從業員側から

「今日解決條項として新聞に發表されてあるが、あれは眞實か」

と訊すと、田中助役は

「さあ、出ましたか。實は私は少しも知らない」と答へた。其頃既に解決の爲めに條項は各車庫に張出してあつたのである。それを主管助役たる田中氏は全然知らなかつたのである。從業員側では更に

「只今出た號外によると堀切市長は今日午後辭表を提出すると書いてあるが事實か」と訊くと

「それも知らない。何にも相談を受けない」

と答へた。その返事も眞實だつたのである。

四

かういふ風に市理事者間の間には何等の連絡統一もなかつた。そこで先づ嫌氣をさして來たのは白上助役である。白上助役は昨年十一月以來腸カタルに惱まされてゐたが一月になると病狀はどうも快方に向はないので去る二月突然市長に辭表を提出して辭職せんとした。堀切氏は非常に驚いて早速白上氏の自宅に飛んで行き、極力留任を希望したがその席上「自分ももう長い事はあるまいと思ふから、其時一緒にやめてほしい」と言つた。そこへ持つて來て市會各派からも留任勸告委員が擧げられるといふ始末で、白上氏も遂にその辭表を撤回した。所が次には廣瀨助役が本年の四月一日になつて辭表を提出した。廣瀨氏はもともと就任の最初に於て「自分は一年したらやめる」といふ事をはつきり斷つてあつた。といふのは廣瀨氏の市役所入りはその親戚一同から猛烈な反對を受けたのみでなく、廣瀨氏の親戚關係の人が東電やガス會社の重役中にあり、此の兩會社と東京市とは利害の立場で對立してゐるので、廣瀨氏自身苦しい立場に立つ事があるかも知れないといふのが親戚一統の反對の理由であつた。それに廣瀨氏は復興局にゐてもう少しといふ所で勅任になれる、何を好んで東京市のやうな面倒な所へ入るか、と友人までが廣瀨氏の東京市入りに反對したものである。

所が廣瀨氏の「自分は堀切さんから來てくれと言はれればそれを拒む事が出來ない。ともかく一年だけでも堀切さんに義理を盡す」といふので、就任したのであつた。

堀切市長にとつて廣瀨助役は最もよき補助者であつた。廣瀨氏位よく堀切氏の全てを知つた人はなく、又此の位最もよき意味に於て

の忠實なる人はなかつたと言つても過言でない。その廣瀨氏が急に辭表を提出した時、堀切氏は一葉落ちて天下の秋を知つた感があつた。その頃まで堀切市長の市政に對する熱意はまだ燃えてゐたのである。ともかく自分の理想は完全とは言へないまでも、着々と實現してゐる、輿論は自分を支持してくれる、こゝで倒れてはならないといふ堅い決意が堀切市長の心奧に躍つてゐたのである。

所が廣瀨氏の辭職は急に堀切氏にしみじみと一年間をふり返らせたのである。

ともかく堀切氏は氏の就任の意義とさへ言つた財政計畫も市會で承認されて確立した。收入役問題も片がついた。其他の新規事業もまだ手をつけてはゐないが大體の計畫は樹つた。しかも政府の非募債方針が少しでも緩和されない以上、新規事業も當分手をつける事が出來ない。自分はともかく仕事をして來た。もうやめてもさう心殘りはない。といふ考へがだんだん堀切氏の頭の中に擴がつて行つた。其上堀切氏の健康も多少害してゐた。四月初めからといふものは、堀切氏は每夜のやうに不眠に苦しめられてゐた。

自分は餘りに疲れ過ぎた。さう堀切市長は友人の大塚警保局長や丸山總監によく洩らしてゐた。相當にいや氣がさしてゐる所へ突發したのが、先般の市電罷業である。

罷業は二十日から初まつて漸く二十五日に終熄した。此の問題の起つた爲め堀切氏は急に之だけは解決しておかなければならないと強く決意した。そしてあの強氣の覺局長が二日に渡つて百五十二人を馘首し、第三日目に更に百人ばかり馘首しようとした時、堀切氏は極力それをとめた。解決を一層困難にするからである。所が四月二十六日　即ち罷業の終熄した翌日覺電氣局長は堀切市長の手許に辭表を提出した。理由は「職務上自分の執つた態度に誤りがあつたとは思はないが、ともかく二度も罷業を起し、更に多くの人を解雇したのだから自分もやめる」といふのであつた。其時堀切市長は

「自分も近く辭職する事になるだらうから、その辭表はそれまで待つて貰ひたい」と言つてともかく辭表を引込ませた。そして極力早急に解決をつけるべく努力し、先づ馘首者百五十餘名中から百名位を復職させたいといふ意嚮であつた。之は覺電氣局長自身も百名とまでは行かなくも多少の復職者を出す事はやむを得ないと思つてゐた。

所が四月二十九日開かれた市會全員協議會――それは全員協議會が員數が足りなくて有志中合會となつたが　の席上、大神田軍治氏の提案により一、馘首者を復職せしめざる事。二、罷業中の日給を支拂はざる事其他を希望として決議した。之は希望ではあつても市理事者の執行權にまで立入つたやり方である。之で市長の腹の中で考へてゐた馘首者の復職も出來ない事になつた。そこで此の「希望」の範圍內で急速に覺局長と共に解決案を作り、之を五月二日に發表すると共に堀切氏はその日辭表を提出したのであつた。

堀切氏の辭職の原因は、その第一は部內の不統一にあつたが、その外に健康を害した事、市會一部の絕えざる策動に對するいや氣、等も與つて力があつた。

辭表提出の日、堀切市長は市長室に集まつた新聞記者市議等に在職中の感慨を洩した後しみじみと「全く疲れました」と意味深い一語を洩らした。

健康法流行の批判

正木不如丘

一

醫師の醫學的知識によつてなされる診療行爲は、それが理學的であるにせよ、又精神的であるにせよ、とにかく所謂醫療行爲である。若し醫師に非ざるものによつて、診療行爲が實行さるゝ場合は、對象が他人であるにせよ、自身であるにせよ、それは醫療行爲でなく、たとひそれが内容的に醫療行爲……………醫師によつてなさるゝ、診療行爲……………と全く同一のものであつても、それは醫療類似行爲である。此言葉の裏を云へば、醫師に非ざるものは、絶對に醫療行爲をなさないと云ふ事である。

日本の法律に於ては醫師に非ざるものゝ診療行爲を禁じて居る。此事は法文に厳として規定されてあるが、然し診療とは何ぞやと云ふ點になると疑義がないではない。常識的に觀れば患者を診療治療するのが、醫療行爲であるが、診療とか治療とか云ふ言葉が既に曖昧である。

今醫師に非ざる個人が下痢を起して、下痢どめの藥品を藥品店で買ひ求めて、自ら治療したと假定する。或は又一般家庭に於て小兒が時々腹痛を訴へた時に、其母親が蛔蟲驅除藥を小兒に與へて、大成功を收めたとする。此場合の行爲は醫師の手によつて行はるゝ治療行爲と内容的に於ては、殆んど區別し難い。かゝる場合の行爲は日本の法律に於ても一向罰せらるゝ事がない。唯同樣な行爲を習慣的に一般人の需めに應じて行つた場合に於ては、醫師法違反として罰せられるのである。此點から觀ると醫學的教養のある或限られた人格に對して、國家は醫師たる資格を與へて、その人格のみに一般の需めに應じて診療に從事する事を許可するのであつて、かゝる人格の診療行爲を私は醫療行爲と云つた事になる。

醫學的教養のある人でも、醫師法の命ずる所によつて醫籍登錄をしなければ、醫療行爲を行ふ事は法が禁じて居るし、又他方醫學的教養の有無を論外として、一般の需めに應じさへしなければ、診療行爲を行つても、一向罪に處せられはしない。況んや一般人が治療法や保健法を發明工夫する事は全く自由であり、その發明工夫が自身や家族や又は知友間に實驗する事は何等法に觸れはしない。脚氣で足が腫れた兒子を見て、倒しまにつるして置けば水が全身に動いて行くと考へて、それを實

行しようと、又は脫腸の我子は腸が長過ぎるのだと錯誤して、鋏で脫腸して居る腸部を切除しようと、その行爲は醫師法違反になるべきでなく、當然來るべき惡結果は、傷害罪として問題になるだけである。若し醫師がこんな治療法を講ずれば、業務上の過失として遙かに重く罰せらるゝであらう。要するに國家は國民全般の保健を希望するが故に、一般人が當然權利のあるべき診療行爲を、國家が適任であると信ずる特種人だけに公けに、許可して居るのである。その特種人が醫師と稱し、彼の行ふ診療行爲を醫療行爲と私は云つたのである。

二

醫療行爲が如上說明した行爲とすれば、私が今問題にせんとする醫療類似行爲と云ふ言葉には、二樣の意義がある事になる。第一は醫師に非ざる人の行ふ診療行爲であつて、內容的實質的には醫療行爲の一部と殆んど異らぬものである。例へば先に述べた我子に行つた母親の蛔蟲驅除法の如きものや、脚氣に對する胚芽米或は半搗米療法の如きものである。第二の意義では醫師たると然らざるとを問はず、一般人の行ふ醫療行爲と內容的に類似した診療行爲であつて、理學的のものとしては、溫泉療法光線療法等の如く、精神的のものとしては、催眠術大靈道氣合術等の暗示療法であり、又化學的には種々の藥療法であり、又科學の種々の範圍にまたがるものとしては、所謂自然療法とか西式強健術とか、手のひら療法とか、その他枚擧に遑がない。

私は先づ右に述べた二種の醫療類似行爲施行の狀況を展開して見よう。

第一種に屬するもの、卽ち醫師に非ざるもの、醫療行爲………內容的の意味に於て………の中、第一に注意すべきは所謂家庭治療又は素人療治である。今日に於ては檢溫器が持たぬ家庭は餘程智識的に低級な家庭であつて、大抵の家庭に於ては、檢溫器とアスピリンとヒマシ油と脫脂綿と沃度丁幾は常備してある。オキシフル繃帶がカルモチンアダリンの類と小箱の中に同居して居る。月の初日にマクニン錠を規則として飮まされる小兒が小學生の半數近からんとして居る。此事實は文化的家庭の一種の權利であり義務であらう。誠に醫學の家庭化として私は祝福する以外云ふべき事がない。唯茲に一言を費すべきは、醫學の一般化が直接診療の一般化であつてはならぬ事である。診療は出來るだけ醫療行爲でなくてはならない。醫療行爲と醫療類似行爲の限界が出來るだけ交錯しないのが理想的である。此種の意味の醫療類似行爲の範圍が狹ければ狹い程、理想に近い。一般家庭が自らの醫學的知識を過重視する事が、危險の窺ふ間隙に外ならない。

次に第二の意味での醫療類似行爲は、醫師が醫學的教養から出發して行ふ診療行爲と、一見區別し難きものでありながら、實は醫學的根據の不確實な診療行爲であつて、醫師法から見てしば〳〵疑義の起る可能性のあるものである。例へば一種の暗示療法とも云ふべき催眠術は、專門の醫師が醫學的良心によつて行ふ場合が時としてあり、之れは立派な醫療行爲であるが、醫師に非ざる個人が催眠術を治療上に利用する場合は、彼が醫師に非ざるの理由から醫療類似行爲と認めらるゝのみなら

か、彼が醫學的教養…………が不十分である點よりして、醫療類似行爲と認められる事になる。今假りに蟲様突起炎の患者があつて廻盲腸部に激痛を訴へて居るとする。患者の訴へつゝある激痛は、醫學的に云へば疾患の本態ではなく一つの自覺的徴候である。醫師も時としては此激痛を疾患の一徴候と認めながら、此激痛が患者の一般症狀を增惡せしむるのを思つて、鎭痛劑を投與する事がある。が、かゝる場合には醫師は常に激痛が蟲様突起炎の一徴候に過ぎぬ事を忘却しはしない。然るに醫師に非ざる一催眠術師は、先づ患者の訴へつゝある激痛を鎭靜する目的で、疼痛不感の暗示を與へる。其結果は激痛は消失し患者は輕快を覺へるであらう。結果に於ては醫師の與へた鎭靜劑と殆んど選ぶ所がない。が兩者共に對症療法であつて、疾患の本態とは無關係である。醫師は彼の醫學的智識の命ずる所によつて必要に應じて、切開手術に移行する時機を失せざるために緊張を怠らぬが、催眠術師は疼痛の鎭靜を疾患そのものゝ輕快と錯誤する事がありがちである。

右の記述で想像せらるゝ如く、醫療類似行爲は主として對症療法に終る可能性が多い。それが卽ち催眠術師の醫學的教養の不足を表明して居るのである。

三

現代は科學文明時代である。科學文明と云ふ言葉は、科學的根據から出發する文明と云ふ意味であるのは云ふ迄もない事であるが、有態に云ふと此科學は主として自然科學を指すものであつて、精神科學は陰にかくされてしまつて居る。一層嚴格に云へば今日は實驗科學の時代であると云はなくてはならない。實驗的根據のない科學は、科學としての價値さへも輕んぜられて居る。治療範圍を狹くして醫學に就て云へば實驗から出發した且又理論的根據の確實にあらざる治療は迷信の一語の下に葬り去られる時代である。經驗的に有效であるのを承認せられたる藥品も、その有效成分が化學的純粹物として分離せられ且又その化學式構造式が確定せられなくては、醫學者の承認を得難い。その反面に於て理論的根據から出發して人工的に形成せられた藥品は、大發見として醫學界から歡迎される。

今此處に所謂靈泉があつて或種の疾患に著效のあるのが經驗的に承認される…………かゝる場合は普通俚俗の噂から喧傳さるゝものであつて醫家は對岸の火視して居る…………事があつても、その靈泉の含有物或は物理的性情が醫學的に證明され、且その有效性が醫學……………現代の……の承認を得るものでない限りは、嘲笑とお座なりの言葉で顧みようとしないのである。

又黴毒の病原であるスピロヘータ族の原生動物が砒素に對する抵抗力の薄弱であるのが、細菌學的に實驗せられ、その實驗的根據から出發して、砒素を含有し然も人體に毒性の僅小な化合物を人工的に合成し、遂にサルバルサンなる合成物を造り出して、之れを驅黴劑として提供する時は、醫家は双手をあげて醫學の發展を祝福する

之れを要するに今日の醫學は、理論と實驗…………それは昨日迄の

自然科學の承認するものであつて、決して明日のそれは非科學的として承認しない……との基礎の上に建てられた殿堂に外ならぬのである。即ち醫家は過去の知識の保持者としては絶大の權力を持つが、明日は未知の世界としては信頼せざると云ふよりは寧ろ顧慮するを恥として居るのである。"Carpe diem" が醫家の信條とさへ思はれる。科學は完全に過去の自然を征服した。そして明日の基礎は今日の科學のみがあづかるべきだと思つて居るのだ。

四

自然科學は自然律を冷靜に批判しそれを正しく理解する科學ではなかつたらうか。そして純正科學によつて批判理解せられた結果を、應用科學は人生の福祉のために利用するものではなかつたらうか。自然律のすべてが今日批判理解し盡されたのであつたらうか、應用科學の基礎たるべき純正科學は既に人智の對象たるべき何物をも遺して居ないのであらうか。

そして科學は自然科學だけであつたのか、形而下だけに學問は止つたのであつたらうか。

一體醫學は自然科學の範圍にのみと〻まる義務があつたのか。精神病學は醫學の一分科ではなかつたのか。醫學の對象たるべき人間の生活現象には心理現象はとりのけられて居たのだつたらうか。

私の右に掲げた問はすべて「否」で答へられるのだ。その「否」をいつともなく忘却して居た日本の醫家が今にして醫療類似行爲の流行に憤慨する權利があるだらうか。

人間は生きて居るのだ、心があるのだ、認識の門戸の五官を賦與されて居るのだ。人類は疲勞せざる享樂の探求者だ、と云ふ。そんな事を病者は感ずる餘裕さへないのだ。苦痛を除去したいのだ。苦痛が人生を暗くして居るのだ。手段は問題でないのだ、とにかく苦痛を回避したいのだ。

かう病者は叫んで居る。俺達は醫學のための實驗動物ではないのだ。醫學の進展はゆつくり希望する時期がある。現在は苦痛を除去したいのだ。醫學であらうがおまじないであらうが迷信であらうが、苦痛さへなくなればい〻のだ。

其處に醫療類似行爲流行の受動的原因がめざめて來たのである。醫學はまだすべてを知つては居らない。それは事實である。癌の完全な治療法を知らない。結核の免疫療法を知らない。知らざるを知らずとなす、即ち知れるなり、とは此場合大聲で云ふのは差控へたい。が醫學のまだ知らない所の多い點が又、醫療類似行爲流行の一因をなして居る事も否定出來ない。人智の知らざる何物かゞ存在する事が、醫學の範圍外の治療行爲の存在價値を受動的に高めて居るのも事實である。

遠慮勝ちに、醫學もまだ不十分の所があります。それは神樣の助けしかありません、と云ふものもあるべく、醫學の無智は即ち自らの知の結果だと錯誤して、攻撃的の暗示療法の成功を誇るものもあるのだ。

一般に暗示療法の部類に算入すべき、催眠術氣合術大靈道の如きものは、醫療行爲が主として自然科學の領域にのみ立籠つて居る間隙を充た

すものであつて、それ等の術者は偉大な體格と長髪と白髯と堂々たる邸宅とが、必要條件となつて、暗示の效果を完からしめんと努力して居る。被術者の多くは科學的素養に於ては缺くる處多きもので、所謂迷信癖に陥り易き人々なるを例とする。

かう云ふ種類の醫療類似行爲は、實は既に昨日の流行に屬し、時代おくれの感がある。

五

最近坊間流行の醫療類似行爲の二代表は、西式强健術と手のひら療治である。此二種は我々の扱ふ患者の枕頭にさへ屢々その書冊を見る程であり、西式强健術は昭和五年七月十八日百六版（今日は昭和五年五月六日）とあり、手のひら療治には版數が記してないが、出版書店の人の話で、よく賣れますとの事であるから、大分流行して居るのは確實らしく思はれる。

私は此二書を正直に讀了する餘暇を得て、種々の意味に於て興味を覺えたのである。

今日は科學文明時代であると私は云つた。此字義には二つの意がある。第一は今日は科學の發展によつて人類が日々幸福に向ひつゝあるのを指し、第二には現代人は科學文明に眩惑されつゝあるを意味する。後者には尙詳論を必要とする。科學の發展が現代を讃嘆すべき迄祝福しつゝある結果、現代人はすべてを科學的に批判せんとする傾向が著しくなつて居る。そして其反面には科學的の說明に値せず又科學的批判の對象とならざる事相を侮視する傾向が著明である。マルクスボーイはマルクスの說の科學的なる點に眩惑され、主婦は獻立と調理が出來るだけ科學的たらしめて近代臺所を誇つて居る。

かゝる世相に於て苟くも流行を來すものは、すべからく科學的なるを第一條件とする。此意味に於て、西式强健法と手のひら療治は先づ流行を來すべき第一要素がある。試みに前者の目次を通覽すれば、醫學書の如き文字の羅列に一驚を喫するであらう。或は脊柱を圖解し脊髓の解剖を說き、或は液體の表面張力を論ずるが如き、蓋し科學眩惑時代の讀者には申分なき食慾をそゝるものであらう。手のひら療治は之れに比して著しく心理的の記述に重點の置かれてあるのを見るが、尙且つ諸所に自然科學的の記述を忘れて居らない。

かくの如く科學的の說明に記述を集中する事が、現代の世相に適應した所であつて、其處に此二種の治療行爲流行の原因がある。

試みに西式强健法が持つ所謂科學的根據を檢討すれば、その重點は相互には全く無關係な二種の理論から成立して居る。第一はすべての不健康と疾患とは脊椎骨の脫臼又は不全脫臼が原因をなして居るもので、脊髓から分岐する脊髓神經束が、此脫臼又は不全脫臼の結果壓迫を受け、そのために該當する機官に疾患が起ると說いて居る。第二は清水を每日一升乃至二升を飮んで新陳代謝を旺盛にすべしと云ふのである。そして西式健康法は眼目として、脊柱と腸の運動を同時に行ふ事、每日生水を一升乃至二升飮む事、必ず健康になると云ふ信念をもつ事の三項を說いて居るのである。而して此三大眼目の理論的根據を科學的に說くにあたつての巧妙さは、辻說法の如く臨機應變をきはめて居る。

手のひら療治は西式健康法に比較すると、一見その正反對の外觀で裝

はれて居る。神國日本の主義から出發して、專ら敬神の合掌を說き、手掌を神と人との交通點と解し、人智を超越した神意が手掌を通じて人體に及ぶ信念を持つて居る。然も手掌が何故に神人交通を全うするかの說明に及ぶと、突如として物理的根據を附加すべく、光熱電波の如き要するに放射線の性情を說いて居る。

此兩治療法書は可及的最新科學を取り入れる事に於て注意を集中して居る點が共通であり、その點が卽ち流行を來すべき原因である。

世俗大風吹けば桶屋喜ぶと云ふ俚諺がある。大風は街塵を立て、眼病が流行し、三味線を引くごぜが群生し、猫皮の需要が增し、鼠が猫の留守に乘じ桶を食ひ、遂に桶屋の大景氣が來ると云ふ愉快な理論である。此說はいかにも條理整然たる假面を裝つて居るが、實は單純化が如何に途方もない滑稽を生み出すかを嘲つて居るのである。可能性の唯一つのみを念頭に置く事は、詭辯の常套手段である。詭辯は意識的に行はれるものであるが、時として比詭辯と同一の言葉が無意識裡にとび出す事がある。例へば醫學的敎養のなき者が、一友人の水癲癇を起すのを見て異常なショックを受け、そのショックがいつともなく彼の無意識界に確固たる地盤を占めて居るとする。無意識界の事は彼の意識を以ては知る事が出來ないのが當然である。偶大洪水の來るべき長雨の時、彼が「癲癇が流行するぞ」と說き廻つた。洪水襲來の恐怖に襲はれて不安の絕頂に居た村人は、水の上に又病氣かと絕望の底に沈んでしまつた。

私は此大風桶屋律と水癲癇流行とを問題の二書を讀みながら思ひ出した。此書に見らるゝ科學的根據と思はれるものは、實は根據ではなく、目的との間に大きな間隙のある單純なる科學的拔粹であつたのだ。然るにも拘らず此科學的記述を治療效果の說明として引用する事になつたのは、勿論意識された詭辯でないのは信じて疑はないが、著者の無意識裡にある治療效果の確信の力が、意識界では承認され難き一足飛びを敢行させたのである。此承認し難き一足飛びは、兩書の科學的記述と治療效果への導きとの間のすべてに見られる。

然らばかくの如き承認され難き理論的不備があるにも拘らず、かゝる醫療類似行爲が何故に流行を來したのであらうか。それは一部は讀者の科學的智識の缺陷にも責任がある。それよりも尙重大なものがあると私は信ずる。卽ち此一足飛びの間隙を充たすものを兩書は具備して居る。西式强健法に於ては「良くなる、善くなる、能くなる、直る、治る、必ず長生する」のモットーであり、手のひら療治に於ては「シキシマのタナスエノミチ」の言葉が示す敬神の信念がそれである。

以上で私の此一文の目的は終つて居る。最後に私は一言駄足ながら醫療類似行爲流行の社會的功罪を考へて見たい。醫療類似行爲の流行を私は必しも悲觀しないものである。その功罪の分岐點は、要するに醫療類似行爲の內容の程度にあるのであつて、過信と妄信とが醫療行爲を量的に時期的に否定する事さへないならば、醫療類似行爲は到底醫療類似行爲に止まるべく、其弊は恐るべきでない。云はゞ飲酒に比すべきものであらう。飲酒はすべての人類の權利(北米合衆國は自然が造つた國家でなく、人間が造つた國家だから例外だ)であるが如く、保健と治病も人類の權利であり、素質的に飲酒の能不能がある如く、醫療類似行爲も症狀的に能不能があるべく過大の飲酒同樣、域を超へた醫療類似行爲は身を亡すのが當然の歸着である。

百パーセント物語

ユモレスクな話し二ツ三ツ

伊藤金次郎

藤澤幾之輔氏の存在

百パーセント種々相を展望する時、私は、その一夕に、藤澤幾之輔の衆議院議長をかぞへることに躊躇しない。

それは、名議長といふ意味合ひであらうと、或ひは、然らざるとを問はず、兎に角、かれの議長としての存在は、百パーセントものだといふのだ。即ち、特別議會におけるかれの初舞臺を見てをると、近年、著るしく茶番化して行くところの、衆議院の議長としては、まことに、好個のあつらへ向きで、をかしくもないところで、ニタ〳〵笑つたり、引きしめねばならぬところで、紐の切れた古わらぢみたいに、ゆるみ放題、ゆるんだところ、活劇線上に亂舞する衆議院を、そのまゝ象徴するものといつていゝ。

藤澤は、あれで、年少、國事に奔走した頃には、二十五六歳で、縣會議長をやつたといふから、相當、切れた男であつたかは知らぬが、元來が、のん氣な父さん型であり、捨てゝおけば、めしもたべず、萬年床に、もぐり込んでをるやうな肌合ひなのだから、萬事萬端、尖鋭化して行く當代では、奇妙な存在として、大に珍重するに足る。

原内閣を向ふに廻して、野黨であつたころ、大隈内閣の内務參政官をやつたといふ緣故で、かれは、推されて自黨提案の普選案を特別委員會で説明した際、

「時代は、急轉直下したから、選擧權を擴張したい」——と、例の、ユル和口調で一席辯ずると、政友會の委員から「急轉直下とは、どういふことだ」——と、あげ足をとられたが、流石、百パーセントのユルフン先生、少しも

税金の不平

○

前田河廣一郎

普通の市民に對して、國家が負擔させる諸税金のあまりにも搾取的であり、杓子定規的であることは、大概の人が日夕感じてゐることと思はれる。殊に、私達頭腦勞働者に對する税金査定の方法は全く無標準であるとさへ考へられる場合が多い。

○

丸木砂土

收入の多かつた年の税金を、收入の少い年に取られる事は、理窟はともかく、實際上閉口する事が多いので、何とか便法はありますまいか。この便法は寧ろ政府の方が得をする收税の仕方ですから厭ではありますまい。

○

尾佐竹猛

決して不平はございません。

ためらふところなく、言下に「急轉直下とは、たとへば、フズ山(富士山)から、石ころを、ころ〳〵ところがすやうなもので……」——と、答へて、なにがうれしいのか、ニコ〳〵と笑つた男だ。

横着なら、柄にもないと、小づら憎くなるけれど、これが、かれの全部なんだから、一九三〇年のアナクロニズムを代表した百パーセントとしてわれらのヒイキを買ふゆえんである。

由來、衆議院の議長は、少數黨が天下をとつた時の變形議會では、民政黨の森田茂や、政友會の堀切善兵衛なぞ、暫定的人物の起用を見るけれど、與黨が多數を占めた常道議會では、大ていの場合、黨の故老人物を以て、これに充てる慣例だ。

したがつて、政友會内閣の下では、大岡育造にせよ、奥繁三郎にせよ、元田肇にせよ、それ〳〵大臣級の人物が、推されて議長となつたもので、單に、故老であり、大臣級人物といふ點から見れば、わが藤澤幾之輔だとて、なんのへんてつもないが、これを前述の三人者にくらべると、藤澤には、大岡の狡智とつら憎さとがない、奥の梟雄的霸氣と、果敢な手さばきとがなく、更に、元田における閑雅と品位とがない。かくの如くして、かれは、全く、廢業した草相撲が、しる粉屋を開いた如く、徒らに圖體の大を誇りつゝ(?)、甘いところを議場に展開してをるのに外ならない。

近代人は、感觸の清新を欲求し、そして、尖鋭なる理智の陶冶を欣ぶ。——だが、その半面には、ユウモアとナンセンスに、魂の避難所を求めぬでもない。拙者は、かうした觀點から、三〇年の清新なもろ〳〵の舞臺に當面し、ひとり、喜劇線上を躍るわが衆議院に、藤澤君の如きユウモアとナンセンスな人物を議長に獲得したことを、百パーセントものとして、魂を洗はして貰つてをる。

一政客とデパート・ガール

代議士K氏は、中國筋も裏日本に近い選擧區から選ばれて出てた古い地方政客だつた。

富裕な村落のお庄屋様といつた家柄で、道行く村民や役場の衆から受ける急角度のお辭儀と、程近いS町に圍つてある花柳界出身の外妾が、おかれ故にペコ〳〵お追從とには、つく〳〵飽滿し切つたといふ贅澤者だつた。

武蔵野は、月、草に出て、草に入るといふけれど、富裕で、地方的門地もあり、おまけ

○

白柳　秀湖

一、所得税は實際收入のあつたものから取るのですから、税率が苛酷であるか、ないかは別として、他に問題はないと思ひます。唯、常收入と臨時收入とを同じ方法で徴收するといふことは無理だと思ひます。臨時收入は貧乏人の生活にとつて燒石に水のやうなものですから、税率もかへて欲しいが、それがならぬものなら天引きにして貰ひたいと思ひます。

二、家屋税の取方は全く無茶です。家屋の大小、宅地の廣狹は本來その人の收入に關係のないものであり、實際關係のない場合が頗る多い。それを是までの税金に關係なく、一定の方法で十倍にも二十倍にも引上げるといふことは全く暴政であると思ひます。

三、税務署が文筆生活者の收入を査定する場合、評論隨筆家と、小說家との間にハッキリと區別をして居てくれることは、實によい理解であると思ひます。同じ文士といふので、小說界の大家と吾々とを同じに取扱はれることはトロール船の十艘も持つてゐる大漁業家と蜆掘りとを一緒に考へられると同じて

に、大井川の下りうなぎみたいに、脂切つたK氏は、五十に近いことしまで、殆んど、肉より出で、肉に入るといふ生活だつた。

さうして、昨今、漸く、氏の感激は、皮膚のたるんだ白粉稼業の女性に失せ去つて、なにか、かう、強い刺戟と潑剌とした感觸だつた。——晩食後、第二號の膝に肩肱突いて、たべのこりのザルそばみたいに禿げて行く頭髮に手入れをさせてをる時、氏の胸中を、フト、かすめて行くのは、赤い灯、青い灯の大阪であり、丸の内街の鈴懸けの下、みだらに吹くそよ風に、ズロースまでものぞかせて行くといふ、フレツシユな丸ビルガールのはち切つた胸や、すんなりした脚や、ふつくらした二の腕だつた。

K氏は、かうして、夢に銀座や丸の内を描いて、東京進出のため、ことしの春、榮譽ある普選第二次戰の代議士となつた。ほんとうのことをいふと、氏の場合にあつては、「正直か不正直か」もなければ「景氣か不景氣か」もなく、況んや「濱口か、犬養か」なぞ、どちらでもよかつた。——現代代議士氣質を、百パーセントに象徵した勇敢な出陣だつた。

ところで、かうして、短期東京生活を開始した氏には、忽ち、惡友（氏にとつては、鴨がねぎを背負つて來た善友）が出來た。

——どうだ、こツそりと行かうか——と鴨ねぎ氏。

——變りだねでもあるんかね——とK氏。

——モガてえ奴さ、カフエヽ。

——ホウ、モガツて、新聞や雜誌でやかましい、あれのことか——と、K氏は、脂切つた小鼻を、一寸、くん〳〵鳴らしたもんだつた。

——モガもモガ、君、絕對祕密なんだがね××デパートの賣り子を、どれでもこれでも採擇に任せるといふんだからな——と、鴨ねぎ氏も、舌なめづりをした。

その夜、兩氏は、小石川の××橫丁の、表づくりはしもたやで、內部は、田舍育ちのK氏には、これこそ、ニユーヨークにありと聞くナイト・クラブとは、こんなものかとおもはしめるほど、華麗で情緒的な洋式設備だつた。

それから？　來た女性？

K氏が、今まで、かゝり合ひつけて來たところの、白粉と寢不足とにたゝられた、不健康そのものみたいな夜の女とは違つて、テニスをさせたら悴よりも上手であらうし、脛を出したら、越前蟹よりも長いであらうし、シユミーズをとつたら、鎭守の宮の白鳩の胸よ

す。此理解は永く失はれぬやうにして欲しいと思ひます。

○

高田義一郎

一、原稿料の如き不定收入に對しては、從來の如く課稅しない方が良いのではありますまいか。課稅は前年度の收入に對してと云へば御尤もに聞えますが、納稅の時期に無收入で納められない事が度々あります。と云つて金の入つた時に、稅金丈を積立てる事は文藝家には出來にくい事と思ひます。

二、納稅を奬勵する方法として、何年か續けて滯納しない者を表彰したら如何でせう。納稅は當然であつても、當然なる忠孝にも表彰方法がある以上、之にも表彰をすべきでせう。滯納を罰する丈では片手落です。

○

小汀利得

國稅地方稅を通じてわれ〳〵勤勞所得階級は遠慮なく追求せられるに反して、財產收益によつて食べてゐる連中、特に東京郊外などの地所を貸してゐる不勞所得階級に對する徵稅が寬大緩慢である點が癪に障ります。之に

りも、もッと／＼やはらかさうな、さうして氏の母屋の庭に咲いた椿の花よりも濃い唇を持つたところの氏の過去の認識裡には、これまで、全く沒交渉な存在だつた。

氏は、一と目で、ワク／＼とした。さうして、廉月あたまを、手早く無意識に、一本一本並べつゝ、大に、威容をとゝのへると共に、忽ちその女性を探擇した。

その翌朝？

その翌朝、すッかり馴染んでしまつたK氏の女は、どてら姿で、ベッドに腰かけた氏の膝に、木馬に乘るやう、長い足を捲いて

「あたし、出勤しなくちやならないのよ」——と、朝の化粧をすました美しい顏を、いきのかゝるほどくッつけた。

「で？」——と、K氏。

「だから、すまないけれど、タクシー代をおごッてくれない？　だつて、ゆうべいたゞいたおきまりは、あたしの生活費と弟の學資なんですもの」——と、女は、一寸、顏をくもらせてみせた。K氏は、その表情に、アメリカ映畫の名女優の美しさを思ひつゝ、この間出來たばかりの新らしい五圓札を、——その癖、選擧運動員には、一圓でさへ出し惜しんだくせに、威勢よく、かの女の手に握らせた。

「ありがと、これだけあれば、けさは、××食堂で、ボイルドエッグとパンとさうして、コーヒーがいたゞけるのよ。では、さようならまたね」——で、かの女は、ゆうべに反して遙かに、素人じみた物ごし格好で、そゝくさと出て行つた。

それから？

それから、K氏は、鴨ねぎ氏と共に、そこで、朝めしとも晝めしともつかぬ御飯を、湯豆腐で、一杯やつて、政黨の本部へ行く途中そつと、鴨ねぎ氏とわかれ、

「あいつ、あゝいふけれど、ほんとうに××デパートの賣り子なんだらうか」——と、午後一時から開かれる本會議に、勢ぞろひを院内幹事から申しわたされてをるのも、すッぽかして、××デパートの、あちらこちらを見て廻ると、居た、居た、居たではないか。

さうして、かの女は、忙しさうに、化粧品部に××デパートの職服を着て　働いてゐたのだが、ちらりとK氏を一と目見たきり、K氏が、これでもか、これでもかと、眼で合圖しても、かの女は、どこまでも無關心、まつ毛一ッも動かさず、全く、無緣の田舍おやぢを迎へる華やかなデパートメントストアの一賣り子といふにしかすぎなかつた。

國家や地方公共團體の損失の點からのみでなく、自己の努力によらないで不當の利を得る點に於て、社會主義に反するのと、もう一つこの不勞所得によつて、不正又は不良の消費が行はれて居る點が不愉快で堪りません。之れは現税制の下でも或程度まで矯正出來ますが、希くは、税制を至急改正して不勞利得は全部國家若くは地方公共團體に收めて貰ひたいです、それさへ行はれれば私は私の所得税をもつと餘計拂つても不平はありません。

○

上司　小劍

税といふものは、もちろん、生活費のあまりを持ち寄る性質のものではありませんから、公平にさへやつてくれるなら、いかに苦痛を忍んでも納むべきものは必らず納めます。それが甚だ不公平で、大富豪の大脫税といふやうなことを別とするも、私の手近かな友人にだつて、私よりも收入の多いものが、私より納税が少なかつたり、また私よりも收入の少いものが、私より税を多く納めたり、全くめちや／＼だから、いやになつてしまふのです。所得税に關する罰則は、これまで殆と一度も適用されたことがないやうですけ

てれて、デパートを出たK氏は「あれでなくちやいかん。あれでなくちや、おもしろない」――と、むやみに、ひとりで肯定した。

田舎の五十男を喜ばす猟奇的な、東京近代情史(?)の百パーセントの一ツ。(以上、K氏の實話)

百パーセントの合理的ユーモア

「婦選」が、この特別議會で、政民兩黨から法律案として提出せられ、内務省も亦た地方聽を通じて、その實測に着手したことは、在來の議會といふ、古き革袋に新らしい酒を盛るようなものであるけれど、男女の權利を同一の水準に持ち上げんとする機運の具體化と見れば、けだし、一九三〇年における百パーセント中の一ツといつていゝ。

だが、「婦選」へ漕ぎつけるまでの過去數年間をふりかへると、牛の歩みも千里に達すの感なきを得ない。

といふのは、婦選といへば、今では、誰しも市川房枝――運動界の人見絹枝と共に男性か女性か、顯微鏡で識別せねばわからぬほど、双方共、グロテスクな風貌姿體の持ちぬしで、もしかしたら、その母親が「房枝や(この場合、絹枝やでもいゝ)もういゝかげんに身をかためて、隣村の杢兵衛どんの娘ツこを、お嫁に貰つたらどうだい」――と、その母親ですら、房枝が女であつたか、男であつたかを胴忘れしてゐはせぬかとおもはれるくらい勇敢な人物――を、先づ、念頭に浮べないものはないであらう。

その市川が、そもそも議會と接觸し出したのは、原内閣の末期で、今は、すつかり田園に隠れた平塚雷鳥と共に、もツぱら、その行動を一にしたものだつた。

私は、その頃、東京日日新聞の政治記者をやつてゐたが、市川君等と偶然に、四谷伊賀町の社會學者で語學者山田先生(婦人評論家山田わかさんの夫君)の許で、知り合となつた關係上、また、議會や政界の動きの消息に縁の遠かつた市川君や平塚君等を、議會に手びきして、その頃、婦人傍聽席の寂しかつた衆議院に、紅(?)點々を現出して、年の若い社會部記者の視聽を欹ゝしめたものだつた。

當時、市川君等の議會への進出は、たしか花柳病を持つ男性へは、結婚を拒否したいといふ法律案か建議案の提出運動でその紹介演説を各派の有志議員に持ち込むけれど、だれもかれも、てれ臭く思つたものか、この足を

れど、故意に所得を隠したり、また、虚僞の申告をしたりしたものは、重い罰金を課せられることになつてゐます。あれを勵行して、どしどし罪人を作つたらいいでせう。法律と強權とによる人類の生活を、私は甚だ不幸なものと思ひ、そんなものに據らない自由の社會を理想としてゐますが、その理想郷に達しないうちは、ある法律なら、盛んに勵行するがよい、勵行しないなら廢してしまふがよいと思つてゐます。それから、文筆業者の不定收入、卽ち原稿料は、明治二十一年かに發布の舊所得税法にあるやうに、『著作物に對する報酬は課税の目的物となすことを得ず』とかなんとか規定して、課税しないことにするのがよいと思ひます。これは我田引水でなく、原稿料や印税なぞといふ薄弱で不定な所得に税をかけるのは、一般的に無理だ、といふ實情をよく知つてゐるからであります。

○

加藤勘十

一、私はまだ、一度も納税告知書による税金を納めたことがありません。従つて私自身自分の租税上のことについて不平を云ふ資格をもちません。

踏むものばかりだつた。

それでも、贊成議員としては、一宮房治郎だの、野田文一郎だの、星島二郎だの、松本君平なぞといふ、多少、さツがりん式人物が參加し、かれらは、同僚から

「貴公等は、女のいふことなら、なんでも贊成するね」——なぞと、下品な嘲弄を受けて

「さうでもないさ」——と、あたまを掻いたりしてゐたもんだつた。

ところで、僕として、一寸、弱つたことは市川君等がいふのに、院內ばかりで聲をあげても、必ずしも目的を達するとは思はない、一ツ、院外運動の首途に、各社の新聞記者にも會見したいものだとあつたので、一日、衆議院構內の新聞記者控室へ案內し、これこれだと紹介したところ、中には、無作法な記者諸君など、當時流行した雜觀でゝ沓く氣になつて

「平塚さんや市川さんは、花柳病保持の男性とは結婚せぬといふけれど、一體、花柳病といふものは、女性には無いものだらうか。テヘヽヽ一ツ明答を拜聽しやうぢやありませんか。そも〱花柳病とは、男が先きに罹つたか、それとも女性を以て嚆矢とするか——」と、まるで、落語家のいふ、にはとりが先きか、たまごが先きかといふやうな口吻を弄して、しきりに、兩君を揶揄したことだつた。

だが、平塚君は、アノとほり、風にも堪へられぬげな風姿楚々女史、失禮なかういふ言辭に、心持ち、顏をあからめて、大きな角火鉢に手をかざし、ゐてもゐたまらぬ樣子に見えたものゝ、市川君と來たら、「さア、どうでせうかね」——と、これを輕く受け流したきり、例の荒削りの容貌を、明るく笑つて見せるだけのことだつた。

後年、婦選獲得運動家としての猛者たる、盛んなる鬪志は早くも、その頃から、兆してゐたかも知れない。

いづれにしても、花柳病保持の男性に對し純潔なる女性は、結婚を拒否し得る法律上の權利を得せしむべしといふ社會運動から出發した日本の女性の政治干與は、一九三〇年において、婦選獲得の具體化まで漕ぎつけたことは、非常な進步でもあり、それだけ、これを受け容れる世の中の耳目も、眞劍になつて來たものといひ得られる。

殊に、最初、女性の意見を議會に取次ぐことを、みだらなものから、われとわが身に恥ぢて、逃げ廻つてゐた既成政黨人が、今や、自發的に、各黨競つてこれを提出し、內務省で

二、然しながら、一般的には小額納稅者に苛酷にして、比較的多額の納稅者に寛大であることに大なる不平を感じます。

三、更に惡むべきは大ブルジョアジーの合法的脫稅行爲に對する追隨的態度であります。

○

小野賢一郎

市外荻窪にゐるのですが、附加稅が無暗に高く夫れも年々高くなるばかりです。納稅するにも遠い役場までわざ〱ゆかればならず幾度も郵便局利用、收稅員出張等の便法はないかと注意しても知らぬ顏をしてゐます。

○

中村吉藏

一、昨年は、稅務署から決定通知書もよこさず、いきなり徵稅されました。或は通知書が途中で紛失したのかも知れないが甚だ不平に感じました。

一、著作家を、他の官吏、會社員などと同樣に、年數によつて報酬が累加するものの如く取扱ひ、所得額を累年加重に見込まれるのも甚だ不平です。殊に昨今の一般の大不景氣

すら、一應、全國の數字的實測に着手したといふことは、なんとしても、日本女性の政界進出への劃時代的な現象でもあり、清新讃仰の時代意識からいつて、百パーセントの收穫といつていゝ。

たゞ、問題は、そもそもの出發が、花柳病に關する云々から生れた「婦選」だと思ふ時、畢竟もの〻創造は、天地創造のむかしから、××器に據るんだらうかと、そこにも、百パーセントの合理的ユウモアを痛感せざるを得ぬ。妄評多謝。

安五郎氏の「怪舌」

「しもの病氣」問題から出發した「婦選」へが、そのプロセスとして、幾分の合理性を持つものとすれば、今、既成政治家の間に、金科玉條の如く吹聽せられてをる普通選擧だとて、その出現の根源を探究すると、安五郎氏の怪舌の生んだ賜物(?)といつていゝであらう。

安五郎氏といふのは、佐々木安五郎のことで、かれは、今、郷里山口縣へ退いて、もつぱら、アル中で駄目になつた衰殘の病軀をいたはつてをるのみならず、今春の總選擧では一候補者のために應援演説に出たもの〻舌が縺れて一語も吐けないため哀れにも傍人をして彼の筆記を朗讀せしめたといふ事だつた。

安五郎氏の場合にあつては、かれの持つ「怪舌」は、全く、軍人が金鵄勳章を大切にし、商人がそろばんを大切にするほど、至寶なものであつたにも拘はらず、全く、駄目になつてしまつた衰殘の「舌」は、かれとして、なんと悲しいことであらうか。しかも、切りとつたところで、スチユウにもならないところの、この一枚の舌が、かつては、日本政治史に一エポツクを作つた「普選」を生み出したとは、なんとしても、百パーセントの漫談味を持つ。

といふのは、一體、日本に生れた普選論は古い昔を問へば、日向輝武や、板倉中なぞが卒先して唱道した明治時代もあるけれど、一時、中絶してしまつて、これが、ほんとうに切實なる民衆意識裡に擡頭して來たのは、大正に入つて八九年――卽ち、原内閣の全盛期からであつた。

當時、人も知るとほり、伊東知也とか高松正道、湯淺凡平なぞといふ國民黨の不平組が犬養木堂の寵を爭ふことに失敗し、何かな更生の道はないものかと肝膽を碎いた結果、院外でポツポツ唱へられてゐた「普選」こそ好題目なれと、恐ろしく荒削りな法律案をでツち上げて、右往左往を開始した。しかし、何分

では、著作家の所得額は非常に減少する筈です。税務署がそれを十分に理解せれば不平はやがて一般的に大爆發するでせう。

○ 松宮 三郎

私の勤めて居ります三越では店員に出したものをそのまゝ申告しますので税金もそれに相當して取られます。當然な事と存じます。從つて不平もありません。

○ 新居 格

附加課率が高過ぎやせぬかと思ふこと。われわれをいぢめないでもつと富豪から脱税を征伐したり、資本課税をかけてくれてもよささうに思ひます。

○ 大山 郁夫

勞働農民黨では左の如き主張を持つてゐます。

一、消費税の撤廢
二、資本利子税の増徴
三、財産税、不在地主税、奢侈税の創設

にも、政界出頭沒頭に素人なところから、兎角、足並みが不揃ひ勝ちだつた。そこへ、忽然と出現したのが、佐々木安五郎で、かれは、當時落選して院外にあり、藝妓がお茶を引いたほど、閑散無聊をかこつてゐた折柄、かれの閑潰し策とそれから政治性とが、百パーセントに躍動を開始し、それからは、恰も、かれが宛然、國民黨不平組の中心人物となり、ある時は内幸町の一旅館の奥深く、ある時は高輪の大堀孝の邸宅に、同志を集めて盛んにかれ一流の怪舌を弄し、とう〳〵六人の代議士を抱き込んで、黨から除名されるまで、事體を紛糾且つ、大ならしめてしまつた。

安五郎も、むろん除名せられたが、しかしかれは、例の怪舌を弄して、除名とは癪だ、黨籍をこちらから放棄するんだと誇稱し、盛んに院外から六人の現代議士を使嗾して、他派の變りだねを糾合し、法律案としての正規の人員たる最少限度の二十一名をまとめ上げ衆議院に提出とまで押し切つて行つた。たゞし、途中、松永安左衛門が署名を取消したゝめ、正規の人員を缺き、哀れ、流産に終つてしまつたけれど、これが動機となつて、次ぎの議會あたりから、野黨各派で、眞面目に普選論を考究することとなり、すつたもんだの揚句、原がクーデター的に敢行した第四十二議會解散——卽ち、「普選の可否」を國民に問くといふ解散の理由となるまでに、急速度で展開し行つたのである。

むろん、理屈をいへば、普選の出現は、歐洲大戰による國民思想の推移がもたらした機運であることには相違ないけれど、しかも、これを具體化すべき一石を投じたのが、一介の彌次佐々木安五郎氏の、閑散除けに出發した「怪舌」の魅力だとおもふと、世の中が百パーセントのおもしろみを加へてくる。殊に、光榮ある「第二次普選時代」だとか、「大衆意識が、議會に反映した第二次普選」とかと、既成政治家が、有頂點になるところを見てをると、こんどは、百パーセントの阿呆らしさを痛感せしめられる。

なに一ツ、かれらが自覺的に大衆心理に觸れたことをしたか。そこへ行くと、たま〳〵ぜうだんから駒が出たにもせよ、安五郎氏の「怪舌」の魅力が、遙かに效果的だつた。

その安五郎氏、前にもいふとほり、病んで今や「舌」がもつれる。

「舌」に生れて「舌」に終るかれ、かれは、全く一枚の「舌」に百パーセントの生命を托した男であつた。

四、所得税、相續税、地租、營業收益税の免税點引上げ、以上の諸税の高率累進賦課

五、戸數割、車馬税その他一切の無產階級負擔惡税の廢止

○

鈴木文四朗

稅務署のやり方といふよりも大藏省の方針は中產階級以下に過重で、富豪、大商人、大會社等には緩やかだ。われ〳〵サラリーメン階級は一錢の所得でも申告し、收入に比し驚く可き多額(と僕は思つてゐる)を取り立てられる、それも好いとして、富豪や大商人などの中には誤魔化してゐる者がザラにあると聞くと、彼らの分まで正直な貧乏人が負はされてゐるといふ氣がして腹が立つ。一體勤勞所得の税などは現在より半分にしてもいゝ。勤勞所得で、我々はたゞ生活してゐるといふ以外に何が出來るか。

○

向坂逸郎

不平の數々一々申述べ得ない程に御座候

若返り

丸木砂土

女奇術師

　久し振で、日本に唯一人の女奇術師松旭齋天勝孃の春の魔術を見た。僕はこの天勝孃の名を少年時代から聞いてゐるから、もう餘程のおばあさんであらう。けれども舞臺に現れたこの女奇術師の豐麗な肉體はどうだ。青い絹張りの箱の中に、少女を二人入れてピルトルを打つと、忽ち一人になつてしまふ奇術は、いつも乍ら更に不思議でもない。けれどもこの黒い幕の前に立つて婉然として笑ふ天勝孃の體こそ不思議である。黒い夜會服から大きく肩を露はし、銀の靴を穿いた片足は、深く裂いた前の裳から膝の上まで白く見せて、その目、肩、胸、足には、日本の女に稀に見る豐饒と放恣があつた。更に番組が進んで、奇術の外の日本の踊りになると、この老ひて益々美しい天勝孃は、自ら金の縫ひの振袖をひらめかし、娘島田に銀の簪をぴらぴらさせて、二十餘名の少女が菊の花を象つて踊る中心に立ち、菊の花の髄の積りで、大陽氣の和洋音樂に合せて、甚だ怪しげな日本舞踊を見せたものである。しかもこの時の天勝孃の可愛い、笑顔と振袖姿こそ、實は千九百三十年封切の大魔術よりも、英國薔薇戰爭哀話大砲の大奇術よりも、この女奇術師にとつては、うれしい得意なものなのではあるまいか。

　水も滴る美さとよく歌舞伎劇の女形が褒められる。けれども其處には決して肉體の若々しさはない。唯白粉が濃いといふ處である。雁治郎の美さも決して若々しい媚さではなくして、これも白粉で造られた力が大事なものになつてゐる。わが女奇術師松旭齋天勝孃のみは、眞に豐饒なる肉體と若さを持つてゐる。同じ年頃かと思はれる川上貞奴のしなびた體とは段違ひである。

　それではなぜ天勝孃のみにこの若さが殘つてゐるのか。これはこの老孃を取卷く二十餘人の美少女がゐるからだと僕は斷言するのである。この少女達に圍まれた天勝孃の賑かな生活は、田中榮三君著の「女優漫談」といふ本に悉しく出てゐる。それではなぜこの少女に取卷かれた天勝孃が、いつ迄も若々しいか言ひ換れば問題は若い娘さん達に接してゐる老人はいつ迄も若くゐられるか、である。それに關する西歐の諸説を僕は研究してみよう。

青春の泉

　若返り法といふものも、いつか日本でも影が薄くなつてしまつた。役者の雁治郎がこの手術を受けたといはれるが、どれ程若返つたか僕は知らない。西洋で最も若返り法の顯著なものは、物語にある「青春の泉」である。これはルカス、クラナハの繪で有名であるばかりでない、多くの中世紀の古い木版畫にも描

かれてゐるが、この泉に浴すれば、老ひたるものは若く、醜いものは美しくなる、といふ傳說は時にも小說にも現れてくる處だ。繪を見るとぢいさんばあさんを車や馬に載せて連れて來て、噴水を中心とする池の中に抛り込むと、向ふ側に泳いだり戯れたりして渡る内に、老人は若者に、醜い女は美人と變じて、面白さうに池の緣に攀じ登つてゆくのである。若返つた連中はもうその邊で勝手な振舞に及んでゐる元氣である。」この「青春の泉」の物語は、どこから起つたか僕には分らないが、十六世紀以後には、「青春の泉」の意味に治療治癒の概念が加つて來て、從つて湯治をする鑛泉の意味に變つてきた。今日ではもうほんの冗談にしか考へられてゐない。

長命術

然しこの若返り法といふものは、畢竟長命術に過ぎない。唯「青春の泉」では、もう一度若い歳に立返るのであるが、これは空想として考へても、年をとつた人が更に長く若い者のやうに生きるといふ事は、空想でなしに實際行はれ得るものとして、昔から隨分その方法があつたやうだ。長壽にしてなほ青春の力を溢らせる方法は、今日いくらでも賣藥の廣告には書いてあるが、さういふ科學的藥物的刺戟でなしに、古くは舊約聖書時代から今日に至るまで、最も多くの老人に悅ばれ、日本と西洋とを問はず廣く行はれてゐる手段がある。それは外でもない、若い女を傍に引寄せておく、といふ方法である。今日の日本でも、若い藝者を可愛がり、若い妾を養つてゐる人はいくらもゐるから、この方法も決して珍しいものではないかも知れない。

ところが老人が若い女を傍に引付けておく事は、遠く舊約の時代に初まるのである。列王紀略上、第一章に曰く

「爰にダビデ王年邁みて老い、寢衣を衣するも溫らざりければ、その臣僕等彼にいひけるは、王わが主のために、一人の若き處女を求めしめて、之をして王の前に立ちて、王の左右となり、汝の懷に臥て王わが主を暖めしめんと。彼等乃ちイスラエルの四方の境に美き童女を求めて、シュナミ人アビシャグを得て、之を王に携きたれり。此童女甚だ美くして、王の左右となり、王に事へたり。されど王之と交はらざりき。」

この列王紀略に描かれたダビデ王の寵妾に就て、最も大事な點はダビデ王が決してこの若く美しいシュナミの娘と交らなかつた事である。王は唯々この娘を傍に置いた丈である。これでなくては長命の藥にはならない。今日の多くの好色老人が、果してダビデ王の故智に學んでゐるかどうかは、僕の知る處でないが、唯若い女を傍に置くといふ事が長壽の爲になるといふ信仰は、實はこの舊約時代のダビデ王から初まつた事であり、この若い娘の民族の名前から、シュナミチズムといふ說が出來上つた。即ち若い人間を傍におくと、その肌から立ち騰る發散物、匂ひ、エマナチオンによつて、老人の肉體は生々とし、若返り、效果ある治癒力を與へられ、殊にそれが異性である場合には、長壽長命の效めあるといふ說である。

この方法を最も研究したのは中世紀で、千七百五十年に死んだ獨逸ミュンステルの大僧正侍醫ドクトル・ヨハン・ハインリヒ・コハウゼンと、千四百九十九年に死んだ伊太利の哲學者で醫者を兼ねたマルシリウス・フイチヌ

スとが、この研究の泰斗であつた。汎く世の中に擴がつたのは、何といつても十八世紀の佛蘭西の華麗時代である。後に述べる樣に、艶態小說家レチフ・ド・ラ・ブレトンヌは「パレエ・ロアイヤル」の中で、その長壽術に關したおもしろい事實をいくらも報告してゐるのでもこの時代の流行は分るやうだ。この華麗時代にはかういふ若い娘を供給する商賈人が出來て、ジユニウス夫人といふ有名な女は、常に四十人の少女を養つて、需めに應じたといふ事である。

ダビデ王

そこでこの長壽法の初まりであるダビデ王の蓄妾について、コハウゼン先生の說を聞くとかうである。

このダビデ王が若い娘を傍に引付けた事には、二つの疑問がある。それはエルサレムにも幾千人の若い女はゐたであらうに、なぜシユナミ人から選び出したかといふ事と、王樣の傍にはアビガイル・アチノア・マアチヤ・ハヂト・アビタル・エグラ等の側妾が實は何人もゐたのに、かういふ女達が王樣の體を溫める事をしないで、なぜ特に一人の少女を連れてこなければいけなかつたか、といふ事である。

思ふにダビデ王に仕へた醫者は、王の爲にごく手入らずの新鮮な少女を選び出し、これを傍に寢かして、その呼吸と體溫によつて王の體を溫め、長生をさせようとしたものらしいが、王の傍に仕へた女は、既に王の子供を生み、今更處女の持つ香氣と健康を缺いてゐるから、これは何人ゐても所要の目的には役に立たない。又この若い女は唯王の傍に臥すといふ外に、身のまはりの細々した仕事をも務めて、朝夕その膚の發散と匂ひと呼吸に接しさせたものである。この點から考へると、かういふ女は餘り小さい子供でもいけないと同時に、是非とも純潔な處女で通さなければならない。これが王の意を動かし意の儘に動くやうだと、王は長生どころではなく、命を縮めてしまふからである。

かういふ若い女の第一條件は完全に健康といふ事である。もし齒が腐り肺が痛んでゐればその呼吸は臭く、全身は溜り水の如く匂ふであらう。さういふ女では傍に寄つてこられてはたまらない。第二の條件は美しい女でなければならぬといふ事である。それは體の均齊がよくとれてゐて、どこもかも完全に發達した、美しい肉體でなければ、王に添臥をする上から見て都合が惡さうである。第三は純潔無比なる處女性といふものである。これはダビデ王の侍醫の最も苦心を要した處で、人相並に手相に通じた侍醫は、イスラエルの娘達を無論選りに選つて、しかも遂に得る事なくシユナミ人の娘に手を延ばしたものだらうと考へられてゐる。その苦心は聖書の文句にも明だ。コハウゼン先生はもし自分がこの七十餘歲の王の爲に、一人の娘を選擇する役目であつたならば、家柄の好い者よりは寧ろ百姓の娘で白い美しい齒を持ち、口中の匂ひの好いものを選んだであらうと言つてゐる。美しい齒は完全な消化を意味し、從つて健康なる血の循環と快き匂ひの發散するもので、シルス王はアスパシアといふ卑しい百姓を親に持つ娘を側に召したが、これは口中の匂ひ恰も甘き蜜の如しとあつて、遂に王妃にまで成つたといふ事である。

ある學者はこの方法を以て、側の女の好い匂ひによつて喚び起される同情愛憐の念と、

し、又ある學者は肉體の接近によつて、そこに目に見えぬ力が發生し交流するものだとも言つてゐる。埃及の古い魔法の言葉に「わが……をかの臍の傍に置き、かの女の手にあるものを我が手に、かの女の口にあるものを我が口に、かの女の體にあるものを我が體の内に」云々といふ文句があるが、これもこの方法かも知れぬといふ人がある。要するに青春と健康と純潔な女の肌の發散物と匂ひが、老人と病人とに對して絶大な治癒と延命の效力ある事は、古代埃及以來今日に至るまで疑ひないものであらう。

長壽の人

　ダビデ王の物語は、遠い舊約の時代だが、實はこれよりも新しく千四百年代にこの若返り法によつて、百十五歳の長壽を全うした人の大理石の石碑が羅馬で掘り出された事があつた。それはボロニアの骨董商の手にかかつて世に現れたが、その碑の表には「若い女の匂ひの發散によつて、百十五年と五日の長壽を全うしたるクロヂウス・ヘルミプスこれを建つ。この長壽法には驚かざる醫師とてなし」云々の羅典字が刻み付けてあつた。これを拾ひ上げて問題にしたのが、前に述べたミュンステル大僧上の侍醫コハウゼンで、千七百八十三年にこれに關した書物を出して、世の中を驚かした。

　コハウゼン先生の說く處によると、この碑文はヘルミプス自身書いたものでなく、その死後に誰かよその者が建てたのであらうと斷定し、或は又骨董商の惡戲によるものかも知れぬとまで言つてゐるが、コハウゼン先生はこの石碑の文字からヘルミプスといふ人間の生活を想像して、次の如く言つてゐる。

　このヘルミプスを取卷いてゐた若い女達といふのは、まだ人形や玩具を手放せない位の小さい娘達で、胸の乳房さへまだ膨んでゐない、從つてかういふ女達を相手にした處で、決して妙な下心を挑發するやうな事はないらしいが、然しかういふ娘達もいつ迄も子供ではゐないのだから、ヘルミプスが例へば六十の歳から數へても、百十五になるまでには少くとも五年に一度はこの女達を更代させなければならない。さうしてみるとヘルミプスは餘程金持の貴族のやうにも察しられるが、或は寧ろ羅馬の女の孤兒院か女學校の院長たり村長なりであつたかも知れない。かういふ少女を相手にする商賣の男は、いつも長命である例が多いからである。コハウゼンは巧妙な筆を以て、ヘルミプスの日常生活を想像して書いてゐるが、その中には若い娘達が雪のやうに白い頭髮を梳けづり、長い白い髭を揃へ、柔に頸や肩を布で磨擦し、或はこの娘達と相共に遊び戲れ、人形を玩び、一緒に歌を唄つたりして、もしヘルミプスが外へ行かうとすると、娘達は手で抑へ、接吻で引き戻し、外から歸つてくると、飛び迎へ、接吻し、短い腕で肩を抱き、この老人の膝に乘り、肩に乘り、追ひかける等の戲れをして、老ひの日を忘れたものらしい。又このヘルミプスの家の庭には、多くの花と草を植えて、娘達はこの花を手折つては部屋を飾り、部屋の中は芳香馥郁たるものがあつて、ヘルミプスはこの花の匂ひと少女の匂ひの中に、毎日何の心配なく暮してゐたものらしい。斯くして百十五歳と五日の長壽を全うしたと傳へられるのである。

　このコハウゼンの說は一種の皮肉か諷刺か

も知れない。然しこの羅馬時代にヘルミプス同様に、老人が若い少年少女を傍に引寄せて、之によつて溫り生氣づけられて長命を圖るといふ事が、猶太の醫者に多く勸められてゐたのは事實であり、古くダビデ王の事蹟も之を證してゐる譯である。

殊にこれを獨逸の例で見ると、有名なフリイドリヒ・バルバロッサ王が、老年になつて常にその胃と腰の上に男の子の小姓を載せてゐたと言はれ、又ルウドルフ・フオン・ハプスブルク王は肺病を病んだ時に、大名の夫人令孃、子供等をお召しになつて、その夫や父の前でかういふ婦人連に接吻をした。ある人がその理由を訊ねると、王は冗談めかして、わしの體を好くするには、處女の甘い魂や、若い女の快い心を我が身の傍に引き付ける事が、これが何よりの藥なのぢや、と仰せられたので、近習の者も呆れ返つたといふ話である。してみるとこの方法も決して羅馬時代のものばかりでない事は確だ。

諸學說

そこで僕はこの若返り法に關する諸先生の說を調べてみよう。

先づ千四百九十九年に死んだマルシリウス・フイチヌスは、空氣と匂ひが人間の精神と成り、又精神に性能を與へるものだとし、殊に美しい花や好い匂ひのするものが、人間に爽快なる好感を與へる以上、若い女の生きた肉體から發散するものが、老ひたる人にどれ丈好い效果があるか、推して知るべしだとする說を、その著「デ・サニタテ・ツエンダ」第二卷第十八章に於て述べてゐる。殊に溫い呼吸は、恰も空氣から出來てゐて、智能を持つてゐる動物の如きものだとさへ斷言してゐる位だ。

又バコ・フオン・ヱルラムといふ學者がゐる千五百六十一年に生れた人だが、この學者は人間の肉體から發散するものを以て、一人の人から他の人に移りゆく「生命の精液」だとして、「若い人の魂が、老人の體の中に入つてゆくと、そこに生命を再び齎すか、或はその體を長い間常に健康ならしめるものである。從つて若い者を集めて常に之と談笑してゐる老人が長生をするのは、かういふ作りによつて若い者の魂が強烈に發散するからだ」と說き、昔の修辭學者又は論辯學者が若い聽講者を常に集めたるによつて、ゴルギアス、ピタゴラス、イソクラテスの如く、いづれも百餘年の長壽を得たと稱してゐる。バコはなほ若い女の肌の溫さを增すには、波斯の女のするやうに、沒藥又はこの種の香料を塗るとよいと勸めてゐる。

又臨床上の結果に就て報告してゐる醫者には、千五百八十九年に死んだカピウチオ、同時代のフオレスツスといふ人達がゐて、或る伊太利の貴族の死にかけてゐる命を、二人の若く強健な娘の間に寢かす事によつて取止め、またボロニアの重病人を晝夜の別なく二十歲の乳母の傍に寢かして救つたといふ實驗を報告してゐる。

コハウゼンは又千四百八十三年から千六百三十五年まで生きてゐたトオマス・パルといふ百五十歲まで生きた人は、幾度も若い妻君を迎へた事を報告してゐる。又メンヂンクといふ男は百十歲にして若い女を妻として二人の娘を生ませ、百三十四歲の長壽を全うしたと言つてゐる。

おもしろい事には、かういふ若返り法研究

の秦斗であるコハウゼン先生自身は、この方法並に學說には反對の意見である。理由は簡單である。曰く、そんな元氣のある老人に若い女を傍へ寄せておいて、果して、いくら老人でもおとなしくしてゐるかと、「舊約聖書のダビデ王の事蹟はあれは賢明なるダビデ王だからこそ出來た事で、凡人のよくする處ではない、それよりも若き青年諸君は宜しく若く美しき妻をめとり給へ、溫順貞淑なる良妻こそ、正に夫君百年の長壽を全うせしめるものである」と、コハウゼン先生は二百年の昔に、立派な教訓を垂れてゐる、殊にヘルミプスの事實に就ては、そんな人形を手放せない娘子を、常に身の周圍にたからして、之を膝に載せ寢床に橫にし、その肌の發散を享樂しようなどとは、餘り常識外れだと罵つてゐる位だから、コハウゼン先生は案外の惡戯者であつたに相違ない。

十八世紀

然るにこの若返り法秦斗によつて唱道され且否認されてゐるこの方法が、あの奢侈と淫樂の十八世紀の世界に盛に用ひられたといふ事は、疑ひもない處で、先づダビデ王を眞似した有名な人には淫蕩生活を以て評判であつた著述家クロオド・アンリ・フユゼ・ド・ヴオアズノン師で、千七百七十五年に六十七歲で死んでゐるが、これが女優、高等內侍等三人を妾にしてゐた外に、高齡に及んで、ユション娘といふ娘を側妾として我が家に養つた。けれども決してその體に觸れる事はしなかつた。ユション娘は非常に美しい娘であつたらしい。

尤もこれは決してこの男をのみ責めるには當らない事で、十八世紀の巴里には廣く行はれて、「巴里の賢女街とさへ言はれたパレエ・ロワイヤルは、かういふ手入らずの娘を貸りに出す女將が澤山ゐた處である。小說家ブレトンヌが「パレエ・ロワイヤル」の中に描いたものは、小說の形を執つてゐるけれども、悉く事實と見て好い。ジユニウス夫人といふ最も有名な女將を、ブレトンヌはその小說の中ではマダム・ジヤヌスと名を付けてゐるが、その四十餘人の少女は悉く巴里以外の田舍から連れて來られたもので、若い時分に有名な醫者の家政婦を務めてゐたジヤヌス夫人は、さすがに女の養生法は手に入つたもので、最も滋養になる食物を喰べさせ、且毎日運動を缺かせなかつた。そこで一老人が一晩この若い發散を受けるには、佛蘭西金貨の一ルイドルを拂ひ、その內娘は六法、マダムは十二法を取るのである。先づ初めそのお客の老人がくると、女將は自ら出て、これを好い匂ひの香料を入れたお湯を浴びさせ、マッサアジをし、體を拭いて、體中を完全に清潔にさつぱりとさせる。それからこの老人に嗽口具をはめて、これを二人の若いシユナミチストの間に寢かせるのである。それは丁度紐を組み合はせるやうに、「二人の間に組み込む」と言はれる位だから、肌と肌とがぴつたり密着する事が肝心だ。

かういふ務めも、まづ一人で八晩位しか續かない。そこで交代して、お湯に入つて十四日の間休息靜養する。二人づゝが一組になつてゐるが、一人の療治には、三組の若い連中が必要ださうである。

そこでこの若返り療法の間に、最も大事なのは、決して女が處女性を失はれぬといふ事である。さういふ事をしては何の療治にもならぬばかりでなく反つて害がある上にこの療治にかゝる初めに出した保證金を沒收されて

しまふ制度であつた。

かういふ若い娘は、思春期に入つてからは僅に三年しか務まらない。それも毎日務めると、やつと一年しか續かない。それからかういふ仕事には、金髪かブリユネットの髪の女が好いと言はれた。ジヤヌス夫人の如きは、その家にお抱えの醫者を置いてゐたが、その醫者の名前がヘルミプスといつたのは滑稽である。それからこのジヤヌヌ夫人のお得意の中には、ブレトンヌの書いた處によれば、年寄りの銀行家、公爵、元帥、相場師等がゐて、これをその時の周圍の事情から推すと、明にボルテエル、ルソオ、デイデロオ、ダランベエル、モンテスキユウ、フオントネエル等であつたさうだから、誠にブレトンヌの言ふやうに、國家に有用な大人物が、みなこの若返り法を用ひてゐた事は疑ひもない。

ロオズさんの話

この女將の養つてゐた娘にロオズさんといふ可愛いい子がゐた。これが相手のエウィエットと一緒にある年寄りの銀行家に招かれてその家に行つた時の話を聞くと、

「あたし達はジヤヌスをばさんに連れられて初めてあの方のお邸に上りましたの。旦那樣はあたし達の眞中へお休みになつて(省略)。夏は本當に辛う御座いましたわ。全くよ。くたびれるのや、體に好くない事や、風變りな事で(省略)。お年寄つてどうでせう……咳をする……唾をする……淡をかむ……汗をかく……それからもつといろんな事を(省略)。兎に角それがすんで、自由な體になると、全くバスチイユの牢屋から出てきた人のやうに、ほつと息をつきますの。でも決してロザリイさんとフアンシエットさんのするやうな事はしませんわ。保證金を戴くやうな事は、決してしやしませんわ。」

それからアマンドさんといふ娘の話によると、デイデロオ公爵はこの若い連中を引付ける前に、犢の肉を幾切れも體に押し當てさせたさうである。これは人間の肉力による外に動物の肉力をも援用したものであらうか。然しこの老公爵は大分だらしのない人だと見えて、アマンドさんにも女將にも大分油を絞られてゐる。

女の乳

十九世紀の自然科學時代になつても、この若返り長壽法は衰へなかつたが、多少形が變つてきた。アルバ公爵の如きは二人の乳母を傍に引寄せて、その乳を吸ひ、ブルボン家のアンリイは二年間も女の乳によつてのみ生きシアパ大僧正バルテレミ・ド・ラ・カザは印度人の女を養つて、その乳によつて命を永らへたといふ事である。けれども十九世紀の大名で、年若の女をこの目的の爲に使用した例はいくらでも殘つてゐる處だ。

夫婦間の若返り

ところがこの十九世紀の千八百八十四年に、倫敦でダビド二世と稱する匿名で、「アビシヤク」といふ小説を公にした男がゐる。この小説の題名は勿論舊約聖書から來てゐるが、内容はダビデ王の挿話から初まつてゐるに拘らず、これは若い女に觸れる事によつて、若返りの目的を達した話である。主人公は結婚後六ケ月にして妻君が厭になつて、雇入れた若い女中と戯れる事二年、この女中が嫁にゆく

と更に十八になる孤兒を女中に雇つて、これと戯れたのである。主人公は既に年をとつてきて、精力減退してゐたのに拘らず、この女中の若い力によつてめきめき恢復したので、妻君は怯んで、その原因を訊くと、主人はこの祕密を明かにした。妻君は利巧な女だつたので、この女中が若い牛殺しのかみさんになると、引續き若い女中を雇入れ、しかも三月毎に之を替へたといふ筋である。

このやうに妻が夫を强からしめる爲にシユナミチツクの法を用ひ、之によつて自分も滿足を得る、といふ方法は珍しい。同時に夫婦相互の間にも、兩方の若い力によつてこの事が行はれ得るものらしい。エエゲルはこれを夫婦間の「同情愛憐の匂ひ」を吸ひ込む事によつて、互に若い力を得るものだと說明してゐるが、その證據にはある一夫婦に就てみると、妻を愛してゐる夫は生々した顏色を有し、夫を嫌ふ妻は蒼い顏をしてゐるのは、夫には妻の體の發散物が快適であり、妻には夫の體の發散物が不快であるからださうである。

動物による若返り

ところがこれは必ずしも人間の間にのみ行はれるのではなく。動物にあつても效力があるものらしい。例へば肺を病む者には、牛小屋の空氣が良く、之を嗅いでゐると遂には全治するといふ迷信もある位で、殊に動物の中で、最も汗をかく犬は、この目的には好いもので老人がちんころを蒲團の中に寢かせるのは、こんな處から來てゐるのかも知れない。クロケといふ人は、よく手入の行屆いた牝牛や馬小屋の空氣は屢々藥として用ひられ、しかも立派に成功してゐる處で、特に衰弱せる老人や戀愛的快樂によつてへたばつた患者には大に效能がある、と斷言してゐる。

大事な點は

之等の若返り法を今日から見れば實につまらぬものかも知れない。然し女學校の先生は中學校の先生よりも統計的に長命であるといふ事實から考へ、又多くの現代の老人の實行されてゐる事から見れば、滿更效果のないものでもなからう。(殊に相手の少女は青春と健康と純潔とを絕對條件としてゐるから、その人間的新鮮と潑溂とが、あらゆる老人を生氣づけ、刺戟する事は疑ひもない。それならば一つの暗示的方法として、僕等にも十分了解のゆく手段だ。然しシユナミチズムの大事な療治の力は相手の女が處女であり、之を引付ける老人が決してこの純潔を犯さぬといふ尊い處にある。わが松旭齋天勝孃のあの若さは、女學校の先生が長壽であると同じ理由で、常に若い雰圍氣の中に生活し、若い娘の發散する匂ひを嗅いでゐるからである。けれども今日の日本の老人は、中々この大事な點を護らない。自ら大金を投じて雛妓を犯す事を以て得意にしてゐる人が多いが、それではシユナミチズムの本義に副はない。もとより長壽長命は覺束かない。遠くダビデ生の愼獨の德を顧みなければなるまい。(昭和四年五月)

大檢擧裏面秘話

志摩麻夫

一

藤田謙一と云へば關西の烏德藏と並ぶ關東財界の大立物である。東京商工會議所會頭として全國的にも一勢力を構へてゐた。豪膽な奔放な性格の持主である。其の彼が一度は勳章疑獄で收容され數日後釋放されながら幾何もなく合同毛織の背任事件に連座して再度收容されてしばらくの後であつた。商工會議所の事務のことで渡邊書記長と大山、杉山兩副會頭が檢事から特別の許を得て檢事局調室で慘めな姿をした彼と對面したものだ。

其時彼はじつと默し續けるかと思ふと潸然と男泣きに泣いた。凝膽比類のない藤田が泣いたのだ。勳章事件で彼の身邊危險を傳へられた時彼は何と云つたか。

『十萬百萬と云ふ金を扱ふわしぢや。その位の單位の金の出入なら覺えてゐる。千や五千は眼中にない。』(此事件で問題になつたと云ふのは天岡前賞勳局總裁に五千圓贈賄した點であつた。)

彼のどこをつゝかうが淚なんどは藥にしたくもない筈だ。

何が彼を泣かせたらうか。それは刑務所であつた。未決監房であつた。

丈餘のコンクリート塀。囚人自動車。刑務所と云ふ不愉快な憂鬱な存在は思ふにむだではなかつた。

二

十日間の强制處分――之は檢事にとつては最も效果的な武器である。

瀆職の嫌疑をかけられて召喚された諸大官諸名士は云ひ合はせたやうに、『收容などされるもんか。一すした參考人だよ。』とうそぶく。天岡直嘉もさう云つた。海原清平もさう云つた。射山小川前鐵相さへも『自ら顧みてやましい所がない。』と高調し續けた。

法はいかめしい。大臣も勞働者も法の前には平等である。前鐵相でありかつては司法府に長であつた小川も一樣に市ケ谷刑務所の鐵扉を潜らねばならなかつた。固より乘物に於て、手錠、深編笠免除に於て、法の許す限りの優遇は與へられたとしてもたゞ一つ免れ得ない關門があつた。

裸體の洗禮である。收容直後消毒のため着衣全部を一時獄衣にかへられて消毒を受けるのがそれ。其間の數十分それは誰もが一番に印象強く一番にこたへることださうである。

刑務所だなと云ふ感じを始めてこゝで抱懷させられると云ふ。

それから僅々三疊――と云つても一疊分は板の間――極めて無味と云ふよりも薄氣味悪い獨房。便所も洗面所も食堂も一緒にある部屋。そこに全く孤獨に端座を餘儀なくさせられてはどんな人間にも大きな衝擊であるに違ひはない。

まして今度の疑獄に連座した人達にはそれ迄の生活は餘りに華か過ぎた、贅澤すぎた、我儘すぎただけに此の新生活は一層骨身にこたへた筈だ。

一週間此生活が續けば大抵は轉機がくるさうである。

小川前鐵相の秘書格元代議士春日俊文は收容される前『死んでも小川さんの爲につまらぬことは云はぬ』と誓つたさうである。その春日が數日の後にはあれ程の大疑獄をほぐす重要な絲口を陳述したと云ふ。固より取調べの衝に當る檢事の頭腦のよさもあらう。然し乍ら三疊の未決監の壓迫が大きな力をなしたことは否めまい。

三

例外はいつもある。昭和の大疑獄を通じてこの裸體の洗禮に痛痒さへ感じなかつた豪の者が一人在つた。京都電燈疑獄に連座して收容された大阪畜産組合長鹿山貞次である。滿洲の廣野を荒れ廻つたと云ふ彼の前身は知らない。併し乍ら市ケ谷の未決に繋がれた彼は刑務所をなめきり、係官をなめきり、そして事件をなめきつた。

四十萬圓と云ふ巨額の社金が京電から出た事實を目前にしながら此事件は最後のどたん場で潰えてしまつた。

四

所がこの鹿山式とは全く反對な例外もある。朝鮮總督府疑獄の立役者肥田理吉に其の例を見る。

肥田一味が山梨朝鮮總督を背景に全鮮にわたつて利權の魔手で漬した罪の果實はやがて自ら刈り取らねばならぬ時機が來た。

早くから機をねらつた京城地方法院檢事局は昭和四年七月田中政友内閣が倒壊して濱口内閣成立の前後に突如活動を開始した。其頃まだ總督の地位に戀々としてゐた山梨大將も肥田も東京へ來てゐた。檢事局活動開始の飛報は肥田の耳に入つた。

肥田は山梨大將に逸早くもみ消しを請託して後いそいで應急處置をとる爲京城へ向けて西下した。

神戸を過ぎて間もなく車中で肥田は捕へられて京城へ護送されて居た。此時若し肥田が無事に京城について、收容でもされなかつたら山梨大將は釜山取引所五萬圓問題にあれ程の汚名を着せられなかつたかも知れない。肥田は收容されて山梨の指圖だと邪推（?）して一切の眞相をさらけ出してしまつたのだ。

人間の心理は微妙である。人生は偶然に支配される。

昨年十二月十八日山梨大將が瀆職罪で起訴された時京城大學病院に身を横へた肥田はこんなことを云つてゐる。

『私は過去十二年間山梨の爲隨分盡してきた併し報酬と云つたらピタ一文取つたとはない。山梨の乾分と云つたら私一人であるが、その親分たる山梨は乾分に一度だつて恩惠を施したことがないばかりか自分が君子人になりすます爲たつた一人の乾分を犧牲にしたではないか。私は神戸で捕へられる前日山梨が「一日も早く京城に行つて自分の惡評を一掃して呉れ」と云つたから私は總ての仕事を擲つて京城に向つたのだ。それを途中で早くも私を繩につながしたのだ。そして「すべてのことは肥田がしたことでおれは知らぬ、あれは無類の惡徒だ」

など言ひ觸らしてゐる。これがほんとの親分だらうか。自分は豫審判事に問はるゝまゝに一切の眞實を述べたまでゞ山梨がそれで不利に陷るのは致し方がなからう。』

五

この四月は東京の裁判所と檢事局が天下の大事件を獨占していはゆる大疑獄と云ふ大疑獄は豫審決定書によつて公にされた。小川前鐵相の收賄額五十六萬圓。小橋前文相の收賄額三萬圓。山梨大將の收賄額五萬圓。曰く誰、曰く誰。それは恰も會社か銀行の收支決算簿を見る程整然たるものであり、日常の物品の賣買程利權は簡單に取引されてゐる。

我が法制史上かつて見ざる醜觀であらう。

たゞし此の成果の裏面には判事と檢事との偉大なる努力と苦心の存することを看過してはならない。

無から有を生ぜしめるものでは固よりない。併し單純にオイソレと有から有を生ぜしめる譯にはゆかない。相手は同じ人間である。一方は覗かれまいとする一方は覗かうとする結局は智力の問題であり、膽力の問題であり經驗の問題であり、機智の問題であらう。

頑強な親分肌の小川前鐵相をして反省させ、豪放藤田をして泣かせ、俠氣滿々たる三木、中島(守)の兩代議士をして感激させた腕は非凡ではない筈だ。

彼等は金權萬能の政界に育ち、積年の傳統に漬かりきつた政治家である。選擧費のためには、其他の政治的入費の爲には他人より融通して貰ふことを、それがたとへ或種の利權に濃やかに絡んでゐたとて別段惡いとも、犯罪になるとも思はぬ輩である。さうした鐵のやうな意思を溶かすことに成功したのだ。

固より政界にわだかまる此の傳統は今度の疑獄に連座した百名に近い人達に限つたわけではない。一般的である。普遍的である。

いはゞ偶々司直のメスにひつかゝつた人達は最大な不運であらう。然し乍らこの僅かな罪の人達は頂門の一針として限りなく大きな警告を與へたものではある。其の意味からは確かに昭和大疑獄の摘發は有意義であらう。

これについては面白い人間心理の動きがある。

『俺をもし強制處分收容にでもして見ろ、一切あばいてやるぞ』そんな意味の言葉を吐き出した人達がゐた。大阪鐵事件にも越鐵疑獄事件にも。そして東京市大疑獄の折は收容された市議中『あいつも金を貰つてゐるではないかあれをなぜ收容せぬか』などとなりちらして材料を知らず識らず提供したものもゐたさうである。親分格の大人物と對比して面白い現象ではないか。

判檢事はさうした檢擧の不公平を最もおそれるらしい。殊に政治的事件ではさうである。

六

此問題の起る度に引き合ひに出されるのが例の司法省官制第一條。

司法大臣は檢察事務を指揮す

と云ふ條項である。同じく司直のメスを揮ふにしても判事と檢事とは此の一ケ條によつて重大な懸絶がされてある。

先頃越鐵並に山手急行疑獄が豫審終結の間際兩角豫審判事は突然保釋を許したばかりの佐竹三吾と一條文人の兩名を再收容した。

證據湮滅のおそれがあると云ふ理由ではあるが隨分と思ひ切つた決斷である。これは判

事の一存でいける。又市疑獄からは別役増吉、原伊三郎外一名の豫審免訴者を出した之も判事の自由裁量で行ける。

然るに檢事はさうでない。佐竹三吾を收容するとなると先づ現場の鹽野檢事正、松阪次席檢事にそれに疑獄檢事の噂のある石郷岡檢事あたりが、先づ協議決定する。それを今度は直接上司の三木檢事長、それから次には小山檢事總長の許へもつて行つて、幾度も議を練る。それから愈々司法省へもちこむ。先づ泉二刑事局長、小原司法次官あたりで一もみしてさて渡邊法相の所へもつて行く。そこでうんと云はねば出來ない。超スピードを要求する現代には最も適はしくない方法である。愼重と云へば至極愼重。人權尊重と云へば至極尊重。而も事件は一度着手すれば脛に傷をもつ連中は電光石火のやうに證據湮滅して搜索の妨害をなすのだ。

昨秋越鐵事件で久須美東馬の起訴不起訴、佐竹三吾の收容か釋放かの大騷動は未だ記憶に生々しいことだ。

これが檢事にとつて一番うるさい、一番仕事のやりにくい、又一番に苦心の要る點ださうな。

たゞ歴然たる證據を大臣にお目に掛けて、それでなほ起訴してならぬと首を横にふつた驗しはない所が幾分でも司法權の獨立と云へば云へる。

小橋前文相の問題でもよくわかる。あの事件の渦卷が大きくなつて小橋が文相の地位を退いた時渡邊法相は何と云つたらうか。

『小橋君のやめたのは文敎の府にあるからだ。小橋君としては何等やましいことはないと思ふ。機會があつたら何等かの方法で聲明書を出して寃をすゝぎたく思ふ。』

それがどうだらう。一旦は上の方では不起訴意見にさへなつたものが砂山が波に崩壞して行くやうに一歩一歩不利に展開した果が今度の豫審決定書である。あの事件の關係者中誰よりも一番の惡役をしてゐるのだ。とんだ聲明書となつてしまつた。勿論決定書は事件のエッセンスにすぎない。ニュアンスもプロフイルも出てゐない。公判廷で被告側の辯解を聞いてからでないと最後の黑白判斷は出來まいが萬事がそんな調子である。

山梨大將の時もさうである。檢察當局ではちやんと起訴意見がまとまつて司法省へ持ちこむと大將の出やうでは起訴猶豫にしようと表面には現はれなかつたが當時相當の暗躍が行はれてゐるさうだ。

小川前鐵相の起訴の際もさうであつた。春日が強固な障壁となつて直ちに小川前鐵相を起訴は出來ない狀況にあつたさうだ。そこを敢然つきぬけたのが檢事當局の偉大な苦心であつた。『おれは二度も大臣をした。國家の功勞者だこの俺をひつぱれるか。』と豪語した射山先生の豫想を裏切らせたものも全く現場の檢事の力が基礎に違ひない。

七

一體に瀆職事件は物的證據がスッカリ湮滅されてゐる場合が多くたゞ關係者例へば贈賄側の供述が唯一の證據だと云ふやうなのが多い。その唯一の證據たる供述を作りあげる苦心、それは容易なわざではないらしい。

嘗て內閣までも瓦解の因を作つたシーメンス事件もドイツの新聞に醜聞がさらけ出されたと云つて議會の問題となり檢事局の活動となつたもののそれつきりで有力な材料がな

い。

關係者を召喚してよりぬきの檢事がぶつつかるがとんとだめだ。結局今の鹽野檢事正——當時チヤキ〳〵の少壯檢事が一日中不得要領の質問を連發したあげく一寸したヒントをつかんだものがあれ程の大仕事にまで仕上げるもとになつたやうなわけ。

今度の勳章事件も最初は日本勳章會社と云ふ御大典の紀念章目あてに設立したボロ會社の詐欺事件の告訴からあれだけに發展し、越鐵疑獄も告發だと云ふし山梨事件も始めはあの釜山取引所をめぐつて策動した一味の仲間割れに端を發して相手を詐欺で告發したことから始つたさうだ。あとであんな結果になつてさて告發をひつこめるわけにもゆかず呆然としたさうである。小川關係の四私鐵疑獄の導火線は公にされてゐないが之は告發もあつたやうだが政黨筋から有力な材料を提供したと云ふのが眞相らしい。

一番妙なのが東京市疑獄。之は一昨年頃例の雜誌キングの不敬問題をたねに恐喝した一團を檢事局が取調べ中、偶々その一人が板舟問題の醜聞で魚市場を恐喝した事實がわかり始めて具體的な醜聞を知つて一週間とたゝぬ間にあれ程の大事件を爆發させたものであつた。

八

そこでいよ〳〵取調べのことだが檢事と豫審判事との仕事の領域が昔と今と隨分異つて來たことに留意を要する。

一昔前は豫審判事の勢力甚大で檢事は嫌疑さへあれば起訴して豫審へ委せ豫審が調べ上げたのだが、今では檢事がスッカリ調べ上げ一切のお膳立をして豫審へ移し豫審判事は只之を整理し仕上げをすると云ふに過ぎなくなつた。そこで昔は事件と云へばすぐ豫審判事が引き合ひに出されたもので例の滿鐵事件の時、當時の滿鐵社長井上匡四郎がアメリカから歸朝の際時の檢事總長平沼騏一郎が時の警視總監岡喜七郎をして横濱の埠頭に之を迎へさせ豫審廷へ證人として召喚された際の證言の供述の筋書をソッと耳うちさせた奇怪な一幕を麗々しく豫審調書へ書き上げて大問題をひきおこしたと云ふ氣慨ある出來事さへあつた。之はよく當時の豫審判事の力を物語つてゐる。

それが今では檢事と豫審判事との地位が顚倒した。檢事の苦心が並大抵でなくなつたわけである。こんな一例がある。

九

東大阪電鐵の取締役田中元七を或る少壯檢事が取調べた。默して何も言はない。十分、二十分、三十分。そこで檢事は焦燥の餘り立ち上がつて田中の肩をこづいて『どうして言はないかね』と詰問しようとすると彼は恐ろしい悲鳴をあげて『人權蹂躙だ！ 人權蹂躙だ！』とわめく。

調室は壁一重で連つてゐるのでこの大聲は其邊の壁に反響して建物中ガン〳〵する。外の檢事も驚いてかけつける。田中はキヨトンとして何のこともない。檢事のみきまり惡い顏してゐる。

前記した大阪グラウンドの鹿山貞次の如きは大いに辯論する。併し肝腎なことを言はず檢事までなめてかゝつてゐる始末なのだから之も始末が惡い。

其上今度の大疑獄に連座した連中は帝大出

か相當の學歴をもつてゐる者ばかりである。

鹽野檢事正が佐竹三吾と同期であると云ふのはほんの一例で罪をあばく人あばかれる人が同窓の先輩や後輩關係にあるのはザラだ。

皮肉なのは、檢事局とは一番に緣故のある警視廳から宮田光雄、正力松太郎と云ふ二人の關係者を出したことで、之を調べねばならぬ檢事の苦衷は言葉には現はせまい。

それから小川前鐵相。かつては司法大臣として全檢事を指揮したその總帥を罪人として訊問せねばならなかつたのは今度の疑獄を通じて一番恐しい運命の惡戲であつた。

その他泣いて馬謖を斬る例は枚擧に遑がない。今度の疑獄ではなかつたが先頃復興局疑獄に連座して無罪になつた元鐵道省經理局長十河信二も一審東京地方裁判所で裁かれる時立會檢事の石郷岡、係り裁判長小林（四郎）何れも同窓の學友であつた。

そんな悲喜劇が、今度の法廷にさぞ多からう。一方では言ふまいとする。一方では言はせようとする。そこで今度檢事局の調べも無理――と云へば語弊があるが合法的峻嚴だつたと云ふやうなことを被告側からちよい〱聞く。

佐竹や一條等が保釋されて會つて見ると檢事の調べの時お互が云はないこと迄云つたやうに檢事に云はれてゐたりして急に態度をかへたので保釋取消しとなつたとも噂されてゐる。とかく引かれ者の小唄で被告側は負け惜しみ的な言葉をよく云ふので此種の噂はどの程度まで確實なのかわからないが合法的峻嚴の一例ではあるまいか。

もとより苟くも人權蹂躪沙汰があれば世間が許さない時勢である。一昔前現在の拓務參與官武富濟氏あたりが檢事の頃一々どなりちらし卓を叩いてやりつけ、卓が二つに割れたことさへある。それとはえらい違ひである。明政會の軟化事件で鶴見關係の證據固めに上京した大阪檢事局末次檢事が證人參考人調べが峻嚴に過ぎたとあつて問題にされる世の中である。今までは泣き臉入りの多かつた警察官の苛酷な調べもすぐと人權蹂躪問題視せられる時である。

從つて取調べの方法に苟くも非合法的な所があり得る餘地がなくなつてゐる。之からの取調べは强力犯關係が科學的に進むと同樣智能的犯罪は要するに智力を以つて臨まねばならなくなつた。瀆職罪の取調べに成功すると否とは要するに頭腦の問題となつてくる。明敏な檢事、洞察力神のやうな名檢事を司直の府におくことが瀆職罪絶滅の一方法である――と云つた結論になる。往時平沼騏一郎、鈴木喜三郎時代司法官萬能の時代が過ぎたあと世間は判檢事に冷淡になつた。それが一昨秋以來の大疑獄でまた目をつけられ出した。『判檢事に急に嫁の口がふへた』さうである。一寸判檢事の爲うたつて置く。

十

共産黨事件の取調べに當つた判檢事がスッカリ共産黨に理解をもつた（共鳴こそしないが）と云ふこともよく聞く。大疑獄を食傷する程裁いた判檢事はスッカリ裏面のカラクリをのみこんでしまつたさうである。そして疑獄の禍根は結局『選擧に巨額の運動費が要ることから起因する』と口を揃へて述懷してゐる。

瀆職にいか程殘酷な刑罰を用ひても（帝政ロシアでは死刑を用ひてゐると云ふ）[illegible]時代の

なくならぬ限り根絶は出來まい。發かれた瀆職事件は大きな川から偶こすくひあげられた一二滴の水に過ぎない。表面にあらはれぬ大きな瀆職行爲は限りなくあらう。

昨秋政府が官吏一割減俸案を發表した時、東京の判檢事が眞先に强硬な反對論を唱へた氣持には『今の政府がいばつてゐても政友內閣と同じ疑獄の種子を祕めてゐるのだ。大きなことを云へた義理ではない』――さう云つた所があつたからでもあらう。他の種々な原因は固より在らうが。

十一

そこで亦話は檢事の取調べ振りに戻る。今度の疑獄を發いた司直の府に公平無私の權化のやうな小山檢事總長、溫良にして內に强い三木檢事長がはやる少壯檢事のおさへのたづなを握つてゐたとは公知の事實だが、一番に特記すべきは東京檢事局の精銳である。一々詳記する必要もない程疑獄以來天下に紹介されてゐるが、總元締の鹽野檢事正。生れてから脊つて人を叱りつけたこともない程抱擁力の持主、事件に對する膽力も奇計も充分に備へた名將。それにシーメンス事件を始め數次の大疑獄には少壯檢事として活躍した經驗もある。

その女房役松阪次席檢事、表面溫良な紳士であるが、感激性に富んだ內に强固な意見を藏する人。

その下に活躍した部長級檢事をあげると奇策縱横の石鄕岡、事件を把握するに天才的閃きを見せる中島、猪突主義の北條、堅實で鳴る金澤。これ等に配するに鬪志滿々の若手檢事が數多くある。

そこで或は一つ〳〵ピラミッド型に築く方法によつた勳章事件、或は一擧に最高點を握つてあとからゆる〳〵と調べ上げた私鐵、市疑獄など、發かれる方から云へば餘り氣持ちよい話ではないが、色々の戰法が用ひられて、遂に我が法制史上空前の疑獄時代を生み出したものである。

十二

かうした大疑獄もこの四月を以つて清算された。法網にかゝつた不幸ものの筆頭について收賄高を拾ひ上げて見るとザッとこんなものである。

金五十六萬四千圓　前鐵相　小川平吉
金三萬圓(外に五千株)　前文相　小橋一太
金六萬圓　前賞勳局總裁　天岡直嘉
一萬株　元鐵道次官　佐竹三吾
金八萬圓　代議士　三木武吉
金七萬三千七百圓(外に約束手形四萬圓)　代議士　中島守利
金千二百圓　代議士　小俣政一
金千五百圓　前代議士　瀨川光行

(以下略)

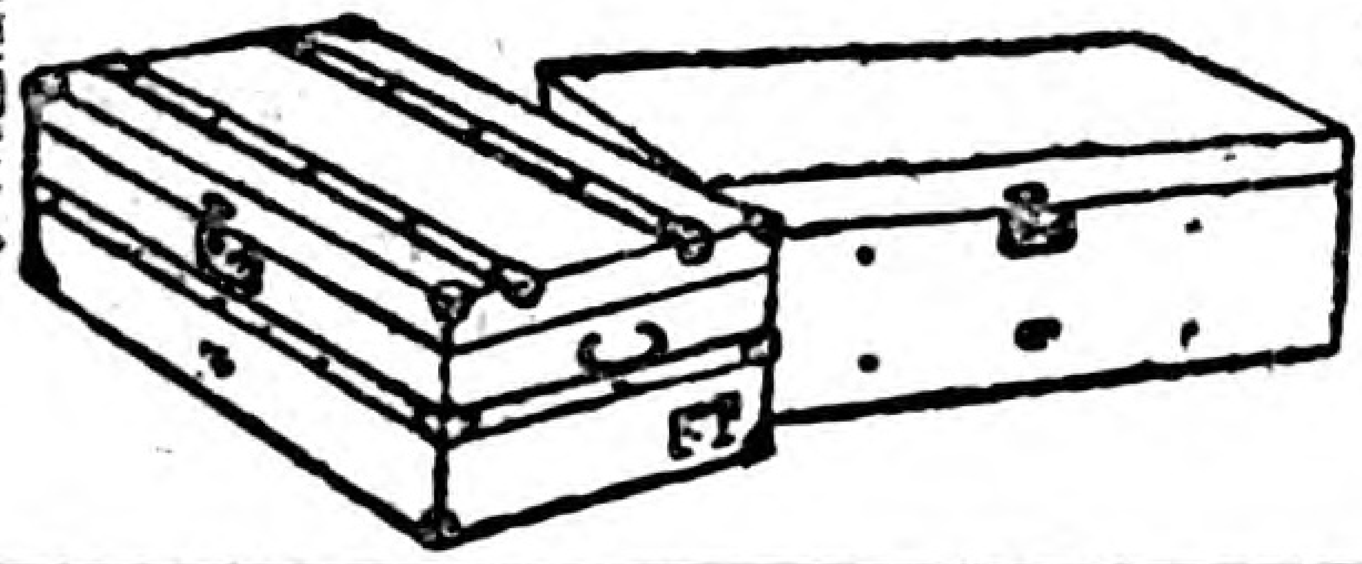
アテナ萬年筆

使ひ出せば、間もなく執筆者の手と書風になじみ、使へば使ふ程いよいよ書きよくなると云はれ、舶來品に勝る國產第一の優秀品です。

定價　三圓五十錢　四圓　四圓五十錢
（回轉吸入式）　三圓五十錢

送料　內地　十二錢　領土　四十五錢

昭和文庫



厚い鋼鐵板張りの外面には漆の高溫燒付けを施し、防蟲防濕の工夫をした堅牢な容器で縱二尺四寸、幅一尺二寸、高サ八寸五分、內側は木板で圍み、ナフタリン揷脳入れまで設備してあります。

毛織物類入れに貴重書畫入れに、上製はトランクとしてそのまゝ發送する事が出來、非常用としても簞笥や支那鞄より遙かに便利です。

定價　上製　九圓八十錢　並製　六圓八十錢

送料　東京市內配達料二十錢　地方荷造費三十錢運賃先拂

洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備した紋紙製品で而も洗濯が出來布よりも丈夫です。

改正定價　大　一圓　小　六十錢

送料內地　十二錢　領土　四十五錢

にきびとり美容水

脂肪が多くて年中吹出ものが顏に出て困る人におすゝめ致します。先づ常に皮膚を淸潔に保つ事に留意して、その上にこれを用ゆれば效果は一層あがります。

定價　一個五十錢　送料　內地十二錢　領土四十五錢

新發明の產兒調節器

獨逸製オクルサトールは、海綿樣纖維質の部分と絕對に水液の通過を防げるゴム障壁と把柄からなる新發明の產兒調節器です。

本器は永久的の使用に堪え眼覺めたる新しき家庭の實際問題の上に輝く大いなる光明器であるとまで、多大の賞讃を受けてをります。

一回經產婦までは　〇番
三回經產婦までは　一番
四回以上の方は、　二番を使用

定價（錠劑十二錠附）六圓　錠劑のみ十二錠　二圓

送料　內地　十二錢　領土　四十五錢

タキー

タキーは、手足、腋の下、襟、髭等任意の所に塗つて、三分乃至十分後に水で洗へば、剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかり除毛する事が出來、ながく繰返へして使用する間に次第に毛が發生しなくなり、腋臭を除く效果もあります。

用法は至極簡單で、添附の說明書に反した使用法をせざる限り、全く無害で效果は一層確實です。



定價（マムクリーム付）　二圓二十錢

送料　內地　十二錢　領土　四十五錢

浩壯
（無臭ニンニク錠）

ニンニクの效力は世人のよく知る所、然し臭氣は十人が九人まで嫌やがる。

效力は認めるが服むのは嫌や、服み度が服めないと云ふ人は此のニンニク錠をおすゝめします。本劑は服後口中に臭氣を殘さない事が特長です。

肺結核、肋膜炎、氣管枝カタル、胃腸弱、神經衰弱、貧血症及蛔蟲條蟲の驅除等には驚く程の効果があります。

藥價　十日分二圓　三十五日分五圓

送料　內地　十八錢　領土　四十五錢

オプチサナ

獨逸藥品の偉力は世評の認める所、特にこのオプチサナはセキを止めるに著しく効果があります。甘くておいしく、百日せきの子供も喜んで服用致します。

尙醫家の十個以上纏つた御注文には多少の割引をいたします。

定價　二圓

送料　內地十二錢　領土四十五錢

草津溫泉の精

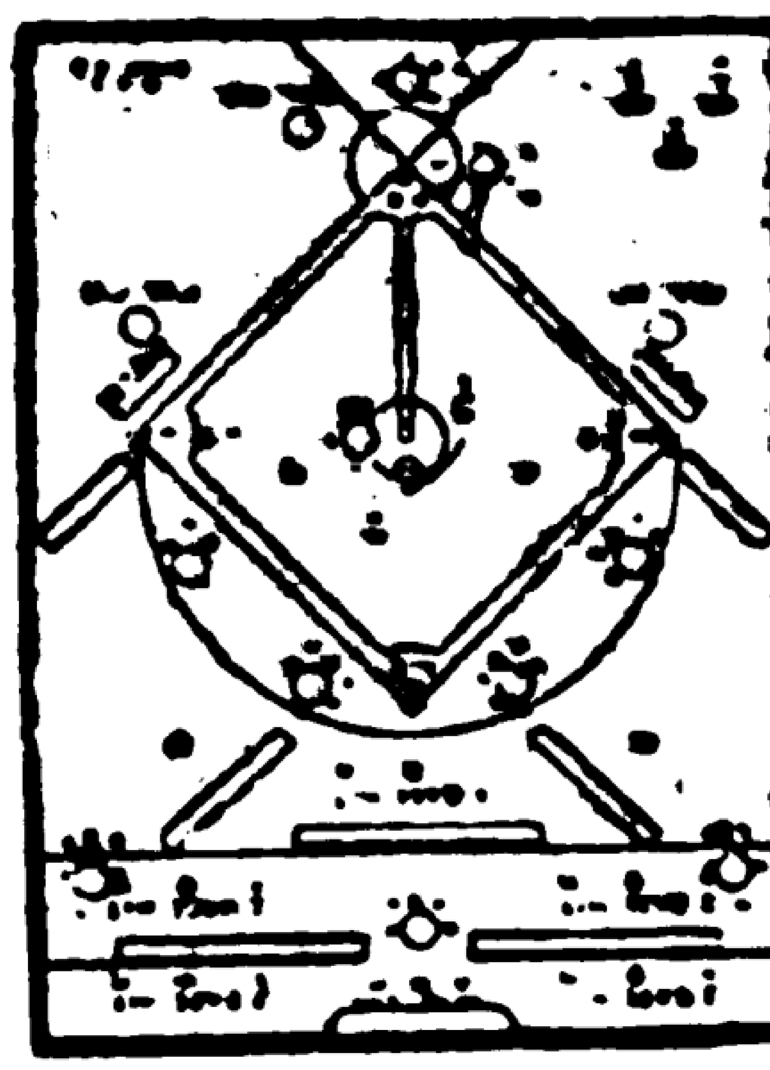
本劑約二〇乃至五〇瓦は居ながらに約一石の新鮮な溫泉となり、常用者は皮膚が美しくなり、色を白くします。



定價　小瓶　一圓　大瓶　二圓
特大瓶（一〇〇回用）六圓

送料　內地二十七錢　領土五十五錢

誰にも愉快な
野球競技盤



盤面は飛行機上から見た野球場さながらで、盤にあてた指の力一つに、直球、曲球、緩球、剛球を自由自在に出す投手と選手がボックスに立つた氣持ちで立向ふ打手との興味が緊張した氣分は、この野球競技盤ならでは、味はへぬ所です。

選手はもとより、春のシーズンを目前にして野球の興味が婦人の世界にまで及ばうとしてゐる現今、高尚な新らしい家庭遊戯として、一般の家庭におすゝめ致します。

定價　小型一圓三十錢大型三圓八十錢
送料　内地小型は十二錢　中型は二十七錢　領土小型は四十五錢　中型は五十錢

最新艶出布

このフレッシュマン、ダスト、アブソーバーは、特殊の毛織物に機械的工程と化學的處理とを施したものでありますから、器物固有の塗色を損ずる事は決してありません。

この布は、従來の艶ふきんと異り、埃りを吸ひ取りしかも美しい艶を出す不思議な作用を有して居ります。

漆器類、殊に蒔繪の器具、ピアノ、オルガン、卓子、自動車等用途は中々廣く蓄音器のレコードを、この布で拭へばレコードの壽命を永くし、音は非常に美しくなります。

定價（金屬製容器入）　一圓
送料　東京市内　六錢　内地十二錢
領土四十五錢

スマドレ
ヘヤトニック

このスマドレヘヤトニックは、米國で唯一の日本向の化粧料を出してゐるスマドレ會社の製品でニューヨーク、ロンドン、パリー在住の日本人間に愛用されてゐるものです。

洗髪後や朝夕に數滴を毛髪の根元に振りかけて、指頭で輕くマッサージしてをけば、フケを除り拔毛を止める事は勿論あとには得も云はれぬ芳香が永く殘り、使用するにつれて、毛髪は絹の樣に軟くなり、日々漆黒の美を増します。

定價　婦人用 紳士用　特大瓶各二圓五十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

スマドレ
シャンプー

理想的洗髪液スマドレ、シャンプーは短時間に地肌からキレイに汚れを落すことが出來、同時にフケを除り爽かな潤のある美しい髪にする一方、ちゞれ毛や縮毛を整す事は全く不思議な程で、スマドレヘヤトニックと共に、ニューヨーク、ロンドン、パリー等の日本人に愛用されてゐる世界特許品です。

日々忙しい社會に立つて、男子の髪を整へる事が、重要な禮儀の中に數へられる今日、僅かな時間に之を用ひて、何時もさつぱりとした髪で、自他共に氣持ち良く會談する事をおすゝめ致します。

定　價　特大瓶　二圓
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

梅と鈴蘭の香水

本社代理部特製の四季の香水の中、春の梅及夏の鈴蘭の二種は、如何にも香りのすがすがとした紳士用には最もふさはしいものです。

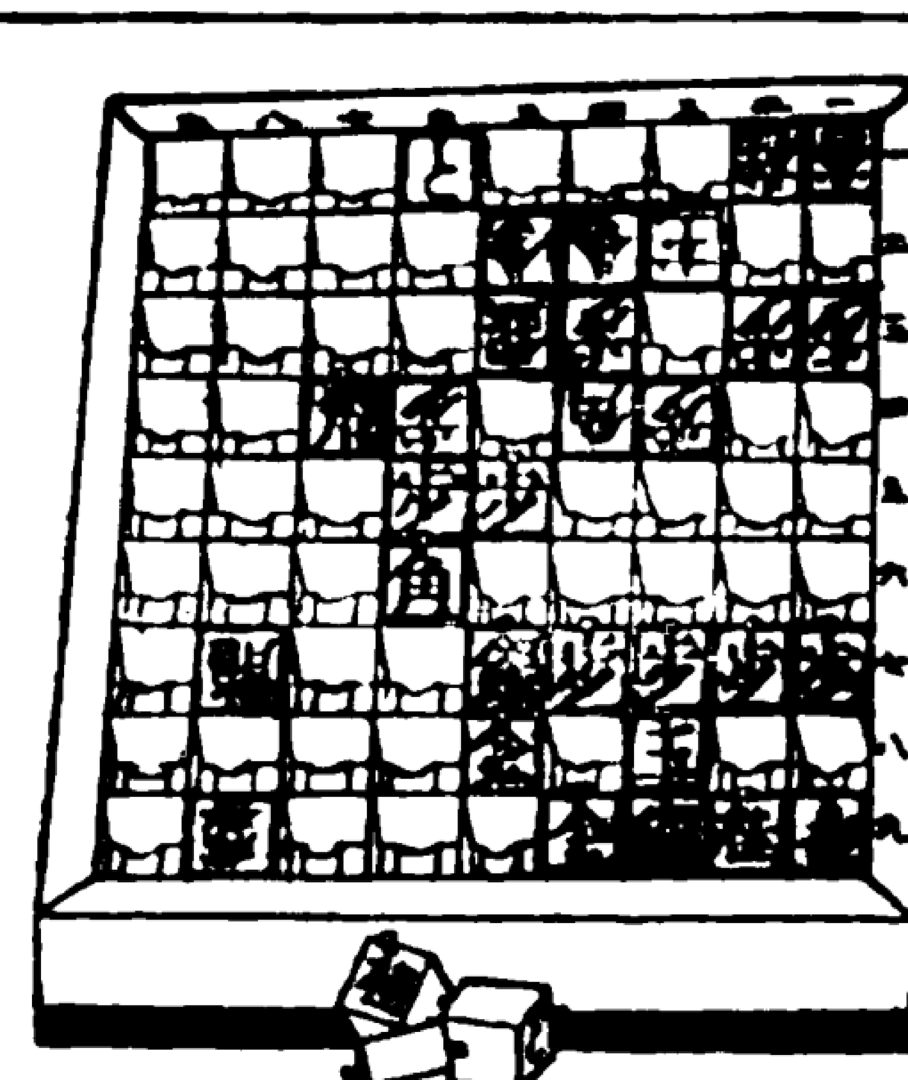
此の外に秋のヘリオトロープ冬のシクラメンを加へて四季何れも常に用意してありますから、お好みのまゝにお注文下さい。

定價（春、夏、秋、冬）各　二圓
（四季組合せ、又へ四個）七圓五十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

最小型將棊盤

縱三寸七分横三寸二分厚さ五分の最小型輕便將棊盤です。

木とアルミニユームとで造られてありますから、ポケットに入れて少しも重く感じる事なく、駒には一個一個磁石が附けてある等、婦女子の眼にも可愛らしいのも輝のです。



駒は標準文字を用ひ、盤には縱横に數字が記されてありますから、新聞を見ながらの研究には一層便利です。

其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に或、ひは机上りの製ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定　價（駒全部附）　一圓八十錢
送料　東京市内　六錢　内地十二錢
領土　四十五錢

御注意

◇御送金には振替の御利用が一番安全ですが、地方により普通便より四日乃至十日間以上遅れますから、御注文はそれ丈一層お早くお出し下さい。

◇爲替での御送金は、必ず書留郵便に願ひます。

中央公論社代理部

デジャビウの藝術

大槻憲二

一、

私はさき頃、草津に一遊したが、一日好天氣のまゝに町外なる賽の河原と云ふところに散策を試みた。やゝ打開けた河原に硫黄の小川が濛々たる湯氣を立てゝ流れてゐる。その間に黝ずんだ熔岩めいた大石がごろ〳〵してゐるが、その上に來遊者が白ペンキの類を以て名前を書きつけてゐる。これは何處でも名所舊蹟や好風景の地にはざらに見られることで、別に珍しくはない、井の頭あたりへ行つて見てさへ、朴や楓の大きな幹に無殘と思ふほどに大小さま〴〵な文字が刻みつけてあるのを發見する。

併し私は彼等旅人の心理をフロイド風に分析して見て興味ある結論を得た。私はかつて『風景の心理學』と云ふ一文を公にしたことがある。その文中で私は、好風景の地は、また（當然好風景の地にある）名所舊蹟、神社佛閣は、我々の胎内生活の記憶を無意識の底から喚起するものであることを明かにしておいた。殊に温泉があると一層この記憶喚起を助長するやうである。私は賽の河原の温い硫黄の流れに手をひたして、何とも云へない快い感覺の生ずるのを自省して見て、何の故にその然るかゞ分つたやうに思ふ。それは只のお湯に浸したのとはその感覺が違ふ。湯治のきくと云ふはその化學的效果からばかりは説明し切れない。大地は屢ゝ母の象徴であることは今や分析實驗に依つて動かぬ事實となつてゐる。して見れば、温泉は羊水に相當し、その温味は無意識の底に陷されてゐる胎内生活の快適を再經驗せしむるものでなければならない。

名勝や温泉の地が我々の胎内擬想（ウームフアンタシー）たり得るものとすれば、永遠の感もまた從つて復活される筈である。人間が生命の永遠を未來に信ずるのは、過去に於いて母胎内の超時間的存在の無意識的記憶を有してそれを未來に轉嫁するがためだとフロイドは『夢の註釋』の中で説いてゐる。

いつか見し夢の中にもかゝること
ありしと思ふひと時のわれ

これは家妻が少時の腰折れであるが、これは實は『夢の中』ではなく、胎内の記憶である。トルストイの『少年時代』の中にも、窓から眺めてゐる只今の景色が、かつて何處かで見た景色だが、夢の中であつたか、何處かへ旅行した時のことであつたか、明白に分らぬと云ふやうな意を洩してゐるところがある。かう云ふ感じは意外に多くの人々が持つてゐるところであつて、これを心理學で一般にデジャビウと云ふ。嘗て生活したことがあるとの意で譯して『親熟感』とでもすべきか。名勝、舊蹟温泉の地は我々にデジャビウを起させる。そのなつかしさに堪え得す、その『故郷』に自分の名を不朽化（イムモータライズ）しようとする人々の心理こそ殊勝であると思ふ。さうしてこのデジャビウは意外に多く藝術の中に表れてゐるのである。

デジャビウと胎内擬想との關係はどうかと云ふに、胎内擬想はそれ自身として（何等客觀的な契機なしに）表れ得るが、デジャビウは我々の胎内擬想を呼醒す如き風景であると云ふ相違がある。多くのユートーピア物語は胎

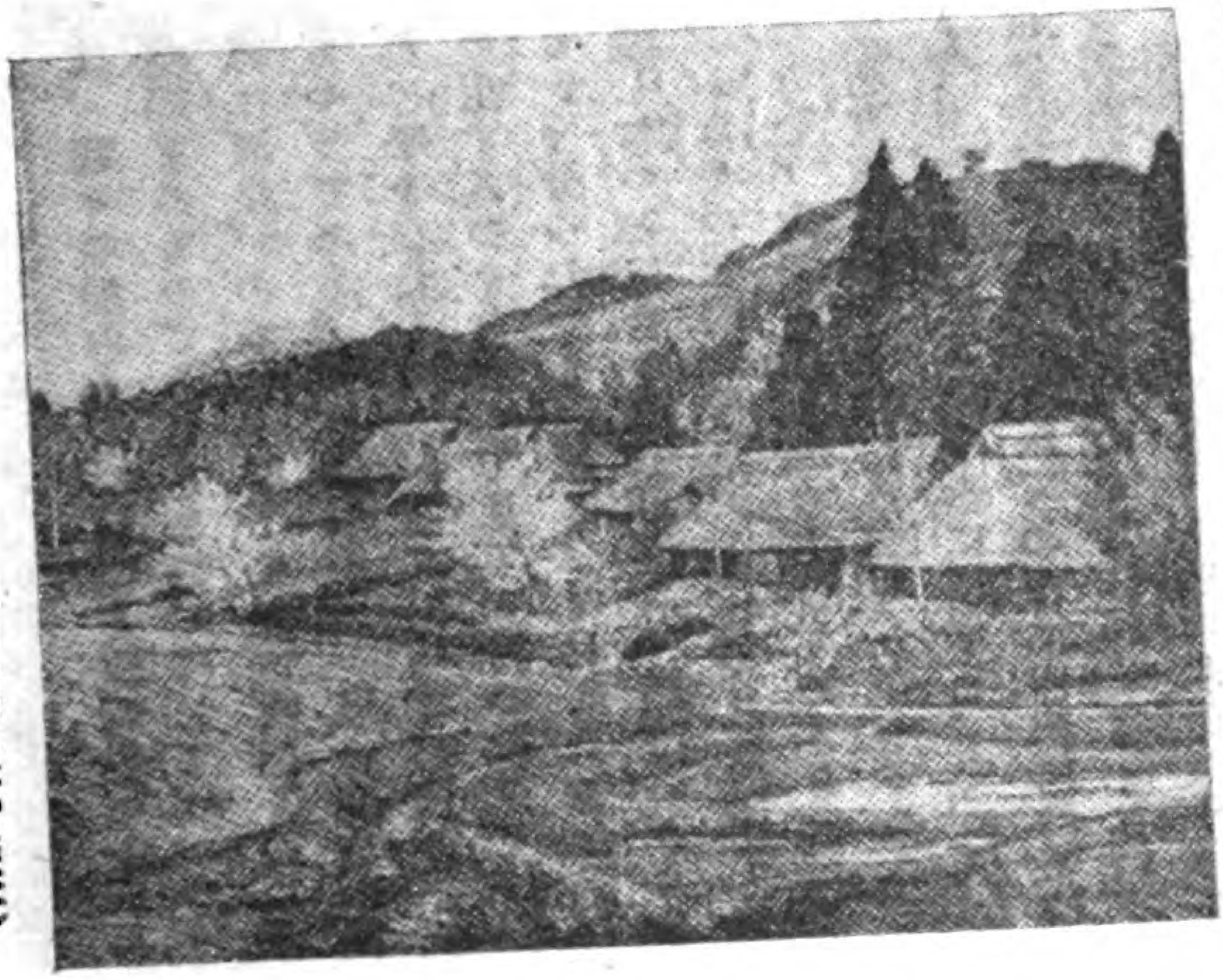
内擬想であるが、風景畫としての胎内擬想は殆ど總てデジャビュであると云ふことが出來る。デジャビュの現象は隨分古くから氣付いてゐたが、これを神祕的なものとして宗教的な意味を附會してゐたが、これに胎内擬想であるとの説明を下したのは精神分析であつて、これは實に偉大な發見でなければならない。

二、

胎内擬想の詩人、卽ちユトーピアの詩人としてはキリアム・モリスが最も代表的な一人であると思ふが、今は繪畫、殊に現代日本の風景畫家に就いて、このデジャビュの顯現を論じて見よう。

デジャビュの顯現には二種類あつて、内容的と形式的との別がある。内容的デジャビュの畫家には長原孝太郎、森田恒友の諸氏があり、形式的デジャビュの畫家には安井曾太郎、奥村博史の諸氏がある。梅原龍三郎氏の作にも時々その片鱗の見えることがある。

長原孝太郎氏のデジャビュは『山村』の形をとつて顯れるが、形よりも寧ろその雰圍氣が重要である。氏は『山村』と題する畫を少くとも四五點は、文展又は帝展に出品してゐる。それは必ず奥深い山懐の、陽影暖い春の日の、靜かな空氣の中に、まどろむ如く平和に暮してゐる（こんなところで唯物史觀を持出すなかれ！）農村の景色であつて、草は綠に萌え、梨花は淨らかな白色を點綴すると云ふ條件は殆ど必ずそこに具はつてゐる。氏はこれ等の畫材を殆ど必ず信州姥捨の附近から得て來られるのである。氏は美濃の産であり、やはり山國の育ちであつて、その鄕國が信州に近く相隣りしてゐることも、分析者には見遁せない事實であらう。


（長原孝太郎氏筆）

長原氏のデジャビュが『山村』を契機とするに對し、『水鄕』を契機とするものは森田氏の場合である。森田氏の繪には必ず氏の鄕里埼玉縣の水村か、或はその隣りの千葉縣下の水鄕が出て來る。池か沼か水田かゞ擴がり、水草が生え、樹木が茂り、その間に頭の大きい子供が、或は子供のやうに頭の大きい、飄輕な樣子の農夫が、點景せられる。作者はこれ等の人物に必ずや自己を同一化してゐるのであらう。精神分析の術語を用ふれば、これ等は作者の分身（サロゲート）である。殊に、それ等の人物が子供であるか、或は子供のやうな雰圍氣をたゝふる大人、殊に農夫である事に注意を怠つてはならない。その巨頭なるは胎兒の俤の無意識的寫生である。その不自然を怪まず、却つてこれをなつかしむ我々自身の心理を反省せよ！

内容的デジャビュが長原氏の場合には山間の平和な村にその契機をとり、森田氏の場合には低濕の沼地に夫をとると云ふことは偶々兩家の鄕土や生活環境がこれを決定したことであつて、デジャビュそのものは山村に又は水鄕に限られなければならないことはないのである。それは神社佛閣か或は山上氣淸く樹

木茂きところに鎮座することもあるし、また水邊波靜かなところに建立せらるゝこともあるのと一般である。

まき頃、某紙の三面に『山に抱かれて死ぬと遺書』との題下に、或る『哲學青年の家出』が報ぜられてゐた。その青年は『絶大なる宇宙に力弱き人間一個の存在が何程の價値があらう』と云ふ藤村操式の感慨をあとにして、自殺をしようとするものである。『自分は偉大な神氣をつゝむ山の懐にいだかれて死にます』と云ふ言葉を見ても、如何に山がこの青年にとつて母胎の象徴であり デジャピウ であるかゞ判る。一體に、『山懐』だの『山中無暦日』などゝ云ふ成句があるところから見ても、如何にこの哲學青年の場合のみならず、一般の人々の場合に於いても、昔から山が母胎の象徴であつたかゞよく判るのである。山の深いところを『山懐』とは、これを母格化せずして思ひつき得る言葉ではなからう。また『山中暦日なし』とは當然である。それは胎内に於ける意識以前の生活の擬想だからだ。

この哲學青年にとつて『山懐』が母胎の象徴であつたやうに、藤村操にとつては華嚴の瀧がデジャピウであつたことは我々にも容易に理解出來る。して見れば、長原氏の場合に於いて『山村』がデジャピウとなり、森田氏の場合に於いて『水郷』が母胎の象徴となることは、決して不思議でないのである。かう云ふと長原氏を厭世哲學青年式の風景畫家であり、



(森田恒友氏筆)

森田氏を藤村操式藝術家であると論ずるものの如くで、兩氏には甚だ失禮に當るやうだが、併しこれはたゞ人類の全般に普遍する傾向を云つたに過ぎない。世にアロャピタの強い人は多いが、長原、森田兩畫伯ほどの藝術を生み得るものは少いのであるから、兩氏の藝術價値はこの論のために少しも減ずるものではないのである。

三、

一體に人が好んで描くところと云ふものは必ずその人の無意識がこれを決定してゐるのであつて、長原氏は『山村』に非ずんば、殆ど必ず『花』を描く。これ長原氏に於いては同一物であつて、私にはそれは證明出來るが、今は立入らぬことにする。森田氏は殆ど水郷專門であつて、靜物畫人物畫は他人の作としてもあまり興味が湧かないらしい。

安井曾太郎氏は昨年中、實に數多くの『樹間の海』を描いた。よしんば畫題は時に『熱海附近』などゝなつてゐようとも、その作品のモーチフは依然、樹木の繁茂する間から隱見する碧緑の海の閃きにあつたのである。自分ながら意識は出來ぬが、深い興味を覺えたに相違ない。あまり同じ畫題を多く見せられて閉口したと云ふやうな批評も時には見えたやうであるが、私自身は、既にデジャピウの傾向が尠くないと見えて、安井氏のモーチフに飽かず興味を覺えたのである。

奥村博史氏は昨年個展を開いたが、その時見た内に數點、安井氏のと誠によく似た形式的デシャピウの作が發見せられた。やはり、樹木の茂みが畫面の周圍を圓形に限り、その中間に湖沼か海かゞ閃き、そこに舟が一艘浮んでゐる。かう云ふ風に穴の中から水を眺めることに歡びを覺えることは、これを純粹に感覺的または視覺的方面からのみ說明することは絕對に出來ないと思ふ。安井、奥村兩氏に就いて訊いて見ても、自分ながら屹度その何故なるかゞ分らないに相違ない。私の解釋は或は一時、氏等の『抑壓』のために反撥せられるであらうが、やがてその承認を得なければならない筈であると私は信じてゐる。

かう云ふ畫題をとる以上、氏等には多少偷視症の傾向があると診斷せられるが、私自身には――あまり人樣のことばかり鎗玉に擧げては濟まぬから云ふが――多少長管出產擬想の傾向があるらしいと思つてゐる。私は時々畫筆を弄するが、自分の興味を以て描いた構圖は、多く樹間に細路が奥深く走つてゐるところである。實際、畫家が『面白い！』と思つて畫架を立てる畫題(モーチフ)は、その當時その何の故なるかゞ分らない場合が多いと思ふ。風景ばかりではなく、人物の好み、殊に異性に對する美醜感はその人の無意識に依つて決定されてゐる場合が甚だ多いのである。これは美術上のみならず、文學上でも重要なる問題となつて來る。



(奥村博史氏筆)

梅原龍三郎氏も風景畫家としては殆ど必ず水の風景を物する。それも水の部分が全體の構圖としての均等を破壞することを物ともせぬと思はれるほどまでに、水の領分を多くする。併し氏のデシャピウは他の諸家ほど明白ではないやうである。

アメリカの精神分析學者トリドンは、多くの人々に就いて研究した結果、面白い事實を發表してゐる。それは母の乳房で育てられた人間と牛乳壜で育てられた人間とでは女に對する好みが非常に違ふと云ふのである。壜で育つた人間は肥つた女を好まぬさうである。もし果してさうだとすると、中川一政氏のやうに藥壜を描いて一種靈妙の力を示す畫人は、幼時如何なる條件の下に育てられて來たかゞ興味ある研究事項となつて來る。これ等はデシャピウの問題ではなく、愛玩症(フエチシズム)の問題であるが、共に無意識が我々の藝術の特質を決定する問題として關係させて研究すべき事柄である。また稿を新たにして論じて見たいと思ふ。(完)

株式取引所内幕漫談

瀬田大次郎

兜町に林荘治と云ふ株式取引員がある。震災後ゴム株なぞを買ひ込んで小金を儲け所謂當り屋の一人として市場の老寒貧どもから羨望の的となつて居た。此の先生、前の政友内閣の三土藏相が解禁風のかけ聲を始めた時分から逸早く方針を一轉して新東株やその外の目星しい株式に賣り始めたものだ、政友内閣が沒落し前年六月民政内閣が成立して、濱口君が胴間聲を張り上げ乍ら緊縮節約を叫び井上準之助君が在野時代の解禁尚早論をかなぐり捨てゝ解禁即行を說き出すと林君、一段猛然と賣始めたものである。何でも林君の打明け話に據ると先生ヒドク高橋龜吉君の財界評論に感銘して財界の前途を悲觀し平價解禁の打擊を見越して賣始めたものだそうな、そこで林君昨今大いに儲けたので高橋君の爲め一つ五六萬圓を投げ出して財界研究室を獻納しようとする殊勝な考へがあるとか、高橋龜吉君も思ひ設けない知己を得たものである。

此の林君と轡を並べて賣方の先陣を勉めた連中のうちに鈴木由郎君と云ふ之れも東株の取引員本業は深川の米穀商で年來二買ひ三遣りの相場で叩き上げた有數な思惑師がある。前の林君は致富一方で馬車馬の如く黄金に突進したがる結果何うやら情味が薄く兄弟連と金錢の點では全く他人付き合ひをして居ると云ふ評判を立てられて居る位であるが此の鈴木君となると思ひの外の佛性でそして大の親孝行だつた、震災に懲りて何でも筋金入りの檜普請の堂々たる邸宅を母御の爲めに建てたのだが御氣の毒にその母御は落成前にみまかられたとか聞いて居る、一寸灰汁の強い相場師仲間には似氣ない所のある先生だ。

此の林、鈴木の兩君よりズツト遲れてゞはあるが賣方には世襲した驍將の一人にもう一人吉川兵治郎と云ふ之れも東株の取引員がある、此の先生は期米相場師仲間の先達と云はれる俗稱萩長こと萩原長之助とか云ふ相場師の乾分である、吉川の賣りは大部分此の萩長の賣物だつたらしいが兎も角も此の吉川は日曜にはハンティングにユクカーボクカーか何かはき込んで見當違ひ乍らもゴルフの球をカッとばそうと云ふ、そして夫人への奉仕を怠り勝ちな、取引員としては珍らしいスポーツマンだ。外にもあつたが此の三人が先づ過般來の暴落市場に於ての賣方の大立物だつた、そして井上藏相やそんぢよそこらの連中から財界攪亂者の如く睨まれ一擧手一投足が新聞商況記事の種になつた。が、此の三人は格別之れと云ふ政治的色彩はない、同じ賣方でも鈴木隆と云ふのは政友會の會計監督を擔當して居る代議士でそして東株の取引員で政治色は鮮明だつた……が三人にはそうした色はない、又性格も三人三樣だつたが但し似寄つた所は强情と云ふ點であつた。此の三人が同じ賣方針が取持つ緣とでも云ふのであらう肝膽相照らして料理屋這入りや待合ゆきも一所連れだち賣思惑にも精を出したから、賣聯合だなぞと騒がれもし、買方からは國賊の如く罵しられたものだ。

此の三人は悪評を聞き流してだまりこくつて盛に賣つた、殊に相場の急所を目がけては他店から手を廻はして深刻に賣叩いたものであるそして遂に新東の相場は此の種の賣方と一方買方の防戰買から稀れに見る激戰となつて、取引所は無能か有意か二回迄も休會の失態を演出したのであつた。

既に大勢に逆行して居る買方は此の手に散々打ちまかされて甲倒れ乙死し、大概は相次で敗退して仕舞つたが始めから終りまで強情に買方針を突張つて口に策動に眞に悪戰苦鬪したたつた一人の大買方は沼間敏朗と云ふ東株取引員組合の委員長をして居る男だつた。此の男は有名な策士だ、議論も強い、所謂口八丁手八丁のやり手である。何でも明治の政傑沼間守一の甥だとかだそうだが、そのせいでもあらう之れ又強情の持主である。

餘談であるが株式界、投機社會なぞは妙な所であつて、彼奴が買方に廻つて居るから賣つてやれ、買方の某が大嫌ひであるから賣るのだなぞと云ふ癖がある。買方の中心林莊治と此の沼間と云ふ男は年來相容れない、そこで終りには林と沼間は意地づくで對抗して居たものだ。

前に云つた通り此の沼間は兜町屈指の策士で悪く云ふものは『取引所の重役を籠絡して私設理事で納まつて居る』なぞと陰口を聞いたものだ、實際取引所内に於ける彼れの羽振りは不思議と隆々たるもので、そして要所々々に其幕下を入れてある。

兎も角も暴落最中の彼れの活動は目覺ましいものだつた、先づ前年の六月中の證券投資シンヂケート計畫なぞも彼れの方寸から生れたものだし、その後の株界救濟運動なぞも表面は理事長岡崎君が中心だが之れを動かしたものは彼れ沼間だつたと云はれて居る。

だから表面から見れば只強弱の對戰だがその裏面を見ると少し大袈裟だが全く火の出るような辛辣な策動戰だつたのである。そして結果は此の沼間は遂に慘敗して何十萬圓かを煙にして仕舞つた、同時に賣方は林莊治が二百萬圓、鈴木吉郎・吉川兵治郎兩店が百萬圓宛位儲けたと云ふ話しだ、話半分にしても此の不景氣、總成貧の時代に一寸類がない儲け方だだから株屋はやめられまい。

○

此の新東株の強弱戰が先達て以來の株式界の動揺の火元であつた、そこへ又雜株の暴落と夫れから取引所重役の狼狽、銀行業者の警戒、井上藏相の戸惑ひ官憲の妙な仕打ち、民政黨の賣方國賊呼はり政友會の財界悲觀說なぞが妙にからみ付きもつれ合つて一種の不安時代を作り上げ異樣のセンセーションを社會に投じたのである。先づ取引所重役の狼狽振りを見る。

左樣、去年の六月の末だつた、東株理事者の口から株式買受けの一大シンヂケート計畫なるものが發表された、一億圓とか二億圓の資金を融通して來て優良株式を買漁つて相場の市價維持を計ると云ふのがその骨子であつた。左樣な夢見たいな大芝居が多寡が兜町だけで出來るものかと思つて居ると果して遂に煙の如く消えて仕舞つた。此の尻拭ひに證券投資會社計畫なるものが始まつて東株理事長が根津嘉一郎君や大橋新太郎君や誰れ彼れを工業クラブ邊に招待して折角物にしようと焦つたが未だに之れも物にならない。次て現はれたのが矢張り取引所重役や買方の中心の委員長連の銀行泣き付き運動であつたが之れも何等物にならずに終つた。物にならなくてもその都度買方の追證據金の金策の爲めには大

いに役立つた、腹のない賣方を脅かすにも充分だつた。

偖て折角の名案珍策も物にならず買方の愈々旦夕となつて四月の央ば、新東株の立會に買方から亂手を振るものが飛出した。此の亂手と云ふのは時價を無視した賣買を行はんとすることを指すので其く賣方や買方が切迫詰ると此の亂手を振つて市場を休業させその間にいろ〳〵金策を講じようと云ふ非常手段である、勿論市場の平靜を攪亂する遣り方であるから取引所には此の亂手を行ふものをつまみ出す規定が設けてある、夫れにも拘はらずその時は此の亂手をつまみ出しもせず立會を閉鎖して仕舞つた。此の立會停止に對しては買方擁護だとの批難が囂々と起きたが夫れも忘れかけた四月の末に又も何等の理由なく關西の各市場が平靜に立會つて居るのに東株取引所だけは立會を延期した、そして此の兩度とも新東株の賣方と買方の解合が出來た。見様に依ると取引所が買方の爲めに解合の機を作つてやつたやうに見へる。斯くの如く遂に天下の公器とも云ふべき市場を謂れなく閉鎖するに至つた理事者の態度は頓と不可解と云ふ外はなかつた。

○

尤も取引所自衛の爲めだと云へば夫れは夫れ迄のことで、決して買方擁護の爲めでなかつたに相異なからう。之れは武藤山治君が議會での質問の一節だが、武藤君の説に依ると日本中の株式總價格百十二億圓、夫れが民政内閣無準備の金解禁の爲め約二割即ち二十五億圓から値下りを蒙つて居る、此の内には銀行の所有株式が總價格五億七千四百萬圓、同株式貸出總額が十八億七千四百萬圓合計二十四億萬圓で此の二割五億圓だけは銀行が打撃を受けて居る譯であるさうな。

又取引所として見ると四月初めに於ける長期清算取引に上場されて居る建株の總價額は二十二億六千六百萬圓だが之れを前年の五月末に比較して見ると七億六千三百萬圓からの値下りになる。長期取引の建株と云へば日本財界に於ける事業會社株式の代表的のもの計りであるが之れに依ると前年五月以來三割から値が下つて居る。尤もこう値が下つた所で何にも取引所には一向に關係がなさそうに見へるが實は大ありなのである。一體取引所は取引員から身元保證金を預つて居る、此の身元保證金と云ふのはその取引員が違約した時なぞに處分して損を埋める忍し前に預つてある金だが之れは有價證券で代納することを許されてある。夫れから又取引所は市場での賣買には證據金を徴收する、此の證據金も若し取引員が損を拂へぬ場合には處分して損の埋め合せを行ふ爲めの預り金であるが之れも證券株券で代納を許してある。であるから株式の相場が下ると夫れ丈け身元保證金や賣買證據金が薄弱になり取引所の危險が増加するのだから大いに痛い、夫れでは相場が下るに從つてその預り價格をどし〳〵下げたらよからうのにそれが中々出來ない、今の重役閣下では到底出來ない藝當なのである論より證據その價格は四年の暮と今年の二月十何日に變つた計りであるからその後の相場暴落で今頃はことによると時價より預り値段の方が高くなつて居るかも知れない。そうなれば取引所は愈々大いに閉口する。

であるから相場が下る度毎に取引所はピクピクする、そして預り値段を下げようと考へても今度の如く買方が市場の利けものゝ組合委員長連だつたとする、その御機嫌を損ずれば地位が危ぶないから容易に値段を下げられ

ない。そこで少し市場の形勢が危險となるとスグ立會を停止、休止して買方の爲めに息つぎをさせたり解合をさせて助け船を出す。と云ふことになる筈である。

○

此の暴落中の官憲の態度は又中々面白いものだつた。野村證券會社が何とか云ふ機關誌を發刊して居ることは知る人ぞ知るがそこの編輯主任は勝田貞次君と云ふ人だ、新平價解禁論者で遠慮會釋なく財界悲觀論を書き立てゝ居たがツイ先達つて主人公から因果を含められて歐洲へ驅逐されて仕舞つた。何でも一夕野村銀行の誰かゞさる人から呼ばれておどかされた結果だと云ふ事だ。

それから高橋龜吉君の說を轉載した某雜誌記者が一夜にして放逐された、放逐しなければその雜誌が何處からか睨まれる。新興經濟と云ふ雜誌が發刊匆々その卷頭言がいかんとあつてツイ先達て發禁に會つた、元中外商業の經濟記者の某君が日清製粉會社のことを何とか話したとかで忽ち新場橋警察へ一寸來いを喰ふ。ダイヤモンド雜誌社の主筆安田與四郎君が同誌に飽きる程悲觀說を書いた所之れが又一寸來いを喰つた、新場橋警察署で悲觀說の理由が何か聞かれたさうだが。ダイヤモンド社は之れぞ東株重役が買方援助の爲め中傷した結果であるとしてその後堂々二頁に亘つて其眞相を暴露し東株重役の妄動をコキ下ろした。安田與四郎君自身も若し自分が市場の賣買に關係がありと事實を指摘するなら筆を折つて再び經濟論壇に立たぬと大見得を切つたが安田君その後泰然としてダイヤ誌に執筆する所を見ると官憲の疑は全然的外れであつたものであらう。

話しは違ふが先達て民政黨の代議士會が何かで兜町の賣方は某有力な評論家や新聞紙に關係ある某々二三の評論家に財界悲觀說を吐かしめて財界の攪亂を行ひつゝあると斷じて居る。現內閣の金解禁以前から筆に口に勇敢に新平價解禁論を唱へ平價解禁の打擊經からざるを說き政府の解禁斷行後の結果を指摘して財界前途の戒心すべきを說きつゝある有力なる經濟評論家は高橋龜吉君の外に新聞社關係では中外商業新報の經濟部長小汀利得君、讀賣新聞の山崎靖純君位であるが、宛かも民政黨の斷定は此の三君を指すように見へる。三君も名ざして云はれゝば法律的に名譽恢復の手段もあらう、然しこう陰險にそう世間に思はしめるように抽象的に中傷されたのでは爭ふ丈け野暮である。然し此の三君を知るものは如何にそれが謂れなき陰險なる中傷であることを知り、公憤を禁ぜざるものがあらう昔から儒を穴にすと云ふ言葉があるが極端に云へば政府側の經濟評論に對する態度は夫れと撰ぶ所がない。而して株式相場を不當に吊り上げ或は虛言を弄して相場の暴騰を期し市場の平和を紊さんとするものに對しては何等の取締りも行はなかつた。正に片手落ちである。

夫れから又取引所に對し監督權を有する商工大臣が東株の謂れなき休會停會夫れも兩度に亘る失態に對して何等の警告も行はず徒らに空徒の罵言を買つた丈けであつたのも此の混亂最中特視すべき出來事だつた。

○

偖て兜町の新東株買方は財界の狀勢こそ日に〳〵不利であつたが周圍から種々の形ちに於ける助勢の下に頑張り頑張つたが遂に大勢には抗すべくもなかつた。一方賣方は財界の狀勢には惠まれたがこうして凡ゆる方面から

精神的に色々の壓迫を感じたものである。とう／＼流石に强情を極めた連中も遂に此の點で敗けて買方の爲めに解合に應じて玆に激烈と奇怪を極めた東株市場の新東株戰も一と先づ終りをつげた。終りがけには林莊治君なぞすら自分は賣玉を片付けて金を儲ろにしたらモウ株式界を去るのだなぞと弱音を吐き出した、强情な先生がこんな弱音を吐く位ゐだから餘程ウルさい事があつたものだらう。尤もこう云ふことは確かにあつた、同じ兜町に杉野喜精老と云ふ取引員がある、山一證券會社の社長君だ。此の山一證券と云ふのは平素民政系と云ふより民政黨の金庫の三菱邊からバツクして貰つて居る、又杉野君は各務君の緣邊で各務君は三菱系の大立者で卽ち民政信者だ。此の杉野君が昨今井上藏相の御覺へ目出度いのも獨りそう云つた譯計りでなく杉野君獨得の交際術にも由らうが兎も角此の頃でも頻々と私邸や官邸へ參向して御氣嫌を取むすんだり御用を勉めて居る。その杉野君が一席賣方の大將林莊治君を招いて强硬に賣叩きの中止を諫言したものである、一體林は昔し杉野の世話になつたことがある、林が東株取引員として成功する迄になつたのは或る意味で杉野のお蔭である。その井上と懇親で且つ恩のある杉野から賣叩き中止を諫じ込まれて見ると一種異樣の壓迫を感じたに相異なかろう。世間では之れを井上が杉野をして賣方林を說かしめたのだと噂して居る。

○

兜町以外の方面に於ける株式暴落に基く悲喜劇をピツクアツプして見る。その中で最も皮肉なのは勳章疑獄の堤清六がモツソウ飯をカキ込み乍ら島德樣々と近頃あがめ奉つて居ることである、日魯漁區の競賣入札一件は既に天下周知の事實で今更ら再說をする迄もなく島德藏が黑幕となつて堤君社長の日魯社の漁區を奪取し、日魯社乘つ取りを目的としたものだつた。その折に島德が日魯株買集めに熱中して居る潮合を見て盛に持株を賣逃げたのが彼れ堤清六である。今日になつて見ると堤とすれば島德なる橫道ものが飛び出して自分の株式を買取つて吳れたから暴落に際しても損をせずに濟めたと云ふものである、島德藏も惡名を一世に轟かした代價として此の位の背負込みはあきらめることであろう。夫れにしても此の島德は別として日魯株暴落で散々な目に逢つたのは朝鮮銀行と三菱商事、それから英國のセールフレザー商會であろう。中でもセール商會は島德の競賣入札に激憤して堤を助けるつもりから、兜町の金萬商店と云ふ株式店から五六萬株の日魯株を買取つた結果、その後の値下りで百萬圓からの損を背負込み、鮭鑵販賣のコムミツシヨンの何年分かを一夜にして吐き出させられて仕舞つた。東洋モス株では大倉組が散々の味噌を付け今日では三百萬圓丸損の形ちだし、東電は東電證券を通じ、東邦電力は東邦證券を通じ何れも自社の株式買支へやう手持ちの同業會社株券値下りの爲めに資本金丸損とある。

損方を算へ上げれば此の外數限りもなく矢野君の第一生命保險會社なぞも御多分に漏れない。穴水家の財政整理の東電株を肩替りすると間もなく過般來の東電株の底拔け安を喰つたのであつたが、流石に社長矢野君だけに見切りも早くサツサと賣り拔けその株式が今はめぐつて東電證券株式會社の手に入つて居る。此の矢野恒太君は新平價解禁論者で財界前途を悲觀し乍ら何うしたことか持株を賣りぬけることを躊躇して今年初め邊りからやつと第一生命の持株を賣り出したなぞは日に似

合はぬ不出來だが最近では凡そ三千萬圓程の持株を悉く賣ぬけホツと一と息ついて居るそうである。

王子製紙の藤原銀次郎君も嘗ては富士製紙株を一と纏めに肩替りして大川兄弟をアツト云はせとう〳〵富士製紙の實權を握つたまでは大成功と見られたがその富士製紙株が暴落の先頭を切つたのだからその結果王子製紙も大穴をあけて仕舞つた。

存外かくれたる成功者は並て申すのも如何ではあるが宮内省である。たしか去年の春のことであつたが帝室御持株のうち郵船株を一と纏めに御拂ひ下げになつた。夫れは當初海運業の思召から郵船會社株式をも帝室で御所有になされたのであるが、今日となつては郵船會社の基礎も定まり、夫れに宮内省とし一民間會社の株式を多數御所有になることはその會社の經營者や他株主との遠慮を考へられた結果は賣拂になることになつたのだと仄かに伺がつて居るが。そのお拂下げ後今日となつては多大の値下りを生じ且又配當率も無し三分減少することになつたので此のお拂下げに依つて帝室財產の値下りを幾分なりとも防ぎ得た當時の内藏頭は大手柄だと申してもよかろう。之れを買受けた三菱もその代表格の各務君も今は帝室御持ち株に氣嫌れせずに濟み、そして三分減配と會社の内容整理を遂行し得るに至つたことを思へば値下り位は何ともあるまい。

○

解禁後の株式市場の活劇は先づ四月末の東株解合を一番の終りとしてその後相場も安定に歸した。今後第二幕第三幕の活劇が如何なる時、如何なる形ちを以て現はれるか?第一幕の活劇の如く陰暗な感じを與へるようなものでないことを望みたい。

不景氣知らず

小汀利得

一

日本はいま極度の不景氣に向つて、まともに曝されて居る。もつとも不景氣は世界的である、世界中のすべての國が、例外なく不景氣の爲めに壓倒されやうとしつゝある。

從つて事業といふ事業の大部分は、その製品やサービスの需要減退、金融難、株價値下等の爲めに、まさに靑息吐息の有樣である。

しかしこの所謂殺人的不景氣の眞唯中に於いても、依然として繁榮をつゞけ、若くは新たなる發展を遂げつゝあるものも、必らずしも絶無ではない。

劇やシネマや競馬や麻雀やカフエやバーは、この例外のうち就中最も著しいものである。尤も社會不安の著しい時に、享樂的な方面が反つて發展し繁榮することは、いまに初まつたことでは無い。日本でも七十年前、徳川末期の不安なる世相の一面には、享樂的＝特にエロテイツクな方面は、浮世の深刻なる不況と甚しい不安をば知らず顔に動いて居つた。

二

エロテイツクと云へば、淺草水族館の二階にさゝやかな存在を示して居るカジノ・フオーリーの舞踊團は、そのきわどいエロ・シーンの故を以て毎日毎晩滿員の盛況をつゞけて居る。カジノの馬鹿々々しさは、まづ二昔前の五九郎のお株を奪つた程度のもので、美しい踊り子が屹度『過つて』ヅロースを落したり、裸をかくした衝立が、これまた『間違つて』轉がつたりするところに、人氣を呼んで居る。

女優募集の場面が現はれる、女優志願の美しい娘が、胸から下をかくす衝立のかげに裸體で立つて居る、試驗委員は彼女の乳房を觀賞し、腰のあたりの發達振りを褒めそやす、試驗が終つて、いざ採用といふ時に衝立は『何かの拍子で』倒れる。するとそこには全裸に近い『女優志願者』の女優の姿が、立つて居る＝かうした馬鹿氣切つた瞬間的のエロ・シーンが、あれ丈の客を引くことは如何にもおかしな話だが、大人三十錢で一時間がエンジヨイ出來るところに、カジノが浮世の不景氣を知らぬ經營のコツがあるのであらう。

しかしかうしたエロ風景も今更の如く取立てゝ憤慨することもない、徳川の末期には錢湯の二階に遠眼鏡が備へられてあつたり、藏前では遊女の入浴が活人形で見世物にさへなつて居たのだから。

かうした特殊なエロ物は別としても、芝居と映畫の發展振りは、全くいまの不景氣を無視したものである。芝居もやつぱり不景氣や社會不安につき物で、昔から不景氣で失業者が多くなり、社會不安が増して人心がいら〳〵して來るにつれて繁昌して居る、劇場の數から云つても、去年は映畫に押されて一時減つて居たものが、今年は一月の二十五から三月には二十七となり、しかも之等の劇場

がどれもこれも大入滿員をつゞけて居つて、現に築地の東京劇場なんか開場早々滿員つゞきで、プレーガイドなんかには賣るべき切符も無かつたといふに到つてはたゞ〳〵驚くの外はない、尤もこれには少からず裏面の消息もあつて、當の劇場やプレーガイドには切符は無くとも、役者の後援者達の手には處分し切れない切符が山程あつた、それはいまの松竹の營業政策では、どの小屋をも常に滿員にして置く爲めに、その小屋へ出る役者に切符を賣らせるので、背負ひ込んだ役者は、芝居の前には難蠶稽古以上にこの切符賣りに骨を折り、自分のペトロン達へ切符を押しつけるといふ隱れたる事情もある。だから現在の役者は藝は必らずしも左程秀でゝ居らないでも、この松竹の營業政策を助長し、より多く切符を賣れば彼れは大トラストの宣傳機關によつて、その賣上高に正比例してその名聲を謳はれるのである。いま東京市内と郡部との劇場が、どれ丈の觀客を引いて居るかと云ふに、一月は市内二十五で二十六萬七千四百四十九人、郡部が九つ四萬六千五百九十二人、二月は二十四の二十一萬四千八百二十八人と九つの一萬六千二百五人、三月は二十七の二十五萬四千九百七十一人と、九つの二萬六千二百二十六人であるが、之れを去年のそれに較べて見る。

	一月 劇場數	入場人員	二月 劇場數	入場人員	三月 劇場數	入場人員
市内	二七	四〇六、四一六	二七	二四八、九八八	二七	二七七、一七四
郡部	七	一四、一五二	七	一六、六〇〇	七	一三、三二一

流石に數の上では少しく遜色があり、特に市内の不振が目につく、これは映畫の爲めに壓迫された爲めだらう。

	一月 館數	入場人員	二月 館數	入場人員	三月 館數	入場人員
市内	八四	二、四七五、六六六	九六	一、五七〇、八〇六	九五	一、九三六、八〇四
郡部	一三六	二、一四六、四八七	一二八	一、三三七、八七八	一二八	一、六七六、四五七
合計	二二〇	四、六二二、一五三	二二四	二、九〇八、六八四	二二三	三、六一三、二六一

三

同じ方面でも映畫は、大衆的である丈に芝居とは比較にならない程の好景氣振りを示して居る。

て、去年の一月の館數市郡併せて二百十、入場者三百九十五萬百二十九人、二月の同じ館數で二百五十七萬五千三百九十人、三月の三百九館、三百二十九萬一千二十三人に比較すれば、各月とも館數に於いても人員に於いても斷然進出して居る。

映畫について、否な映畫以上にいま目醒ましい勢ひで擴がりつゝあるものにマージャンがある。

麻雀はいま東京に四百、大阪に三百、京都百五十、神戸百、名古屋八十、横濱三十を初め内地朝鮮を加へて三千を超ゆるクラブがあり、東京だけでも一日に麻雀クラブに出入する者二萬四千人の上に在るといふ。

餘りに急速度の發展を遂げたので、日本麻雀聯盟派の外に日本雀院、東京麻雀の二派が分立して互ひ鎬を削る程になつた。

麻雀クラブは、極めて手輕で市内でも郊外でもまたどんな田舍でも、一寸心得のあるものならば、誰でも警察へ屆出る丈で出來、卓も置けば一卓一日三四平均の席貸が行はれるとして九圓の收入がある、この不景氣のドン底に大した骨も折らないで一日十圓近い收入を得る途は外には全然見當らない。誰も納

子も麻雀クラブを初める所以はこゝに在る。

併し之れも一町内に三軒も四軒もあるやうになつては、何か客引の種がなくてはならない、そこで玉突のゲーム取りと同じやうに、美しい女性のマネヂヤレスを置くことが必要になつて來た。マネヂヤレスはすべての看板娘、看板お神と同じやうに、お客の最も多く出廻る役所や銀行會社の退け時には店先にチラ〳〵すること丶、お茶を運んだりする外、お客が四人に充たない時には、そのお對手をする丈の心得が要る。そこで最近はこのマネヂヤレスの養成所迄も設けられるといふ超景氣振りである。

麻雀がかう盛んになつては、同じ遊び場所の玉突や碁會所はもう時代に遅れて門前雀羅を張つて居るかと思へば、どうして〳〵玉突も碁會所も數年來皆つて見ない好景氣だ。

カフエやバーも依然として大繁昌、近頃はバーとカフエとを兼ねると云ふので『バフエー』など丶營業の名前のやうなものも現はれたが、カフエ、バーは四月の市電ストライキでも大して影響を受けず、一番ひどい打撃を受けた方で三割五分減、近頃賣出しのサロン春なんかは客様が路面電車や圓太郎に縁の無いせいか、全然影響を受けなかつたさうだ。

さらに不景氣を種にボロい儲けをして居る者に、惡周旋屋と不良結婚媒介所がある。食と職と男女を喰ひ物にする不良周旋屋に取つては、地方からいゝ椋鳥が上つて來るのは、全く不景氣の賜である。結婚媒介所が純粹の結婚の媒介よりは、より多くコンキユバインの供給所となつて居るとは、人の知るところだが、之れがこの殺人的不景氣とエロ氣分旺盛時代を書入れとして居る。

四

かう述べると不景氣を知らぬ方面は、すべてエロかゼミ・エロに限つて居るやうだが、必らずしもさうばかりではない、それどころか思ひ切つて色氣のない方面に忙がしくて手の廻らないのがある。

その代表的なのは裁判所であらう。東京市疑獄、鐵道疑獄、賣勳疑獄等々で檢事局の忙がしいのも畢竟するに世の中が不景氣の爲めであるが、しかしそれは稍々こぢつける嫌ひがある。何となれば民事は素より、刑事法廷も近頃の不景氣で普通の事件は殆んど無い、辯護士も手を束ねて法服は年中事務所にぶら下り切りと云ふ有樣であるから。一體普通の裁判事件は不景氣が徹底して來ると反つて暇になると相場の定まつたもので、辯護士も景氣の上り坂と下り坂とが一番忙がしいので、もう不景氣も底まで來ては用無しである。

その普通法廷に代つていま不景氣を知らないのが調停裁判所で、この方は家賃、地代の値下げ問題で目の廻る程の忙がしさであり、これと同じ程度に忙がいのが執達吏諸君である。何しろ丸の内一丁目、東京驛の前に東京裁判所執達吏の名で以て、地所差押への立札が出る世の中だ、これは持主たる三菱合資會社が占有者毎夕新聞社を對手取つて起した立退訴訟の結果だが、かう云ふことは太田道灌が江戸に居城を築いて以來、徳川幕府の大名屋敷時代、明治政府の陸軍用地時代は勿論、明治二十二年三菱が丸の内一帶を百二十萬圓で買ひ取つてからも、曾つて一度も無かつた現象であらう。たゞし裁判所や執達吏は幾ら忙がしいからといつても積極的に儲かる譯ではないが、同じ政府の事業でも專賣局なんかは無競爭で高い煙草を賣付けるので今年三月末を以て終る昭和四年度も一億七千何百萬圓の純益を舉げて豪勢なところを示して居る。

従つて煙草元賣捌の利權を握つて居るものも不景氣を知らないわけであるが、彼等は相當政黨屋に喰入られて居るやうだ。

五

民間の商賣でこの不景氣に一番ボロい儲けをせしめて居るのは、國定教科書共同販賣所である。之れは全國兒童、從つて各家庭から暴利を絞り取る點に於いてかれ〴〵問題となつて居る會社だが、普通の本屋にやらせればいまより二割六分も安く出來るといふのだから、その暴利振り鮮やかなもので、全國小學校兒童の數は幾ら不景氣が深刻になつても年々殖える一方で、いまでは九十何萬に近く、之れ以外の學用品は節約しても、本丈は買ふ、しかも出版費や運搬費その他人件費等は不景氣て、思ひ切つて下つて居るのだから、かう云ふのになると不景氣大明神樣。どうぞいつまでもつゞいて呉れますやうと、毎朝神棚に向つて祈つて居ること疑ひなしであらう。

國定教科書につゞいていゝのが中等學校の教科書、全國中等學校の生徒數は統計年鑑によつて昭和三年度のそれを見ても中學校五百十八校の三十一萬六千七百十三人、高等女學校六百六十三校二十五萬五千七百三十五人、甲種商業學校二百九校十萬三千五百六十九人以下工業、水產、實科高等女學校等を加へると優に百萬を突破する。之れがまた原價の安くなつた教科書を高く買つて呉れる上に、今年は大學出の就職難から、中學校の志願者が少くなつて、實業學校の入學者がうんと多くなつた。そして中學校の志望者が少くなつたといつたところが定員が缺けるやうなところは全國數十校しか無くて、反對にいまゝで定員に充たない場合の多かつた實業學校が一杯になつたんだから、之れまた不景氣樣々である。

かうやつてさがして見れば、この不景氣のドン底に反つて利益を享けて居る者も決して少くない。特に株屋の賣方なんかは、不景氣なればこそ僅か半年か一年で、巨萬の富を積むことも出來る。いま東京の株式市場で丸莊といへば、誰知らぬ者もないが、この丸莊事林莊治氏が三百萬圓とか五百萬圓とかいはれる財產をつくつたのも去年濱口内閣が出來て、金の平價解禁を企てたればこそである。兜町では林氏の外、山吉事鈴木市郎氏も所謂當り屋で、彼れは嘗つて大正九年の反動に蹉跌して、一時は頗る振はなかつたが、今度は賣り思惑悉く圖に當つて、これまた少からぬ富をつくつたと傳へられた。

之等の外に尙百貨店が不景氣を知らぬものゝ一つとして殘されて居る。百貨店も勿論不景氣の影響を受けない譯ではない、然し其は同じ品物の賣上げ、同一のスペースでの商内の上の事で、百貨店は普通の小賣商と違つて積極策を採つて、盛んに支店、分店等を出し、時には國內の目星い都市に出張販賣をして、從來の店で失つた賣上げをこゝで取返した。亦同じ店での商品でも、京吳服類のやうな高級品の賣行きは目立つて減退したが、その代りに繪羽織だの、訪問着のやうな安物が大いに賣れるやうになつたので、結局店によつては去年と變らぬ成績を擧げて居る。百貨店の食堂は、一人當り落す金は少し減つたものの、利用者は不景氣の結果反つて殖えて、この方は無條件の繁榮をエンジョイして居る。

七

日本で今の不景氣の中に、探し出し得る不景氣知らずの商賣はまあ大體こゝいらの處だが、一度視野を擴めて、世界に同種のものを探さがして見ると、流石に廣い世界だけに變つ

た商賣もある。そして其尤なるものは、歐洲に於けるスパイとカウンタースパイであらう。

スパイなどゝいふロマンティックな商賣は、世界大戰で終りを告げたかと思ふと、それどころぢやない、大戰後國際聯盟が出來、國際法廷が出來、一打に餘る國際會議が開かれた上に、さらに一歩を進めて、歐洲聯邦が出來やうとして居るにかゝはらず、この古い商賣はいよ〳〵ます〳〵盛んになつて來た。いまでもスパイの拘引や裁判は、絕えず歐洲の新聞を賑はして居るが、今日のスパイは大戰前及び大戰當時とは、まつたく質が違つて戰前のやうに對手國の陸軍の動靜をさぐる丈ではなく、スパイも進化して政治探偵と經濟探偵との二種類になつた。しかもそのうちでも、特に經濟方面を擔當する者の役目が重要になつて來たことは時世の變化である。

彼等がどう云ふことをやるかと云ふに、例へば或國が或る地方に鐵橋を、二つ架ける計畫を樹てたとする、その鐵橋は經濟的に意味があるかどうかを、充分に專門知識に照して、之れが經濟上重要な理由がないとなれば、專ら軍事上の理由から來たものとして報告する。さう云ふ報告は非常に高い價で以て買取られることは云ふまでもない。

そしてこのスパイの多くが、屹度ダンサーその他の寬の女性をサブ・エセントとしてつかつて居るか、若くはダンサー自身がスパイとして軍人等をあやつりながら活動して居る點で、特別に花やかなロマンスを伴ふ。

ところが、このスパイも時々カウンター・スパイ＝それは唯スパイの所在を探る丈の目的を以て活動して居る＝に會つて、つひに尻尾を出すことがある。

兎に角歐洲諸國の間は、今日では縱橫に巢を張つて居るスパイとカウンター・スパイの爲めに惱まされて、各國相互の信認は全く消失し、或る國では無線電信のセットは、個人的に信認の有る者同志でなければ賣買をしなかつたり、空飛ぶ傳書鳩が何か祕密の通信を携へて居ないかとの嫌疑を受けて、可愛さうに射落されることすらもある。

さう云ふエピソオドはどうでもいゝ、唯不景氣といふよりは、寧ろ經濟的危機に瀕して居る歐洲諸國の間には今不景氣を知らぬ最も有力な商賣として、このスパイとスパイのスパイが存在して居ることは、國際協調の大いに叫ばれる今日、何といふ皮肉であらう。

新販賣戰術



イーストマン
ビジネスコダスコープ（商業用映寫機）

――机上で僅かに四分間
――その準備に三十秒

によつて商品製作の全工程、商品の機能、その他あらゆる事象を活動寫眞によつて說明し、相手方を信賴せしめ、購入の決意を促す。

屑籠に投ぜらるべき幾多の印刷物よりも遙に有効にして、販賣戰術上の効果は正に一〇〇パーセント。そのフヰルムは費用低廉なる**シネコダツク**によつて撮影し、又は既製標準フヰルムより縮寫をなす。一流販賣店に照會せられよ。

大阪市西區南堀江通一丁目
日本 シネ コダック サーヴィス社

EASTMAN KODAK CO., *ROCHESTER, N. Y., U. S. A.*

BK—3

世界怪奇實話VI

H 21 の 女

――戰雲に乗る女怪（其二）――

牧　逸　馬

H21といふのが、獨逸の間諜細胞としてのマタ・アリの番號だつた。彼女の通り名だつた。

4

このマタ・アリも、英國の密偵エリック・ヘンダスン少佐には、見事に手を燒いてゐる。ヘンダスンといふ男は、英吉利の特務機關に其人ありと知られた敏腕家で、赫ら顔の、始終にこにこしてゐる、しかし時として充分ぴりゝとしたことをやつて退ける、軍人といふよりも、ジャアナリズムの腕手の通信員型（タイプ）の人物だつた。H21はこれへぶつかつて行つたのだが、若しマタ・アリが眼先の利く女だつたら、この失敗で、獨逸のスパイとしての自分が案外知れ渡つてゐることに氣がついて相當警戒の必要を感じたことだらうが、元來この踊り子のスパイは、スパイのためにスパイを働くやうな性格で、多分に、盲目蛇に怖ぢずといふところがあつた。一向平氣で、その後も盛んに活躍してゐる。結局獨逸の密偵部に散々踊らせられて、死へまでダンスする運命だつたのだ。

ソフィアで、獨逸大使ゲルッに紹介されて、マタ・アリはヘンダスンに會ふ。目的は、英吉利とアフガニスタンの外交上の一つの秘密事項を聞き出すため。しかし、相手が、定評ある腕利きなので、初めから大した收穫は豫期してゐなかつたが、それだけにまた、マタ・アリとしては、腕の見せ場にもならうといふもの、丁度當時、獨逸とアフガニスタンとの間にも進行しつゝあつた或る交渉に關して、獨逸密偵部員が潜動してゐるあ

ひだ、ほんの暫く、ヘンダスンの注意をマタ・アリの身邊に集めて邪魔しないやうに足停めして置くことが出來れば、先づ成功だが、その上で、もし機會に惠まれたら、英對アフガニスタンの關係にも、鳥渡綠を引いてみるがいゝ、といふのだ。腕に縒りを掛けてかゝる。

紹介されると、深い茶色の眼を、その脊の高い英吉利人の上に微笑ませて、

「あら、ヘンダスン少佐でいらつしやいますの。あたくし、古いお友達のやうな氣が致しますわ。何處かでお眼に掛つたことが御座いますわねえ少佐。」

甘い抑揚を附けて言つた。婉然一笑、東洋で謂ふ傾國の笑ひといふやつ。そいつをやりながら、觸れなば折れんず風情、招待的、挑發的な姿態を見せる。ところが、少佐の聲は、興も無さそうに乾いたものだつた。

「さうでしたか。何處でお會ひしましたかしら。」

「嫌ですわ少佐。あたくし思ひ出しましてよ。あのほら印度のボンベイ。」

「いや、そんなことはないでせう――僕も思ひ出しました。」

「あら、何處、何處、何處で御座いますの？」

「伯林市ドロテイン街一八八番邸。」

「あらつ！」虛を衝かれたマタ・アリは、忽ち動搖を隱して、立て直つて來た。「さうかも知れませんわ。あたくし、あんまり方々へ參りますので、時どき人樣や場處のことで、飛んでもない思ひ違ひをして笑はれますのよ。はあ、歐羅巴中を旅行いたしてをりますの。東洋の心を舞踊で表現したいといふのが、あたくしの藝術上の願望で御座いますわ。」

大きな事を言ふ。エリク・ヘンダスンはくすつと笑つて、

「其の東洋の心は、」眞正面から斬り込んで來た。「歐羅巴第一の暴れ者に買はれたんださうですな。」

完全にだあとなつてゐるH21を殘して、ヘンダスンは他の人々へ笑顏を向けて行く。マタ・アリは口唇を嚙んで口惜しがつたが、何うにもならない。その通り報告した。

ダンサア・スパイ、踊る女密偵、などと色んな浪漫的な名で呼ばれてゐるマタ・アリは、ダンサアには相違なかつたが、勿論藝術家ではなかつた。裸體で勝手な恰好をするだけの、與太なものだつた。

彼女の出現は、却つてエリク・ヘンダスンに事態の逼迫してゐることを報せるに役立つた丈けだ。彼奴が此處へ出て來たところを見ると、同類が他地で何か遣つてゐるに相違ないと白眼んだのだ。思ひ當る事があるから、エリク・ヘンダスンは、其

夜のうちにアフガニスタンへ飛ぶ。

このアフガニスタンでのヘンダスンの劇的活躍こそは、獨逸の特務機關をして切歯扼腕させたもので、この事件があつてから、ヘンダスンの身邊は度びたび危險を傳へられた。それ程、獨逸自慢の智能部が、こゝではこの砂色の頭髪をした一英國人のためにあつさり鼻を空かされてゐる。

獨逸政府は、アフガニスタンの族王(エミア)に祕密條約を申込んでゐた。幾折衝を重ねた揚句、漸く假條約締結の段まで漕ぎ付ける。外務主腦部の他誰も知らない密約である。カイゼルの批准を得た草稿を帶びて、嚴祕のうちに、獨立特務機關の有數な一細胞が、伯林を出發する。

外交の祕密文書を遞送する。所謂外交郵便夫として本格的な場合である。成るたけ眼立たないやうに、特務室などは取らない。態と一般乘客に紛れ込んで乘車する。獨逸文の原文に添へて、族王(エミア)が讀めるやうにと言ふのでアフガニスタン語の飜譯を携へて行く。問題はこの譯文だつた。

嚴密に調べると、何うも誤譯が多いといふのである。それも原文にあるよりも、アフガニスタンに有利に取れる間違ひ方だつた。そんな事とは夢にも知らない族王(エミヤ)が、その曲筆の譯文を見て、さうか、これならと言ふんでにこにこ署名をしやうもんなら、獨逸は忽ち儲け物だ。こつそり舌を出さうといふ寸法。人が惡いやうだが、何うせ帝國主義下の國力伸長のからくりなぞ、みんなこんなやうなもので、獨逸が格別不正な譯ではない。殊に小國に對する場合、何處の國も平氣で可成り非道いことをして來てゐる。これを稱して國際道德と言ふ。

で、莫迦々々しいやうだが、獨逸は、盲人に、好いやうに手紙を讀んでやる長屋の惡書生みたいな遣り方で、アフガニスタンを誤魔化して何かせしめやうとした。それが何であつたか、はつきり判明してゐない。戰時に於ける鐵道沿線警備に關する申合はせ、そんなやうな問題だつたらしい。

原譯二通の條約草稿を茶色の革袋へ密封して、特別仕掛けの錠を下ろす。腕つこきの特務員が、大きな眼を開けて、片時も離さず袋を握つて往くのだ。萬善を期するため、互ひに識らない密偵部員が二人、銘々自分丈けと思つて、見え隱れに附いて行く。郵便夫の男も、二人の顏を知らないのだから、スパイがスパイを尾けてゐる形で、二重三重の固めだつた。實際、この時分の獨逸には、密偵機關(カウンタ・エスピオネイヂ)と言つて、最も鋭い、老練家のスパイが選ばれて、始終スパイをスパイして警戒眼を離さない制度になつてゐた。スパイをやる位の奴だから、何時寢返りを打たないとも限らないといふので、皮肉な話しだ。そこで、

スパイをスパイするスパイだけでは未だ不安だとあつて、そのスパイをスパイするスパイ、つまり、始めから言ふと、スパイをスパイするスパイをスパイするスパイを置いて、その又上に、スパイをスパイするスパ——兎に角、識らない同士の三人旅である。途中何事もなくアフガニスタンへ着いて、密書入りの革袋は、直ちに獨逸領事館内の金庫へ保護される。領事館で初めて顔の合つた三人、スパイの鉢合はせで、驚いた。

『やあ、君もか。』

『何だ、君もさうだつたのか。何うも眼付きの宜くない奴が尾けて來をると思つたよ。』

『しかし吾輩は、君がさうとは氣が付かなかつたぞ。しよつちう眠つてたぢやないか。』

『うん。心眼を開けてね。』

『何うだか。怪しいもんだぜ。隙だらけだつた。』

『馬鹿言ひ給へ。虚實の間を往くのがスパイの妙諦なんだ。はつはつは。』

なんかと、館員も加はつて豪傑揃ひの獨逸人の事だから、阿々大笑、がやがややつてゐるところへ、ノックもなしに扉が開いて、のそりと這入つて來た人物を見ると、長身、筋肉的、砂色の毛髪。手筈に依れば、ソフィアで、同志H21に現つを抜かしてゐるは中の花少佐エリク・ヘンダスンだから、一同おやつと飽氣に取られてゐる。

ひとりで舞臺を掠つたヘンダスンは、得意時の人間の商人的馬鹿叮嚀さで卓子へ近付いて、いきなりポケットから二通の書類を取り出して叩きつけた。

『紳士諸君、』ちよいとドラマテックに見得を切つて、『この條約文の飜譯は不正確極まるものですな。誤譯だらけですな。あんまり非道いんで、鳥渡いま、族王様にお眼通り願つて御注意申し上げて置きましたよ。族王さまは大層怒つてゐらつしやる。何うも獨逸人は怪しからん。もう少しアフガニスタン語を勉強したら好いぢやないか——』

今そこの金庫へ入れた革袋の中にあると許り思つてゐた『嚴秘』の二書を、エリク・ヘンダスンが持つて來て、眼の前へ突きつけたのだ。この、西洋仕立屋銀次みたいな腕前に、敵乍ら天晴れと一同は舌を捲く。ヘンダスンはすつかり男を上げた。

それにしても、H21は何をしてゐる？

5

伯林市ケニゲルグラッツエル街七〇番。

獨逸國事探偵本部。

H21は此處へ呼び出されてゐる。

風雲急。近づきつゝある大戰の血臭を孕んで、歐羅巴の天地は何となく暗い。微かにかすかに、何處かで戰爭の警鈴が鳴り響いてゐる。空氣は凝結して、ぢつと爆發の機會を待つてゐるのだ。もう口火を切る許りである。そんなやうな狀態だつた。

獨逸外交參謀の機密に參與する極く少數の者は、何時、何處で、如何にして、其の第一石が投じられるか、豫め知つてゐた。が、勿論、あれ程の大波紋を捲き起さうとは、カイゼル自身も思はなかつたらう。豫定の日は來た。一九一四年八月の運命の日。大戰だ。

召集令。軍隊輸送。停車場の接吻。銀行家も大工も大學教授も肉屋も新聞記者もパウルも、みんなカアキ色と鐵製のヘルメツトだ。やがて、進軍、塹壕、白兵戰、手擲彈。砲聲が聞こえて來る。爆撃機の唸りが空を覆ふ。

伯林ケニゲルグラツツエル街のスパイ本部で、マタ・アリは命令を受け取つてゐた。直ちに巴里へ走り、全力を盡し、凡ゆる手段を講じて、佛蘭西内閣の某閣僚――それが誰であるかは後で判る――の信任を獲よと言ふのだ。その人物性行に關する細大の報告、最も自然に接近し得る方法等、すべて同時に呈供された。某閣僚許りではない。各方面の要路に立つ人間を、出來る丈け多勢彼女の魅網に包み込まなければならない。殊に陸海軍、民間運輸關係の有力者を逃がすな。H21は、その有てる凡てを彼等に與へて、彼等から聽き出した知識を逐一最も敏速に通牒せよ――そして、一つの注意が附加された。

「忘れてならない例外がある。その某閣僚に對してだけは、如何なる場合、いかなる形に於ても、H21の方から能動的に、何か探り出さうとするやうな言動を示してはならぬ。これ丈けは嚴守する事。」

と言ふのだ。命令は解つたが、この最後の理由が腑に落ちない。一番の大物に探りを入れて惡いなら、それでは、一體何の爲に生命を賭して近づくのか、其の動機が飮み込めなかつた。が、既に數年密偵部にゐるのだから、反問する事の危險を熟知してゐる。凡て命令は鵜呑みにす可きで、下手に咀嚼したり吐き出したりすべき物ではない。マタ・アリは、默つて合點いた。

和蘭の市民權を持つてゐる。難なく國境を通過して巴里へ這入つた。初めて來る巴里ではない。以前この裸體のダンサアをパトロナイズした政界、實業界の大立物がうんとゐる。みんな

他人に戰爭させてのらくらしてゐるブルジョア連中である。又あのマタ・アリが來ると言ふんで、爪立ちして待ち構へてゐた。ニユウリイに素晴しいアパアトメントが取つてある。戰時でも、巴里の灯は華やかだ。直ぐに女王マタ・アリを中心に、色彩的な「饒舌と淫慾と流行の宮廷」が出來上つて、吾れこそ一番のお氣に入りだと競爭を始める。この美貌の好色一代女が豈計らんやH21などといふ非詩的な番號を持つてゐやうとは、お釋迦樣でも御存じなかつた。この宮廷の第一者は、疾くに最大の獲物として狙つて來た佛內閣の閣僚某、メエトルを上げてマタ・アリのパトロンになつた。が、外部へは綺麗に隱して、閣議の歸りやなんかに、お忍びの自動車を仕立て丶ニユウリイのアパアトへしきりに通つてゐる。あの嚴命がある。一向譯が判らないが、兎に角マタ・アリはそれを守つて、何も訊かなかつた。大臣は元より、何も言はない。寄ると觸ると、誰もかも話し合つてゐる戰爭のことを、不自然な程、二人は話題に上さないでゐる。

其の代り他の戀人群の間に機察を逞つた。殊に聯合軍の將校に好意の濫費をやつたから、報告材料には困らない。別れたあたしの良人と言ふのは、英吉利の士官でしたのよ——背て一緒に印度へ行つたマクリイの事だ。嘘ではない。あどけない顔でこんなことを言ふから、マタ・アリが、時に女性にしては珍しい軍事上の興味と知識を示しても、誰も不思議に思はなかつた。無邪氣な笑顔で、急處に觸れた質問を巧みに包んだ。休暇で戰線から歸つて來てゐる軍人達である。銘々自分の、そして自分だけの情婦と信じ込んでゐる女が、寢臺の痴態に於て、優しく話しかける。時として、可愛い程無智な質問があつたり、さうかと思ふと、何うかした拍子に、ぎよつとするやうな際どい事を訊く。こつちは下地に、豪さうに戰爭の話しをしたくて耐らない心理もある。皆ベラベラ饒舌つてしまつた。それが凡て、翌朝暗號電報となつて特設の經路から伯林へ飛ぶ。當時のマタ・アリの活動は、眞に眼覺ましかつた。只さへ巴里だ。戰時である。性道德は遲緩し切つてゐる。マタ・アリは、スパイそのものよりも、色んな男を征服するのが面白いのだ。今度はそれが仕事で、資金はふんだんに支給される。時と所と人と、三拍手揃つて、あの歷史的なスパイ戰線の尖端に踊り拔いたのだつた。

マルガリイの料理店である。赤十字慈善舞踏會の夜だつた。明るい灯の下、珍味の食卓を中に、一對の紳士淑女がフォウクと談笑を弄んでゐる。新型のデコルテから、こんがり焦けた

やうな、肉慾的な腕と肩を露はしたマタ・アリは、媚びの他何も知らない、上氣した眼を上げた、相手の、聯合マリン・サアヴイスのノルマン・レイ氏を見てにつこりした。駝鳥の羽扇が、倦るさうにゆらりと揺れて、香料の風を送る。何うあつてもこゝんところは、プラス・ヴアンドウムがルウ・ドユ・ラ・ペエの空氣でないと、感じが出ない。グラン・ブルヴアルだと、もうコティのにほひがする。

『ねえ、この頃何にも下さらないわねえ。』下品なやうだが、そんな意味の事を言つた『あたし西班牙のマンテラが欲しいんですけど、いま巴里中何處を捜してもないんですつて。詰んないわ。』

『なに、西班牙のマンテラですか。あれが欲しいんですか。さうですか。』ノルマン・レイは、直ぐ顔を輝かして乗り出して來た。今夜何ういふものか機嫌が悪くて、些さか持て餘してゐたマタ・アリが、急に天候恢復して少女のやうにねだり出したのだから、彼は、カイゼルが降参したやうに嬉しかつたのだらう。四角くなつて引き請けた『宜しい。大至急西班牙から取り寄せることにしやう。バルセロナの特置員(エイジェント)へ電報を打つて、次ぎの便船で送らせますから、譯はない。』

『あら、素晴！　すると、何時來て？』

ノルマン・レイ氏は、商船サアヴイスの理事なのだ。聯合國の汽船の動きを、腦髓の皺に疊み込んでゐる人である。

『待ち給へ。』日を繰つて考へてゐる。『今日は火曜日と――木曜日の眞夜中に、コロナ號がバルセロナを拔錨する、聖ナザアルへ入港(はい)るのが來週の水曜日と見て、さうですね、金曜日には間違ひなく屆くでせう。』

異様に眼を光らせて聞いてゐたマタ・アリは、レイ氏の言葉が終つた時は、もうマンテラに對する關心を失つたやうに、横を向いて、小さな欠伸を嚙み殺してゐた。ノウさんは賴母しいわ位言つたかも知れない。

次ぎの日、マタ・アリは、長距離電話でブレスト町を呼び出してゐた。兄と稱する人物が、線の向端に聲を持つた。親類の一人が、木曜日の深夜に發病して、肺炎になつた。次ぎの週の水曜日に入院するから、それ迄早速看病に行つて貰ひたい――マタ・アリは電話でさう言つてゐる。直ちにブレストから、和蘭のロッテルダムへ電報が飛んだ。電文は、ブレストの一キヤフエが鰯の罐詰を注文してゐる文章だつた。何打、何月何日の何時に着くやうに、何うやつて送る事――そして、ロッテルダムからは、暗號電報が海底深く消え去る。

三日後の金曜日、深夜中である。

ビスケイ灣。あそこは何時も荒れる。殊にこの晩は猛烈な暴風（しけ）で、海全體が石鹸の泡のやうに沸き騷いでゐた。聯合軍の食糧を滿載して、前夜バルセロナの港を出帆したコロナ號は、燈火が洩れないやうに、窓といふ窓を毛布で覆つて、木の葉のやうに搖れ乍ら、懸命にスティムを上げてゐた。葡萄牙の海岸線を右に見て、一路ビスケイの眞つ只中へ差し掛る。前檣に見張りが立つてゐたが、空は、風に飛ぶ層雲が低く垂れて、海との境界さへ判然しない。てんで見通しが利かなかつた。

前面の波上に潜望鏡の鼻が現れる。水雷を必要としない近距離だ。ほつそりした砲塔が浮かび出る。潜航艇の舷側を海水が瀧のやうに滑り落ちた。暗い水面を刷つて、コロナ號の船内には非常警報が鳴り響いてゐる。その悲鳴を消して、續けさまに砲聲が轟いた。十七分で沈んだ。一人も助からなかつた。約束のマンチラも沈んでしまつたので、ノルマン・レイ氏は、マタ・アリは何んなに失望するかと思つたところが、それ程失望もしなかつたといふが、それはさうだらう。

6

歐洲大戰には、凡ゆる皮膚の色の人種が登場してゐて、それだけでも今から想へば華麗混沌たる一大萬花鏡の觀あるが、現

いて見ると、そのスパイ戰線の尖端に、茶色の肌をした全裸の一女性が踊り拔いてゐるのを見る。それがH21のマタ・アリである。

東洋の血の混つた和蘭の貴婦人といふ放恣。晩餐。三鞭酒（シャンペン）。ダンス。シックで高價な服裝。例の傾國傾城の「うら悲しい微笑」。背景は、ツエッペリンの空襲を怖れて燈影仄暗い一九一四、一五の巴里。

人生を一連（れん）の冒險と心得るH21にとつて、條件は完璧だつたといつてい丶。祕命を胸に、男から男へと游ぎ廻つてゐる。彼女を取卷く騎士の一人と、珈琲店の椅子で話し込む。そのうちふと給仕人を呼んで、マタ・アリが葡萄酒の注文をする。一體葡萄酒は産地と釀造の年代で別れてゐて、通は仲々難かしいことを言ふものだが、この女客も葡萄酒は八釜しいとみえて色いろと五月蠅い好みを出すから、給仕人はそいつを筆記して引き退つて行く。酒倉は地下室にある。間もなく其處を搜索してお誂への壜を持つて來て、葡萄酒の方は、まあこれでい丶が、その五日後である。船艙の覆にまで黒人殖民兵を滿載して佛領亞弗利加から急航しつ丶あつた運送船が、アルジエリアの海岸近くで獨逸の潜航艇に追られてゐる。

それも一隻や二隻ではない。戦争が終るまで、正確な遭難數は發表されなかつたが、當時、北部亞弗利加と馬耳塞を往復する運送船と言ふと、まるで手を叩くやうに、奇妙に地中海の何處かで狙ひ撃ちされたので、運輸系統やスケヂュウルが洩れてゐるのではないかと大問題になつた。みんなマタ・アリが、商船(マリン)サアヴィスの關係者を珈琲店へ伴れ出して聞き出し、葡萄酒の年號に托して通告したもので、同志の獨逸スパイが給仕人に化けて到る所の酒場、カフエ、料理店に住み込んでゐた。今でも、歐羅巴の給仕人には獨逸生れの人間が多いが、戰爭當時は、それが組織的に聯絡を取つて一大密偵網を張つたものである。後日マタ・アリの告白したところによれば、この方法で十八隻沈めたことになつてゐる。

ところで、女のスパイは長く信用出來ないと言はれてゐるが、これは何も女性は不正直で饒舌だといふわけではなく、いや、それどころか、不正直はスパイの本質的要素の一つなんだから可成り不正直であつてい丶譯だ。只玆に困るのは、時どき戀に落ちられることだとある。それも、スパイす可き相手の男に戀されたんでは、困る許りではない。何方のスパイか判らなくなつて、多分に危險を感じざるを得ないけれど、マタ・アリに限つてそんな心配はなかつた。初めから戀する心臟を缺除する女だつたと言ふのだ。自分の暗合電報一つで多勢の男を殺す事にも、別に歡喜も悲痛も知覺しなかつた程、無神經な性格だつたのである。愛國の至情から出てゐるのでない以上、さうでもなければ、一日だつて女性に勤まる仕事ではない。

が、このマタ・アリも、時として戀らしいものをしてゐる。戰爭勃發と同時に佛蘭西の義勇軍に投じた若い露西亞人とだけで名前は判つてゐない。間もなく、砲彈で盲目にされて後部へ退いた。この失明の歸還兵にだけは、マタ・アリも幾分純情的なものを寄せて、盛んに切々たる手紙を書いてゐる。ヴィテルの尼僧病院に收容されることになつて、マタ・アリも巴里から行つてゐるが、それは、戀半分、使命半分の動機からだつた。ヴィテルは、佛蘭西陸軍の重要な「空の根據地」の一つである。

序でだが、大戰當時、敵地へスパイを入れるのに、大いに飛行機を利用したもので、夜中にスパイを載せて戰線を飛び越え國境深く潛入して、落下傘で落してやる。又はこつそり着陸する。聯合軍も獨逸軍もこれをやつたが、廣大な田舍の暗夜など防ぎやうがなかつた。

ヴィテルの病院で、マタ・アリは、盲目の戀人を勞はり乍ら、飛行隊の將校連と日增しに仲好くなりつ丶ある。と思ふと、諜

々不思議なことが起つた、飛行隊は恐慌に陥入つた。今言つたやうに、密偵を同乗させた飛行機が、ヴィテル飛行場を發して獨逸の上空へ消えて往くのだが、それがすべて申し合はせたやうに、完全に消え失せたきり、決して歸つて來ない。何處へ着陸しても、ちやんと獨逸兵の一隊が待ち構へてゐて、操縦士と同乗者は直ちに射殺、飛行機は捕虜、歸つて來ない譯だ。不思議だとは云つたが、ヴィテルにマタ・アリがゐる限り、ちつとも不思議なことはない。

そのうち、盲目の義勇兵にも飽きたと見えて、マタ・アリは獨りで巴里へ歸る。

運轉手付きの自用車が停車場に出迎へる。ニユウリイのアパアートメントへ走らせ乍ら、見慣れてゐる巴里街景だ。ぼんやり他の事を考へてゐたが、軈て急停車したので氣が付くと、ニユウリイではない。見覺えのない町筋へ來てゐるから、マタ・アリは喫驚してゐる。

車扉が開けられて、降りるやうにと言ふ聲がする。降りた。其處を五六人の男が包圍して終ふ。表面は慇懃な態度だが、それは冷い敵意の變形でしかないことを、マタ・アリは素早く感取した。

「マダム、何卒こちらへ――。」

初めて恐怖がマタ・アリを把握したが、さり氣なく裝ふことには慣れてゐる。「退屈し切つた貴婦人」の態宜しく、一頻り鷹揚に抗辯してみたが、遂に其處の建物の奥深い一室へ伴れ込まれる。書類の堆高く積まれた大机の向うに、鋭い青銅色の眼をした老紳士が控へてゐる。脊廣を着てゐるが、千軍萬馬の軍人らしい風格、これが有名な「第二號の人」だつた。尖つた質問が順次にマタ・アリを突き刺し始める。

「尾行付きの獨逸人と度々會つてゐるやうですが、何ういふ要件ですか。」

第二號は、卓上の報告に眼を走らせ乍ら、急追究を緩めない。此の時の感想を、後でマタ・アリは、一枚々々着物を剝がれて往くやうな氣がしたと述べてゐるが、裸體の舞踊家丈けに、流石に旨い事を言つた。雨のやうな詰問を外して、懸命に逃げを張る。到々石の壁に衝き當つて、其處で全裸にされた形だ。第二號はにやりと笑ふ。

「つまり佛蘭西陸海軍の動靜を探つて、それを報告して居られたと言ふんですな。」

マタ・アリの手には、最後の切り札が殘された。

「えゝ。でもあたくし、聯合軍の爲にしてゐる事なんですわ。獨逸の密偵部の人には、可成り相識も御座いますけれど、良人

は英國士官でしたし、今あたくしのお友達の大部分は、聯合軍の主要な地位の方々で御座います。あたくし、ほんとの事を申しますと、斯ういふ機會が參りますのを待つてをりましたの。あたくしの方は、すつかり準備が出來てをります。色いろ獨逸軍に不利な事實も知つてをりますし、あたくしがさう思ふやうに仕向けて、先方では、あたくしを味方の心算でをりますから、何でも聞き出せますわ。何卒あたくしを佛蘭西の密偵部にお入れ下さい。御命令通り、何んな事でも探り出して來て、必ずお役に立つやうに致しますわ。』

苦しい詭辯を弄してゐる。兎に角、立派に自白したに相違ないから、マタ・アリはこれで卽座に「處理」される筈だつた。實際、大分この强硬論が有勢だつたのだが、第二號は考へた。マタ・アリの知友は、軍部でも外交關係でも、幅の利く連中許りである。こいつを死の門へ送り込むには、充分過ぎる程充分な證據を必要とする。さもないと、彼方此方の大頭株から、厄介な文句が出さうだ。これは何うも普通のスパイのやうに簡單には扱へない——そこで、第二號を取卷いて私語を交し出す。甲論乙駁、仲なか決しない。マタ・アリはこつちから、大きな眼に精一杯の嬌媚を罩めて、ぢつと其の樣子を眺めてゐる。

相談一決、第二號がマタ・アリに向き直つてにつこりした。

『それぢやあマダム、貴女の嫌疑は嫌疑として、今回だけ、貴女が佛蘭西に忠實であるといふ事を證據立て得る機會を作つて上げませう。吾われの同志として、今から改めて貴女を佛蘭西特務機關に編入します。白耳義の方を遣つて貰ひ度いのです。彼地を占領してゐる獨逸軍の部内に、こつちから三十人のスパイを入り込ませてありますから、今その名簿を上げます。皆相當に働いて吳れてゐるんですが、此の頃敵の妨害スパイの活動が激しくて、何うも報告が集まらないで弱つてゐる。貴女の任務は、その三十名から情報を纏めて、身を以て巴里の私の所へ持つて來る事です。』

安堵の溜息と一緒に、マタ・アリは答へる。

『承知致しました。』

凡ゆる便宜の下に出發して、英佛海峽を渡つた。佛白の國境は、獨軍に抑へられてゐるので、海路英國から潛入しやうとしたのだ。ところが、和蘭にゐる娘が急病だから行かなければならないといふマタ・アリの聲明を、英國政府が取上げなかつた。和蘭へも白耳義へも遣らずに、迂散臭いやつだといふので、飛んでもない西班牙へ追放して終ふ。マタ・アリも今は盟友國である佛蘭西のスパイなのだから、英吉利も便利と庇護を計つて然る可きだが、これは、佛蘭西から豫め依賴があつて、ちやんと手筈

が出來てゐたので、凡ては、佛蘭西密偵部第二號の劃策だつたのである。退つ引きならぬ證據を作らうとしたのだ。後で判る。

7

白耳義に於ける獨逸の占領地帶に這入り込んでゐた佛蘭西密偵部員の一人に、イグナチオ・ヴイテリオと言ふ伊太利人があつた。最初に、此の男の動靜が臭いと氣が付いたのが巴里の第二號、洩れ可き筈のない事が、立派に洩れてゐる。何うも變だ。それとなく眼を附けてゐると、このイグナチオ・ヴイテリオは、密偵仲間で言ふ所謂「二重取引」といふやつを遣つてゐることが判明した。獨軍には獨逸のスパイ、佛軍には佛蘭西のスパイ、二つの面を被つて、各ゝ兩方に忠實なスパイを裝ひ、右から左、左から右へ情報を呈供する。間に立つて、獨りたんまり儲けてゐた。これでは耐らない。何もかも筒拔けだ。が、何方に取つても、忠實なスパイには相違なかつた。兩方から報酬を貰ふ。金になるから、自然大いに活動して、どつちにも重寶がられて來た。右の手のする事を左の手は知らないといふ譯、拔目のないやつだつた。このイグナチオ・ヴイテリオの双面を感付いた第二號である。

こいつを處罰する爲と、もう一つはマタ・アリの正體を曝露する動かぬ材料を獲るためと、一石二鳥、矢張りアルセエス・ルパン張りに洒落つ氣たつぷりの巴里人だ。皮肉な方法を考へたのだ。

こちらはマタ・アリ、白耳義行きが許可されなくて、西班牙なんかと變な所へ送られたものの、第二號の豫期した通り、巴里出發に際して彼女に手交した在白佛蘭西スパイの名簿は、そつくり其地の獨逸密偵部員に内報されてゐる。マタ・アリはおしておれて今般佛蘭西の爲にスパイを働くやうな態をし乍ら、實はおれは一時逃れで、初めから名簿を持つて白耳義へ入國したら、早速それを獨逸密偵部へ呈示して、片つ端から芋蔓的に處分し、其の三十人の佛蘭西スパイ團を一掃しやうと言ふ肚だつたのだ。が、英吉利の邪魔で、自分が行けなくなつたから、せめて三十人の住所氏名だけは取り敢へず密報した次第、受取つた在白獨逸密偵部は、勇躍した。搜索する必要もないのだ。三十人の所番地を襲つて、勿論射殺するだけ。それつと言ふので、夫それ手別けして出掛ける。

手分けして逮捕に向つた迄は宜いが、引き出して來たのは一人きりで、他の廿九名は何うしても解らない。これは解らない譯だ。捕縛された一人を拔かして、他の廿九人は全部、第二號

の創作になる假想的人物、始めから存在しないのだつた。

捕まつたのは、名簿のいの一番にあつた伊太人イグナチオ・ヴィテリオである。おや、これは吾われの同志の筈だが——と一時は首を捻つてみたが、獨逸側も、大事なことが盛んに內通される形跡を感じて、寄りより探査の步を進めてゐた際だ。佛蘭西のスパイとして唯一人イグナチオ・ヴィテリオが指名されて來たのだから、さてはと種々思ひ當る節もある。猶豫はない。この皮肉な第二號の贈物を遠慮なく受取る事にした。名簿が白耳義へ達した一時間後に、イグナチオ・ヴィテリオは、兵列の前に立つて一齊射擊で處理されてゐた。

二日後に、この報知が巴里へ這入つて、第三號をにつこり微笑ませてゐる。

砂漠のやうな高原にぽつちり建つてゐる太陽の都マドリッド。其處のグランド・ホテルでは、マタ・アリの隣室に、英國の若い歸休士官が英雄閑日月を氣取つてゐる。名をスタンレイ・ランドルフ。砲兵大尉。H21がマドリッドへ着いて間もなく、土地在住の獨逸密偵支部代表者が訪ねて來て、こんな話しをして行く。

最近、英國の田舍ミッドル・エセックス州の奥に、周圍に高さ廿呎の石塀をめぐらした公園樣の廣場が出來た。疑問は、その不自然に高い石の垣である。內部には、餘程祕密な事が行はれてゐるに相違ないが、さて何だらうと言ふのが、其の地方の獨逸スパイ間の問題になつた。やつと探り得た程度では、中に、近代の戰場の模形が作つてあると言ふのだ。實際の戰線を一部切り離して來たやうに、塹壕、鐵條網、砲丸の穿つた大地穴、機關銃隱閉地物、其の他、小丘、立樹、河沼、小獨立家屋等、實物通りにそつくり出來上つてゐる。とおまけに、塀の中からは、ひつきりなしに强力な瓦斯油發動機の爆音が聞こえて來る。近所の噂に依ると、蜈蚣のやうな奇妙な形をした新型牽引車の試驗をしてゐるらしいと言ふ。何でも、前線へ給水、補彈等の目的を達する裝甲輸送車であると同時に、凡ゆる地形、障害物を無視し、蹂躙して進む戰鬪車の役割をも勤めるとのこと。英軍部內の關係者がタンクといふ寫實的な名稱で呼んでゐる。同國陸軍が新たに發明した武器だと言ふのだ。そこで、グランド・ホテルに隣り合はせて泊まつてゐるスタンレイ・ランドルフ大尉に探りを入れて見る。砲兵士官だから何か此の怪車タンクに就いて知つてゐるに相違ない。斯ういふ命令がマタ・アリに與へられた。相手は、一時戰爭から歸つてぶら〳〵してゐる青年將校である。こんなのこそは、マタ・アリの專門とするところ、譯

はない。數日のうちに成功して、聞き出せるだけ聞き出して終ふ。が、マドリッドに光つてゐる特務機關の眼は、獨逸許りではない。英吉利のスパイが、ランドルフ大尉の樣子に祕密の流出する不安を感じて急ぎ上司へ通告して指揮を仰ぐ。大尉は俄に、マドリッドを退去して巴里へ北上す可しと言ふ嚴命を受取つた。するとマタ・アリも、ランドルフと一緒に巴里へ行かなければならないことになつたが、第二號に捕まつてあんな眼に遭つた許りだから、巴里は、マタ・アリの鬼門である。あゝいふ經驗は一度で澤山だ。こゝで、彼女は初めて駄々をこねてみたけれど、勿論嫌だと言つて許される事ではない。保證と脅迫に押し出されるやうに、澁しぶマドリッドを後に巴里へ向ふ。脅迫は密偵部の常套手段、命令に服從しなければ、同志が手を廻して其地の官憲へ賣り込む。四面楚歌の獨逸のスパイだから、忽ち闇黑の中で處分されて終ふと言ふ段取りで、一度密偵圏の上長に白眼まれたが最後、何處にゐても危險は同じ事だ。それはマタ・アリもよく知つてゐるし、スパイ網から脫落しやうと䏻いて、何處へ逃亡しても、常に正確に、不可解にして殘酷な死を遂げた多くの細胞の例をも彼女は熟知してゐる。仕方がない。巴里へ歸つて行く。

尤も、密偵部から强要されたから許りではない。政府筋の有力な連中の多い、巴里の彼女の騎士達からも、盛んに歸巴するやうにと奬めて來てゐる。其の最も熱心な一人が、例の某閣僚だから、斯ういふ保護があれば大丈夫だらうとも考へた。今迄の話でも判る通り、善く言へば勇猛果敢、惡くいへば變質者に近い程怖い物知らずのマタ・アリである。好運を信じて、一度難を逃れた獅子の檻へ又這入り込んだのだが、今度は、生きては出なかつた。

金に困つたことはない。困らない所か、其頃のマタ・アリの生活は豪奢の頂點で、この旅行も、贅澤を極めたものだつた。マドリッドの獨逸大使館から、和蘭の獨逸大使の許へ、マタ・アリが巴里へ着いたら、同市の和蘭大使館を通じて、三萬五千馬克の正金を支給するやうにと暗號電報が飛んでゐる。これは、アムステルダムの獨逸密偵部が、指定の經路で直ちに送金した。マタ・アリ自身も、この巴里入りには餘程要心した跡が見える。其の某大臣始め重立つた戀人達に手紙を書いて、あの第二號とのいきさつ、彼女の被つた「迷惑」などを訴へてゐる。要路の戀人たちは筆を揃へて、二度とそんな失禮はさせないから御安心あれ、呼び寄せ度い一心で一生懸命だつた。一時スタンレイ・ランドルフ大尉と別れて、別々に巴里へ這入る。巴里でこうそ

り落合つて、大いに遊ばうと言ふ約束。

約束通り、ランドルフが停車場に出迎へてゐて、獨逸スパイ團の護衛の下に、一週間程同棲した。その間にマタ・アリは、このランドルフに就いて、マドリッドから持越しの、タンクに關する或る程度迄の祕密を嗅ぎ出してゐる。間もなくランドルフは英本國に召還されて終つた。

此の使命では、H21は餘り成功したとは言へない。が、それは彼女の落度ではなく、新發明の地上超弩級、タンク「マアク九號」の漏洩を防ぐ英國の警戒は、實に嚴重を極めてゐて、マタ・アリにも齒が立たなかつたのだ。スタンレイ・ランドルフも、鳥渡受持つたほんの一部の專門以外には、詳しい事は知らなかつた。幾ら戀人でも知らない事は言へないから、そこで、マタ・アリも期待された程の成果を收め得なかつた譯だが、斯うして、今後の戰場に重大な役目を持ち、近代野戰術に一大革命を齎した新戰爭エンヂン、タンクの誕生となる。前から言ふ通り、英吉利が發明したのだつた。

が、H21も、幾らか探り得た所があつたに相違ない。試驗に試驗を重ねたタンクが、突如戰線に驚異的に出現して、あの、前世紀動物のやうな、怪物的な鋼鐵製の巨體を搖がせて猪突した時、案に相違して、獨逸方は餘り愕かなかつた。既にこれに備へる爲に新しい大砲が出來てゐるらしく、特種の構造の彈丸が飛來して却つて英軍を驚かした。タンクは、地上の萬物を破壞し、セメントと煉瓦で固めてある機關銃の巢まで踏み躙つたが、敵の戰線からは、不思議な恰好をした彈がタンクに集中されて彈丸不貫通と言ふ折紙附きの鐵側に盛んに穴が開くのである。

こんな筈はないと言ふので、英吉利のスパイ群が色いろ動いた揚句、今の、スタンレイ・ランドルフ大尉とマタ・アリとのロマンスが、初めて摘出されたのだつた。

8

巴里のアパアトメントの客間で、一人の美女が、男の友達の上に屈み込んで强い接吻を押してゐる。その接吻から、西部戰線では、鋼鐵の怪物に特製の彈丸が炸裂してゐるのだ。この因果關係に、近世密偵組織を象徴して、複雜多色なる一つの驚く可き模樣(パタアン)を吾われは見る。

一九一七年、三月。一通の祕電が、伯林の本部からマタ・アリへ飛んだ。

『以前、某關係に對してのみは、質問探索等凡て積極的態度を

採る可からずと言つた命令を取消す。近く、佛軍主腦部に於て全線總攻擊の計畫ありと聞く。如何なる方法を以ても其の時日を確かめよ。』

これがマタ・アリを考へさせた。始めて解つた。今迄其の大臣に丈けは戰爭に關する話題を持ち出しては不可なかつた。先方がそれに觸れても、彼女の方で避けなければならなかつた。それは、マタ・アリが彼の敵でない事を、伯林は知り拔いてゐたからだつた。他の人間なら兎に角、此の關係から何か聞き出さうとして、同時に、少しも密偵の疑ひを受けないと言ふ事は出來ないだらう。それよりは、單に友人として、これによつてマタ・アリが巴里に滯在し得る最大の便宜に止めて置いた方が安全である。が、今は、そんな事を言つてはゐられない。如何なる方法を以ても」といふのは、H21に取つて死を意味する。今日まで彼女は、捕縛された場合の一つの言拔けを持つてゐた。あの大臣は私の戀人です、聞かうと思へば、何でも聞き得た筈です、それなのに、私がスパイでない證據には、そんな絕好な立場に惠まれ乍ら、私はあの人に戰爭に關して何一つ聞いたことはないではありませんか、と。しかし、今度で其の唯一の逆證も通らなくなる。破れゝば直ちに死だ。と言つて、伯林の命令に服從しないとすると、そつと佛蘭西の官憲へ身柄を曝露されるに決つてゐる。其處に待つてゐるものは、同じく死だ。二つの死の間に立つて、マタ・アリは、矢張りスパイらしい死をえらんでゐる。

同年四月九日拂曉を期して、ニヴキイユ元帥は全軍を躍らせて總攻擊に移る。シャンパアニュの原野。ところが、マタ・アリの豫報で待ち構へてゐたのだから耐らない。用意なしと見た獨逸軍に大準備が出來てゐて、猛烈な逆襲に遭ひ、聯合軍は散々の敗北、一時は、大戰そのものの運命をさへ決定しさうに見えた。

自室の窓際に椅子を引いて、マタ・アリが、裸體で日光浴をしてゐるとき、同月十六日の朝だつた。叩扉（ノック）も無しにドアが開いて、三人の男が這入つて來る。

「H21！　着物を着て一緒に來い。」

マタ・アリは愕かなかつた。只、取り縋るやうな視線を一行の首領らしい男に向けた。

「別室で着物を着たいんですけれど――。」

勿論、許されない。首領の看視の下に裸體を包み乍ら、マタ・アリは忙しく考へてゐる。H21と獨逸密偵部の番號で呼ばれた

事だけで、彼女は遂に最後が來たことを知つた。他の二人は、アパアトメント中の家宅捜索を始めてゐる。マタ・アリは、着物を着けつゝある自分に据えられた男の眼が、さういふ狀態に在る美しい女を見てゐるのではなく、敵國の一スパイを見てゐるに過ぎないのを知つて、悲しかつた。

着物を着終ると、彼女の態度が急に強くなつた。

『あなた方がいらしつたら、何だかお部屋が臭くなつたやうね』非道い事を言つて、『香を焚べませう。』

傍らの小卓に、綠色青銅の壺に金飾の覆を被せた印度の香爐が置いてある。マタ・アリは、燐寸を擦つて手早く覆の小穴から投げ落す。白い煙りが上つた。

看視してゐた佛蘭西特務員が、つと走り寄つて香爐の覆を取る。底に隠された手紙が、燃え掛つてゐるのだ。摑み出して揉み消す。讀んで見る。「M――Y」と言ふ署名があつた。

みんな戀文なのである。立派な文章で、確固した中年過ぎの男の筆蹟だ。誰だと訊いても、マタ・アリは答へない。答へなくても、筆者が誰であるか、密偵部内の第二號に丈けは解つてゐた。が、M――Yといふ署名、判然としてゐるやうで明瞭でない。其處を押して往くと、マタ・アリは頑として口を噤んでゐる。いざと言ふ場合に此の戀文を出して助命運動をする心算、それで保存して置いたのだが、其のいざといふ場合の今、彼女はそれを燒かうとした。しかも、飽く迄相手の名を明かさうとしない。淋しい男性は、時として途上に出會した賣春婦に大きな秘密を打ち開けるものだ。時として又、さういふ女達は、身を以て男の祕密を守らうとする。この、マタ・アリが最後に示した一片の意氣は、賣春婦のそれにも似て、哀れに壯烈だつたと言へる。

投獄されたのは、聖ラザアルの刑務所だつた。

マタ・アリは軍事裁判に附された。其の評判は歐洲は勿論、全世界の新聞に喧傳されてゐるから、記憶してゐる讀者もあらう。祕密裁判だつた。密偵部第二號の選擇によつて、報せていゝ事だけ公表されてゐるに過ぎない。彼女の記錄は、伯林ドロテイン街の家、ヘンダスン少佐との出會ひの當時迄溯つて、其の頃から英佛にとつて、さういふ意味での要視察人だつたと判明してゐる。歐洲戰爭が十年廿年以前から豫期されて、各國とも軍備とスパイ戰に忙しかつたことがこれでも知れやう。

巴里は今更のやうに獨逸密偵部員の潛略に驚いて、エッフエ

ル塔の無電は絶えず高力の電波を放つて少しでも怪しい暗合電報の妨害を試みる。同時に、佛蘭西特務機關の暗合が一時に變改された。マタ・アリは、獨逸のスパイなどとは夢にも覺えがないと無罪を主張し續けたが、間もなく射殺の判決が下る。各方面からの命乞ひは猛烈を極めたもので、本人はすつかり其の效果を信じてゐるから、聖ラザアルの刑務所で悠々閑々、あの嘘八百の告白體自傳は此處で書いたのだ。

三人の尼僧が附ききりで頻りに神を說き懺悔を奬める。マタ・アリはせゝら笑つて耳を藉さうともしない。それは處刑の朝だつた。

マリイ尼といふ一人が獨房の前に立つて、

『今迄は人の爲に踊つて來ましたわね。今朝は一つ御自分の爲に踊つては如何です。』

玆に於てマタ・アリは、黑衣の尼僧の前で例の出鱈目の東洋踊りをやつてゐる。何うも烏滸滑稽な、憎めない存在だつた。

舞踊半にして、重い靴音が刑務所の石廊を近付いて來た。斯ういふ場合、死刑囚を急激に愕かせないため、覺悟を敎へて、態と遠くから跫音を立てゝ來るのだ。マタ・アリは、夜會にでも出席するやうに美裝を凝らして人々を驚倒させた。にこにこして刑場へ引き出されて行く。

數多い「戀人」の一人で最も熱烈な彼女の讃美者ピエル・ドユ・モルテサックが、私かにマタ・アリに吹き込んだのだと言ふ。

『軍規の手前、銃殺しなければならない事になつてゐるのだから、法を曲げる譯には往かない。で、形式的に處刑するのです。つまり狂言です。銃殺に使用する彈は空彈だから、音がする丈けで、何ともない。後から屍骸といふ事にして國境外へ運び出す手筈になつてゐる。』

一時を慰めやうと言ふ慈悲心からか、それとも意地の惡い意味からか、それは觀方一つだが、兎に角斯う言ふ事を私語かれて、マタ・アリはそれを信じ切つてゐた。だから、刑場に出る者とは思はれない華やかな態度で、ヴアンサンヌの城壁の前に立つ。一隊の兵士が銃を擬して待つてゐた。芝居と許り思ひ込んでゐるマタ・アリである。元氣よく手を振つて射擊隊に挨拶したりした。

發砲された。空彈でない事を知つた時のマタ・アリの驚愕、立會つた人々は其の悲鳴に皆耳を抑さへたと言ふから、餘程諦めの惡い死を死んだものだらう。無理もない氣もする。騙し討ち

のやうな遣り方だつた。

死刑場には、ピエル・ドユ・モルテサツク初め彼女の騎士が多勢詰めてゐた。檢屍官が蜂の巢のやうになつて土に橫たはつてゐるマタ・アリの死體を靴の先で輕く蹴り乍ら、

『何誰(どなた)か引取人がありますか。』

誰も出なかつた。

何國も同じ事で、此のマタ・アリ事件が政爭の具に使はれてゐる。問題になつたのは、マタ・アリに戀文を書いてゐるM――Yの署名に當る某閣僚である。M――Yとは誰か？ さあ、騷ぎになつた。シヤンパアニユの野の總攻擊で滅茶苦茶に遣られたニヴヰイユ元帥等、軍閥が先づ承知しない。內務大臣ルヰ・マルヴィ――Louis Malvy――を槍玉に上げた。

『M――Yと言へばマルヴィに決つてる。手蹟も似てゐるし人物も當る。マルヴィは踊り子スパイを通じて祖國を獨逸へ渡したのだ。賣國奴だ。』

この叫びが擴まつて、マルヴィの公判となる。四人の前首相が辯護に立つたが、戰時で軍人が威張つてゐる。ニヴヰイユ一派の軍閥が勝つて、マルヴィ氏は失脚、七年間の追放に処される。漸て平和回復、人心秩序の樹立に飢えてゐる時、大統領エリオットに特赦されて、マルヴィ氏は再び入閣したが、議會の反對黨は彼を忘れてゐなかつた。

『マタ・アリ！ マタ・アリ！ マタ・アリ！』

の彌次に完全に封じ込まれて、何度も壇上に立往生した末、七年間の恥と苦痛に健康を害ねてゐる。卒倒して終つた。才腕ある士だつたが、間もなく政界を退いてゐる。

二年後に、或る婦人記者が、マルヴィ氏を追つた軍閥の一人、大戰當時の陸軍大臣メサミィ元帥――Messimy――から驚く可き告白を取つた。マタ・アリの戀人M――yはこのGeneral Messimyだつた。

新版大東京案内

死線を越えて甦生した
新東京の美しさよ！

復興祭

記念
出版

□四六判四百頁函入上製□
□特別撮影寫眞三百葉□
□石版色刷地圖四葉□
□定價壹圓八拾錢□
□郵送料 内地十八錢 其他二十四錢□

「案内」といふ言葉から「旅行案内」なんかを聯想なすつては困ります。と言つても和製ベデカでもなければツーリストビューロー式案内とも違ひます。科學者の頭腦と藝術家の第六感を通じ全面的に認識感受されたメトロポリス東京の紙上建設です。紙上探訪です。紙上散策です。紙上享樂です。輕快で的確な全東京のレヴューです。在來のあらゆる書物に飽きた方は本書を一度手にとつて御覽下さい。前人未踏の編輯法、全然新奇な寫眞、スマートな裝幀等々必ずあなたの讀書慾と所有慾を唆るに違ひありません。異郷の同胞諸姉の爲には憧れの東京の移動風景です。一家一本御贈答には是非本書を！

中央公論社版

東京丸ビル
振替口座
東京三四番

文藝時評

正宗白鳥

明治時代の辛辣な諷刺家齋藤綠雨の批評も、今讀むと、ひねた山葵のやうで、ピリッとした小氣味のいゝ味ひは感じられない。人間の本質に關しての皮肉な警句には、時代が變つても人の心に響くものがあるが、この點では、綠雨はさして深い洞察力を有つてゐなかつた。たゞ不遇な生涯の悩みから絞り出された晩年の感想には、我々の心を打つものがある。「老たりとせん。老たるを知れりとせん、老たりけりと夜の枕に泣くとせん。されども他の認めて老となすものとは、おのづから異なること言ふを俟たず」と云ひ、「まこと世に忘らるゝを得ば、こよなき幸ひなり。尠くとも債權者の前には幸ひなり。名聲の失墜、さばかり恐ろしきことかは。失墜するに足るべき名聲のありけるを思へば、われも其一人として數へらるゝにつけて、獨り密かに慰むる所なくんばあらず。願はくは長く今の地に墜ちて、再び揚がらざんことを」と云ひ、「とは云へ、ゲザ(森鷗外譯の「埋木」の中の薄倖なる天才音樂家)は悲しむべし、天才ならぬゲザは悲しむべし、全盛時をもたざるゲザは悲しむべし。特にこの一項に限り、小聲にていふ事也」と云ふあたりは、自己に向けられた皮肉であつて、晩年の彼れの心境の淋しさが察せられる。晩年と云つても、彼れは四十歲に滿たずして、陋巷に窮死したのであつた。

綠雨は江戸趣味を標準として、明治中期の、田舍者が滔々として流込んで東京といふ大都會を膨らませつゝあつた時代の蕪雜な世相を冷笑し揶揄したのであつたが、多くは瑣末な材料を取扱つてゐるので、今讀んで見ると、そんなことに拘泥して得意になつてゐる綠雨の淺薄さが目につくのである。田舍出の學生の用語を哂ひ、當世紳士の野暮な遊び振りを嘲

つてゐるのも、その時代にこそ小氣味よく思はれたであらうが、江戸趣味なんか、殆んど根絶してゐる今日では、折角の警句も空言に等しくなつた。永井荷風氏の豊かな觀察も、時代に適切なものとしての力を有つてゐないで、古典的に鑑賞されるやうになつた。

大震災は、徹底的に江戸の殘骸をも葬つて、東洋の新しい大都會として、東京は復興した。形の上でも、心の上でも、新日本はこれからどういふ風に、深みを加へて進んで行くのであらう。明治維新以來、「文明開化」をモツトーとして、多少の起伏があり反動があつたにしても、西洋模倣を究極の目的として來たので、西洋文明が日本の風土や國民性と、渾然と調和して、地上の樂園が東洋の片はしに建設されるか否かは、世界史上の興味ある問題である。

私は、明治の文學はいく度も繰返して讀んだ。時代は文學の上に最もよく反映してゐる。そして、我々が思想風俗言語、何でも小ざかしく西洋を模倣して來たことは、文學の上に歴然としてゐる。綠雨のやうな反動的の舊趣味の穿ちなんかは、多數者に取つて風馬牛である譯だ。復興した東京の市街を、日本滯在の外人が讃美して、中には、巴里倫敦の市街に勝るとも劣つてゐないと云つたのもあつた。ローマの成るは一日にあらずと云はれてゐるが、模倣上手な日本は、早くも本場を凌ぐやうな文明都市を建設したのであるか。さういふ外人の讃辭の當否は兎に角、あんなに破壞されてゐた都會が、六七年の短い歳月で、これだけに再興されたことは、喜ぶべきことにちがひない。劇場なども續々立派な者が建つてゐる。日本人の能力に希望を掛けていゝのである。私は先月開場された東京劇場へ入つて、三十年前はじめて東京の歌舞伎座を觀て、驚嘆したことを思出して、今昔の感に耽つた。しかし、演劇そのものを見てゐるうちに、興味索然として、それから現代の日本を讃美する氣持を滅却したくなつてしまつた。今更歌舞伎劇を批評するにも及ばない譯だが、羽左衛門梅幸の「お祭佐七」を見てゐると、人生無常の實例がそこに展開されてゐるやうに思はれた。この狂言の淺薄低劣なのは問題外として、二名優の所演が、老爺老婆の情事の眞似事のやうで、面を背けたくなるところさへあつた。梅幸の技藝がすさんだの

ではないだらうが、肉體を資本としてゐる俳優の末路はみじめである。綠雨の引用したゲザの哀れさを、私は、世俗的地位を今なほ保つてゐる梅幸の上にも感じた。三十年の昔、歌舞伎座で、初役の小糸を演じた時の梅幸は、技藝は未熟であらうとも、青春の艶を持つてゐた。……どんな名優だつて年を取つて衰へるのはあたり前なのだが、歌舞伎といふ江戸の民衆藝術がこんなにまで見窄らしくなりながら、所謂ロンドン、パリのに劣らない大劇場の舞臺開きに、堂々と演ぜられてゐるのを、私は不思議に思つた。見物が來るから興行者がこんな芝居をやつてゐるのだが、かういふものを、多數の見物が高い場代を拂つて見てゐる日本の現代の文化の不純を不快に思ふのである。私はアスファルト道路を日和下駄で歩いてゐると、自分の足音がカランくと頭に響いて不愉快であるが、日本の西洋模倣もまだ中途半端であるため、いろくな點で蕪雜で落着きが得られない。我々は短い一生を、首尾を通じて過渡期の慌たゞしい間に過さなければならない。舊藝術が不純になつて、菊五郞の「道成寺」でさへ、あの單調な氣拔けのした長つたらしい踊りに退屈したが、新興のレヴユーは一層詰らない。若い者にはあれがいゝのだとすると、日本の若い者の享樂も憫笑に價ひするのである。國家の勃興時代には、たとへ未成品であつても、音樂や詩や繪畫や演劇や建築や、その他の生活振りに、獨創の潑溂たる意氣が現はれる筈だと思はれるのに、何處を見ても騷々しいばかりで、安價な西洋模倣に留まつてゐる。ダンスにしても、活動寫眞にしても、あるひはバーなんかにしても、西洋學の一年生になつていゝ氣になつてゐるやうに思はれる。カリフォルニアへ行くと、日本の移民が、一種特別のアメリカ語まじりの日本語を亂用してゐる。「ユーがミーをだました」とか、「サムタイム遊びに行つた」とか、沒趣味な言葉が交換されてゐて、聞馴れない耳には甚だ不愉快に響いたが、しかし、よく氣をつけて見ると、本國の日本が移民地同樣なのだ。外國の言葉が出鱈目に用ひられて、外國語たるがために有難味があるやうに思はれてゐる。坪內博士の「當世書生氣質」を見ると、明治初期の學生が日常の會話に一知半解の英語を濫用することカリフォルニアの移民のやうであつたことが分るが、昭和の今日その傾向はますく激しくなつて、雜誌の論文でも小說

でも、合の子の文章のやうなのが多くなつた。かういふ現狀に不滿を感ずるところから、文學に「藝術派」といふ運動の起るのも當然であらうし、歌舞伎の衰頽に對して、一部の若い俳優が新しい運動を企てるのも當然であるが、しかし、「新興藝術派」の作品だつて、まだ影が薄いやうに思はれる。（新潮所載、井伏鱒二氏の「十二年間」はちよつと面白かつた）。

「文藝春秋」五月號所載の、安成二郎氏の「淵森氏の出發」と、廣津和郎氏の「父の死」とを續けて讀んで、ある舊作家の末路と、現代に活躍せんとする新作家の態度とを、私は目に浮べた。二つの人生圖を見たやうであつた。「父の死」は、明治二十年代の後半から、三十年代の前半にかけて、硯友社の團體に加つてゐながら、この派の作風とは全く異つた小說を頻繁に出して、評判も高かつた廣津柳浪氏の晩年を描いたものである。濫讀家の私も、柳浪の作品にはあまり親んでゐなかつた。その陰慘な作風に年少の私は嫌惡を感じてゐた。しかし、「今戶心中」には、何となく惹寄せられた。この頃新たに讀直して、新たな妙味を感じた。年月の經過によつて色の褪せる作品ではない。明治二十年代の戀愛小說は、大抵は幼稚なもので、まゝ事見たいなものが多く、綠雨の如きも、辛辣らしい女性觀を盛んに吐露してゐながら、小說となると、凝つた文章以外、何ものもないのであつたが、「今戶心中」はそれ等と類を異にしてゐる。傑出した最後の吉原文學である。このくらゐの手腕を有つてゐた作家が、いつとなしに文壇から身を退いたのは、感興が失せてしまつたゝめか、自然主義勃興といふやうな新時代の風潮に押流されたゝめか。私は二三度彼に面接して、言葉數の少い陰氣な人だといふ印象を受けてゐた。そして、をり／＼晩年の氏の生活振りを、誰れかゝら聞かされた時、自分も老境に入つたら、柳浪氏のやうになるだらうと思つたことがあつた。「誰れにも會はないで、終日机の前でじつとしてゐる」老作家の心境を、私は勝手に想像してゐたのであつた。今度、和郎氏の記實的小說によつて、その眞相が明かにされた。老境に入つてゐる私など、思當るところも少くない。綠雨の如きは、四十未滿にして、落伍する藝術家の悲しみを洩らしてゐた。柳浪や綠雨は、比較的純日本の趣味思想を有つて自己の藝術を創製した人であつたが、さういふ作家は、近代の日本のやうに、西洋模倣を目標とし

て進む國柄の文壇に於ては、早く落伍する運命を有つてゐるのではあるまいか。二葉亭でも鷗外でも、天分に於て、綠雨や柳浪などに優れてゐたとも云へないが、西洋を有つてゐるところに強味があつた。我々にどれだけ深く西洋文學が理解され鑑賞されてゐるかは疑問であるが、お粗末な翻譯によつてゞも、西洋を齧つてゐなければ、作家としての生命に累をなすのである。小泉八雲は、日本の學生に分り易いやうに西洋文學を說き、西洋文學の研究法をも說いてゐるが、英譯でハイネを讀むことを無意味であるとし、原語で讀む以外にダンテから感銘は得られないと斷じ、佛蘭西語の分らないものは、モリエールには手を觸れるなと力說してゐる。しかし、無知無學も強いものである。我々は、英譯でダンテを讀んでも感銘が得られて、一ぱし議論が立ちさうに思はれるのだ。日本の翻譯芝居を見てイブセンが分る氣持になるのだ。以前、多くの民衆が二錢團洲を見て團十郎を見たつもりになつてゐたのと同樣だ。それどころか、我々は紅葉の「夏小袖」の所演を見て、モリエールの喜劇の一端を伺つた氣になるのだ。それで、大手を振つて日本の文壇は通られる。明治大正の文學史は、一面西洋を背景に有つた植民地學の觀があり、また、それだからこそ、新日本の世相を反映してゐることにもなるのだ。

「潤森氏の出發」は、藤森成吉氏に關するゴシップ詳解と云つたやうなものだ。藤森氏等の主義の反對者には、ことに興味を惹きさうに思はれる。瑣末なアラさがしで、意地の惡い大人げない書振りだとも思はれる。しかし、これも、この頃流行の曝露文學の一つとして見ると、一考を價ひしてゐる。以前、自然主義文學は、現實曝露の小說とされてゐたが、しかし、それは、概して、自己の內面生活や自己に關係した事件を、馬鹿正直に打明けることであつた。そのために世人から嘲笑侮蔑を受けることも少くなかつた。岩野泡鳴など、あまり無遠慮に自己の行動を曝露したゝめに、處世上餘程損をしてゐた。ところが、この頃の曝露文學は、作者自身は、正義人道の大主義を持つてゐる面をして、世上の事件を曝露するのだ。事件の敘述や解釋に間違ひがあらうがなからうが、迷惑するのは、題材にされた團體や人間で、作者自身は、終

始えらさうに構えてゐられるのである。藤森氏も、「犧牲」以來、熱心に他人のアラさがしをやつて來たやうだから、汽車の二等と三等との問題のやうな詰らないことでケチをつけられるくらゐ仕方がないだらう。

島田清次郎君が先頃腦病院で死んださうだ。彼れは、文壇では久しく忘れられてゐたし、その死を惜む人は無いだらう。私は彼れの著書は殆んど讀んでゐないのだが、高慢ちきな文句を書いた手紙を二三度寄せられたことがあるし、二度も訪問されてゐるので、その人の爲りが頭に印象されてゐる。極めて不快な印象である。一度は精神の狂つてゐるらしい時にやつて來たので、取扱ひに困つた。此間、巴里の美い公園の繪葉書に彼れの名の記されてゐるのを反古箱のなかから偶然發見して、これだけは保存してゐるが、腦病院から哀れを訴へて來た手紙も一通あつた筈だ。「是非會ひに來て呉れ」と歎願してあつたが、「行つちや大變だ。ひどい目におひますよ」と、ある人に注意されたので、私は打ちやらかした。何の關係もないのに、私のやうな無愛想な人間を手頼りにしたことを思ふと、彼れはよく／＼世人に相手にされなかつたのであらう。

清次郎君も、二十歳前後の年少で、あんなに名聲を得たことを思ふと、凡人でなかつたに違ひない。「年少にして高科に上る一の不幸なり」といふ古典の箴言が思出されるが、由來天才といふものは、直接に交つた者には不快を感じさせるを常例とするのではなからうか。時代を經て、その遺業だけによつて想像すると、天才は尊いもので、天才を虐遇した當時の人々を呪ひたくも思はれようが、天才は、當時の密接した人々に容れられない素質を有つてゐるのだ。バイロンやルソーだつて、友人としてゐたらたまらなかつたであらう。清次郎君も、これから好意をもつて眞價が認められて、祭上げられるやうになるかも知れない。私は、近年大天才としてかつぎ上げられてゐる石川啄木に一度訪問されたことがあつたが、いゝ印象は殘されてゐない。……讀むべきは天才の書、交るべきは平々凡々の男女。

向坂逸郎氏の「歴史に於ける偉人の役割」(改造)を讀んだが、「純粹」に個人的なる個人は具體的には存在しない。個人はたゞ一定の社會關係の中にのみある。凡ゆる社會的環境から抽象された個人は存在し得ないといふ論據から出立して、「偉人の才能が才能として生き得る社會的影響を有し得るためには、それが當該社會の社會的必要の方向に對して他の者より一層有力に働き得るといふ事、更にその才能が才能として現はれ得るに必要な社會的地位が與へられることを必要とする」といふ結論に達するので、論旨は平明で穩健である。筋道はよく通つてゐる。しかし、ここに引用した數行の文句によつても察せられる如く、飜譯口調でねちねちと窮屈に叙說するのであらう。このくらゐな理窟なら、民衆に分り易いやうに雜作なく說明出來るではないか。英雄や詩人は天から下つたやうな時代離れのしたものではない。荒木又右衛門は德川初期の社會の一員として、その時代の道德習慣あるひは戰鬪術を一身に具した上での豪傑であり、ナポレヲンは佛國革命後の社會狀態に羽くゝまれた英雄であつた。近松は、あの頃の日本人として、當時の文字や感情を他の凡作家よりも巧みに醇化して名文をつくつたので、近松がいかに大天才であつても、あの頃、英佛の思想感情を寫せよう筈はなかつた。

それから、この論文には、マルクス一派の所說が絕えず引用されてゐて、それによつて重みを加へんとする論者の意圖が見透くやうである。このくらゐな議論に事々しく、西洋人の意見を借りて來るには當らないと思はれるが、しかし、そこに、西洋模倣時代の特徵が見られるのである。

「改造」にも、「中央公論」にも、尾崎士郎氏のチヤプリン觀が出てゐる。私は、この二論文を速讀したあとで、高瀨毅氏譯のチヤプリン著述「僕の旅」を讀んだ。そして、世界的天才の面目について考へた。

私は、米國に於て、歐洲に於て、いたる所で、活動寫眞を見た。種々雜多の畫面を見たのであつたが、例の如く、大抵は見たあとからあとから忘れてしまつた。そのうちで、ニューヨークの小さな小屋で見たロシア物は、革命の光景を取扱つた

ものだつたので、ひどく珍らしく感じて、今なほ記臆してゐる。巴里には比較的長く滯在してゐたので、退窟さましに、足の向き次第に、小さな活動小屋へ入つて、「ミゼラブル」や「ナポレヲン」や「ジャンダーク」など、佛蘭西の俗衆の喜びさうなものに屢々接したが、ある夜、ふとした廻り合せで、チャプリンの「黄金狂時代」を見た。數年前、一度輕井澤で見たものだから、餘程以前に製作されたものであらうが、私は、非常な興味をもつてこれを見直した。歐米諸國で今まで見て來た活動のうち、つまりはこれが面白かつたやうに思はれた。古來の大詩人が、その時代の心を代表して唄つてゐるやうに、チャプリンは、フイルムの上で、萬人の心に觸れる現代を唄つてゐるやうだつた。

しかし、今度、期待して讀んだ「僕の旅」は、さほど面白くなかつた。いたる所崇拜者の波に漂はされて、自己の意志を沒却さゝれなければならぬとすると、流行兒となるのも必しも幸福であるとは云はれない。それは、當人の所爲ではないと云へば云へるが、チャプリンが、センチメンタルで、時代に媚びてゐることが、「僕の旅」の中に微見えてゐると私は思つた。あはたゞしい旅行記のうち、マクスイートンといふ二十年の禁錮に處せられた社會主義者との會合が、最も生彩のあるところで、ここに、チャプリンの詩人的素質が現はれてゐて、あの映畫の成る所以が推察されるが、自己を圍繞する浮淺なる民衆に對して、彼れはいゝ氣になつてゐるのである。古來の大天才に比べて、彼れは通俗的天才と云つたやうな印象が與へられた。大西洋航海中三等船客を相手にして遊んで、「埃の化粧をして、龜裂のはいつた皮革のやうな彼等の面上に、僕は誠意と好感の色を讀む」と、プロレタリア讚美の感を起しても、直ぐに屈託を覺えて、自己の部屋へ戻つて、「トルコ風呂にでも行くか。あゝ、流石に一等室だ。……安樂な生活をするためには金ほど有難いものはない。」とは、心地よい溫浴の裡に、誰れの頭にも自づと湧上つて來る想念である。僕は一等船客に對し、よりよき好感をもつものだ。さりとはまた餘りにセンチメンタルな傀儡の僕だこと！」と、正直な感想を洩らしてゐる。さう思ひながら、彼れは、低級なファンの人氣を落すまいと、至るところでつとめてゐる。トルストイやドストエフスキーなどゝは、天才の質が異つ

てゐるやうに思はれる。このロシアの二文豪も民衆を愛してゐたが、彼等は決して民衆に媚びなかつた。ドストエスキーは、十年のシベリア苦役について何の不平も起さず、むしろ感謝して、自己の心靈の修養をつとめてゐたさうである。イートンを相手に天の星や月を眺めながら、安價なる感傷語を弄するとはちがつてゐる。

さうは云ふものゝ、チヤプリンの映畫は面白い。「黄金狂時代」にしろ、「サーカス」にしろ、彼れの心境が髣髴として浮んでゐる。それはドストエフスキーのやうな底深い、我等の及びもつかない心境ではないが、それだけに、我々現代人の心境に觸れるところがあるのだ。傑れたる藝術には、おのづから作者の心境が現はれるを常例としてゐる。私は、ヴァチカン博物館の「ラオコーン」を見て、それを彫刻した父子三人の惱みが、蛇にまつはられた神官父子三人の苦悶を、永遠に活躍させてゐるのだと思つた。二千年前の心境彫刻である。

日本の「心境小説」の詰らないのは、作者の心境が浮淺であり狹小であり、生氣を缺いでゐるためなのだ。自己の心境をそつちのけにして、他人の事を調べて暴露したゞけの小説に、「心境小説」以上の藝術價値があるとは思はれない。

次號執筆豫告

戀愛論

谷崎潤一郎

大谷崎の戀愛論は未だ曾て聞かないところ、筆者筆硯を新たにして本誌七月號に發表せらるゝ筈

編輯者雜記

×

絶對多數獲得の臨時議會、徒らに統帥權問題を紛糾せしめて終る。軍部に氣兼ねして言ひたいことも言へない絶對多數の政府も情ないが、敵黨を苛めるつもりで結局軍部をはびこらせてゐる政友會は天に唾して自ら墓穴を掘るものだ。

×

ブルジョワ議會に進出してわが勞働者のために氣を吐いた勞農黨主大山郁夫氏、鬪のあとを顧みて靜に「大衆の審判を待つ」あり、淺原健三氏同じく「五十八議會の戰線雜景」を贈る。

×

われらの市長、大臣の古手でないだけでもよい堀切善次郎氏の辭職の眞因を知れりや。

×

過日の東京市電のストライキは明かに勞働者側の敗だ。然しながら問題はこれで終つたのではない。今後の勞働爭議史上に特筆大書さるべき幾多の問題を孕んでゐる。靜に罷業の經緯を客觀すると同時に、勞働組合運動の戰術的轉換を加藤勘十氏に、罷業破りの跳躍を鈴木茂三郎氏に委囑しておいた。用意の周到を買つて頂きたい。

×

リーグ戰白熱して、スポーツ全盛。此時に方つて「スポーツの階級性」を論ずる、蓋しタイムリー・ヒットたるを免れまい。

×

地方新聞論、陸海軍巨頭論、東京市青年團の解剖、大檢擧祕話、いづれも熟讀に値すると信ずる。

×

中央公論社勞働大衆版「ゴー・ストップ」によつて端なくも問題を惹起したプロレタリア文學の大衆化問題は、貴司、藏原兩氏によつて論爭せられた。容易に論じつくされぬ今後の大問題だ。

×

長篇小説「大陸」は谷氏の夫人病氣のため今月は休載せざるを得なかつた。その代り、新時代的力強さと多角的な内容を有てる岩藤氏の「屍の海」と藝術的作品岸田氏の「犬は鎖に繋ぐべからず」の二篇は以て缺を補つて餘りあるものと信ずる。

×

近刊、フォイヒトワンゲルの「猶太人ジュス」は「西部戰線異狀なし」以上との評判だ。出ぬ前から待たれてゐること夥しい。

×

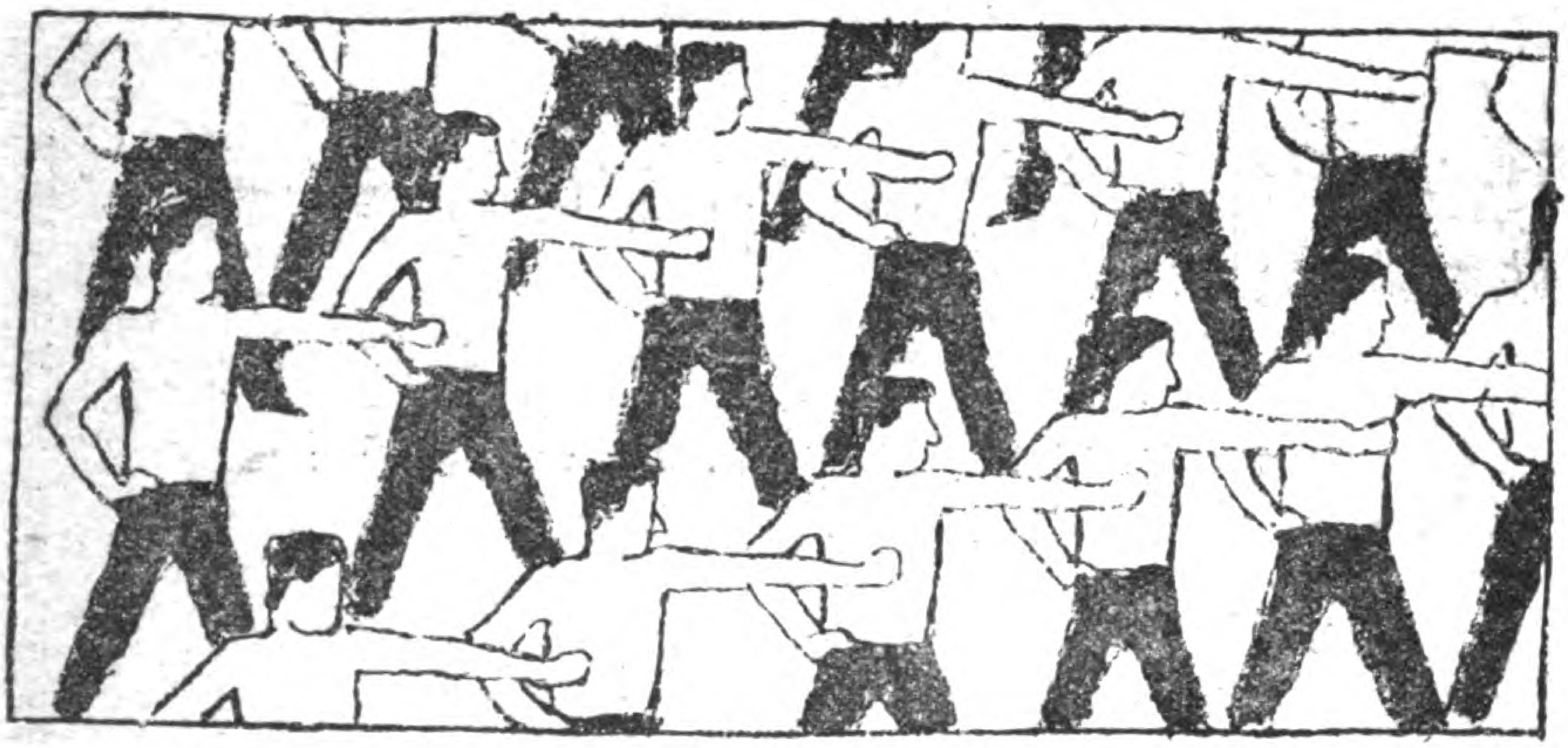
婦人公論の愛讀者大會はすばらしく成功した。最近著しく讀者層を擴大した中央公論の讀者大會も開いて見たいものだ。

×

前號本欄に「特殊部落貴族院」と書いたのは「特殊存在貴族院」の意味だ。こんなことを誤解する人も無からうと思ふが念のために斷つておく。

×

本號もまた瞬く間に賣り切れるだらう。力を入れ替えて夏季增大號の準備にかゝるとしよう。



屍の海

岩藤雪夫

1

（ベルサイユ條約は民衆に飢ゑを與へた――）

港には子供の死骸が浮いてゐた。……

夜中の太陽が蒼白く照らしてゐた。

ガルヘピック山脈の雪肌は刄物のやうに尖つてゐる。

海には漁夫のいふ――紫の凪ぎ――が續いてみぞれを含んだ平溫二・五度の冬の兆が、重い波のうねりと共に防波堤を打つてゐた。

製鐵所の油にごりを泡だたせた運河は帆走船（ヨット）の帆檣に埋づもれ、埠頭といふ埠頭には、エンヂンを錆びらかし、ボイラアを冷やした大小無數の汽船が、遺族のゐる土地に慕ひよる水死人のやうにへばりついてゐた。

軍艦は灣の要塞地シエップ島に集つて夜毎に探海燈を廻轉してゐた。

降雪期は近づいてゐた。

一九一九年の十月である。

海岸と漁師街と貧民窟とは闇であつた。平和恢復舞踏會の音樂は山上のホテルから、飴いろの灯はルーテル教會とプスタッフ五世の王城の窓からのみ平和に耀いた。

野良犬が遠吠えする泥水闇の辻々を棍棒と拳銃をもつたヘルメット帽の巡査が守つてゐた。

空氣にはくそと小便と潮がしみてゐた。

漆喰のくだけた家々の凹み毎に黑い影があつた。それは寒さを避ける飢ゑた人間の塊りである。

『うちの人は何處をうろついてるんだらう、坊やは段々冷たくなつて來るわ、乳は出ないし、』

一つの凹みで細い嘆きがする。『あゝ、段々冷たくなる、あたしの體にしみてくるわ……坊や坊や、うちの人……』

『寒いよ！　おとッつあん、おつ母さんは何時公園から歸るの、ひもぢいよ！』

子供が父親の頸輪を引つぱつてゐる。

『我慢しな、霧が降りれば眠くなるよ……』

父は人間の飢ゑの苦しみを霧の誘ふ夢幻に頼らうとしてさう答える。

『いやだよう、おつ母さんは何時公園から歸るんだよう……ひもぢいよ……』

公園のベンチに肉を賣りに歩いてゐる妻は、一家三人が明日の暮しを支え得る一クローネルを握らなければ、夜が明けても歸らない事が多い……。

『もう直ぐ戻るよ、それ、お山に雪が光つてる、歡樂のお祭りが近づいたから早くねんねしなよ……』

すると向ふ側の凹みからしやがれ聲が流れた。

『やい！　人間…嘘をいふのはおよしよ！　アラ、叔父さんも「人間」つて呼ばれるとびつくりする組だね。』生姜をかじつてる十七八歳の娘だ。『赦免(パルドン)のお祭りだつて、今年は漁師はエレワール・ド・メエル(海の守星)のお祭りさへできないんだよ…あたしお堅パンの代りに處女を捨てちまつたんだよ…お粥(エキエエル)さへ食べられないんだ…』

『おやこの女つちよ、昨日、俺に初めてだなんて、一クローネルの稼金を全部かすめ取りやがつたのに、あれあ、うそだな…』

『ふん、うぬぼれるない、石炭倉庫の新床に、花嫁さんが一クローネルで買へるかい、…自分のニキビでもつぶしやがれ…』

地獄から聞える程の話し聲の通ふ道路を、未だ寐床の拾へない跛や癈兵の失業者が半分眠りかけながらがくがく歩いて行く。その度に巡査の棍棒が漆喰にこうんと鳴る。宿なしはどやされたやうに又進む。

『行路病者かしら』

漆喰の凸凹に宿なしの影が獸のやうに動いて行く。

『違ふよ、肺病だよ、きつと一週間位ねないんだらう、あの腰つきあ…』

『まつたく氣の毒だよ、世帶持は！』そばの凹みで又お俠(きやん)娘が云つた。『あたしなんざあ、夕暮に公園で會社員を一匹咬へて四分の一クローネル摑みあ、もう腹のへりつこはなしさ、麓のキャバレにでかけてカツフヰ一杯で約一時間、大抵の會社員共は皿に喰ひ殘して行くからね、歸りにお臍がとび出る程くちくなるわ…』

『あばずれ娘！　腹のくちいのが偉いのかい。そんなことあ、ナポレオンの辭引にだつてねえや…若しさうなら山のホテルの人間は皆偉人だい——』

『何だつて妻子も養えない癖に大きなことを云ふない、いい年をして、おいぼれマドロス奴、お前の皺くちや女房は公園

で未だ一匹も喰へられないで霧にぬれてらあ、若いんだからね、こんな所にゐると體が腐つちまふんだ。公園におたのしみに行くんだわ……」

「何つ、四分の一クローネルで、處女を賣りあがつた賣女奴！　僕なんざ、船さへ動きあ、立派な油差さまなんだ、歐洲大戰後の不景氣で金持共が皆船を動かさないから、僕は働けないんだ……」

「おとッつあん、ひもじいよ……」

「待つてろ、待つてろ、おつ母さんはすぐ歸る……」

「お前さんはほんとに氣の毒だねえ、お神さんは稼いでるんだね……」

と隣りにゐた汚れた頭被で顏を包んだ老婆が細首を伸した。

「ええ、戰後のマドロスは酷どいものですよ、これあ、ストックホルムだけではないでせうね、世界中でせうね、第一船が、ほら、港の帆檣をお婆さん見たでせう、みんな動かないんですからねえ……」

「おお、獨逸へ出稼ぎに行つてゐた私の息子もベルダン要塞とかの戰ひで戰死しましたよ、おお、ムバアヂア、サナ、ムバアヂア、サナ、……甥のやうに、北アメリカへ移民した方がよかつた。」

老婆は門口から出て、山の上の蒼い夜中の太陽に膝まづいて祈つた。

「ムバアヂア、サナ、ムバアヂア、サナ……おてんとう様、貧乏人にお情けを下し給へ……」

一番はづれの家の門口から聲が揚つた。

「やい、死にそこない婆め、ムバアヂア、サナ、……よせ！　世迷ひごとあ、そんな事で人間が救はれるなら、國教ルーテル教會は世界中を支配するあ、俺あ、織匠だがな、繭から絲にして布にするまでの仕事を一ぺんにやつつける機械がスエーデンに來てからずつと乞食だ……息子は北アメリカへ移民になつて熱病で死んぢまつた。女房だつてあつたんだ…

……」

と彼は自分の凹みから歩いて來て失業マドロスの肩を叩いた。

「おい、氣をつけなよ、俺の女房はな、矢つ張り公園で稼いでる内に、いろ男を造つて逃げちまやがつた。今度、あの女め、見つけたら千年目だ……畜生！」

「こらッ！　演說しちやいかん……」

辻の巡査が棍棒を振つて叫んだ。

喧しい聲が一時にはたと靜まる。

それに反抗するやうに血痰や黃色い唾が凍てた道路に吐き散らされた。

力のない冷い風が吹いてゐた。

巡査は外套の襟を立て歩き廻つた。

と、一隅の凹みから、瘠せた女が毛布にくるんだ赤子を抱きしめて立ち上つた。

「ああ、この子も息を引きとつた。乳がない、乳がない、坊や、坊や、……」

女は辻を左に折れて走りながら夫の名を呼んだ。

「坊や、坊や、もう一度目をお開き、お父さんは未だ歸らないんだよ……」

「ええい、又捨兒か……」と叫んだ巡査は棍棒を一振りして女の後を追つた。「かう毎日毎日、海へ捨兒されちあ、結氷すれあ、一冬、流れあせん、怪しからん……」

港から街のすき間にはたき込む氷つた風が塵や紙を渦まき返して、次の街へ渡る橋の方へ舞つて行つた。

「畜生！　風も地獄からきやがる……」

『ヘッ、捨兒、捨兒、堅パンも嚙ぢれない人間さまが葬式どころかい？　捨兒を喰へる野良犬がうらめしいや‥‥』と一人の自由勞働者らしいのが藁の寐床から手を揚げた。

『みんな、兄弟！　聞いて呉れよ、俺の嬶はこれこの通り肺病さ、我鬼だつて十日許り前に死んぢまつた。死骸は矢つ張り港のみぞれの中さ。毎日、通るが、未だ、寒いんで腐らねえや、頰ぺたを赤くしやがつて、見てやがれ、今に、我鬼の死骸で氷漿ができるから、‥‥』

『お前さん、およしよ‥‥』

彼の妻が咳こみながら泣いた。

『あたしや、子供の事を言はれると心臟が動かなくなりさうだ‥‥』

『何を泣きやがる、こんな世の中に未練があるのかい‥‥おーい、兄弟‥‥俺はな、ロンドンの勞働者のやうに、放火暴動が有りあ、有難いんだ、スウイング‥‥街中が燒けて見ろ‥‥みんなが宿なしにならあ‥‥その時こそ‥‥俺は‥‥』

一人が饑饉があると天の神が怒つて『火の神』を下界に降す話を始めた。

『シツ、シツ、靴音がする‥‥來るよ‥‥』

巡査が先刻の女を引きずつて來た。

『こらツ！　怪しからんぞ、貴樣、如何に落ぶれたとて、子供を海に捨てる奴があるか、可愛いくないのか‥‥』

『うるさいよ、あたしだつて人間だ、坊やの可愛いい位知つてらあ‥‥』　女は子供の死體を抱きしめて肩をそびやかした。『街へ捨てれあ、犬に喰はれらあ‥‥畜生！　だから少しあ冷めたくつたつて海に捨てるんだ‥‥その位のことあ自由にさしておくんなさいよ。』

『ええい、喧しい』　巡査は女の腰を棍棒で突きたほした。『默つて寐てろ！』

漆喰の凹みにぶつ倒れた女は又夫の名を呼んで、

『坊や……坊や……』

と泣いた。

巡査は辻々の間をゆきつ戻りつ隣りの辻の巡査と話し合つた。

と、橋の下をのぞいて懐中電氣をてらした。

『こらつ！ 誰だ、其處にゐるのは……』

橋の下には一組の兄弟が寐てゐた。

『出て來い、そんな所で寐てはいかん！』

頭の髪をのばした黒い顔の兄弟が一枚のボロ外套に慄えながら石垣を出て來た。

『寐る所がないんです……橋を盗むんぢやありませんよ……』

家の凹みから嗤ひ聲と拍手が揚つた。

『はつはつは、ちげえねえ、橋を盗みあしませんと、きやがつた……』

『ええい、うるさい……街で寐る……凹みは何處にでもある……』

手をつないだ兄弟は棍棒に追ひ立てられて隣りの街へ逃げて行つた。巡査が街角に消えた。

『いまいましいなあ、スヱーデンにはステンカ・ラトジンはゐないのかい、この俺達を救つて呉れる……失業マドロスを助ける人間はゐないのかい……』

『ステンカ・ラトジン、そんな者に用はねえや、スウイング、スウイングをやればいいんだ……街を焼け……』

『よしあがれ、外道奴！』隅の方で潮がれた聲がした。『アングロ・サクソンの眞似なんかするない、俺達はもう一度、

昔の漁夫がやつた血斧鬼(エリツクゲツフ)の亂を起さなきあならねえ……』

『スウイングだ……街を燒くんだ……』

『エリツクゲツフだ。反亂だ……』

凹みから大勢の人間の瘠せた手が突き出され、白い息の喚き聲と血痰が飛んだ。

『シツ、シツ、棍棒が來たよ……』

『シツ、シツ、……』

巡査は呟やき乍ら歸つて來た。

『うう、臭さい、お前達の體の匂ひと來たら何だ。血の交つた痰と、垢と、ぼろと、うう臭さい……』

鉤なりの鼻をこすつて巡査は叫んだ。

突然、次の街から、激しい悲鳴と、怒りを含んだ聲が亂れた跫音と一緒に近づいた。そして一人の若い男が走つて來た後からひげ面の中年男が木の折れを振り上げて追つて來た。先の男の顏は血だらけだつた。

若い男がころぶと、中年男はその上から無茶苦茶になぐりつけた。

『ふてえ盜つとだ、人が稼いだパンを盜みやがつて、』彼は若い男のポケツトから黑い堅パンを取り出して塵を拂つた。

『お巡りさん、よろしく御仕置きを願ひますぜ……』

『よし、よし、』巡査は倒れて唸つてゐる男の上に跼ごみこんでうなづいた。『行け行け。』

中年男は、堅パンを噛り噛り立去つた。

『こらつ！　夜盜野郎！』

巡査が引き起こすと血だらけの男はふらふらと立つて唸つた。

『まつたくだ。凍りついた街よりあ監獄の方がちつたあいいや、ええ、行きますとも……』

血だらけの男と鼾音が消えると一人が嗤つた。

『あの若僧は苦労人だぜ、しやれた事を言やがる、凍つた街よりだつてさ……へへ……』

『當り前さ、お寺の墓石と比べりお、監獄の石壁の方がいい圍ひにならあ……』

『おとッつあん、ひもじいよ、』

子供がパンを思ひ出して泣いた。

『おゝ坊やのお父さんは未だ歸らないねえ……』

死兒を抱く女は子守唄を歌ひ出した。

『おとッつあん、ひもじいよ……』

子供に泣かれても父親は默つて髯に氷りついた青洟をこすつてゐる。

『駄目だ、どうしてもスウィングだ……』

『ううん違ふ、漁夫は血斧鬼(エリック・グツフ)の亂だ……』

『ブスタシフ五世は鬼だ……畜生奴!』

港の空にはシエップ島の軍艦から放つ數十本の探海燈が光りを交えた。

靜かな音樂は山上のホテルから絶え間なく響いた。

月の蒼みを孕んだ霧が流れ出した。

霧にまかれると飢えも寒さも忘れて眠くなる失業者達は初めて醉つたやうに眠りに落ちる。

2 (×××の支部は世界中にある)

夕の鐘が七ツ響く——

深い峡灣(フヨールド)に沿ふシャルル十一世の神話をまつるドーム屋根の寺院からだ。

街中の鐘も七ツを打つて夕を告げる——

港の礁島(シエーレン)に　青　魚(ストレームリング)をとる漁夫も、廢たれ舟に錯雁を睨らふ失業者も、海岸にうろつく肺病人もこの鐘を合圖にそれぞれの形ばかりの住家に歸り初める。

聖クララの墓地にも乞食が集まつてくる。

先祖からうけ嗣ぐ血の一滴一滴にまで、刻みこまれた鐘の音は、彼等に一時、膝まづいて天に祈るだけのへり下つた心を甦らせる。

或者は「苦しむ者は幸なり、その人はなぐさめ得べければなり」を繰りかへし、老人は——ムバアチア・サナ——を唱え、娘達は赦免(バルドン)の祭の夜にめぐり逢ふ男への甘い空想にひたりながらあばら家や、寒い凹みに歸つて來る。

そして灯のない家に座り、凹みの藁に堅パンを分けて嚙る時に腦みそがでんだう返えしを打つて、みんな自分の腦みそをのぞき込む・・・

暗くなると晝間のつぐなひ仕事が初まる。

公園のベンチの三分の一クローネルの賣淫、石に坐つてそれをじつと見てゐる餓えた子供・・・・强盜、キャバレの隅にかくれて客の殘しものをあさる娘——食物を爭ふ殺人は毎夜、絶えなかつた。

アトロピン(闇に目の利く薬)を眼頭にさした辻々の巡査は、大膽さのない殺人の續出に倦きおきしながら喧嘩沙汰だけ

を取りしまつた。以外の事件には小さい注意と威嚇を與へるに過ぎない。
言はば死の一歩手前を打禾機(カラウチ)のやうにのたうつてゐる人間を死なないやうに警戒してゐるのが官憲であつた。
これは九月以來三ヶ月續いてゐる。

ヨハンネスは、樅の木を抉ぐつたベッドの中で煤けた天井を睨んでゐた。
妻は、寺院の鐘が鳴ると、公園へ稼ぎにでかけた。
今夜、臨時會合が召集されてゐるのでその議案を考へてゐた。彼はストックホルム、R・T・U・I・ソヴエット委員會に屬する黨員候補者だつた。
息子のカルラスが、ちびた長靴に海豹皮の鍔無帽姿で元氣よく歸つて來た。
『雪はきさうかね……』
と父が訊いた。
『雪は來ないが、時機は來るかも知れない。』とカルラスは窓から海をのぞいた。
『……今朝も國立造船所の門でアブれた仲間は四十人ばかり殖えた。老人や少し氣の強さうな青年は絶對に使はないや、登錄濟みの自由勞働者の中の三パーセントがありつけるだけだ……』
『鐵工が一番いいな……牧夫と……』
『さう、一番ひどいのは、マドロスだ、大汽船はみんな、荒けだ、僅かに運河の帆前船だけが動いてゐる……』
『日用品貨物だけが少し動いてゐるんだな……俺はこれから行かなければならない……』
『委員會ですか、私も連れて行つて呉れませんか……』カルラスは緊張して父の方を見た。『同志に逢ひたい……』

『いいや』とヨハンネスは額にかぶさるふさふさした髪をゆすぶつた。『お前はビケットをして呉れ、海の……』

『ビケット、あ、さう、私も仕事があつた。……赤い航海燈と波に響くエンヂンを待つ時の心はいいなあ……』

ヨハンネスは起きて河獺の皮を鹿皮紐で襟に荒縫にした外套を着た。カルラスは父の爲に古靴と鹿の長い鳥打帽を揃えた。

夜が降りた。

岬岬の突鼻では、寒さを防ぐ失業者達が篝火をたいて、幾筋かの黒煙りが街の空へ倒れてゐた。篝火に燒けた人間の顏が焔の下に赤い玉のやうに見える。

街の凹みには黒い影があつた。

不具者が歩いてゐた。肺病患者の咳はそこら中に聞えた。路は泥水にぬかつてゐた。泥水に痰が銀色だつた。

ヨハンネスは暗闇を縫ひ縫ひ南部山脈ハンダンゲルフエールトの麓に急いだ。

街を外れて牧場を貫く岳に近づくと泥濘は段々と深くねばつこくなつた。長靴を拔く度にすぽすぽと鳴り泥しぶきが飛んだ。

ヨハネスは泥しぶきにさへ顏をこらへて歩いた。

彼も船員であつた。×××員候補になつてから二年經つ、候補期間は五ケ年だつた。

――今年こそこの大きな全世界に跨つて暴れ狂つてゐる經濟恐慌を機會に殘りの二ケ年の候補期間を半年にも一ケ月にも縮める事が出來る。――

歐洲の大戰爭が終り船が動かなくなり、息子が造船所を馘首され、飢餓のどん詰りから、妻を公園のベンチに稼がせ初めて半年、彼の顏は十年も老けたやうに皺が深み靜脈が太つた。

ヨハンネスは今しがた通つてきた道路に蹈づくまつた失業者、噂に聞く毎日の死兒放棄、結核病者の行倒れ等、この無數の悲慘な出來事の總和に想ひ及ぶ時、心臟はただ「復讐」の言葉に波うつた。

復讐! 復讐!

だが誰に××すればいいんだ。

ヘルメットの巡査にか、ストックホルム商船會社社長にか、造船所長か……違ふ。

組織だ、組織への叫びだ……

牧場の丘を一周してハンダンゲル、フエールルトの山麓に着くと、古い牛舍の奧にもう澤山の同志が集つて靜かに樽や桶に腰かけてゐた。

ロシア人の委員長、ボヴリーヨフが空箱の向うで何か報告してゐた。

牛の糞の匂ひが一面に漂つて、隣りの新牛舍では牛が草を求めて啼いてゐた。

決議權も發言權も無い彼は隅の秣桶に座つた。三人ほど先に隣家のダームが沖仲士らしい獰猛な眉字で彼をねめつけてゐた。

三人の書記が板壁の棚を机に筆記の準備をしてゐた。

飢餓と鬪爭に疲れて瘠せさらぼえた同志達は、眼だけを烱烱と睨らまえてゐた。

ストックホルムの失業者總數、四千五百人、全市人口の一割五分、淫賣婦の增加數三百十八名、現在數約一千二百名、港に於ける停船隻數二百六十四隻、日日失業者の三割に當る登錄勞働者に支給される馬鈴薯と鹽の目方、結核病者數七百人、捨兒の率一日六十人平均等が書記に依つて讀み上げられると、一同は鼻をすすりすすり聞いた。

『同志諸君! かくの如き大失業群が全市にうろついてゐるのは何のためか、全世界のブルジョアジーが戰爭費用をブロ

レタリアートにしよはせんが爲の目的によるのである……』と書記は報告につづけて煽動を忘れなかつた。『この經濟恐慌はただにストックホルムだけではない、全スエーデン、全ヨーロッパ、全世界に及ばんとしてゐるのである。

彼等ブルジョア代辯新聞は言ふ『次の好景氣のための一時的不況であるが故に、全國民はこぞつて、勤儉貯蓄、×國の隆盛につとむ可きである……』と、而して、一般民衆をごまかして、ブルジョアジーとの協力の下に次の搾取にそなへんとしてゐる。

大戰前の八年を週期として起つた恐慌は益々その週期を短くして、我々を苦るしめるであらう。最早、我々はかの、惰勢やむを得ずして一般民衆に選擧されたる社會黨代議士の非階級的なることを撤底的にバク露して新らしき××ロシアとの××による我々の運動をせねばならぬ秋に至つたのであります……』

『同志諸君！』とよくレーニンの物眞似をしたがる委員長ボヴリーヨフは諸般の報告が終つてから叫んだ。『ペトログラード本部からモスコー・ルビアンの副書のメッセーヂが來てゐますから、議案に先立つてこれを發表します。』

つつましい拍手が低い屋根裏に響いた。

『萬國の同志、プロレタリアート、勤勞者！　我々、勞働者兵士代表ペトログラード、サヴエートに××したる勞働者と農民は、諸君に對して熱烈なる挨拶を送り、一の大なる事變に就いて諸君に告げる。』

追放と暴壓とをくぐつて二十餘年飽くなき鬪爭に鍛え上げられてきた彼の聲聲が藁ぶきの牛舍をゆすぶり、丘の風に交り、山顚をめぐる氷河に滲みていつた。

それは疲れた睡氣を催したものに、牛舍の臭氣に頭を痛めたものに、新しい努力への決意と、萬國の勞働者から差しのべられたいかつい握手の心強さとを與へた。

議案は二ヶ條の本部案があつた。一つは、「勞農ロシアの國際的承認の一般民衆への影響を恐れて、一八一二年に一度國會を通過した「出版自由法」撤廢に對する反對運動の件」

二つは「失業者救濟の大示威運動の件」であつた。

二ヶ條とも滿場一致で可決された。

然し、實行方法の討議に入ると意見がまちまちであつた。下士あがりの委員は、「速時殲兵團を組織すべし、」と亂暴な口調で說いた。鏈礁(ケッテンシェール)島からの農村委員は、「バルト海を橫行し、當局と暗默裡に共謀をして我等の鰮を盜むエストニア人海賊を所刑するのが俺の望みだ」と力んだ。

又「救貧院と國立教會を襲擊せにあならん、」ことに固執したり「公園の淫賣婦を追拂はないで却つてその淫賣婦の邪魔者の立番をしてゐるやうな××は益々我が婦女子を墮落せしむるものであるから、先づ××を街から追放しろ……」と我鳴つたりした。

議長の發言も求めないで隅々から、反對意見や、罵る叫びが飛んだ。その度にボヴリーヨフは、堅パンを割る槲の棒で卓子代りの空箱を叩いた。この騷しさでは、肘に顎をのせて聽衆の意見を裏まで見通す、レーニンの眞似どころではなかつた。

『同志よ、靜かにして下さい、我々は一刻も早く糞臭さい牛舍から出たいのです……』

『さうだ、儂は今夜、鰯雁の剝製を作らねあならん、明日のクローネルがないんだ……』

『議長早くして吳れ！』

三人の書記は選擇もなく片つ端からそれ等を筆記した。

『議長、議事進行について……』

と林檎の藁の中に胡座をかいてゐた水夫のテオドールが綿毛立つた帽子を振つた。

『よせ、よせ！　スウィングだ、スウィングが最善の方法だ‥‥民衆は未だ迷信を持つてゐる。』

『さうだ、めんだう臭い仕事はよせ！大衆は迷信でも動くぞ‥‥』

『いや、私語を禁じます。』と議長はパン制棒の音を高くこんこんと鳴らした。「同志、テオドールに發言を許します‥‥‥』

テオドールは秣藁をがさごそとさせて前曲り首をぬうと同志達の上に現はした。

『さて同志諸兄、』彼は失業前は毎日汽船のブリッヂで舵輪(ホイロ)を廻してクローネルに有りついてゐたので、その手附きはまるで自動車を運轉するやうな恰好であつた。『儂はマドロスである、船といふものはどんなよいエンヂンあり、キャプテンありと雖も石炭がなければ動かん、諸君が先程から發表せられた意見はそれぞれ有意義なる目的あるものだと信ずる、然し我々は未だ、失業大衆を組織に持たない、今日我々がこのくそ臭い牛舍で決議したる「出版自由法撤廢反對運動」も、「失業者大示威運動」も、畢竟これ組織がないならば春のバルト海に浮ぶ氷の如きものである。で、あるが故に儂は今後數日間に、各委員、部員、候補者諸君による、「組織週間」を勵行し、大多數の失業者の組織のでき上つたる後に、前述二個の問題を同時に含んだるところの大デモンストレーションを起すを唯一、最善の方法と確信するものである‥‥そしてそれは今日の甚しき恐慌期に尤も可能であると信ずるのである。』

彼は潮がれたほれぼれした聲で饒舌り終つた。

拍手と喚聲が亂れた。

「同志、テオドール、お前はいい頭だ、何故先月の俺の所に借金取りが來た時、そんないい頭を絞つて呉れなかつた、殘念だつたなあ‥‥』

『馬鹿言へ、人間は一生一度、いい智慧を出せばそれでいいんだよ‥‥』

議長は一生懸命に空箱を叩いて騒がしい牛舎を靜めた。

ボブリーヨフの説明の下にテオドールの提案がとり上げられた。各委員や部員達はその方法の比較的簡單なのを喜んだ。

そして、大デモンストレーションのポスタアとビラの作製、と臨時組織部員が多數任命されヨハンネスもその中に加へられた。

『議長、費用捻出方法に就いて……』

と又テオドールは提案した。『同職業にあつたヨハンネスは今失業中ですが彼の妻と彼の息子は未だ就職してゐますから、彼には此際相當の費用を負擔させるべきが至當でありませうし又、彼としてもそれは爲さねばならぬ事だと信じます。』

『同志ヨハンネス君に質問します……只今の同志テオドールの言葉は正確ですか……』

ヨハンネスは、妻が公園で稼いでゐる事を誰にも祕密にしてゐた。今更違ふとも言へなかつた。唯一人それを知つてゐるダームが目尻で嗤つてゐた。

『凡て正確です、然し最近息子のカルラスだけは馘首されました……』

『テオドール君、その他の諸君、各委員分擔額を至急、決定しませう……』

『――異議なし……』

即時、同じ場所で、着席のまゝ、臨時組織部員會が開催され、費用全額が決定され、ヨハンネスには特別に三〇クローネルの負擔を三日以内に持參するやうに命ぜられた。彼は默つて命を受けとつた。彼の妻の職業に就いて知つてゐるダームだけは集會がはねるまで皮肉な笑ひをやめなかつた。

ヨハンネスはダームのたくましい骨骼にさへ壓迫を感じた。

歸り路に、よくよく思案して見ると三〇クローネルはおろか、十クローネルも遣繰のつかない今の境遇に氣附いた。會合の席上では昂奮の餘り、元氣よく承知したが――

彼は泥濘みを歩きながら、偶然に、百クローネルの財布でも落ちてやしないかと、目を光らした。そして百クローネルを拾つた時の金の使ひ道をいろいろと考へた。

彼は幾度も自分を嘲笑した。

嘲笑の下から「どうにかせねばならない」といふ義務感がつき上げた。

彼は遂に、大戰當時のマドロス仲間のエリーニン・エンベルグの所へ借用に行かうと決心して道を東にとつて海岸通りへ急いだ。

3　（人種が違ふといふ事はお互に母が違ふと同じだ）

公園の入口には淫賣婦の張番巡査が立つて角燈（ランプ）をてらしてゐた。

草叢や籔には野良犬が目玉を金色にして捨兒をあさつて走つてゐた。

――力あはせて強く引け、強く引け・・・さーあァ重い船は動ごく――

Pulla-way lad, Pulla-way lad
A long strong pull all together
A long strong pull all together
Now the heavy timber moves.

Now the heavy timber moves.
Pull lad together——

……………………………………………………
……………………………………………………

メラール運河を造船所の石炭を積んで遡る櫂夫の唄が遠く夜の空にはねてゐる。

それは鐵板を叩くやうに太く聞えた。

二階の張出緣の椅子に座つてゐたカルラスはその歌聲に合はせて「サア、重い船は動く……」を口ずさみながら、バルト海の沖を睨んでゐた。

ペトログラードから八百浬の荒海を横斷し來るソヴエート傳令船の赤い燈を待つてゐるのだ。

それは黨員候補になつて以來の毎夜の彼の任務だつた。

カルラスは眼をつぶつて櫂夫の唄を歌ひながら運河の土堤を遡る水夫の生活を思つた。

船の舳から直線に張られた十數本の索綱の先に厚皮の輪がある。その中にすつぽり胸板を入れ、唄の節にあはせて上半身をゆすりゆすり、セドラ・テルエ水道に汗を落して行く人達の、胸板にある厚皮にすれた紫いろの横痣が網膜の裏に浮んだ。

それは罪人の燒鏝印のやうに勞働の慘苦が刻んだ象しであつた。

彼が歌つてゐると隣家、ヨルゲン・ダームの家の一人娘も窓を開けた。

『又、夜更しなの、父は今夜留守なの』とダームの娘ベルタは白い顔を暗に浮かした。『櫂夫のロング・ストロングはいいわね、體が自然とゆすれるわ……』

『ラップ人は我慢がいいねえ、全く偉い‥‥』

とカルラスはヨルゲン一家が、ラップ人種である事を念頭において言つた。『あの隠忍さがあれば、我々の事業も遠からず完全にできるよ‥‥』

『でもね、いくら忍耐があつても仲間割れがあつてはいけないわね、うちのダーム父さんと貴方のお父さんみたいにね‥‥』

『勿論、うちの親爺も運動してゐる癖に何かしら、捨て切れない人種的偏見を持つてゐるし、ね‥‥』

『妾の所のダーム父さんは、半世紀も昔に、ラップ人がアリーア人に征服されたのを遺恨にしてゐるらしいのよ‥‥』

『ダームさんが子供の時代だらうからね、あの時の惨虐さが頭に沁み込んでゐるんだね、きつと、にがい記憶が消えないんだよ‥‥』

『でもね、妾、ダーム父さん、解つてる所もあると思ふわ』とベルタは窓から張出縁の方へ出た。『あのね、時々はかうも言ふのよ、ラップ人とアリーア人の血を血で洗つた爭ひも、國王グスタッフ家の野心の犠牲にみんながなつたに過ぎないつて、そして、妾達はもうそんな古い考へから、人間同志が爭ふ事を止めなきあ、ならないつて言ふのよ‥‥』

『ほんとうにさう思つてゐるのかしら？』

『ええ、妾、ロシア位の大きさに署名してもいいわ‥‥』

『そんなら何故、君と僕の結婚を許さないんだらう‥‥』カルラスは立つて張出縁の手摺りから半身と兩手を差出して招いた。

『さあ水鷗のやうなベルタ、一寸、こちらへお出で‥‥』

隣の張出縁は二尺と離れてゐなかつた。

ベルタは水色の胸着の三角に見える襯衣をいぢくつて鳥渡、はぢらひを肩に動かしてからがつくりカルラスの兩腕に胸をのせた。造船所の鍛冶できたえたカルラスの筋肉が力まかせに女の體を持ち上げてこちらへ運んだ。

『さあ、お聽かせ！　君の決心を、ダームさんがさう腹では思つてるたつて、隣り合せに住んだが因果だ、父親同志の睨み合ひは尚ひどいんだからね、君のダームさんが絶對反對を表明したときはどうする……』

『平氣よ、妾……』

『平氣ぢやないよ、どうする決心？』

『殺せばいいわ、ダーム父さんを……』

『殺す、ダームさんを、能きるか、そんな事？』

ベルタは何かにおこがれるやうに白目を表した。

『やればいいんだわ……』

カルラスは舌を動かさなかつた。

彼は半年前の赦免(パルドン)の祭の夜から戀し合つてゐる娘の心臟が、こんなにまで決定的な波を打つてゐるとは思ひも及ばなかつた。ある恐ろしさをさへ彼は感じた。

『ね、妾はさういふ決心でゐるわ、』ベルタは目頭を光らして言つた。『本當は國王ポンテ・コルボ・グスタツフの仕事なんだけれども、妾もラップ人の娘と生れて來た爲に、戀をするのにもこんな罪の決心をしなければならないのだわ……』

カルラスは答える代りにベルタの腕をとつて手の甲を輕く叩いた。

二人は海を見た。潮騷(しほさゐ)が人の話聲のやうに遠くから漂つた。

『よし……』

とカルラスは暫くして靴を鳴らした。

「何？」

『君がその決心なら、僕は必ず、父の偏見とダームさんのひがみをすつ飛ばして見せる……』

『さう、そんなら、妾の考へは第二の手段としておくわ……』

と、二人の人影が、張出線の下を通つてカルラスの家の扉を開けた。

黑いショールの方は母レベッカだつた。母が公園から種のいゝ客を咬えて來たらしい。

レベッカは若造りの聲で客に何か語つてゐた。

客の笑ひは廓揚らしく腹をつき出してでもゐるやうに聞えた。

張出線の二人は靜かに耳をそばだてた。

『カルラス、カルラス……』とレベッカは階下で叫んだ。『お客さまだから、何時もの所へお使ひに行つておいで！』

それは客のきた時の息子を外出させる母の暗號であつた。

『ベルタ、寒いけれど、少し散歩に行かう……』とカルラスは誘つた。『フョールドの方へ行つて見よう、夜でも海燕が「ゲラーッ、ゲラーッ」つて啼いて寄鷗もゐるよ……』

二人はそつと傾く階段をきしませて降りた。

カルラスは母の客を盗見した。鬚のひどく青い血色のよい四十がらみの紳士であつた。レベッカは客の厚い外套を脱がしてゐたが、ふとカルラスとベルタの姿を見とめると、金切聲を張りあげた。

『カルラス、ダームさんの娘さんを家に入れたりなんかして、ヨハンネスが怒るよ……うんと叱られるから……』

そして又客の方に顋をつき出して言つた。

『いゝえ、ヨハンネスと申すのが總領息子でしてあの娘さんと大の仲惡るなんですよ……』
ベルタとカルラスは鳩尾に冷たいものでも押しつけられたやうに感じて扉をけとばすなり往還へ走つた。路は泥にぬかつてゐた。
ベルタは下を向いて歩いた。
餘程してからカルラスが吃つて話かけた。
『僕のおつ母さんは、さう惡いんぢやないんだよ……金がなくて退窟してゐる所もあるんだ。』
『え、、そんな氣を起さなくつてもいゝわ、みんな苦しいんだわ……妾達は、私のお父さんは怒るのを樂しみにしてゐる位よ。貴方がゐなかつたら、妾だつて、あのおつ母さんみたいな仕事をしてゐたかも知れないんだもの……』
海燕の夜啼きするフヨールドは車礁島附近にあつた。
明るい大通へ出ると、海岸の貧民窟や、浮浪失業者の影は少しも見えなかつた。キヤバレからは五色のステインド・グラスの光がもれて、濡れた舖石道に映つてゐた。どんな、猥雑な事が行はれても人心を亂す言行が流布されない以上巡廻のヘルメット帽は同じやうにこつ〳〵平和な靴音を立てゝ歩き廻つてゐた。
舊敎の長老は青い短衣の侍女を連れて街を巡つてゐた。
だから、彼等二人連れの若者も何のとがめすら受けなかつた。
街を過ぎて、針葉樹の數林の門道へ去る曲り角で、ヨハンネスに出合つた。
ヨハンネスは、伏せてゐた顏をあげて二人を一つづゝの目で睨みつけた。
カルラスは、嗤い聲を喉に引つからませて門道を眞直にフヨールドの方へ逃げ出した。
ベルタもスカートをなびかせて跡を追つた。

「おーい、いゝんだよ……」

ヨハンネスは一度跡から呼んだが、もう二人の姿は藪林(ハーク)の中にかくれて見えなくなつた。

蒼黑く澄んだフヨールドの岩壁の上には、海で死んだ澤山のマドロスの十字架が立つてゐた。

二人はその下の濕つた枯草に坐つた。

ガルヘピックの積つた雪のつらが少しづつ青みがかつて來た。

藪林(ハーク)の方で――ビーリイト――ビーリイト――と鳥がさえずつてゐた。

「あの啼き聲は、ちつと待て！　ちつと待て！　つていふんだよ。」

頭にあることを充分に言ひ得ない、カルラスはさうおどけて娘を笑はせた。

そして彼は、自分がどんな機會からR・T・U・Iの黨員候補者として推薦されたかを語つた。

それは、ベルタと知り合つた少し後であつた。もうその頃から、所々方々の工場は、大戰終了を見越して、閉鎖を始め出してゐた。

臨時解雇、工場閉鎖が毎日のやうに續き勞働爭議は到る所に勃發して、勞働者の意識を煽つてゐた。飢え死するより氣狂になつた方がいい勞働者はどんどん牢獄へとび込んだ。

そして各工場は、必要職工數の半分を備つて、殘りの半數は、毎朝、町にうろついてゐる、失業者の中から、穩なしさうな、勞働組合や思想的背景の無さゝうなのを充分に吟味して、戰時の三分の一位に當る日拂、日給で使用した。

從つてそれは、失業者の間に自然に競爭を起させた。誰も彼もが、未明から起きて、各工場の門前に我を爭つてつめかけた。それは丁度、〆出しをした銀行に集る預金者によく似てゐた。

失業後、半月になるカルラスやヨハンネスもその群集に交つて、毎日早朝から造船所や、工場の門に押しかけて、巡査上りの守衛に賴んだ。

然し、ヨハンネスやカルラスのやうに多少とも勞働組合等に關係した經歴を持つたものは、資本家側のブロックで手際よく調査した寫眞附きの印刷物が配布してあつて、到底、採用される見込みはなかつた。

或日、何時ものやうに、アブレての歸り途にカルラスは、街頭演説を試みた。

聽衆は、アブレた仲間と、沖仲仕とマドロスの失業群と、乞食であつた。

海岸通りの古ベンチに立つて、感情の憤りのまゝに呶鳴り散らす彼の聲に大部分の者は感動された。拍手、叫喊が沸いた。

次次に、いろいろな人間が立つて、資本家に對する個人的憤懣を訴え合つた。

そして時分を見計つたカルラスが、

「諸君、怒れる、諸君、我々は我々の力を示す行列をしよう、そして、パンを與へよと當局に要求しよう！」

とベンチに熱叫した時に、突然、現はれた暴漢と巡査に散々、撲りつけられた。群集は次の街へ散つた。カルラスも群集と共に逃げた。「××が恐ろしくないのに、何故、××や反動が怖はいんだらう？」と自分を怪しみながら次の貧民街で又街頭演説をした。

又暴漢が現はれた。群集は又散つた。だが、今度は先刻の暴漢とは少し樣子が違つてゐた。

「君、少し話したい事があるんだがね。」

と群集の逃げて行く後姿を省みてカルラスを攫つた三人の男が話しかけた。「一緒に來て吳れないか、賴みがある‥‥」

見た所、頑丈さうな、なんぼ爭つたとて容易に勝てさうのない三人の骨格であつた。

カルラスは是非もなく承諾して三人と歩き出した。

彼は監獄行きか、自分の亂暴さを見込んだノルエー邊の海賊連中ではないかと考へた。

三人は飛行機の陣形のやうに左右と後を守つてカルラスを案内した。

幾つも岡を越え、赤楊の林を拔けると、リツテルホルム古城裏の海につゞく沼のほとりに出た。其處に捨てられたやうな、古びはて、壁が崩れた、蔦に包まれた、寺院があつて、大勢の人がゐた。

獨逸人、日本人、フランス人、英國人、一見、只ならぬ面魂の人間ばかりだつた。

彼は三人の紹介で、命を覺悟しながら一同と譯の解らぬ握手をした。ハンス、――スクワイア・マツラウ、――エンマ・アントンソン、――と三人も自分の名を發表した。

其處が、R・T・U・Iサヴエート委員會本部であつた。

父のヨハンネスも後から來て、息子と改めて握手を交した。ヨハンネスはもう五年間候補者であつた。同年候補のダームもゐた。

そして父に一切を語られ、カルラスはいさぎよく血判を押して、十年間候補者の仲間に入れられた。

カルラスがそれを語り終ると、

『その話はよく、ダーム父さんに内緒だつて聞いた事があります。』

と言つてベルタは微笑した。

二人が戻る頃にはもう夜中の太陽が輝き初めかけた。

4

(貧乏人の魂は殺される)

ヨハンネスの頭は鐵碪(カナトコ)の蜂の巣みたいに亂れてゐた。エリニン・エンベルグの家で借金することができなかつたから——東運河の木煉瓦道路を折れた奥まつた溝泥街にエンベルグ一家は住んでゐた。それは街とは名だけ、溝の中に材木の囲ひがあるに過ぎない凡ゆる臭氣を漂はした人間の住家であつた。

二間か三間の平家に二十人近くの家族が蛆のやうに住んでゐた。夜は押入と戸棚に、二臺位しかないベッドと床の上に祖父母、親子兄弟が雑魚寝する。息子や娘は、毎夜、押入れのカアテンの隙間から、兩親や、叔父達夫婦のいとなみを盗み見ては大人の生活を覗つた。天井の網には汚れものが列をなしてゐる、朝がくるとがらくた物を押入戸棚に入れて部屋を廣め、便所の匂ひのこもつたベッドを食卓に食事が初まる。

この雑然とした生き方が、少年少女を變態的早熟に導き、近親相姦、と幼兒殺しを引切りなく起した。

それでも大戰の好景氣最中はまだ人々は愉快に暮してゐた。

が一度、ベルサイユ會議開催が世界全國に宣傳せられ出すと、働き人が失業し、自由勞働者さへ職にありつけず、街の妻と年頃の娘は殆ど、公園のベンチへ口紅をつけて稼ぎにゆかねばならなかつた。

エンベルグの家は尚苦しかつた。

彼夫婦と弟夫婦が三組、息子三人と娘二人の家族。男は全部、船員で別々の船に乗りこんでゐた。だからストックホルムに入港すると誰か一人が一晩、家に泊つて、一つきりない櫥のくり抜ベッドに妻と寐て歸るのが習慣になつてゐた。ところが、四人の失業した夫が一度に歸つた。ダブルベッドは一つ——

夫婦は毎日、一緒に寐ようがために白目で睨み合つた。妻同志がよく口汚なく罵り合つた。

「これは、何うにかせにあならん、親族兄弟ちふものはこんなものではない筈だ。」

と胡麻鹽頭のエンベルグは頭を痛めた。

家族が首を集めて相談した結果、一日に一番み入りのあつた夫婦がダブルベツドに寢る資格を與へられることになつてゐた。

すると、妻等は稼ぎ高をかくすやうになつた。夫の收入の多い夜には、公園の稼ぎを發表するが、少ないと次の夜のために「客がなかつた。」と言つて金を出さないことがままあつた。

次には一家を支える分擔額までも出し惜んで兄弟達は對立し初めた。

『何んだい？　そんな腐れ體の賣り代がそんなに惜しいのかい、お前さんなんか亭主の航海中に沖仲仕の所へ幾度泊つたか覺えてるかい……』

『時代なおどし文句はおよし、妾なんざあお前さん見たいに生れ乍らの共同便所とはちつと育ちが違ふんだ……』

そんな妻同志の揚足取りが毎夜のやうに泥水のじくじくした床の上で投げかはされた。

エンベルグの息子や娘は、兩親と三夫婦の間に挾まれて、卑屈な笑ひを浮べながら、馬鈴薯と鯡と堅パンを惠まれる爲に苦心した。

その溝泥街の人々の生活は殆どエンベルグ一家のそれと兩方の耳位に似てゐた。

踝（くるぶし）までもしづむ濘るみをふんでヨハンネスはエリーニンの家を訪れた。

船底板を縫止めにした扉を開けると、場末酒場のコツク場と同じ空氣がむんと匂つた。

エンベルグと三人の弟達が壞れ椅子につぶれてゐた。

「おお、ヨハンネス、僕は君のために毎日祈つてゐた……」

『僕もさうだ……』

二人の會合は一年目に近かつた。握手した。

エリーニン・エンベルグの目の周りには黒い隈が見えてゐた。

『どうした君は、體でも惡いのか?』

『それより君の方が元氣がないね……僕達は鹽をつける馬鈴薯と堅パンが少し足りないのさ……』

塹壕兵（サフアール）あがりの三人の弟も立つて握手した。

ヨハンネスは家中を見廻はした。家内道具は皆目なかつた。取外づした洋服箪笥の釘などが壁にあつた。

顴骨と唇の尖つた營養不良の息子達の横顏が戸棚から見えた。彼等は素裸で、妹や姉と抱き合つて寢てゐた。

彼は舊友の家まで運んで來た自分の望みがとても果せないものである事を覺つた。

『ヨハンネス、僕の家はこの通りさ、獸のすまゐだ、苦しまぎれに道具も賣り飛ばしたし、女房は公園で稼いでゐるのさ……君の方はどうだね。お隣りのダームは相變らずむつゝりかね……』

『有難う、ダームも貧乏して弱つてる、妻君に死なれてから……僕の所は息子も造船所を首になつたが、女房だけは未だ印刷所に通つてるよ……』彼は又にがい嘘を吐いた。「近頃はからもう嬶の前にも頭の上らない始末さ……』

『いや、御同樣さまだ……兵隊にいつて鐵砲みがきをする方が極樂だ。』

四人は大口を開けて唇だけで嗤つた。

『ところでと、失禮しよう、一寸そこまで用たしに來たもので、寄つて見たんだ。』とヨハンネスは河獺外套の襟を合せて頬の房々した捲毛を撫でた。「船に乗つてるとよほど廻り合せがよくないと逢えないからね……ではさよなら……』

『あゝ、又……』

ヨハンネスは便所臭い友の家を去つて又溝泥の中を歩いた。

もう何處にも金を借りる目當はなかつた。

彼は、自分のつまらない見得坊から——妻は未だ働いてゐる——など、言ひふらした偽に陥つてしまつた破目にじりじり業を煮やした。

歩きながら、暗い赤楊の林に狼のやうにウォーウォー吠えて見た。又くら闇の門道へ來ると、思ひきり自分を侮蔑してフッフッと鼻を膨らました。

そしてその後から自分に同情した。

藪林(パーク)へ出る曲り角で、カルラスとベルタに逢つた時も、自分が恥しかつたから睨んだのだ。それを二人は逃げて終つた。

ヨハンネスは燒の戻つた鋼のやうになつて家へたどりついた。

家には誰もゐないやうだつた。

彼は泥まみれの長靴のまゝ、樅の木のベッドに倒れて、濕つた毛布をすつぽりとかぶつた。長靴だけがベッドの兩側に魚の鰭形にたれてゐた。

レベッカは客と二時間餘り同衾した。

客は急いで歸り仕度をして三クローネルを仕拂ひ、階段をよろよろと降りた。そして、階下のベッドに毛布に包まれて死んだやうに倒れてゐる、人間の泥だらけの長靴を見た。

客は、ふと、何か恐ろしい豫感を受けたやうに立竦んで後へ腕を廻し、食卓の椽を掴つた。體がぶるぶる慄え出した。足が動かなくなつた。

レベッカは、下衣(コンビネーション)の上に外套をはふると輕く階段を踏んで降りて來た。

『どうしたんです、その顔は、十字蛇みたいな目をして？』

と彼女は囁つた。

客は唇を蚯蚓のやうに動かしただけでベッドの方を指した。

『まあ何んです……あゝ、あれですか……』

レベッカは人を驚かした時の痛快さで大きく囁つた。

睡られないヨハンネスは體を固くしてそれを開いてゐた。

『あれは妾の夫です……』

『何？　夫！……』

『さう、お疑ぐりなら御紹介しませうか……』

『それに及ばん……』

『それでも、あんな顔をしてゐらしやるんですもの……』レベッカは甘え聲で夫を呼んだ。『ヨハンネス、ヨハンネス、一寸起きない』

ヨハンネスは身體が固くなつてゐた。

レベッカはもう一度呼んだ。そしてベッドの傍へ寄つて毛布をひんめくつた。

ヨハンネスは毛布の下で大きな目を開いてゐた。

『まあ、水の中の河獺みたいに……』

『何んだ……』

『一寸、お客様に御紹介します……』

彼はむつくり跳ね起きて、階段下の老人の顔を射るやうに見すゑた。
客は目を伏せた。
彼は靴音高く歩いて、節くれ立つたマドロスの掌をぐつと差し出した。
客はヨハンネスを仰ぐやうにして恐る〳〵握手した。
彼は、力一杯、親愛をこめて客の手を握つた。
客は、身體の何處か一部分で奇妙な聲を吐いてから、握手を振りちぎつて、扉を蹴りとばし一目散に逃げて行つた。
レベッカは後から夫の腕をぐいと引張つて又大聲に嗤つた。
『俺はな、貴樣には濟まないと思つてゐるんだ、』彼は喰ひちぎる位に力を入れて言つた。
『それを、客と握手なんかさせやがつて……』
『お前には妾の心持は解らないんだね、ヨハンネス……』
『何！　この間抜女郎、貴樣には男の心が解らねえんだ……』
『へッ！　はゞかりさま』レベッカは客に御愛想をいふ時のやうな顎をつき出した。
『知らなくつて？　助平で、甚助で、トンチキだつて事はね……』
ヨハンネスは口を一文字に力んだ。
レベッカは喉を伸ばして又嗤つた。
夫婦はその夜一言も交えずに過した。

5

ストックホルムは北歐のヴェニスといはれる。

統一のない滅裂な海岸線は片麻石、ウテエの鑛石、ベグマチート花崗岩の斷層で三色に飾られ、斷崖の上は不規則な石塊で櫛になり波形になり、或は粗暴に、且つ陰鬱な光を放つて怒濤に反抗してゐる。

河口の三稜洲は數千年前の魚群の死骸でその上に赤樅、松が四季を忘れて茂る。

春は、碧色の櫻草、みづはぎ、岩にこけもも、沼地に木いちごが、海岸を色どり、狐、兎、鷸が叢林をかけ巡る。

牧牛は、加里と曹達を含む海濱植物の營養から美味しいバタアを人間に與へ、去勢羊の肉は世界に類を見ない、そして葡萄酒と神話がある。

だから、歐洲遊覽の金滿家は必ず此處に訪れて山上のホテルに$をばら撒いて行く。

次の朝、未明、二萬噸級の遊覽船が客船棧橋に横づけになつて、税關吏を待つてゐた。

夜中の太陽が明け方黄いろくなつて漸やく白くそして耀きそめる頃、ヨハンネスはぼんやりと家を出た。

妻も息子も未だ寐てゐた。

日雇の洗濯人夫にでもありつかうとして彼は王族の住む南のモーセの高臺へ體を運んだ。茨を編んだ生垣に沿つて歩いてゐた時に、彼は呶鳴りつけられた。聲は垣の中の四阿屋からだつた。

『……お前たちの來る場所ではない……きたならしい』四五人の美しい貴婦人だつた。

『そんなきたない風をしてきて、妾達は不愉快にさせられる……』

そして一人は門の請願巡査を呼んだ。若い鬚のない巡査はヨハンネスを引立てゝ言つた。

『……君は失業者だな、うん、當家は毎日莫大な金を慈善院と救貧院に寄附してゐられる、富豪だから……君らのやうな

きたない人間を見るのが非常におきらひだ、』巡査は氣の毒氣に續けた。『勿論さうだらう、會社で儲けられた金を只で寄附されるのだからね……その位のことを言はれるのは當然だ……』

勞働者の血と汗を絞つて得た金錢の何千分の一かを寄附することによつて、もう自分等には何ら責任もないし、迷惑もかゝらない權利を買ひ取つたとでも思つてゐるらしい、ブルジョア婦人を彼は愚弄した。

ヨハンネスは默つて高臺を降りて貧民街へ歸つた。

街はそろ／＼とざはめきを打つてゐた。

工場の入口で一時間以上もかゝつて檢査を受けてアブれた人達が海岸通りへ、山の方へ急ぎ足に歩いてゐた。まるで何かの祭のやうであつた。

『やーい！　みんなやう！　棧橋にアメリカの大船が着いてるとさあ——金持が澤山乘つてるんだとやう……』

遙か向ふで聲がした。

『アメリカの船、金持……？』

『行け！　船だ、船だ……』

『行け！』

飢えた瞳が光り、足が飛び泥水がはねた。

失業者も、乞食も、少女も、淫賣婦も、我れ勝に棧橋をめがけて殺倒した。大勢の後からヨハンネスも走つた。野良犬は跫音に吃驚して逃げた。

街を海岸へ大曲りする所で、彼は一人の女と肩を打つゝけた。女は前にのめりさうになつた。

『どつこい、滑るんだ！』

と彼は後から抱きこんだ。
『氣をつけやがれ！　十字蛇奴（クロイツォッタ）！』
と呼んで女はふりかへつた。
そしてヨハンネスと女は同時に
『アッ！』
と顔色を變えた。
『まあ珍らしい、ヨハンネス、隨分老けたわねえ……』と女はすぐ片面だけで笑つた。『そしてどうしたつていふの、河獺襟の外套で……』
『エヴィーナ』ヨハンネスは女の腕をたくしこんで言つた。『さあ、港には、アメリカの船だ……急がう……』
『さうだつたわ、さ、行かう……』
二人は後れて走つた。走りながら、女は喋り立てた。
『妾あ、今でも獨身だよ。』
『でもよく、妾の名を覺えてゐたねえ……』
ヨハンネスは答へなかつた。
『お神さんを貰つて、子供ができたつてねえ、妾あエリーエンの妹と懇意だからよく聞いてるよ……』
女――エヴィーナは棧橋の近くの人間の塊りの所までハアハアせきながら話をやめずに走つた。
男や少年達は棧橋の一端にかたまつてゐた。
汽船が横づけになつた棧橋の下を、艀子や淫賣婦が挑發的な聲を揚げて客を呼び、肩をゆすぶり、時々身を廻轉させて

スカートを翻して歩き廻つてゐるのが見えた。

汽船のデッキの上では、アメリカ紳士や貴婦人等がもの珍らし氣にのぞいてゐた。

ヨハンネスと來たエヴィーナも人をわけてその仲間に入つた。

そして、片言英語で何か、ボーイに呼びかけてゐた。

その中に「ダンス」とか、「國歌」とかさま〴〵の注文が、デッキの船客から棧橋の踊子と淫賣婦に命ぜられ、金が撒かれた。

踊りはねるものと、夢中に歌ふもの、棧橋は忽ち瘋癲病院の園遊會のやうに賑はしくなつた。

ヨハンネスはじつと目を据えてそれを見てゐた。

暫らくすると彼もつか〳〵、その中に割りこんだ。そして、デッキから覗いてゐる船客を見上げながらぶら〳〵歩き初めた。

「アハハ、ヨハンネスの奴、あいつの踊を見るやうな氣まぐれものが世の中にゐるとでも思つてやがる……」

羨ましさうに見物してゐる失業者達は話し合つた。

と、一等船客がアパア・デッキで喧しく嘲笑ひ出した。

一人の通譯が現はれた。彼は棧橋のヨハンネスを指し招いて怪し氣な言葉を喚鳴つた。

「そこにゐる立ん棒さん、お客さんが百クローネルを上げるから××××を×いてみろとさ……」

ヨハンネスはきつと目を怒らしたが少ししてから答へた。

「ようし、やるから先にクローネルを呉れ……」

二枚の紙幣がひら〳〵海風に吹かれて彼の傍に落ちた。

彼はその紙幣を拾ふと突然、拳骨を振つて暴れた。そして其邊に踊つたり歌つたりしてゐる女達を追ひ拂つた。淫賣婦達は悲鳴と怒りを捨てゝ逃げた。

ヨハンネスは汽船の胴腹の前にあぐらをかいて×をはだけた。そして××した。

汽船のアメリカ紳士と船員達は喊聲を揚げた。棧橋の根本に塊つてゐる人間は遠吠えする野良犬のやうに怒つた。

『ヨハンネスの外道、男が前を賣る奴があるか、外道！』

『ヨハンネス、馬鹿、およし、』エヴィーナは氣狂ひのやうに猛けり立つて踵のない靴で地を蹴つた。『ああ、ヨハンネスは氣が狂つた。氣が狂つた。』

『笑え！　笑え！　スエーデン人の恥だ……』

『笑つてやれ、笑つてやれ、あの意氣地なし……』

失業者達は不揃ひな、とんまな聲を無理に振りあげて思ひきり嘲つた。

と、ヨハンネスの顏がその方を向いた。彼の顏は白いまでに血の氣がなかつた。嘲笑つた人達はつと尻ごみをした。ヨハンネスは走つた。人の塊りに飛び込んで來た。人々は道を開いた。するとヨハンネスは二枚の紙幣を握つて風のやうに街の中へ呑みこまれてしまつた。

汽船からは又喚ひ聲が響いた。

淫賣婦達は怒り笑つた。

『なんて意氣地のない男だらう？　女より下司だわ……』

『ほんとうに、ストックホルムに、いいえ、スエーデン中にあんな男がゐるなんて絶對にごめんだわ』

エヴィーナは泣いて何も言はなかつた。

人人はヨハンネスの恥を街に振り撒く爲に散つた。淫賣婦達は又汽船の下に集つて踊り歌つた。

エヴィーナは、一人、税關の赤煉瓦塀の下に行つた。そして胸一杯泣いた。

『あの下司な、社會主義のヨハンネス、汚ない人間、妾の前であんな事をするとは……』

エヴィーナは二十年も以前、ヨハンネスに言ひ寄られて愛しながらも振り斷つたのを想ひ出してゐた。自分のその後の不幸な境涯も一緒くたに――。

『あのヨハンネス、下司奴！　そして憎らしいアメリカの金持共奴！』

だがエヴィーナは泣けるだけ泣くと、苦しい笑ひを、目と鼻と口で笑つた。

そして棧橋へ爪先を向けた。

彼女には鳥目の老いた父があつた。

その夜、エヴィーナが、エリーニンの家に行くと、もう今朝のヨハンネスの所業が噂になつてゐた。

『社會主義者なんて、矢張り下司つぽだ！』

と皆が叫んでゐた。

『しかし、エヴィーナ、』とエンベルグが冷やかした。『お前の日頃御自慢の、妾の昔の戀人もああなるとみじめなもんさ……ね』

『何を言はうつていふのさ、お前さん』と彼女は怒つた。『勿論、惡いさ、でも、惡いのは、ヨハンネスぢやなくつて社會主義なんだよ、あの人は若い時にあの病氣にとつ憑かれたんだ、ああ、此度あの人は惡い信仰の爲に殺されちまうわ……可哀さうに……』

『ふふ、未だ大分熱があるんだね、四十面さげて』とエリーニンの弟の一人が言つた。『とんだ×××の戀人さ……』

『お默り、この十字蛇（クロイオッタ）！　お前さん達は女房を公園で稼がしてゐるぢやないか、口はばつたい事を言ひなさんな……』彼女は額の皺を深めた。『あの人は妻子を養ひたいからこそ、あんな事をしたんだ……』

『とんだ、おのろけだ』

『いいよ。見といで、私はきつと、ヨハンネスを改心させて見せるから……』

エヴィーナは昂奮して表へ走つた。

夜の街には――ヨハンネスの××を賣つた外道奴！　撲りつけろ！――と失業勞働者達が喚いてゐた。

朝の嘲笑は夜と共に激しい怒りと變つてゐた。

6
(勞働者が憎くみ合へばブルジョアに敗ける！)

ダームは一日手間仕事を探し廻つた。四時間の賃仕事さへ見つからなかつた。彼はむしやくしや腹を唾と一しよに地に叩きつけ、通る人に泥水をはねさせる事によつてこらへた。

もう、夜だつた。

街にはヨハンネスへの怒りが充ちてゐた。

――マドロスのヨハンネスといふ男が、アメリカ人から五百クローネル貰つて、三度×××を×いた――

――彼はダンチツヒにでも逃げるのだらう……

――勞働者のくづだ、彼を罰しろ！――

――さうだ、彼を罰せよ！――

ダームは到る所でその刺ある聲を聞いた。

そして彼も怒つた。

『よし、時機が來た・・・・』

と彼は呟やいた。

同じくR・T・U・I委員會の五年間候補者仲間であるヨハンネスを彼は極端に憎んでゐた。候補者になる前から二人は偶然に隣りに住み合つた。そして、二昔も以前、ボトニア海沿岸に海賊的半共和國を唱えてゐたダームの祖父母ラップ人を征服したスエーデン本系のアリーア人に對する、凡ての怨恨を一と束らげにして隣りのヨハンネスに向けた。委員長オヴリーヨフから教えられるいろいろなコンミユニストとしての理論から考へれば、決して一種屬の遺恨をアリーア人だけに向けるのは誤つてゐる。と彼はよく思つては自分を淸算しやうとする——然し彼の頭の半分は、プロレタリアの解放よりも「ロシアの力を借りて、アリーア人を征服してもう一度、ラップ共和國を創りたい」といふ熾んな野心に燃えてゐた。

ダームには未だ祖先の海賊の血が流れてゐたし、幼年時代に目のあたり見た、同胞殺戮の血なまぐさい光景を忘れることは能きなかつた。

『それにヨハンネスの息子までが』と彼は考へた。『娘のベルタを誘惑しやうとしてやがる・・・・』

彼は赤毛の生えた太とい指をぴしぴしさせて力んだ。

ダームは何故、その日その日の馬鈴薯にもことかき乍ら、木賃宿にも、蓉らしい貧民窟へも逃げないで、屋賃の滯つた家に頑ばつてゐるのか。

若死にした彼の妻の記憶があつたから——彼の妻はラップ人がアリーア人に征服された後の貧困と重税と、壓迫との數年間を、猥いんきはまりない生活、只たつた一片の堅パンと酒のために身を提供する母や姉の中に育つた。そして近親相姦

や私生兒殺しをも見て來た。

彼女はひねくれた、愛せられたことを愛することを知らなかつた。

ダームは彼女が死ぬまでそれによつて苦るしめられた。

ダームの心配は今ベルタだけに集中してゐた。

彼は意氣地のない貧乏人がきらひだつたからだ――

道路にはラップ人の失業者や乞食が澤山ゐた。その一人一人にも彼は怒りと輕蔑の唾をとばし、そつぽを向いた。

ヨハンネスの家の前まで來ると、惡口の限りをつくして爭つてゐる夫婦の聲が聞えた。

『その金は何處へやつた、』とレベッカは金切聲で喚いてゐる。

『何處へやつても大きなお世話だ…………』

ヨハンネスの圖太い咽聲がする。

×××で得た金をヨハンネスが何處に持つて行つたかダームには見當がついた――委員會へだ――が彼には同情も憐憫もなかつた。怒りのままに扉を押して進んだ。

『ヨハンネス！』と彼は肩を張つて叫んだ。

レベッカは大きな顎をつき出した。

『ラッピイ、何の用があるんだ、そしてまあお前さんの顔は何んだいものものしい…………』

ヨハンネスはベットに腰かけて伏目になつてゐた。

『ふう、ふう女にお用はねえ、』とダームは嘲つて大股にヨハンネスに近づいた。『ヨハンネス、又何があつて來た。貴樣今朝何をした、棧橋で、ふう、ふう、言えまい、ラップ人はそんな外道はしないんだぞ！アリーア人の男は食ふに困る

と、前を賣るのか。』

『食ふための金だ、仕方がない……』

ヨハンネスは落附いて相手を仰いだ。

『ふう、口が横に裂けおしまいし、アリーア人の外道奴！　勞働者の面汚しだ。』

ダームは赤毛の生えた拳骨をヨハンネスの前でぐりぐり動かした。『こらアリーア人、アリーア人、ふう、勞働者を穢したアリーア人奴！』

ヨハンネスはじつと横隔膜の波打つのを抑えてゐた。

『こら、ふう、アリーア人の外道奴！　ブツ！』

ダームは唾を吐きかけた。

ヨハンネスの感情は段々昂ぶつた、彼の持つた異人種への理由のない憎悪がつのつた。

『ダーム、貴様、喧嘩を賣るのか。』ヨハンネスはベツドをはねて立つた。『この俺に喧嘩を賣るのか、ラツピイ奴！』

『ふう、勿論！　今氣がついたか、アリーアの外道！』

『よし、來い、ラツピイ！』

『ふう、ふう、アリーア人奴！』

二人は組ついた。ヨハンネスの方が二寸程低く三分の一位細かつた。はね返して離れるとメリケンを覘ひ合つた。肉が鳴り皮がはじけ血がとんだ。

お互の爪の間に血が滲んだ。

シヤベルと洋撥と三角棒を振り廻した腕節も、毎日捲揚機代用になつて鍛え上げた腕力には敵はなかつた。

ヨハンネスは忽ち、ねぢ伏せられた。四つの目が一時の距離で睨み合ひ、咽喉を競つて締めやうとした。
指にも掌の筋にも紅色が染つた。
レベッカは階段の手摺にしがみついて慄えながら、『カルラス、カルラス……』と外出してゐる息子を呼んだ。
ダームの全身の重みを集めた腕力がヨハンネスの首を扼し、動脈と氣管が壓縮された。そして約三十分、ダームが顔面筋肉を硬ばらせてひよろひよろと立上つて斜に往還へころげ出た時はヨハンネスの呼吸は停つてゐた。
レベッカは夫の體に走り寄つた。
耳から頤に血が糸を引き、脣は漆喰色にあせてゐた。
『ヨハンネス！　ヨハンネス！』と頭のてつぺんで叫んでレベッカはのけぞつた。『カルラス！　ヨハンネスを殺した、ヨルゲン・ダームが殺した、カルラス、カルラス！』
瞳を鼻筋に集めたレベッカは上靴のままで濘つた表へ迷ひ出た。

小一時間ほどして大きい袋をかかへたカルラスが戻つた。
彼は父の死を發見して、家中を走り廻つた。
そして母を呼んだ。次に父の體をゆすつた。
『ヨハンネス、ヨハンネス、お父さん……』
涙も流れない氷つた頭でカルラスは閉じた父の目をのぞきこんで死の原因を讀まうとした。
と表にやはらかい聲があつた。
『今晩は、ヨハンネス、居りますか……』

カルラスは應えなかつた。

扉を押して、古びたショールの中年女が這入つてきた。

『ヨハンネスは！』

と彼女はカルラスの背中に訊ねた。『居ないんですか？』

『此處にゐる？』

と息子は父を見つめたまま言つた。

女は近づいた。そして訊ねる者を見た。

『何うしたんです、あなたは息子さん？』

『さうです、父は死んだ。殺されたんだ……』

『おお、おお、十字蛇(クロイオッタ)！』中年女はショールを外づしながらカルラスを押しのけて倒れた。『おお、ヨハンネス、お前は死んだ、お前は正直だ、知つてる、妾は知つてる、何故だか知つてる、お前が悪いんぢあない……お奴だ！』

女――エヴィーナはヨハンネスの房々した捲毛に顔を埋めて泣いた。

『お奴！ アメリカの金持奴！ ヨハンネス、お前は良い人だ、だから自殺したんだ……』

カルラスは父の突然の死よりも、この得體の知れない中年女の出現に度膽を拔かれて動きがとれなかつた。

『お前は悪くない、お前は悪くない』とエヴィーナは男の死骸に言ひつづけた。『アメリカの金持奴！ 妾が仇を討つてやる……』

そしてぼんやり立つてゐるカルラスをつき飛ばして姿を消した。

濃霧(ガス)に包まれた船のやうになつてカルラスは父の死體を棚のくり拔きベッドに運んだ。

蠟燭の灯の下で彼は父を見守つた。

夜が更けた。

カルラスは今夜、委員會本部へ顔を出して委員長ボヴリーヨフから數日後に實行すべく決定されてゐる大業的計畫を告げられ、自分と父の使用する火藥を製造する爲に要具をととのえて來たのだ。大切な仕事を數日前に控えての父の死は、それが自殺であるか、他殺であるか又は、犯人が誰であるかといふ問題よりも、言ひやうのない殘念さと淋しさのみが先だつて彼を悲しく押し包んだ。

彼は蠟燭の細い焰のゆらめきに陰影を刻んでゐる父の死顔をみつめた。耳から吹いてゐる血、頰に流れた紫色の蚯蚓脹れ、ふくれた唇——毒藥自殺の苦悶か？　殺戮される折りの反抗から受けた傷か？

彼はベットの傍に膝まづいてこと新らしく涙を流した。若し神といふものが存在するなら何か祈りたくなつた。そして、無神論者である彼が思はず

「——ムバアヂア、サナ——」

と原始的な言葉を吐いた。

が、父の死は彼に一人分餘計な仕事を殘した。カルラスは持ち歸つた大きな袋を取り出して復讐にふくれ、決意に固つた心臟の鼓動を聞きながら仕事の準備にかかつた。

袋には、黑色火藥の材料、硝石七五分、木炭粉末一五分、硫黄一〇分の百發分があつた。他にエーテル、アルコールの混合液で捏つた發射藥百發分、硅藻土製ダイナマイト四十發にその起爆劑の雷汞一壜があつた。二人分だつた。

彼は立つて裏戸の鍵を下ろし、窓を閉めた。次に表の扉を閉めやうとした。

と、隣家から、ベルタらしい悲鳴が小さく耳に來た。彼は咄嗟に走つた。

體當りに隣家の扉を開らくと、階下のベッドに倒れたベルタを、無言に唇を喰ひしばつたダームが鞭打つてゐた。

ヨハンネスを殺害してから一時間餘りも街をうろついて來たダームは次に「カルラスに惚れくさつた」と娘を苛いなみ始めたのだ。

『ダーム、何をする……』とカルラスは若若しい力で叫んだ。『お前の娘は奴隷か？』

ダームは振り向きざまに後じさりしていかつい鼻柱を皺だらけに顰めた。

『ふう、ふう、來たな……』ダームはカルラスが仇討ちに來たと思つた。『カルラス、ふう！　お前は仇のラップ人の娘を愛するのか、ええ、ふうこの意氣地なし……』

ベルタは起きてカルラスに縋つた。

『僕は愛する……』

カルラスは胸を張つて言ひ切つた。

『ふう、ふう、ベルタ！』とダームは歯をむいて鞭をびゆんびゆん振つた。『ベルタ、貴樣は、異人種を愛するか、先祖の罰を思ひ知れ……』

『ええ、妾は愛する』と彼女も男の顏の下で答えた。『愛のために罰を受けて見やう、あなたの下でくすんでゐるよりいい……』

『ふう、ふう、この親不孝者、お前の祖母がどんな死に方したか知るまい……』

ダームはもう一度唸つた。そして鞭を床に叩きつけると、醉つぱらひのやうに表へ動き出した。

『ダーム、ダーム、』とカルラスが呼んだ。

『ダーム父さん、ダーム父さん、』とベルタも叫んだ。

夜がダームを吸ひこんだ。

カルラスは父の變死をもらし、ベルタは一緒に通夜をすることを誓つた。

カルラスはベルタを家に入れて表の扉に鍵をした。

二本の蠟燭を立てた。二人はヨハンネスの死體の前に腰を下ろした。

魚油の煤煙が室に漂つた。

焔のゆれる毎に、二人の影が大きく漆喰壁にうごめき、ヨハンネスの死顏の隈どりは陰影のために生きてゐるやうに感ぜられた。

7 (反逆すべき敵は只一つである)

眞夜中になつても母レベツカは戻らなかつた。

カルラスとベルタは二本の蠟燭の焔に守られてヨハンネスの死骸の前にゐた。

街が靜まつて、潮鳴りが閉ざした窓をふるはせた。室も慄えた。

カルラスは沈默のうちに父の死と母の家出を絡み合せてさまざまな想像をたくましくした。然し結論はこなかつた。彼は若しこれが他殺であつた場合を考へて、ダームがアリーア人に對して持つ捨て切れない怨みの深さを味つた。

自分の留守中に何事があつたかと、訊ねたが、ベルタは街に出てゐて知らない、と言つた。

暖爐もたけない室は冷えびえとして、父の死の冷たさが三呎を離れたベツドから身内にぞくぞく泌みるやうだつた。

二人は長い時間ときどき目を見あはすきりでだまり續けた。

蠟燭は少しづつ溶けて流れた。

ベルタは、ずつと昔、何處かで是れとそつくり同じやうな夜を過ごしたことがあるやうに思はれたので、遠い以前の記憶をいろいろ引づり出して見た。記憶にはなかつた。彼女は遂にそれを、祖先のラップ人の誰かが他人種との闘爭時代に經た歴史の一頁が自分の頭の隅つこに殘つてゐるんだらうときめた。

カルラスもさうだらうと感心した。

霧が街にこめる頃、太い蠟燭も段々に短くなつた。ぢーツ、ぢーツと芯がはじけた。

焰がかすかにゆらめいて暗くなつた。そして又明るくなつた。

それは原始的な氣分を室にみなぎらせた。

それが幾囘も繰りかへされた。

その度にベルタは椅子をずらせてカルラスの方へ近寄つて行つた。

情熱のこもつた目で男をみつめた、男はまつすぐを見てゐた。

二本の蠟燭はもう親指の先ほどもなくなつてきた。ぢーツと又芯が鳴つて焰が小さくなつた。室は一瞬、夜明けよりも暗くうすら冷たくなつた。

——カルラスはもう家に蠟燭のない事を知つてゐた。

ベルタが

「カルラス……」

と小さく呼んで、男の膝にくずれた。

カルラスは、暗い光の中に蒼みを帶びて見える女の死顔に目を注ぎながら、女の胸を抱いた。それから汚れた胴衣の胸を……

ぢーッと鳴つて光は消えた。

二人は何ものも見えなくなつた時、闇の中できつく抱き合つた。そして二人は暗闇で大人になつた。

・

一時間餘りたつた。

カルラスに鍵を外づして貰つて、ベルタは自分の家から蠟燭を五本、持つて來た。

再び、光が室を輝らした。

カルラスは袋から、厚い硝子の鉢と擂棒を出した。

彼はその中で、黒煙火藥の材料、硝石、木炭、硫黄を粗らい粉末にくだいた。

ベルタはカルラスに教えられて、硅藻土製ダイナマイトの尻に水銀様の起爆劑、雷汞を一本一本塗つた。

硝子鉢はごりごり床に鳴つた。

雷汞液は雨だれのやうな音を細くたてた。

鼻と額に一杯、皺を集め、脊骨をぎくしやくさせながら、ダームは藪林の枝をくぐつた。

泥水は腰まではね、唇はかはき、こはい髪は旋盤削屑のやうに亂れてゐた。

彼は今朝、街の大勢の浮浪者達からヨハンネスの穢れた行爲を耳にした時には「いい折が來た、今日こそは彼奴を消してやらう」と腹の底から思つたのだ。そしてヨハンネスの顏を睨らみ、罵つてゐる内に、祖父母や父達の慘殺された光景を想ひ出した。彼は狂暴になつた。爭つてゐる内に思はず力が入つてヨハンネスを締め殺して終つた。

普段から彼は「ラップ人の仇を討つためにアリーア人の一人や二人位殺すのは何でもない事だ」ときめてゐた。

然し、今日、一人のヨハンネスを殺してみると彼の心には、恐ろしい悔ひと罪悪の感じが湧き返つて苦しめられた。苦しんだ揚句、一人娘を味方にして同情されやうとした。駄目だつた。娘は仇の息子を父よりも愛してゐた。しかも娘は「父さんの許にくすんでゐるよりいい」と父を罵つたのだ。

彼は娘の罵りに追ひ立てられるやうに急いだ。

枯れた雑草が彼の靴にふみにじられた。

道道、猛獣のやうに空に吼えた。

『俺は誤つてゐるか、畜生! やい、俺は誤つてゐるか、ふう、俺は正しいんだ。誰が何んと言つたつて正しいんだ……』

木靈が林や森の涯づれでわんわんと應えた。

それは、跛が人のゐない所で、一人で肩を怒らかし普通人のやうな眞似をして歩いて樂しむのよりももつと憐れな姿だつた。

彼は一切を懺悔しやうために委員會本部へ心臓を向けて歩いてゐた。

リツテルホルム古城裏の古い寺院には黨員や候補者等の殆んど全部が集つてゐた。

變裝した傳令が次次に報告をもたらした。

委員長ボヴリーヨフは一々の報告を古びた一室の蠟燭の下でレーニンの眞似をして聞いてゐた。

『カルル・スクルナ兵器工廠職工百二十名參加——』

『海岸自由勞働者組織——三百五十六名——』

『一般失業者、七百餘名、參加——』

『失業船員參加、六百餘名……』

次々に紙片に記した報告がマツラウの手を經てボヴリーヨフの卓子に屆けられた。

ボヴリーヨフは卓子についた片肘に顎をのせ、上體を斜にして折々目を閉じては考へてゐた。

ハンス、マツラウ、アントンソン、他八名の委員がボヴリーヨフを取り卷いて報告毎に討議を重ねてゐた。

示威行列の道路順も、隊別、組數、各隊の指導者はもう決定してゐた。

日取りだけは未定だつた。

『ダームとヨハンネスが來ない……』と一人が言つた。『晝頃、ヨハンネスは何處で都合したか百クローネルを持參したが、それきり、來ない……』

『ダームは今日、一度も出席しない……』

『いや、何か、苦心してゐるのだらう……』

『それよりも、ビラの責任者が歸らん……』

一同が雜談してゐる時に、

候補者の一人が這入つて來た。

『同志、ダームが來ました。非常に頭を亂してゐるやうですが……』

委員の中では、さつと顏色を變えたものもゐた。

よろしい、連れて來給へ……』とボヴリーヨフは他の委員連を省みた。『諸君一寸、別室に退いて吳れ給へ……』

十一人の委員は別の扉から去つた。

ダームが泥まみれで這入つて來た。

『同志、ボヴリーヨフ！』

と彼はぜいぜい聲で卓子に縋つた。

『ダーム、何か起つたか……』ボヴリーヨフはレーニンを氣取つたまま質問した。

『ボヴリーヨフ、私の罪は大きい――』とダームは固い顎を左右に動かした。『私の罪は大きい、まあ聞いて吳れ……私は同志ヨハンネスを殺したんだ……』

『いや、ダーム、君は落着いて話して吳れ、もう一度明つきりと……』

ボヴリーヨフは肘の型を崩して驚いた。

『明つきりと、ふう、落着いてゐる、私はヨハンネスを殺した。……私の祖父母はラップ人だ、私もラップだ。ヨハンネスはアリーア人だ。あなたはラップ人がどんなにアリーア人に苦しめられたか知つてゐるか……私は子供の時分の事を覺えてゐる。冬の朝だつた。私達十何人の家族は暖爐を圍んでゐた。私は祖母の膝にゐた。遠方で小銃の音がした。人間の叫びが聞えた。父はアリーア人が攻めて來たのだと言つた。私達の頭にはアリーア人が、戰爭の上手な、智恵袋のでかい偉らい人間としてしみこんでゐた。私たちは怖れた。女子供は皆逃げ仕度をした。果してアリーア人だつた。銃聲と砲聲は段々近づいた。漁師街はごつた返した。方方に火が放された。その中を祖父母、私、母が夢中で逃げた。其頃には街中に火の手がひろがつた。アリーア人が、放火、强盜……殺人をほしいまゝにした。

私達は、林の藪にかくれてゐた。そこへアリーア人軍隊が來た。父はもう街の戰ひで殺された後らしい。私はそれから一度も父を見ない……その場で、祖父母も、母も、私の目の前で胸をさされた。私は、私に乳を吳れた母の胸が眞赤に血に染まつた時は、氣が遠くなりさうだつた。幾度もアリーア人の兵隊に唾をはきかけてから私は母にすがりついた。アリーア人は一度、私を刺さうとしたが、一人が止めたので私の命は助かつた。

私の凡ての性格も物の考へ方もそこから出發した。私は死んだ方がよかつたかも知れない。そして、コンミユニストになつた。

然し然し、私は、ラツプ人として一生涯アリーア人を呪はずにゐられるか……皆はグスタツフ王の罪だといふ、然し私の目の前で、祖父母や、母や同胞を殺したのはアリーア人だ……さうだ、正しくさうだ……』

ダームは體中を慄はせて言ひ續けた。

『いや、同志、ダーム、君は落着かねばならぬ、何を言はうとしてゐるのだ……』

とボヴリーヨフも慌てた。

『だから、アリーア人は憎い、いや、さうぢあない、私はヨハンネスを殺した、同志ボヴリーヨフ！　落着いて聞いて呉れ、私は個人として何もヨハンネスを憎んでゐたんぢあない、只彼が私に何かよそよそしくするので癪だつた。ラツプ人である事を彼が輕蔑してゐると思つてゐたんだ。それが私をひねくれさせた。その上、彼の息子、カルラスは私の娘を愛してゐた、娘もさうだ。私は娘をとられるのが嫌だつた。私を輕蔑してゐる奴の息子なんかに、それを時も時なりヨハンネスの奴が、港の汽船にゐたアメリカ紳士の前で五百クローネル貰つて、三度××をしたんだ。それを私が癪にさはつて喧嘩をしたんだ……』

とダームは如何にして、自分がヨハンネスを殺したかを語つて、泣いた。

『で、私は、自分が誤つてゐるか、ゐないかを聞きに來た。同志ボヴリーヨフ、いや、私はどうすればいいんだ……』

ボブリーヨフは元の肘の型になほつた。

『もう仕様がない。人間がお互ひ同士に對して抱いてゐる感情を言ひ現はしたり、行動に示したりすることは怖ろしいことだ……』と彼は痛ましく氣に答えた。『私も君の心はよく解る、私の弟も昔、ロシアで白軍のために銃殺された。そして私

は赤衛軍に參加して白軍を襲つた時には、彼等の妻や兄弟をも殺してその怨みを晴したことがある、けれどもその後には自分の兄弟を手にかけたやうな苦しさが殘つた。

私には、此の人間の心をどう解釋していいか解らない。だから返事もできない、只、かう言へる……だけだ……君はヨハンネスの死を有意義ならしめねばならない……君は、君は、さうだ……』委員長はダームの肩を抱いて、彼の耳に何か囁いた。

『同志、ボヴリーヨフ！』とダームは委員長を抱いて喚いた。『本當か、本當、さうすれば俺の罪は許されるか、ふう、ふう、よし、私は、しやう、きつとする、ふう、して見せるぞ、屹度、俺は、おおヨハンネス……』

とダームは、天井に兩手を揚げた。

『同志ヨハンネス、屹度俺はして見せるぞ……』

『では、歸り給へ、ダーム！』

『では、又、同志ボヴリーヨフ！』

二人は握手した。

ダームは扉を開けて寺院の廊下へ出た。

廊下の卓子にビラが積んであつて、一人の候補者が分けてゐた。

『同志、俺に少し呉れ……』

ダームは一掴みをポケットに入れた。

そして彼は、小走りに林の間道へ向つた。

8　（労働者が口(くち)×を切れ！）

各工場の門前では、いつものやうに失業者群の中から日雇人夫をえり抜く。ゲームとカルラス等の煽動によつて群集は海岸広場へと突進する。

海岸広場に集まつた二千の失業者は五組に分たれて示威運動を起す。第一組は××前へ、第二組は山上のホテルへ、第三組はカルル・スサルナ××工×へ、第四組は社会大×邸へ、第五組は警備隊として市内へ。

各処に衝突が起り・弾壓が始まる。（煙激）

9　（一人が一本の鐵鋲(ペア)になれ！）

夕闇と共に大検挙が始まる。

豫備兵が召集されてエンベルグ兄弟も呼び出される。

各所に放(スウィング)×××！

聯隊の××。

運河をはさんで猛烈な射撃戦。弾丸のつきた××軍は、橋を××つつ逃げて行く。

火の手も鎮まりかけた。銃聲も遠のいた。××××は胸をなでおろした。（煙激）

×　×　×　×

夜が更け、煙が晴れて夜中の太陽が出た。

温度は〇・五五、あたりをぐらついてゐた。港の要塞、シエッツブに集る軍艦は探照燈を縦横に輝らしてゐた。

突如、五ヶ所に放(スウィング)×××が起つた。

街の隅ずみにひそんでゐた失業者の仕わざだつた。
失業者は、逃げまどふ市民や、巡廻の××官に××を投げ、略奪と××を始めた。
爆音と銃聲と悲鳴と××が市街を埋めた。
平和の祈りのために建てられた各所のルーテル教會は急を告げる早鐘を打ち鳴らし、救世軍ストックホルム本部は××に守られて戒嚴令本部と早變りをした。

——ラップ人暴動——

の流言が國家の凡ゆる通信機關によつて宣傳された。
放火された濕り氣の多い家並は漆喰に遮られて窓と軒下から水蒸氣のこもつた火煙を、血綿のやうに吹いて道路を赤く照らした。
失業者は——ユバアヂア、サナ——を唱えながら××し群をなして火の中を馳けた。
彼等は最初は××して、食物だけをあさつた。
腹を滿して道路に出ると、こげた空と焔に狂ひ廻る人々の群を見た。彼等も避難民と共に山館になだれた。
そこで飢えを滿たされた若い失業者は、若い娘の亂した肌の匂ひをかいだ。次に長い間忍んで來た情慾があばれた。
マッラウは避難民の流れに押されて他の同志を探しながら、家の凹みで髮を亂した××を押えてゐる眞黑けな失業者をよく見た。××の×の白さが何時までもマッラウの目から消えなかつた。
彼は大きい會社らしい建物を見ると群集に少し後れて窓から雷汞附の××を投げた。
瞬間……建物の窓硝子がぱつと赤く燦いて太い火を吹いた。
その爆發のとゞろきの火焔に驚かれさる度に群集は親子、兄弟が離ればなれになつた。

たまに道路に倒れて、逃げやうと泣き叫ぶ孫を抱きしめるのは老婆や、傷ついた女達であつた。

群集は自分だけの事を考へて逃げた。そして安全な場所に來ると思ひ出したやうに妻や子や兄弟の名を高く呼んだ。

空は燒け、街は怒り猛つて應えなかつた。

煙は地を爬つた。アトロピンを使ひ過ぎた巡査は明るさに目が利かなくなつて、どん〱暗い方に火をさけた。

マツラウは、疲れと焦けた睫毛の痛みに或る燒け殘りの家にとび込んだ。うすい煙のこもつた部屋は水と泥に汚されて家や道具はことごとく破れ、パンの屑と火酒の空瓶が散つてゐるのが窓から差す焔の光に見えた。

奥の方で暢氣な銅鑼聲がした。二つばかり廊下を曲ると、廣い食堂があつて、そこでは、見覺えのある失業者達が醉つて踊りまくつてゐた。

マツラウの姿を發見すると

「よう、俺達の指導者！」と女の薄衣を首にした一人が葉卷を咬えてしなだれかゝつた。「飲み給へ、ハムも澤山あります、火酒もあります……」

八人餘りの醉ひどれがゐた。

隅の壞れた椅子に座つてゐる男は玩具の人形に接吻しながら一心に演說してゐた。

他の者は勝手放題な身振りで歌つてゐた。

マツラウは卓子を見た。五本の火酒の瓶と煤煙にくすんだハムの肉塊があつた。

「諸君は、奪つたものを自分等だけで食つてはいけない……明日のためと、他の仲間に持歸つて分けなければならない……

……」

「へゝ、大將、仰しやいましたねだ……」と醉ひどれの一人は顏半分の髭から黃の煙を揚げて叫んだ。「凡ての食料は我々

のものなんですよ、へえ、誠に濟みませんがねえ……』

『だから、全部の勞働者はそれを分け合はねばならない……』

『ねばならない……明日から我々の家も寢る所もない、我々は野宿せねばならない……』

『兎に角諸君！　我々は同志達と合體しやう、放れ〳〵になつてゐてはいけない……』とマツラウは言つた。『さ、出かけやう……』

醉ひどれ連中は、火酒の瓶をポケットに入れ、ハムの一片を噛りかぢり、立ち上つた。

人形を持つた男は踊りながら歩いた。

火の粉の散る道路へ出ると彼等は、恐ろし氣に眉をしかめた。

もう爆彈の響きはしなかつたし避難民の群も通らなかつた。その代りに小銃と機關銃が又山の方で唸つた。

鯨波の聲が近づいて來た。

『諸君、××が來た……』とマツラウは海岸の方を指して醉ひどれを振り省つた。『諸君は海岸廣場へ集つて銃と彈薬の支給を受け給へ……一合戰せねばならない……』

醉ひどれはあたふたと道路を走り出した。走りながら火酒を呻つてゐるのも見えた。と、山館の辻から、一群の人間が火の中を溢れてこちらへなだれて來た。マツラウは、つと漆喰の凹みに姿をかくして息をころした。

小銃のはじける音がした。

小銃を下げた仲間の失業者達や同志等であつた。

眞先に、首をかしげたテオドールがゐた。

『テオドール。』

とマツラウは呼んだ。

『どうだ？』

『おゝ、同志、スクワイア……』とテオドールはマツラウを押しまくつた。『いかん、いかん、失業者等は放火と破壊の折の婦女子への××から、罪悪觀念におそはれてへこたれちまつた。「吾が罪を許し給へ！」なんて天に祈る奴がある位だ……人員は減るばかりだ、これを見ろ……』

テオドールに從ふ勞働者は大半、今朝の示威行列にもぐつて兵器工廠を逃げ出した鐵工組合の人々で、燒傷を負ひ手や顔に血を滲ませてゐた。

『で、アントンソンやカルラスは？』

『あゝ、第一運河を船で海岸へ行つた筈だ……ハンスは今朝の示威で王宮前で銃殺されたよ。ダームは要塞へやられる途中、ドロシユケを破つて逃げて來たが行方不明だ……』

『さうか、海岸廣場へ集らう……』

小銃が鳴つた。四五人の仲間が泥ぬかりにのめつた。

向ふの辻に××が集つて銃口をむけてゐた。

『來たぞ！』

銃口に火が走つた。

又、三人倒れた。同志達は軒下に寄つて射撃を始めた。

マツラウは打たれた同志の一人から小銃と彈藥箱をとつた。

そして、彼も不格恰な構えで辻の××を覗つた。

キュン、キュン、と彈丸はとんだ。漆喰は彈丸に貫かれると砂のやうに崩れた。それが火の粉と交つて射撃の邪魔をした。

ぶつ通しの道路での對陣では不利益だつた。

味方は、數を追つて負傷した。傷ついた同志の苦しむ聲と、泥水に流れる血の色が、マツラウやテオドールの銃口を狂はせた。

遠くに聞えてゐた銃聲も間近に迫つた。味方が集つたらしい。その内に敵は辻の眞中に輕機關銃を据えた。

「テオドール、退却しやう……」とマツラウは言つた。「同志の軍も市の中央から引揚げて來たらしい、廣場で集つて力を束めやう」

『おう……』

『諸君、退却!』

一同は軒下をくゞつて、××を叩きつけては逃げた。××は破裂して煙幕のやうに××の目を遮つた。

胸腹にさはる機關銃が後から鳴つた。

巷角へ來る毎に、逃亡して來る傷ついた同志の軍に出逢つた。

「味方は減つた、もう、五百名とゐないだらう……」

『それに「ラップ人の暴動」といふ逆宣傳が利いて市民が怒つてゐる。スウイングは天帝の怒だなんて思つてゐるのは老人や、貧民窟の人間だけだ……』

『皆の妻子は?』

「大概、街をうろついてる間に捕まつて救貧院の地下室へ監禁されてる、夕方あの傍を通つたら、悲き聲が地獄のやうに聞えた……」

失業群集は破れ靴を、凍つた地に引きづつて海岸廣場へとすつとんだ。
吐く息は寒さに白く氷つた。一群は獣のむれのやうだつた。
岬と港の要所にも篝火の柱が空を燒いてゐた。

10　（犠牲を忘れるな！）

傷つき、疲れ、飢えた群が街の野良犬よりもみじめな姿で集つた。
汗の冷えた肌は鹽をふいてざらついた。傷口は潮風に凍つて痛んだ。
彈丸はもう殘り少なくなつてゐた。燒け過ぎた銃は木皮の繊目からねちねちと燒け油を流した。
市街を燒く焰は弱つてゐたが、空一面は紅色にぼやけ、夜中の太陽も見えなかつた。
「とうとう、五分の一がた、燒けたな。」
「ずいぶん、困る人もできただらうな……」
人々は避難民のどよめく邊りを見やつて、自分のものを燒かれたやうに話し合つた。
威嚇する銃聲や機關銃の唸りが未だ諸所方方に響いてゐた。
カルラスもアントンソンもダームも他の委員等の四名も命を失はずにゐた。
ダームは手錠を捩ぢ切つた時の傷だと手首に繃帯を捲いてゐた。
「口惜しいがヨハンネスの屍骸はドロシユケの中に置いて來た。」
と彼はカルラスに謝つた。
そしてベルタも行方不明だと言つた。

レベッカの消息については誰も知るものはなかつた。

彼等は直ぐ人員點呼をし、小銃の數と彈藥と爆彈の數をしらべた。二百挺餘りあつた小銃も逃亡者が持逃げしたために八十挺と少しきりになつた。彈藥も爆彈も、今夜の貧民街維持にも足りなかつた。

明日の朝になれば、「市民に訴へる」ビラが撒かれ決死隊のポスター貼りがある筈だ。

『一時、解散しやうか、明日の晝まで』とマッラウは首を捻つた。『單獨に臨機の所置をとつても怒るやうなボヴリーヨフでもないだらう……』

『俺は運河の小舟を利用する考へだ……』とアントンソンは胸を張つた。『そして、碇泊船にこもるんだ。』

『然しそれは、目立つし、食料の輸送に困る……矢張り、各自家に歸つて、靜かにしてゐた方がいゝ……』

彼は小聲で話した。

過敏になつてゐる群集は幹部の言ひ合ひにかすかな不安を覺え始めた。

『一體、明日といはず、今夜はどうするんだ……』

『さうだ、家のある者はいいが、家のない者は、燒け跡に寢るのかい？』

『この砂原にあ、海燕だつて寢られねえや……』

『さうだ、幹部！　幹部！』

暴行破壞の際に醉つた酒の醒めないものが第一に大聲で騷いだ。

彼等はマッラウ等の周圍に集つて來た。ものをいふ勇氣のない連中はただぞろぞろとその後に從つた。

『幹部、俺達は今夜どうするんだ……』

『未だ、戰爭ごつこをさせるのかい……』

『返事をしろ！』

群集は七人の周りにとぐろを捲いて叫んだ。鋲附(ダイス)のゆるんだ銃が人の聲と一しよにがたついた。

「諸君、我々は、今日の諸君の勇敢な行動に……全市街の勞働者に代つて感謝の意を表するものであります……」

ダームが大聲で言つた。『今朝より約、二十時間に渡るこの諸君の大きな示威が、勞働者の血と汗を絞り上げ、はては失業者をして飢え死の途端場にまで逐ひ込まうとした資本家共にとつて、どれ程の驚きと恐れであつたか解りません。諸君の飢え、諸君の傷の痛み、諸君の寒さ、それこそ今後我々が飢えないやう、失業しないやう、人間らしくなるやうになるための一歩前の苦しみであります。

我々は決して、諸君とこのまゝに別れるのではない、この事件が解決するまでは我々は必ず諸君の最少限度の生活を保證する……我々の同志は明、早朝、市街各所に「市民に訴ふ」のビラとポスタアを撒くでせう、そしてもう一度の運動が始まるでせう。

市民を味方につけるかつけないか、諸君もう一とふん張りだ、さうして我々のよき人間らしき生活權を掴むまでの……とくに諸君……」ダームは叫びに涸れた喉で力み續けた。『我々は今朝の示威運動に於いて、王宮廣場で銃殺された三百の仲間のことを忘れてはならない、只の「パン」をくれといふだけの我々の行列が何故、銃殺になる程の罪になるか、そんな法律はオランダにだつてありあしない……我々は飽くまで叫び、そして、三百の同志が流した血のために目的を貫かなければならない……どうせ來るものは野たれ死か銃殺かもう一つだ……諸君！　もう一日の頑張りだ……』

「さうだ、泣き事をいつたのは誰だ……」

飢えと寒さで心臓だけで生きてゐる人々の感激の聲がした。

『文句を言はずに頑張れ！』「又酔ひどれは叫んだ。『さ、頑張るんだ、頑張るんだ……』

『さうだ、俺達は三百の仲間の×××をしやう……』

すると、マツラウが叫んだ。

『では、諸君、今夜はこれで解散して各自かくれませう、又、誰かがそれからそれへと、諸君の中に明日からの仕事を傳へて歩くでせう……』

『よし、明日もあさつても、俺達は叫ばう！』

『三百の仲間の仇と、俺達の飢えのために……』

『さあ、諸君散らう！』とダームが先頭に歸り始めた。『俺は娘が心配だから一足先に失敬する……』

『さよなら又……』

一としきりざはめいてから群集はそれぞれ解散しやうとした。

マツラウ等は最後まで殘つて、倉庫と倉庫の隙間の、彼等だけが知つてゐる逃げ路に身をひそめて四邊の様子を伺つてゐた。

街は人のざはめきがするだけで、渚に寄せる波の音だけが彼等の耳を打つた。

群集は、小銃を體の横つ面にくつ着けて三人組み、五人連れ、家持は家のない者を伴ひ、段々と跫音を忍ばせて散つていつた。

マツラウ等も逃路から本部へ引揚げやうとした時だつた。

『おい、おい……誰もゐないか……』と廣場に引返したらしいダームの聲がした。『ゐないのか、誰も……』

それは彼らしくもなく周章てて聞えた。

テオードルが一人、引返して覗いて見た。

ダームと十人ばかりが、暗闇をすかしてゐた。後から來た、澤山の跫音が地に鳴つた。

『何んかしたか……ダーム』

『いかん、いかん、××が張つてやがる……』

『歸れないか……』

『うん、捕つたものも大分ゐる……』

話最中に小銃が響いた。

又大勢が銃をがちやつかせて逆戻りして歸つて來た。

『逃路がない！』

『俺達を逃がして呉れ……』

皆は悲し氣に言つた。

罵る叫びと家の硝子が破れる音がした。

『駄目だ、ダーム逃げろ！　一諸に……』

『いや、その路も駄目だらう、俺は海へ逃げる……』そしてダームは集つた者を省みた。『諸君、我々は舟で海から運河へ出やう……來たまへ……』

銃聲は激しくなつた。味方も應戰してゐるらしい。

『何人位ゐるか』とダームは訊ねた。『四十人餘り……』

『大丈夫、カルラス達が第一運河から來た舟が二隻ある……さあ……來給へ！』

みんな我先にと波打際に急いだ。

二隻の小舟が波にゆれてゐた。

「二十人づつ位平氣だ‥‥さ諸君銃を濡らさないやうに‥‥」

ダームが眞先に乘つた。

四十三人ゐた。一隻に二十一人、もう一隻に二十二人乘つて、小舟は舫綱を切つた。

二人づつが櫂を押した。舟は干潮にかからうとする波にのつて沖に向つた。波は空のうす紅みを寫してのた打つてゐた。

「靜かに、話をしないやうに‥‥」

皆、體を低くして座つた。

陸の銃聲はニウマチツク・ハムマアほどせつかちに續け打にした。

舟が四十米も沖に出ない頃、倉庫の空地に四五××の××が馳せつけた。第三運河の河上まで機關銃點射をやつて暴徒を追ひ拂つた歸りの一隊だつた。

空地の隅々から、倉庫の隙間まで大形の懷中電燈で檢べられた。

「皆逃げたかな‥‥然し、銃殺したのは百人餘り、逮捕したのも九十人近くだ。」

「××が來るまでに逃げたんだらう‥‥」

一人の兵士が波打際で叫んだ。

「海だ、舟で海へ逃げたんだ‥‥この靴跡を見ろ！」

懷中電燈が一度に波打際に光らされ、兵士達は集つて來た。

「海をよく見ろ！」

と中隊長の一人が命じた。

扇型の光りが幾筋も沖に照らされた。然し舟らしい影は見當らなかつた。

と、じつと沖を睨んでゐた中隊長は言つた。

「皆、よく見ろ！　あの邊に黑く見えるのは船ではないか……」

兵士達はこごんで沖をすかした。

紅く光つた波がうねる度に何か、黑い影の動くのが見えた。

「さうだ、今夜當り、沖をうろつく漁船のゐる筈はない……」

「一齊射擊をして見ろ！　戒嚴令執行中だ、漁船であつてもいい……」

と中隊長は命じた。

兵士は不齊ひに砂に立つたまゝ銃を構えた。

そして火蓋が切られた。

一つの黑影に三百餘りの銃火が浴びせかけられた。

「打方止め！」と中隊長は命じた。「様子を見ろ！」

一隊は耳を澄ました。

果して、かすかな騷ぎ聲がした。

「よし、確かにさうだ……打て！」

猛烈な射擊が開かれた。

沖からも銃火が閃いた。

「おや、持つてるぞ！　畜生！　伏せ！」

砂地に伏した兵士は潮しぶきをかぶりながら打つた。

沖の銃火は二ヶ所から閃いた。

「二隻だ！　ふざけてやがる‥‥」

舟からの彈丸は殆んど、命中しなかつた。波にゆられてゐる上に散兵してゐるので標尺が定まらないらしい‥‥

「ざまを見ろ！」

五分、十分、三百の銃火を浴びせられる内に、沖の勢は衰へていつた。

そして銃聲もまばらになつた。

二十分程經つと、一方の方は完全に銃火が絕えた。

すると、かすかに、歌聲が響いた。

「打方止め！」

中隊長はさう命じて、歌を聞いた。

それは佛國國歌「ラ・マルセーユ」だつた。

「しやれてやがる‥‥打て！」

エンベルグの第一の弟が、七八人先にゐた二番目の弟の所へ走つて來て肩を叩いた。

「おい、あの聲は沖仲士のダームの聲だぞ、俺はたしかに覺えてる‥‥」

「ヘッ、あのヨハンネスの隣りの」と二番目の弟は引金の指を外づした。「さうかい、可哀さうだなあ。」

『だからなあ……』と第一のは耳打ちをした。『俺はそつぽに打つんだ……』

『うん……』と第二のは笑つた。『さうだ、俺もさうしやう……』

射撃は止まなかつた。

舟は干潮と共に沖へ沖へと流れて行くらしく、歌の聲は波に交つて細くかすかになつていつた。

そして、二隻とももう、靜かになつた。暫らくして

『打方止め！』

と命ぜられた。

『海の暴徒は全滅したらしい……』

中隊長は、兵士をまとめると、波止場の方へ向つた。

× × × ×

野良犬が街で月に吠える未明だつた。

リッテルホルム古城裏の沼に大型汽艇がボイラアを焚いてゐた。

汽艇のトップには、鎌と槌をぶつ違ひにしたマークが打つてあつた。

玉葱くさい水夫が艫に立つてゐた。

やがて、藪林(パーク)から四五人の男が降りて來た。

マツラウとカルラスとボヴリーヨフとアントンツンであつた。テオドールも後から來た。

『クロンスタットまで行けば、後はモルスコイ運河を一直線さ……』

とボブリーヨフは元氣に言つた。

マッラウとカルラスが第二の計畫のためにバルト海をつつ切つてペトログラードへ應援を求めに行くのだ。

二人は汽艇に乘つた。

水夫等は默々と纜綱を放した。

そして——オ・ルボオアール——と船員の別れ言葉「また逢ふ日まで」を叫んだ。

『元氣に！』

テオドールは呶鳴つた。

『大丈夫、海を超えればロシアさ！』

とカルラスは笑つた。

『さうだ、海を超えればロシアだ！』

ボヴリーヨフが繰返した。

エンヂンが腹をゆする音響を立てた。

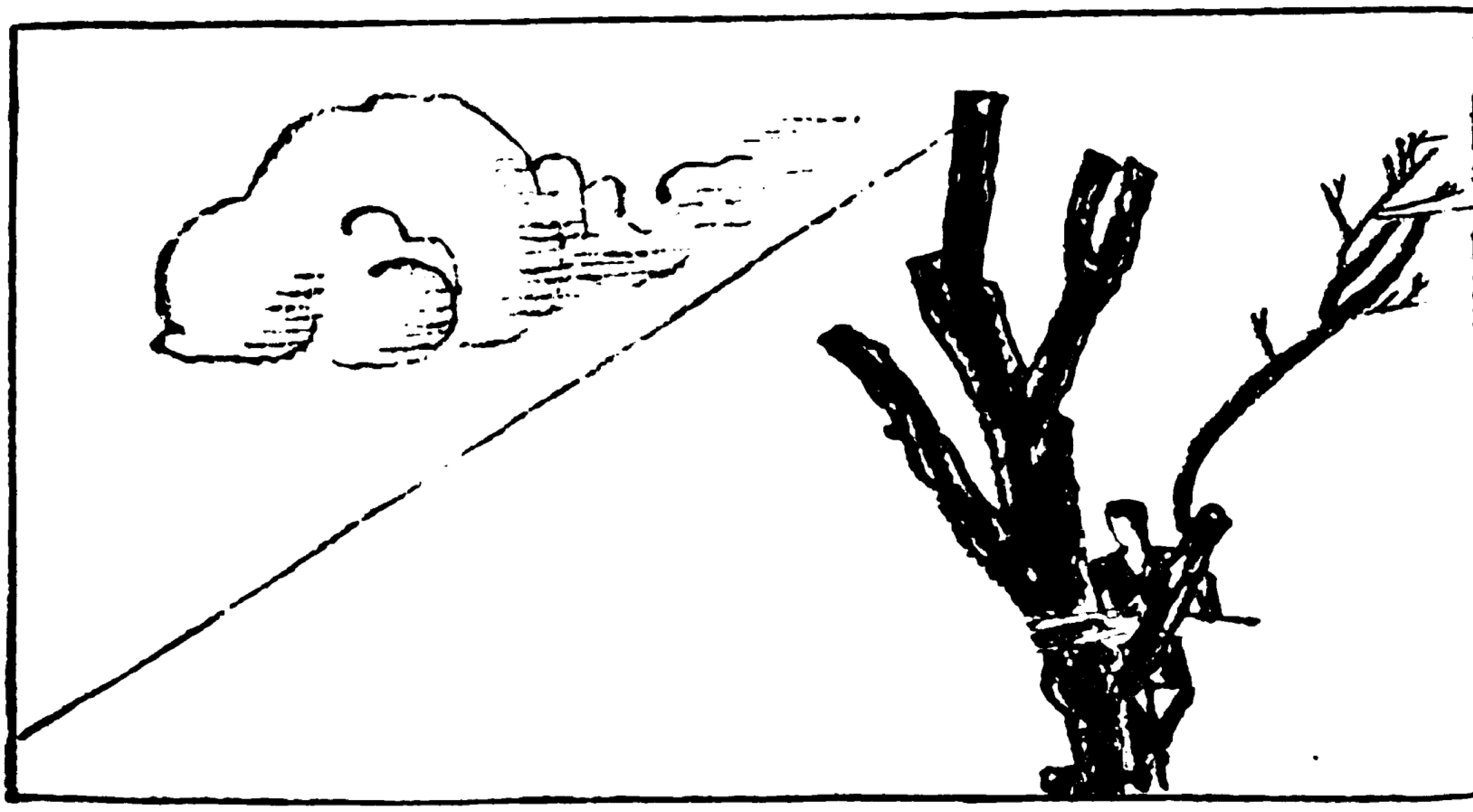
——オ・ルボオアール——ダスヰダアニア——

水夫はもう一度別れを告げた。

汽艇が沼を渡つて港へ出ると、空をうつした波が、船腹をきらつかせた。

トップで時どき悶い音がした。それは舳先に當たる凍つた子供の屍だつた。　1930.12.23

（附記・この一篇は同志田口運藏氏の好意によつて生れたものである。）



犬は鎖に繋ぐべからず

岸田國士

今里念吉　黒林

同　二見　島貫

同　甲吉　越水

片倉州藏　クマソ

同　まつの　多胡

百瀬鬼骨　兩角

大串葉給　岩城

黒林家の女中　尾畑

酒屋の御用聞　藤巻

郵便配達　男の子

その他、ヤモリ以外數人

現代

東京の郊外——最近水田を埋立てた第七流住宅地。

一

今里念吉の住居。正面にすり硝子戸入りの玄關。右手に杉丸太の門柱。玄關の右に識塗りの洋館。左手に座敷と茶の間。芝生の庭に手製のブランコ。椽に近く粗末な犬小屋。

初夏の午後。

息子の甲吉(八歳位)が、三輪車に乗つて外から歸つて來る。椽側から奥に向ひ、發育不良の聲で母を呼ぶ。

甲吉。ママア！　ママア！

聲。(奥て)なんです、そんな聲を出して……。(二見、茶箸をもつたまゝ現れる)駄目ですよ、靜かにしなくつちや……。パパは今御勉強なんだから……。

甲吉　(それにかまはず)ママア、僕、落第坊主ぢやないねえ。

二見。落第なんかするもんですか。からだが弱いから先生と御相談して、一年學校を休ませることにしたんですよ。第一、學校

へは一と月も行きやしないぢやありませんか。

甲吉。それから、うちのベスは野良犬ぢやないねえ。

二見。野良犬なもんですか。あれは、お前のお友達にと思つて、一昨年、澤山さんからいたゞいたんですよ。種類は忘れたけれど、ちやんと素性のわかつた犬です。パパがもう少し手入れをして下されば、毛並だつて、この邊のどこの犬にも負けやしません。

甲吉。そんならね、ママ、うちのパパは、英語よりほか、なんにも出來ないつて、ほんと？

二見。英語の先生なら、英語だけできれば澤山ぢやありませんか。いろんなことが少しづゝ出來るよりも、一つのことが立派に出來る方がいいんですよ。一體全體、誰がそんなことを云ふの？

甲吉。僕のことを落第坊主つて云つたのは、ケンちやんだよ。

二見。ベスのことを野良犬だつて云つたのは……？

甲吉。それはね、坊つちやん……。

二見。また「坊つちやん」なんて云ふんぢやありません。「ツルヲさん」つておつしやい。それから、パパのことをなんとか云つたのは……？

甲吉。忘れちやつた……。（彼は三輪車を運轉して、また外へ遊びに行かうとする）

二見。もう御飯だから、お家にいらつしやい。餘計なことを云ふ子供たちと遊ばなくつたつていゝのよ。

　近所で、また、ピヤノの練習を始めたらしい。單調な音階がうるさく繰り返される。

二見。（洋館の方に行き）パパ、あと十五分で御飯にしますから、そろそろ、おつむをお休めになつてね。甲吉が歸つてますわ。

　やがて、主人の念吉が座敷に現はれる。

念吉。(にやにや笑ひながら、口吟むやうに)

"O miserable of happy! Is this the end
Of this new glorious World, and me so late
The glory of that glory?" ....

(夢中で三輪車を運轉してゐる甲吉を見つけ) 甲吉君、元氣かね。さつき、床屋の前で、君に石をぶつけようとしてゐた子供は、あれや、何處のなんといふ子だい? 君は平氣で三輪車の曲乘をしてゐたね。パパが通るのを知らずにゐるから、パパは、默つて來てしまつた。それに、友達の前で、おやぢに口を利かれるのは、てれ臭いらんだ。

(長い沈默。)

甲吉君、運動は、もうそれくらゐにしといたらどうだ。此處へ來て、一息休み給へ。そして、パパと一緒に、青葉でも眺めようぢやないか。臺所から嗅つて來る香ひは、これや、てつきり、ママお得意の筍入りチャプスイだ。何時かのやうに、焦げついてくれなけれやいゝが....。

(この時、門をはいつて來る一人の婦人がある。玄關の外で、呼鈴のボタンを探してゐるが、みつからないので、「御免下さいませ」と聲をかける。)

甲吉。(三輪車をとめ、父に向ひ) 坊つちやんのとこの「ためや」だ。

念吉。何か御用ですか。

(甲吉は、縁側から奥へ飛び込んで行く。)

ためや。旦那さまでいらつしやいますか、わたくし、そこの黒林のものでございますが、ちよつと、奥さまに....。

念吉。奥さんは、今、飯の用意をしてゐますが、僕ぢやわかりませんか。

ためや。いえ、實は、お宅のベスのことで伺ひましたんですけれど……。

念吉。ベスのことですか。

妻の二見が、奥から玄關に出る。念吉は、縁側に立つたまゝ、女たちの會話を聽いてゐる。

二見。失禮いたしました。黒林さんのお女中さんでしたね。そして、御用は……？

ためや。はい、實は、申上げにくいことでございますけれど、お宅のベスが、今日、宅の旦那さまのお靴を片一方咬へて行つたんでございますよ。あたくしの不注意からなんでございますけれど、若しや、こちらへ持つて來てはをりませんかと存じまして……。

二見。まあ、それは、それは、飛んだことをしましたね。今朝から、ちつとも見かけませんのですけれど、どんなお靴でせう。

ためや。赤革の、かう、ボツボツの模様のついた、旦那さまが一番度々お召しになる編上げなんでございますが……。

二見。それぢや、よく、氣をつけておきますわ。ほんとに御迷惑でしたね。そんな惡戯をするなんて、ちつとも存じませんものですから……。でも、おつしやつていたゞいてようございました。これからのこともありますからね。何れ、どつちにしても、あたくし、御挨拶にあがりますけれど、奥さまによろしくおつしやつて頂戴ね。

ためや。では、どうぞ……。御免遊ばせ。

二見。どうも。御苦勞さま。あ、それから、甲吉が度々お邪魔に伺ひますんですつてね。

ためや。いゝえ、……。

黒林家の女中が去つたあと、二見は、座敷に來て、念吉の顏を見る。

二見。お聞きになつて？

念吉。あゝ、聞いた。
二見。どうしませう。
念吉。それを、今、考へてるところだ。いくら犬でも、靴を片一方、食つちまふわけはあるまい。何處へ持つて行くかだが、この捜索は、一寸困難だね。僕の靴が古くなつたからと思つて、代りを見つけて來るほどの忠犬でもないしね。
二見。辨償するつて云つても、向うぢや氣持よく思はないでせう。
念吉。あの家が五千圓か、つたといふんだから、穿いてる靴も十八圓ぢや利くまい。それより、近所を探してみることにしよう。いよいよ無かつたら、その時、なんとか始末をつけるさ。おい、甲吉君。君も一緒に來い。

彼は下駄をつゝかけて外に出る。甲吉はその後から、走つて從いて行く。

二見は、これも庭に降りて、椽の下、犬小屋の中、植込の間をのぞきまわり、その足で裏の方に廻る。何處かで鶏の啼く聲。

二見が、家を一と廻り廻つて、門のところへ出て來ると、表を酒屋の御用聽が通る。

二見。ちよつと、三良さん、あんた、うちの犬を、何處かで見なかつた？
三良。さあ、今日はと……。あゝ、今朝、何處かの鶏を追つかけまわしてるところを見ましたよ。幼稚園のそばでしたよ、たしか……。ゐなくなつたんですか？
二見。そん時、靴を咬へてやしなかつた？
三良。靴ですか。さあ、咬へてないやうでしたよ。
二見。さう、ありがたう。あんた、さうしておいてて、靴が片一方落つこつてたら、拾つて來て頂戴ね。お駄賃をあげるから、……。赤革の、かう、ボツボツの模様のある、かなり上等の編上げだから……。
三良。旦那んですか。

二見。男の靴よ。なんでもいゝから、落つこつてる靴は、みんな一度、うちへもつて來て見せて頂戴。

三良。畏こまりました。毎度ありがたう……。

御用聞きが行つてしまふと、今度は、大串葉給が、切花を手に持つて通りかゝる。識るでもなく識らぬでもなき間柄とみえ、軽い會釋をしたまゝ行き過ぎようとする。

二見。(追ひ縋るやうにして)一寸、失禮でございますが、そこのお花のお師匠さまぢやいらつしやいませんか？

葉給。さやうでございます。あたくし、大串葉給でございます。

二見。あたくし、今里の家内でございます。始終お見かけしてゐながら、まだ御挨拶もいたしませんで……。お嬢さまが、ほんとにお可愛くつて……。

葉給。どういたしまして、お宅の坊つちやまこそ、おとなしい、御悧巧さうな坊つちやまでいらつしやいますこと……。

二見。多分、ちよくちよくお邪魔に上ることゝ存じます。それから、子供ばかりでなく、宅の犬がまた、きつと、お庭を荒しますことでございませう。

葉給。飛んだ御心配で……。どうぞ、ちつと、奥様も、お話しにいらしつて下さいませ。獨りもので、淋しく暮してをりますから……。(花を見せながら)こんなことでも致してをりませんと、日が長うございまして……。

二見。結構でございますわ。(もぢもぢしながら)あのう……だしぬけに妙なことをお願ひいたしますけれど、若しや、お宅の裏にでも、古靴が片一方落ちてをりましたら、宅の犬が咬へて參つたんでございますから、一寸、お知らせ下さいませんでせうか。誠に相濟みませんけれど……。

葉給。それはまあ、お困りでいらつしやいませう。早速、調べてみることにいたします。ほんとに、どんなにお躾けがよくつても、犬つて申しますものわね。

二見。いゝえ、もう、野良犬同然な犬でございますから、なにをいたしますか……。

韮崎。では、人を待たせてございますから、これで……。

二見。お呼びとめして、ほんとに……。

　　兩人、丁寧にお辭儀をし合ふ。二見は、しばらくその後を見送つた後、家の中にはひる。やがて、膳ごしらへをしはじめる。

　　そこへ、六つぐらゐの女の子の手を引いて、片倉州藏の妻、まつのが、この家の玄關口に立つ。

まつの。御免下さい。

二見。はい。

　　二見は玄關に出る。

二見。どうぞ、お開け下さい。

まつの。（玄關の戸をあけるが、中にはひらない。にべのない挨拶）わたくし、そこの幼稚園のそばにゐるものでございますが、今日、お宅の犬が、宅で飼つてをります鷄を追つかけまわして、嚙み殺してしまつたんでございますよ。すぐには死にませんでしたけれど、さきほどとうたう駄目になりました。宅では、餘所樣のやうに卵を生ますために鷄を飼つてるんぢやござゐませんのです。これの遊び相手に二三羽飼つてみたんでございますけれど、毎日のやうにお宅の犬が追ひかけますんで、これが、そのたんびに騷ぎますんです。今日なんか、羽根を咬へられて、藻搔いてゐる樣子をみますと、これが、あたくしにしがみついて、狂ふやうに泣くぢやございませんか。鷄小屋へ入れておけばいゝ、とお思ひになるかも知れませんけれど、それでは、子供が、一緒に遊んでゐるといふ氣がいたしません。鷄の方でも、それはよくこれになつきまして、餌なんかも手からたべるやうになりますし……。

　　この時、今里念吉は、甲吉をおぶつて、門をはひつて來る。玄關の人聲に氣づき、立ちどまる。

まつの。（念吉の姿を見て、輕く腰をかゞめ、そのまゝ喋りつゞける）兎も角、代りを買へばいゝといふやうな鷄ではないのでございますから、ほんとに當惑してをりますんです。

念吉。お宅の鷄が見えないんですか。

まつの。（突劍呑に）見えないんぢやございません。現に、お宅の犬に噛殺されたんでございますよ。

念吉。それは、それは……。

まつの。かうして伺つたのは、別に、どうしていたゞかうつていふんぢやございません。できてしまつたことは、しかたがございませんからね。たゞ、これから、犬を繋いどいていたゞきたいんでございます。晝間だけでも、さうしといていたゞきませんと、鷄を庭で遊ばせることができませんですからね。卵を生ませるだけなら、小屋で飼へますけれど……さつきも申上げましたやうに……。

念吉。わかりました。誠に申わけありません。犬は繋いでおくことにします。これから、お迷惑はかけないつもりです。

まつの。それや、もう、どうしていたゞかなくつてもよろしいんです。庭の隅へ、お墓でもこしらへて、末長く弔つてやるつもりでございますから……。

念吉。あなたの方はそれでいゝとして、僕の方は、それぢや困ります。犬を代りに殺してみたところではじまりませんし、辨償をするにも、金には代へられないとなると、一體、どうしたらいゝんですか。つまり、犬がわるいんだから、その犬に刑罰を與へろとおつしやるんですか。

まつの。いゝえ、犬よりも、お宅の方でお氣をつけて下さればよろしいんです。

念吉。なるほど、その御注意は有がたくお受けします。

二見。でも……それぢや、代りの鶏でも買つて差上げることにいたしませうか。ほんとに、あの犬には困つてしまひますわ。

まつの。かう申しちやなんですが、この邊の鶏を飼つてらつしやるお家ぢや、みんな、お宅の犬には困つていらつしやいますよ。わたくしのところばかりぢやないんですからね。いちいち、さうおつしやつてらつしやいませんでせうけれど、このお隣りの尾畑さんでも、大事になすつてらしつたチヤボが一羽、何時の間にかゐなくなつたんですつてね。多分、お宅の犬だらうつて、さう云つてらつしやいましたよ。

二見。何時のことですの、それは……。

まつの。つい、先達ですけれどね。——なにしろ、一寸、外へ出て御覧になればわかりますよ。あの犬が、毎日のやうに方々の鶏を追つかけまわしてることを、お宅では御存じないんですか知ら……。

二見。ちつとも存じませんの。ほんとに、今日さういふことを伺はなければ、何時までも皆さんにお迷惑をかけるところでしたわね。（夫に向ひ）ベスは、その邊にゐませんでしたか。

念吉。ゐないよ。靴もないよ。甲吉が寝ちまつた。犬は、歸り次第、厳重に繋りつけます。

二見。失禮ですが、どちら様でございませう。

まつの。いゝえ、名前なんか申上げても仕様がございません。どうか、それでは、今後のことをお願ひいたします。

二見。かしこまりました。何れ、なんとかして御挨拶に向ひます。こんなところで、御免下さいませ。

まつのの去つた後、念吉は、默つて玄關から上に上る。

念吉。（座敷に現れ）さ、おろしてくれ。

二見。（座蒲團の上に甲吉を寝かせ）今頃寝てくれちや困りますわ。

念吉。よつぽど草臥れたんだ。それに近所を一軒一軒尋ねて歩いたんだからね。空地といふ空地も見て歩いたつところで、靴つていふものは、割合落ちてないね。しかし、なかなか思ひ掛けないものが棄てゝあるよ。

二見。(子供に掛蒲團をかけ終り)靴も靴ですけれど、今の話はどうしませうね。

念吉。向うの云ふとほりにするほかないさ。鎖は、何處へしまひ込んだかなあ‥‥。

二見。それほどにして飼つておく犬ですか知ら‥‥。湧山さんがあんまり御自慢をなさるもんで、子供が生れたら一匹下さいつて、なんの氣なしに云つてしまつたんですわ。初めのうちは甲吉も悦びましたけれど、近頃では、丸で見むきもしませんよ。かまつてやらないせいもあるでせうけれど、毛は汚れ放題、蝨はたかり放題で、その上、意氣地がないこと、來たら、餘所の犬を見さへすれば、どんな犬にでも尻尾を垂れちまつて、いきなり降參の格好ですもの。連れて歩くんだつて、こつちが恥かしいくらゐですわ。

念吉。君はさういふ風に、さも自慢らしくペスの悪口を云ふが、そんなら、僕が警察へ引渡さうつて云つた時、頑強に反對したのは誰だい。一歩譲つて、獸醫にモルヒネを注射して貰はうと抗議しても、君は、僕の前に立ち塞つて、如何にペスが泥棒の用心になるかを力說した。

二見。ですから、何處かで貰つてくれゝば、すぐにでもやりますわ。

念吉。あの犬をかい。いきなり降參の格好をする犬をかい。

二見。それや、仕込みやうで、どうにでもなりますわ。飼主次第ですわ。

念吉。よし、假に僕の仕込方が優柔不斷であつたとしよう。それならそれで、せめて、見場だけでも、もうちつと好くなくつちやね。なるほど、あいつには、面白いところがある。しかし、これは飼つてみないとわからない。僕は別段、あの犬に愛想をつかして殺してしまはうと思つたわけぢやない。こんな飼ひ方をするくらゐなら、飼つておかない方がい

いと思つたまでだ。あの犬を餘所へやることは、流石に僕も氣がつかなかつたよ。あ、歸つて來た。ペス！　ペス！（彼はいきなり立ち上り、椽側に出て犬を呼ぶ。それから、下駄を穿いて庭傳ひに犬をつかまへに行く）ペス！　こゝへ來い。（やがて、犬の首環をつかまへて小屋の前へ連れて來る。）こら、ペス！　もうちつとほかに遊び方はないかい。靴が面白けれや、おれの靴があるぢやないか。餘所の鷄なんか追つかけずに、そろ〳〵女友達でも作つたらどうだ。

二見。（チャブ臺の前にすわり）そんな氣の利いたことができるもんですか。

念吉。おい、臺所の棚をみてくれ。鎖はあそこへ置いた筈だ。

二見。夜は何處へも行きやしませんよ。

念吉。いや、朝、いはかれるのを待つてやしまい。何んでもいゝから持つて來てくれ。

二見。（臺所から鎖を持つて來る）あとでよく手を洗つて下さいね。

念吉。氣の毒だが辛棒しろ。そのうちにまたいゝこともあるだらう。

彼は犬を縛り終ると、膳に向ふ。箸を取り上げる。すると、その時、百瀬鬼骨が半死半生の牝鷄を小脇にかゝへて玄關に現はれる。

鬼骨。御免！　お留守ですか。

二見が取次に出る。

二見。どうぞ、お開け下さい。

鬼骨。（玄關の戸を開け）わたくしは、ついそこにをります百瀬ですが、實は、御迷惑な御相談に上りました。

二見。はあ、まあ、おはひり下さいませ。

鬼骨。いえ。こゝで結構です。わたくしは、昨年、失職以來、妻子を國元へ歸し、只今、獨りで、そこの家を借りてをるんですが、なにしろ暇なもんですから、それと、朝食の卵ぐらゐは買はなくてもすむやうに、コーチンを二羽ばかり飼

ひましてね。

二見。はあ。

鬼骨。まあ、ぼつ／＼やつてをるんですが、どうも、生憎お隣が大家さんでしてな。大串蘭絲といふ花の師匠がありませう。家賃を半年も溜めて、毎日、顔をつき合はせるのは、あんまりいゝ氣持ちやありませんよ。目下、それとなく立退きを命ぜられてゐるやうなわけでして……。ついてはです。なに、なんでもないことですが、お宅の犬に噛みつかれて、この通りふい／＼になつてゐる鷄をですな、若し、これでくたばるやうなことがありましたら、一つ、お買ひ取り願ひたい、といふ譯なんです。なほ、十分、手當はしてみます。もち直せば文句はありません。それから、お宅の犬ですがな。かまはなけれや、わたしが、一つ、鷄を追つかけないやうに仕込んであげませう。これや、わけありません。鷄と一緒に遊ばせておけばいゝんです。わたしが、そばについてましてね。叱りながら馴らすんです。なにしろ、暇でぶら／＼してゐるんですから……。

二見。さやうでございますか。（奥に向ひ）ねえ、パパ……。

さつきから、箸を置いて玄關の話を聽いてゐた念吉は、この時、起ち上つて出て行く。

念吉。やあ、僕、今中です。お話は伺ひました。鷄のことは承知しました。それから、犬の方は、お言葉に甘へて、さうしていたゞくことにしませう。

二見。ほんとに、さうしていたゞければ……。

念吉。しかし、その鷄は、大分、弱つてるぢやありませんか。とても駄目でせう。

鬼骨。まあ、できるだけ介抱はしてみます。こちらにも御迷惑をかけないで濟めば、これに越したことはないんですから……。

念吉。いや、どうも……。

二見。お金で濟むことなら、なんでもございませんけれど……。ねえ、パパ、それより、あ、おつしやつて下さるんだから、一層ペスを差上げてしまつたらどうでせう。犬はお好きでいらつしやいますか。

鬼骨。(聞えないふりをして)今、そこで話を聞いたんですが、大分、この近邊を荒したらしいですね。犬のお蔭で、お宅の評判はとてもわるいですよ。ハヽヽヽ。どれ、犬を兎も角、お預りして行きませう。今、をりますか。

念吉。ゐるにはゐますが、まだ夕飯も食はしてありませんから、後程、僕が連れて伺ひます。

鬼骨。それぢや、その夕食も一緒にお預りして行きませう。味噌汁の殘りでも、魚の骨でもかまひません。容れ物はありませう。

二見。でも、あんまり汚れてゐて……。

念吉。外側だけ拭いたらいゝぢやないか。

二人は、それぞれ、犬の夕食と容れ物の心配をしはじめる。

やがて、念吉は、犬を引張つて來る。二見は、古洗面器の中へ何か知らを容れて持つて來る。

二見。こんなものでよろしうございませうか。生憎、なんにもございませんのよ。

念吉。ほんとだね。なんだ、もう少し、身のついたところはないのか。

鬼骨。(犬とその食事を受け取り)なに、かまやしませんよ。わたしが食べるんぢやないから。

彼は、そのまゝ、悠々と門を出て行く。

二

前と同じ場面。翌朝。

今里念吉は、座敷で外出の用意をしてゐる。二見は、その側で、ネクタイの皺を伸してゐる。もう洋服に着かへた甲吉は、庭で三輪車を乗り廻してゐる。

二見。また泥をつけちやいやですよ。

甲吉。パパ、自動車で行くんだらう。

念吉。馬鹿云つちやいかんよ。急ぐ用事でなけれや、自動車なんかへ乗るもんぢやない。

甲吉。また早く行かないと、ライオンが牛肉をたべるとこ見られないぢやないか。

二見。上野なら、電車だつて、おんなじ時間ですよ。それより、こゝへいらつしやい、はなをかんであげるから……。

甲吉。つまんないの。倹約しようと思つて、あんなこと云つてやがらあ。

二見。やがらあたあ、なんです。さうよ、倹約よ。倹約はいゝことなんですよ。

甲吉。いゝことなら、はじめからさう云やいゝぢやないか。

念吉。こいつ、なか／＼やるわい。さ、蟇口は……？

この時、表から、百瀬鬼骨が、死んだ牝鶏を片手にぶら下げて現はれる。座敷の方をのぞき込んで、つかつかと庭へはひつて来る。

鬼骨。こゝから御免なさい。いや、とうたう参つちまひましたよ。いろ／＼手を盡してみたんですが、駄目でした。それぢや、お迷惑でも、これを一圓五十錢で買つて下さい。

二見。でも、さうなつたのを頂戴してもしかたがございませんから、それはそれで、よろしいやうにしていたゞいて……。ねえ、パパ、お金はお金で別に取つていたゞけばよろしいでせう。

念吉。無論さうさ。

鬼骨。いや、それやいけません。これでも、つぶしにすれや、いくらかになるんですからね。たゞ、わたしは、代りの鶏を一羽買はうと思ひましてね。

念吉。ですから、その肉は、よろしかつたら、あなたがおあがりになつて下さい。

二見。ほんとですわ。うちの犬が殺した鶏なんぞ、こちらではいたゞけませんわ。

鬼骨。さうですか。そんなら仕方がありません。しかし、さうなると、お金はいたゞきにくいですな。

念吉。いえ、〳〵、それは別問題です。ぢや、どうか、これで……一圓五十錢……。

鬼骨。弱つたなあ。一體、かういふ問題は、お互に注意しさへすれば、起さずにすむ問題なんですからね。わたしがこのお金をいたゞいて、死んだ鶏の肉を食ふとなると、損害を蒙るのは、わたしの方でなくつて、寧ろ、あなたの方ですからな。以後、誰彼となく、死んだ鶏をもつて、あなたのところへ押しかけて來ないもんでもない。それは戯談だが、お宅のベスは、うちの鶏と遊んでゐますよ。嘴で鼻の頭をつッ突かれて、あとすさりをしてゐますよ。可愛いゝもんです。わたしもね、年に三度は引越をする男ですが、何處へ行つても、近所といふものが五月蠅くていけない。こつちばかりぢやない、向うでもきつとさう思つてゐる。それが、いろんな機會に、いろんな形で現はれるんです。わたしは、これで新聞記者の成れの果です。社會生活といふものに、人一倍關心をもつてゐる。無論、わたし一人の腕では、どうにもなりやしませんが、昨夜、つく〴〵考へました。そして、かういふことを思ひついたんです。この近所一區劃が、假に二十軒あるとしませう。その二十軒が、それ〴〵違つた樣式の生活をしてゐる。それはまあいゝとして、めい〳〵が、少しも隣人のために計るといふことをしない。これは間違つてる。當り障りはありますが、犬なんかのこともです。自分の家の鶏が追つかけられてゐるのをみたら、他所の家の鶏のことを考へて、早く、犬の飼主へそのことを知らせるやうにすれば、面倒は起らない。面倒が起つても二軒の間だけですむわけです。陰で愚圖々々不平を云ふ、それも、惡戯

なした犬のことだけならいゝが、飼主の人身攻撃に亘るやうなことを、あつちこつちへ觸れ歩く。これは怪しからんです。そこでゞすな。わたしの考へたといふのは、お互が胸襟を披いて、ひとつ、めい〳〵の苦情なり、注文なりを云ひ合ふ會合を催してゞすね、改善すべきことは改善する、特別の事情は特別の事情で諒解を求めるといふやうにすればです、お互に、今後、明るく、のび〳〵と生活ができやしないかと思ふ。如何です、異議がおありですか。

念吉。結果がよければいゝですが……。

二見。氣まづい思ひをするだけぢやございませんか知ら……。

鬼骨。大丈夫です。その代り見榮と利己主義を棄てなければいけません。わたしにお委せ下さい。これから、ずつと廻つて、意見を集めてみます。同じ近所の噂を聞くにしても、あそこの旦那つていふのは、奥さんが女學生時代の英語の先生で、學校にゐる頃から怪しかつたんだとか……（念吉と二見は、思はず顔を見合せる）旦那も不愛想だが、奥さんと來たら、どこが偉いのか、人に逢つても自分の方から先へお辭儀をした例しがないとか、向うの子供が遊びに來れば、まあお菓子だけはおいしさうなのをと思つてやつてゐるのに、こつちの子供が向うへ行くと、しけたお煎餅しか出さないとか……。

二見。あらまあ、そんな……。たつた一度きりですよ。隨分ですわね。

鬼骨。さういふ噂は、全く聞きづらいですからなあ。

二見。そんなこと云ふなら、こつちだつて云ひますわ。まだ碌に齒もかたまらない宅の子供に、正月のおかちんの揚げたのなんか食べさせるのは、何處の家でせうね。そんなことなら、まだようござんすわ。少し發育が遅れて、年の割に無邪氣なのをいゝことにして、人のとこの食事の獻立まで根掘り葉掘り訊いたりなんかするつていふのは何處の奥さんでせうね。

念吉。もういゝ、ママ、こゝでそんなことを云つたつてしやうがないぢやないか。それぢや、僕は、一寸出かけて來ます
から……。また何れゆつくり……。

鬼骨。お出掛けですか。今日は日曜で、お休みでせう。それぢや、お手間は取らせません。ぢき、話をきめて來ます、

念吉。でも……。

鬼骨。いや、なんでもありません。すぐ歸つて來ます。

彼は、そこに置いてある一圓五十錢を引浚ひ、そのまゝあたふたと出て行く。

二見。（ぐつたりと、そこに坐り）あたし、いやんなつちやふわ。（泣く）

念吉。（甲吉の姿が見えないので）おい、甲吉君、遠くへ行くんぢやないよ。今すぐ御川がすむからね。それから、ねえ、ママ、せめて君だけはしつかりしてゐてくれ。甲吉は甲吉で、年が頭を置いてきぼりにするし、ベスはベスで、家にあるもんだけぢや氣に入らんといふし、その上、君が、僕の默つてゐたいことをみんな喋つちまつちや、僕は立つ瀬がないよ。甲吉君！危い、そんなことしちや……（なるほど、甲吉が、庭の隅で三輪車の曲乘りをし損ふ）だがね、ママ、僕たちはこれまで、二人の生活だけを愉しんでゐればよかつた。（ピヤノの練習曲が聞えて來る）これからは、さうは行かないよ。世間との交渉がだん／＼複雜になる。周圍のことをいち／＼氣にする必要はないが、こつちも相當、準備をしてかゝらなければ駄目だよ。

二見。そんなこと、わかつてますわ。

念吉。わかつてれば、それでいゝさ。鼻から涙が落ちてら。

二見。いゝんですよ。（拭かうとしない）

念吉。（椽側に腰をおろし）お隣りのお孃さんも、早くピアノが上手になつてくれるといゝなあ。おい、こら、甲吉君、そ

んな無理なことをしたつて駄目だよ。それより、こゝへ來給へ。パパがまた、試驗をしてやる。

甲吉は、しぶしぶ父親のそばへ行く。

念吉。（甲吉の肩を兩手で抑へ）甲吉君のパパはなんていふ名前だ？

甲吉。今里念吉。

念吉。ママは？

甲吉。今里二見。

念吉。パパの商賣は？

甲吉。商賣つて？

念吉。商賣つていふのはね、どうしてお金を儲けるかつていふことさ。

甲吉。ママに貰ふんだ。

念吉。さうか。そのママのお金は、何處からはひつて來る？

甲吉。袋へ入れてパパがもつて來るよ。

念吉。その袋へはひつたお金は、パパが何處から持つて來る？

甲吉。知らないやあ。

念吉。それはね、パパが毎日學校で英語を教へて、そのお駄賃に貰ふんだ。

甲吉。毎日貰ふの？

念吉。うゝん、一と月目毎に貰ふんだ。幾ら貰ふかといふと……。

二見。およし下さいよ、そんなこと教へるの。

念吉。どうして？　敎へといた方がいゝよ。
二見。また近所がうるさいぢやありませんか。
念吉。なにがうるさい。幾ら貰つてるかと云ふと……。
二見。およしなさいつてば……。そんなこと、子供におつしやるなら、あたし、この家にゐるませんよ。
念吉。また引越すのか。
二見。さうぢやありませんよ。あたし、一人で出て行きますよ。
念吉。あゝ、さうか。そいぢや、よさう。いゝか、甲吉君、ママがあゝいふから、幾らだといふことは敎へないが、パパは決してお金持ぢやない。君は、大きくなつたら、働いて、自分で御飯をたべて行かなければならん。自分で着物も買はなけれやならん。
甲吉。肝油ドロップも自分で買ふの？
念吉。さうさ。ではね、君は、大きくなつたら、なにゝなる？
甲吉。こないだ、ケイちやんとこの小母さんも、さう云つて訊いたよ。
念吉。なんて返事をした。
甲吉。默つてゝやつた。さうしたら、ケイちやんがそばから、屑屋になるんだらうつて云つたよ。
念吉。どうして？
甲吉。だつて、屑屋が通るたんびに、うちのママが「屑屋さん」つて呼ぶんだもの。みんな知つてるよ。
二見。それはね、甲ちやん、うちぢや、いろんな塲つめのものを使ふでせう。だから、すぐに空罐がたまるのよ。それと、パパが外國の新聞をいくつも……。

念吉。うん、だから、いゝさ。

二見。なんていふ子供たちでせうね。

念吉。屑屋になるつて云はれて、君は、口惜しかつたか？

甲吉。馴れてるから平氣だい。

念吉。初めは癪にさわつたか？

甲吉。ほんとに、僕、なにゝなるの？

念吉。君の好きなものになるさ。屑屋だつてかまはないよ。かまはないどころぢやない。さつきママが云つたとほり、空壜や古新聞がうんと溜つて御覧。どこの家でも始末に困る。埃のたまつた空壜が、ずらりと臺所の隅に並んでゐたり、蟲のついた古新聞が、押入の中へぎつしりつまつてゐたりすると、第一、からだによくない。次に、家の中が亂雜になる。第三に、無駄だ。壜や新聞は、ほかへもつて行けば役に立つもんなんだ。屑屋がゐてくれなけれやどうすることもできない。屑屋は、乞食とは違ふ。ちやんとお金を出して、そいつを買つてつてくれるんだ。だから、屑屋つていふものは、四つ、いゝことをしてるわけだ。第一に……。

二見。(笑ひながら) 甲ちやん、パパの云ふことなんか聽かないで、こつちへいらつしやい。ママがいゝお話をしてあげるから。

甲吉。動物園見に行かないの。

二見。パパの御用がすんでから……。それまで上へ上つてらつしやい。帽子はどこへ脫いだの。

念吉。(手に持つた甲吉の帽子を出し) こゝへ脫いだ。僕は、こいつに學問を仕込むことは諦めた。だから、學校へなんかはいりたがらないうちに、實地の職業教育を受けさせようと思ふんだ。それには、今から、學問尊重の風を養つてはなら

ない。また、所謂立身出世の夢をみさしてはならないと思ふ。君も、そのつもりでゐてくれ。

二見。これで、まだどうなるかわかるもんですか。（しなだれかゝる甲吉を、かばふやうに抱き締める）

この時、郵便配達がやつて來る。

配達。今里さん、集金郵便です。

念吉、どら、こゝへくれ給へ。

配達。（庭へはひつて來る）

念吉。校友會費を取りに來たよ。

二見。何處んです。

念吉。君の分だよ。

二見。明後日來て頂戴な。

配達。明後日つていふなあ、一昨日のこつてすか。もうこれで三度目ですからね。よござんす。返してやりませう。

二見。ちよつと待つて……。何時かのはあんたゞつたのね。それぢや、パパ、そつから二圓出しといて下さいな。

念吉。（訝しげに）こつから……？僕んとつからかい。よし來た。はい、二圓……。

郵便配達去る。

念吉。三圓八十錢から三圓五十錢引くと三十錢……。三十錢ぢや、電車にも乘れないや。

二見。甲吉は、丁度、眠ちまひましたわ。

念吉。また眠つたのか。待ちくたびれたな。君、隣へ行つて、あやまつて來い。

二見。だつて、鷄がゐなくなつたから、ベスのせいだとは限りませんわ。猫だつてなんだつてゐるんですもの

念吉。ベスのせいだと思つてるんだから、おやまつて來い。

二見。いやですよ。お隣の犬だつて、何時かのやうなことがあつたんですわ。こつちは、それを默つてるんですわ。

念吉。しかし、覺えてだけはゐるか。

甲吉。（獨言のやうに）パパ、動物園は、まだ遠いの？

念吉。いや、もうぢきだ。そうら、向うに門が見える。象の啼き聲が聞えるだらう。まだ起きないでいる。

二見。ほんとだわ、ペリカンも啼いてるわ。眠りながら笑つてますよ。

念吉。O! miserable of happy!

甲吉。（何かむにやむにや云ふ）

念吉。なんて云つてる？

二見。ライオン、ライオンですつて……。

念吉。さうだ、ライオンだ。ライオンが牛肉をたべてる。ライオンは、小便をひつかけるから、そばへ寄るなと書いてある。これは滑稽だ。檻の中へ入れられた猛獸の悲哀だ。これでも昔は、阿弗利加の砂漠で、斑馬の腹を引裂いてゐたんだ。パパは何時か、佛蘭西の詩人の書いた、獅子と虎との鬪ひの詩を讀んだことがある。無論、獅子が勝つた。河の水が、虎の血で、眞赤に染まるところが書いてあつた。甲吉君は、ある勇敢な探險家が、ピストル一挺で大きなライオンを撃ち止めた話を知つてるかい？ その探險家は、森の中で、不意に疊一疊敷ぐらゐのライオンに出くわしたんだ。鐵砲を肩から外す暇がない。ライオンは、もう大きな口をあけて、眼の前五六歩のところに迫つてゐる。やうやく、ポケットの中へ手をいれたと思ふ瞬間、ライオンは、後脚を蹴つて、躍りかゝつた。探險家の片手が、ライオンの口の中へはひつた。グワン！

一人の男の子が庭へはひつて來る。

念吉。甲吉君は、今、眠てるよ。

男の子。遊びに來たんぢやないよ。手紙を持つて來たんだよ。

念吉。何の手紙……？

男の子。そこの小父さんに頼まれたんだ。

念吉。（手紙を受け取り、封を開く）回狀だね。なんだ、これや……。（讀みあげる）

一、近隣の平和親善を目的とする一夕の會同を催したく、揃つて御出席を希望します。

一、會合の時刻は、本日午後七時。

一、場所は、八〇二番地今里念吉氏方庭園。

一、會費なし。

發起人　百瀬鬼骨、多胡鶏人。

二見。なに、それは……。

念吉。かういふもんだ。八〇二番地今里念吉氏方庭園か……。この庭園のことだらうな。

三

同じ場面。夕刻。

今里念吉は、椽側を行つたり來たりしてゐる。二見は、鏡臺に向つて化粧をしてゐる。甲吉は、紙で折つた冑をかぶり、窓にハタ

キを差し、蚊にかまれた脚を掻いてゐる。

すると、一人の男が、門前に來て立ち止る。中をのぞき込む。陸軍步兵大尉島貫である。そこへ、また、一人やつて來る。與信所所員片倉州藏である。何かこそこそ話をする。途方に暮れたやうな風をする。そこへ、今度は、三人連れの學生風の男がやつて來る。早大野球部選手越水とその仲間である。

念吉は、刻々數を增す敵勢に、孤城の運命を案ずる如く、椽側の端に仁王立となり、眦を決して門外を睨んでゐる。やがて、もう一人、續いて二三人。念吉は、肩で呼吸をしはじめる。

念吉。おい、ママ、君は、今のうち、甲吉を連れて、買物にでもなんでも出掛け給へ。

二見。（犬の只ならぬ樣子に、これも椽側へ出て外を見る。今更のやうに驚く。が）いゝえ、あたしも家にゐますわ。パパ一人を見殺しにはできませんわ。女ながらも、飽くまで闘つてみせますわ。

念吉。ナイフを貸せ、ナイフを……。

二見。ナイフは學校へ置いてらしつたんでせう。

念吉。そいぢや、火箸でもいゝ。長いやつを貸せ。

が、もう遲い。禿頭の隱居多胡某を先頭に、門外の群集は、ぞろぞろと庭の中に闖入する。

念吉は、思はず四五步、後にさがる。二見と甲吉は、座敷の隅に追ひやられる。

多胡。大分お揃ひになつたやうですから、ひとつ……。こちらから、よろしいんですか？

念吉。（默つて身構える）

多胡。わたくしは、お向ひの多胡でございます。御無沙汰をいたしてをります。今日はまた、飛んだお厄介で……。さ、みなさん、大勢ですから、なるほど露天の方がいゝでせう。わたくしは、年寄ですから、御免下さい。（彼はさう云つて、

一人、椽側に腰をかける)

島貫。自分は、突然で、よく御趣旨がわからないんでありますが……あ、自分は、參謀本部に勤めてをるかういふもんであります。(名刺を出す)

念吉。(油斷を見せす、その名刺を受け取る)

越水。僕は、名刺を持ちませんが、そこの平大野球部の合宿所にゐる越水といふもんです。これが、クマソ、そつちが、ヤモリです。どうせ、ほんとの名前を云つたつてしやうがねえや。

州藏。わたくしは、昨日家内が伺つた筈ですが、幼稚園のそばに住んでをります片倉でございます。今日は是非出ろといふお話なもんでございますから、もうぢき客が來ることになつてをるんでございますが、ちよつと外して參りましたやうな次第で……。犬は、どちらへか參りましたんですか。(犬小屋のまわりを探す)

後から後から、門をはいつて來るものがある。最後に、百瀬鬼骨が、大串楽給と共に現はれる。

鬼骨。女主人は女が出ることになつてゐます。さあ、どうぞ……。そんな遠慮をしてちやいけません。やあ、みなさん、遲くなりました。二十三戸のうち、七戸は差支があつて、今回は缺席、殘り十六戸の方々がお集り下さいました。有望な成績です。中には、一戸で三人まで御出席下さつた方がある。發起者として感謝する次第です。では、わたしから、もう一度、この會合の趣旨を申上げます。(咳拂ひをする)えゝ、最初に、この會合を思ひ立ちました動機についてお話をすれば、實は、今日、會合の場所を御提供願つた當今里家の愛犬ペスがであります、不圖した迷ひから、近所の鷄を追ひまわすやうになつた。これはであります、獵犬などにはよくあることでありまして、獵犬でなくても、犬の青年期と申しますか、つまり、元氣旺盛な時代には、何か生き物を弄びたいといふ慾望が潜んでゐる。そこで鷄を追つかけた。追つかけてみると面白いっ つひ、無我夢中で食ひつく。これはたまたま、人間にもその例があることでありまして、深

く咎むべきではない。しかし、食ひつかれた鶏が、そのために一命を墜すといふことになると、問題が面倒であります。今里家の愛犬ペスは、遺憾ながら、この種の問題を惹き起したのであります。奥さん、水を一杯頂戴。

　二見は、しかたなしに、水をコップに汲んで差出す。もう、外は眞暗である。だんだん椽側に腰をおろすものが出來て來る。

鬼骨。恐れ入ります。えゝと、うん、この種の問題を再三惹き起したのであります。折角思ふところあつて飼つてゐる鶏を、むざむざ犬に噛み殺されるやうでは、飼つてゐる方でも迷惑でありますし、それにまたいちいち辨償をさせられては犬の飼主も溜らない。そこはお互である。めいめい注意をしなくてはならない。その方法は、いくらでもあるんであります。

片倉。ちよつと、お話中ですが、今の鶏のことでございますがね……。

鬼骨。お待ちなさい。あとで質問を許します。そこでゞす、これは單に金錢で解決のつく問題でありますが、中には、さうでない問題がいくらもある。

片倉。實は、その、手前共では……。

鬼骨。默つて……。さうでない問題がいくらもある。隣近所が、お互に、知らず知らず迷惑をかけ、それをまた、相方苦情も云へず、蔭でぶつぶつ云つてゐるといふやうな場合が度々ある。これがなかなか、恐ろしいんであります。あらぬ噂となり、不公平な評判となり、嫉視反目、この界隈、住むに堪えずといふことになる。かくの如きは、お互文明人の愼み戒むべきことであるのみならず、さなきだに世智辛き時代を、一層暗黒に導くものだと考へるのでありまして、これはひとつ、われわれの力で、われわれの惠まれた知力で、なんとか解決をしなければならぬと、不肖、私が、僭越を顧ず、こゝに、近隣平和會議の提案をいたした次第であります。

　拍手をするものがある。念吉は、何時の間にか椽側の柱にもたれて、話を傾聽してゐる。

鬼骨。つきましては、この會議に列席する代表の範圍でありますが、これは私の獨斷で、當今里家を中心とする一區劃に限りました。御承知の通り、この界隈は、もと水田を埋め立てた土地でありまして、最近家が建つたばかりの、云はゞオアシスの如き孤立部落であります。地所は大部分、あそこに見えますあの森、蒼々たる千古不伐の森に取卷かれた姿倉一家の所有でありますが、昔日の水吞百姓は、今日、娘を女子大學に通はせ、妾に麻雀倶樂部をさせてゐる。

　　また拍手が起る。金吉はしやがんでしまふ。

鬼骨。われわれは、不平を數へればきりがない。先づ、小さな不平から片づけて行きませう。如何です、議事の進行を計るために議長を指名しては……（「自分でやれ」といふ聲がかゝる）皆さん、異議ありませんか。なければ、わたしがやります。それではと、お名前をいちいち覺えてをりませんから、そちらから順々に自己紹介をなすつた上で、議題となるべき件を御提出願ふことにしませう。（椽側に上り、二見に向ひ）奥さん、ちよつと、机と紙と鉛筆を拜借。

二見。パパ！紙はどんなのにしませう。（彼女はさう云つて、自分の机を椽側に運んで來る。この間に、人々は椽側へぎつしり並んで腰をおろす）

鬼骨。答案紙の殘りかなんかありませんか。

二見。そんなんでなく、ちやんとした紙がございます。（彼女は、罫紙を一帖もつて來る）

州藏。少し急ぎますから、手前から先に申上げます。手前は、片倉と申すもんです。先程、百瀬さんからお話の御座いました犬の被害者の一人でございます。この席で申上げるのも如何かと存じますが、一概に鷄を飼ふと申しますと、なにかかう、慾得でやつてゐるやうに聞えますが、手前どもでは、その……。

鬼骨。なるべく簡單に願ひます。結論を先におつしやつて頂けませんか。

州藏。はい。結論は、つまり、どなた樣でも、犬は、なるべく、鎖に繋いどいていたゞきたいと思ひますので、これは、

なに、鶏ばかりでなく、夜道などいたしますと、不意に曲り角で吠えつかれるやうなことがございまして、それにまた……。

鬼骨。すると、何處の家でも、犬は鎖に繋いで置けといふ提案ですね。

州藏。はい。しかし、まあ、特に、鶏を追ひかけますやうな犬は……。

鬼骨。では、鶏を追ふ犬はと限りますか？

州藏。みなさん、如何でございませう。

聲。わたしのところには、鶏も犬も飼つてありますが、犬を鎖へ繋ぐといふことは、絶對に反對です。今里さんにはお氣の毒ですが、これは、現行犯に基いて、危險な犬だけを適宜に處分すればいいと考へます。

鬼骨。あなたは、尾畑さんでしたな。

尾畑。さうです。

鬼骨。では、尾畑君の提議に贊成の御方は、恐れ入りますが……。

二見。（膝を乘り出し）それぢや、あたくしにも云はしていただきます。

念吉。おい、ママ。

鬼骨。なにか、意見がおありですか。

二見。人のうちの犬のことは、平氣でそんなことがおつしやれるでせうけれど、お宅の犬が、先達、これの晩のおかずにわざわざ買つといた平目の切身を、うつかりしてる間に銜へてつたことは御存じございますまい。さういふ犬も、鎖で繋いどいていたゞきたうございますわ。それから、片倉さんとやらに申上げますけど……。

鬼骨。反對意見もあるやうですから、こゝで採決を取ることにします。先づ、尾畑君の意見に贊成の御方は、手を擧げて

下さい。よく見えませんから、しつかり擧げて下さい。(闇をすかしながら) 一、二、三、四、五、六、七……。はい。では、今里夫人の提案、即ち、鷄のみならず、魚の切目を銜へて行つた犬をも含める意見に贊成の方は……？(見廻して) 奥さんお一人ですか。その他の方は、どういふ御意見ですか。(誰も答へない) どんな犬でも、鎖に繋ぐといふことは絶對に不贊成だとおつしやるんですか。(「不贊成だ」と答へるものがある) それぢや、その方は手を擧げて下さい。(他の全部が手を擧げる、金吉もその一人である。) 一、二、三、四、五、六、七、八……。はい。では、尾畑案、及び、今岡夫人案は否決されました。(拍手) 次は、どなたですか。

州藏。手前、少し急ぎますんですが、もう引取りましてもよろしうございませうか。

鬼骨。いけません。次は、それぢや、多胡さん……。

多胡。わたくしは隱居の分際で、御近所への不平など毛頭ございませんが、あの本道からこちらへ曲ります道でございますな。あの道がどうも、雨降りなどには……。

鬼骨。お待ちなさい。それは、地主か役場へ掛け合ひませう。では、お次の黒林さん……。

黒林。先程、犬の問題がでましたが、議長に御注意申上げたいことがある。最初、片倉さんが提議されたのは、飼犬は悉く鎖に繋ぐべしといふことであつた。議長は、何故に、先づ、この提案に對して採決を求められなかつたか。重大な手落であると思ふ。今里夫人の御意見も、恐らく、これに含めらるべきものだと考へるが、如何です。

鬼骨。では、今の黒林案に贊成の方は……？(「おれや、どつちでもいゝや」といふものがある) 一、二、三、四、五、六、七、……。否決であります。

黒林。手を幾度も擧げる人がある。

鬼骨。否決であります。えゝと、次は、島貫君……。

島貫。自分は、外に不滿はありませんが、ピヤノの練習は時間を決めてやつていただきたい。出來れば、晝間だけといふことに願ひたいのであります。それから、序に申上げて置きますが、何處かの犬が、先達、拙宅の樹溜へ、古靴を片一方銜へておいて行きました。もう五六度底を替へたやうな靴でしたから、そのまゝにしておきましたが、みなさん、女關の履物なんかは、御用心なさる方がいいと思ひます。これで終り。

二見。あの、その靴は、若しや、赤革の、ボツボツの模樣のある編上げぢやございませんでしたか。

島貫。そのボツボツも、泥でおほかたみえないくらゐでした。

二見。あゝ、それぢや、黑林さんのお宅のですわ。

黑林。いゝや、なに、わたしのとこのは、出て來ました。

二見。まあ、それで安心いたしました。ほんとに安心いたしましたわ。(鬼骨に)では、どうぞ……。みなさん、お茶も差上げなくつてよろしうございませうか。

鬼骨。なに、結構です。それでは、「ピヤノは時間を決めて練習すべし」この案に贊成の方は……?(八人手を擧げる。二見は擧げるが念吉は擧げない)多數と認めます。では、心當りのお方は、さう實行なさるやうに……。次は、越水君。

越水。畑に肥料(こやし)をやるのはいいが、臭くつてやりきれない。あれをなんとかして貰へんですか。僕んとこは、前うしろに畑があるんだから閉口なんだ。なあ、おいクマソ……。

クマソ。どんな畑かと思や、菜葉が二行半ばかりと……。

鬼骨。しツ! 畑には臭ひのしない肥料をやるといふ案に贊成の方は……?(越水とその仲間二人だけ手を擧げる)

越水。これだけか。鼻の惡い奴ばかり揃つてやがらあ。

鬼骨。臭いのが君達んとこへははいりいゝんだらう。

越水。なに？　今の言葉を取消せ。取消さんか！
鬼骨。只今の失言は取消します。次は……。
越水。まだあるぞ。おれたちは、晝間みんな練習に出るもんだから、近所の餓鬼共が其處へ上り込んで、菓子箱でもなんでも空にしちまふんだ。親たち、ちつと取締つてくれ。
多胡。家を明けるときは、鍵をかけて出るもんですよ。
越水。別に取られるやうなもんも置いてないからさ。第一、用心がわるいですぜ。
多胡。なにを云つてるのか、わけがわからん。
越水。禿、默れ。てめえの孫も、その一人ぢやねえか。
多胡。生憎、孫は北海道にゐる。菓子をつまむなあ、子供と限るまい。
越水。てめえか。
多胡。さ、議長、議事を進行させたらどうです。
鬼骨。それでは、只今の議案は、「家を明ける時は鍵をかけること」でしたな。
越水。さうぢやない。
鬼骨。贊成の方は……？（誰も手を擧げない）おや、贊成の方はありませんか。
多胡。そんなことは決議するまでもないでせう。鍵をかけないのが馬鹿なんだから……。
越水。なにを！　こいつ、毆れ！
（逃げようとする多胡を引捕へ、野球部選手三人は競つて拳固をふるふ。この四人の一塊が、揉みつ揉まれつ門外に出るのを待つて、）
鬼骨。守衛がをりませんので、遺憾ながら、議場の整理は、自然の成行に委せるより外ありません。休憩の必要がありま

すか。ないと認めます。それでは、その次、あなた……。いゝえ、あなた、角帶のお方……。

両角。僕は、両角です。さつき犬の問題がでましたが、僕は、近所の鶏に迷惑をしてゐます。人の家の庭へはひり込んで草花の芽をほぢくる。それから、默つてゐると、椽側へ上つて糞をして行きます。書齋のそばへ來て、けたゝましい聲を立てます。追つ拂つてもすぐやつて來る。僕は、そのために神經衰弱にかゝりました。夜、鶏に腹をつツ突かれる夢をみる。女房の顔が牝鶏の顔に似て來るんです。(贊成といふものがある)

鬼骨。まだまだ。

両角。僕は、鶏屋以外・鶏を飼ふことを禁じる案を提出します。

甲吉は、さつきの騷動以來、念吉の膝に抱かれてゐるが、この頃から、ぼつぼつ、頭を父親の胸に埋めて眠りはじめる。

鬼骨。これは大分議論があるでせう。

尾畑。さういふ難題を出される前に、御自分が、鶏のゐない町へ引越されたらどうですか。(贊成といふものがある)

両角。鶏のゐない町……それは久しく僕の探し求めてゐる町です(「丸の内へ行け」といふものがある) 鶏のゐないところには黴菌が充滿してゐます。

岩城。両角さんに申上げますが、鶏、鶏とおつしやるのは、多分、わたくしのところの鶏を指しておつしやるのでせうが、なるほど、御尤もの點もあると思ひますから、將來、垣根を越えないやうに、なんとか設備をすることにしませう。しかし、この機會に希望してをきますが、お宅の下水は、みんなわたくしの家の庭に流れ込んで來るやうになつてる。あれは、早速、工事をしていたゞきたい。穴を掘ればなんでもないことですから……。

藤卷。横から口を出すやうですが、岩城さん、あなたのところの流しの水も、おほかたわたくしの屋敷へ流れて來るやうになつてをりますが、あれは、どういふもんでせう。

岩城。いや、そんな筈はありません。わたしのところは、ちやんと吸ひ込み式になつてゐます。たゞ、兩角さんの方から流れて來るやつだけは、面倒ですから、お宅の方へ溝をつけました。たゞ、それだけです。

藤卷。たゞそれだけは有難くないですなあ。

鬼骨。（鉛筆の尻で机を叩き）さうしますと、さつきの兩角案は如何いたしませう。兩角岩城兩家の問題としますか、一般に採決を取りますか。（「その必要なし」と云ふもの一人。「採決を取れ」と應ずるもの二人）その必要なしと認めます。（「議長不公平」と云ふものがある）それなら、採決を取ります。鷄を飼ふことを禁ずる案に贊成の方……。一、二、三、四……（二見はその一人である）少數と認めます。鷄は飼つて差支ありません。その次、椰谷君……。

藤卷。まだ、下水の問題が解決されてゐません。

鬼骨。隣から流し込まれた汚水は、そのまた隣りへ流し込まず、その一軒で喰ひ止めるべきこと、これについて、諸君・・・・？。

兩角。贊成。

鬼骨。少し急ぎませう。（下を向いたまゝ）贊成、多數と認めます。次は、今里君……。

今里。（やうやく我に歸り、甲吉を抱いて蒲團の上に寢かせ）かういふ會合は、日曜日に開かないやうにしていたゞきたいです。日曜日でもいゝから、誰かほかの人の家でやつて貰ひたい。僕は、勿論缺席しますよ。

二見。若し、パパが、あたくしを代理に出してくれたら、あたくしは、みなさんにかう申し上げるつもりです。――お互に陰口は愼みませうつて……。あたくしが、どなたに會つても、先へお辭儀をしないなんて、どこの奧さんがおつしやつたんでせうね。

葉綸。あたくしが申しました。

二見。あら……。

薬舗。御存じなかつたんですか。百瀬さんの喋舌(おしやべり)は中途半端なんですのね。

鬼骨。その代り、あなたのことを、誰のことかわからないやうに褒めておきましたよ。なに、さういふことは、あなたばかりが云つてるんぢやない。第一、尾畑さんの奥さんもさう云つてた。

尾畑。家内はなんと申したか知りません。しかし、宅の家内が洋裝をして出掛けるのをみて、人差指に帽子を被(かぶ)せたやうだなんておつしやつたのはどなたでせう。

二見。それは、あたくしぢやございません。パパでございます。あたくしは、たゞ笑つたゞけでございます。どこからそんなことがお耳にはいりました?

尾畑。お宅の坊つちやんが、なんでもおつしやる。

鬼骨。(鉛筆で机をたゝき)それでは、人の噂は、子供の前でするな、この提案を、わたしからいたします。これに賛成の方……。

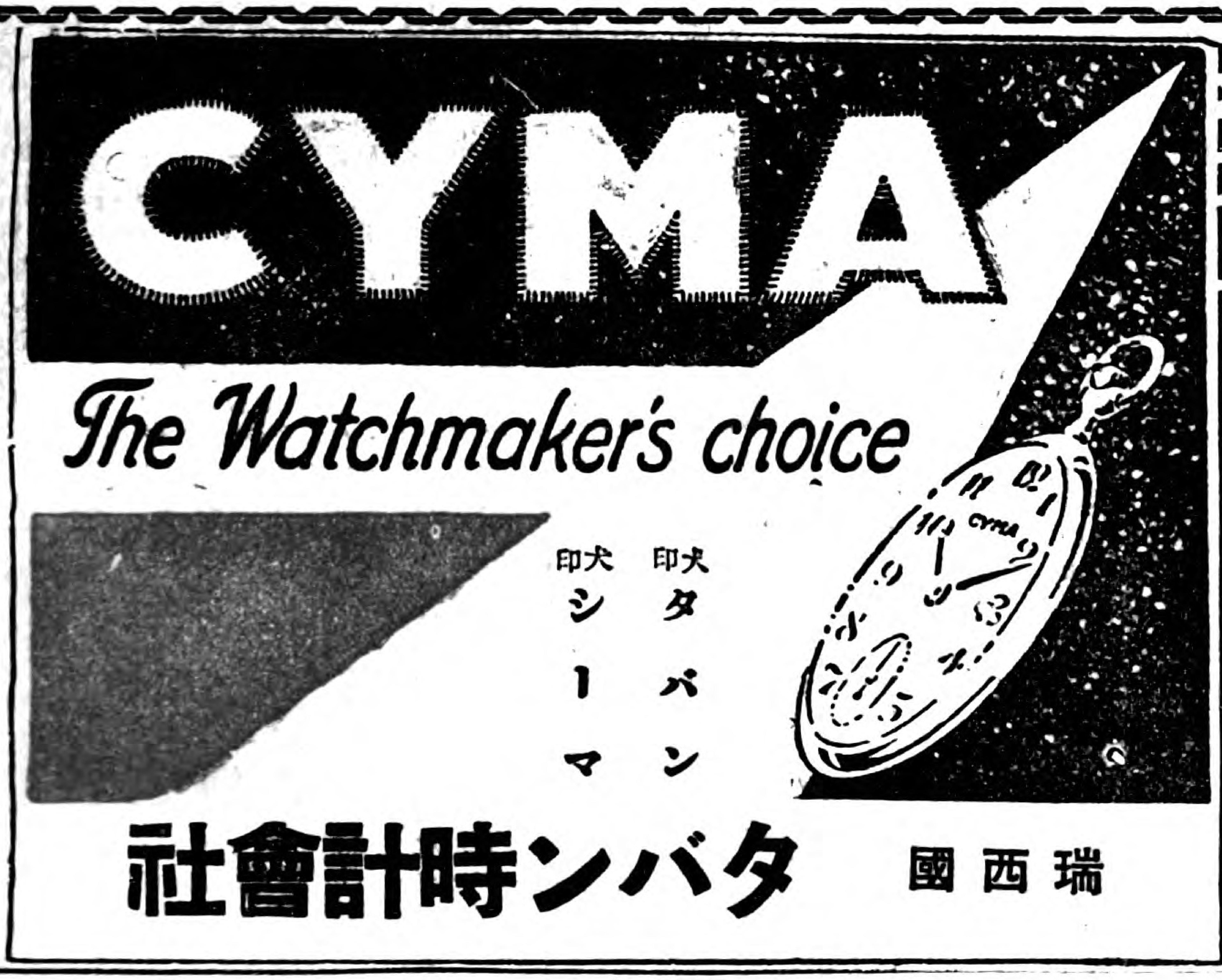
この時、何處かでけたゝましい鶏の啼き聲が起る。それは、犬に追ひかけられて逃げ惑ふ鶏の悲鳴に違ひない。片倉州載が先づ門外に飛び出す。尾畑がこれに續く。

百瀬鬼骨は、しばらく耳をすましてゐたが、いきなり庭に飛び降り、一目散に駈け出す。

鬼骨。(門の外に出るや)こら、ベス! ベス! シッ! ベス! 今里さん、ベスを……。今里さん……早く……。こらッ! しッ!

一同、外へ出る。犬の後を追ふもの、「うし、うし」とけしかけるもの、さまざま。念吉は、椽側で、ぼんやり、眼をつぶり、二見は、甲吉の寢顔を見つめてゐる。屋外の暗く騒々しいのに引替へ、家の中は、電燈の明るい光の下に靜まり返つてゐる。

——幕——



定價		送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和五年五月十八日印刷
昭和五年六月一日發行
（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作
東京市牛込區榎町七番地
印刷人　竹内喜太郎
印刷所　日清印刷株式會社
東京市丸ノ内ビルヂング五八八區
中央公論社
電話丸ノ内（二〇〇〇）（五五五）（三三三）（七六五）番
振替東京三四番
同長野三二〇五番


新マツダ
内面艶消
新マツダ
瓦斯入電球

明治三十二年一月廿九日第三種郵便物認可
昭和五年五月十八日印刷、納本
中央公論 六月號

CHUO KORON (*The Central Review.*) **Published Monthly.**

BY THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. TOKYO JAPAN.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.